

かつて女たちは戦争への道が見えなかった
いま自ら考え自ら選びとるために

あひだ

24号

女と戦争

- 太平洋戦争と私
もろさわ よつこ
- いま、日本で何が起っているのか
土井 たか子
- アジアに戦争の跡をたずねて
松井 やより
- フェミニズムと戦争
斎藤 千代
- 女性はどうして侵略戦争に巻きこまれていった
菅谷 直子
- 『週刊婦女新聞』にみる婦人雑誌の抵抗と挫折
福島 美代子
- 平和と女性解放
中島 通子
- ティーチン「女と戦争」 宇井純 北沢洋子 駒尺喜美 佐多稲子ほか
- 私にとつての戦争 郷静子ほか ●年表 十五年戦争と女 ●従軍看護婦
と従軍慰安婦 ●身近な右傾化の出来事 ●資料／平和に関する法律ほか

事実に基づいて真実を考えるくあごら>

1号<女が働くこと> 200

- 意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか
- 資料 働く女は過保護か
- 面接調査 共働きを調査して (品切)

2号<女性と能力> 200

- 調査 働く女性の地位向上をめぐって
- ティーチン 女性と能力
- 研究 女性はなぜ管理職になれないか

3号<主婦の解放> 200

- 調査 団地の主婦の解放意識
- ティーチン 主婦の解放をめぐって
- 解説 二分二乗法 伊東すみ子

4/5号<何かしたい主婦のために> 300

- 記録 何かしたい主婦のためのセミナー
- インタビュー 壁を破った人々
- 資料 2つの差別裁判を考える

6/7号<運動をすすめよう> 350

- 報告 解放への道—海外の婦人たち
- 資料 各国の母性保護
- ティーチン 婦人運動をすすめるために

8号<子殺しを考える> 380

- 論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
- 資料 世界各国の妊娠中絶立法例
- ティーチン 性の二重性をめぐって

9号<働く女と主婦の接点> 430

- 論文 働く女と主婦の接点 神田道子ほか
- 調査 働く女と主婦の実状
- ティーチン 人口抑制と産む性 (品切)

10号<女と法> 700

- 記録 名古屋放送女子若年定年制
- 資料 法律の中の女性
- ティーチン 産む性と法律 (品切)

11号<女と教育> 750

- 論文 主婦が学ぶということ 伊藤雅子
- 調査 教科書の中の女性差別
- ティーチン <女と教育>を考える

12号<国際婦人年世界会議> 750

- 記録 国際婦人年世界会議とトリビューン
- 感想 メキシコ・キューバ—私たちの旅
- 資料 世界行動計画、ILO活動計画ほか

13号<国際婦人年国内集会と行動計画> 750

- 記録 国際婦人年国内集会
- 調査 ちまたから見た国際婦人年
- ティーチン 国際婦人年とメキシコ集会

14号<女の記録入選作発表> 750

- わたくしが見たアメリカ 水田珠枝
- 新女大学研究 エリザベス・マウア
- 隣りがこわい 佐多稲子

15号<職場の中の女性差別> 750

- 調査 日本の著名企業100社にみる男女差別
- 概説 女子労働市場の現状 正木直子
- 論文 女性と半専門職 天野正子 (品切)

16号<女と結婚> 750

- 文化人類学から見た日本の結婚・祖父江孝男
- 「しあわせな結婚」の実態 J・バーナード
- ティーチン「結婚の幻実」●随想 私と結婚

17号<女と生涯学習> 780

- 女性の生涯学習への一提言 高野フミ
- 女子成人教育の問題点 中山宣子・野々村恵子
- 調査 婦人学習グループ ●ルボ 女が学ぶ所

18号<いま女性解放は> 1300

- ティーチン日本の女性運動をどう展開するか
- ルボ いま職場でたたかう39人の女たち
- 資料 女性差別に関する国連条約ほか

19号<女にとって子どもとは> 800

- 論文 日本近代の国家と母性 中島 邦ほか
- 討論 日本の女性運動をどう展開するか (続)
- 資料 優性保護法改訂をめぐる経過と論義

20号<女性解放と男女雇用平等法> 1300

- 論文 女性史におけるウーマンリブ 水田珠枝
- 論文 女性解放論の模索と反省 田中寿美子
- 資料 労基法研究会報告 雇用平等法案ほか

21号<子と母の関係を問う> 1100

- 論文 親離れ子離れ考 伊藤雅子ほか
- 手記 私にとっての母
- 調査 著名企業144社にみる男女差別

22号<男女平等と母性保障> 1200

- 報告 いま女の働く場は
- 論文 「保護派」と「平等派」の接点を求めて
- 資料 女性差別撤廃条約/各国の保護規定

23号<女たちはいま変わる> 1500

- コペンハーゲン会議を振り返る
- 女性差別撤廃条約の批准へ向けて
- 資料 国連婦人の10年後半期プログラムほか

25号<女と情報> 近刊

- 女にとっての情報
- マスコミに女性をふやすには
- 情報化社会と女性 ほか

かつて——
女たちは戦争への道が見えなかった
いま
自ら考え自ら選びとるために——

あごら24号

女と戦争

安保や反戦に燃えた時代がすぎて、いまは静かです。耳をつんざく軍歌カーに顔をしかめる人びとも、それが遠ざかると日常の会話にもどります。子どものこと、買物のこと、しごとのこと……。

あの十五年戦争の前も町は静かでした。「非常時」が叫ばれ、東北の冷害や都市のスラムのすさまじさが伝えられても、ちまたには紅灯がとまり、女は家事に明け暮れていました。

大勢の人びとが知らないうちに戦争への道は見事に敷かれ、気がついたときにはとりもちにからめとられたように、みんな身動きできなくなっていました。「なぜあんな無謀な戦争を」と戦後生まれはふしぎがりますが、これこそが戦争へのメカニズムではないでしょうか。

長くつらくきびしかった戦いの代償として、私たち女は、多くの自由と権利を得ましたが、それは重い責任を負ったことでもあります。自由と権利と責任を持つ人間として、今こそ戦争への道を見きわめ、私たち自身が選びとった道を歩みたいと思います。

特集 女と戦争

●太平洋戦争と私	もろさわようこ	4
●いま、日本で何が起こっているのか	土井 たか子	11
●アジアに戦争の跡をたずねて	松井 やより	18
●フェミニズムと戦争	斎藤 千代	37

ティーチイン

●女と戦争1	61
--------	-------	----

井ノ部美千代 宇井 純 北沢洋子 駒尺喜美 斎藤千代
佐多稲子 島田信子 谷内真理子 山屋光子

●女と戦争2	94
--------	-------	----

女性はどうして侵略戦争に巻きこまれていった	菅谷直子	108
『週刊婦女新聞』にみる		

一九三〇年代の婦人雑誌の抵抗と挫折	福島美代子	114
-------------------	-------	-------	-----

平和と女性解放	中島通子	160
---------	-------	------	-----

年表●十五年戦争と女——戦前から敗戦まで		
アンケート■婦人団体の戦争認識と反戦運動		
		166

詩

戦争が終ると

高良留美子

180

手記＊私にとつての戦争

184

なかしましずえ 郷 静子 宮田和子 椿 芳子 舟木百枝 加藤淑子 川畑雪江

浜口貞江 貞松瑩子 石倉昌子 伊是名ヨシ子 船渡和代 須田春枝 手島ヒロ子

永榮佐代子 城 たつ子 福井浅子 北垣由民子 日野真紀 高橋ますみ 宮下喜代

従軍看護婦と従軍慰安婦

大原 立

版画●戦争

浜田 知明

報告●12・7集会

232

ルポ●身近な右傾化を象徴する出来事

谷内真理子

242

紹介●戦争阻止へ行動する女たち

250

平和をねがうグループ紹介

264

あこら読書室

272

あこらのあこら

286

新聞切り抜き帳

290

資料	1	日本国憲法	319
	2	国際連合憲章	324
資	3	国際人権規約	327
	4	ボツダム宣言	345
	5	日米安全保障条約	347
	6	国連婦人の十年中間年日本大会決議	349
	7	国連婦人の十年後半期に向けて 婦人問題企画推進会議の提言	353

太平洋戦争と私

もろさわ ようこ

三十九年前の十二月八日、太平洋戦争のはじまったとき、私は十六歳でした。その日のことはいまでも忘れません。朝、ラジオで真珠湾攻撃のことを聞き、戦争がただならぬ事態に入ってしまった、衝撃はうけましたが、当時、私は、マスコミから流されてくるものを、真実とうけとっていましたから、戦争は勝つものとおもいこんでおりました。

ちょうど、秋の収穫もすみ、田畑の作業も一段落したので、父が遊山がてらに上京しておりました。その日、浅草見物に連れられました。

当時の浅草は、庶民の盛り場でした。仲見世などには、私たちと同様、戦争に対して、なんの危機感も持たない人たちがいっぱいでした。けれど、日本開戦がただならぬことなのだと、身におぼえてさとしたのは、その夜でした。

父が上京すると、当時、私は自分がみたい、宝塚歌劇へ父をとまいました。そのため、浅草では、父の好みのアチャラカ芝居につきあわされまして、その日も、木馬館で、当時の私の美学から言うところ、まったく趣味にあわない、エロティックなナンセンス喜劇を見物、それがハネて小屋を出たとたん、外はまっくら、燈火管制が、ひかれていました。

街灯がすべて消されたまっ暗な闇の道を、はぐれないように父と手をにぎりあってゆきながら、戦

争がきびしい段階に入ってきたことを、灯の消えた街の中に立ち、あらためて身にしみて覚えさせられたのでした。

「奴隷の意識は主人の意識だ」と言われていますが、かえりみまずと、私は、支配者側のもののみ方・考え方をたくみに刻印され、意識呪縛されてしまった奴隷的存在だったとおもいます。

私が小学校へ入学したのは、満州事変のはじまった年であり、以来、戦争は日常化されてつづき、当時の小学校教育は、天皇制の宗敎学校といっても過言ではなく、教育の中で、もののみ方・考え方を、支配の側に収奪されつくすことがおこなわれました。

支配体制は、武力的な弾圧や権力的な強制によつては安定せず、被支配者の意識を収奪してはじめて安定するものです。学校教育は小学校しかうけなかった私ですが、当時、中等学校卒業の資格検定試験に、修身と公民の科目がありました。それには、文部省発行の右翼神がかり的な『国体の本義』『臣民の道』を熟読しなければ、難なく通過しましたし、国語や歴史もこの二書を下敷きにして問題がだされ、私たちの世代は、軍国主義と皇国哲学による意識呪縛をもっとも強烈にうけた世代であり、そのため同世代の男たちは、困難を身をもってふせぐというまじりけのないおもいこみの中で、すすんで特攻隊に志願しています。

無垢な魂を戦争へとかりたてていったのは教育ばかりではなく、マスコミも同様であり、さらに、大正リベラリズムの中で、女たちの解放を高らかに言っていた、私たちの先輩たちも、十五年戦争の中で、「国民精神総動員運動」に参加、「欲しがりません勝つまでは」と、私たちを戦争へ連れこむのに大きな役割を果たしました。

支配の側が、その体制安泰のためにおこなう意識収奪のとりこになっていた私は、生還を期さずに真珠湾を攻撃して死んでいった、九軍神とよばれた男たちの肖像を、わが勉強机の前の壁に貼って、軍国の乙女としての誇りに生きるはげましとしていました。いまふりかえると、恥ずかしいかぎりです。

奴隸の悲劇

「奴隸はその肉体にふりおろされるムチの音にまで快感をおぼえる」とも言われています。もののみ方・考え方を収奪されると、感性もまたまったくこなわれてしまうもののようです。

戦前の教育では、日本という国は、極限状況になると、神風が吹き、戦いにはかならず勝つと教えられていました。戦況が不利になるにつれ、次第に不安がつのりしましたが、愚かにも私は、その「神風」が吹くことに期待をつなげました。ですから、敵艦めがけて自爆してゆく男たちは、「神風特攻隊」とよばれたのです。ところが、いつまでたっても「神風」は吹かず、一九四五年八月十五日になりました。

そのとき、私は、信州の山奥に疎開してきた陸軍士官学校に筆生^{ひつせい}としてつとめておりました。敗戦の詔勅は、その士官学校の生徒隊本部が疎開していた旧制中学校の校庭に整列、不動の姿勢で聞きしました。そのとき、雑音が入って、なかみはよく聞きとれず、一緒に聞いた将校や下士官の人たちも、無条件降伏などは誰も信ぜず、これは謀略だと言っていました。

見れども見えず、聞けども聞こえずというのは、意識収奪されきった奴隸の悲劇だと思います。私たちが学んだ『国体の本義』『臣民の道』では、まず、神勅というのを暗誦せられます。天皇家の祖先だということになっている天孫が、天から下ってくるとき、アマテラスオオミカミという女の神が托宣^{たくせん}するのです。「豊葦原^{とよあしはら}の千五百秋^{ちひさひる}の瑞穂^{みづほ}の国は、是^{こゝ}、吾^{われ}が子孫^{うのみこと}の王^{きみ}たるべき地^{くに}なり。爾皇孫^{いましめらるるみまひ}、就^{すなは}てまして治^させ。行矣^{さよう}。寶祚^{ほうそ}の隆^{たか}えまさむこと、當^{あた}に天壤^{てんじやう}とともに窮^{きゆう}り無^なけむ」と。つまり、天地とともに、窮まりないのが天皇制であり日本国家であるとされました。

ですから、敗戦などということは信じられず、茫然自失^{まうぜんじしつ}というのがそのときの私たちの状態だったのです。けれど、侵略戦争の本質をみぬき、戦争に対してきっぱり批判を持っていた人たちは、喜びにみちてうたっています。「あなうれし とにかくにも 生きのびて たたかいやめる 今日の日にあう」と。これは河上肇博士の歌ですが、なんと、奴隸化されていた私は、支配者側の「耐エガタ

キヲ耐エ、忍ビガタキヲ忍ビ」というおもいと一体化して、涙をとめどもなく流したのですから、なんともみじめなものでした。

しかし、やがて、戦争の本質がなんであつたのかを知るにおよび、奴隷化されていた自分に気づきました。まことに恥ずかしいことですが、私が、批判精神を確立するのは、八月十五日の敗戦体験をへた二十歳のときからです。ですから私の個人史においては、八月十五日がエポックメイキングになるのです。そのため、一九四五年八月十五日以前までの自分は、奴隷化されていたという被害者意識が大きくありました。けれど、そのことが徹底的にうちくだかれたのは、沖繩へはじめて行ったときです。

そのとき、八月十五日のわが敗戦体験を語りますと、沖繩の方から言われました。本土の方がたは八月十五日が敗戦であつたかも知れませんが、沖繩は、地域、地域によつて敗戦の日が異なります。と。五月何日かの人もいれば、六月何日かの人もいる、苛烈な地上戦にさらされた沖繩は、八月十五日はすでに占領下だったといわれたとき、私は、自分の体験本位に戦争をとらえ、本土の側からの見方で、女の戦後史をとらえていた自分がずいぶん恥ずかしゅうございました。

八月十五日についても、これは、支配者側が戦争をやめた日であつて、その日を「終戦記念日」として、戦後史を歩みだした私たちは、ここでも支配の側のたくみな意識収奪の路線にのせられたおもしろい、いましております。

先日お亡くなりになつた山川菊栄さん。あの方は、戦後、労働省に婦人少年局ができましたとき、初代局長として、行政の場において、戦後の女の解放をすすめた方です。山川さんをおたずねしたとき、戦後の改革について感想をうかがいましたが、そのときの彼女のこたえが印象深いままおもしろい、だされます。彼女は言いました。「戦後の改革について、私たち人民の側で、たしかなたちでプログラムを持っていたなら、もっとすばらしい改革ができたはず。基本的人権についての認識を持つていない日本の支配層よりも、占領軍のほうがはるかにましな民主主義的な路線をうちだしてきました。こちらにプログラムがないので、占領軍がうちだしてくる路線のなかでことをすすめたが、

人民の側からきちんと改革のプログラムを出せなかったことは、いまでも残念におもっています」と。

私たちの戦後の歩みをふりかえってみますと、女の解放像について大きく論ぜられたのは主婦論争のときであり、その後、ウーマン・リブ運動の中でふたたび論ぜられましたが、主婦論争のおり、平塚らいてうさんは、明治末から大正をへて昭和のはじめまでに、女の問題はすでに論じつくされていると書いています。最近、復刻された『青鞥』や、その他の女たちの文献を読んでみますと、戦後に論じられた女たちの問題点が、同じように問題にされ、論じられている。

先輩たちが開拓した路線が大きく継承されず、私たちがまたふりだしに立つかたちで、問題に取り組むことになったのは、「欲しがりません勝つまでは」ということで、あらゆる人間解放路線が、戦争遂行に収斂され、私たちの先輩が明治以来、からだを張って、戦前に開拓した思想、問題点がみえなくさせられてしまったからではないか。

そして八月十五日を「終戦記念日」として出発した戦後が三十数年たつと、戦争遂行のために大きな役割を果たした靖国神社へ、閣僚のほとんどが参拝することが、大手をふってまかりとおるようになり、さらに、「慰霊の日」などと名づけられて、あの戦争へ連れこむ大きな役割を果たした張本人とも言うべき天皇をむかえ、戦没者の遺族が全国から集まって、うやうやしくセレモニーがおこなわれるようになってしまいました。このことは反戦のちかいというよりは、ふたたび戦争への道をゆくための、意識呪縛のセレモニー化しているのが、支配の側によってとりおこなわれている八月十五日の記念行事の実態ではないでしょうか。

こうしたなりゆきのなかで私はおもいます。戦前、私たちは、もののみ方、考え方、感性までも支配の側に収奪されましたけれど、その体験を、戦後、果たして生かし得ているであらうかと。私たちが戦争を糾弾するならば、私たちの側から、私たちの視点にたった記念日をつくらなければならなかったのではないか。

たとえば、サイパン玉砕の日、沖繩戦の日、それから広島、長崎、そして八月十五日というふうにみてくるならば、八月十五日の犯罪性が大きくクロースアップされてきます。東京であるならば、三

月十日の大空襲もまた問題になるはずで、戦争体験はそれぞれの地域においても、ことなつた体験があるはずで、地域に根ざし、私たちの戦争体験に根ざした戦争の記念日を、私たちがつくることをせず、支配の側にくすねられ、八月十五日に収斂させられてしまい、戦争責任が不問にされ、支配の側の演出たぐみな慰霊のセレモニーがおこなわれるようになったいま、私はほぞをかむおもいでおります。

戦争は命かけても阻むべし

しかし、戦前とくらべますと、私は、女の歴史は後退してないとおもいます。かつて戦中、オビニオンリーダーたちは国民精神総動員運動にかりだされ、一般の女たちもまた、大日本婦人会へ集められました。今日、このように、女たちが、それぞれの主体的決意のもとに、これだけの人たちが集まり、戦争への道をふたたび許さない行動をおこしている。このことは、戦後の女の歴史においても画期的なつどいであるとおもいます。今日を原点に、ふたたび戦争を許さない女たちの動きが、ひろがることを、私は熱いおもいで確信しています。

戦争から私が生き残れたのは、女だったからだといつづけています。男であつたなら、私の同世代の男たちの大半の運命がそうであつたように、私もすんで特攻隊に志願していたはずで、女であつたから戦争から生き残つた私。その生き残つた私が、戦後を生きる道しるべにしたのは、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないように決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し」という、平和憲法でした。そして第九条の「日本国民は正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する」という個所は、胸熱くして読みました。私にとっては、男女の同権よりもこの個所がうれしかった。十六歳から二十歳までのあの苦い戦争体験から立ちなおつて戦後を歩むには、これが唯一の拠りどころでした。

ふたたび戦争があるならば、女たちの解放も、また戦後さまざまな場で、地味な努力を重ねて積みあげてきた人権の啓すべが、また壊滅させられてゆくことは、かつての体験が教えています。

二年ほど前でしようか。関西財界のボスが徴兵制を言い、有事立法またよしと発言したとき、草の実会の石井百代さんが朝日歌壇に投稿しました。たしかこの方は七十歳すぎておいでのはずです。その彼女の歌、「徴兵は命かけても阻むべし 母、祖母、おみな、牢に満つるとも」、この歌を私が申しましたら「ろう」とは「老い」のことですかと、戦後生まれの方からきかえされて、歴史体験のちがいにがくぜんとしたことがあります。

戦前、戦争に反対することは、死刑を極刑としている治安維持法の弾圧下では、命がけでした。戦争に対して批判を持ちながら、十五年戦争にまきこまれていった知識人たちのほとんどは、戦後に言いました。「きびしい弾圧から生きのびるためには、ここらならずも戦争に協力しなければならなかった」と。しかし、いま私たちが、そのわだちを踏まないためには、石井さんの歌になぞらえて言うならば、「戦争は命かけても阻むべし 母、祖母、おみな、牢に満つるとも」と、決意したい。

いま、さまざまな反動的なうごきがありますが、かつて六〇年安保のとき、安保反対のデモが国会をとりまきました。今日を起点に、戦争反対のうごきを全国に拡げ、もし、戦争への道をさらにすすめるため、憲法改悪のことなどが、国会でおこなわれるようなことになるならば、国会の前で、座りこむことも辞さない覚悟を私はいたしております。戦争から生き残った者として、戦争で殺されることはもうまっぴらですが、戦争をきたらせないために命をかけることは、本望です。(盛大な拍手) 皆さん、ともに頑張つて参りましょう。戦争に命かけて反対することをおちかいして、私の話をおわります。ありがとうございます。(拍手)

(女性史研究家・著述業)

(一九八〇年十二月七日「女たちは戦争への道を許さない12・7集会」での講演より)

いま、日本で何が起こっているのか

土井 たか子

皆さんも同じ気持ちでいらっしやると思いますけれど、以前なら見たらギョッとしたであろうと思われる記事が、この頃では、毎朝の新聞の一面トップに平気で大見出しとして扱われています。例えば「核保有は憲法違反にあらざと政府統一見解」「自衛隊の国連軍参加は憲法に違反せずと政府の答弁」——こういう具合です。三、四年前にこんな記事をとつぜん読めば何が何だかわからないほどびっくりしたのではないでしょう。私はそういう記事を読みながらこのまま進めば三年あるいは四年五年後に新聞記事を見るとき、もはやどこからどう手をつけていけばよいかわからない、身の置きどころがわからないという気持ちになるのではないかと思います。

また、最近の国会論争などをテレビや新聞で皆さんごらんになって、政府は今までに比べてたいへん強腰で、憲法があってもなくても同じような、憲法を無視した答弁をするのが目につきすぎると考えていらっしやるのではないのでしょうか。

今どんな現実が動いているのかということから、今日の話を進めてみたいと思います。

「有事対処」の強調

鈴木善幸さんが総理大臣になってから、防衛に関する新しい政策が非常にめまぐるしく打ち出され

るようになりました。総合安全保障会議、防衛予算の別枠先取りの問題とか、また、防衛庁で出している防衛白書、今までになく作爲的に作られたとしかいいようのない防衛白書の問題などがあります。いろんな所に出かけましてお話をしますと、最近必ず話題になるのが、自衛隊の迎撃戦闘機が空対空ミサイルの実弾を装備するという問題です。今まであんなことはなかったはずだけれど、一体どうなっているのですか、ということをおっしゃる方が本当に多い。また、海上自衛隊の自衛艦が実弾魚雷を搭載するようになった。これも、国会の審議にかけられることなく見切り発車の状態で進められている問題です。

この二、三年、有事対処ということが自民党や政府から強調されるようになり、「有事になったら弾が必要だ。武器が必要だ。実弾なしで有事に対処することは意味がない」ということが必ず宣伝されています。国会の内閣委員会で、空対空ミサイルや実弾魚雷などの問題が追求されたとき、総理は、「警備行動に必要であるから憲法に違反しないばかりでなく、実際問題、これは大切なのだ」というような答弁をしているのです。

考えてみますと、日本の領海は平時いったい誰が警備しているかといえば、海上保安庁が警備の権限を持っております。海上自衛隊には権限はありません。ただ、自衛隊法八十四条で、領空侵犯に対する警備行動、警察行動が自衛隊に与えられております。しかし、この領空侵犯に対して自衛隊が実力行使をする場合でも、当然、現在の海上保安庁と同程度の装備ですませるべきだというのが常識です。これは、軍備是認論者の中ですら考えられていることです。ところが、海上保安庁が当然持っているはずのない空対空ミサイルを自衛隊の迎撃戦闘機に積むということになりますと、どういうことになるのでしょうか。

有事にミサイルのボタンを押したら死傷者が出るのは当然のことですし、本格的戦争に突入しないという保証はどこにもありません。むしろ、本格的戦争に突入せんがためにボタンを押すとさえ言わなきゃならない。もうその段階になると一自衛隊の問題では済まなくなってきます。ボタンを押すのが「良い」とか「悪い」とか批判する以前に相手のミサイルが飛んで来て私たち国民が最大の被害を

受けることになってしまいます。

政府は、そのような事態が起きた場合、国民の生命、財産をどうするかということを一切考えず（政策はなにもないままに）空対空ミサイルを航空自衛隊の迎撃戦闘機に装備してしまっています。このことは、今の政府の、総じて自民党の防衛問題に対しての姿勢を語ってあまりあると私は思っています。

平和憲法の主張はなされず

私は国会に送っていただいて十一年になりますが、防衛二法について論議のない年はありませんでした。そのつど問題になったのは防衛費増額の問題であつたわけですが、しかし今度は、たんに防衛費の増額だけではなく、防衛費が別枠でしかも先取りの問題になったのです。私たち国民の生活にとって重要な、例えば年金とか教育、環境整備、あるいは医療など、そういうことが問題になる前に、防衛費の予算だけを別枠で先取りするなどということは、今回が初めてのことです。

こういうことに踏み切ったいきさつはいろいろありますが、要するに、大平さんが亡くなる前にアメリカとの間で約束してしまった重大なことがあり、これが遺産として自民党に相続されているわけです。その中身というのは、アメリカの肩代わりをするために日本の防衛力を充実するということです。つまり、アメリカにとってアジアの最前線基地は日本であり、韓国、台湾であるわけですから、この韓国、台湾を含めてアジア全域における最前線基地として日本がアジアの肩代わりをするための防衛費の増額と防衛内容充実を、アメリカは日本に対して強く要求したといういきさつがあるわけです。こういう要求に対して日本の政府は、平和憲法のもとで軍備を増強することは許されないといふいわば日本の立場を強く主張したということは聞いたことがあります。

私がかつてびっくり仰天したことがあります。つまり、日本にあるアメリカの軍港に幾度か入港した艦艇の艦長であつたラロックさんがアメリカの議会での証言台に立って「私が艦長をしていた艦に

も核は積載されていた」という証言をされ、それがセンセーショナルな証言として日本の国内にも大きく報道されましたが、この問題を国会で追求したところ、「これは政府が言っているんじゃない、今は一民間人の立場での証言である限り、公の問題として取りあげるわけにはいかない」という政府の答弁がなされました。その後、私はワシントンに行ってラロックさんと会い、話をしましたが、その時、ラロックさんが言われたことがあります。それは、「日本は核は持ち込ませないと国民に向かつては言っておられるようだけれど、日本にあるアメリカの軍事基地、軍港に核は持ち込まれているのかい、この疑惑について日本政府がアメリカに正式に問いただしをしたことは今までに一度もない」ということです。

したがって、今、アメリカからいろいろな要求があつて日本の軍備予算が増額され、しかも増額のみならず別枠で先取りされているという状況について、日本はアメリカに言うべきことも言っていない、平和憲法の中身についてもしっかり言っていないということ、このことは国民の立場からすると黙っていることのできない最も大切な問題だと考えられるわけです。

そういうことから、憲法問題についてお話をしなければいけないと思いますが、時間があまりありませんので、問題を二点に絞りたいと思います。

改憲の動きへ

一つは、政府の方針によって、戦える自衛隊の方向が出てきたということです。

自衛隊は一九五〇年に警察予備隊として生まれ、五四年に自衛隊と呼ばれた時点ではっきり軍隊となりました。憲法第九条から考えると許されない存在です。政府は国会で「憲法は、自国防衛のために戦力を持つことは認めているが、自国防衛の範囲を超える戦力は認めていない。したがって今の自衛隊も日本の国の防衛のためには合憲であつて、これが外に向かつて侵略をしたり出動したりすることになるならば、憲法から考えて許されない存在である」という答弁を今まで一貫してやってきたわ

けであります。ところがアメリカの大統領がカーターからレーガンに変わるといふ中で、ソビエトを仮想敵国とする演習や実弾装備、共同作戦行動の線が、いよいよ強く出てきたと言わざるを得ません。こうなると、専守防衛の域にとどまって考えていたのでは間に合わない。外に向かつて威力が発揮できる自衛隊、対外軍事戦略の中身を持った自衛隊ということ、日本の自衛隊に対しても考えなきやならない。これまで第九条の解釈をねじ曲げてやってきたわけですが、ねじ曲げ解釈では間に合わないようになってきたわけです。

いよいよ出てくるのが、憲法の改悪という問題です。自民党には自主憲法期成議員同盟というのがありますけど、これが全国約三千三百の各自治体市町村に対して、自主憲法を早く制定するための決議を即時出すようにという指示を通達として流しているということは、皆さんよくご存じだと思います。残念ながら、全国的にこれをボイコットして憲法を守っていくのが我々の責務であるということをしつかりと答えた議員ばかりではございません。すでに一市四町（十二月七日現在）がこれに対して決議をしてしまっているんです。

つまり、「憲法第九条がある限りは大丈夫でしょう」と言えるような状況では、もはやないということを考えておかねばならないと思います。しかも、アメリカの世界戦略体制のなかで日米安保条約に軍事同盟条約としての魂を入れること、つまり日米共同作戦、共同演習のための日米防衛協議機関というものが正式に設置され、具体的内容が非常にテンポを速めて進んでいくだろうということも考えなければならぬことになっています。

人権と公益性

さて、二点めです。このような状況が進んでまいりますと、どうしても国民の基本的人権の問題にかかわってまいります。先日、新幹線の公害訴訟についての判決が出ました。この裁判で国側が主張したことが判決理由の中で認められました。それは「公益性がきわめて高いものだから受忍すべき程

度も大とならざるを得ない」という中身です。つまり、「公益性が高いものに対しては忍べないものも忍んでもらいましょ。公益性が高ければ高いだけ辛抱してもらうのがあたりまえです」という論法なんです。公益性の中身は一体誰が考えるかというところ、そのつど我々が考えるんじゃないくて、国が、すなわち政府が考えることだということです。国や政府が、勝手に公益性が高いからと言ったことに對し、我々の人権はその公益性の高さによって押さえつけられるということが、この、国の主張ではつきり出されているわけです。

この公益性の一番高いものは何かということを考えてみますと、政府に言わせれば、国防問題に關してだろうと思います。政府や自民党は「国防・防衛問題に關して国民は、人權侵害があつても公益性が最も高いのだからがまんすべきだ」という論法で迫ってくる。これがすでに裁判の判決理由の中に出てゐるわけですから、「政府が勝手に言っているのではありません。裁判所もそういう認識を持っていますよ」ということを、PRする時には巧みに利用するだろうと思います。

全国の輸送機關、われわれの生活に欠かれない産業、報道機關、さらには自由や思想の良心が最も大切に考えられなければならない研究機關、そういうものすべて、国内のあらゆる部門が国防優先に結集されていくということになりますと、自衛隊だけが戦えることになつても意味がないという問題意識で、国民総動員の戦時体制作りがどんどん進められていくことも、今の自衛隊の海外に出る防衛協力機關、共同作戦の問題と、決して無關係ではないわけであります。

第九条を守るのは女性

こうなつてまいりますと、憲法の解釈を変えるだけではなくて憲法そのものを変えなきゃならない。改憲をする必要がどうしても生じてくる。これが、奥野発言や、自民党や政府が呼びかけている憲法改正の国民運動という動きの中に具体的に出てきているというわけです。有事体制についても自衛隊の存在についても手厳しく批判する国民の声は、世論調査をするとどんどん少なくなつてゐるという

ことを、最近、自民党や政府は異常なほどPRすることになりました。自民党内あるいは自民党の旗持ちをする学識経験者・評論家の中から、憲法を変えるのはいろいろな仕事をすれば五年か十年以内にできるのではないかという声が、我々にも聞こえてくる状況の中にあるわけです。

私は、憲法が男女平等をうたい、女性に対しての人権というものをしっかりと憲法に打ち込み、その保証が現実になきちとなされている時こそ、第九条が日本国憲法の中で本当に脈打つ時だという確信を持って、第九条を読み上げたいと思います。

憲法第九条「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」。

私は、この憲法第九条の中身を本当に日本国の中で世界の中でしっかりと守っているのは女性だと思っています。なぜか。女性には権力におもねりません。金権に対してこれを徹底的に嫌うのは女性のほかにはないと思っています。また、命に対して本当にいとしんでゆくのは、やはり女性ではないかと思っています。

三年先、五年先に、いま読み上げました日本国憲法の中身、日本の戦争放棄が、政治の中、お互いの生活の中で大切に取扱われるようになっていく時には、私たちが健全であるということを最後に申し上げて、今日の問題提起にさせていただきますと思います。

ありがとうございます。(拍手)

(衆議院議員・弁護士)

(一九八〇年十二月七日「女たちは戦争への道を許さない12・7集会」での講演より)

アジアに戦争の跡をたずねて

松井やより

日本で戦争といいますと、原爆が落ちてたくさんの方が亡くなった話とか、夫・息子・兄弟を戦争で失ったとか、空襲で焼け出されたとか、つまり日本人が戦争で非常に苦しんだことが中心になって語られてきたと思います。しかし日本から一歩出てアジアの国々へ行ってみますと、そこには、日本人がとらえている戦争とは違う面が出てくるのを、私はいろいろな形で見たものですから、そのことをお話しして戦争についてのとらえ方を、変えていきたいと思います。

★ 中国各地で見た日本の侵略戦争の爪跡

個人的なことなのですが、私の父が一九四五年春、赤紙（召集令状）が来まして、疎開をしていた私たち家族に会う暇もなく、すぐ九州の久留米の連隊に行き、そのまま船で、中国大陸、そのころ北支、北支那といわれていた北京の近くへ行ったそうなんです。で、敗戦の年の暮れに父は帰ってきましたが、そのとき、父から聞いた戦争の話が、私のその後の人生を決定的に変えたんじゃないかと思っています。それは、私の父が属していた二百人ぐらいの部隊での経験で、日本軍が中国でどういう残虐なことをしたかという具体的な話で、今でも実に鮮明に覚えています。

一つは、その部隊に出入りする中国人の商人が、気に入らない態度をとったりすると「桶を持って来い」と言うんですね。で、その中国人が桶を持って来ると、日本刀でバツと首を切り落として桶に入れてしまふ。そういうことが日常茶飯事にあったっていうんですね。それから、もう一つは、ある将校が非常にサディスティックで、中国人の肝を集めて乾かして長靴の中に入れて、自慢していたというんです。それにもう一つは、ある日、付近の中国人住民に強制立ちのきを命じ、防空壕のような穴を掘らせたんだそうです。中国人が一生懸命掘ったその穴の中に中国人みんなを入れ、その後その穴に水を入れて、生き埋めにしちゃったというんです。それで何百人かの中国人が溺れ死んでしまった。父から聞いた、「桶」と「長靴」と「地下壕」という三つの言葉が子どものころから頭にしみついて、戦争というものは、「中国の人に対して、そういう恐ろしいことを日本人がしたことである」というのが、私にとっての戦争のイメージになったわけです。

「きけ、わだつみの声」とか、特攻隊で、飛行機に乗って死んでいった若者の話とかを聞くと、私はいつも「ああ、この若者たちはなんのために死んだのか」と思うわけです。つまり、よその国の人を殺すために殺された。つまり犠牲者であると同時に、加害者であるということを考えます。あれだけの苦しい思いをして死んでいった日本の若者たちに罪はないとしても、殺された側から見れば、自分たちを殺しに来た憎むべき敵であるということになる。それを私、中国や東南アジアにいくたびに、いやというほど感じたんです。

私は七五年から七六年まで中国にいて、中国大陸のいたる所に日本の侵略の残酷な爪跡があるのを見聞きました。一番すさまじくて、忘れられないのは、ユダヤ人が虐殺されたポーランドのアウシュビッツを連想するような話なんです。が、旧満洲、今の東北地区に撫順という炭坑の町があります。その郊外に平頂山という名の村があるんですね。小さな村で三千数百人の人が住んでいたそうですが、中秋の名月の日、三台の日本のトラックが来て、お年寄りも赤ちゃんもすべての村人たちを、村の近くにある崖下に集め、いっせいにトラックからとびおりた日本軍の兵士たちが、機関銃で全員撃ち殺したわけです。ガソリンをかけて焼いたあと、崖をダイナマイトで爆破して土をかぶせ虐殺の跡を隠

蔽したという。

七〇年代に入ってから発掘され、「平頂山殉難同胞遺骨館」として保存されていました。七七年夏ここを見学に行きましたけれど、ドアを開けると、幅五、六メートル、長さ八〇メートルの広い所に白骨が果々とあるんです。もう四〇年くらいたっていますから、白骨といっても灰色に変わっているんですが、約八百体がそのままの形で残っています。お母さんが赤ん坊を抱いた姿の白骨とか、胎児が中にいる妊婦の白骨とか、家族五人が折り重なるようになっていたりとか、あるいは機関銃で撃ったのに死ななくて拳銃で最後の一撃をした傷が残っている頭蓋骨とか……。足がガクガクし、涙がとめどなく流れました。日本人であることが本当につらかった。勝手に侵略しに行つて、その村から抗日ゲリラが出るらしいということで、一般の村人を全員殺戮したのですから。

この平頂山虐殺事件は、一九三二年、太平洋戦争の始まるよりずっと以前、十五年戦争が始まった翌年です。最近日本語でも「三光政策」という言葉がそのまま使われていますが、「光」っていうのは中国語で、「しつくす」という意味で、「三光政策」とは、「焼き尽し、奪い尽し、殺し尽す」ということなんです。日本は一九三一年に中国大陸で戦争の火蓋を切ったときから、その「三光政策」を徹底的にやったわけですね。ですから、太平洋戦争が起こった一九四一年がこの前の戦争の始まりではなくて、一九三一年から四五年までの十五年戦争というところをしないといけないと、中国に行くと感じます。

七七年夏の東北旅行では、撫順から汽車で数時間のところに瀋陽シヤンヤウという、昔、奉天といって、日本が満洲国というかいらいい国家をつくったときの首都にした町がありますが、当時大和ホテルといっていた遼寧賓館に泊まったんです。そのすぐ側に「瀋陽医学院」という看板がかかっているところがあって、「あっ、これだな」と思ったんですね。そこで中国の人たちにチフス菌などの伝染病の菌を植えて発病させ、まだ生きているうちに解剖して中を見るといいう、身の毛もよだつ生体解剖事件がこの瀋陽医学院、昔の満洲医大で起こったわけですよ。

それから、その年の夏の旅行では、蘇州とか無錫とか上海方面にも足をのばしましたが、その辺に、

とてもきれいな太湖っていう湖があるんです。そこを船で回っていると、三つの島が見えたんですね。いい景色だなあと思って眺めていたら、ガイドの女性が「あの島には日本軍が来たことがある」と言う。聞いてみたら、「そこでは九百九十・五人が死んだ」っていうような言い方をしたんで、「〇・五人ってどういうことですか」と尋ねると「日本軍が来て島の人たちを虐殺しようとしたので、防空壕のような穴の中に隠れた人たちがいた。その中のある父親が自分の子どもは生きているのだろうかと思つて穴から顔を出した途端撃たれ、顔が半分ふつとんでグジャグジャになってしまった。その人は生き延びたけれど、半分殺されたようなものだから〇・五人と言っているんですよ」と言っていました。日本の虐殺の跡は、平頂山のような有名な所以外でも、いたるところにあるんですね。

私が中国に住んでいたところは「農業は大衆に学べ」とキャンペーンをやっており、大衆は社会主義のモデル農村だということで、私も見学に行きました。そのとき、村の歴史を示した展示館も見ましたが、ガイドが説明しないでさつと通り過ぎてしまったので、何だろうと思つたら、戦闘帽をかぶり、眼鏡をかけ、日本刀をもった醜悪な日本兵が村人を刺し殺している絵なんです。ここでも三光政策で数十人の村人が虐殺されたそうです。

また、南京虐殺の資料館は見せてくれませんでした。写真など見ると、恐ろしい強姦の光景がありました。女の人の死体の山があるんですが、全部下半身裸なんです。中には凌辱のあと、日本刀が突きさされた死体もあったり、むごたらしくて、正視できない写真がたくさんあります。日本の男たちが、いかに残酷であつたかという、女の人を下半身裸にしたまま、笑いながら一緒に撮っている写真があるんです。この女を今犯したんだという証拠として記念写真を撮って見せびらかそうという神経ですね。当時の日本兵にとっては中国の女の人たちは人間じゃなかったということを感じます。

★ 抗日地下道村と日本鬼子

それから、私は北京で中国語の学校に入りましたが、留学生たちが抗日地下道村というのを見学

に行ったんです。北京からバスで二時間ぐらいのところですが、ここでも、日本人であることが恥ずかしかった。村人たちが延べ四千メートルの地下道を掘って日本軍に抵抗したわけです。そのまま残っている地下道に入って見るわけですが、あちこちに銃眼が開かれていて地上が見える。「ここから敵を撃ったんですよ」と中国人が説明するので、穴からのぞきながら日本人と中国人の立場が戦争について完全に逆だという実感を持ちました。そこで中国の民衆によって撃ち殺されたのは、日本の兵隊なんですね。赤紙一枚で軍隊に引っぱられた貧しい東北の農民や、若い学徒兵たちが、こうして地下道からの抵抗の弾によって殺されたんだなあ、中国の民衆にとつての憎むべき敵として死んでいったんだなあ、その地下壕から外を見ながら何ともいえないつらい気持ちでした。

右翼の人が「戦後の日本の平和と繁栄のいしずえ」だから、英霊として敬えと、彼らの死を美化していますが、「日本強盗」なんです、中国人にとつては。

侵略して来た日本人のことを中国語では「日本鬼子」って言うことが一番多かったんですが、日中国交回復の後では、「日本侵略者」って少しやわらげた表現もふえましたけれど。「日寇」という言葉もよく聞きました。「寇」は「倭寇」の「寇」で「強盗」という意味で、教科書にもこういう一連の言葉がいっぱい出てきます。今の中国の子どもたちは、日本の侵略戦争のことを歴史として具体的な実物で学び続けているわけです。

それから、その抗日地下道村で、もう一つ印象的だったのは、展示してあった地雷です。その地雷というのは、お鍋の蓋をとると爆発する、椅子にすわると爆発する、ドアを開けると爆発する、というように仕掛けがあるわけです。日本からやって来た侵略者に対して、素手で戦った中国の民衆の知恵というか、抵抗の意志みたいなものが伝わってくるのを感じました。ある中国の女性が、日本で八月十五日の記事とかテレビの番組を見て、こう言われた。「日本人はあの戦争が侵略戦争だというのを忘れたんですか。日本人は戦争って言う、常に被害者であるという面しか、いまだに考えられないんですね」と。

★ 軍事侵略で二百万人の犠牲者を出したフィリピン

一九四一年十二月八日に太平洋戦争に突入すると、日本の軍隊が一斉に、そのころ「南方」とか「南洋」と言っていた東南アジアの国々に侵略していったわけです。その戦争の傷跡は、アジアの国々を訪ればなまなましく残っていることがわかります。今年の一月に鈴木首相がASEAN歴訪の最初の国として訪問したフィリピンのことから話したいと思います。

買春観光に抗議する鈴木首相あての抗議文の中に「あなたが非常に友好的な日本のイメージをつくらうとしているのは、あなたの善意の意図であるうが、たくさん日本人男性観光客がセックスツアーで、われわれの同胞の女性たちをおとしめている行為が続く限り友好国日本のイメージはできない。あのような言語道断な振る舞いで、第二次世界大戦のいまだにうき続ける傷をいやしていこうという私たちのいかなる努力も駄目になってしまうということを、日本人はわかっているのだろうか」と書いてありました。また、「私たちは、日本の軍事的な侵略を忘れない。しかし、昔、軍服を着てやって来た日本人が、今はビジネススーツを着てやって来て、社会的・経済的な支配をし、アジアの人びとの人権を犯そうとしている。これでは、戦争のことを忘れようとしても忘れることはできない」という言葉もこの中にあるんです。

では、フィリピンというのは、一体どのような被害を受けたのか、いかに日本の侵略に苦しんだかということですが、私の個人的な体験からいいますと、一九五九年、ヨーロッパ留学から船で帰国する途中マニラに寄港したとき、私を含めた三人の日本人だけは上陸を禁止されました。その時、私は少しも驚かなかったんです。なぜかという、五八年にアメリカに留学したとき、フィリピンの留学生たちが私に口をきいてくれなかったんです。なぜかわからなかったのですが、ある女子留學生が「あなたの責任でないにしても、私たちフィリピン人は日本の侵略によって、とても苦しめられた。それを知らないとしたら友だちになることはできない」と言いました。ですから、フィリピンの反日感情がすごいことは、知っていたわけです。

日本の侵略によって二百万人のフィリピン人が犠牲になったと言われています。太平洋戦争が勃発してすぐ、日本軍がフィリピンの各島々に入り、年が明けて一九四一年に、マニラを占領して無差別爆撃した。マニラ教会という非常に由緒ある教会などもこわしました。四五年八月十五日まで三年半フィリピンは日本に占領されたわけで、フィリピンの人たちは、フィリピン史の中で「最も暗い幕合劇であった四二年から四五年」という言葉で、当時の苦難を書いています。教科書にも「日本人はこの国を略奪し、男たちを日本軍の事業に強制的に働かせ、女性たちを凌辱し、罪のない多くの民間人を虐殺した」とあります。有名な「バターン死の行進」といって、バターン半島で、殺したり、飢え死にさせたり、一万数千人が犠牲になりました。その「バターン死の行進記念碑」は、日本兵が、ものすごい形相で剣で突き殺そうとしているのに対して、フィリピン人がうらみの目を見開いている彫刻です。今でも四月九日は「バターンデー」ということで、国の祭日になっています。そのバターン半島には、今、日本の工場がたくさん進出しています。

この間、日本テレビが買春観光の問題で特別番組をつくるのでフィリピンに取材に行ったんですが、スポンサーからクレームがついて、なかなか放映されないのを試写会をする、というので見に行っただけですけれど、すばらしい番組です。フィリピンに日本の男たちが女を買いにたくさん押しかけるけれど、そこで、どのような戦争の歴史があったかということを、いろいろな人たちから証言してもらっているんですね。人気のある、かなり年配の女優さんがさりげなく「私の赤ん坊は、日本軍によって突き殺されたんですよ」と話したり、またある人は、「日本の兵隊は残酷で、赤ん坊を空に放り上げてそれを剣で受けとめて殺すとか、すごい災天下の、熱いコールタールの中に子どもたちを転がして殺すとか、恐ろしいことをした」と話していました。

また日本軍が来たので、「屋根の上にフィリピンの女の人々が逃げたら、五人の日本兵がどっと屋根の上に乗って、その女の人を五人が輪姦した。で、その五人が降りてくると、次にまた五人が上がついて……というように犯して、最後に殺した」と、ある村の人が証言しています。ある女の方は、「自分の夫が殺されたのは、教会にミサをあげにいつている人たちに『日本軍が来るから逃げろ』

と知らせに行く途中、日本兵に見つかって撃たれた、教会の中にいた二百何十人も焼き打ちされて全員殺された」と証言しています。

★ 買春観光という名の性侵略は、再度軍事侵略への地ならし

ところが、そんな虐殺を忘れたように、日本から行く観光団ではやっているのが、戦跡ツアーや慰霊訪問団です。コレヒドールとかレイテ島とか激戦の跡に行つて英霊を慰めるとか、遺骨収集とかの名目で、カメラぶら下げて出かける。自分の夫や息子や戦友のお墓には花を手向け、涙ながらに冥福を祈っている日本人が、その隣にある殺されたたぐさんのフィリピンの人たちのお墓には見向きもしないということは、一体どういうことかと、フィリピンの人たちは感じるのではないかと思います。

小野田さんが、突然発見されて三十年ぶりに帰ったときも、彼のお父さんは「自分の息子はよく頑張った」と言っているだけで、息子がフィリピンへ侵略者の手先として行つたのであり、あの国の人たちから見れば人殺しに來たという立場であつたことに對するお詫びの言葉は一言もないんですね。平均的な日本の庶民の戦争に對する考え方じゃないかと思ひます。三十年たつても、その程度にしかな戦争が理解されていないことを、お父さんの手記を読みながら感じたわけです。

それで、フィリピンで買春観光反對の声が上がっているということと、過去において軍事的な侵略があつたということを結びつけて考えないといけないといふたかたわけですね。フィリピン大学のコンスタンチノ教授に、買春観光の問題をインタビューしたとき「日本の観光客が大量に來て、日本製の車とか電気製品とかがマニラの町に氾濫し、日本の料理店やレストランがいっぱいできている。それがこわい」と言われました。コンスタンチノ教授は現在の日本のフィリピンに對する状況を、セカンド・インベージョン、再度の侵略ととらえていて「日本人はかつて軍事力で大東亜共榮圏をつくらうとしたが、人を殺し過ぎて失敗した。それが今度は『円』の力で大東亜共榮圏をつくることに

成功しつつある。日本の品物や日本人がたくさん来ることによって民衆を心理的に日本人に慣れさせ、将来日本がまた軍隊を派遣したときに、民衆が抵抗する度合が少なくなるようにしている。とにかく日本で軍国主義反対の運動をやって下さい」と言われたんです。買春観光を考えると、そういう歴史的な目が必要ではないかと、フィリピンで感じたわけです。

★ かつて軍事侵略、いま公害輸出に苦しむマレーシア

ASEAN諸国の中でマレーシアには、私はこれまで三回行っています。最初は七四年、「足で体験する東南アジアセミナー」という若い人々のグループと一緒に初めて東南アジア四か国を旅行したときで、そのときも戦争の傷跡をあちこちで生々しく感じました。マレーシアは、大きく分けてマレー人と、中国系の人と、一割余りのインド系の人が住む多民族国家ですが、戦争中は、特に中国系の人たちがものすごい抵抗をしたわけです。自分の祖国、大陸が日本軍によって踏みにじられているのに、マレー半島にまで来て自分たちを苦しめるのかというわけで、反日感情が強く、果敢な抗日闘争をしたので、日本軍による弾圧もひどく多くの中国人が虐殺されました。それで、「中国人殉難碑」があちこちにあるんですね。ところが、そのすぐそばにトヨタ、味の素、ソニー、サンヨー、ナショナルとかの大きな看板がそそり立っているわけです。さっき軍事侵略と性侵略のことを言いましたが、マレーシアでは、軍事侵略と経済侵略のからみを、目で見る形で知らされたわけです。

首都のクアラルンプールから郊外へ出ますと、至るところに虐殺の跡がありました。パタンカリという所を通ったとき二万人の虐殺事件があったと、案内してくれた中国系の新聞記者から聞きました。さらにハイウェイ沿いにポートクランという港町へ出ましたが、すぐ近くの橋を通り過ぎたとき、マレーシアの女性に「この橋は、私たちにとって胸の痛む橋だ。たくさん中国人が、日本に抵抗するとこういう目に遭うという見せしめのために殺されて首をさらされた」と言われました。またシンガポールは日本が占領して昭南島などと名づけていたんですが、ここでもたくさん中国人の虐殺が行なわれ、

ある所で五千人、またある所で何千人という形で一般市民八万人が殺されたそうです。

それから私は、ベナンに行ったんですが、このベナンという島は「東洋の真珠」と言われるくらい、素晴らしい景色の島です。そこにベナンヒルという山があり、ケーブルカーがあるので私は登ったんですが、ケーブルカーの運転手と話していると、彼が急に「見よ、東海の……」と歌い出したのでびっくりしたら、「私たちは、日本語で小学校の教育を受けた。私は二年生まで日本語を強制された。日本人であるあなたを見て、フッと思い出したんですよ」。それで、彼が言うのに「少しでも従わないと両手を切られた人がいて、子ども心にも恐れていた」。ケーブルをおりてからしばらく歩くと中国人殉難碑がそびえ立っていました。そこでも何千人の人たちが殺されたんですね。最近ベナンにもたくさん日本人観光客が行くようになったんですが、あの碑に気づく人は少ないんじゃないかと思います。

そのベナンの向かい側のクアラ・ジュルーという小さな村を訪ねたんです。その数年前に、日本の工場団地ができて、東レ、不二サッシ、鐘紡、日本農薬などの大きな工場ができていました。ところが、その工場団地から廃液がどんどん海に流れて、漁をして暮らしていたクアラ・ジュルーの人たちは貧乏のどん底に落ちてしまったというので、取材に行ったわけです。するとクアラ・ジュルーの村長さんがカタカナみたいな字で何か書いたので「これは何ですか?」と聞いたら「これは私の名前をカタカナで書いた」って言うので、私はびっくりして「誰に教えてもらったのですか」と聞いてしまったんです。「この村に日本軍がやって来たんです」。私はギョッとして「どういうことだったんですか」と聞きますと、「日本兵が私たちにいろいろなことをやれと言うけれど、それに対して従わなかったりすると、このヤシの木に登れと言われるんです。それで登ると根元でパッと切ってしまうので、三十メートルぐらい上から落ちて死んでしまう。死なないと、日本刀で斬ってしまう」と、かなり年配の村長さんは淡々と語るんです。私はその話を聞きながら、この、マレー人の部落を指す「カンボン」という言葉がピッタリの、涼しげな村も、過去において日本軍の被害を受け、今また経済的な被害を受けているということで象徴的な村だなあと知らされたわけです。

そのマレー半島から、私はボルネオ島へ飛んで、まずコタキナバルへ着いて、そこからジブで行

ったんですが、その港町も日本の爆撃で破壊されてしまったそうです。そのコタキナバルから東南アジアで一番高い四千メートル以上あるキナバル山のほうまで私は行っただけです。国立公園になっている景色のよいところですが、その山腹に日本が開いたマムート銅山があります。地下の銅鉱石を掘り出すために、その表面の土を毎日大量に掘り出して積み重ねて、ズリの山がいつばいできています。その泥の山が、二、三年前のことですが、熱帯性の豪雨で崩れて、ドゥックと下流の水田地帯に流れ込んでしまった。一番被害を受けたロハン村に行っただけですが、水田の上には三十センチくらいも泥がたまってももちろんお米はとれない。川の水を飲料水にもし、魚もとると言う生活だったのに、銅山の泥が流れ込んで使えなくなりました。その村のリーダーの青年が「何世紀もお米を作ったのに暮らしていた村が、日本人が銅山を開いてから急に貨幣経済の中に巻き込まれて変化が起ったと思ったら、今度は公害が押し寄せてきてこんな苦しい思いをしている」と言うんですね。私は村の女の人たちとも話したのですが、「お米ができないから、バナナとかタバコとかでしのいでいる」というんです。確かに補償金はもらったけれど、急に貨幣経済の中に投げ込まれて、お金の使い方がわからないから、お酒を飲んでしまったりで、生活もできない状況なんです。この銅山でとった銅は、全部日本に持ってきて電話線とか電線なんかに使うわけで、その地域の人たちは銅を使うこともないんです。電気もない家で貧しく暮らしているんですから。帰り道、案内してくれた通訳の女性から「ここも戦争のときは大変だったと、両親から聞いている」と言われました。日本軍が軍票といってまるで紙きれに等しいもので食糧などを買い、村の人はお金かと思って受けとったら、何の役にも立たなかったと憤慨していたとも聞きました。

マレーシアで、中国系の記者たちが私にいったことが忘れられません。「こんなに多くの工場を守るために、日本が絶対に軍隊を送ってこないという保証を、あなたはできますか」と。——私はそれに対して答えることができなかったんです。というのは、すぐ近くのマラッカ海峡は、石油を輸送するタンカーの通路で、「日本経済の生命線だ」と、マラッカ海峡防衛論などを財界で言っているわけです。

★今でも「ロームシャ」という言葉が残っているインドネシア

そのマレーシアの南にあるインドネシアには、私はほんの数日間しかいなかったのですが、ここも四年近く日本軍の軍政下にあったわけですね。「占領した日本は、オランダ植民地政府以上の残虐で専制的な弾圧をし、限らない困窮とかつて経験したことのない苦痛と悲慘を招いた。飢饉が猛威をふるった」とインドネシアの教科書に書かれています。日本軍がよく使った、「ロームシャ」「ケンペイ」「セイネンダン」あるいは「バツキヤロー」「ニッポンジョートウ」という言葉が今でもそのままローマ字で使われている。「労務者」という言葉がインドネシアの人たちの間に今でも残っているのは、たくさんさんのインドネシア人が戦争中労務者として強制労働に引っぱり出されたからですね。一部の人たちは泰緬鉄道建設のため、ビルマ、タイまで連れて行かれて、そこで酷使されて死んでしまっただけです。犠牲者の数はいまだにはっきりしない状況で、かなりの数にのぼったと言われています。ベトナムは、アメリカの侵略戦争がまだ続いている七四年に、ほんの一週間ほど行っただけですが、この国も四四年から四五年にかけて日本軍が侵略して、水田だったところに麻とか別のものを作らせたりしたために、お米がとれなくなつて、何十万人の餓死者が出たことを、一体どれだけの日本人が知っているでしょうか。

その他、太平洋の島々にも日本軍侵略の跡はあるわけですね。この間、ミクロネシアという小さな島々の近くに日本政府が核廃棄物を投棄すると言ったのに対して憤慨して、ミクロネシアのテニアン市の市長さんが来られたんですが、彼は怒り狂つて「もし核廃棄物を、自分の島の近くに棄てるようなことがあったら、テニアンにある慰霊碑を全部叩き壊して太平洋に捨ててやる」と言われたんです。今、日本は自分の近くに捨てられないような危険なものを、太平洋の島のほうへ捨てに行こうとしているわけです。それに対して、彼は昔の戦争の悪夢を思い出して、非常に強く抗議しておられた。私はそれを聞きながら、やはりここでも戦争があったということを忘れてはならないと思いました。

★軍夫として徴用され、戦犯として処刑された朝鮮・台湾の人々

これからお話しする台湾と朝鮮の場合は、東南アジアの国々よりもっと悲惨です。この二つの国は、日本の植民地であったわけで、台湾は五十一年、朝鮮は三十六年の長い間東南アジアの国とは比べられないほどの深刻な苦痛に見舞われたことを意味します。日本の植民地だったために、戦争が始まると日本兵として戦場に駆り出されたわけです。しかも、最初は兵隊じゃなくて、もっと低い軍夫として捕虜収容所の監督をさせられたわけです。インドネシアから連れて来られた労務者とか、連合軍の兵隊を強制労働させたわけですが、それを監視するという汚い仕事を台湾・朝鮮の軍属にやらせたのです。捕虜をほとんど食べさせないでムチで叩きながら、ものすごい炎天下で働かせる。それでたくさん捕虜が死んだのです。戦争が終わったとき、その捕虜収容所に収容されて生き延びた人たちが解放されたわけですが、捕虜収容所にいたときひどいことをしたのはだれだと聞かれて、指したのは、台湾人であったり、朝鮮人であったりしたわけです。それを命令していた日本の将校なり兵隊の顔を受容所の人たちは知らなかったわけです。だから、たくさん台湾人・朝鮮人が戦犯として軍事裁判にかけられ、三百二十六人の人たちが重刑に処せられ、そのうち四十二人が死刑になりました。日本ではだれよりも戦争責任を問われるべき戦犯たちが、戦後堂々と政界に復帰しているのです。しかも講和条約が発効したとき、日本の戦犯は巣鴨から釈放されたのに、台湾・朝鮮人戦犯は釈放されなかったんです。

台湾では一九四二年に、少数民族の山地の人たちを「高砂族義勇隊」ということで戦争へ連れていき、同年陸軍志願制度、翌四三年に海軍志願制度をして戦場に駆り立てたわけです。志願制度といっても、事実上の強制だったわけです。そして、四五年一月からは徴兵制になったわけで、台湾から軍人あるいは軍属として引く張られた人は二十万人以上います。そのうち戦死した人は、厚生省でわかっているだけで、三万三千四百人。その戦死した人たちの遺族が、どんなに厳しい戦後を生きてきたか、加藤邦彦さんというルポライターが『一視同仁の果て』という本にまとめて出しています。加藤

さんから台湾で調べられたことを聞いたところでは、遺族たちの辛酸というのはひどかったんですね。今六十三歳のある女性は大が海南島で亡くなり、お子さんが精神障害になって、掘っ立て小屋とも言えない小屋に住み、クズ拾いをして生きていたっていうんですね。また、息子を戦死させられたあるおばあさんは、「なんで日本人が今さら会いに来たのか。会いに来る資格はないじゃないか」と、ものすごい剣幕でドアを閉めて入れてくれなかったそうです。加藤さんがそれにもたじろがず「亡くなった息子さんの話を聞かせて下さい」と一生懸命言ったら、息子さんが残した日記を見せてくれたそうですが、そのお母さんが言われたそうです。「日本人はわれわれがこういう苦しい生活をしていることに対して何の償いもしないではないか。日本の遺族たちには少なくとも百万円の遺族年金が出ていると聞いているが」。特に大將とか、えらい人の遺族は何百万円の年金をもらっているわけです。台湾のおばあさんは、こうも言ったそうです。「一銭もわれわれに払いもしない日本人が、今、札束をもって女を買いに台北に来ているではないか。これは一体どういうことか。日本は完全に道義を失って、卑しい国民になった」と。また、女の遺児たちは、どこかに養子にやられ、その先は売春婦になって、日本から来た人たちの相手をさせられるような状況にあったんですね。加藤さんが聞いた話では、ある遺児は子どもを枕もとにおいてお客をとっていたというんです。

さすがに台湾の人たちも黙っていられないということで、七七年の八月に十四人の人が日本に対して「戦争中の補償をしてほしい」という訴訟を起こしました。何とか生きて帰っても負傷して体が不自由になった人たちが集まって訴訟を起こしてるんですが、そういうことをかえりみる日本人は残念ながら非常に少ない。私も、裁判の支援集会に行ったのですが、やっている人は、二、三十人です。日本人がもっと、こういう問題に関心をもってほしいと感じました。

★ 神社参拝を拒否して、投獄され、獄死した朝鮮の人びと

台湾と同じように日本の植民地として苦しんできたのが朝鮮です。三十六年間の植民地支配の中で、

数々の犯罪的な行為の中でも精神的な侵略をしたことを忘れてはならないと思います。それは皇民化教育ということで、朝鮮人を誰よりも日本人に育てようとしたわけです。その象徴的なことが神社参拝問題だと思えますね。神社というのは天皇が祀（まつ）ってあるところですよ。

朝鮮神宮をつくって生徒にも参拝を強制し、抵抗したら、どんどん投獄しちゃったわけです。朝鮮の場合、日本と違ってキリスト教が根つきましたが、これは日本に対する反感から盛んになった面があるんです。朝鮮のキリスト教の長老教会の総会に憲兵が来て神社参拝を無理に決議させ、反対した牧師たちは投獄するわけです。その数は二千人を越えたと記録に残っています。そして、その中でわかっていただけでも五十何人かが獄死したわけです。

その神社参拝拒否闘争をしたうちの一人、姜信明という牧師が七八年「戦争責任を問ひ続けるアジアの証言集会」で、その状況を証言されました。靖国神社には二万六百人の朝鮮人戦死者が今でも祀られてるんですが、その靖国神社が何人の朝鮮人を投獄し命を奪ったかを考えれば、朝鮮出身日本兵を今でも祀っているなど、とんでもないという気持ち伝えたいと姜先生は来られたんです。そのときの証言によりますと、三十二歳の甥は、「天皇と、お前の信じている神はどちらが偉いか」と問われ「神様はすべての上に立つものだ。自分は天皇を信仰の対象として拝むことは絶対できない」と言ったために、ものすごい拷問を受けて亡くなり、おじもムチ打ち水責めの拷問で半死半生になったそうです。そのような命がけの抵抗の歴史のある靖国神社を、今また国家護持しようという動きが出ていることを強く批判されました。

私が去年お会いした朴永昌牧師は今アメリカに住んでおられますが、最近『正義が我を呼ぶとき』という本を書かれ、日本語訳が出たので来日されたんです。朴寛俊というお医者さんのお父さんの伝記なんです。天皇という異民族の神なんかにはひざまずくことは絶対できないと、最初日本の朝鮮総督府にあって、「神社参拝を強制するのはやめてくれ」と総督に直接言ったのですが、対策を変えようとしません。それで、息子の朴永昌さんともう一人女性のクリスチャンを連れて東京に来て、帝国議会の傍聴席にうまく入り込んだんです。そして、「私たちは絶対に神社参拝はできない」という理由

を書いた二百グラムにもなる巻紙を、議場の真ん中に投げつけたわけです。三人は、その場で取り押さえられて朝鮮に強制送還され警察の監視下に置かれました。息子さんはどうにか中国に逃げのびたんですが、お父さんは平壤刑務所に六年間入られた。一九四五年三月に最後の抵抗を試みて、獄中ハンストをし、死ぬ寸前に外に出され、病院に運び込まれて三日後に亡くなったんです。で、朴永昌さんは「あんな恐ろしい日本支配のシンボルの靖国神社をまた担ぎ出そうとしている動きがあるが、何とかしてそれをやめてほしい」と強く言われました。

私は靖国神社はアジアの人たちの側から言えば、あまりにもはっきりした軍国主義の象徴であり、そこに祀られている「英霊」は人殺しだと見られても仕方ないと思うのです。靖国神社に首相や閣僚が参拝するのを見ると、怒りを感じます。

その他、朝鮮人の受けた戦争の被害でいまだに解決していない問題はたくさんあります。先ほど触れました朝鮮人戦犯で処刑された人たちの遺骨は、故国の遺族に礼をつくして送り返されることもなく、今でも日本のお寺に放置されているんです。それに朝鮮人被爆者の問題もあります。丸木位里、俊さんご夫妻が十四枚の「原爆の図」を描きましたが、最後の第十四部は朝鮮人被爆者をテーマにした「カラス」という題の絵です。なぜカラスか。朝鮮から連れて来られて、長崎の軍需工場で働かされて、被爆した人たちの遺体は誰にも片づけられず野ざらしになっていたんです。日本人の遺体が片づけられ、葬られたあとまで。その野ざらしの遺体にカラスが群がっていたんだそうです。そのことを石牟礼道子さんが「菊とナガサキ」という随筆に書かれているんですね。で、丸木さんたちは「カラス」の絵に、死んでからまでも差別されていた朝鮮人被爆者へ鎮魂の思いをこめられたんです。丸木さんたちは最初原爆にやられた日本人の惨状を描いておられたんですが、アメリカに「原爆の図」をもっていったとき、「南京虐殺はどうなんですか。日本人は被害者だけではなくて、加害者ではないですか」と問われ、虚をつかれ、「南京虐殺の図」なんかを描かれるようになったんです。私は、「カラス」の絵の前に立つと、日本が朝鮮民族に対して行なったいづくせぬ残虐行為を思い、胸がしめつけられます。

★ 朝鮮人従軍慰安婦の戦後は辛酸の日々だった

女性として、とくに胸が痛いのは朝鮮人従軍慰安婦の問題があります。十八歳から二十歳ぐらいの若い朝鮮人女性を、少なく見積もっても六万から八万人も、女子挺身隊員の名のもとに狩り出して、中国や東南アジアに侵略に行く天皇の軍隊、残酷な殺りくをやる兵隊たちの、性欲の処理のために使ったのです。

『沖繩からの手紙』という韓国の作家の書かれた小説があります。戦後、沖繩に韓国の女性がたくさん、バイナッブル労働者として連れて来られたんですが、その小説は、沖繩に来た一人の少女が祖国の家族に出した手紙のスタイルをとって、彼女が沖繩で見たことを綴っています。同胞の年配いた女性に会うのですが、彼女は、かつて従軍慰安婦として強制的に連れて来られ、そのまま沖繩に住みついて、戦後は米軍の売春婦として働かされ、辛酸をなめた女性だったわけです。『沖繩のハルモニ』という記録映画に登場する年とった朝鮮女性もかつての従軍慰安婦で、サトウキビ畑の中の掘っ立て小屋のような家で貧しくさびしい老後を送っています。戦後三十余年たっても、戦争の傷あとに苦しんでいるんです。一方では強姦、もう一方では従軍慰安婦……、軍事侵略と性侵略は結びついているということを改めて感じます。現在の買春観光について「経済力の強い国の男が弱い国の女を買うのは、あたり前の経済法則だ」と侵略の論理、強者の論理をふり回す男がいますが、かつては軍事力でアジアの女性たちを犯し、今は経済の力で彼女たちの体をもてあそぶ。人間として許せないことが、形を変えてまかり通っているのだと恐ろしくなります。

★ 二度と戦争を起こさないための女の責任

日本が戦争中にどのようなひどいことをしたかは、国や地域によって異なりますが、いずれにして

も侵略戦争であったという事実を見ずえる必要があると思います。日本軍は偽善的にも「大東亜共栄圏」という大義名分を振りかざして「白人の支配からアジア諸民族を解放する」といって、実際には残虐きわまりない侵略者として中国や東南アジアに押し入ったわけです。そういう加害者としての日本ということになると、日本の女も戦争中どんな役割を果たしたかが問われてくると思います。村上信彦氏は『現代日本の婦人問題』の中で、「女性史の中で戦時中のことをマイナス評価ばかりせず、女性の地位という点でプラス面もあったのではないか」と書いています。なぜかというと、若い女性たちが「女子挺身隊員」として工場に働きにいったことは封建的家制度にしばりつけられていた日本の女が家から出るきっかけになり、社会進出が進んだというんです。しかし、女子挺身隊というのは武器をつくるための工場に勤労働員されたわけで、その武器は中国や東南アジアの人たちを殺すために使われたわけです。ですから目的を考えないで、ただ工場に進出したからいい、と安易に考えているとしたら大きな間違いだと思います。

また「大日本愛国婦人会」ということで千人針を作って兵隊たちを戦地に送り出した主婦たちはいえ、やはり戦争に協力した立場だったと思います。例えば朝鮮では金属の食器を使う風習がありますが、朝鮮で「国防婦人会」の日本の女性たちが、朝鮮人の家庭を予告なしに食事中訪れ、食卓から金属の食器を全部奪いとってくる。それを道庁の庭に運んで積みあげて得意気に記念写真を撮っているわけです。しかも、最近の週刊朝日に、その写真を何の反省もなく、とくとくとして提供しているんです。

戦争を二度としないための女性としての責任をどう考えていくかということは大きな課題だと思うのですが、第一に教育というものの恐ろしさを改めて感じます。戦争中は徹底的に軍国主義の教育をされて「天皇陛下万歳」といって死ぬのが名誉だと考えたわけです。ですから、私は教育こそ軍国主義の温床だったと感じるわけで、教科書などをもっと点検しなくてはいけないと思います。

それと、もう一つ、言論の自由の問題があります。言論の自由を少しづつ少しづつせめていくのが戦争に入っていく過程じゃないかと思います。最初はむき出しの武力の問題ではないんですね。最

近のテレビとか映画とかマンガとか、戦争や戦争に行った人を美化するようなものが多いですね。あからさまな形でなく、さりげなく日常生活に忍びこんでくるものが恐ろしい。いちいちチェックしていかないと、気がついてみたら戦争もやむを得ないというムードになっていた戦前の轍を踏むことになりかねない。そういう反戦の言論ができにくくなる、というのが一番こわいことだと思います。ただ感情的に「ノー」といっているだけではマンネリで説得力がないし、軍備拡張の動きなど具体的につかんで、また複雑化している国防という問題に私たちの立場で理論武装もして、発言する必要があると思います。とにかく、反戦の言論をもっとと活発にしていけることです。新聞への投書、テレビ局への電話、マスコミでとりあげるなど粘り強くやっていかないと……。

もう一つ、女性解放と平和との関係をはっきりとらえておかないといけないと思います。かつて、日本の女性が戦争に加担していった歴史を学び直し、こんどこそ、女性が反戦を貫くためにはどうしたらよいのか。女も徴兵制という方向の男女平等ではなく、逆に、男も徴兵制を拒否するところでの平等を考えたものです。女性が自立することは、戦争に男と肩を並べて協力するためではなく、堂々と反戦の闘いをするためではないのか。その辺をどの女性グループも共通の認識にしたいですね。そのためにも、数は少なくとも、社会の流れに対して、反戦を貫いた戦前の女性についてもっと学び、こんどこそバラバラの個人でなく、女の力を結集したいですね。

(朝日新聞社編集委員)

(注)

この講演で話したことについては『人民の沈黙―わたしの中国記』(すずさわ書店、アジアの女たちの会機関誌五号『戦争責任を考える―女の側から』)に書きましたので、参考にして下さい。

(一九八一年二月二十七日、△あごらV講演会「女と戦争」より)

フェミニズムと戦争

斎藤 千代

「針のむしろ」ということばがありますが、今、松井さんのお話を聞きながら、文字どおり針のむしろに座っている気持ちでした。何ともいたたまれない気持ちでした。

松井さんは今、日本兵の数々の暴虐について語られたけれども、私には、その日本兵の出征を見送った記憶があります。陽焼けした顔に光っていた汗、背のうや軍靴の革のにおいとないまじっていた、その汗のにおいまで鮮やかに思い出すことができます。町々が寝静まる朝早く、私たち女学生は兵士たちを送り、ちぎれるほど日の丸の旗をうち振ったものでした。「聖戦」と信じ込み、「解放戦争」と信じ込み、お国のために戦う兵隊さんに感謝し、銃後の私たちは「ほしがりません勝つまでは」と誓ったものです。

学校のクラブ活動で、私たちは大きな地図に次々に小さな日の丸の旗を立てていきました。地図は最初は中国大陸の地図で、武昌とか南京という地名の上に小さな旗を立てたときの感激を思い出します。そのころ支那と呼ばれていた中国の都市を日本軍が征服する度に、夜は提灯行列がありました。

ある時期から、地図は東南アジアを含む、もっと大きな地図に変わりました。大東亜共栄圏という地図でした。小さな日の丸を立て続けて、私はクアラルンプールとかパレンバンという地名を覚ええました。南京とか武昌という地名を覚えたように。

少女の心に刻み込まれたその南京という土地で、世にもすさまじい残虐が、あの、汗に光っていた兵隊さんたちの手によって行なわれたのだと、戦後になって聞いたとき、最初は信じられませんでした。米軍の戦いを正当化するための謀略だろうと思ったほどです。でも、今、松井さんによって語られた、身の毛もよだつような話の数々は、やはり真実であったことを、そして、その兵士を送り、銃後の耐乏に耐え、工場労働に従事することで、私自身もまさしく暴虐に加担したのだということを認めずにはいられません。

同時に思います。兵士として駆り出され、異郷の地に死んで行った人々が、自分があれほど苦しい思いをした戦争が、単なる殺りくと侵略の戦いでしかなかったのだと知ったとき、深い土の下から号泣するのではないかと。

●
焼き魚が食べられなくなった私

私自身の心の中にも号泣する声があります。戦争のことを思い出すたびに、私は声をあげて泣きたくなる。どんなに泣いてもどうしようもない悲しみと憤りが、私の心に深く巣食っています。

私はよく人に聞かれます。「あなたはなぜそんなにへあごらの運動に熱中するのか」と。私とへあごらとのかわりは、一口では説明しきれませんが、いちばん深い原点は戦争です。まぎれもなく戦争です。

松井さんは小学二年で敗戦を迎えられたそうですが、私は小学校に入る前に満州事変が始まり、小学校で日中戦争、女学校で太平洋戦争になりました。ものごとくところから少女期までが、十五年戦争と見事に一致しています。いちばん知識欲もあり、いちばん物事を吸収したはずの時期に、学校は、学業以外のことが行なわれる場所になっていきました。

最初は「勤労奉仕」でした。陸軍病院や留守家族の家庭に奉仕に行きました。戦局がきびしくなってきたから「学徒動員」でした。陸軍兵器補給廠というところに行き、時には自分の体重よりも重い兵

器を背負って運搬しました。月月火水木金金ということばがあり、土曜も日曜もありませんでした。当時の学徒動員法というのを調べてみますと、一日十二時間労働が認められています。早朝から深夜まで、私たちは必死で働きました。ベトナム戦争を戦った北ベトナムの少女たちのように。

「倒れてのちやむ」ということばを、私たちは毎日のように聞かされていました。町には悪徳商人があふれ、動員先でも将校は特権階級でした。それを見るたびに私たちは奮い立ちました。私たちが働かずに、どうして国を守り得ようと。

動員先で貴重なお菓子が配給されたとき、私たちは突き返しました。お菓子には菊のご紋が入っていました。「特攻隊のものを食べるわけにはいきません」。のどから手が出るほどほしいのを、グッとがまんしました。物資の横流しをしている将校たちへの抗議でもありました。

敗戦のいろは日に日に濃く、三月十日の大空襲で、決定的に「日本は敗れた」と感じました。

深川の動員先に急ぐ日本橋の大通りは両端から燃えていて、人が歩けるところは二メートルもあつたでしょうか。その狭い道を、亡者のような行列が西へ西へと向かっていました。みんな顔は真っ黒、目は真っ赤でした。ひと夜を火煙りとたたかって、赤い目は視力を半ば失っていました。行列は手前に突き出し、前に障害物がいないことを手さぐり手さぐりして、よろよろと進んでいました。

防空頭巾がまだくすぶっている人もいました。背中の赤ちゃんが身じろぎもしないのに、知ってか知らずにか背負い続けている母親もいました。涙をぼろぼろこぼしながら、人をかきわけかきわけて私は動員先に向かいました。遅刻することはおろか、休むことなど、当時は夢にも考えられなかったのです。

深川に近づくと、行列はまばらになりましたが、あたり一面、全くの焼野原でした。その焼野原に、マネキン人形のように見えるのは、全部死体でした。墨田川は真っ黒で、焼けた材木で覆われていました。よく見ると、それは材木ではなく、焼け焦げた人びとでした。死体を見まいと思って上を向いて歩くと、死体にぶつかりました。

昨日まで一緒に働いていた仲間の何人もが、その日を限り姿を見せませんでした。あの人が死ぬは

ずがないと、何日も何日も待ち続けても、ついに現れませんでした。

燃えるものがなくなったのはずの焼け跡で、まだ燃え続けているものがありました。人間でした。学校などの大きな建物に逃げ込んだ人びとが、学校ごとくすぶり続けているのでした。何ともいえない臭いがたちこめていました。以来十五年間、私は焼き魚が食べられませんでした。魚を焼くと、あの臭いがよみがえる。――私が魚を食べられるようになったのは、出産という大きな転機を得てからでした。

●
どうして生きられる

「敗けた!」と思えば思うほど、私たちは働き続けました。行き着く先は死でした。死んで日本を守るのだと、ひとすじに思いつめていました。空襲で燃え死ぬことはむしろ本望でした。自分のからだとともに、自分の本、自分の持ち物、すべてが燃えて、地上に跡かたもなくなる。それは何かすがすがしいことのようにさえ思えました。生き身の人間にできることは限度があるけれど、死ねば魂魄となって国を守るのではないかと思っていました。

そんな私にとって、八月十五日は衝撃でした。それにもましてショックだったのは、八月十五日以後の出来事です。「お前たちのしたことは間違っていたのだ。お前たちは悪だったのだ」と、てのひら返すようなことを言われて、今さら何を信じることができるでしょう。あの、死んで行った人びとはどうなるのでしょうか。私にとって生きがたい日々が始まりました。

いま思えば、人間の脳はコンピューターに似たものだと思います。脳の配線ができる幼児期から、 \wedge 非常時 \vee とか \wedge 戦争 \vee という配線をされ、そこへ、「死ね」「死ね」とプログラミングされた人間が、どうして急に生きる方向にかじを向け変えることができるでしょう。死ぬ方向にからだじゅう真っ黒な配線をされてしまった人間の苦しみと悲しみを、わかっていただけですか。

生きる方向にかじを向け変えるためには、戦争について考えるほかありません。私は長い間考え続けてきました。戦争とは何だろう、あの戦争はいったい何だったのだろうと。

そんな中で、私は女の問題にめぐりあいました。

きっかけは、女の人たちの内職でした。

敗戦後、女の人たちは、ほとんどみんな内職をしていました。

戦時中は、女は「産業戦士」と言われ、旋盤工もバスの車掌も運転手も女で、生理休暇は、こうした重労働の女を守るために始まったといわれるほどですが、復員が始まると女はその職場を追われました。男の人にさえも働く場がないとき、女がてっとり早く働く場は、進駐軍を相手にからだを売るか、零細な内職をするしかなかったのです。私の愛する先輩や姉たちも、ミシンを踏み続けていました。私はある人にしがみついていたと言いました。「あなたの足ははれ上がっている、あなたの静脈はヘビのようにふくれてうねっている。どうかミシンをやめて」と。一週間ミシンを踏み続けても、ヤミ米で五合ぐらいにしかならないのです。でも、その人は答えました。「五合にしかならないにしても、その五合が貴重なのよ。ごらんない、子どもたちがあんなに泣いている」

みんなおなかをすかせていました。砂糖水というものもなく、子どもたちは「あまみずちょうだい」と言っていました。砂糖の代わりにサッカリんをとかした甘い水で空腹をごまかしていました。そのサッカリんもヤミでなければ買えず、目の玉がとび出るほど高いのです。子どもを持った母親たちは、足がはれて動けなくなっても、ミシンを踏み続けなければならないのでした。私は自分が学生で、その人たちを何一つ助けられないことを悲しみました。なぜ女は、女であるためにまっとうな職がなく、こんなみじめな内職をしなければならないのだろうと思いました。いつか自分に力ができたら、女の内職をよくするために働きたいと誓いました。

女の問題を考え始めてから、私は、生きる足もとが少しずつ照らされていくのを感じました。女が

みじめな内職をしなければならないのは、社会の仕組みの中に男女差別があるからだということが少しずつわかってきました。差別のない世の中、平等な世の中になれば、私はもしかしたら生きられるかもしれない、と思うようになりました。そして、その「平等」の意味を、「男と女の差がないこと」というふうに思い続けていました。

● 想像を超えた第三世界の現実

一九七五年、国際婦人年にメキシコを訪れたことは、長い間、ただ、「差別をなくすこと」と思い込んでいた「平等」の意味を問い直すきっかけになりました。

メキシコ・シティで開かれた国連の第一回世界婦人会議に並行して、NGOによる、民間人のための会議「トリビュン」が開かれると聞いたとき、女の問題を考える一人として、柱の蔭からでものぞいてみたいと思った好奇心が、私の参加の動機でしたが、あのときメキシコを訪れたことは、私の考え方、——生き方さえも変えるものになりました。

空港でまず見たのは、ダンボールを着物の代わりに着ている人です。そして町を歩くと、どこからともなく黒い手がさし出されます。物乞いです。

名物のマリアッチ広場には、夜ともなると男たちが集い、マリアッチという民族音楽を楽しむのですが、そこには夜おそくまで四つ五つの女の子がガムをバラ売りにしています。さらに衝撃的だったのは、まだ九つか十かと思われる女の子たちが、男たちのボンチョにかき抱かれて闇の中に一人また一人と消えて行く姿を見たことでした。売春と気がつくのには、ちょっと時間がかかりました。女になるにはまだ遠いと思われる小さな子どもたちが、です。一日工場で働いて得られる収入の何倍もの収入が一回の行為で得られるためだと知り、その工場の収入が一日五百円だと知らされたのは、その二、三日後のことでした。

第三世界ということばは聞いており、南北問題が世界の課題だという知識は持っていましたが、現

実に見る第三世界のすさまじさは、ことばに尽せないものでした。

マヤの遺跡をたずねてユカタン半島に行くと、人びとは、はだしの暮らしです。水道がないので、飲み水の代わりに、どこでもコココーラを売っています。ココロニザシオン——コココーラと、コロニザシオン（植民地化）を組み合わせたこの言葉を、雑誌で読んだ記憶がありました。が、なまなましい現実として、その記憶がよみがえりました。貧しいので水道がない、だから高いコーラを飲む。そのコーラは、骨や歯をとかすと言われていきます。麻薬が入っていて習慣性になるとも。トリビュンの会場で、中南米の人びとが、口を開けば「米帝国主義絶滅」を叫んでいた意味が、ほんとうによくわかりました。

四百六十年も残る戦争

彼らはなぜそんなに貧しいのか。

メキシコ人を見渡すと、肌の色がまちまちです。日本人よりかなり黒い人から、真っ白人まで。その肌の色のちがいは、一五一九年、スペイン軍が侵入したときから始まったことを、博物館に行くと、まざまざと感じました。

博物館にはマヤ文字が飾ってありました。何とも精巧な絵文字ですが、この文字がいまだに解説されていないのです。四百六十年前、スペインから来たコルテスは、図書館のすべての本を焼き払い、マヤの人びととともに、マヤの文化もことごとく抹殺してしまったのです。そのとき、勝ちほこるスペインの男たちは、マヤの女たちも犯したのでしょう。

スペインから、メキシコ人と匹敵するほど大量の移民が引きもきらず来っていたわけではありません。なのに、原住のメキシコの人びとと、顔かたちがちがう、はだの色もちがう人びとが、こんなにも大勢いるということは、スペインの男たちが、大勢のメキシコ人を犯したという証拠です。戦争ということはこういうことだったのかと、頭をガンとなぐられた気がしました。

混血の人びとはメスキノソと呼ばれ、インディオと呼ばれる原住民の人々を支配する地位にいます。侵略者の血をまじえたことによって支配者に近づいた人びと。そしてメスキノソも原住民の人びとよりはましとはいえ、同じように貧しい。

貧しさの底に侵略戦争がありました。そして四百年以上も前の戦争は、今も深い爪あとを残し、現在もなお続いていると感じました。

●
—— 平等はぜいたくか

「あなた方は平等、平等というけれど、平等なんてぜいたくだ。私たちは生きるか死ぬかの瀬戸ぎわにいる。パンがない。母乳が出ない。母親の腕の中の赤ん坊がみすみす死んで行く。男女平等を叫ぶ前に△発展▽を。貧しい国の△発展▽を」

中南米を中心とする第三世界の人びとは、折あるごとに先進工業国の女たちのブルジョワ婦人運動を弾がいていました。

「そんなことを言っても、先進国でも女は差別されているのだ。男が一ドル働く間に女は六十セントしか得られない」と答えるアメリカのリブたちの声は、第三世界の女たちのすさまじい迫力の前には説得力がありませんでした。ベティ・フリーダンは金髪をなびかせ、テールを叩いて、「女たちよ、今こそ力を持とう、力は権利なり、権利は力なり」と獅子吼し、私は、その演説のうまさに、さすが当世きつてのアジテーターと感嘆しましたが、「マイト・イズ・ライト、ライト・イズ・マイト」ということは耳に強く響きながらも、もうひとつ心に響かぬものがありました。

平等はぜいたくなのだろうか。平等は力によって得られるものだろうか。——どちらにしても、平等を考えると、第三世界の問題をぬきにしては考えられないことを感じました。そして、産業国家になることで第三世界を収奪して、辛うじて這い上がった日本のことをききりと痛む心で考えました。

「平等はぜいたくだ」という言葉をふたたび聞いたのは、四年後の日本で、でした。

労基研報告に憤慨する労基法改悪反対集会の第一回は、かなり荒れました。八鉄連の七人の女たちと共にたたかう会VのKさんが平等の問題にふれたとたん、場内から弥次が乱れ飛び、声はかき消されました。静かな話し合いをするための第二回集会では、アイスクリーム工場で働く人が叫びました。「私たちは過酷な労働の中で、毎日、明日は働けるか、明日は働けるか、と思っている。そんな私たちにとって、定年差別などは問題じゃない。平等なんてぜいたくです」

そして興奮してつけ加えました。「平等なんて、いらない」と。

この瞬間、私はメキシコのことを思い出しました。国と国との間に北と南があるように、同じ日本の女の中にさえ、北と南があることを、痛いほど感じました。ついに「平等はいらない」とまで言った人。その人に、その言葉を叫ばせた背景に胸を衝かれました。平等は北と南の解消に役立つはずのものなのに、平等は敵なのだろうか。いらないのだろうか。

——何か月か後に、テレビでメキシコの山村の生活を見ました。食べるものもない貧しい人びと。そのわずかな食べものは、男がまず食べています。貧しいから平等はいらないと言うのは間違っている、と思いました。貧しいところこそ平等が必要なのではないか。平等がなければ命さえ守れないじゃないか。

あまりの貧しさに、平等まで敵と思っている、その貧しさを、しんそこ、悲しいと思いました。では平等とは何なのか——。

● デンマークの農村で

長い間考え続けてきた疑問に、私なりの一つの答えを見いだしたのは、去年、コペンハーゲンのN

GOフォーラムに参加してからです。

南、第三世界の真っただなかのメキシコと全く対照的な北。世界でも最も人権が保障されているデンマークで開かれた民間会議は、何の飾りけもない、気がまえない、淡々たるものでしたが、世界のフェミニストたちのやさしさと温かさを日ごとに感じました。同時に、地もとデンマークの人びとの、一見そっけない中にも温かい配慮を知りました。会議に参加した女たちへのもてなしも、数々用意されていました。

フォーラムの通路には、参加した女たちへのさまざまなインフォメーションが掲示されていました。が、「週末をコペン郊外の農村で過ごしませんか」という一枚のポスターが目にとまりました。ニワトリやブタのカラフルなイラストが、いかにも楽しげなうえ、「第三世界の方、特に歓迎」という文字にひかれて、その招待に申し込みました。

バスの着いた先は、みどりゆたかな農村でした。案内された保育所で、まず感心したのは工作室です。日本の高校生ぐらいが使うような工具が壁にズラリとかがっています。「子どもたちは週に二日はここで過ごします。女の子も男の子も……」という説明でした。さすが木工の国、デンマークだと感心しましたが、次は家事室でした。シンも洗たく機もあります。「子どもたちは週に二日ここで過ごします。男の子も女の子も……」と言われてハッとしました。工作室は、木工に親しませるためのもものではなかったのです。男の子も女の子も、小さいときから、工作も裁縫もできるように育ているのです。

△お年よりの家Vや、家庭訪問ののち、私たちは村のホールに案内されました。どの家からも一皿ずつのサラダとハンバーグと、一本ずつのワインを持ち寄った簡素な夕食でしたが、夫も妻も子どもたちも、総出のもてなし。そして私たちの自己紹介が終わると、村人たちのバンドの演奏で、絵にかいたような民族衣裳の男女が現れ、華麗な民族舞踊が始まりました。よく見ると、踊っているのは、ほとんどしわ深い人びとです。おじいさんやおばあさんまでが、村をあげて歓迎してくださったのです。

少女たちのデンマーク体操、歌、踊り……と続くうち、音楽に誘われたかのように、アフリカの女たちが次々に飛び出して踊り始めました。インドの女性はいみじみとしたインドの歌を歌いました。いつのまにか、みんなが輪になって歌っていました。それは、今まで一度も経験したことのない楽しいパーティでした。いつまでも明るい白夜の空がさすがにはの暗くなり、最後にみんなで肩を組んでほたるの光を歌ったとき、涙があふれ出しました。こんなふうに世界の人が抱き合い、知り合っていたら、戦争は起こらなかっただろうという思いでした。そして、老若男女をあげて私たちを温かく迎えてくれた村人たちのやさしさが胸に迫ったのでした。「日本でもし世界会議が開かれたとしても、村をあげて女たちを歓迎する村があるだろうか、もし歓迎するとしても、せいぜい婦人会の人たちだけだろう」と思ったとき、突然ハッと気がつきました。老若男女、村をあげての大歓迎ができたのは、デンマークの人たちが、ほんとに男女平等なのだからだということです。そのとき、長い間さがし続けていた△平等△の意味が、やっとわかったように思いました。△平等△とは△共に生きる△ということなのだ。

男も女も、老いも若きも△共に生きている△村人たち。だからこそこの村では「特に第三世界の人びと」を招いたのでした。はだの色、姿、かたちがちがおうとも、人はみな人、すべて共に生きる人ということ、小さい子どもたちにも教えよう。

そして、ほんとうに平等な人びとは、ほんとうに平和を願う人びとなのだと感じました。

そのとき、私の原点としての△戦争△がやっと見えて来ました。△戦争△こそは、△共に生きる△と△の正反対にあるのだと。

長い間、私の中には、△平等△への思いと、△反戦△の思いがありました。この二つが、やっとカチッとドッキングしたのでした。

それまで私は、ものごとがいいことか悪いことかを判断するとき、「戦争に近づくことは悪いこと、遠ざかることはよいこと」というのを自分のものさしにしていたが、この日から、「共に生きる方向に向かうのはいいこと、そうでないのを悪いこと」と考えることにしました。

フォーラムでは、平和デモのほかにも、いろんなデモが繰り出されましたが、中でも印象的だったのは、ボリビア支援のデモです。折しもボリビアにクーデターが起こり、世界でただ一人の女性大統領はその地位を追われた。会議に来ていた人たちの夫もつかまった。そのニュースを聞いて、会議に集まっていた世界のフェミニストたちは、誰いうとなくデモに立ち上がりました。「ファシズムはフェミニズムの敵」という旗もありました。フェミニストたちが、ファシズムにどんなに敏感かを知りました。

「インテルナシヨナレ・ソリダリテ（国際的連帯を）！」という声がわき起こっていました。平和デモの歌声に比べて、ずっと激しい声でした。

デモの先頭に立つ女性を写そうと、群がるカメラマンをかきわけてデモの前に立ち、シャッターを押そうとして、思わず手がふるえました。何というものすごく美しい顔なのでしょう。中肉中背の、ごくあたりまえの日本人にも似たボリビアの女性なのに、凄絶というか、憤き上げる炎のような迫力に満ち満ちています。こぶしを上げ、大地を踏みしめ、「インテルナシヨナレ・ソリダリテ」と、ひときわ大きく叫ぶ声。

翌日の新聞で、私は、彼女がボリビアの鉱夫の妻であることを知るとともに、彼女の語ったことばを読みました。「ボリビアに帰れば自分は多分殺されるだろう。でも、私は帰る。ボリビアのファシズムと戦うために！」

平和を願うフェミニストたち

△共に生きる△ためには、それをおびやかすものに敢然と向かっていくフェミニストたち。民間会議で最も熱をこめて語られたのは△平和▽だったのではないかと私は思います。ヨーロッパ

はい大変な不況ですが、不況に続くものが戦争であることを経験的に知っているヨーロッパの人びとの危機感には実に深刻なものを感じました。国連本会議の開会式には北欧諸国五十万人の平和署名が提出されましたが、ほかにも会期中、△平和大行進▽が何度も繰り出されました。花のような歌に包まれたやさしい行進に加わりながら、私は宮沢賢治の「革命は歌と芝居に始まる」ということばを何となく思い出していました。

「社会主義諸国とNATO諸国の女たちは手を結ぼう」という署名も回されました。もはや男たちにまかせてはいられない。国を超え、イデオロギーを超えて手を結ぼう。少なくともフェミニストであるならば……という主張には、みんなが一樣にうなずいていました。

しかし世界のフェミニストたちが手を結べば戦争は阻止できるか。

残念ながら、この問いには、確信を持ってイエス!とは言いきれません。戦争の力学は個人の思いをはるかに超えるところにあるわけですから、フェミニストの団結などは、戦争阻止のほんの一翼になるにすぎないものだろうと思います。しかし、新しいフェミニズムの萌芽が生まれてから、すでに十数年、世界の各地で少しずつ確固とした基盤を築きつつあることに、私はやはり希望を託したいと思います。

私たちにとって悪夢のようなあの第二次大戦のときには、日本でも世界でもフェミニストたちの抵抗は残念ながらなかった。けれどもこの次起こる大戦には、最も敢然と抵抗するのは、新しい意味のフェミニストたちであろうという気がします。

婦選運動と戦争

フェミニストといえは思い出すのは市川房枝さんのことです。昨日は市川さんの本葬でした。お通夜や追悼会ときには、まだひつぎの中で、呼べば答えるような感じがした先生が、小さな骨箱に納められて、高い壇の上に祭られているのを仰ぎ、大事な時に大事な方を失ったことをしみじみと悲し

みました。

市川さんが最晩年、最も強く主張していらしたのは、戦争阻止でした。11・22集会デモの先頭に立つ先生の姿には、一種、鬼気迫るものがありました。もし戦争が始まろうとしたら、戦車の前に大手をひろげて立ちふさがる方だと感じました。先生の晩年の活動の最も大きな部分は、金権腐敗政治の打破に注がれましたが、それは、戦前、金権腐敗政治の中から軍部が抬頭し、戦争への道が敷かれたことに對する深い後悔がおりだったからではないかと思っています。婦人参政権を要望する大きな理由に「金権腐敗政治の打破と平和の護持」が掲げられていましたが、戦前ついに婦選を獲得できないまま戦争に突入してしまったことを、どんなにか残念に思っておられたのだろうと思います。同時にまた、「戦いに勝てば婦人参政権が得られる」という見返りをあてに、ある時点からは戦争に協力したことに對する、心からの贖罪の思いがおりだったのではないかという気がしてなりません。

戦争中の行動を理由に、今も市川さんを評価しない人びともいますが、私は市川さんの晩年の姿に素直に頭を下げます。しかし反戦を貫き得なかった当時の婦人運動の基盤の弱さを感じないわけにはいきません。一九三七年十月号の『女性展望』によれば、市川さんは、「ここまで来てしまった以上、行くところまで行くより他はあるまい。この時局困難にうちから将来の幸福を建設する義務がある」「婦選の実現は困難になったが、婦選を要求する目的は、婦人の立場より国家社会に貢献せんがため国家の非常時の突破に婦人が実力を発揮して実績をあげることはこれ即ち婦選の目的を達する所以であり、婦選を獲得するための段階ともなるであろう」と、戦争に協力することによって他日を期す心境を語っておられます。

△平等▽のための△婦人参政権▽を願って、あれほど果敢にたたかった先生はじめ、多くの婦人運動家たちが、この時点から一気に国家体制への協力を深め、婦人会の統制の先頭に立ち、大政翼賛会や大日本言論報告会などの役員となり、女の戦争協力の最も強力な推進者になったとは、いま考えたいと思いがたい愚行に思われますが、歴史のあとをたずねますと、当時の女の情況が、まさに被差別民族、被圧迫民族のそれに似ていたという思いを深くします。「戦争に協力すれば独立を」との甘言に

釣られて協力した例は枚挙にいとまがありませんが、飢えている魚ほど餌にとびつく例でしょう。あらゆる局面でおとしめられていた当時の女にとって、「男女平等」「地位向上」「女権拡張」の機会ということはほど、まばゆい餌はなかったでしょう。差別撤廃の条件として母性保護の切り捨てを持ち出されている今の私たちの情況以上のものを感じます。

しかし同時に、この時代の婦選運動が問おうとしていた△平等▽の中味に問題があったという気がします。この場合の△平等▽は、△男なみ▽になることであり、△男に代わって▽清潔な政治をすることだった。この発想の中には△女▽は見えていても△人間▽全体は見えていない。だから△人間▽がつくる社会の仕組みの根元が、そして当時の日本の国家の構造が、十分見えていなかったのではないでしょう。青鞥の流れをひく婦選運動では、早くから女性差別の構造を△家制度▽に認めながらも、その△家制度▽を最も強固に支えている△天皇制国家▽には目が届かなかった。そして、本来、最も激しくたたかうべき当の相手、△天皇制国家▽に、ついに逆に協力して取り引きしようとしたのではないのでしょうか。

もう一つ思い起こすのは、市川さんが第一次大戦後のアメリカでひとときを過ごされたという事実です。英・米など欧米先進国の婦人参政権は、大戦への婦人の協力、大戦中に女たちが実質的に銃後の生産を支えたことへの報償として国会でようやく認められましたから、いまここで協力すれば念願の参政権が得られるという考えがひらめいたのもむりもない気がします。参政権を得る目的である△平等▽が、△男なみ▽になること▽を目指していた当時の婦人運動としては、「女の實力を発揮する願ってもない機会」であり、「男なみの権力を得るまたとない機会」として、「男が支配権を持つ国家への協力」が、むしろ当然の論理になったのでしょうか。

こんなふうに、いま評論することは簡単ですが、人間は貧しい情況におかれているときほど、客観的情勢が見えないものだと思います。貧しいメキシコの人びとが、貧しすぎるがゆえに△平等▽のいいじさに気づかないように……。そのころの日本の女の情況は、戦後生まれの方には想像もつかないほど悪かった。そして、女の問題を考える人びとはほんのひとにぎりに過ぎず、それに対する反発も

すさまじかった。市川さんのあやまちは、そういう中での焦燥から生まれたと、私は解釈します。そのあやまちで恐らく最も傷ついたのは市川さんご自身だったでしょう。私は市川さんを非難し続けるよりも、市川さんの失敗を反面教師とし、恐らくはその失敗をかみしめていらしただろうゆえに、あれほど八平和Vにかけていらした晩年のお姿から、多くのものを受け継ぎ、市川さんが構築できなかった新しいフェミニズム、私たちのフェミニズム運動をつくっていききたいと思っています。

● 山川先生の抵抗

市川さんのことを思うとき、私はその三か月前に世を去られた、偉大な婦人問題研究家、婦人運動家、そして八あごろVの唯一の名誉会員であり、私自身も多くの影響を受けた山川菊栄先生のことを思い出さずにはいられません。

山川先生は市川先生のような戦争協力は決してなさらなかった。それどころか、体制側に回った市川さんに、実にきびしい筆誅を加えておられます。夫、均氏とともに、終始一貫社会主義者として、社会の仕組みそのものを考え続けておられた山川先生には、家制度と天皇制国家と資本主義の相関も当然見えており、戦争のおろかしさもむなしさも明らかだったと思います。けれども先生は、フェミニストとして反戦運動を呼びかけ、その先頭に立つことはついになさらなかった。東京を離れ、藤沢の奥でうずらを飼い、自給自足の生活が続けながら、やがて確実に訪れる敗戦の日を信じて待っておられました。戦争に協力するか、投獄されるか、後退して傍観するか、三つのうちの一つしかゆるされなかった当時あって、先生は死につながる投獄よりは第三の道を選ばれたわけです。恐らく心中、歯ざしりしながら藤沢で時を過ごされたであろう先生をお慰めするとき、私は心の中でこう祈ります。「先生、お蔭様で、時代はたしかに前進しました。私たちは、先生のなさり得なかった抵抗をして、必ず戦争を阻止します」と。

△平等▽を、階級闘争的な面だけではとらえない、また単なる女権拡張運動とも考えない、私たちのフェミニズムは、まず、自分も他人も、共に地球にただ一人の、かけがえのない存在としてとらえ、そのたいせつないのちが、共に生きること何よりの目標にしたいと思います。簡単に言えば、人権運動の中で、女だけは取り残されていた部分に特に光をあてて考えるのが、フェミニズムの意味ではないかと私は思っています。

先ごろ来日したベティ・フリーダンは、「女も徴兵を忌避しない。なぜなら男女は完全に平等であるべきだから」と言って私たちを驚かせましたが、私は彼女の基本にあるのは、相変わらず、「マイト・イズ・ライト、ライト・イズ・マイト」であるような気がします。力の論理を肯定する彼女にとって、△平等▽とは、△同じ力を持つこと▽であり、△いかに生きるか▽という視点が欠落しているような感じがしてなりません。その意味では、第一次大戦当時のアメリカの婦人運動からほとんど前進していない印象を受けます。彼女が強い発言力を持つNOW（全米婦人機構）が兵役登録に賛成したことに深い失望を感じ得ませんが、米国内には、ベティを過去の遺物、オールド・リブとして、彼女を乗り越えようとする動きも活発だと聞きます。私がコペンで話し合ったかぎりの世界の活動家たちは、もちろんNOWの決議には批判的でした。「守るべき△国▽とは何か」から問い直しているのが新しいフェミニズムの流れであり、△人▽を△国▽の下位には決して置かない考え方は、当然、徴兵に、そして戦争に、またあらゆるファシズムに、最も強く抵抗する力となっていくものと思います。

● 女がつくる悪い男

具体的にそれは、どのような行動と結びつくのでしょうか。

私は、東南アジアのある女性の、鋭い指摘を思い出します。コペンでの△あごら▽のワーク・ショ

ップで、質疑応答の口火を切ったインドネシアの女性のことはです。彼女は私の話の間じゅう、うなずいたり、そうだそうだと合の手を入れたり、終始サボーティブな態度を示し続けていたのですが、口を開くや、こう言いました。「なるほど、日本の女の情況が悪いことはよくわかった。しかし、それは日本の女が自ら招いているのではないか。インドネシアにも日本人が大勢来ているが、見ていると、主婦は男の子だけを大事にする。あれでは、横暴な日本の男が育つのも無理はない」

そのとき、東南アジアの女性たちから、共感の拍手がワッとおこりました。私たちは返すことばもありませんでした。現地の女子労働者を安く使い捨て、夜の遊びには大金を惜しまぬ日本の男。それは、日本の国内で私たちが男に許していることを、外地でもそのまま実行しているにすぎません。彼女が指摘したとおり、悪い男の蔭には、それを育てている女がいることを認めないわけにはいかなかったのです。

「下半身をむきだしにした女と撮った写真もある」と松井さんがおっしゃったとき、顔もあげられない気持ちがありました。それは日本の色町で行なわれていたことを再現したにすぎないのです。どんなにはずかしめられても男の言うがままになるはかなかった日本の女。平手打ちを受けても受けてもじっと耐え忍んでいた日本の妻たち。耐えることを美德とした女たちによって、日本の男は、「どんなことをしても許される」存在として育ち、それをそのまま戦場でも実行したのではないのでしょうか。

日本の女は、自分の夫や息子を軽々しく戦場に送り出した。だから女は戦争に加担したのだとか、千人針を作り、慰問袋を送って戦争を支えたと言われます。しかし、私は、女は、もっと本質的に戦争に加担したのだと思う。男女差別の構造を支え、男の暴虐を許し、横暴な男を育て、人間や、人間のいのちの大切さを忘れさせることによって、最も本質的な意味で戦争に加担したのだと思います。

今、企業の経済侵略を許し、出世する夫を誇り、買春ツアーに出かける夫を黙認する日本の妻たち。それは戦争に加担した戦前の女たちと、ほとんど大差がないようにみえます。戦争であれほどのつらい悲しい思いをしながら、そして戦後、比べものにならないほど女の教育は進んだのにもかかわらず似たようなことを重ねる日本の女。——戦争に行った人だけが悪いことをしたのではない。私たちは

何を、どう支えたのか。そこを掘り下げないかぎり、私たちは気づかぬうちに戦争の火種を育てていることになるのではないだろうか。だまっていることは、差別とたたかわないことは、戦争への道に加担することになる、と、心をこめて言いたいと思います。

● 事件に加担した私

それでは私自身はどれだけの努力を重ねているでしょう。自分自身の行動を痛烈に反省させられた事件がありました。

富士見病院の事件です。何百人もの女が、子宮や卵巣をむぎむぎと切りとられたと聞いたとき、身が切り刻まれる思いがしました。北野に対して憤りが噴き上げるとともに、この事件にまぎれもなく加担している自分を感じました。

△医者▽という権威を装った△男▽が、△超音波装置▽という権威を使って、「お前の卵巣には膿瘍がある」と宣告したとき、女たちはあわてふためき、無条件に信じてしまった。この事件の背景には、△男▽や△権威▽にいつも無条件に従っている無数の女たちがいます。女の運動にかかわる一人として、私は何をしていたのだろう……。

いま、働く女の平均賃金は男の五四・九%。この現実には、私たちはあきらめ過ぎてはいないでしょうか。「女は低くてあたりまえでしょう」と公言する女の人さえいるほどですが、そういうおかしさを許している日常のうえに、あの事件は起こったと私は思っています。そして、戦前はさらに強かったこうしたあきらめの日常のうえに差別はいっそう増幅され、それは戦争へのエネルギーになっていった、と、いましみじみと感じます。

もう一つ考えたいのは、日本の中の差別は男女差別だけではないということです。沖縄・朝鮮・部落・障害者・貧しい人・学歴のない人、すべての弱者に公然と加えられている差別とその根は一つであり、戦前はこれらの差別も、いまよりさらに大きく、そうした土壌のうえに、ひとにぎりの指導者

によるファシズムが成立したのだということです。△人間が人間をだいじにする▽ということが日本の社会の基本にならないかぎり、戦争はまた起こるのでは、と心配します。

●
なぜ、いま原発を

カンカンに怒ることばがありますが、去年の秋、テレビで、「カンカンに怒るとはこういうことか」と思うほど怒っている顔を見ました。松井さんがさっきおっしゃったテニヤンの首長さんです。からだをブルブルふるわせて彼は叫んだ。「危くないのなら、なぜ日本のそばに捨てないのですか。もしもテニヤンのそばに捨てたら、日本人の墓、みんな引き抜いて海に捨てます！」

怒るのもむりはないと思いました。核廃棄物を南太平洋に捨てるとは、早く言えば、南太平洋の人は死んでもいい、病気になってもいい、ということですよ。いま日本には、核廃棄物がドラム缶に二十八万本もたまっている。このままでは日本の人命にどんな影響があるかわからない。といって、よそに捨てればいいというものではないはずですよ。ここにも戦争中と変わらない日本の姿を見ます。何という恥ずかしい、そして何という恐ろしいことでしょう。

南太平洋を選んだ政府のおえら方の中には、昔ながらの△土人の島▽という意識があつたのではないでしょう。女差別と同じように伝統的な、日本の中の人種差別、階級差別。それが残るかぎり、日本はまた確実に戦争への道を歩むことになりましょう。△共に生きる▽という△平等▽が根づかないかぎり、戦争の火種はくすぶり続けると思うのです。

この騒ぎの発端となった核廃棄物がなぜ生まれたか。いうまでもなく原発です。政府は八五年までに三千万キロカロリーの原発は「ぜひとも必要」と言い、自民党の綱領には「原発反対運動を紛砕する」という、恐ろしいことばが盛り込まれました。こんなにまでして原発を作らねばならないのは、高度工業化のためであると同時に、原爆の材料であるプルトニウムが核廃棄物から得られるためです。しかし日本人はこうした恐ろしい事実をほとんど知らされていません。富士見病院の患者さ

んたちが何も知らされていなかったのと同じように。このままでは、子宮どころか、気がついたときには心臓が切りとられていることになるでしょう。真実を知らそうとしないどころか隠そうとする努力に、私は心からの憤りを感じます。知らない人間をだますのは、赤子の手をひねるよりも簡単なことです。

●
大地に根ざして考えよう

「日本はなぜあんな戦争をしたのだろう。あの戦争は何だったのだろう」と考え続けて来た、と最初に申しましたが、からだじゅう真っ黒に△戦争▽への配線を敷かれ、△死ね▽とプログラミングされた人間が生き直すためには、その原点を考えるほかなかったのです。

戦後、自由だ、民主主義だ、と、空がばーっと明るくなるようなことを言われたときも、私は「信じるものか」と思っていました。もうだまされなくなかったのです。どうすればこれからはだまされずにすむだろう。自分の中の黒い部分を消していけるだろう。

そういう苦しい摸索の中で女の問題にめぐりあい、一つ一つの現実とぶつかりあって、私はやっと生きる方向に少しかじを向け変えることができました。△女の自立▽とは、△女が生きる道▽だというふうに、いま私は理解しています。自立していない女はだまされます。経済的にも、精神的にも、自立してこそ、女の生きる道は確かになります。自立する女を△翔ぶ女▽などとマスコミは茶化しますが、私は、自立する女は△最も翔ばない女▽だろうと思います。大地に根ざし、しっかりと大地を踏みしめて歩く女。自分で自分の配線をし、自分の考えでプログラミングする女。そして最終責任を引き受ける女。日本の女がすべて△自立する女▽になったとき、おろかな戦争を阻止する勢力は、少なくとも国の半分に達したことになると思います。

「権利の上に眠るな」とは、市川さんが言い続けたことですが、無数の人びとが死に、無数の人びとを殺し、多くの女があやまちをおかしてやっと手に入れた私たちの憲法、私たちの参政権を決して

眠らせてはならないと思います。

● 差別撤廃はいのちを守る運動

私は五十を過ぎましたので、私の中の黒い部分はやっと五分の二に減りました。しかしまだ五分の二も黒い部分があるということはやはりまだとても生きがたいことです。私は毎朝自分に「きょうも生きよう」と呼びかけ、はげまして、やっと生きています。たとえ百まで生きたとしても、私の中の黒い部分は約二割残ったままです。自分の中には、生涯、生きがたい部分が残る――。

私は長い間、その黒い部分を消そう消そうとしてきました。しかし、もう消すのはやめようと思うようになりました。

ふたたび近づいて来た戦争の足音。へ共に生きるVことを圧殺しようとする巨大な権力。それに対抗するのには、よほどの覚悟がなければできません。決して消さない黒い部分、決して消えない黒い部分をしっかりと見すえ、それを反戦のバネにしようと思うようになったからです。

昨年日本も署名した『女性に対するあらゆる差別撤廃に関する条約』は、一九六七年の『女性に対する差別撤廃に関する国際連合宣言』を拡大したものです。さらにさかのばれば一九四五年の国連憲章が出発点です。もう二度と戦争を起こすまいと、第二次大戦の戦勝国が集まって作ったこの憲章には、戦争の原因である人種・民族・宗教・国の大小などによる差別と並んで、性差別を解消するところがつきりうたわれていますが、これはドイツのユダヤ人差別、日本の女性差別を、共にファシズムの源泉として認めたからだといわれます。そして、この、「あらゆる形態の差別撤廃の精神は、国連憲章をモデルにした日本の憲法にも盛り込まれています。女性差別撤廃へ向けての運動は、一部のはね上がった女の運動のようにとかく誤解されがちですが、人間のいのちを守る運動であり、憲法の、そして国連憲章の真髄にまさに副うものであることを、声を大きくして叫びたいと思います。

「女は母性があるから戦争に反対する」という言い方がよくされますが、戦争中、△母性▽がどんなふうにご利用されたかも、よく覚えておかなければならぬことの一つだと思えます。戦時下発動された『女子挺身隊制度強化方策要綱』では、十四歳から四十歳までのすべての女子の徴用を義務づけましたが、結婚している女性には除外されました。△母性▽が尊重されたからですが、その△母性▽は、我が子を△人間▽としていつくしみ育てる△母性▽ではなく、△陛下の赤子▽を産むための△母性▽でした。そしてその△陛下の赤子▽たちは、△陛下▽を、そして△国▽を、守るために、赤紙一枚で召集され、△人間▽としてではなく△弾丸▽として死んで行ったのです。

いま叫ばれている「家庭基盤の充実」には、この意味の△母性▽を感じます。知らないうちに、黒い配線が張りめぐらされようとする危険を感じます。

「戦争をするのは男で、女は戦争をしない」という言い方にも、やはり問題があるように思えます。近代戦は老若男女すべてを巻き込むのですし、戦争は、参政権を持ち、国民の半数を占める女の合意なしには議会制民主主義の国では開始できません。また戦争は力の論理だけで行なわれるものではなく、基本には欲望、特に経済的欲望があります。日ごとにエスカレートする物質的欲望。夫の出世戦争を支え、出世に直結する受験戦争に子どもを駆り立て、間接的に企業の経済戦争を支える妻たち母たち。便利さを求めてやまず、たとえば中性洗剤の恐ろしさを知りながら、なお使い続ける女たちの行動様式の中には、戦争に向かう道があると感じます。

最も恐ろしいのは、一步一步と戦争に近づきながら、近づいている当人たちが知らないことです。そして、今度起こる戦争がどんなに残酷なものになるかについての皮膚感覚がないことです。戦争は

時代が下るにつれ残虐なものになっていることは歴史が証明しています。第一次大戦で毒ガスの残虐性にあきれ、それを禁止した人びとは、第二次大戦では核兵器を使用しました。そしていま、さらに残虐な兵器を、着々と作り続けています。空に満ち満ちている軍事衛星は何をするのか、きもが冷えるほどの気持ちで受けとめている人は何人いるでしょう。

黒い配線は、人間の健全な皮膚感覚をマヒさせる配線です。そして気がついたときは人間をかなしばりにしている配線です。

さつき松井さんは、日本兵の残虐について長々と語られた。しかし私は、あの黒光りしていた兵隊さんたちの顔を忘れることができません。私と同じように、黒い配線をびっしりと敷き込まれ、「死ね、殺せ」とプログラミングされて、一個の機械と化して、殺し、死んで行った人たち。あの人たちが悪かったとだけ言って、彼らの霊は眠ることができるでしょうか。天皇や首相が靖国神社にお参りして、彼らの霊は救われるでしょうか。

残念ながら、戦前の日本の庶民は、黒い配線の恐ろしさを知らなかった。存在さえも知らなかった。だから私は、自分の中の黒い部分を消さないことにします。決して消さない、消えない、黒い部分を見つめながら、いま敷かれようとしている黒い配線に抵抗していききたいと思います。殺し、殺された、敵味方、数百、数千万の人びとが、せめてあの世で人共に生きられるV日を祈って。

(あごら編集部)

(一九八一年二月二十七日あごらV講演会「女と戦争」より。時間不足のため省略した部分を加筆しました。)

ティーン
PART I

女と戦争

宇井 純

東京大学工学部助手

井ノ部美千代

地方公務員 私たちの雇用平等法をつくる会会員

北沢 洋子

アジア太平洋資料センター理事

駒尺喜美

法政大学文学部教授

斎藤千代

あこら編集部

佐多 稲子

作家

婦人民主クラブ委員長

島田 信子

主婦 草の実会会員

谷内真理子

フリーライター

山屋 光子

きもの学院院長
独婦連会員

編集部 この24号の編集会議を重ねる中で、若い人たちから何よりも強く出た意見は、どうしてあんなバカバカしい戦争をしたのかどうしても理解できない、そこを知りたいということでした。で、今夜はまず、「自分にとっての戦争」を語って自己紹介していただきながら、そのへんから考えてみたいと思います。最年長でもあり、いちばんご苦労もなされた佐多さんから、どうぞ。

隣に泣いて戦争へ

佐多 そうですね。どうして戦争が起こったかわからないという若い方たちの考えが、戦前と戦後の日本の相違をはっきり語っていると思うんですね。今の方たちはハッキリとバカバカしい戦争とおっしゃれるでしょう。しかし戦前は、そういうことは言えなかったわけですね。そういうことを思っている人もかなりたくさんいたと思いますけど……。

私なんかも、アメリカを相手にして戦争にふみきるってことはどういうことなんだろうという思いはしたわけですが、もう戦争に入ってしまったとね、階級闘争をして

いた人たちの一部には戦争反対の活動があり、私なんかもその活動をしてきたんですけど、大変不自由なことを経験する——簡単にいうと弾圧、それは左翼思想だというふうにきめつけられる。国民の声とは受け取られないわけですね。そして戦争に入っている。私、そのことは今、ほんとうに知っていただければいいと思う。つまり、現在を、きょうを、自覚する意味で大事だと思えます。

その前、大東亜戦争に入る前から、戦争はズーッと続いていたわけで、赤紙で召集された隣近所の人があんな戦争に行く。それは、戦争反対の人にとっても大変な重圧ですよ。簡単に言いますと、私なんかも、確固たる理念をもって戦争反対を貫くということができなくなる、そういう現実。隣の人が戦争で死んでいったなあということに対して泣いてしまいうわけ。女の涙で流されたなあというのを戦争中の大きな反省の一つにしているのです。

編集部 そのときおいくつぐらいだったのですか。

佐多 四十にはなっていない、三十いくつです。

編集部 とすると、ちょうど女盛りのときで、お友達なども、夫と引き離されているという問題があたりだったのではないかと思うのですが。

佐多 終戦間近になると中野重治でさえ召集されたんですけども、その時分には友達がどうとかというよりも隣近所が……。隣近所っていうのは、私、今、ほんとうに考えとなくちゃと思うんですね。

編集部 『あこら14号』のインタビューでも、「隣がこわい」とおっしゃってますね。で、そういう中で、個人的にはどんなことをなさってらしたのですか。

佐多 私の場合は、まずジャーナリズムとの関係がありますでしょ。ジャーナリズムから誘いがあるわけですね。軍隊の慰問に行ってくれないかと。それにまず入っちゃったの。さっき言ったように、簡単に泣いてますからね。隣の家は戦争に行つて、その奥さんは戦争には行けないわけでしょ。そんなら私が見てこようかっていうふうな……。おこがましい話ですけど。

編集部 で、そこでごらんになったものは？

佐多 たとえば中国へ行ったときも、夜明けに帰ろうとすると、「おおう……」という声が

聞こえるの。それがなんか、日本へ帰っていきける私たちに呼びかけると同時に、日本へ呼びかけてる声なんだと思うとつらくってね、泣いてしまうというふうなことでした。目の前にぶつかれば泣いてしまう。戦争の本質が何であるかということを私なんか知ってたわけなのに、そういうことでした。

戦地で座談会なんかもしたんですが、普通の商売なんかしてた人たちが、「帰ったらもう、うちの商売はできないんでしょかねえ」って心配してる。その片一方では「自分たちはもうここで死ぬ。ここが死に場所だから、ここをきれいにしておく」って。ここで死ぬんだという覚悟の一方で、帰ったら商売を続けられるかと心配している、そういう人間の姿も見ました。

最後には南方にも行きました。徴用という形でしたけど、女ですから、いやだと言えば断われたわけですけれど、一度それに乗ってつらいことに関係したりすると、なんかもうそれでずるずるといってしまうということですね。戦争の本質を知っており、反戦活動をしてた人間がそれに参加したのは、隣近所の現実のありように左右されて泣いてしまったということだと思います。そういうと大

変きれいごとみたいですけどね、実際そうなんです。だから「食うために行っただろ」みたいなこと言われると、私、ほんとうに腹が立つの。食うためだったらどうだって食えたんですから……。周りの状況が切迫してきますとね。つらいですよ、戦争になると……。品川駅で子どもをおぶった女の人が列車の中の夫を探してホームを走ってる。ああいう状況が、どこにもここにもあったわけですから、私、その前に文化活動で起訴されて、検事に「君なんか戦争に行く兵隊を軽べつしてるんだろ」って言われたとき、「いいえ、私、泣いてます」って抗議したのを覚えてます。

編集部 敗戦の時にはどこにいらして、どうお感じになりましたか。

佐多 鷺宮（東京）にいたんですが、中学生と女学生と三人の子どもを疎開させてなかったんです。なんかこう、疎開していいのかしらっていう気があるんですね。みんながこれだけ苦労してるんだから一緒にいようというような気がして。原子爆弾が落ちましたときには、私の考えで東京に子どもを置いては子どもに申しわけないかな、と思ったのを覚えてます。「敵機は一機だけでも用心しろ」

なんて放送があるんですよ。「みんな肌を出すな」って。で、暑いのかいままき着て、肌出すなって子どもたちにも言いながら、そんなことを考えてました。

私たちの耳には、終戦の三、四日前から戦争はやめるって話が入ってましたから、十五日の放送はそうショックではなく、戦争が終わったという安心感だけでしたが、占領されたら大変な状態になると思ってた。それはキューリー夫人の伝記でポーランドが占領されたら母国語が使えなくなる話などを読んでたものですから、これからどういふことになるかと覚悟したのを覚えています。

「聖戦」を信じてひたすらに

島田 私は一九二六年生まれですから、十五年戦争がちょうど学齢期と全部重なってます。終戦は郡山の軍需工場で迎えたのですが、戦争のほんとうの全体の姿は、ベトナム戦争になってわかったという気がします。なぜかっていうと、国の中では被害者の面しかわからない。自分の父親や兄や恋人たちが外地でひどいことをしてるなんて全く知らされ

てませんでした。「聖戦」という言葉をね、今思うとほんとにくやしいけど信じ込んでました。初めて爆撃を受けたころも、「もし空襲になれば工場の機能をこわしに来るので、人間を殺しに来るわけじゃないから、建物から離れたところに逃げれば助かる」って話し合ってたんです。「鬼畜米英」なんて、言葉として言っているけど、戦争の実体を知らないからすごくヒューマンなものがあるみたいに思っていて、実際の空襲のとき、みんなグラウンドにくもの子を散らすように逃げたら、そこをめったうちにやられた。私は物ごと遅いもんですからもたもたして飛び出し遅れて助かったんです。つまり、私たちは、戦争についてのは軍人同士の戦いだと思い込んでた。その頃のニュースでは民衆が逃げまどうところなんていっさい出ないし、日本がそんなひどいことをするとは全然知らなかったんですね。ベトナム戦争のアメリカ軍のやり口を見て、ああ日本の軍人もこうだったんだろうな、と、はじめて視覚化されたのです。

私には好きな人がいたのですが、文科系の学生が戦争に行くことになったとき、学校をやめて帰郷し「自分の生きているというあかしを、何とかして残したい」と当時の代用教

員になり、六十人の教え子を持った。「二十一年の生涯」ということをすごく言いましたよね。それをどう自分自身に納得させるかというところで苦しみもがいてた。万葉を読んだりいろんなものを読みあさって、いよいよ戦地に発つ前になったら、「自分の気持ちはいくら静かだ」と悟ったみたいな歌を残して発つて行っただけです。ほんとに悟れたのか？誰のためでもない、愛する人のために自分には行くんだったという納得の仕方を自分にさせなければならなかったんじゃないかと思うんです。これからの若い人たちに、あんな思いは絶対させたくないですね。

編集部　じゃ、敗戦のときはホッとなさったでしょう。

島田　ええ、ほんとにうれしかった。だって四月十二日に空襲を受けて以後は、毎朝水さかずき。ほんとに戦地に行くのと同じ気持ちで家を出て行っただけですから、ほんとうにうれしかった。くやし涙なんか全然出なくて、生きのびられたって実感で、バンザイしたかったですね、いのちをおびやかされる重圧感というのはたとえようがない。

佐多　私の息子もそのころ工場へ行ってまして、そこに爆弾が落ちるわけね。親は手を合

わせて落ちないようにおがんでるわけ。だから、ほんとに助かった！という思いね。

降下する爆弾に屈辱を感じる

駒尺　私は島田さんの一つ上なんだけど、全く何の意識もない、いわばミイハで、島田さんと同じように戦争の全貌も何も全然知らなかったんです。

先ほど、若い人たちが、「なぜバカバカしい戦争に入ってたかって言ってる」という話がありました。が、「バカバカしい」というふうに見えるのは、今私たちがその戦争を批判できるし、そういうことを大きな声で言っても誰も今のところ手も後ろに回らないからなので、大多数の人が「こうだ」と言っていることを「ちがう」というふうに見抜くのは、ものすごくむずかしいと思うんですよ。

たとえば今、女の解放なんかやってる人たちは「男も女も働いてて、なぜ女が家へ帰って炊事しなければならんのか」と言ってるわけですが、五十年前先の女の人たちが見たら、「なんであんなバカバカしいことを女の人たちはしてたのか」とおそらく言うと思うんで

すよ。だけどそんなこと言われても、今、現実にバカバカしいことの真った中にいる人たちは、バカバカしいなんて思っていない。やるのが女らしいことだと思つてやつてる。バカバカしいと思つてるのは、ほんの一握りの人だけで、ほとんどの人は全く刷り込まれてるわけです。さっき「聖戦」なんて言葉聞いて、「そんな言葉もあつたなあ」って思ひ出したんですけど、「この戦争は間違つてる戦争ですがやりますよ」なんていう人はいないわけですよ。みんな「正義の戦いだ」とか「大東亜共栄圏」だとか、つまり「聖戦」だと言うわけですよ。それだけ刷り込まれると大多数の人間には、そうとしか見えないんですよ。たとえば現在受験戦争だって、バカバカしいと思つてる人もいるけれど、それをもそれを止めることはなかなかむずかしい。まして自分の子がいたら、やっぱり「ちょっといいとこに入れようか」つてね（笑）やるんじゃないかと思うんですよ。つまり現状に乗っからないでいることは口で言うほどたやすくはないと思いますね。

私自身はミューハリーの立場でしたから、いい意味でも悪い意味でも知識も思想もなかったの、戦争反対という考えも持てなかった

けれど、逆に戦争謳歌とか賛美もしなかった。ただただイヤでしたね、戦争は。それはまさに生物の本能ですね、何のイデオロギーもないから。反対のイデオロギーもないけど賛成のイデオロギーもないんですよ。ただ、自分の好きなことがやれない、そのことだけですごく腹を立てた。

私自身はすごい空襲にあつて、今ここで生きてるのがふしぎなくらい……。大阪なんですけど、家も全部焼けたし……。

今、若い人たちに戦争のことを話しても全然通じないけど、それは当然だなあつて思うの。戦時中だつてこういうことがあつたんです。私の家は大阪の第一回の空襲で焼けたんだけど、その晩家にいなかったの、私は直接の経験はしなかった。そして自分が直接空襲の経験をしたのは、その後、友人の家で何人かが集まっていたときでしたが、その時警戒警報が出るやいなや一緒にいた一人の友達が「とにかくどこでもいいから逃げよう」つて言うのです。私はまだ空襲警報も出てないし、ここでやられるかどうかともわからないのに「この人何言つてるのかなあ」と思つて、私は応じなかったのです。彼女は泣きそうな顔して、「逃げるいなね、逃げるいなね」つて言う

なり一目散にかけ出したんです。後で聞くと、その友達はその前の空襲で一晩じゅうパンやられて、道頓堀の川の中につかつてたけど、いくら水をかぶつても顔がさらしていられないほど熱かつたんですつて。それを経験していたからすでに焼跡になつてしまつてゐる所へ向かつてとにかく逃げたんです。その時彼女と一緒に逃げれば私は死に目にあわずにすんだのですが、私がバツと一緒に行動できなかったのは経験しなかったからなんです。だから恐ろしいことだと思ひますね、体験してないつてことは。

私の場合はあらゆる意味で「ねばならぬ」がないから、ただただ生物的に、私の命をおびやかすものに對して、ストリートな怒りがありました。怒りというよりも、ものすごい屈辱感を感じたのを覚えてます。戦争なんて私と関係がないのに、無抵抗な人間がなぜこんな目にあわなければならぬのかと思つたのをありありと覚えてます。周りの人たちがどんどん死んでいく。次の瞬間私が死ぬんだ、次の瞬間は「あつ」私の番だつていうふうに思ひながら、その時のくやしき、屈辱をどこへ持っていきようもない。それは「鬼畜米英」に對してではない。日本もアメリカも含めて、

戦争する者に対して、いわば戦争そのものに対する屈辱感でした。

隣の人もみんな死にました。一トン爆弾とか機銃掃射とかね、パンパンやられましたね。あつという間ですよ、常識では考えられないんです。「あつ」と言っただけで外へ出たらもう真つくらで、昼の日中なのに手をつながないと横の人が見えないんです。道路まで燃えていました、もう想像を絶しますよ。ほんとうに恐ろしいですよ。この次の戦争はそれどころじゃなくて、「あつ」と言ったら、もうみんないないかもしれないですね(笑)。

編集部 学生さんだったのですか、そのときは。

駒尺 早生まれだったものですから、十八で女専を出ましてね、それで挺身隊にとられそうになったので、必死になって挺身隊の令書を発してるところを探したら、区役所から来るんだって考えついたので区役所に行って、「実は私はここに勤めたいんだ」とかいろいろ言っただけで、とうとうそこに勤めたんす(笑)。

ミーハーとしては、「自分の家の屋根だけ白旗あげたい」とか、「疎開させてもらえらんならアメリカへ疎開したい、日本だどこに行っただけで危ないから」と言っただけ。する

と「この戦争に勝たねば」と、鉢巻締めてた友達が泣いて怒ったんですね。「あなたは負けた国のことを知らないから、そういうバカなことを言うのよ」と。それから、「あ、こういうことを言っちゃまずいんだな」と思っただけで、全然言わなかったわけですよ。

編集部 じゃ、もちろん敗戦の時はうれしかったでしょうね。

駒尺 どんなにうれしかったかって、うれしい顔をどうして隠すかっていう感じでしたな(笑)。みんな泣いてるのに。

軍隊勤務を楽しんだ十八歳

山屋 私は十八歳で終戦です。敗けてくやしかった。ちょっと頭が弱かったのかもしれないけど、戦争って悪いことだって全然知らなかったですからね。あとになって、あ、これは私たちの受けた教育のすばらしさだなんて思いましたね。すばらしいって意味は、悪いほうにすばらしいってことですけど、とにかく徹底して教育されたのです。

育ったのは北京なんですけど、戦争ってこんなにひどいものかと思ったのは、引き揚げ列

車の窓から線路工夫を見たときです。つるはしふるってるのがみんな日本人、駅で荷物がついでるのも「あ、日本人」という感じで……。

佐多 日本に着くまで大変な思いはしなかったんですか。

山屋 割合運がよくて、あんまり大変な思いはしなかったんです。三月一日が女学校の卒業式で、三日には全員集合です。「全部、報国看護婦として任命する」と言われました。

女学校で半年ほど陸軍病院に行って看護の教育を受けてたんです。勉強は半分で、半分は看護婦さんのまねをしてた。うれしくて行ったり帰ったりしてたわけです。

で、三月三日に全員集合。雑のうって、兵隊さんの下げる袋に、下着二、三枚と歯ブラシなんか入れて集まった。この時、何の疑問もないんですよ。「あ、命令されたから行くんだな」——そんなもんです。いまま思えば単純なんです。それで集まりましたら、ちょうど朝香宮が天皇陛下のご名代で北京大使館に来てまして、そこまでたんだかたんだか歩いて行きました。「はづつの響き遠ざかる」と歌いながら。その時の写真をたまたま朝日の記者が持っていて、この前見せてもら

ったんですが、無邪気な顔して歩いてるんです。その行進を、親は駅のホームの向こうで見てたわけですがみんな泣いてるんですよ。私なんかは「サヨナラサヨナラ」(手を振る)って、こうでしょ(笑)。で、その日から報国看護婦になったわけです。

看護婦には三種ありまして、日赤、陸軍、報国。報国が一般人のわけです。で、一か月ぐらい教育を受けたんですが、楽しくてしょうがない。全然悲しいなんてことない(笑)。夕日が沈むころに汽車がポーッと向こうを通るんです。そうするとみんな「わーっ」て三十分くらい泣くんです(笑)。で、それでもう終わりなんです(笑)。「食事だあ」って号令がかかってみんなで行って、食べると疲れますから寝ちゃう。非常に無邪気で、かわいらしいからって、われわれの部隊は、「萌黄隊」って名がついてたんですけど、あんまりにぎやかで、別名「雀隊」になっちゃったんです。十七、八のころっていうのは無邪気だったんですよ。

私の所属した部隊で知ったことは軍隊ってすばらしいものだってこと。なぜかという上、上官は部下をとってもかわいがるんです。ちよっと具合が悪くても看病してやるし、上官

と部下の愛情を毎日見て、すばらしいなあと思ってたんです。

終戦の前の月ぐらいになって傷病兵がたくさん前線から帰って来ました。みんな自分の親みたいな年なんです。その、お父さんみたいな人たちが、夜になると泣くんです。それを見て、死ぬ時「天皇陛下万歳」だなんてうそだなあって思ってたんです。

私なんかお下で、先をちょっと上に上げて、ちゃっちゃか、ちゃっちゃか、かわいかったんでしょね(笑)、歩いてると、手をぐっと握るんです。握って五、六秒ぐらい離さない。それでいいんですね。あとずっと寝るんです。そういう年配者たちを見て、日本はどうなってるのかなあと思ってたんです。

少しよくなった人は行軍するんですけど、あとでわかったんですが臨時に召集された人たちですから軍靴が痛いんですね。革のカチカチの、片方で二、三キロありますから、はだしになって靴持って歩くんですね。「日本にもこんなカスの男しかいなかったのかなあ」って思ってたんです(笑)。

でも戦争には罪悪感を全然感じないし、早く終わりたいとも思わなかったし……。終戦の日はずごく暑い日で、「みんな集合」って

言われて、何かわかんないけどガーガーって放送が終わりました。そしたら「戦犯だ、戦犯だ」っていう声。私、「戦犯」っていう言葉も知らなかったんです。だって敗けた時のことなんて教えられたこと一度もなかったですからね。

「戦犯って何」って言ったら、日赤の婦長さんが「戦争に負けた者が首を切られることだ」と言うんです。「こりゃ大変だ」って思いました。それが私の、ほんとうの戦争の終結の瞬間だったんですね。

おかしいな、と思ったのは、現地解除されて家に帰って来てからですね。『東亜新報』の社説を見たら、デモクラシーのことが書いてあるんです。昨日までの軍国のことが何もなく。『デモクラシーって何だろう』って考えたら、とたんに私の生きていく道がわからなくなりました。昨日まで戦争ってことだけしか教えられなかったのがこんなに急に変わっては、価値観ってどこにあるんだろうと思った瞬間から、私は無抵抗主義になりました。すべてが新しいもの——なんですもの、今までのものを全部否定しよう。新しいものを十八歳からまた勉強し直さなければならぬのかって、そういうすごい不安で、生き

ていく道っていうのをまずは失ったような心境でしたね。昭和二十年のその瞬間だけが、私にとつては戦争であつたし、終戦であつたし、人生の転換だったわけですよ。

そして、その日からの私は戦争加害者であつたことに気がついたわけですよ。「知らなかつたんだから」で済まされない重大なことを私は犯していたんだと、今は自分の仕事（きもの学院経営）のなかで、せめて、今かかおつている人びとと一緒に戦争、戦後をかみしめかみしめ語り合うようにしています。私の犯した罪のつぐないになれば、との思いからでもあるんです。

死ぬことを刷り込まれた世代

斎藤 今の三人の方と私は同世代なんです。が、ほんの半年一年ちがつただけでも、またいた場所がちがつただけでも、戦争の受けとめ方はちがつたなあとつくづく思います。特に感心するのは駒尺さん。わずか一年上なだけなのに、そのころから自立した女がいたことに感嘆します。私は単細胞でしたから、完全に刷り込まれた口で、「死して後やむ」み

たいに思い込んでいました。八月十五日は大泣きに泣いて、町に出たら「ああ終わつてよかった」という声がする。そのほうに石を投げたかつたくらいですよ（笑）。くやしいという単純な気持ちじゃない。死んでしまった人たちはどうなるのか、私たちのこの必死の思いはどうなるかというやりきれなさでした。

私は十六の時に一人で上京して、学校の寮に入つてたものですから、完全な情報封鎖、一方面的な刷り込みだけされちゃつたのです。ね。聖戦だ、アジアの解放戦争だつて、思い込んでました。たしかにそのころベトナムは仏印、インドネシアは蘭印でしたし、中国には租界があり、「犬と支那人は入るべからず」なんだと聞かされてました。阿片戦争やセボイの叛乱の話も小さい時から叩き込まれ、欧米の侵略からアジアを解放しなくてはという一念で凝り固まつたのです。

三月十日の大空襲の翌朝、深川の動員先に急ぐ途中で、いやというほど死人を見ました。日本は負けたなアと思う、だからこゝで死してなお戦うべし」と思つたのです。元来、大変すなおで、二十一になつてはじめて親にイヤつて言つたくらいでしたから、教えられたことはみんなそのまま信じ込んでたのですね。

私の両親は軍部が大きらいで、ものごとこつたところから、「軍部の横暴」という会話が親たちの間でされていたのを覚えてます。学校から慰問袋を持つてこいって言われたとき、日ごろ温厚な父が激怒しまして、「学校が先頭に立つて慰問袋を持つてこいとはもつてのほかだ。決して持つていくな」と言うんです。しかし、学校では、親の口上を言つてはいけないうなふんいきがある。「忘れました」と言つて立たされてたのです（笑）。その親が、ある時点から突然、出征兵士の見送りにも行くようになりましたし、慰問袋もつくるようになった。なぜだろうと、ずつと考へてたのですが、きょう、佐多さんのお話を聞いて初めてわかりました。隣に泣いちゃつた口だったのではないかと思うのです。十二月八日の放送を聞いたときは、父は一時間ぐらいいだまつて、「日露戦争が始まつたときと同じ気持ちだ」とポツンと言いましたけど、どんなに勝ちめのない戦いであるにせよ、宣戦の詔勅が出て始まつてしまつた以上は大国を相手に死力を尽くさなくては……、そのへんですり変わった気がするんです。佐多 そうそう。だから始まつちゃうと大変……。

齋藤 一度も反抗することなしに流されたのなら、途中でおかしいと考えたかもしれないし、生物学的な本能が働いたかもしれないけれど、あんなに軍部を嫌っていた親たちまでが協力するのを見て、もう疑うということはいっさいしませんでした。それについても恐ろしいのは情報管理と教育ですね。「意義ある戦争のために死ぬ、死ぬ」と植えつけられて、ある日突然「方向転換しろ」と言われても生きる方向には向かえなかった。「あなたはどうしてそんなに滅私奉公するんだ」と周りの人たちに怒られても怒られても、その意味がわからなくて、ほんとうの意味で気がついたのは、やっとこの二、三年のこと、という幼稚さです。ただ、あの戦争は何だったのだらうという思いはずーっとあり、それが女の問題を考え続けていく中で、最近やっとドッキングした、という気がしています。

軍事戦争だけが戦争か

編集部 五十代の四人の話が続いたわけですが、北沢さんはちょっとお若いんでしょう。北沢 敗戦の時十二歳、女学校の一年、今の

中一です。

戦争体験はほとんどゼロです。私にとつては、敗戦と、その後の二年間の引き揚げ体験のほうが重要なんです。

私は大連にいました。父は軍医だったんですけれども、すぐ戦争をきらっていて、生きのびることばかり考えていました。大連は物が豊富で子どもたちも飢えないですむしということでとどまっていた。一度も空襲にあわなかったし、東京では羊かんが食べられないと聞いて、ウソじゃないかと思ったほどです。修学旅行がベストの流行で——いままえば細菌戦だったんじゃないかと思いが——中止になり、奉天と新京に行けなかったのが残念だったぐらいの記憶しかなくて敗戦なんです。大連というのはいわゆる満人——中国人です——が住んでいてることを知らなかった。もちろん女中などはいったのですけど、人間扱いされていなかった。自分たちと同じ「人間」だと思っていなかったから目に見えなかった。それが敗戦になったら、一度に彼らが浮上してきた感じでした。完全に主客転倒、二年間、地獄みたいな生活でした。食えるものがなくて……。ロシア軍が来て、

最後に中共軍が来て、二年後にやっと引き揚げて来たんです。その間、ほんとうに文字どおり食べものがなくて、紙でも食べたいなァって思ったりしたこともあります。ですから今でも家では残飯処理係。それでこんなにふとっています(笑)。

で、私にとつては戦後の体験のほうがきついわけですが、戦後は一九五〇年のサンフランシスコ条約のころ左翼運動の高まりがありました。ポツダム宣言だとか憲法だとか徹底的に教えられたほうで、今でもそらんじてるくらいですけれども、しゃくにさわるのは、それを教えた『世界』の文化人とか大学の教師たちが今日では向こう側に行ってしまったこと。その時思想の受け手だった私は、今、次の世代への送り手の側にいるという意識を持たねばならなくなりましたが、そのころの送り手だった言論人たちの変わりようというのは、戦争中何か言っていた人の戦後の転換ぶりを想像させるほどで、非常に腹が立ちます。当時の私は、原爆反対運動とか母親大会とか、五〇年代の「平和と民主主義」の下働きに使われて、徹底的にこういうものだと、か、ああいうものだとか教えられて、そのとおり忠実に言ったり行動してたのですが、私のそれ

までの戦争観が変わったのは、五九年にエジプトのカイロの「アジアアフリカ人民連帯機構」の国際書記局に行つてからです。この書記局はそのころ、国連が米ソの拒否権の投げあいで終始して、アジアアフリカの民族解放運動を援助する国際組織がないというので、当時民族主義の旗手だったエジプトのナセル、インドネシアのスカルノ、インドのネールなどによつて設けられたものでした。

私は、ここに勤めて、はじめて戦争というのが二つあることがわかつたんです。一つは小さい時に経験した戦争、支配する側の戦争です。つまり帝国主義の戦争です。もう一つ、民族解放のための正義の戦争があることがわかりました。カイロの十年は、すべて、この民族が、抑圧・支配から自らを解放する戦争の連続でした。ですから、日本にずっと暮らして、とくに六〇年代の八平和なV高度成長期を過ごしてきた人たちとは、戦争観が少し違うのです。カイロでは、私は原爆禁止の運動を代表するものとして、「平和運動」の重要性を言ひます。そうするとアフリカ人は、「戦中、日本だけが原爆を受け、同じ枢軸国が、ファシズムなのにドイツやイタリアが受けなかったことを考えてみないのか、白

人だから米国は原爆をドイツやイタリアに落とさなかったのだ。日本人がそのことを問題にしないのはどういうことなんだ」って言うのです。被爆体験を平和教育で語り継ぐというのは大事なことなだけけれど、第三世界の人びとにそのまま語り継ぐことはできないんじゃないかって思うんですね。私たちは支配者だったわけだから、もう少し戦争の中味を考える必要があると思うんです。

今、さかんに軍備増強の必要性がいわれていきます。戦争が起こるとしたらソ連が相手かもしれない。右翼が言うようにソ連が攻めてくるのだったら、極端に言えば私はゲリラで戦えばいいと思っています。

文化革命のころ、北京に二年いました。日本人と一緒に見学に行くと、絶対に日本が悪いことをしたとは言わない。太原のトンネル戦の跡を訪れても、攻めてきたのは「国民軍だった」と、案内する人は言うのですが、同じところに今度はアフリカ人のグループに一人加わつて訪れると、すさまじいのね、ほんとのことを言うから。大連の経験と一緒になつて、ほんとにいやな感じがしました。日本人であることがすこく恥ずかしくて……。

もう一つ感じたのは、ある国際会議でのこ

とでしたが、第三世界の人たちが「戦争で爆弾や銃で殺されることと、飢えで死ぬことと同じだ」と言いました。むしろ飢えでジワジワと殺されるほうがひどいと言うのです。そして、飢えを作りだしているのはこの豊かな社会の搾取だということです。私たちはどんなに貧乏したつて食べられるわけだけど、第三世界に今起こっている飢えは、これから何世代にも影響してくるものである。つまり飢えは原爆で殺されるのと同じようなものです。

その飢えを日本人が作り出しているということをいやというほど知らされたのは、七四年に南アフリカを旅行したときです。ここでは日本企業は同じ非白人でありながら、白人と一緒になつて黒人を飢えの賃金で働かしています。南アではトヨタ自動車は欧米の車よりも売れてる。私たちがこうやって豊かに暮らしていること自体が第三世界に植民地支配や侵略戦争と同じような被害を与えているってことを、若者たちに何とかしてわかつてもらいたいと思っています。

今、若者がシラけるって言われます。私たちも戦後、アブレゲールなんて呼ばれて自分でも結構シラけてましたね。当然でした。たとえば敗戦まではすごい軍国主義の体操の

教師が、敗戦を境にソ連軍が進駐してきたら
労組の委員長になっていたのを見たりしたから
(笑)。今度は、その彼が引き揚げ船でまた
すごい右翼になって査問大会など開いてどな
っていた。だから人間なんてよく変わるんだ
なと……(笑)。それで今のシラけの連中って
のもわかる気がするんですが、私の若年時代
と違うのは、人間に対するシラけではなくて、
生活・社会に対するシラけであることです。
だから危なっかしい気がしてしょうがない。
子どもたちに、「飢えの時代が来たらどうす
る」なんてよく言うのですが、「また始まっ
た」(笑)。ぐらいにしか思っていないらしい。
で、私は残飯処理してふとる一方、子どもは
好きなものしか食べない。

人間疎外と正比例する 戦争への道

宇井 北沢さんと同じ歳です。やはり中一で
敗戦を迎えました。日本の農村ですから、あ
んなり衝撃はなかったし、だいたい何となく
負けるだろうという感じはしていました。広
島に新型爆弾が落ちたついでというとき、その構
造はこうじゃなかるうかなって議論は一応し

てたほどです。その後は飢えのほうに気をと
られて、衝撃というのはあまりなかったのと
す。ぼくらの世代は、たしかによく教育され
たものだと思いますね。敗戦の日まで「聖戦」
を全然疑わなかった。それが次の日になると
先生方が逆のことを言います。どうも世の中
が変わるもんだなという感想を持ちましたが、
それがだんだんわかってきたのは実は最近で
す。大学を出てしばらくしてから公害の歴史
を調べてみると戦前のほうがかなり進んでい
て、戦争で帳消しになっている。水俣病の最
初の見舞金は死者で三十万円というべらぼう
に安いものです。それは戦時中は人間の命が
タダだったからです。その後長い間——昭和
三十九年まで、公害反対運動は、やれば必ず
負けた。人間の命がタダみたいな中では必ず
負けるということがわかって、戦争のいたで
がこういうところに響いてるんだな、という
ことが、理屈としてようやくわかってきた段
階です。

去年、北沢さんとインドの会議に行ったと
き、東南アジアの代表と議論したら、日本の
軍事費の増加に実に敏感なんですね。ぼくら
は〇・九%が〇・一%ふえて一・〇%になっ
ても、そうたいした差ではないと、日本にい

ると思うのですが、東南アジアのほとんどが
軍事政権かそれに近い体制の下で、軍隊が上
から抑えている。その背後に日本があって、
その日本の軍隊あるいは軍隊の費用が一割ふ
えるっていうことは、現体制の大きな支えに
なるというんですね。そう言われてみて、こ
れは大ごとだとわかってきました。

それから、やはり公害の歴史を調べてみる
と、足尾銅山の運動など、戦争が近づくとだ
んだん下火になっていく。企業が強くなる。
戦争直前になると、企業がカサにかかって被
害者が門前払いをくらっている。国策とい
うものが出てくるときは物騒だな、と思う。と
ころが志布志や沖繩に行くと、「これは国策
だから抵抗できないんだ」ということが日常
的に議論されている。石油を貯えたのは国策で
ある、と。それには二つの面があって、「国
策だから抵抗できない」というのと「国策だ
からそれに便乗して金をもらっているれば安全
だ」という言い方が必ず出てくる。だから、
これからの一番大きな争点は、国という言葉
に代表されるような非人間的組織と、私たち
一人ひとりの勝負だろうという気がしている
んです。

素直で当たりまえのことが

通らない

編集部 戦前・戦中・戦後派、それぞれの戦争とかかわりが語られたわけですが、戦無派の井ノ部さんや谷内さんはいかがですか。井ノ部 私は一九四八年生まれ、ベビーブームの二年目ぐらいに当たるところで、戦争については育つていく過程で親の話を聞いて、そういうこともあったのかと思った程度で、ある意味ではピンとこない部分が多いのです。こういう時勢になってきて、四十代五十代の人たちがすごい危機感を感じているのに比べて、自分たちの危機感はあるのです。でもリタイがないということがあるのです。同じように知らなくて、上の言いなりにやっていくにしても、やられ方がちがうんじゃないかという思いがすくしくします。しかし戦前の大変な時代を過ごして来た方がたのいろんな話をお聞きしたいし、自分たちがこれから同じようにならないためには何が必要なんだろうということを考えていきたいと思っています。

私は足立区の職員ですが、足立区は花畑小学校への転校を要求する団体に対して、去年の春は区が区役所の前にバリケードを作り、裏と表に職員を配置させました。区から動員が命令されると組合はそれに対してウンと言ってしまったんですね。戦後、民主主義で育った人たちが一言の動員命令で、何の抵抗もなくビケを張ったわけですよ。きょうからまた座り込みをやっているんですが、今度は組合が賛成せず、動員できなかった。すると、「あんなバカバカしい、おれもいやだったよ」って言っているんですよ。戦後といってもあまり変わっていないんじゃないかみたいな恐ろしさをすごく感じています。私は男女差別反対など、女性解放運動に取り組んでいるのですが、差別なくするのは当たりまえだと思ってるけど、いつ、どんな形で、向こう側の思うところにすり変えられちゃうかわからない。ほんとに素直で当たりまえに思っていることが向こう側にどのように利用されるのかというあたりをもう少し突きつめていきたいと思っています。

谷内 井ノ部さんより一年早い、昭和二十二年第一次ベビーブームの、まさにその年生まれ。プレハブを建て増し建て増しの学校教育の中で育ち、「戦後の若者は」と言われ続け

てきた世代です。何しろ人数が多いから、物ごとハッキリ言わないと自分がここにいて何を考えているということがわかってもらえないというんでしょうか、それに民主主義、多数決ということをやたらに言われて教育されましたから、その意味ではまさに戦後民主主義の申し子なんでしょうね。しかし、そんな私たちが育ってきた時代でさえも、いろんな差別はあったし、それに対して「おかしい」と言うとか徹底的に叩かれましたね。それに、ハッキリ物を言わせておいて、「素直でない」とか「中庸って言葉知ってるか」なんて結構ふるい道徳も幅をきかせていましたね。そんなわけで「民主主義だ民主主義だ」というけれど、いったいほんとうなの」という思いがありましたので、一所懸命本を読んだのです。

佐多さんのご本とか、佐多さんと同時代の方がいかに弾圧されたかという本をかなり小さい頃から読んだので、何だか私も戦争体験があるような気がしちゃう(笑)。普通、母親からきかされる戦争体験っていうのから入るのでしょうが、私の場合はちがった。もちろん食料がなかったなんという苦労話は聞いていたけど、あの戦争がいったい何だったのかなんてことは話してくれないし、こちらもあま

り期待しない。そこを本から入ったことでかえってクリアに戦争の本質がわかったとか、いろんな悲惨なことがあるけれど、もっと大きな人間性に対する侵略という悲惨がある、これはたまらないという部分にストレートに導かれたんです。「母親たちより、戦争つてものがわかった」なんて、若い日々には思ったものです。などと言うと大変傲慢不遜な言い方かもしれませんが、ただ、私は、もし私がつと前の時代に生まれていたら、おそらく敗戦になるまで戦争の真の姿なんて見えなかっただろう、それが私のような平凡な者でも年端もゆかないころから戦争は悪いという認識を持ち得たというところに、戦後生まれの幸運と、責任を感じるということを言いたいわけですね。

私は、戦前戦中のどんな小さなエピソードを耳にしても、それがどんな時代背景で言われたり行なわれたりしたのか、年表をひっくり返して見ないと気が済まないんですが、そのようにして太平洋戦争だけではなくて、日中戦争、もっと前のことも見ていく。この作業を繰り返しているうちに、明治なんて気の遠くなるような遠い時代だと思っていたのが、ほんとに身近な感じで、しかも、当たり

まえの話ですが、ちゃんと出来事の間につながりがあるってことに愕然としたんです。

それに、もっと若いころは十年二十年という時代の流れを非常に緩慢に思っていましたのに、三十にさしかかりまして、その十年二十年という時の早さを痛切に感じるようになりました。それで、あっこれは、危ないって。暗雲などといったのんびりがめてはいられない。

もう一つ、去年コペンハーゲンの婦人会議に行ったのですが、最後に平和行進をしたのです。日本で活動している方のノーモア・ヒロシマのブラカードの片端をかついで歩いていたので、その時突然、栗原貞子さんの詩を思い出したのです。「ヒロシマVというとき、AああヒロシマVとやさしく答えてくれるだろうか」って。その詩を思い出したとき、ノーモア・ヒロシマとだけ言っているのかと、ハッと思ったんですね。あの会議では誰も、日本だけが被害者ではないということとを突きつけはなさいませんでした、日本に帰ったら、反戦を掲げる以上は、詩の後半にある「捨てたはずの武器をほんとうに捨てねばならない」ということに真剣に取り組まなければならないと思ったんです。今でも決

してバラ色の民主主義なんかじゃない、敗戦の時を境にして戦前からの連統の部が脈々としてあった、ここを見きわめて私の世代でできることをしなきゃと思いました。

△戦前Vだとは決して言うな

編集部 このへんで、最近の状況を検証してみたいと思います。12・7集会のアンケートを見ますと、いろんな地域で、防災訓練にかこつけて住民台帳が徹底的に作られたり、子どもをどうやって連れて帰るかというので地域の女性が全面的に再編成されるような動きが具体的にあらがっているんですね。戦前の婦人会の動きというのは、これに近いものだったのでしょうか。

佐多 戦前と今と似て来たという言葉が、このごろたくさん聞かれるんですが、私は、戦前と同じだとは言いたくない気持ちがあります。政府や、古い勢力や産業界が、常に戦争の方向に持っていくというのか、憲法改悪の雰囲気を作っているというのかとはありますが、戦前とは絶対ちがうんだという気がありますね。戦前と同じだって言うてしまっ

たらもう負けです。戦前は何も抵抗しなかったんですから。今は私たちは全然ちがう憲法を持つてゐるわけでしょう。そこに責任も出てくるわけなんで、女と戦争の問題も大変重くなるんですけど、全然ちがうんです、戦前と今は。そのちがいをこそもつと言うべきじゃないかと思うのよ。戦前に似てゐるっていうのは、「今やらなければ」、「抵抗しなければ」という前提で言われてゐるということはわかるんですけど、そう言つちやたら敗北です。簡単な言葉で言つと、主権がわれわれにあるんです。だから戦争するかしらないかはわれわれが決めるんだという自覚をもつと強調したうえで反動的な言動を批判しないといけない気がするの。だって全く口ふさがれたままなんです。戦前は。今は言う権利を持つてゐるんですから。

今だって、言えば何だかんだということはいろいろありますよ。古いものがまだ継続してますからね。憲法だけが新しくなつても。だからこそ、ちがうんだって言いたくてしょうがないの。この間の12・7集会の時もほんとうにそう思った。今の憲法があるからこれができるんだと。

一同　そうですね。

佐多　だから憲法改悪なんか絶対にしちゃいけないって気がします。憲法がなしくずしに空洞化されてゐるのを指摘するときも、「これはわれわれの憲法なんだ」ということを前提にして言うべきだと思うのよ。そりゃ、ずいぶんなしくずしにされて、だいぶ押されてきてゐるな、という実感はあるわけですが、それでも戦前と同じだなんて言いたくないの。絶対ちがうんだって言いたい。私は戦前の弾圧も知ってますから……。

宇井　それから、戦後も一くくりにできないとつくづく思いますね。日本で公害反対運動が成立するようになったのは昭和三十九年以降なんです。その前に革新政党的運動や労働運動があれだけありながら、下層の人間のこゝには手が回らなかった。地域の自治、地域の進路を自分で決めようという議論は全くなかったんですね。六〇年安保もそういうところへはいかなかった。そういう経験をしてみますとね、上のほうが過激になつたり右旋回というようなことが起きて、全体の流れはそう簡単にくれないということを感じるんですね。公害反対の強い運動はだいたい女性をやつてゐるし、北沢さんが日本の企業の南アへの加担をすつばぬいた話を聞いて、これは

男じゃちょっとできないという感じがしたし、公害研究者でも第一線で有能な仕事をした人つてのは女の人なんです。こういう女性の動きは戦前にはなかった。あつたとしても婦選運動一本にしぼられていた。地域の自治の動きが出てゐるのは、戦後でもここ十年くらいです。簡単に戦前と同じとは言えないし、明治期に同じような時期を探すとすると、むしろ帝国憲法の出る前の、自由民権運動の時代がいくらかそういう感じがしますね。

戦時中の看護婦免状が

記録されている

山屋　戦前とちがうっていうのを感じたのは、四、五年前、戦後の体験を話したときのことです。私は戦後、米軍の農場に勤めたんですが、水耕栽培という清浄栽培で、砂利で作る。砂利は一回ごとに消毒して次のものを作るわけですが、その消毒はホルマリンです。それで砂利をこすつて多摩川に流すと、翌日ぐらいいは多摩川のアユが浮く。それを拾つて食べていたという話をしたら、若い女性たちが、「告発しましょうよ」つておっしゃるんです。「なんで告発するの、だってもうずつ

と前のことですよ」と言いましたら、「そういうことをやった事実は許せない」と言う。それを聞いてハッと思ったわけです。そのころの私は川下の住民にどれだけ影響があるかなんて考えてなかった。言われてみて、「ああ、これが今の日本なんだな、だから大丈夫だな」って思ったんです。

だけど、こわい話もあります。去年でしたか友人から電話がかかってきて、「あなた失業しても大丈夫よ」「どうして」って言ったら、「私、勤めたのよ、病院へ」って言うんです。「五十三歳で、よく使ってくれる人がいたね」って聞いてみると、職安に行って病院の雑役をするつもりで経歴を聞かれたので、戦時中、陸軍病院に行ってた話をしたら、「その免状をちょっと持ってきてください」って言われた。『報国看護婦、北京総領事、華山義親』っていうのですよね(笑)。それを持って行ったら、「こりゃ大丈夫だ、陸軍のだから」って言われたっていうんです。

もう一つ。私の本籍は岩手県だったんですが、県から来たんです。「あなたについて調査したい」って。「あなたは戦争中看護婦の資格を持って軍事に従事した。ついては年金の調査をしたいから」って言うんです。私も

おっちょこちょいなもんですから、「年金をもらえるなんて、これはもうけものだ」思ってたんです。だけど、日本もすごいなと思っただけです。昭和二十二年に帰って来て岩手県に出した資料がいまだにあつて、私は本籍を東京に移しているのに今の住所を突きとめて調査が来たなんて、日本はなんとすぐれた国なんだろうなんていまだに思うんですよ(笑)。とにかくこれはすごい、もしかして知らない人がいるかもしれないと思って、同級生に全部電話しようと思って女学校の名簿を出してたら、私のところに働いている三十五歳の女性が、「まあ恐ろしい、徴用されたらどうするんですか」って言うんです。若い世代の人は、日本の過去について読んで知ってるわけなんです。私は徴用なんて想像もしてなかったんですが、ゾッとしましたね。

支え合う仲間がたいせつ

北沢 今の日本には保守化が起こっています。この原因を考えてみますと、七〇年代になつてから。七三年秋、まず石油ショックがありましたでしょう。七九年にまた値上がり

しましたから、日本は大変な危機になつてもいいはずでした。実際同じ先進工業国でも、日本以外の国はどれも大変な不況に見舞われています。たとえばアメリカは二千万の黒人と二千万のメキシコ系に一番不況のしわよせをしています。白人の反共・人種差別がひどくなっています。レーガン政権の保守化は日本の比じゃない。また、ヨーロッパも、合わせて一千万人ぐらゐの第三世界からの移民労働者が底辺労働をひきうけてきましたので、不況になつて白人の労働者が失業しても職がない。底辺の労働者にならないのです。そこで、白人の反移民労働者、人種差別が強まっています。ファッショ・グループが、パレスチナ人・黒人・ユダヤ人などに、バリの町中で爆弾投げたりしています。

ヨーロッパや米国に比べると日本は経済成長率の伸びが落ちたと言っても、ちよつと生活落とせば何とかやっていけるし、物価も外国ほど上がらないのに、イデオロギーだけが右傾化しているのはなぜなのか。どうして自民党が圧倒したのか、私には明確に割り切れない。外国人になぜかと問いつめられると、すかつと答えられない。

だけど、日本も早晚ヨーロッパや米国のよ

なるんじゃないかと思っています。

早くも始まっている情報管理

うな不況になるでしょう。いつまでも輸出が伸びるわけじゃないし、生産性が高いったって、限度があるだろうという気がするんですけどね。政府とか自民党とか財界の首脳部にはそれがわかって、不況がやってきた時に予想される民衆の反乱を抑えるために着々と管理体制を固めているというのをとても強く感じます。私のようなチャッポケな物書きのところにも、素性の知れない未来予想アンケートなどといったものがよくくるし、思想調査じゃないかと思ったりして。むきつけに天皇についてクーデターというふうになるのか、そうじゃないもっと上手な管理体制をつくるのかな、と考えちゃうんです。

私、一時は家族制度反対だったんです。学生ころ、試験勉強の時に、母に「女の子だから、お茶わん洗いなさい」なんて言われると、洗うけれどもくやくして涙が出て、「あんなそんなに泣きたいほどいやなの」など言われまして。家族なんていらぬ。一人でも頑張れると思ったんだけど。今は、反対に、年をとったせいかもしれないし、子どもを持つたせいかもしれないけど、家族とか仲間とか、そういうところから抵抗しないと、戦前一人ひとりバラバラにされてやられたように

島田 私は戦前と同じ情況がすすんでいると思うんです。もう相当、女の人が組織化されつつあるんですよ。たとえば、東電に「あかりの会」っていう主婦の組織があるんですけど、そこで竹村健一なんか呼んでる(笑)。竹村っていうと、私たちは笑うけど、中野のようなかなか革新的なところで、しかも消費者運動してるようなお母さんたちが「竹村さんが来るから行くわ」っていそいそと集まってくるわけ。仲間うちの連絡で行ってみたら、原発についてまるで一方的に言ってるから、私たちがつきつぎ質問すると、もう立ち往生しちゃうの。あの人は勉強してないから(笑)。ほんとよ。核廃棄物のことなんかどんどん攻めていくと、「すいません。今度勉強して来ます」(笑)って言うわけ。そしたら会を主催してる女の人たちが、あわてて陰で相談あって、「きょうは竹村さんの話を聞くために集まってるんだから、余計なこと言わないでください」って言う。「余計なこととは何

ごとですか、命にかかわる大問題でしょう」って叫んだんですけど、こういう集まりはもつともっとあると思うので、私たちの知らないグループの動きをかなり監視する必要があるし、やはりそうした現場に出かけて行ってみようべきことを言ってゆくゲリラ的活動をしないと間に合わないんじゃないかと思うんです。

この前のダブル選挙のあと、テレビで向かいあって出たときのこと、竹村氏、開口一番「私がさんさん、自民党政府は悪くないってことを言ってきたから皆がわかってきた。その結果がこの票だ」って。でかなり反論したんですけど、あとでテレビを見た友達に、「あんな何も言わなかったじゃない」って言われてびっくり！ ナマ番組だからこそストリートに伝わると思って出たし、発言もしたんだけど、コマーシャルがやたらに入ってたんですって。完全にやられたという感じ……。

山屋 マスコミの中でも情報管理が始まっているというのは、二年前ぐらい前から感じます。「独身婦人連盟と八月十五日」という話で出演することになり、事前の打ち合わせが三、四回あったんです。で、未亡人も独身婦人と同じような状態で一人暮らしをしているとい

う話をしたら、「未亡人の人を教えてくれ」と言う。未亡人団体を教えたんです。ところが本番になったら、未亡人たちでいっぱいなんです。夫を亡くして雄々しく生きてきた、子どもを育てた、という話が延々とあつて、向こうは七、八人、こっちは二人で、こっちの話す時間は五秒もなかった。それでテレビ局と大げんかして、テーブル引っくり返して帰ってきたけど（笑）。

一人で生きていくということにおいては、未亡人であろうと独身であろうと同じはずなのに。戦争に加担した人たちが、死んだってことで美化されてるんですね。

佐多 そう、そう。

斎藤 いろんなグループにおかしい風潮が見え始めてるって話でしたが、注意しなければならぬのは婦人学級ですね。私、去年コペンに行つてから考えを変えて、助言者などを頼まれると行くことにしたんですけど、話を聞いてほんとに驚くことが多いんです。リーダーの研修会などに行きますと、「この頃の若いお嫁さんたちは困つたものだ、パートにばかり出たがつて婦人学級に來ない」という話が必ず出るんです。「パートに出て困るって言うけど、人間誰しもおもしろいところに

行くんじゃないですか。家にいればどんなに働いても無償だけど、パートに出れば報酬をもらえる。つまり人間として評価される。パート労働そのものは問題があるにしても、女が人間として評価されたがるのは当然じゃないですか」って話すと、「はアーっ」ってびっくりされるんですね。そんな話は一度も聞いたことがなかったと。そこで合宿などしていろいろ話し込みますと、最後のリポートは、みんな「女性差別が原点」といった話になる。それでほんとにこわくなるんです。リーダーはちょうど四、五十代、戦時下の教育を刷り込まれた世代で、疑うということを知らない。「ことしの文部省の方針は……」なんて、必死になってノートをとってるのを見ると、涙が出て来ちゃう。まさに自分自身の姿を見るようで。私は辛うじて女の問題を考え続けて来たから目が覚めたけど、そうでなかったら同じことだろうと、同世代人としてとてもよくわかるんです。

そうした婦人学級に、文部省から毎年膨大な予算が出てます。婦人学級のほかに家庭学級というのもあるので、婦人関係予算が増えなかった今年、それだけは増えている。家庭基盤の充実です。これはよほど気をつけ

ないと、ファシズムの温床になるのではないかと心配です。

佐多 戦前、婦人会はどうだったのかってどなたかおっしゃったけど、私、農村のことは知りませんが、都会では婦人会つてのはそれほどのはなかつたのです。それよりも隣組のほうが実際の効力を発揮したのです。あの時分、女は何も権利を持つてなかつたから。今は女が選挙権持つてますから、女に対する組織化が意識的にされてきてるし、されていくだろうと思う。女がどうも変てこりに目覚めると、向こうは思うわけです。「だから女は気をつけなさいといけない」と、女に対する働きかけが強くなるんじゃないかって気がしますね、私は。

谷内 選挙の時、自分の支持してない事務所へ、つとめてのぞきに行くんですけど、ご近所の奥さん方が「ボランティアです」って感じてつめてる。そのへんの重要さを知ってるのは、むしろあちら側だって感じます。どの候補も、党をあげて研究会をやってるんじゃないかってくらい、主婦たちを上手に手玉にしている。本当に心しないと思えるみ利用されてしましますね。この間亡くなられた市川房枝さんも、痛恨をこめて、選挙権を持った

女たちが、世の中を悪くすることもありうるとおっしゃっていますね。

佐多 だから隣がこわいんです。隣の奥さんがこわいんです。どんどん向こう側に組織されていく。しかもその人の夫が戦死したらこちらは何も言えない感じになります。今、女は特にならわられてるっていう気がしますね。

敗けてもいいとひらき直ろう

駒尺 戦前とちがうポイントは、新憲法と選挙権だと思っんです。それが逆にいうと、どっちにでも転ぶわけですよ。女が選挙権持つてるにもかかわらず自民党が圧勝してる。それをどう動かすかってことが問題だと思っんです。私のとこによく来る人で反戦の活動家なんだけど、「一番弱いとこは、たとえばどこかの国に攻められたらどうするかって聞かれたとき、攻められたっていいじゃないって言えないってことだ」って言うんです。だいぶ前はよく、「どろぼうが来るのに戸締まりしないアホがあるか」って言われてましたよね。私も以前は、それをはねかえす簡単明瞭な答えがほしいと悩みましたが、今は、

私は「いいじゃない。敗けたお陰で選挙権もあるし、大学にも行けたし、平等とか民主主義とか言われるようになったし……」って言えます。少なくとも女は「敗けてもいい」とハッキリ言ったいいといと、ある日パッとひらめいたわけね(笑)。万一攻めてくる国があっても、初めから手を上げればいい、女は敗けて結構、と、こう言いたいのです。それにしてもテレビとか強力な媒体の主導権は全部握られてるし、こっちはお金がないから、軍拡反対、憲法改悪反対をどういう形でやっていくか。たとえば私は独婦連と若い人たちと、二またかけて両方の間にいるような立場なんですから、そうした自分の属しているグループの人たちと一緒にやっていこうと思っんです。代議士なんかはアンケートをどんどん書かせて、軍拡賛成改憲派は誰れであるかの具体的なデータを流していかないと、ただ口で言っても弱いと思っんです。

斎藤 「敗けてもいい」と言うのはたしかに一つのすばらしい考え方ですね。失うものがない人間は何もこわくない。しかし、アンケートは、なかなか微妙です。この号でも婦人団体と女性解放グループに戦争をどう考えかって出したんだけど、回収状況が大変よく

ないんです。同盟からは白紙が返って来たので、「白紙回答ですか」とおたずねしたら、「回答しないってことです」と、強い拒絶反応でした(ヘエッの声)。「自衛隊は必要」という回答を持って来て、「これはほんととは出たくないんですけど」と、個人名を記さない旨、耳うちした方もいました。アンケートは、あくまでも個人の意見をうかがったのに、組織に気がねして本音が言えないという風潮は、やはり恐ろしい気がします。

さつき佐多さんが、「戦前と言ってしまっでは敗けてす」とおっしゃったとき、お言葉に何ともいえない思いがこもっていて、ズシンと胸に来ました。活字にするときどうすれば表現できるだろう、ゴシックにしても伝わらない、それ以上の重い重いお言葉だと思っただんですけど、それでも「戦前に似た状況が始まってる」ということは言っていかないと、いけないという気がするんです。情報管理、情報封鎖が始まっってからではおそすぎるので。

女差別を巧妙にくすぐって

北沢 それでも、今は、うまくやらなくちゃ

ならないという弱みが政府側にはあるわけでしょう。国際婦人年だから女性差別撤廃をとりあげなければとか。たとえば教育委員会の指導下にある婦人会は今まで体制的な人を講師に呼んでたのですが、国際婦人年以後は国際問題の講演などという、女であるということから私でも呼ばれるわけ。私は引き受けるのですがすごくむずかしいですね。ほんとに言いたいことを言っていくのが、日本がアジアを搾取してるって話を具体例を引きながら話をするのですが、聞き手の半分くらいはウンウンって言う。半分ぐらいいつまらなそう顔して、着物の特売なんかやってるほかに氣をとられてる。しめくくりは文部省天下りの教育委員長などが、「豊かな日本に住んで幸福だと思いますね」というようなことを言う。

だけど、そのなかで一人か二人は、「もう少し話を聞きたい」とか、「何を読んだらいいでしょうか」と聞きます。だからすごくむずかしいけど、ゲリラ的にこちらは相手の弱味を利用してやることも大切だと思います。私たち女の権利は戦前に比べて大きくなってるんだし、「女性の味方だ」って言わなきゃならない世界ができかけてるわね。国際

婦人年で、男女平等は世界の規則になったわけだから、講師も男ばかりっていうのもおかしい。九五％は向こう側で占められてると思うけど、五％でも利用できるって考えていかなきゃいけないんじゃないかと思います。戦前とは、たしかにそういう意味でちがうと思います。

佐多　そこを何とか少しでも広げていかない……。

北沢（やり口が）　すごくうまいんだから。男女平等っていうとすぐ政府は労基法改悪を出してくる。生理休暇はぜいたくだとか、女は深夜労働もしますか、というようにつめ寄ってくる。

井ノ部　すごくハングリーな部分をうまくすくって来て、主導権を持って先に解決するのは自民党の側なんだという感じで政策を出すんです。労基法研の報告や、家庭基盤の充実策なんて全くそうです。

なぜ革新が敗けたのかわかんないって北沢さんが言われたけど、ある意味では「革新がダメだからだ」と言っちゃいけないんだろるかという思いもあるんだけど。

宇井　同じ土俵で勝負しようと思うから苦勞する。「敗けたっていいじゃないの」という

のと同じ議論が公害問題でもある。「子どもの立場に立つたら、工場を呼ぶのがいいんですか、悪いんですか」という議論になると、「子どもの勤め口は増えるかもしれないけど健康は悪くなるかもしれない」という話になって、それから先行きっこない。男はそれができない。どうしても、町の財政がどうか、雇用がどうかということに氣をとられてしまう。大分県の臼杵で大阪セメントに勝ったときに漁民のおかみさんが言った。「男は頭が良くて先が見えるからダメなんだ」って。これは一つありますね。

また、中野の教育委員の公選みたいなのに勝って、「ちゃんとできたじゃないか、文部省があれだけ妨害したのに」って言うのは、これまた議論停止っていうか、これ以上言うようがない。だから、小さい例でいいからハッキリ見えるものを作つたらい。マスコミは向こうが知恵をしぼって考えてるから、同じ土俵で勝負するってのはむずかしい。むずかしいけれども、やりようによっては結構五分五分の勝負ぐらいいまでできる場所はある。たとえばこれからある婦人学級に行くんですが、「ゴミの中に入ってるプラスチックをどう減らすか」というテーマで、中味は多分、

軍備の問題でしょう(笑)。「竹村みたいのを
ホイホイ聞いてると、あなたの息子さんが徴
兵に引つ張られますよ」というのが結び……
(笑)。

すすむ管理体制

谷内 情報管理の問題がさつき出しましたが、
わかりやすい形ならいいんですけど、いろん
な意味で私たちの生活のすみずみまで管理さ
れてるような気がするんです。生き方でも消
費生活でも価値の多様化なんて言われてるけ
ど、選べるのはほんの上つつらの部分だけ、
その実はおしきせですよ。そのおしきせに異
を唱えることは、その人の生活設計の不利に
なるという構造が用意されてる。この管理の
網の目にとらわれていたくないと思うことが
必要だと思うんだけど、住民運動の一部に、
これは見習うべきだと思う動きは、いぶんあ
ると思いますね。

それから若者のことで、クリスタル族なん
ていうのが、すいぶんひんしゆくを買ってるよ
うですけど、駒尺さんが、ミーハーだったか
ら自由に生きられたとおっしゃった意味で、

そう絶望しなくてもいいと思うんです。むしろ
これからの行き方ではなかなかしんどいもの
ができるんじゃないかと思うこともあるん
です。ただ、「これだけは許せない」とって
ものがないと目に見えない管理の中に組み込
まれ、大きな手のひらの上で気づかないよう
に踊らされることになる。若者緊急会議でも
開いて、もう少し管理の構造をハッキリ見え
るようにしなければいけないと思うんですけ
ど。

山屋 管理体制は進む一方ですからね。

私の学校で行事をするとき公共施設を借り
るんですが、半日ぐらいけんかするんです。
なぜかっていうと、私の過去を知ってるわけ
です。といって別に前科があるわけじゃない
けど(笑)。「私はきもの学院の経営者である。
しかしこれは影の姿であって、ほんとうの姿
は女性運動に志している」と、雑誌の中で
一度言ったら、「女の人の学校でそんなこと
言っちゃまずい。繁盛しなくなります」なん
て言われたんでけんかして、別の所に行って、
今度は「私はスボーツやってます」と言うわ
けです(笑)。しかしこれでもだんだん過去が
知られて来て、「使ってはいけない」とは言
わないけど、「料金を倍にする」と言うん

です。利益を伴う行事だからってというのが大
義名分なんだけど、私の過去が何から何まで
書いてあるんですね。「お友達に樋口恵子さ
んがいっしょいますね。この方は比較的温
厚な方だけど、吉武さんは……」なんて、み
んな知ってるんです。そして行事内容の明細
を出さないと使用許可が下りないんです。そ
れぐらい、女の私がやることをマークして
るっていうのは恐ろしいと思います。

宇井 コンピューターというのは、一度入
れたらよう覚えてるから。この間、群馬県の
境町に行って、老人大学で講演したら、県警
の公安係が来ていた。聴衆がねじ込んだん
です。戦前の臨検じゃないかって言ったら、向
こうが「逮捕歴がある」とって言ったんです。
たしかにあります。水俣の補償処理の座り込
みで捕まったから、なるほどもうコンピュ
ターに入ってるんだなあと、大笑いになった
んです。そんなことを、税金で払う月給もら
って一生懸命やってる。

島田 A草の実Vでお金のかからない会場は
かり借りてたんですが、「核問題を考える」と
いう学習会をしてパンフを出したら、原発
反対がもりこまれていたから、それからもう
ダメ。全然借りられなくなりました。

山屋 その一方でもしろいんですよ。区民会館とかの公共施設では婦人が社会的な集まりをするには会場タダなんです。講師も派遣してくれるんですね。そういう制度ができたね。だから、さっきのお話じゃないけど、女に對してのをしぼってきてるんじゃないかと思う。

斎藤 だから婦人学級なんかも、官製のは悪い悪いとはかり言っていないで、どんどん進入していくというと思う。文部省の予算の八割は利用させていただくぐらいの意気込みでね(笑)。

谷内 ただ、あまり意気込むと警戒されますよ。深く、静かに、小まめにがいい。

男らしさが戦争を呼ぶか

編集部 次にフェミニズムと戦争について考えてみたいと思います。

駒尺 私は、女の立場からきょう一番言いたかったのは、さっき斎藤さんがおっしゃった、男女差別が根本問題だというあたりです。

戦争っていう原理はね、結局、力の原理だと思うんです。そして勝った者が正義だとい

う勝負の世界ですよ。ところが戦争だけでなく、男の世界っていうのは全部勝負の世界で、勝つか負けるかやっていると思うんですよ。その男の論理が戦争に結びつく。だから、コマーシャルで「わんぱくでもないいい、たくましく生きれば」って、男の子に言う。ガキ大将でもいいから男は負けるなって、子どもの時から仕込んでいく。ということは、つまりは、男らしさが当然戦争と結びつくと思うんですよ。その男らしさを、私は徹底的につぶしていきたい。やさしい男の子が増えてるとか、父親の権威の失墜はそれこそ歓迎すべきことだと思う。たとえば、ILOでも家庭責任は男女共にあるべきだということを提起していますが、その線を強力に進めたい。日常性っていいですね、育児をしたり、飯を炊いたり、洗たくしたりを、全部かかわっていく、徹底的に日常的にやるとしたら戦争なんて遠のくんじゃないかって思うんです。それは迂遠なようにだけど、案外効果的だと思うんです。組合のレベルでも、家庭のレベルでも、職場でも、また夫婦はもちろん、恋人に対しても、男らしさを粉碎して家事育児を男女共にやるという線と戦争反対をつなげたいということ、を非常に言いたいわけです。

斎藤 それはとても大事なことだと思えますけど、私の言った意味は、もっと構造的なものを考えているわけ。差別されている女があるということ——それは女だけじゃなくて、部落・朝鮮・沖縄・障害者・老人……すべてを含むわけだけど、抑圧者と被抑圧者の構造こそが戦争の構造じゃないかと、このごろずつと考えてるんです。力のある男の、力の論理が通って戦争になるんじゃないかって、力のある男が支配している、支配の構造こそが問題だと言いたいんです。

駒尺 力があるってことは、もともと力があるんじゃないかって、男は力をたくわえていくというか、それが男だと突っ張っていく、そういうふうな男が作られていくということ。だから、よその国からガンとやられるとか、やられるかもしれないというときに、男のメンツというか国のメンツというか、そういうことで戦うっていうふうにいくんじゃないかなあと思うんですよ。

斎藤 そうかなあ、戦争のメカニズムというのは、そんなに簡単なものじゃないと思いますけど。

駒尺 力といっても、私は金力、権力、知力すべてをいってるんですが、しかし私は戦争

の構造つて押しつめれば、強者が弱者を抑えて、強者がトクをしたいということ、つまり弱肉強食で、その原型が男と女の関係構造だと思ふ。男は強ければいいという価値観はもうまんえんしてると思ふんですよ。われわれの気のつかないところで、女のはうはそれにしたがっていくという、そういうセッットでつながっていくから、男らしいってこと自体が結局は勝負をさせることになるんじゃないかって思います。

井ノ部　でも、男らしさだけが一人歩きして戦争につながっていくんじゃないかって、もつと経済との関係とか、いろんな関係の中で男らしさとか男女の差別がうまく戦争への道に利用されていく……それが問題だと思ふ。ある意味では今の男の価値観を変えなきゃいけないって、すごくわかる面があるんだけど、駒尺さんの言われるように、攻めて来たら手をあげればいいってのは、私、ちょっとわからないっていうか……。私の父は朝鮮に行つて日本が支配してる、実に悪いことをやつてるのを目のあたりに見てるわけですよ。だから「日本にソビエトが攻めてきたら」という話がでると、すぐにかつての日本と朝鮮のことを思い出すらしいんです。価値観を変え

る必要性はわかるけど「逃げればいい」というのは、それは侵略する側に立ったときにはあまりにも自分たちを甘くする面があるんじゃないかっていう思いが私の中にすごくあるんです。だからむしろ北沢さんの言われたように戦争の中にもいろいろあるんだというほうが、私はむしろわかるっていうか……。

北沢　いま斎藤さんが、女の差別と、部落差別などを並べておっしゃったけど、私は駒尺さんの話と総合して言いたいんだけど、差別は差別でも根本的にちがうんじゃないかと思うのね。女の差別は駒尺さんがおっしゃったような男らしさを求める、自ら差別を求めている女の意識がものすごく強いと思うんです。その意味でなまじっか平等になると、問題だと思ふ。今、女性差別のひどい分野に法廷がありますが、こんなことを聞きました。

「女が検事になると、男の検事なら無期なのに死刑を求刑する」と。「こんなことなら男女平等にならなくてもよい。女はもつと人間を大事にする文化を持っているはずなのに」って。一方、強い男らしさを求める女というものもあるから、簡単にはいかないんじゃないかっていう気がします。差別部落・朝鮮人・韓国人の問題は、もう、そのものが差別され

てるわけだから根本的にちがうと思うのね。度合いの問題でもないと思うんです。私たちが自身が加害者の立場にあって、いつも豊かな生活というものがあつたから、その意味においては男と同じだっていうふうに私は思います。

女は差別されてるから運動がしやすいというふうな、なまやさしいもんじゃない。たしかに公害反対運動でも地域運動でも女は強いけど、女は出世しないから主婦になったら一生主婦だから、社長になれるわけじゃないから主張するのかもしれないけど、戦争に反対する運動を男対女にはすり変えられない——それは無理じゃないかって気がしますけど、どうですか。

駒尺　強い者が弱い者を支配して得をする、という構造において、性差別も戦争も同じだと私は思います。たとえばこんな例があります。政治的な運動でハンストをやったとき、男のほうには女房が見舞いに来た。終わったとき、女の友人が憤慨するわけよ。男は帰つたらあつたかいおかゆ炊いて待たれてるし、お風呂もわいてる。だけど私は冷蔵庫を全部カラにして来たから、ほんとに「へトへトだ」とつまり同じ解放運動をやつても、男は妻の上

にのっかってやっている。私の考えでいうと、資本主義国が弱小国を侵略するのと同じように、男が女を隷属させてただ働きをさせている。それは全部同じで論理構造は同じだから足元からつき崩そうというわけで、男らしさをやめさせればだちに戦争がやむとか、そんな簡単には考えてません。

斎藤 私も北沢さんのご発言に納得いかない面があるんです。たしかに女と被差別部落と沖縄を同列に論じられない点はあるし、女であつてもなおかつ私たちが加害者の面を持つことも明らかだと思ふんです。しかし女というのは、決して一つの階級としては取り出せない。いろんなところに細胞のようにバラバラに入りまじつて、階級問題になり得ないところに女の問題のむずかしさがある。そして、どの部分の女であれ、圧倒的多数の女は男に隷属している構造というものは、私はやっぱり戦争の論理と全く重なるような気がします。第三世界を抑圧する論理と同じじゃないかと、このごろ特にひしひしと感じています。

駒尺 私はハッキリ同じだと思つてます。いま、バラバラの細胞のように……とおっしゃったけど、金持ちの殿様に使われている奴隷も

いれば、すごく弱小の殿様に使われて困っている奴隷もいる。奴隷だって、毛皮着せてもらつて金銀で飾つてかわいがつてもらつてる奴隷もいるけど、奴隷は奴隷だと思ふんです。関係の構造としては、男の世界で差別されている男のまたその妻はさらに差別されている。どこまでいったって、一番下のまた一番下に妻がいる。論理構造としてはそういうことだと思ひます。

斎藤 全く同感ですね。

井ノ部 男に従属するものとして女がいる。女性解放運動がどんどん広がつて来ていま世界的になつてきてるのに、その力が日本では現に弱い。運動の側の弱さもあるけど、一方で差別を再生産していく構造があるわけでしょう、資本主義社会の中で。

駒尺 再生産っていうのは何？

井ノ部 要するに今の社会では、安い労働力を使うには男女の差別が固定化しているほうがいいわけでしょう。いくら平等になりたい、なりたいたと私たちが叫んでも、今の社会が女性の安い労働力を実にうまく使ひながらふとつていく構造があるから、差別も資本の意志として再生産される。やっぱり実際の運動となると、差別をなくしたい側と差別を再生産

したい側の力関係だと思ひます。

駒尺 高遠なところでうんぬんも必要だけど、まず身近な男たちに、たとえば子どもの世話に完全に半分は渡すというように、半分ずつ押しつけていきたいと私は思ふわけ。簡単には変わらないけど。

井ノ部 全くそう思う。しかし、具体的な運動になればなるほど「力関係」になつてくると思ひます。

女性差別の解消が

戦争阻止に結びつくか

宇井 運動の中で女性が本質的なことをハッキリ言うのは上昇志向を持ってないからです。だから駒尺さんの言うように、力の論理をこちらから捨てたらどうか。

戦争については、戦争努力という点でぼくらはもう大分踏み込んだやつてゐるんで、この戦争の準備をする作業つてのはもう力の論理でしょう。だからそれを捨てなきゃ、少なくともこつちは捨てなきゃならんだろうという気がしますね。

島田 子育てに夫も参加して……というのは全くそのとおりで大切だと思います。ただ、今、

女の現象の中に、受験競争で息子のおしりを叩く母親というのがありますね。いい学校、いい会社、そしていわゆる支配的な地位に立たせたいからでしょう。そのへんを女の方向が方向転換しないかぎり、差別・選別の、競争の歯車を断てないのではないかと思う。

谷内　むかし銃後の妻といわれたのと同じことが今もされてる。私たちの世代でもやっぱり大半は銃後の妻ですよ。経済的な自立も個の自立もおぼつかず、夫や子どものためなについて生活して。買春観光に出かける夫たちを暗に認めてしまうなんて、全く同じことですよ。

北沢　私は戦争は二つあると思ってるから、いつかは戦争しなけりやならないことがあるかもしれないと思うし、最終的に、人は抑圧されたことに対して反乱する権利があると思ってるから、反戦というのはおかしな表現だと思うし、無抵抗なんてことを認めないわけです。反戦っていう響きには平和主義みたいなものがあるから、私はそれを使いたくないわけ。

私が言いたいのは、もちろん男女差別をなくす戦いと有機的に結びつかなくちゃいけないんだけど、男女差別の中に解消されるよう

なもんじゃないってことを言いたいわけね。

やっぱり男も協力しなきゃいけないわけだし、男が理解しないかぎり反論を抑えることはできないと思うんです。その意味では女性の解放運動の特産物であるかのように言うのが、私には抵抗があるんです。たとえば日本でバートに出れば一時間五百円だけど、アジアに行けばもつとひどい労働で、16か110。そういうアジアの大変な人たちが作った安い品物をバーゲンで買うのがバートの人たち。

——そういう意味で、私は日本の中の女性差別はもつと国際的視野を持たなきゃいけないと思うし、ちよつと質がちがうんじゃないかという気がします。平等の闘いは必要なんだけど、子どもを夫に半分押しつけることによって、その子の受験教育の問題を解消できるかっていうと、ちよつとちがうでしょう、そこは。

駒尺　もちろん、男と女がそういうものを闘っていかなくちゃならないと思います。

北沢　相手に押しつけることだけで解消するんじゃないで、協力っていうことも必要だし。斎藤　押しつけるんじゃないで、一緒に育てようってことでしょう。

島田　ほんとうは楽しいんですよ、子育てつ

て。男の人にとっても。

北沢　一緒にやることはいいいことなんだけど、ちゃんと目的をもった政治的な運動なんだから、社会的運動なら社会的運動として展開しなくちゃならないわけで、その間を女性解放運動だけに解消するってことに……。

駒尺　北沢さんがおっしゃったことを逆に心配するわけ。つまり戦争反対とか、いろんな政治運動がワーッと出て来たとき、必ず、女の問題は第二次的な問題であって、主要な矛盾はこれだから、いま女の問題を出すのは政治性が低いとか次元が低いとか言われて、いづもいやな思いをしてるから、そうじゃなくて同次元の問題として同じふうに進めていきたいっていうことなんです。——まだ話し足りないんだけど、約束がありますので、残念ながら失礼します(退席)。

斎藤　北沢さんのお話うかがって、正直に言うところショックでした。第三世界の問題を考えている方は、女の問題に共通項を見つけてくださると思ひ、その部分で共通できると思ってましたので。

さつき女検事のことをおっしゃったけど、「女なら死刑にする」という断定に、まず抵抗がありますが、かりに女がそういう冷酷な

行動をとるとしたら、それには原因があるわけでしょう。女は簡単に言えば植民地の人間なんです。上昇志向を持ってない。持てないだけに代理上昇をはかる。夫のおしりを叩いて出世競争、息子を叩いて受験競争……。そして、自分がひとたび権力を持つとできるかぎりそれを使おうとする。だからそういう構造そのものを変えないかぎりダメだと思ふんです。しかもその構造は、資本家対労働者のように図式的にはつきり見えるものばかりではないし……。

宇井 頭の中に入っている意識の中にあるのですからね。だからそこを捨てたらいじやないか、つまり駒尺さんが、攻めて来たっていいじゃないかって言うのと同じように割り切ったらどうですか。少なくとも今は、それはハッキリ割り切れる問題だし、上昇志向についていえば、それはまず見込みがないということは客観的に言える。

井ノ部 上昇志向っていうと悪いイメージだけど、自分自身が自分のやりたいことをやるようになりたいとか、自分で働いて自分で生活するようになりたいって思ひは当たりまえにあるわけでしょう。女の場合、それをある程度やるうと思つたら、より男性的に、よ

り男の味方のような感じで、より体制側につくことによつて道を得る以外道はないという感じでしょう。そういう当たりまえの思ひを、じゃ、どうやって実現するのかっていうのが運動の課題であるはずなのに、むしろ持たないことだなんて言っているから、向こう側に逆に組織されるんだっていうこわさを感じます。

宇井 ところが学歴競争の上昇志向は、十年もたてば完全にくずれるってことは少し頭を冷やして考えればわかりきっていることなんで、子どもたちに投資してそれで食べようなんて思つたら絶対失敗する。それは今の医者がそうでしょう。十年後には確実に過剰になることは今の医者の教の動きを見ればわかる。

井ノ部 女はそんなにりっぱじゃない。ハングリだから何にでもしがみつきたいって思つちやうのが現実でしょう。

斎藤 生活のあらゆる面に女の問題がからんでますから、そんな、なまやさしいものじゃないんです。

宇井 なまやさしくないから、なおさら自分の選択責任で、ひとがやるから自分もやる……というふうなものに乗らなさいいいじゃない

か。それに尽きる。

井ノ部 個人としては乗りたくないし、乗らないようにしたいと思うけど、構造としてそういう人がどんどん出てくるのはなぜかっていうことを考えるべきだと思う。自分で食っていけない、自分を伸ばせない、そんな思ひが息子への期待なんかになっていく。抑圧された女の状況がその背景にあるわけでしょう。

宇井 そこで乗って行くから再生産されるんで、そこから降りることのほうがまだ見込みがある。

斎藤 それだけでは決して解決にならない。男も女も一緒に降りれば別ですが。

宇井 降りるだけで解決にならないなら、もっと突っ放して言えば、そこから先はあなたで考えなさいってことなんです。

井ノ部 自分たちの問題を自分たちでどうやって解決していけるのか、降りたらほかになん道があるのか、どうしたらこの現実を変えていけるのかというのを共に考えていくというところに希望を持っていけないと、「降りてから考えなさい」「悪いから乗らなさい」「では問題が解決しない。非常に個人的な、宗教者の悟りみたいな感じがする。」

「敗けてもいい」で

戦争努力を阻止できるか

宇井 その次に何を考えるかっていうのは、たとえばいま戦争準備の努力をつぶす論理は、もう、攻めて来たっていいじゃないかっていうのしかないと思うんですよ、さしあたり。

それから進学競争に対しては、ぼくみたいに「東大出ても万年助手」という実例があるんだから、学歴は役に立ちませんよ、というのをさしあたりの論理として出すしかない。

じゃ、どうしようかっていうのは聞いたほうで考える。それだけだったら多分差別の再生産になるでしょうが、それだけですむはずはないじゃないか。そこから先へ行くでしょう。井ノ部 だからこそ、その要因は何なのかと一緒に考えていこうとしているんだし、自分たちがどんどん課題を出していききたい。それと、女の人が息子を受験競争に駆り立てなくてもいい状況をつくるにはどうしたらいいかってのを考えていきたい。

宇井 自分の価値観が持てなくて、外にある価値観に合わせようとすると、乗って流され

ることになる。おっしゃるとおり上昇志向が持てないから代理にやってもらうんだけど、代理もできないってことがハッキリしたら、その次にはまた何か知恵が出てくるんじゃないか。

斎藤 全員がそういうふうに目覚めればね。そういうふうに目覚めないところに問題があるわけでしょう。女の、悪すぎる状況に対して、ちょっと樂觀論すぎるような気がします。

宇井 そうかもしれないですね。だけど今さしあたっての政治的状况を変えるのにはそういう議論ぐらいしか使えるものがないというところ。いろいろ考えてみたけど。

斎藤 私は、徹底的に一人ひとりが差別されないこと、差別しないことじゃないかこのごろ思うようになったんです。女が差別を許すことによって差別的の構造を支えている。だから東南アジアに行ったときに、より弱者を、今度は国とか企業という立場で差別していくんだと思うんです。戦地で日本の男があれだけ暴虐なことをしたのは、日本の女が、その根底で支えていたのだという思いが深いんです。

佐多 (聞きとれず) 戦争中に女が何をしたって？

斎藤 つまり日本の女っていうのは、長い間、やさしくて、だまって、耐えて……というふうに着てられて来ましたね。そうすることによって、男の横暴を裏側から支えて来たと思うんです。男は暴虐なことをしてもいいというふうに許して来たから、戦地でも暴虐なことをした。それともう一つ、兵隊は農村の次・三男以下が多かったわけだけど、同じ男でも彼らは日常的に抑圧されてる側ですね。だから自分より弱者を見たときに抑圧していった……。

北沢 戦争をしたのは兵隊じゃなくて軍部でしょ。軍部というのは当時のエリートですよ、東大出以上の。

斎藤 命令を出したのは彼らで、そこがいちばん暴虐なわけだけど、実際の行為をさせられたのは兵隊ですよ。

佐多 上が命令を出したのよ、殺せと。

斎藤 殺し方が残虐をきわめたと聞くと、私とは何か日常的に抑圧されてきた人間の悲しみみたいなものを感じるんですけど。

佐多 抑圧されてた側じゃなくて、抑圧してた側の感覚の中にそれはむしろ強いんじゃないですか。何をしてもいいんだということは。斎藤 私が言ってるのは、上官であれ兵であ

れ、日本の男の中に暴虐を許す感覚があったという一つ。しかも自分より弱小な者に向かったときに、権力を持っている側が日頃の抑圧を委譲したということ。この二つの構造が重なっているということなんです。

佐多 それはあるんです。抑圧された生活してたから、自分が権力に結びついたときには人を抑圧するってこと、人間にはあるんです。だけど全体の構造を考えてみると、権力者が一番問題。

斎藤 だからそういう権力者を許していた構造が一番問題だと言ってるんです。

佐多 許すというけど、それは長い間の歴史の中でしょ。男と女の関係、支配者と支配される者との問題は。

斎藤 長い間許し、既成事実を積み上げて来たことが問題だと思っんです。それぞれの人間がたたかって、一つの既成事実も作らないようにするのが大事なんで、一歩下がって闘争を回避する方法では私たち自身を守りきれないんじゃないですか。

佐多 一般的に言って、上が言うことには弱いということがあるでしょ。そのたんびに腹が立って、「徳川三百年が悪いんだ」って言うのだけど、だからここで今自分たちの意志

と力を持たなければいけないってのは賛成なのよ。でも男女差別があったから戦争になったんじゃないくて、戦争の原因はもっといろいろ現実的なものがあるわけでしょう。

斎藤 それはもちろんです。私も男女差別だけが戦争の原因だなどとは一度も言っていない。性・人種・宗教・民族・国の大小、金持ちと貧乏人、地主と小作人、すべてのギャップを既成事実にしていく構造そのものが戦争の論理ではないかって言ってるわけです。

佐多 私、逆だっていう気がするの。つまり戦争するっていうことになる、差別がどんな始まり、戦争を遂行するためには差別をたくさん作ったほうがいい。だから私は逆のようない気がするんだなあ。

北沢 公害反対運動も地域の住民運動も女性解放運動も戦争をさせないという。その戦争が何の戦争かという問題があるけれども、今、日本がアジアを侵略している戦争を経済的に搾取できなくなった時に、軍事力で搾取・支配しようとするんだと私は思うんですね。その時立ち上がった共同戦線を張らなければならぬ。そういう意味で有機的な関係はあるんだけど、女性解放運動が女性解放運動にとどまっているだけで、そのまま即、戦争を止

める力になるというふうには私は言えない。

佐多 それは戦争阻止と結びついてるんです。女性解放するってことは大変な女の意識ですから。自己確立ですから。女性解放だけじゃダメだけど。

北沢 女性解放運動というのは社会革命が起きて、おそろくやらなきゃならないと思う。中国へ行ったときも女性差別はすごいと思いましたし、ソ連でもすごいベトナムでもすごいから……。そういう意味で女性解放運動っていうのは息の長いものだと思うんです。

佐多 女の問題はそれほど根深いつてことなのよ。男の意識にも、女自身の意識の中にも……。女の問題が一番長いと思いますけど、それでもいろんな条件が変わっていくと女の気持ちもずいぶん変わってきます。男の気持ちも変わってきますし、社会的にも変わってきますよね、私がこれだけ生きてる中でもずいぶん変わりましたもの。だから希望は持っているの。やらざるを得ないと思ってやっていくことが必要なんで、やっていけばやれるんだ、変えることもできるんだと。それは世界の社会状況のいろんな変化と結びついていくことなんです。世界の進む中に結びついて一歩進むんだというふうにしていかないと

と。だけど女の問題は、いつまでも大変長く残る、かなり強い度合いの問題だって思いますね。

斎藤 だからこそ、女は変わるって言い続けたいと思うんです。佐多さんが、「憲法は空洞化しないと言いつつ」とおっしゃるように。そして、そういう女の運動を、人間の状況や条件を考えるいろいろな運動と有機的に結びつけていきたい。

佐多 本を読んだだけで意識はまず変わりませんが、人間の中で実体になるのには、実際に何かをしていくことね。女の問題でも、それをやって行くことで何かにぶつかっていきますね。そのぶつかっていくときに、なお実感ができていくと思うの。

井ノ部 戦争への道を作ろうとすると、いろいろな差別をしたり、いろいろな運動を抑えこんで行くというけど、そういう意味では、今まさにそうなんだろうと思う。だから12・7集会のように直接戦争に反対するような運動をやっているかなくちゃならないと思うし、いろいろな運動との有機的なつながりも持っていくかと思う。

もう一つは、戦争したいから差別撤廃をちらつかせて、幻想をふりまく。そのへんがす

ごくうまいっていうか、愛国婦人会なんかでも、差別を強めるって感じじゃなくて、男女を平等の国民として認めるから国家的任務を担えというかたちでやってるわけでしょう。だとすると、差別って何なのか、平等って何なのか、そこらの内容をもう少し自分たちでふくらませていかないと、またからめとられていくという気が私は今してるわけだけど。

宇井 実際にはそこところは論理の問題ではなく感性の問題にすべきなんです。論理の問題でつめても、なかなか答えられないんですよ。だけど運動の中では、どうもおかしい、やつぱりやめとこうというふうな形で答えが出るものだから、あんまり現場でないとところで議論しても効果ないんじゃないかな、という感じ。

井ノ部 今、もうまさに現場の問題になりつつあるということですよ。

宇井 現場の問題として、こういう時にはどちらが正しいかというふうな議論ではなくて、どちらのほうが総体的に正しいか、ぐらゐの議論で行動を選んでいいんじゃないかという気がするんです。こちらのほうが絶対正しいというふうな答えを出すまで動かないということではなくて。

井ノ部 それはある意味ではそうですけど、労働基準法研究会報告——男なみにやれば引き上げてやる——というのが、ハッキリ出たわけで、それこそ男以上にやっても認めてもらえない女はとびつきたいわけですよ。そういう状況に対して、私たちは、あくまでちがう内容を具体的にださなきゃいけない時期なんだって思います。まさに現場にいます。

宇井 そうでしょうね。とびつきたいような状況にしちゃってるのは事実なんですけど、やつぱりとびつく奴が悪いんだという……。

井ノ部 でも、とびつかざるを得ないまで矛盾を放置してきた、いわゆる革新の側って何なのかという問題意識はやつぱりありますよ。とびつくやつが悪いといっている問題が解決するでしょうか。

宇井 それは、革新勢力があると思うからあてにする。ないと思ったら腹も立たないわね。ぼくらの世代だって、北沢さんのおっしゃるように、五〇年代六〇年代のイデオロギーがどうなったかと思えば腹が立つけど、いいこと教わったと思えば腹は立たんですよ。

山屋 雑な比較かもしれないけど、似たような経験があるんです。私のところは女ばかり

でやつてる超零細企業——バクテリア企業だ
って言ってるんですが、一生懸命育てた社員
が二年ぐらいで出産でやめていく。大企業な
ら新規採用を……ですむけど、バクテリア企業
にとっては血を吸い上げられるようなもので
す。がつくりして、「この次は男をやとう」
って言ったら、周りの連中が、「男がいると
思うからダメなのよ、この世に男なんかいな
いと思えばいいじゃない」って言うわけで
す。「彼女がやめた分を一人15ずつ分担し
てやろう」って。こう言われたとき、ハッと
思っちゃった。

佐多 だけどそれはバクテリア企業（失礼な
がら）だからで、普通の企業なら、利潤の追
求だ、深夜業だって、それはきびしいわけ
ですよ。

山屋 現実はそのですよ。だから私なんか理
論はない。直感的に考えた中から作っていく
しかないって思ってるんです。

佐多 女子労働者に平等をちらつかせるって
いうのは、女が平等に見られることだって、
私、言うんです。少なくとも使用人として働
かせる労働力としては平等に見てる。それで
「やるか」って言うてるわけですよ。だか
ら女の問題は、いろいろと自分自身にかかわ

る問題がずいぶんありますね。女自身がかか
えている問題がたくさんあります。

斎藤 そうですね。だから結局は、一番たい
せつなのは、自分自身とのたたかいだと思っ
たんです。自分の中の一番深い部分を掘り出し
て、ここはもう一歩もゆずらないというもの
を固めていく。一人ひとりが決して被害者に
ならないようにする……。

宇井 そう言っちゃうとまた議論が分かれる
から、もうちょっと周りを見てください、と
いう気がする。たとえば日本とアジアとの関
係はわりあい見えにくい。ヨーロッパとの関
係、アメリカとの関係は見えやすいけれども。
ところが食べるものはあらかたアジアで支え
られてるみたいな面がある。それも見てくだ
さい。

斎藤 私自身について言えば、自分の中の一
番深い部分を掘り起こしたときに、はじめて
周りが見えて来たという気がするんです。観
念的に考えていた第三世界の問題が、自分の
からだの中に飛び込んで来たんですね。私に
限らず女の問題を真剣に考えてる人たちはみ
んな、第三世界の問題、アジアの問題に対し
て真剣だと思えますよ。共通項がありますか
ら。

宇井 それは地域の婦人会でまさに言ってる
ことなただけ。

斎藤 人間は、一般に自分が差別しているこ
とにも差別されていることにも、鈍感なんじ
やないかという気がしますね。何年前、第
三世界との連帯の会に入ろうと思って入会案
内を読んで、ガックリしたことがあるんです。
それにはある方がこう書いてらした。「私は
朝鮮に育った夫の罪をつぐなうために入る」
と。それで入会しなかったんです。夫の罪を
妻がつぐなう、あるいはつぐない得るという
発想がおかしいし、朝鮮に育った夫は、あな
たよりも確実に罪深いだらうかって。実は私、
台湾で生まれ育ったんですが、女学校三年ご
ろの忘れられない思い出があります。級友と
帰る途中、自転車に乗った台湾の人が横を走
りすぎた。と、かぶっていた笠が風で飛んだ
んです。走って行って、「おじさん」と、
拾った笠を渡そうとしたら、ケラケラ笑う人
がいる。「おじさんだなんて。リーヤって言
えばいいのに」って。リーヤっていうのは台
湾人に対する蔑称です。「拾ってあげなくた
って」とさえも言ったその級友は、日本の内
地から転校して来たばかりの人でした。心の
中で何ともいえずイヤな気持ちがあると

もに、どうしてそんなことを彼女が言うのか、
どうしてもわからなかったんです。

その理由は、日本に来てすぐわかりました。
便所の汲み取りとか廃品回収みたいなよこれ
仕事は、日本では全部、朝鮮人とか被差別部
落の人がしてるんですね。台湾にいる台湾人
差別以上の差別が公然と存在していて、それ
こそが植民地での現地人差別の根源になって
いたことを直感的に感じたんなんです。

その差別は今も厳存していると思います。
今、アジアで日本はこれこれの悪いことをし
た、植民地で悪いことをした、ということが
しきりに言われてますけど、じゃ日本の中で
は何をしてたか、そして今何をしてるんだっ
てことを考えていかないと、植民地がなくな
ったから差別してない、戦争が終わったから
もう残酷なこととはしてないみたいな錯覚に陥
るんじゃないかなって思うんですが……。

宇井 (うなずく)

谷内 ほんとうにそうですね。私、ほんとう
の意味での戦争体験とは、あったことを全部
知った時から始まる、という意味のことをあ
る高名な学者からうかがって感動した覚えが
あるんですが、差別した過去、現在を正確に
見つめることの大切さを感じますね。

戦争挑発の論理に 巻き込まれるな

編集部 予定の時間を大幅に過ぎてしまいま
したが、最後に、では私たちは今、何をすれ
ばいいのかを考えてみたいと思います。

佐多 このごろ、国を守らなきゃならんとか、
ソ連が攻めて来る、というようなことが言わ
れ、それに対して負けたつていいじゃないの
というのも一つの態度なんですけど、そうい
うおどかしに、私たちがそうじゃないんだと
言えるように勉強しなければならぬと思う
んです。安保の時代の先生方がだいぶ右へい
らしたという話がありましたけど、ちゃんと
した反国防論がほしいですね。学者たちにそ
れを望みたいと思うんだけど。一般には、女
の人たちに、「そうなたらあなたの息子が
戦争にとられるんですよ」というのが一番グ
ッとくるようだけど、きちんとした理論もほ
しいですね。若い人たちが、「なぜあんなバ
カバカしい戦争をしたのか」って思ってるこ
ころが頼りですし、それを広げたい。隣にも
広げたいと、私は思うの。「戦争への道を許
さない」という女たちの集会も続けたい。

井ノ部 私に逆に、戦争をみんな好きじゃな
いのに協力してしまっただけというこわさがあ
るから、「なんであんなつまらないうたうら」
というあたりをもう少しぐぐっていきたい。

男女差別とアジアの関係とか、もうちょっと
全体的につながりを見ていけば、平等になる
ためには女も共に軍隊に入ってがんばらうと
いうふうにはならないという予感があります
ね。しかしそれには自分たちの現場からの運
動が絶対必要だと思うの。アジアの問題つて
いうのはすごく重要だけど、アジアで搾取し
てるつていくら言われても、自分の現場はど
うしようもないわけでしょう。だから自分の
かかえている問題、すなわち男女差別をどう
すればなくせるかってことと、それとアジア
との関係と戦争への道がどのようにつながっ
ているかを考えていきたい。もちろん性差別
とのたたかいはどんどんやっていく中で。ま
た、いろいろな他の運動とのつながりをもつ
中で……。

佐多 しかし戦争は最も現実的な問題から起
こると思うのよ。石油守れとか。そういうこ
とに対する現実的な反論ができるように身に
つけていきたいの。

北沢 戦争がなぜ起こるか考えると、大もと

に経済的な繁栄があるわけでしよう。たとえば石油を守るために戦争が始まる。そうじゃない日本、繁栄しなくていい日本で、私たちが幸福になれるのは何かを追求していくのいい。一九五〇年代ぐらいの生活は、そんなに飢えてもいなかった。それほど第三世界を搾取していなかった。六四年以降ですよね。アジアを搾取しなくてもやっていけるような生活、というと、イモとハダシにもとるのか、と脅しをかけられる。これに対抗できる論理をつくっていくことは必要なんじゃないかという気がします。

もう一つ、管理支配があります。これに対抗するのには仲間がいないとダメで、運動の仲間でもいいし、家族でもいいし、地域の人でもいいから、最後の抵抗のよりどころをつくって、一人にならないようにする。もちろん最後は自分だし、自立することは大事だけれども、やっぱり仲間ってというのは必要じゃないかって気がします。

山屋 わかりあつてからいいんだ、と思わないで、わかりあつた中で、何回も何回も確かめ合っていくことじゃないかと思いますね。

宇井 観念でつめるよりも、運動の中でうん

と実務的に考えて、相対的によりよいほうを選びたい。毎日の生活で、何を先にやるかという選択は、かなり相対的に感覚でやっているんで、ほんとうに論理でつめて選ぶときはそう多くはないし、直観で選択しなければならぬ場合もたくさんあるので、どうも論理に頼りすぎるのではないかという気がします。特に戦争準備なんてのは一種の論理を用意してくるので、巻き込まれないためにはけとばすことが必要なときもある。

斎藤 それはだいいじなことですな。

島田 今度戦争するときは、前のように国体護持のためという形では絶対こないと思うの。経済を守るために、皆さんの豊かな自由社会を守るために、と言うと思うな。それに對して私たちは、今の豊かさなんてちっともほしくないって、すごく反応する力がないと抵抗がむずかしい。今の豊かさは第三世界を収奪して得た豊かさだつてことをハッキリ打ち出さないと。

省エネルギーっていうときも、昔の「はしがりません勝つまでは」っていうふうに持っていられるとこわい。省エネの歌作って子どもたちに歌わせたりしてるのみて、戦時中のことがダブって見えてしまった。一番油をく

うのは軍用なんですね。戦時中、庶民はあらゆる節約をして、金属類などみんな供出して、結局は人殺しのための軍用機になってしまったのだから、何のため、誰のための節約かをおさえないと。

戦無派もどしどし語ろう

谷内 とにかく今、保守も革新も両方が同じ言葉を書き合っているから、その中で見きわめるのがむずかしいってことをほんとうに感じますね。

北沢 高度成長派っていうのはむしろ労働組合側ね。彼らは何%あがらなきゃダメだって。企業のはうは成長率がちよっと下がってないと言ってるのね。なのに五・六%以上でないと困るなんて言う。われわれが頼りにしてる組織だから、やっぱり批判はしなきゃと思います。自民党を批判するのと同じように。

佐多 両方が言葉を取り合ってるのは深刻なことよ。

谷内 学生たちはそこで本当に混乱してるのね。昔のようにはっきり言葉があるのもこわくて近づけないけど、今みたいに同じ言葉で

言われるとほんとにわからなくてね。でも混乱してるから、彼らは一生懸命整理したいと思いはじめてる。この間の12・7の時にも、若いたちが結構来ましてしょ。その人たちがとにかく憲法を学習したいと言って、どんどん集まってるんです。そこらに望みを託したいと思うんですけど。

佐多 言葉っていうのはむずかしいなと思ったのは、戦後まもなく、私たちからみると反対勢力が「民主主義」「平和」って言うのよ。言葉ってほんとにむずかしいなって思ったの。今、保守と革新が言葉を取り合ってるっていうのも、また別の大変深刻な状態なんだけれども。

谷内 さっき、家族のようなものがよりどころだっておっしゃったのは、ほんとにそうで、私、平和な時代に生まれ育って来たわけですけど、もしもの時に自分がどこまで抵抗できるかってことを結婚するときも考えたし、子どもを産むときも考えたんです。かえって抵抗できなくなるんじゃないかって。ただ、今になってみて、隣と結びつくなんてのは、やはり子どもなんかいて私一人じゃないからだっているし、つながりは大切にしたいな思ってるんです。

今、小学校でも管理、管理の教育が集中的になされようとしてるけど、それに抵抗するだけじゃなくて、駒尺さんの言った「許せない」という感覚を持つ子どもに何とかなってほしいと思うんだけど……。

斎藤 そういう意味でも男の人が子育てに加わってほしいですね。皮膚感覚で育てながら、人間の命の大事さとか、ぬくもりとかを感じとるとき、人間のつながりはもっと深くなるんじゃないでしょうか。

これからこわいのは、情報封鎖、情報管理、そして教育だと思えます。女性差別撤廃条約批准のための条件整備でも、文部省が一番強い抵抗を示しているあたり、何か不安を感じますね。教科書の書きかえもすすめられてるようだし。

そんな中で、先日、福岡県下で平和教育をすすめている若い女の先生を取材して、とても感動したんです。小学校一年生から、戦争のこわざなどを、写真など見せながら教えてるんですけど、一番気をつかっているのは落ちこぼれを作らないことだって言うんです。特に女の子には徹底的に教えるって。ちゃんとした学力と体力をつけて、だまされない子どもを育てることが基本だって。「一年生では

早すぎるという人もいるけど、早いほどいい。それに、もし情勢が変わって、来年はもう教えられなくなるかもしれない」って。こういう若い人たちがいるかぎり希望は持てると思います。

谷内 私たち戦無派は、戦争のことを語る資格がないみたいな変なコンプレックス持つところがあるんですよ。体験者の前では、何だかニセ伝導師のような気がして。でも、もうそんなこと言っていられない。戦後生だけが全人口をとくに超えてしまっているし、もう少ししたら小学生以下の子どもを持つ母親は全員が戦争体験なしということになってしまいますもの。戦無派でもともかく戦争のことを、語ろうと決心したんです。そのためには、体験者にもっと、もっとお話をうかがいたい。

今ごろになって何ですが、先ほどの戦争を考えると男女差別のレベルうんぬんの話ですが、私はやはり同次元の問題として進めていきたいと思っています。明治からの女子教育の系譜をみていて、これは単に古い考え方から発してただ男女差別を守りたいためのものではなかったのだな、とこのごろしみじみ感じます。女子教育が自由な方向に走ると

すぐゆり戻しの軌道修正がされる、これは軍国主義を進める国策としては当然必要なこと、さらに言えば差別構造の温存再生産は最も重要な政策だったんだなって思うんです。ですから、12・7の集会にも私は初めから平和の問題と男女差別の問題は同じ次元でとらえていかないとならないという思いを抱いて参加しているんです。あの集会はその後憲法記念日の集会に向けてまた活動が続けていま

すが、憲法を学ぶ時も何か討議する時も、常に、女性差別の構造とからめて問題を点検していく目を保っていくことにしています。これは北沢さんのおっしゃる社会運動として展開しなければということと矛盾しないと思うのですが。むしろ平和運動がこれまで社会運動としていまひとつリアルティが持てなかった原因は、女性差別の問題を十分にテーブルにのせなかった点にあるんじゃないでしょうか

か。女性差別のことを徹底的に考えつめていくと、私のように国際問題にさしてくわしくない者にも、第三世界の問題がだんだんとかつてくる。私としてはすべての問題を鎖のようにつなげて考えていきたいと思っています。編集部 もっと語りたい思いは尽きませんが、夜もふけてまいりましたのでこの辺で。今後も継続して討論を重ねたいと思います。

考えたこと、疑問に思うこと、反論したいこと……。心ひらいて話し合いましょう。各地の拠点にご連絡を。

この号の 合評と 討論を

- 【あこら旭川】旭川市神楽岡一条五丁目3 田代慶子 ☎01666656237 〒078111
 【あこら札幌】札幌市中央区南25西12ニユー藻岩503 高橋芳恵 ☎01155636917 〒064
 【あこら浦和】埼玉県浦和市南浦和2-19-8 国井マツ江 ☎0488873680 〒336
 【あこら柏】柏市豊四季台3-1-68-212 古賀節子 ☎04714456724 〒277
 【あこら新宿】新宿区新宿1-9-6 あこら内 ☎0335499014 〒160 6月12日午後6時30分から
 【あこら北東京】豊島区東池袋1-45-11 メゾン金子202 婦人協同法律事務所 志賀由美子 ☎039853308 〒170
 【あこら京王】調布市仙川町3-12-32 福井浅子 ☎0333087871 〒182
 【あこら武蔵野】小平市小川町1の763の86 丹羽雅代 ☎04234436749 〒187
 【あこら神奈川】川崎市多摩区東生田2-2-12 森山方 沼田千恵子 ☎04499339079 〒214
 【あこら東海】愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-9 伊藤汎美 ☎0561392386 〒470101
 【あこら京都】京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子 ☎07579144623 〒606
 【あこら大阪】吹田市出口町30-20-703 北垣由民子 ☎063870916 〒564
 【あこら九州】福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子 ☎0925217624 〒810

語りつくせなかった部分を
ふたたび子美代
洋喜千
沢尺藤
北駒斎

編集部 先日のティーンでは、それぞれの状況は語られましたが、論点がしほりこまれなかった感じがありましたので、きょうは特に意見の分かれた三人の方に人数を限り、①戦争には二種類あるのか②女差別は他の差別とちがうのか③戦争阻止のための論理、の三点について討論したいと思います。

戦争には二種類あるか

駒尺 まず北沢さんの、戦争には二種類あるという説を具体的にお聞きしたいんですが。北沢 戦後、私たちは「もう二度と繰り返さない」と誓ったわけです。あの大東亜戦争の前には日中戦争があり、日露・日清があり、台湾征伐があり、明治百年の侵略戦争の続きだという認識はなかった。ただ戦争の被害者、戦禍をこうむったという感じだと思うのです。しかも日本は世界で唯一の被爆国だということ、今度は核戦争になる、それには非暴力で対抗するしかないという考え方だった。私はたまたま日中貿易の関係の機関の調査部に勤めて中国革命のことを知ったり、その後カイロで解放戦争を見て、全くちがう戦争

があるってことを知ったんです。私が経験した戦争は、いやだというのに徴兵されたり、空襲から逃げまどうものだったけど、民族解放戦争は民衆の中から生まれた戦争なのね。で、それまでの反戦・原爆反対が吹っ飛んじゃった。世界には共産主義とか資本主義とかに分けられないものがある。しかも日本も欧米も世界の一部にすぎず、大部分の人びとはこれまで忘れ去られ、人間以下の扱いをされてきた。自分が人間になるためには抑圧している者を追い払わなきゃいけない。長い歴史的な暴力と闘うには暴力でしかない、と言っているのを知ったのです。しかも暴力と言っても、武器をとるとか抵抗するとかの暴力と非暴力のけじめがないのね。暴力の中の非暴力であり、非暴力の中の暴力だということです。日本では民衆が武器をとるというと大変なことです。また兵隊が人殺しをするようになるには野間宏の『真空地帯』にあるように、軍隊が兵隊の人間性を徹底的に破壊して、三光作戦をやらせる。そういう暴力じゃないもの、言ってみれば正義の暴力、人間性を奪われていたものが人間になるための戦争があることがわかったのです。言葉で言うみたいへん抽象的になるんだけど、たとえばアフリカ

では普通の娘が、彼女の兄が解放の戦士だから自分も手伝うというように、日常の中で闘っている。で、そのあと日本に帰ってきて、ベ平連の「ベトナムに平和を」のスローガンを見て、運動は支持するけど、中には入れないという気持ちでした。

もう一つつけ加えれば、人間の抵抗の権利というのは、フランス革命以来の人権思想の中にある。世界人権宣言の前文にも、人は専制に対して戦う抵抗の権利を持つと書いてある。その抵抗の権利をどういう形で行使するかは、その人の置かれた状況によってちがうと思うんです。そういう視点で大東亜戦争を考えてみると、日本はアメリカと戦争したんじゃない。最後の段階では空襲なんか受け、米軍に占領されたけど、あれは日中戦争の続きたし、資源と市場をめぐる東南アジアの植民地戦争だと思ふ。だから戦禍を受けたのは中国と東南アジアだったし、単に日米間の戦争と見るのはおかしいんじゃないかと思うんです。

駒尺 アメリカとの戦争じゃないってこと？
北沢 ええ、日本はアメリカ本土を攻める気はさらさらなかった。まさに目標は仏印であり蘭印であり中国だった。南進論と北進論が

あり、ゾルゲや尾崎秀実は、日本の侵略のはこ先を北にソ連じゃなく南に東南アジアに向かわせようとした。ソ連と戦争しないということには一生懸命だったけど、当時、マルクス主義者を含めて、植民地侵略はいい。とくに転向者の考えには。そこに戦前の反戦の弱さを感じるわけ。

駒尺 大國が獲物の分捕り合戦をしたということね。

北沢 ヨーロッパの戦争は、ナチスドイツがフランスを攻め、イギリスを爆撃し、ソ連を攻めたわけだけど、それはやっぱり帝国主義間の戦争だったと思う。日本の場合は明治以来南を侵略しつづけた。沖縄・台湾・朝鮮というふうに。一九〇五年、日露戦争が終わったとき、植民地分割をやっているのね。ポーツマス条約でツァー・ロシアに日本の朝鮮統治を認めさせた。同じ年、アメリカとは桂タフト秘密協定を結んで、フィリピンはアメリカにまかせる代わりに日本の朝鮮支配を認める。イギリスとも同じ年第二次日英同盟を結んで、イギリスは日本の朝鮮や満洲への進出を認める代わりに日本はインドから向こうは手をつけないと約束している。だから大東亜戦争の時もインドには手をつけない。日本軍は

ビルマのラングーン・マンダレー鉄道を抑えて、昆明・重慶に至る援蔣ルートを奪おうとインパール作戦をやったけど。一九〇五年の旧契約は守ったんじゃないかという気がするぐらい。結局、市場・資源の争奪戦だったと思うし、それは戦後も変わらないんじゃないか。いまソ連が攻めてくるとか言っているけど、日本がソ連と戦争できるはずがない。アメリカとは軍事同盟を結ぶから、戦争する必要がない。日本の戦争のはこ先、本質は変わっていないと思うんです。

かつて日本軍が戦った相手は、中国では毛沢東の八路军。フィリピンではマッカーサーの米軍はさっさと逃げて、現地ゲリラと戦った。マラヤでもそうだし、ビルマでもそうです。ゲリラがなかったのはインドネシアぐらい。そんなことを戦争中、誰が知っていたらうか。ゲリラが日本軍を苦しめるなんて。みんな敵は鬼畜米英だと思つた。私のいうもう一つの戦争が存在したのに、左翼の中でもそこまで考えてた人はいたかしらと思うのね私は。八路军や延安についてもどれだけ情報があったか。ソビエトを守れという先進国意識だったんじゃないかしら。

駒尺 いまうかがったかぎりでは私も北沢さ

んと同じ戦争観ですが、話をわかりやすくするために、侵略戦争は悪玉、民族解放戦争とか人間の解放のための戦争は善玉とすると、中国の戦争は善玉になる。だけど、女の立場に立てば、中国でも女は解放されていないわけね。

それから私は北沢さんと逆で、革命のための戦争はいい、暴力でなければ権力は得られないって思ってた。——マルクス・レーニン主義に立ってましたから、以前は。で、むしろ暴力革命に賛成だった。だけど今では革命が成就しても、女にとっては解放にならないという現実があるので、善玉の戦争も信じられなくなつたのです。ソ連でも、女の人だとえば先生とかお医者さんにどんななつてゆくと、その先生や医者者の社会的地位が下がる、そして大病院のブレーンとか党の執行部はほとんど男が占めている。ベトナムにしても、アメリカと戦って勝つたことは「弱い国だからといってだまされてなくてもいい」という実例を示してくれて、とても力づけられたけど、今度はそのベトナムがカンボジアに侵略してるわけでしょう。結局、侵略戦争も民族解放戦争も男の陣取り合戦じゃないかなつてこのごろ思ってるわけです。

いま一番大きいのは核の問題で、これは米ソ両超大国がほぼ平等に持つて暗黙のうちに取引きしてる。お互いにうまくやりましようやと。だけど産油国とかそういうところには、折あらば乗り込んで奪おうとしてる。日本が戦争にかかわるとしたら、やはりそのへんで、「このままでは」と石油が来なくなり豊かな生活ができなくなりますよ」ということから始まると思う。この間自民党が圧勝したのは、今の豊かな生活は自民党さんのお蔭ということからだったし、正義の戦いだとか正義でないとか言ってみても、戦争阻止の力にはならないんじゃないかと思うわけです。大多数の人間の関心は生活にあり、目先の生活が豊かだということのほうが決定的なことですよ。いくら、「この豊かな生活を泣かせて築いてるんだ」とか、「弱い国を搾取して築いてるんだ」と言っても、そんなことを考えてるのはほんのひと握りの人だけだし、それは力になり得るかという疑問を感じるんですね。

前の戦争でも、昭和初年から共産主義の抬頭なんてすごいですよ。私は文学しかやらないけど、あ、この人がって思うような人、たとえば芥川なんかまで社会主義に関心してるんですけど、いったん弾圧され右旋回する

と情況はいっぺんに変わって、大衆は国家主義にさらわれてしまふ。その戦争へ戦争へという力の中でインテリが反対を叫ぼうとしても言論弾圧ということ。つまり戦前も大正デモクラシーの果てに太平洋戦争みたいなことになるわけでしょう。だから、「これはいい戦争ですよ」ってなことを言ってもダメなんでもっと、いのちの問題を考えないと。

日本が巻きこまれるのはおそらく悪い戦争ですよ。仮にいい戦争だとしても要するに男の陣取り合戦。フランス革命だって、男の人權は認めても女はダメ、いまだに財産権もないんですから。

斎藤 この前の戦争の分析に関して言えば北沢さんの考えに全くビッタリで、このへんは私たちも繰り返して学習しなくちゃいけないと思うんです。だけど、やっぱり戦争には二種類あるとは言ってはいけないと思う。抑圧体制に対して被抑圧者がたたかうのは当然の人權だと思うけど、それはやっぱり戦争という言葉では呼びたくない。「正義の戦争はいい」なんて言っていると、またどんなふうにごまかされるかわからない。十五年戦争だって、私たちは徹底的に叩き込まれたわけですよ、「アジアの解放戦争だ」って。日清・日露にして

も、超大国の抑圧をはね返す戦いとして庶民はとらえていたわけだし、とにかく「戦争というものは悪いものだ」ということを徹底させないと、戦争は阻止できない。どんな形にせよ戦争を許す論理が存在したら、もう防ぎきれないって気がするんです。それと、基本的には民族自決をハッキリ出して行くこと。一切の内政不干渉を出していくことが必要だと思えますね。

アジアの側に立って見抜こう

北沢 駒尺さんのお話の中には、戦争そのものの話と、戦争と革命と女の話がまじっていると思うのでちょっと整理してみましよう。

たしかに戦術的には「二つの戦争がある」なんて言えば右翼は喜びますよね。これは民族主義者だって：（笑）。だけど、日本の侵略戦争の向こう側に解放のための戦争があったというのを理解しておくことが必要だと思うんです。日本には今までそういう解放戦争はないので理解しにくい。たとえばここで韓国に革命が起きて、韓国人が日本の投資はもういらない、日本との不平等貿易はやめると言

ったらどうなるかと考えてみればわかる。駒尺さんの言われるように行動を起こすというのはたしかにむずかしいことだと思うけど、行動の前に、無知にされてた人びとが知ることとは、それ自身一つの力だと思われ、知識は力になって次のものを創り出していくと思う。だからインテリは必ずしも無力だとは思わない。そういう意味で、前の戦争の真実や、今の豊かさの根源を知ることが必要だし、それ自身が行動への力となると思うんです。斎藤 そういう意味では全くそのとおりですね。今の豊かさが次の戦争への問題点を含んることも含めて知ることがたいせつね。

駒尺 二つの戦争については三人とも考えが一致してきたと思うんだけど。あの戦争の本質についてはできるかぎりの情報を流して、たくさんの人に真実を知ってもらおうということと、たとえ一つでも「いい戦争」を認めると、また「解放戦争だ」なんて美化されるという心配では一致したと思う。でないと、歴史の流れの真った中で真実を見ぬくのはむずかしい……。

北沢 ただ、その見ぬき方だけど、アジアの側に立ったらどう思うかってことを絶えず考えていく必要があると思う。アジアにとって

は、日本が将来軍事的に攻めて来るのも、いま経済的に攻めて来ているのも同じことだって、民衆レベルで率直に考えていることを私たちが理解するのはとても大事だと思います。斎藤 それはもちろん大事です。経済侵略と軍事侵略の連繋の部分をはっきり見ていかないと……。

北沢 アジアの人びとは日本にやられっぱなしのように見えるけど、たとえばもし民衆がマルコスのような独裁者を倒し、日本と互恵平等の経済関係を結ぶといたら、日本はどうなるか、私たちはどのような生活をするのか。こんな豊かな生活を続けることはできないという覚悟はしておかないといけない。石油はこんなにたくさん必要か。たった二十年前の一九六〇年にはいまの十分の一の消費量だったけど、それほど私たちの生活は貧しかったわけじゃない。「十年ぐらいかかって、もとの十分の一に減らしてもいい」と言っていると、野党の人たちでも、「そんなこと絶対言えません」って言う（笑）。

斎藤 平地面積あたりで言えば、日本はアメリカの二倍の車が走ってる。海岸線には全部工場が立ち並んでる。公害が発生するのも当然。北沢さんのお説には全く同感なんだけど、

ただ残念なのは、人間っていうのは、いったん豊かさに浸っちゃうと、もうなかなか後戻りできないってことね。うちの娘なんかでも、湯わかし器のない家に引越したら、「湯わかし器のない生活なんて」というわけですよ。湯わかし器のある家に住んだのはたかだか四、五年なのに。あきれて職場でその話をしたら、若い人たちが「斎藤さん、それは当然ですよ、湯わかし器のない生活なんて考えられない」って言う(笑)。——考えてみると、人間って、無限に欲張りだと思ふんですよ。たとえばみどりの窓口が出来たときにはすごく感激したのに、いまは少しでも回答が遅いと文句を言うでしょう。

駒尺 だから自民党が圧勝した。いくら「第三世界の人たちが泣いてます」なんて言ったって、それがわかるのはほんのひと握りの人。その人たちだって自分の生活は捨ててない。北沢 私は炭焼きをしようとか、そんなユーロピアを言ってるわけじゃない。意識として飢えた他人を踏みつけにした生活は許せないってことを言いたい。

斎藤 だからそこで女の問題が出てくると思ふんですよ。女の低賃金の上に日本の高度経済成長はあったわけだし、自分の妻や娘が苦

しんでるのに、その上にあぐらをかいていたのでは、第三世界の問題は見えつこない。

駒尺 じゃ、女の問題のほうに進みませんか。戦争の話ではもう対立点はないと思うので。

北沢 一つ、核のことをつけ加えたい。これは大砲とは全くちがう。何世代にもわたって人間と自然を破壊しつづけていくのだから。いま米ソ合わせて核兵器が六万発もあり、「恐怖の均衡」を保ってるわけだけど、アメリカもソ連も信用できない国だから、どんなことが起きるかわからない。そこをほんとに理解して、核戦争反対の声をあげていなくては、という気がします。ウランなんていうのは土の中にあるべきもので、原発になろうが爆弾になろうが、いっさい反対したい。

駒尺 そのためには、この前も言ったように男を日常性の中に取り込まないと。いま男文化で汚染されて、私だって八分どおり洗脳されてるわけだけど、自分でバリバリはがしていかなくちや。

女文化が盛んになれば

解決できるか

北沢 では、「女と革命」の問題に入りまし

よう。

女は、どの民族でも最も抑圧されてるわけですが、その民族自体が抑圧されてるかぎりには、まず民族の解放が必要だということ、これは一致できますね。

ただ私は、女の差別解消っていうのは、非常に文化的なものじゃないかと思ふんです。資本主義社会で安い労働力として女の差別が強化されていくという面はあるけど、それとは別に、女の文化の問題をもっと考えていいんじゃないか。やさしさという言葉を使うのはいやらしいけど、——こんな言葉は全部男が作った言葉だし、それも男によって与えられた女の特徴なんだけど、子どもを産む女の文化というのはあって、その文化を全面的に映かせるようなことは考えたい。その意味では駒尺さんのおっしゃったことに賛成するところがあるんです。もし女が社会を作ったら、全然ちがう社会ができると思う。科学なんか発達しなくて……。

駒尺・斎藤 そうと言い切れるかしら……。

北沢 原爆を作る科学、人殺しに至る科学は発達しないと思うのね。車にしても飛行機にしても、相手を征服し、より優位に立ちたいという発想から発達したものでしょう。女の

社会は、もっと人間と人間の間を大事にする社会だと思う。

駒尺 何だかこの前北沢さんがおっしゃったことと、すっかり逆転したみたい(笑)。

北沢 私は、今の状態のままで女が平等になっても、結局、男社会と同じになるんじゃないかってことを言いたいわけ。

駒尺 ああ、そういう意味ね。

斎藤 その場合、「平等」という言葉の定義が間違ってるんじゃないかって気がする。男と同じになることが平等だったら、北沢さんの心配どおりだけど、私たちが言ってる平等っていうのは、そういうことじゃない。私、平等って何だろうって、ずいぶん長い間考えて、最近やっと一つの結論に達したんだけど、「一緒に生きる」とってことじゃないかと思うの。「共に生きる」という立場で考えてみると、その真反対にあるのが戦争であり、抑圧であり、権力者になることでしょ。そう思ったとき、長い間考えに考えていた戦争と女の問題が、ドッキングしたわけ。

駒尺 なるほどね。共生、共に生きる。

北沢 それはいいわね。でも私は、女の問題だけやったら戦争反対につながるとは思えない……。

斎藤 繰り返しますが、私は女の問題だけやったら戦争反対につながるなんてことは一度も言っていないですよ。私自身の経験から言えば、女の問題を考えていく過程の中でいろんな差別が見えて来た。沖縄も、部落差別も、朝鮮人問題も、障害者も、南北問題も見えて来たという感じがするんですね。

その見えて来た差別を考えたとき、差別の本質というのは抑圧と被抑圧の関係であり、支配と被支配の関係であって、それは戦争の原点だと思うようになったという意味なんです。

北沢 ところが、そこで私がウンと言えないのは、それは現状認識としては正しいんだけど、豊かな日本の女であるということにおいて、自分自身の存在そのものが抑圧者の立場にあるからアジアの女たちと安易に連帯できないってことね。「私も苦しめます、あなたも苦しめますから連帯しましょう」っていうふうにはならないってことを言わなきゃならないと思うんです。戦争に反対するからには、戦争に対処するだけの何らかの運動は必要なわけで、それは政治だけではないと思うの。

駒尺 そこで私の持論の、「男を子育てに参

加させる」に戻るわけだけど。話し合い、話し合いって言うけど、話し合いの次元じゃないかな解決できないから「突きつける」なんて言葉をこの前使ったんだけど、それぐらいの形で突きつけて、男も子育てを日常的にやって、命の大切さからだに教え込まないとダメだと思うね。食品公害にしても実際自分で作ってなくて、人につくらせて、出来たものをパッと食べてれば気になりませんよ。非常に迂遠のようだけど、女文化っていうか、女の持つる良さを男もからだを通じて体得していくのが一番だと思うの。性差別撤廃条約でも世界行動プログラムでもILOでも、家事育児は男女の共同責任ということをはっきり打ち出して、世界的地盤もできたことだし。

斎藤 国連で家事育児を男女で頒ち合うことを明確に規定したのは、それが男女差別発生の根源だと認めたわけだし、差別があるかぎり国際的平和は保証できないと明言してるわけですから、根本的な意味で重要なことですね。

それと、もう一つつけ加えたいのは、北沢さんは「女は産む性だから平和主義者だ」とおっしゃったけど、母性持つてるから平和主

義という言い方には、落とし穴があるような気がする。女でも、産めない人もいるし、産まない人もいるし、あえて結婚しない人だっている。産む性をそういうかたちで強調すると、女の中にも階層が分かれてしまうし、女が平和主義なのは、子どもを産むからというような、そんな単純なことじゃないと思うんです。女が強い怒りをこめて平和主義者たり得るのは、やっぱり被差別者だった長い歴史があり、今も被差別者だからだと思うんですよ。その中で、平等を人共に生きるVこととして考えたとき、その正反対にある戦争に対して怒りがわく。母性なんてものは、戦争中は見事に利用されたんですから。

北沢 私は太古からの女文化っていうのがあると思っています。江戸時代、農民は領主からしぼれるだけしぼりあげられてたけど、農業が主であったという意味においては、女も大地を耕していた。そこには今よりもっと女の生活と文化があったような気がする。そういうものをもう一度見直していくことが必要じゃないかと思うんです。

斎藤 それは女だけの文化かしら。私は女文化をもっと別の意味でとらえてるけど。

北沢 女の文化だと思うのよ。だから女が作

つてた社会だとしたら、もうちょっとちがう社会になるんじゃないかと思うんですよ。現実の差別はあるわけだからたまたかうのはいいんだけど、平等になった先は、今の社会とはちがう社会をつくるものでなきゃいけないんじゃないかと。ソ連でも中国でも物をたくさん作ればいい社会になると考えているけど、女の社会は必要以上に物を作っていく社会になるか、自然を生かしていく社会になるか……。

斎藤 さあ、女社会になればよくなるというふうには短絡できない気がしますね。現にいまの男社会を支えているのは女だし、大量消費を支えているのも女。それに基づく大量生産を背景にして高度工業化社会があるわけでしょう。

北沢 それは女がだまされてるわけでしょ。

広告なんかで。それで消費する……。

斎藤 だまされてるっていうか、いい意味でも悪い意味でも女にも欲望があると思うんです。だから女社会になれば何も彼もよくなるとは思えない。

北沢 その意味では男と女は平等なわけ？

斎藤 人間であるという意味では同じだと思っています。

北沢 私は本質的に女のほうがすぐれてると思う。

斎藤 どっちがすぐれてるとか劣っているという考え方は、私はあまりしたくない。

北沢 文化という意味ですぐれてると思う。

斎藤 侵略や生産第一主義の反省として、男たちのつくって来た文化がまちがってたんじゃないかってことは、いま世界的に問われていることだし、じゃ女が代わったらどうなるかということとはあくまでも考えていいことだけ、女が代わったら一〇〇%よくなるとは言えないじゃないかと思うんです。

北沢 じゃ、あなたが考えてる未来社会って何なの。

斎藤 ほんとの意味での平等な社会ですね。

私の言い方で言えば、共に生きる社会。

北沢 それはいいんだけど、その場合、生産はどうなりますか。

斎藤 利潤追求に走らないからいまのような過剰生産はなくなる。したがって、男女とも長時間労働はなくなるというのが私の持論です。

北沢 人に欲望があるという前提に立てば、相変わらずたたくさんの物が欲しくなるんじゃない？

畜藤 今は消費欲求が刺激されてるわけでしょう、故意に。そしてほんとうの意味の平等の思想がないから、追いつき追い越せになつてゐる。

北沢 ソ連の場合は資本主義じゃないけど生産第一主義でしょう。

畜藤 国自体が帝国主義、覇権主義でしょう。

一人ひとりの人間がほんとに大事にされていく国だとは思えない。

北沢 あなたのいうようにとにかく人間に欲望があれば物を生産するわけでしよう。

畜藤 人間が本質的に持っている欲望はあつても、他者を搾取しない社会、競争原理に立たない社会では、過剰生産は必要なくなると

思います。日本のこの豊かさは、第三世界の収奪の上にあるんだし。

北沢 あなたのような性悪説に立てば、誰かを搾取しなきゃやっていけないわけでしょ。

畜藤 性悪説じゃないつもりです(笑)。欲望というのは悪い意味ばかりじゃない。人間の

進歩のエネルギーでもあると思うんです。だからこのへんで欲望というものを根源から問

い直さなければいけないんじゃないかと思うわけ。共に生きようと思うとき、自分の欲望

を限りなく発展させたら争いになる、支配・

被支配の関係になる。だからどれだけ「足ることを知り得るか」ということがこれからの人間の一番のモラルになるんじゃないかって気がするんです。

北沢 じゃ、この前おっしゃった、女は抑圧に耐えるという生活を変えなくてはというのと矛盾するんじゃない?

畜藤 えっ、全く矛盾しないと思いますけど。

北沢 いまおっしゃったことは賛成なのよ。だけど……。

畜藤 私は、男女平等論にストップをかけるような言い方をされることに問題を感じるわけ。

北沢 私は平等になつても解決しないと思つてる。

駒尺・畜藤 そこなのよ、問題は。

駒尺 それと、産む性が善玉だというけど、たとえ戦争中、靖国の母、軍国の母とか、

むすこのおしりを叩いて戦地に行かせた母もたくさんいたわけで、産むから即、人間解放

になれるとは言えないと思う。

北沢 いのちの尊さを誰が理解するかってことよ。男が絶対ダメだとは言わないわけ。女

の文化を押しつけることでよりよい文化が生まれると思うの。たとえば中世に、より野蛮

なイスラムがインドに攻め入って、女性的なすぐれたインド文化にふれたとき、攻め入った側がいつのまにか取り込まれて変わっていった。ところが、近代のヨーロッパの侵略は

——完全な男文化だと思うんだけど——相手を皆殺しにする支配の仕方でしたか完結しなかつた。それが今に至つてると思うの。すぐれた文化というのはそういう柔軟性があると思

うし、女の文化も、何世紀かかるかわからないけど、この資本主義の文化を変えていかなければならないと思うし、すぐれた文化であれば変えていけると思うと信じてるわけ。

駒尺 女文化という固定したものがあると私は思わないわけ。たとえば今の例で言えば、日本の文化だって女性的文化と言われているように、皆殺しにするんじゃないくて、敗者を取り込みながら敗者の靈魂をしずめてゆく。梅原猛さんが言つてるように。それを一概に男文化女文化というふうには言えないと思う。

女文化っていうのが現在の女の中にパチッとあるかという、それは思えない。女のもっているよい部分と悪い部分は両刃の刃だと思

うの。たとえば一つの女のよさがあるとすると、無償の奉仕精神——ちよっとひまがあればボランティアやりましようとか。だけど男はや

らないです。いくら年金をもらう身になっても。そういう無償の行為とか犠牲精神は一見善玉なだけで、その原因をさかのぼってみると、夫と子のために金をもらわないで奉仕してきた何十年の生活があるわけでしょう。女のよさっていうのは、ある意味では搾取され差別されてきた結果だと思ふのです。

アメリカ映画なんかによくあるでしょ。黒人のおばあさんがとてもやさしくて白人の若様を大事にしてるのと似てると思ふの。だからその従順さが戦争だぞって言われれば、自分の子どもでも戦地へ出すことになる。よさと悪さが表裏一体になると思ふの。

いま第三世界の賃金は日本の十分の一、日本の女もその搾取に立って生活してるというの、ほんとにそうだし、それを知らないっていうのは悪だと思ふけど、それと全く同じ構造で日本の高度成長が女の低賃金——もつといえは主婦のタダ労働という大変な搾取と抑圧の上に立っていると思ふのです。アジアの女は、アジアの男よりもさらに低賃金で、かつタダの家事労働を背負っている。つまり、あらゆる差別のそのまた下に女差別があること。エンゲルスがとくに言っているように階級差別のはじまりは男女差別であること、つ

まり差別の原形は性差別だと思ふ。男が有利な地位につく性差別は、人類を二分する大差別だと思ふます。

北沢 ところが有利だっていうけど、男女が分化したとき、男は狩、女は農作業としたら、そこに原形があるような気がする。この男の労働は破壊につながる労働であり、より多くの物を生産する労働であり、自然を破壊し動物を殺す労働、原子爆弾につながる労働だと思ふ。女は自然も栄える労働に属したと思ふ。長い間女の悪い面が極端に拡大されて、今では私たち自身何がなんだかわからなくなっている。だから、平等を否定するわけじゃなくて、平等によって解決できない差別を解決するとしたら、それはやはり女の文化——というか、生産でないもので男の社会を、奴隸制から資本主義まで全部含めて変えていく社会でなくちゃいけない。その場合にはおっしゃったような共生の社会だと思ふし、貧困や飢えがなくなるということから始まって、他人を搾取することによって人は生きてはいかないことにつながると思ふ。それは現実の戦争を止めるとか、民族が独立するとかいうことよりは、もっと歴史的に長い事業だと思ふ。それをふまえたうえで「女と戦争」

とか「女と何とか」とか問題を提起しないと、女だからといっていうふうないうと問題が安易になると思ふの。

斎藤 その意味で、私は、「女だからといって安易には言っちゃいけない」って言つてたつもりですが……。それともう一つ、女文化が支配的になればいいっていう考え方には、私はやはりとても危険を感じるわけ。一つの文化がその時代を象徴する時は、その文化の担い手は支配階級だと思ふんです。たとえば鎌倉時代が武家文化だというのは、武家という文化階層が、支配者の地位を得て浮上したんだと思ふ。だから、女文化が支配的になればいいという考えは、逆に言えば女が男よりも支配的な位置に立てばいいということにながらないとも限らない。それは私たちの望む理想社会じゃ決してない。私たちが望むのは、男も女も共存し、共生する社会なんです。

北沢 その質になるわけでしょう。中味によるわけでしょう。

斎藤 だから、おっしゃったような生産優位主義じゃない社会を目指すという意味なら全面的に賛成しますけど、それをイコール女文化という言い方というのは危険だと思ふんで

す。

駒尺 その場合は支配ということもなくなるわけでしょう。誰も支配しない……。

北沢 包括して包み込んで変えちゃうわけだ。

斎藤 そういう考え方を浸透させつつ、いのちの問題を考えていくということには大賛成です。もちろん。

北沢 その場合、どうやって浸透させるのか。たとえば戦うのか、女的にやるのか。男ならお前ダメだゾとか。暴力によるわけだ。

駒尺 でも、もうすでに戦ってるんじゃないの。歴史的にいつても女権運動とかいろいろあったんだし。

北沢 戦うんだけど、相手を打ち倒すんじゃないくて、相手に理解させて変えて行くという戦い方。

斎藤 もちろんそれが最高。

駒尺 保守との戦い方だって同じでしょう。相手を抹殺するんじゃないくて、相手を変えていくという戦い方。

北沢 一方、戦争をなくすることは大企業を解体するとか、防衛大学をなくするとか、そういうことも必要なわけだし、大変な作業だと思う。

駒尺 そりゃ女の戦いだって、恐ろしいシステムと戦うことになると思う。結婚制度って

もので、女はかせがせない、養われる存在にされてるわけだし、それを全部解体するってことは大変なことだと思う。パートだって低賃金だって根本は主婦の無償労働にあるわけ

なんだし、その根本を解体するためには戦わずしては解放は得られない。

北沢 もちろんそうなんだけど、それでも差別は残るでしょう。

駒尺 どういう差別？

斎藤 そこがわからない。

北沢 きょうは、あとの時間がつかえているので、そこを一致させるまではやっていられないけど(笑)。

編集部 両者の間にそれほど決定的な差があるとは思われないんですが。産む性という言葉で北沢さんはおっしゃったけど、生命体としての男女の差は残るってことなんじゃないんですか。

駒尺 だけど、それを、ちがいがあんじゃないですか、どうしますか、なんて言わなくたって、人権は同じだし、平等な社会をつくれば、おのずから甲には甲の花が咲くと思う。黄色い花であれ、白い花であれ。私たちはい

ま平等な条件がないから戦いたいわって言うてるんで、白い花も全部赤い花にしようって言うてるんじゃないでしょう。

斎藤 そうそう。

北沢 男の場合は、ちがう花が咲いた場合に、それは区別じゃないか、ちがうじゃないかって言うんじゃないかしら。平等になったとしても。

駒尺 そう言ったら、その時はまた戦わなければならぬわけだけど、そんなに男が異人種とも思えない……(笑)。

斎藤 それと、「女は産むから……」という考え方に問題があるような気がするんだけど。

私は、女の文化があるとしたら、それは子どもを「産む」からじゃなくて、「育てる」過程の中でいのちの大切さを感じとっていくんだと思うの。だから、男だって「育てる」ことにかかわるようになれば、おのずと変わってくると思う。今まで「育てる」ことに男を関与させなかったことから、男女のちがいは出て来たって気がするし、「育てる」ことに男を関与させていけば、北沢さんのおっしゃる浸透も可能になると思うんです。

「産む性」という言葉の中に「育てる性」まで含めていた今までの女の論理の中にも問

題があつたと思うの。

駒尺 知人に事故で片足を失った男の人がいるんだけど、そういう人は同じ男でも二本足のある男とはずいぶんちがう、彼の目に見える社会はちがって映っていると思う。性差もそういう違いなのであって、絶対不変の本質的な差があるのかなくて気がする。つまり性差も個人差と同じ程度のちがいだと思う。ある人は記憶力がいいし、ある人は計算力があるし、それぞれ個人差があるわけでしょう。北沢 私も、だんだん怪しくなってきたけど……(笑)。何のために、何にとつて頭がいいかってことが問題ね。物をつくることだけが評価される社会だったら、物をつくることに向かない頭の人は差別されるし……。

駒尺 その問題でいえば私は「向いてる」というのも、ギモンだと思うのよ。でもそれはとにかくとして、個人差っていうのはどこまで行ってもあるわけでしょう。男女差っていうのもそういうものだと思うの。

北沢 だけど今の男の社会であれば、何かをつくらなきゃならないし、それに適合しない人は差別される。だからいつまでも差別が残ると思うの。

斎藤 それで生産優位の社会では困るという

点では三人とも全く合意してるわけでしょう。

駒尺 平等な社会になれば、自分の性質を十分生かし得ることになると思うし、男にしても女にしても十全に花咲くことになると思うの。だけど私は、女が社会を牛耳っても社会がタテ構造のままではそうはならないと思う。男が戦争おこせば、女はハアアって支えて来たわけだし。

北沢 だけどそこは時代の違いっていうか、昔の女の運動は選挙権さえ得ればいいってわけだったでしょう。そのダイナミズムは評価するにしても……。今は世界が広くなって、第三世界が浮上したことによって国際婦人年があつたし、ことしの障害年があるんでしょ

う。

駒尺 それは女文化のお蔭じゃなくて、第三世界の抬頭とか、弱者も教育を積むようになったとか、いろんな要因があるわけでしょう。北沢 労働者と資本家がいる、資本家を倒さなくちゃといったマルキシズムの理論が正しいかという、資本家を倒したあとのソ連だって、やっぱり生産優位主義のわけでしょう。それが言われるようになったのは、ほんの、ここ数年のことじゃない。

斎藤 そういう意味で生産優位主義に一番鋭

く抵抗するのは新しいフェミニズムだと私は思うんです。市川さんたちの時代は、残念ながらまだ女権運動だったわけだし、背景にあるのは生産優位主義のタテ社会で、男になり代わる、なりまることが目標だった。そこに、あの戦争に抵抗しきれなかった弱さがあると思う。しかも日本全体が、すっぱりと戦争というシステムの中に組み込まれていた。

北沢 戦争を止められなかったほんとうの原因は、労働者が自分自身のほんとの解放を考えてなかったからで、女だけの責任ではない。斎藤 女だけの責任だなんて言ってません。女も男も、一人ひとりの個人が、自分の解放を考えてなかったということだと思いますけど。

北沢 前衛党だって、ソビエトロシアを守れみたいなことしか言わなかったし、南を攻めることにならばいいということだったし……。駒尺 女は国防婦人会に協力したじゃないかみたいなこと言われるの、私、すごいやなのよ。女が流された事実も見とかなきやいけないけど、選挙権もない、離婚権もない時代でしょ。アメリカのやったことを黒人が悪い

みたいに言えばおかしいのと同じで。

北沢 女が目覚めただけじゃ片づかない大き

な問題があったわけでしょう。今だって、女が差別に目覚めただけじゃ片づかないことが多いわけ……。

斎藤 北沢さんがさっき「知ることは力だ」っておっしゃったけど、いちばん基本はそのへんにあるんじゃないかしら。知らされないどころか徹底的に誤情報を流され、情報汚染をされたことがほんとにこわい。これから一番気をつけなければいけないのも、そのへんじゃないかって気がします。

戦争阻止のために

編集部 ではこのへんで、「戦争は敗けてもいい」という論だけで戦争を阻止できるかという、第三の問題に入りましょう。

斎藤 「敗けてもいい」というのは非常にリプ的な発想で、とても貴重な考え方だと思うけど、それだけでは戦争のあの巨大なメカニズムに抵抗し得るかしら。例の「戸締まり論」に対抗できるかしら。

北沢 「敗けてもいい」っての、もし徹底化できればすごいと思うの。

斎藤 男も女も徹底的にできればそれはすごいけど。

北沢 つまり徹底的に戦争につながるものから脱走すればいいわけでしょう。ごはんもつくらないし、何もしない……で。

斎藤 だけど、みんながほんとに徹底できるかしら。合成洗剤が悪いってことをあれだけ知ってもやめられないのに。この次、何の戦争が起るかって考えてみると、私はやはり経済戦争だと思うの。つい昨日だかの、財界の調査結果でも、五四%が「今後国際的な経済摩擦が激化する」って答えてるわけでしょう。これだけ国際企業がふえ、またよかれあしかれ国際貿易なしではやっていけない日本は、その連鎖反応の中にいつもいるわけで、私たちのかほそい努力だけでは到底防ぎきれない。まして「敗けてもいい」と放棄するだけでは阻止できないって気がするんだけど。

北沢 何遍も言うようだけど、次に起こる戦争はすでに始まっている今日の戦争の連続だと思うし、独裁政権を倒したいアジアの民衆が立ち上がったときに起こるんだと思うの。だから、他者を搾取しない平等な日本のあり方を考える以外、抵抗の根源はないと思う。「あきらめましょう」だけではダメで、ひとつとつ出てくるものを撃退する以外ない。徴

兵制が出てくれば徴兵制と戦うし、防衛費が増えるならそれと戦う。だけどそれはやっぱり条件闘争ですよ。根本の戦争マシーンをこわすわけにはいかない。根本をこわすには、一つは「敗けてもいい」という論理。ごはん炊くことから何か何までおっぱり出すってことだっていい。

斎藤 日本が先進工業国であるということから徹底して降りるという意味なら、とてもよくわかります。

駒尺 日常性を女がかぶってるからいかんので、ほうり出さない。家事そのものでも女がやるからいかんので、ほうり出すしかない。

それから具体的には言論活動。北沢さんだったら、書いたり話したり、ね。それも、なるべくわかった人よりわからない人を相手に話す。全然ちがうテーマを持って来られても、一行でも入れるとか。ファッション雑誌みたいなものの中にだって、「戦争争ってこんなものだって」入れていけると思うし。

斎藤 それもできるだけやさしい言葉で、わかりやすく言うってことね。

駒尺 わかる人にはわかるって形ではダメね。でも集会なんか見ると、もう言わなくてもわかるような人ばかり来て手を叩いて、

聞いてほしい人は来ない(笑)。

斎藤 すごくおもしろい小説なんかもいいわね。おもしろい、おもしろいと思つて読んで、読み終わつたら何か残るような。

駒尺 コマーシャルなんかも、みんなすごくきらうけど、私、コマーシャルに出してほしいと思うわけ。全国に顔知られるつてことは大きなことで、その上で発言できればこんなすばらしいことつてないわけですよ(笑)。一人でもいいからほんとのフェミニストが売り出すといい。知つてるフェミニストでタレントになればそうながいるんだけど、そういう人つて、みんながつまはじきするのね。でも少々半分ぐらい気に入らなくてもいいのよ。そういう人をどんどん押し立てて有名にして、どこか一個所でいいから、戦争反対なりフェミニズムなりを入れてもらうといいのよ。それはむずかしいことで、ミイラとりがミイラになるのがおそらく八割か九割だと思ふけど。でもどんな純粋なことでも広く伝わらないと、ひと握りの間だけで言つてたのじゃ戦争前と同じでしょう。

斎藤 ポーゲルが言つてるように、集団の中の一〇%の意識が変わつたときにその集団の意識が変化し始め、五一%になれば、それは

世論になると思う。だから一〇%をまずどう変えるか……。

北沢 私、社会勢力としての労働組合つて、反戦の力としてはとても大きいと思うの。女はバラバラだけど組合は労働者を組織しているんだから。だからこそ自覚してほしい。ただ賃上げだけじゃなくて。

駒尺・斎藤 そうそう。ただの物とり主義じゃなくてね。女の問題なんて、ほとんど取り上げないでしょ。それどころか、女を裏取引きの材料にしたり……。

北沢 物とりさえもやつてないのよ。賃上げ何パーセントといつても、物価上昇がそれ以上なのだから、実質的には賃上げになつていない。まず今の賃金からしていんちきで、残業で額をふやしたり、ボーナスなんて、企業が儲けたときにもらうものを合せて給料だといつてゐる。飢餓時代の給料体系そのままでしょ。本質はいつも負けてる。負けてるんならいつそやらないで、雇用平等法のためにゼネストやればいい。

駒尺 オォ、いまの組合ではやれっこないよ。

北沢 やれっこないつたつて、やらなくちゃ。斎藤 働きたい人が働けないつていう情況も

ありますね。日本は失業率が低いことで知られてるけど、それは、就職の入口でシャットアウトされてる女を勘定に入れてないからで。北沢 労働者自体の組織率も三〇%程度だし。斎藤 大企業が賃上げをするたびに、いちばん力のない人びと、病人とか老人とか障害者が、物価が上がつた分だけしわ寄せを受けているということも考えてもらいたい。賃上げで誰よりも喜ぶのは景気を刺激される企業でしよう。組合はほんとの意味の人権闘争をしてもらいたい。

北沢 だけど何となく仲間意識で、総評をやつづけるのはひるんじやうわけね。そこを私たち変えていかなくちゃ。

斎藤 伝統的に女子労働者がいちばん多い、また女がいちばん押取されているセンセン同盟あたりが、自衛隊支持に回つてたりね。あのへんが同盟から脱退してごらんなさい。それこそ労働組合そのものの体質改善になると思うんだけど(笑)。

駒尺 女だけの組合作つたらいいね。

斎藤 組合の幹部にも、女がふえないと。

北沢 そうそう。

斎藤 結局、いま戦争といちばん深い関係があるのは米ソ両大国でしよう。世界のキナ臭

い地点には必ず両大国が顔を出してる。だから極論を言えば、お戦いになるんなら、両大国でお戦いになるといい、そして戦争の悲惨さをご自身で体験なさればいい、と言いたいぐらいの気持ちでしてるの(笑)。

駒尺 でも、そうなるかと巻き込まれるでしょ。斎藤 だから徹底的に日本には基地を作らない。自衛隊も持たない。軍事同盟や、先進国の仲間から降りる。明治以来の「追いつき追い越せ」をやめるってこと。そのためには今のような豊かさはいらない。それを各国が徹底してやるとおもしろいと思うんだけど。駒尺 すごく性能のいい核兵器ができてるわけでしょう。アメリカからソ連にボーン、ソ連からアメリカにボーンって、日本を越えて両大国だけがやりあってくれりゃいい(笑)。

貝がらの町

声なき人びと
との出会い

小林トミ著

定価 一五〇〇円

市民運動のひとつの原点、「声なき声の会」に長年たずさわってきた著者が、そのよりどころであった幼少期の思い出を画家の眼で童話のように描く前編と、運動の中でふれあった人びとの姿を後編に収めた半自叙伝。

斎藤 日本は徹底して非武装・中立・非暴力に徹する以外ない。どちらの勢力にもつかないこと。

北沢 だけど個人の自衛権っていうのはある。私たちはそれを国家には渡してはいないのだと。だから、非武装中立っていうのとは自衛とは、私の中では渾然一体としてあるわけ。ただしそれは国家の自衛権じゃない。

駒尺 自分を自衛したいから、国家の自衛とはつながらないってことよね。

斎藤 国が自衛という場合は、決して「防衛」じゃなくて、それは「攻撃」なのね。そこをきっちり認識しておかないと。

北沢・駒尺 そうそう。

北沢 それと個人の自衛と国家のそれとはちがうってこと。

斎藤 主権在民という言葉、今はど強く思い起こさなければならぬ時はないような気がしますね。そして市川さんが繰り返してしゃべってたように「権利の上に眠るな」ってことが、ほんとの意味の防衛だろうと思うんだけど。

北沢 そして一連の動きを一つひとつづつこと。政府に対峙するものとしての労働組合にもちゃんとやってもらいたい。

駒尺 それから男を日常性の中に取り込むことも……(笑)。

編集部 と、どうやら、今回はかなりの合意に達したようです。これから情況はますますきびしくなると思いますが、お互いにできるかぎり話し合い知り合って、連帯の輪を広げ、強めていきましょう。

女性と天皇制

加納実紀代編
定価 一七〇〇円

九津見房子の暦

牧瀬菊枝編
定価 一二〇〇円

自由おんな論争

秋山 清著
定価 九〇〇円

思想の科学社

東京都文京区後楽2-16-2
電話 03-813-1745

女性はどうして侵略戦争へ 巻きこまれていった

菅 谷 直 子

財界の一部からも愛国心や徴兵制の必要を説く声があがっている。こうしたなかで総選挙はじめ各級選挙における保守派の勝利と革新派の後退が続いている。

いったい日本はどこへ行こうとしているのか。昭和初年から社会の片隅に身を縮めて戦争へのプロセスをジッと眺めてきた者には今日の世相はまことに憂慮に堪えないものがある。

恐らく、「満州」事変に始まる第二次大戦を体験した女性たちは「戦争はいやだ」と思っているに違いないと思う。そして、当時女性には参政権がなかったから仕方ない、こんどは断固反対する、と言うかも知れない。しかし、私はこんな言葉素直に信ずることができない。なぜなら、男子普通選挙

・四、五年来、保守化、右傾化という言葉がマスコミに現われるようになった。靖国法案、紀元節の復活、元号法制化、そして自衛隊の最高幹部による憲法無視の発言等々、天皇制国家への復帰を狙っているのではないかと疑わせるような政治の動きが目立ってきた。とくに昨年六月発足した鈴木内閣の右傾化に至ってはもはや誰の眼にも明らかになってきた。私的行為といえながら、大勢の閣僚が勢揃いしての靖国神社参拝は、国民へのデモンストレーションとみられても仕方あるまい。法を守る立場にある法務大臣が憲法改訂の必要を公然としかも執拗に繰返し、そればかりか所管外の問題にまで口ばしを入れ、愛国心の不足を云々し、教育制度の改革、教科書の国定化まで唱えている。与党タカ派議員の国防強化の主張も目にあまるものがある。

が実施されたのは一九二八年、すなわち昭和三年である。普選による最初の総選挙で体制批判勢力である無産政党各派の当選者はわずか八名であった。婦人参政権が実現していたとしても、多分この数字に大した変わりはなかったように思われる。

この年は関東軍が中国東北部の軍閥、張作霖を爆死させた年であり、同時に共産党の大弾圧Ⅱ三・一五事件が起こった年である。敏感な国民なら戦争の危機は充分予知していたはずではなかったか。

こんなことを考えると参政権を得たからといって安心してはいられない。ではなぜ女性はその侵略戦争にすんなり協力していったのか、その問題を考える前に、当時の日本の状況をざっとみておく必要がある。

ヨーロッパを主舞台に展開された第一次世界大戦で日本はほとんど一兵も損せず、莫大な利益を得て日本資本主義を飛躍的に発展させ大戦景気にうるおった。しかし大戦終了後の一九二〇年、株価の大暴落が起こり、景気は沈滞し不況期に入った。加えて一九二三年、関東大震災がこれに拍車をかけ、慢性的な経済不況に陥った。昭和に入ってから早々の一九二七年、銀行の取付け騒ぎが起こり、休業する銀行が続出し、政府は三週間の支払猶予令（モラトリアム）を実施した。このため金融恐慌が起こり、不況はさらに深刻化した。そんなところ

に一九二九年、ニューヨークのウォール街で株価が大暴落し、それがたちまち海外に波及して経済恐慌を巻き起こし、資本主義全体が危機に立たされた。

日本もまた世界的な経済恐慌の波をモロにかぶり、致命的な打撃を受けた。当時、日本の輸出品の主力は生糸で、その八五％はアメリカに輸出されていた。アメリカの経済不況は生糸の大暴落となって直ちに日本にはね返ってきた。養蚕は農家の重要な現金収入源であり、製糸工場は貧しい農家の娘の主な職場であった。この二つの収入源を失い、さらに米価をはじめ農産物全体の値下がり、農村の窮乏は極限状態にあった。とくに東北地方は一九三一年及び三四年と二度にわたり大凶作に見舞われ、小学校では欠食児童が続出、娘が大量に売られ、大きな社会問題となった。単純な青年将校をファシズムに走らせたのはこの農村の惨状だったといわれている。正義感が方向を誤ると、大きな禍を招くという貴重な歴史の教訓といえよう。

もちろん不況は農村ばかりではなかった。都市では企業の倒産、事業縮小が広がり、官庁は減俸を実施した。失業者が街に溢れ、日本全体が不景気のどん底にあえいでいた。一家心中、食物のために親が子を殺し、兄弟の間に血みどろの喧嘩が起こるなど新聞の社会面には陰惨な記事が絶えなかった。

政府は戦争準備を進めながら、これを経済国難と称し、愛国心の高揚、家族主義の強化、耐乏精神によって克服しよう

と国民に呼びかけた。

一方、この未曾有の不況を資本主義の不可避な矛盾とみ、その解決を社会主義革命に求めるマルクス主義思想が、労働者・学生・知識人の間にかつてないほど浸透していった。支配層はこれを思想国難と呼び、治安維持法を強化（一九二八年）して苛烈な弾圧を加え、せん滅しようとした。

以上が昭和初期の日本の社会状況であった。

政府が婦人対策について研究を始めたのは第一次大戦後といわれている。理由はドイツが大戦に敗れたのは家庭婦人が真先に音をあげたためといわれ、日本がその轍をふまないようにすることだったという。それ以前農村では小学校単位に処女会が作られていた。内務省はこれを育成・強化し、さらに統合して全国的組織、大日本連合女子青年団を作ったのが一九二七年。内務・文部両大臣名の訓令が発せられ、(深く意ヲ用ヒムコト)の第一にあげているのが「忠孝ノ本義ヲ体シ婦徳ノ涵養ニ努ムルコト」であった。

政府が都市中産階級の婦人を国策協力へ巻き込んでいったのは一九二六年、内務省に設置した「勤儉奨励婦人団体常任委員会」への参加要請に始まるといわれている。これは十五億円の外債償還を国民に肩代わりさせるといいうもので、五十六百万の国民に一人一日一錢ずつの貯金を六年間行なわせるという「愛国貯金」案で、一九二八年実施に移された。

次いで一九二九年、経済不況の深刻化の中で誕生した浜口内閣は消費節約、勤儉貯蓄の一大国民運動を展開した。そしてこの運動の成否は婦人の協力いかんにかかっていると、都市中間層の婦人団体に協力を求めることになり、婦人団体代表、女学校長らを首相官邸に招き、首相・蔵相・内相らが出席して直接運動への協力を要請した。かつて、婦人参政権にせよ、公娼廃止にせよ、婦人団体の要求に一顧も与えなかった政府首脳が頭を下げての要請は前代未聞のことであった。彼女たちがこれを婦人の地位の向上した証と錯覚したことは否めない。同年関西では全日本婦人経済大会が開かれ内相夫妻が出席して、消費節約・勤儉貯蓄を訴えた。婦人たちは感激し、即座に金指輪を抜いて献金する者もあったという。

こうして女権拡張を唱える中間層婦人団体が国策協力へと踏み出したのである。

この政府の意を受け地方では県知事・市長の斡旋で消費節約運動が起こり、各種の婦人会が一緒になって、地域的に婦人連合会が結成されていった。そして一九三〇年、全国的な連絡機関として「大日本連合婦人会」が作られることになった。連合婦人会は家庭婦人の網羅を原則とした全国組織で、上から作られた最初の婦人団体といわれている。正式に発足したのは一九三一年三月である。結成の動機となったのは前年出された文部大臣訓令「家庭教育振興ニ関スル件」であるとされている。その趣旨は、「国の発展、社会の風教の根本は

家庭教育にある。経済国難・思想国難が起こっているのは家庭教育が振わないからである。家庭教育の責任者は婦人である。国運を伸張するため大いに家庭教育を振興しなければならぬ、婦人団体は奮励せよ」というものだった。

資本主義の矛盾という世界的な大問題を家庭婦人の責任に帰する、という、はなはだお粗末極まるものであったが、教育勅語のような重みで婦人団体を奮励努力させる効果を發揮したのである。

「満州」事変の起こった翌三二年には「大日本国防婦人会」が作られた。この団体は他と異なるいくつかの特徴がある。そして考えさせられる多くのものを持っている。

第一の特徴は主婦の「愛国心」から自発的に出発したものであることだ。出発は「満州」事変後、寒夜・極寒の戦地に見送り人もなく送られていく兵士たちへの同情に始まったという。大阪の二人の主婦が彼らに茶菓の接待をしていた。これを伝え聞いた婦人たちが応援に集まり、軍事援護団体として大阪国防婦人会が作られた。こういう団体が関西にいくつが出来たが、最初の主婦が、これは地域的・個人的な問題ではないと陸軍省に援助を訴えた。そして軍部指導のもとに結成されたときは「此の皇国重大の時局に直面致しまして断乎たる伝統日本の婦徳を發揮し国難を打破し国防を安固にし以て皇国興隆の爲一生を捧ぐるは日本婦人の使命」とする総力戦の一環としての婦人団体へと変質していった。ここにはじ

めて「国民皆兵の実を挙げるための婦人国防体制」作りを担うファッショ団体が誕生したわけである。

第二は白エブロンにタスキがけという主婦を象徴するスタイルで、家庭婦人に親しみやすかったこと。

第三は組織の特異性である。在郷軍人会とほとんど同じ組織で、職場等末端組織を重視し、愛国婦人会や連合婦人会等の手の届かなかった職場婦人、たとえば紡績・デパート等に働く婦人を組織したことである。

明治中期に軍事援護団体として発足した愛国婦人会もこの時期には再編成され、慰問袋の募集や戦地への慰問使の派遣に活躍した。この団体は中・上流婦人を中心に組織されていた。

このように、農村青年は大日本連合女子青年団、都市中間層の婦人は大日本連合婦人会、家庭・職場の婦人は大日本国防婦人会、そして、中央・地方の中流以上の婦人は愛国婦人会と、各階層の婦人の大部分が組織の中に組み込まれ、戦争協力へと競い合ったのである。

このうち連合女子青年団を除く三団体は一九四二年統合され、それに婦人活動家が参加して「大日本婦人会」となり、「銃後の守り」に大きな力を發揮したわけである。

ところで婦人指導者たちもこれに劣らず戦争協力者となったのである。

まず大政翼賛会には中央協力会議議員に高良とみ、調査委員会には市川房枝、奥むめお、羽仁説子、国民精神総動員中央連盟には吉岡弥生、竹内茂代、大蔵省国民貯蓄奨励委員に羽仁もと子、大江スミ、河崎なつ、商工省中央物価委員山田わか、入沢常子、教育審議会委員吉岡弥生、国民制服制定委員吉岡弥生、井上秀子、大妻コタカ、市川房枝、その他数えれば切りがないほど有名婦人の九九%が政府の招請に応えている。なお市川房枝が公職追放になったのは内閣情報局の外郭団体で言論取締りに当たっていた大日本言論報国会の常任理事だったことが理由であった。

高群逸枝は直接協力ではなかったようだが大日本婦人会の機関誌に執筆して生活費を稼いでいた。

戦後G・H・Qは二十一万五千名を侵略戦争に追い込んだ軍国主義者・超国家主義的指導者として追放したが、婦人では左の人びとである。

公職追放 井上秀子、吉岡弥生、大妻コタカ
公職追放 山内楨子、竹内茂代、市川房枝

戦争協力について市川房枝は次のように書いている。

「……私共が婦選を属求する目的は、婦人の立場より国家社会に貢献せんがために政府と又男子に協力せんとする所にある。従つてこの国家としてかつてなき非常時局の突発に對し、婦人がその実力を發揮して実績をあげることが、これ即ち婦選の目的を達する所以でもあり、法律上に於け

る婦選を獲得する為めの段階ともなるのであらう。悲しみ苦しみを噛みしめて、婦人の護るべき部署に就かう。」(昭和十二年九月「女性展望」)

これをみると、婦選獲得のために手段を選ばない、という本末顛倒と「国家」と「戦争」の性格についてなんの疑問も持っていないことがわかる。

以上みる通り、山川菊栄、宮本百合子ら極めて少数の科学的社会主義者を除きほとんどの女性指導者・有名人が侵略戦争の協力者となつてしまつたのである。戦後の民主主義時代に育つた世代には理解し難いものであらう。

いったいその原因は何であつたか。前に述べたとおり私は単に女性が政治や社会から疎外されていたからとは考えない。もちろん無関係とは言ひ切れないが、少なくとも主要な原因とは思われない。根源は日本の国体天皇制のものであつたと考えている。

近代日本の天皇制は天照大神の神勅によるものとされ、一般の国民はもとより、天皇の子孫もこれを変えることのできない「天壤無窮」のものとされてきた。したがって国民は天皇制という国体を批判することは許されなかつた。天皇制の政治的表現である明治憲法は天皇の神格性と絶対性を規定している。そして、この憲法は天皇自ら定めた「欽定憲法」で国民は批判することができなかった。天皇の名によって布告

された侵略戦争に反対することは天皇の命令に背くことであり、国家に対する反逆であった。命をかけなければできない行為であった。そのため侵略戦争に反対なものは口をつぐむ以外になかったのである。

一方、天皇制の思想的表現といわれる教育勅語によって天皇制国家の人民の道德基準が示された。忠君愛国と家父長制家族制度、男尊女卑の儒教思想を基底としたこの勅語が「教育の渊源」とされ、それによって日本人の人間形成が行なわれてきたのである。「忠君愛国」を最大の道德とする教育は天皇制を維持するために「勇敢」な兵士と奴隸的人民を作りあげた。

教育勅語による女子教育が良妻賢母主義であった。德育本位の女子教育は性別役割分業を固定化し、個性を抹殺し、合理性や批判精神のない、従うことのみ知った半人間的女性を作った。それは天皇制国家の下部構造・家父長制家族制度の強靱な支柱となった。

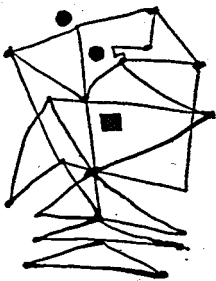
このような教育を受けてきた人びとは身近な問題として男女の不平等に目覚めても国家機構はもとより侵略戦争への疑問を持つことはできなかった。そこに女権論者の悲劇があった。

戦後、明治憲法は改訂され、一九四八年教育勅語は国会において排除決議が行なわれた。しかし、明治憲法や教育勅語の影響は決して払拭されたわけではない。むしろ、現在の政

界・財界・文化界の指導者には戦前の思考を持つものが少なくないのではなからうか。彼らの強調する「愛国心」「国を守る心」に警戒を怠ってはなるまいと思う。「愛国」とは何か、国民は真剣に考えねばならない時である。

最後に女性に一言。たしかに戦後女性の権利の目覚めは素晴らしいものがある。平和への希求も深いようである。しかし、徴兵制度の復活や憲法改正に反対する女性が、昨年の総選挙に株価への影響を考えて政党を選んだという話を聞いた。もし日本に昭和初期のような経済恐慌が再び起こったら、こういう人はどういう動きをするだろうか。私の不安はそこにある。

注戦前の体制内婦人団体の動向については千野陽一著『近代日本婦人教育史』（ドメス出版）に詳しい。本稿もそれを参考にしたことを付記しておく。



『週刊婦女新聞』にみる

一九三〇年代婦人雑誌の

抵抗と挫折

福島美代子

一、はじめに

一九三〇年代は、日本が満洲事変、支那事変と当時呼ばれた中国への侵略戦争の泥沼に足をとられたまま太平洋戦争に向かつてほとんど絶望的に突進していった時代に当たっている。

この一九三〇年代の状況に今の日本が似ているとする意見を最近しばしば耳にする。ストリートに似ているというのは少々極端な気もするが、しかし一年前の財界からの徴兵発言、竹田統幕議長への防衛論議、奥野法相の改憲発言、北方領土の日の制定、年々盛大になっていく建国記念の日と称する紀元節復活指向、そしてこれらへの政府の対応の姿勢を見ると、「日本は絶対に軍事大国にはならない」という再三にわたる鈴木首相の言明にもかかわらず、正直なところ危険だなどい

う実感は否定できない。私が結婚したのは一九四一（昭和十六）年十一月で、対米英開戦の一月前であった。長男妊娠中に夫は兵隊にとられ、終戦後無事帰還したが、戦後の最も苦しい時期に次男三男が続けて生まれた。現在これらの子供と孫たちがちょうど当時の私たち夫婦と子供たちの年齢に達している。最近のキナ臭い風潮に黙っていられぬ気持ちでいたところ、『あごら』編集部から、三〇年代の婦人雑誌について書くようにとの御依頼を受けた。しかしそれではテーマが広範にすぎて一主婦の私の手にはとても負えない。そこで私自身が愛読し、のちにはその主筆の三男と結婚、深いかかわりを持った『婦女新聞』が、三〇年代の軍国主義の風潮に抵抗しながら遂に破れるに至った経過を、私の手もとに残る同誌をもとに振り返りたいと思う。とはいえ、現存し、参照し得るのは一九三五―四二年間のわずかに十数冊にすぎない。

きわめて不完全なものであることをお断わりしつつ、その十数冊の中に反映する「時代」を、できる限りみつめていきたい。

二、戦争前夜

東洋も欧羅巴も暗雲低迷、いつ第二の世界大戦が展開するかも知れない情勢にある。否さういふ情勢らしく見える。従つて国防費を中心とする十二年度大予算は修正を許さざるが如く、産業界は軍需品製造に景氣を呼び、戦争を煽るやうな言論が盛なのを反して、平和主義の論説は影をひそめてゐる。

各国の政府当局者は、いろいろの機会に国際平和を唱へ、共存共栄を説いてゐるけれども、その国の實際やつてゐる事は、次の戦争の準備を中心としてゐるらしく、その戦争を回避せんが為には何等の努力もしてゐないやうに見える。

吾等は、婦人の立場から常に平和主義を主張してゐる。それは、婦人がもし腕力又は腕力の変形たる武力を是認すれば、その点に於て強者たる男子の前に未来永劫屈服してゐなければならぬのみならず、腕力武力が何時でも正義の為に揮はれると決つてゐない以上、これを最後の審判として是認することはその正義観が許さないからである。且又近代の戦争は、数百人数千人を一撃に殺し、多数の非戦闘員までも殺傷する。すべての母たる婦人は、九ヵ月間の妊娠期を経たる後、生死の境を出入して漸く一個の生命を産み出し、それを一人前に育て上げるまでには、少くとも二十年間勞苦しなければならぬのに、戦争は、この生命の数百数千数万を一括して爆弾の標的たらしめるのであるから、婦人としては極力之を避けることに努力するは当然である。

婦人は先天的に平和主義者であり、戦争反対論者である。犬の噛み合ふのすら慘酷として正観するに堪へない婦人が、人間と人間と

の殺し合ふ戦争を是認し得る理由がない。

しかし我國に於ては、これまでの戦争が常に正義と一致し、且いつも勝利を得て、それが国運發展の段階となつてゐるため、婦人も戦争の不合理や慘虐性については鈍感で、柳の下にはいつも鱗があるものと考へ、やゝもすれば大和魂發現の機会を俟つてゐる軍人の昂奮に誘はれて、戦争謳歌者の仲間に入らうとする。そして戦争回避を口にする平和主義者を、愛国心のないも如く誣ひる傾向が、昨今の国防とか准戦時とかの聲の盛な際には、特に目につく。是は深く警戒しなければならぬ。

吾等は平和主義者であり、戦争回避論者ではあるが、愛国の精神に於ては何人にも譲らないつもりである。否愛国心が強ければこそ、国運を賭するやうな戦争を成るべく避けたいと希うてやまないのである。日本は戦争に負けない国だと思ひ込む信念は、御同様持ちつづけたいと思ふが、それだからと言つて、往年のドイツの如く、世界を相手にしても戦はうとするやうな無謀の勇者は、國家の安危を顧みない非国民だといはねばならぬ。

林新首相の政綱声明書中に、「國際正義に則り、東亞の安定万邦の共栄を具現せしむる目的を以て」といふ句がある。國際正義は戦争を最後の審判者たらしむることを否定し、万邦共栄は又戦争に反対を意味する。林内閣がどこまで真剣に、此語句の具現に努力するかは問題であるが、すでに総理大臣が中外に宣明した以上、婦人は之を正直に受け容れて、現内閣は平和主義を信条とするものだと信じ、その方面の注文を遠慮なく持ちかけるが可からう。

他人の事を全く考へない利己主義者は、結局周囲から排斥せられて此社会に孤立しなければならぬと同じく、自国の利益のみを主張して、他国の立場を全然考へない国の外交は、結局世界的孤立に陥らねばならぬ。吾等が愛国心を有する如く、他国人も亦愛国心を有することを理解し、互に寛容の精神を以て接し合うてこそ、万邦共栄の実があがるのである。然も其寛容は、弱國が強國に対してよりも強國が弱國に対してより多く示さなければ意味をなさぬ。

他国に対して寛容などいふことは、准戦時と呼ばれる昨今の如き時代には、愛国心のないものとして罵られるかも知れないが、或る程度の寛容に依つて或る国との開戦を喰ひ止め、それが同時に第二の世界大戦の防止となつたならば、その寛容の精神こそ実に偉大な愛国心の別名であるといつて差支あるまい。

世界大戦は、たとひ勝つても戦争といふものが国家の大損害だといふ事を確実に教えてくれた。之を挑発するやうな言論は不穩文書として嚴重に取締つても可いだらう。

一九三七（昭和十二）年二月第一日曜号の『婦女新聞』巻頭社説で、福島四郎は、「平和思想と愛国心」と題して、このように所信を述べている。いわゆる蘆溝橋事件前夜、戦争へ戦争へと向けてきびしい言論統制が進む中での痛烈な発言であつた。

続く四月第三日曜号、五月第一日曜号には上下二回にわたる「国防と平和思想」が巻頭を飾る。

国防と平和思想——M氏の反駁に答えて——

本紙第一九一四号の「平和思想と愛国心」及び一九一五号の「相反する二方面」と題した社説に付、首肯し難い点があるとして、西宮市のM氏から、長文の反駁の質問を寄せられた。此問題は依然として我々の眼前に横たはつて居り、且国家の動向に関する大問題であるから、同氏への御答かた／＼同一趣旨を又ここに繰返す。

質問の第一は「愛国心は一旦外敵が現はるや熾烈なる敵愾心となり、口火を切れば直に点火して猛烈なる爆発力となる。かくて国防は始めて全きを得るのである。此愛国心を涵養する為の手段を以

て戦争を煽る言論行動となすは誤でないか」といふのであるが、是は愛国心といふ語を非常に狭く、戦争の報国といふだけの意味に解さるる所から起る疑問である。いかなる国民でも愛国心のないものはなく、特に我が国民は宇内無比の国体を擁護し來つただけに、愛国心は極めて熾烈で、是こそ大和民族の誇りであるから、今後益々之を涵養しなければならんが、平時には平時の愛国心がある。国家の生産力を豊富にし国家の文化を向上させ、国民の健康を増進し、国民生活の安定を計る等々に最善の力を尽し、さうして一旦緩急あれば義勇公に奉ずること、現代に於ける眞の愛国心でなければならぬ。平時の愛国心を平時的に涵養しておけば、戦時にはそれが適當の形をとつて発現する。平時から戦時を予想して、女学校で軍事教練や射撃の練習をさせるなどは戦争気分を煽るものでなくて何だらう。

M氏は「生存競争のある以上争ひをやめては自滅の外ない。正義を以て不正義と争ふのは眞の平和主義ではないか」と言つてあられるが、これは未開時代の生存競争と文化国の発展向上とに、格段の差があることを認めない言である。今日は決して武力のみで優者の地位を占めることは出来ない。又武力の弱い者がそれだけの理由で自滅する外ないなど悲観してはならない。早い話が我が国と支那との關係である。武力を以てすれば、今日の支那は物の数でない。我が海・陸軍がもし進撃すれば南京と北平とは数日を出でずして占領することが出来る。けれども、支那から戦争を挑発して來ない限り、我が皇軍が理由なしに支那を侵略するやうな事は断じてない。左様な事をもしすれば、東洋の平和は永久に失はれて、そこへ欧米の諸国がやつて來て、火事場泥坊を働き、我國は得る所よりも損する方が多いだらう。

支那以外の国との關係でも、やはり同じである。記者は、去月十一日の衆議院本會議に於て佐藤外相のなしたる演説（鶴見芦田両氏の質問に対する答）を最も正しい、且時代に適切な意見と信ずる。此演説は後に軍部から横槍が出たとかで補足されたが趣旨は變つて

るない。其結論の要旨は次の通りである。

「三十五・六年の危機といふことがよく言はれたが、既に過ぎ去つた現今から顧みると危機といふものは別になかつた。私は日本のやうな国柄は、出来るだけ国民を落ちつけて焦燥気分を無くすることが最も必要な事と思ふ。私は国民に斯ういふ事を諒解して貰ひたいと思ふ。本當の意味の危機つまり戦争の勃発といふ意味の危機は、日本が之に直面するもの、しないもの、日本自体の考へ如何に依つて決るのである。もし日本が其意味の危機を欲するならば、危機は何時でも参ります。之に反して日本が危機を欲しない、さういふ危機は全然避けて行きたいといふ気持であるならば、私は日本の考一つで其危機は何時でも避け得ると確信いたします」

實際此通りである。国防は国家を外敵の襲撃から護る為のものであるが、我が国が支那のやうな武力の弱い国に対しても侵略戦争が出来ないのと同じに、ロシアも、アメリカも、乃至其他の国々も、我が国に対して戦争を仕懸けるやうな愚を敢てする筈はない。即ち佐藤外相の演説通り、我が国が戦争を避けたいといふ気持であれば、戦争は確に避け得られるのである。これを、今にも戦争が勃発しさうに宣伝して、平時の落ちつきを失はせるのは、戦争を煽るものではないからうか。此の如きは寧ろ本當の意味の愛国心を弄ぶものと言つても可からう。と言つて、吾等は軍備充実を無用とする程大胆にはなり得ない。ただ、他の庶政費と釣合のとれない程軍備費が過大になるのは、隣接国をして疑心暗鬼を生ぜしめ、反つて危機を醸成する事になりはせぬかと恐れるのである。(一九三七年四月第三日曜号)

M氏は吾等が「やゝもすれば大和魂発現の機会を俟っている軍人の昂奮に誘はれて、戦争謳歌者の仲間に入らうとする」と書いた一節を捉へて「これ実に浜田代議士以上の爆弾的言説」だと評し、軍人を戦争謳歌者として非難するのはけしからぬといつて、其理由を力説してゐられるが、是は吾等の本意を誤解されたもので、吾等も

亦M氏と共に、「軍人は戦争を本職とするものであるから、いざ開戦ともなれば、日頃の腕を揮つて拔群の功を立てやうと願ふのは当然である」ことを認め、其為に「国民の士気を鼓舞する諸工作」を敢てしても、彼是非難しようとは思はぬ。けれども其が度を過ぎて、「外務大臣が決して非常時ではないと信じてゐた時代」に、今にも戦争が勃発する如く宣伝し、財政も、産業も、教育までも、その非常時を目標にして指導せねば時局認識を欠いてゐるものゝ如く非難し、一國の全政治を軍部が引きずつてゐる看を呈するに至つては、よしやそれが政党政治の腐敗に原因する反動であるとはいへ、国家の幸福をたらすものとは思はない。それで吾等は反対するが、しかし是は別の事で、M氏の咎められた戦争謳歌者といふ語とは何等關係はない。吾等が戦争謳歌者といつたのは、寧ろ軍人以外の、金儲けの為に戦争を誘導しようとする軍需品製造の資本家等を意味するのである。一般国民が忠勇なる軍人の昂奮に共鳴して、それ等腹黒い戦争謳歌者の味方になつてはならないといふのであつた。

次にM氏は、国家の軍事費の多寡を以て軍国主義平和主義を區別することは出来ない。「若し軍備を以て戦争を意味するとならば、平和主義を実現するには全然軍備を撤廃して非武装としなければならぬ」と言つてゐられるが、是はあまりに極端ないひ方である。吾等は決して、全軍備を無用とするやうな夢想的平和論者ではなく、寧ろ健全なる平和を維持する為にも或る程度の軍備が必要であることを信ずるものである。けれども、国家の全歳出の約五割を軍事費として支出する現状の如きは、諸外国をして益々恐れを抱かしめ、彼等の軍事費をも増大せしめて、一層危機を醸成するに至りしめぬかと心配するが、是は今更どうするも出来ないから、国民としては、此際なるだけ国際親善に力を用ひ、戦争を回避する方面に努力するのが、国家に対する忠誠であると思ふのである。

尚又M氏は、吾等が「たとへ戦争が不可避であるとしても、いよ／＼砲声の轟くまでは、なほ望みを捨てないで平和の為に努力するのが婦人の使命でなければならぬ」と言つたのを不徹底だとし、「そ

れ程婦人の平和主義を強調するなら、たとへ戦争の火蓋は切つて落されても、戦争の真最中でも、どこまでも平和主義を主張し続けるべきではないか。最後のどたん場まで平和主義で行き、いよいよ「開戦となつたなら其先は戦争の為に働くといふのでは、最初の主義はどうなるのか」と極論してゐられるが、是は実に吾等の国民生活を無視した無礼千万ないひ方である。

吾等不敏ではあるが、此三千年來の祖国を愛する熱情に於ては、敢てM氏に譲らないつもりである。吾愛國心があればこそ此國を世界列國の憎まれ者たらしめないやう、共存共榮の平和主義で進みたいと思ふのである。数十年前の昔とちがひ、又伊太利のエチオピア征服とはちがひ、文化の進んだ國と國とが戦争すれば、其犠牲があまり大きい為、勝つた國でも得る所は失ふ所を償ふに足らないこと、決定的である。然もそれは婦人の本性に反するものであるから吾等は最後のどたん場まで、平和の為に働くのが婦人の使命だと信ずるのである。けれども、婦人も亦國民である、平和工作効を奏せず、戦端が既に開かれた以上、即時に国内的闘争を中止し、個人的利益や、従來の行がよりや平素の主義も一擲して、協力一致敵國に當り、祖国の名譽を維持するに努めなければならぬ。そこに何の矛盾があるか。もし矛盾と認められるものがあれば、それは人類の一員としての婦人の使命と國民の一員としての婦人の義務とが、未だ一致するに至らない現代文化の幼稚さが然らしめるのである。

(一九三七年五月第一日曜号)

日中戦争開始前とはいへ、いささかでも軍部に批判的な言論を為す者は非國民と呼ばれ弾圧された当時の記事である。人民戦線第一次檢舉(四百余名)もこの年のことで、これを契機として自由主義・民主主義も共產主義の温床となるという政府見解が出され、言論は全く政府の統制下におかれた。

過日亡くなつた前京都府知事蟻川虎三氏の「反共は戦争前夜の声」という言葉が思い起こされる背景を考えると、愛國心を軸にしているとはいへ、なみなみならぬ覺悟の発言であつたと思う。

ところで日中戦争を目前にしたこの時期、世相はどのようなであつたらう。冒頭の社説が掲載された同じ号から二つの記事拾つてみよう。

〔社会時評〕

親の犠牲となり 睡眠剤を服む小学生 藤田 たき

入学考查期を控えて、アダリンやカルモチンがめつくり売れ出したとの情報に、八王子市教育課が、あはて出したとのニュースには、寒心に堪えぬものがある。之は考查合格を熱望する父兄が、同市に於ける準備教育廃止の為に、種々の参考書を中心に、自宅で受験準備をすゝめるため、勢ひ深更におよぶまで勉強せしめる結果、児童の安眠をさまたげるので、睡眠薬を使用させる家庭が多いのであるといふのだ。

私は八王子市の小学校に於てはたして準備教育が完全に廃止せられてゐるかどうかをつまびらかにしない。また買はれたアダリンやカルモチンが、どれだけ子供によつて服用されるかも勿論明かではないと思ふ。また一医師が述べてある如く「現在販売せられてゐるアダリンやカルモチンは、モルヒネ剤でないから副作用はなく、睡眠不足の場合は却つて喫んだ方がよい」のかどうかもしらぬ。

だが、小学生にカルモチン！ 小学生の不眠症！ 之が人生の悲劇でなくて何であらう。遊びたいさかり、眠いさかりであるべき小學生が、青い顔をして眠られぬ夜を睡眠剤になぐさめられる。こんな事で日本の國家の前途をあやぶまないであられようか。

何故にかゝる悲惨事が、毎年春ともなれば繰り返へされなければならぬのであらうか。この弊が清算せらるゝ前に、日本の全教育制度の改革が必要である事は言をまたぬ。軍事實は削減せられても、教育費が激増して、あらゆる中学校、女学校が設備のととのつた、いづれ劣らぬ立派なものに仕立あげられねばならぬ。(中略)

だが、あはたゞしきは日本の政界である。幾分抱負ありげにみえた平生文部大臣は、早くもその椅子を去り、義務教育延長案もその前途を危ぶまれてゐる。この先どうなりゆく事であらうか。入学期の父兄の、将又児童のなやみの解決をまつのは、百年河清をまつ感がある。仕方がない。私はこゝに於て、父たり、母たる方々の反省を望むのみだ。発育ざかりの児童の身心を萎縮させ破壊してまでも、いはゆる評判よき学校に子供を送らねばならぬ理由が、どこに存在するのであらう。私の友人の一人は「家の子供はどうしてこんなに勉強しないのだらう」と、伶俐な、だが身体の弱い子供に躍氣になつて勉強させてゐる。彼女の友達は、実によく子供等の学校を參觀に行く。だが、その母親達の胸には、子供等の中には思ひもかけない競争心が燃えたつてゐるのだ。何の事はない、子供等は親共の競争心虚栄心の犠牲となつて、夜遅くまでいぢめられ、遂ひに興奮のあまり眠れなくなつてしまふのである。子供を自分の愛玩物、自分の名譽心を満足せしめるものと、しらずくの中にみなす事が、子供の一生をあやまらす事になるのだ。母たるもの、父たるもの大いに反省しなければならぬ。

偏狭な国粹主義を排す

巨匠エルマンと盲目の名人今井慶松氏の国境を越えてのかたい握手は、近頃うれしい光景であつた。殊に今井慶松氏は、エルマンの始めて来朝せし大正十年、彼の名を琴柱の裏にほりつけ、エルマンの入神の境地を琴に生かさうと涙ぐましい精進をつづけて来たといふ。この美しい国際佳話、私の胸をあつくした。

「我国固有の立憲政治」「我国独自の立場に於いて」等々！ 此頃、

私等は何と「我国独自の」「我が国固有」のカラの中にとちこもりたがつてゐる事であらう。だが、純日本的な、我国固有の琴の大家今井氏さへ、否今井氏であるが故に、外国の長所をとり入れ、外人の意氣に感じ、その名を神聖なるべき琴柱にまでほりつけたのである。私等はこの精神を記憶したい。それは偏狭な国粹主義のなし得ない大事をなしとげ得るからである。而して私は、国境を越えてかゝる友情のむすばれる時、相反する二つの国も溶けあふものである事を信じた。

(一九三七年四月第三日曜号)

〔今週の時事問答〕

軍部と政党との離反——政情不安の根本問題

松本 悟朗

時局認識の相違

A「軍部と政党との対立関係が容易に片づかないやうに見られませんが、一体これはどういふ原因によるのですか」

B「それはなか／＼深刻な事情に基くもので、その点がうまく解決つかなければ、現在の政情不安は容易に解消されないと思ひます。軍部と政党間の対立の原因は一体どこにあるかといへば、それは結局両者の内外時局に対する認識又は理解の相違に依ると見る事が出来ませう。又両者の認識の相違は、今日では政治思想、即ちイデオロギーの相違にまで深められてゐるのです。

先づ簡単に軍部の考へをいつて見ますと、次のやうな事になります。

満洲事変以来日本は満洲とか北支とかいふ大陸方面に向つて進出し、いはゆる大陸政策といふものを実行せねばならなくなつた。と同時に極東に進出してゐる英、米、仏、ソ連等々の欧米諸国といふ／＼の点ですれ合ふ事になり、つひに連盟脱退を余儀なくされ、従つて又國際的孤立を余儀なくされた。

しかもそうした孤立無援の立場において、東洋の指導勢力として、

東洋平和のための諸政策を進めて行かねばならない。それには国力の充実を必要とするが、先づ第一条件として、諸外国の勢力に対抗して行けるだけの軍備が必要である。殊にソ連邦は極東経略のために龐大な軍備を整へて、思想的にも實際的にも満洲や支那への進攻的態勢を示してゐる。英、米も亦いろ／＼な形で支那経略の歩を着々進めてゐる。これを適當に抑へて行けるだけの軍備が日本に欠けてゐたのでは、満洲や支那が危いばかりか、日本の国運も誠に危険である。だから他国から戦争を仕掛けられないためにも先づ必要程度の軍備を備へる事が大事であるが、現在はいそれをしてゐる。

また国内問題としては、軍備の充実を図つたり、一般国防力の強化を図つたりするためには国内の政治のやり方の経済の組織を或る程度まで改革せねばならぬ。いはゆる庶政一新の必要がある。然るに既成政党は我国内外の非常時の認識を欠き、徒らに現状維持、事なかれ主義の懶惰な思想に耽り、何等積極的革新的な意気も政策も持たせてゐない。そして革新的な軍の態度を徒らに非立憲的だのフッショだのと攻撃してゐる。だからこんな認識不足な政党連中を相手にしてゐたのでは、必要な国策の実行は出来ない。

軍部は、マア大体こんな考へから政党を排撃してゐるわけです」

既成政党の考へ

A「それに対して、既成政党側はどんな考へを持つてますか」

B「既成政党——代表的なものは民政党と政友会ですが——の連中にもいろ／＼意見の相違があり、必ずしも一致してゐるはないが、大体次のやうなことになります。

我々も日本が国際的非常時に臨んでゐることは知つてゐる。又軍備充実の必要も解つてゐる。従つて軍事費の膨脹も止むを得ないと思つてゐる。しかし国防力は單に軍備の充実だけで強化されるものではない。一国の経済力が先づ大事である。それには産業の発達が大抵であり又国民の生活安定も大事である。だから軍備の充実と並行して、産業の発達とか民力の充実が必要であつて、只軍備だけを充実しても、腹が減つては戦さは出来ない。だから徒らに軍備を急

ぐために、国力に伴はない軍事費を支出したり、国内産業の発達を萎縮させたりしてはいけない。また無理な革新政策を実行して産業の自然的な振興を邪魔したり、民心を萎縮させたりすることはいけない。凡ては、合理的に漸進的に進められなければならない。

然るに軍部の意図は余りにも一面的であり且つ急進的である。可なり行き過ぎやうとする危険がある。だから我々はそれを戒めるのだ。といふわけですね。

つまり軍部から見れば、政党の時局認識はナマぬる／＼、その政治思想は余りに現状維持的で積極性を欠いてゐるといふことになり、又政党から見れば、軍部の考へは余りに時局の急迫を誇大的に考へてをり、また余りに急進的であり過ぎるといふのです。

これを押しつめて行くと、軍部の考へは、国家全体の存亡のためには国民はモット自己犠牲的でなければならぬとしてをり、政党側は個人の自由企業や営利の自由等を抑圧して、国力の強化も国運の発展もあり得ないと見てゐるわけです。

かうした国家主義的、全体主義的思想と個人主義的、自由主義的思想との対立は、世界的現象ともいへませうが、然し日本の現状から考へる場合、これは革新的現状打破的の立場と消極的現状維持的の立場との衝突であると思ふ事が出来ませう」

今後の情勢

A「して見ると両者の対立は頗る深刻なものと思はれます」

B「そうです。そうした立場の相違、考へ方の相違がどうしても融和出来ないところに両者の抗争があり、政友不安があるのです。廣田内閣の総辞職も、宇垣内閣の流産も、林内閣の誕生も——そして不安が容易に一掃されないと見られる理由もあるわけです。

議會再開の頃には政党方面がやや御調子に乗つて、態度の慎重を欠いた風があつたので軍部の反撃をうけました。その結果理由のハッキリしない議會解散論となり、やがて内閣の総辞職となり、次にはいきり立つた軍部が宇垣内閣の誕生を流産させ更に林内閣の成立については、結局政友党人の入閣を斥けて政党との絶縁を見る、とい

つたわけで、これ等の事実を通じて益々軍部と政党との関係が離反しつつあるのです。政務官存廃問題なども起つてますが、これも政党排撃の一つの現はれに過ぎません。

なほ陸軍側の意向としては、依然議會解散を希望してゐますが、これには海軍側との若干見解の相違もあり、政党の出やうではその事なくて済むかと思はれますが、しかし時と場合でどうなるか予測を許しません。

いづれにしても、軍部と既成政党との対立は依然続くものと思はれますが、その根本解決は、今のまゝではどうしても望まれないでせう。
(一九三七年四月第三日隔号)

軍事費が教育費を圧迫する中での受験地獄、政党政治の腐敗につけ入って増長する軍部、鼓吹される国粹主義などがうかがわれる。昨今の世相に鑑みても考えさせられることが多い。

三、不 況

ここで一九三〇年代の日本の状況を一瞥しておく必要がある。三〇年代は、国民の側から言へば、前半は深刻な不景気と失業、後半はインフレと生活必需品の不足と重税による果てしない生活苦の時期であり、政治の側で、対外的には国際社会における日本の孤立化、対内的には一貫して軍部が政府を引きずって日本を破局に追い込んでいった暗黒の時代である。

年表によると、結果的に昭和恐慌の引き金となった浜口

内閣による金解禁の実施が一九三〇年一月、翌三一年満州事變が始まり、東北地方は冷害で凶作のため娘の身売りが日常のことになる。「山形県奥地の凶作地、最上郡西小国村では十五歳から二十四歳までの女四百六十七人のうち、五四パーセントにあたる二百五十人が家の窮乏を救うため、芸娼妓として離村していることを新聞は伝えている」(1)

一九三二年には五・一五事件があり、農漁村の欠食児童二十万と文部省が発表している。小学校教員の給料不払問題が新聞紙上を賑わしたのもこの頃であった。一九三三年三月、日本は国際連盟を脱退。続いて十月ドイツが脱退、一九三六年二月、二・二六事件、五月、軍部大臣現役武官制復活、そして三七年七月の蘆溝橋事件となる。

当時の庶民生活の一端を、手許に残る三冊の『婦女新聞』の記事に求めてみよう。

思ひがけぬ欠食児の発見から 給食事業の発展まで

志村第一小学校木内キヤウ氏の話

公立小学校に於ける最初の女校長と世間に騒がれた木内キヤウ女史が、板橋区志村小学校に赴任してから、早くも四年の年月が経つ。当時は、婦人が公立小学校の校長になることについて、その成否をひそかに案じたり疑ったりした向きも少くなかつたのであるが、人々の相憂を裏切つて女校長の評判は益々よいやうである。志村第一小学校の生徒数が当時は僅々六百余名に過ぎなかつたものが、今日では千三百名を数へるに至つたと云ふのも、女史は志村一帯の発展のためだと謙遜されるけれど、一

つには女史の校長としての人望の致す所と見て誰も異議ないであらう。

記者はこゝに女史の校長としての功罪を数へようと云ふのではないが、ふとした機会に知った志村小学校の欠食児童給食の話に、いたく心を打つたのがあつたのを、それが女の校長ならではと思はれる節々も多いので、こゝに紹介したいと思ふ。

x

私が志村小学校に赴任したのは昭和六年七月でした。それまで勤めてゐた日本橋の十思小学校に較べれば、多少は田舎くさく、貧しげではありましたが、然し見た所、之と言つてみじめに思はれる節もなく、

欠食児童があやう

とも思ひませんでした。其頃は世間でも欠食児童の事が漸く問題になり始めた頃で、給食運動などもポツ／＼行はれてゐましたが、徹底的なものは一つもありませんでした。志村第一小学校でも勿論なく、ただ時にお弁当を持つて来られない子があると、先生がパンなど買つて与へる位のことではあつたやうでした。

さて赴任してから四ヶ月目の十一月二日から三日のことでした。運動会の翌日、二年生受持の佐藤先生が見えて、実は数日前から休んでゐた児童の母親が子供を連れて参り、校長さんにお目にかゝりたいと申してゐますが、との事です。さうですか、何か知らないが社会ひしませうと応接室に通して置いて面会しました。

私は赴任後日浅く、校内の事情がまだ詳しい所までは分らない頃でしたが、その母親と云ふのは、和子さんと云ふ当の児童と、三つ位の男の子を左右につれ、背中に女の子を負ぶつてゐました。身なりは子供達にも先づ先づ尋常な着物を着せ、母親もニコ／＼餅のねんねこ裃てんを羽織つて、髪は櫛巻きながら、見苦しいやうな風は少しも見せてゐません。

總て母親が

言ひ出すには、子供を四五日も休ませてほんとにすみませんでし

たが、もう運動会もすみしましたので今日から出席させに連れて参りました。つきましては、よく／＼言ひきかせてはございますが、若しや人様のお弁当に手でもかけますやうなことがございましたら、どうぞきびしくお叱り下さいませ。と申します。

今まで休んでゐたが、今日運動会だから出て来たと云ふなら有りさうな話だが、運動会がすんだから出席すると云ふのは妙な話だなと、一寸狐につまゝれたやうな感じでしたが深くも氣にとめず、人の弁当に手をかけると云ふのは盜癖でもあるのかと、その子に向ひ、人のものに手をかけると云ふことは大変悪いことです。そんなことをするやうでは、大きくなつても立派な人間にはなれないからと話してきかぬでした。すると母親が遮り、いえ、人様のものに手をかけると申しましたのは、この子が悪いのではありません。家庭が不如意で喰ふや喰はずの生活をして居るものですから、おなかの空いた折など間違ひがあつてはいけないと思ひまして、と申します。それで私は、そんな時は私の所へ言つておいでなさい、パンでも買つて上げるからと申しましたが、子供にあまりそんな話を聞かせるでもないと思ひ、もういゝから和子さんは教室へ行つてらつしやいと、去らせようとした時、給仕がお茶を運んで来ました。すると、母親の背に負はれてゐた女の子が、お茶を見るなり飛び上つて、

「かあちゃんお茶々々」

と叫びます。母親は子供を制しながら、では頂戴いたします、と丁寧に挨拶して、子供の口を持つて行きましたが、子供はそれを驚づかみにするなりガブガブガブと一気に呑み干したのです。その様子のすさまじさに、私は呆氣に取られて見て居りましたが、まだ、よほどのどが乾いてゐるのだらう位にしか思ひませんでした。背中の子はもつともつと立てつゞけに三杯も呑み、下の二人の子もあたいにも俺にもと呑むのを見て、迂闊な私にも漸く氣のついたのは、お腹がすいてゐるのかも知れないと云ふことでした。

そこでふと思ひ出したのは、昨日の運動会に買つた餅菓子がまだ

大分残つてゐたことです。日本橋あたりで餅菓子を一元買つても、いくらも有りたないので、そのつもりで一元買つたら、こゝでは驚く程沢山あつたので喰べ切れなかつたのです。それを、あまり沢山盛つてもおかしだらうと、どこまでも悠長な考へで、お盆に七つだけ盛つて来させ、残り物で失礼だけれど、よかつたら召し上りませんか、すゝめしました。背の子はそれを見ると、又も身もだえして狂喜し、アーアーと云ふやうな叫びを立てゝさがみます。母親は、それでは遠慮なく頂戴いたします。御免なすつてと、羽織つてゐたねんねこ褌を脱いで子供を下ろさうとしました。

所がその時アツとばかり驚かされたのは、褌てんの下から現れた

親子の服装

です。外から見た時は分らなかつたが、母も子も着物とは名のみ、何とも言ひやうのない汚いボロを身にまといつてゐる、而も十一月の寒空だと云ふのに、単衣ではありませんか。

先程からの応待にもよく訳の分らなかつた私は、あゝこの人達は貧乏なのだ、漸く目のさめた気持でしたが、下された子は、いきなりお菓子に飛びついて、両手につかむなりむしやむしや喰べ始めます。母親は、これそんなお行儀の悪いことをと叱りながら、両脇でもち／＼してゐる二人の子にも持たせると、皆ガツガツして喰べるのです。

よつばどお腹が空いてゐるらしい可愛想に。今は私の方が見てゐるに堪へられない気持になり、残りの分もお盆一杯に盛り上げて持つて来、お好きなやうだからもつとお上りなさい。私は一寸用をして来ますからと、三人だけ残して、三十分位校内を廻つてから、再び応接室に歸つて参りました。見ると、

山程あつた餅菓子

が三つ四つしか残つてゐず、子供は元のやうに母親の背中に納まつて、子供達も打つて變つて嬉々とした様子でした。

母親はすつかり打ちとけた様子で、幾度も幾度もお辭儀をし、お

蔭さまで生き返つた心地でございます。何しろもう今日で五日ものを頂きませんので、と申します。五日も？ 私は有るべからざるこのやうに聞き返しました。それ故子供は学校へ行きたがりましたけれど出す訳には参りませんが、と申します。では一体あなたの御主人は何をしてゐらつしやるのですか？ 鍛冶職人ですが、此の頃は殆んど仕事がなく、働いたり働かなかつたりです。よく行つた時で一月の収入が十三、四円、悪い時は五、六円しかございませんが、それではどんなに詰めてもやつて行けません。何も喰べるものゝない時は、いつも寝転んで動かないやうにして居りますから、大人はそれでいゝけれど、子供はどうしても動きたがりますから、自然お腹も空いて可愛想でございす。之で子供が七人もあるとか主人が働けない病人であるとかすれば救護法にかゝれるさうでございすけれど、私共ではそれも出来ませんので難儀いたします。と涙ながらの物語りです。

親子一家が五日も

物をたべない。十一月に単衣のボロで裸へてゐる、我々には想像も困難なさうした生活が、直ぐ目の前で行はれてあやうとは。自分は今まで自分を貧乏暮らしたと思つてゐたけれど、成程ほんとの貧乏とは之か、あゝ勿体ない事だ、それにしても何とかこの人達を救ふ道はないかと、深く心に銘じ、いろ／＼考へて居りましたが、その後以前の十思小学校に参りまして、こゝでは又富裕な家庭の子女が多く紫のセーターがはやると言へば、こゝつて紫のセーターを作る、緑がいゝと言へば忽ち皆緑を新調すると云ふ風な所なので、子供達を集め、皆さんは何不自由ない生活をしてゐるけれど、一方にはかうした可哀想な子供もゐるのですから、むだなお小遣ひを儉約して助けて上げて下さいと話しました。

子供達は純真です。この話に感激して家に歸つて父母に話しましたものと見え、父兄から成つてゐる後援会々長である方が、法事を質素にして浮いたお金が十円ございすから志村の子供に上げて下さいとお金を持つて見えられました。私は天にも上る心地でお米を

買ひ、梅干を入れたお握りを拵へてお弁当のない子供達に与へました。

これがきっかけで給食が発展して行つたのですが、和子さんの他彼女と同様の境遇にある者がそれを機縁に続々現れ、一校を通じて約百名程になりましたが、毎日の給食人員は三十名から四十名位の間を上下してゐます。中には、弟や妹も御飯をたべられないでゐますから、私の分を分けてやりたい、連れて来ていゝでせうかと言つて弟妹を連れて来、

一つのお握りを三つ

に分けてたべると云ふ涙ぐましい情景の展開することもあります。然し、何時までお握りばかりでは可哀想だと思ひ、よそで給食と言へば大抵はパンを与へるやうですが、パンは高いばかりであまり喜ばれないし、安い経費で栄養価のあるおいしいものをたべさせるには、面倒を厭つてはゐられないと小使さんや女の先生方に頼み、ライスカレーとか、シチューとか野菜の煮付とか、魚とか、いろいろのおかずを拵へて与へてゐます。(中略)子供や親の喜びは云ふまでもありませんが、時々面白い発見があります。給食は私や他の先生が誰か一人は必ず一緒に頂くことにしてゐますが、或る子が妙な顔して云ふに、あたにいんちの肉は硬いのに、

学校の肉は軟いね

その子は家では安いコマギレか何かしか買はないので、肉とは硬いものときめこんでゐたのでせう。(中略)

給食の他、十思小学校の子供達が心尽しのセーターや洋服なども与へますが、やつともそれを着て来ない。いくら貧しくてもやはり人のお古は嫌やなのかと撫然とした感じがした。就て式日が来た時以前貰つたのを得々と着て出て参るではありませんか。ふだん着には勿体ないといふ行にしてゐるのです。こゝでも、一寸見ただけではほんとの事は分らないものだと思はされました。(後略)

(三四年七月第四日曜号)

極底を行く東北農村の実情

関川 翁 助

今年の夏の頃、濁酒密造を発見された一農家があつた。当然密造に使用した器物は一切税務署員の手で封印されてしまつた。そして此の犯行者は地方の風習といつても、働き盛りの主人やその他の人々が、罰金代りの苦役に行つたのでは、その日からの農作に困る処から、大部分は農業労働の出来ぬ老人、殊に老婆が一身に罪を着る事になつてゐる。大体寒地の農村は、常に飲酒を以て唯一の楽しみとしてゐる。勿論他には楽しもうにも何一つ寒村の人々の娯楽設備といふものはないのだ。然し、その唯一の楽しい飲酒も養蚕が駄目、農作が駄目となると、一升七八十銭の清酒は余りに高価に過ぎるのだ。そこで濁酒が密造される。便所の屋根裏、裏山の中腹の萱の中、川の断崖の岩角、蔵の乾草の中、炉に近い縁の下など、それは濁酒密造の常套的醸造場所である。

然しどこに作つて置いたにしろ、特有の強い臭気が一二町も先から判るといへる代物だから、大抵は発見される。(中略)かうした濁酒密造犯の頻出からこれが矯正の為、一時は戸主会、主婦会が罰則を設け、犯罪者から公の罰金と同額の罰金を戸主会、主婦会に納めること、犯罪者はその地の区長同伴で区内各戸を廻り区の名譽汚損を謝罪して歩くこととか、或は濁酒密造を出した区内は各戸から何がしかの共同責任としての罰金を右の会に納める事等々の非常手段が講ぜられてゐた。

然しこれらの強制的な矯正法も困ればこそその犯罪では、峻厳な実行は難しかつた。が、大体此の種の共同責任を負ふといふ建前が徹底して、一時は全く濁密の跡を断つたかに見えた。それが不況に喘ぐ農村には漸次増加の傾向にあつたが、此の凶作で更に拍車をかけて増加して来た。が、それは多少食ふ米がある地方の事である。飯米すら不足で備荒食物で一日の食糧の大半を過してゐる農村には濁酒材料たる米がないのだから、唯一の農民の楽しみたる飲酒は当

然失はれた思出にしかならない。

百姓の多くは酒を止めしといふ もつと困らば何をやるらむ
これは啄木の歌だ。今東北農村の大部分は、そのもつと困る時に
遭遇してゐるのである。

話は前に戻るが、濁密で挙げられた農家では、老婆が罰金代りの苦
役に行つた。そして秋になつた。夏中でも七八の二カ月に恵まれた
晴天たつた四日、後はお天とう様の顔が拝めなかつたといふ冷害。
秋も早かつた。寒さは直ぐ冬を思はせるやうになつた。夏のうちは
太陽がなくなつても裸で田畑に出られたが、秋に入つては野良着がなけ
ればならなかつた。が、その野良着は夏の濁密の際、桶を包んだの
で、そのまゝ未だに封印されてゐる。

止むを得ず封印解除を願ひに税務署に行つた。係官も同情して桶
の中の濁酒を川に流すことを条件に自由解除を許して呉れた。それ
がまたいけなかつた。やがて税務署員が再び解除の跡を調べに行つ
たら、桶の中には新しい濁酒がまた造られてゐた。といふのは、自
由解除であけた桶の中は、時日も経つてゐたので、濁酒が喉仏を喰
らすほどの芳香を放つて醗酵してゐた。彼は遂に酒の誘惑に陥ちた
のであつた。自由解除を許したのだ、二度とは来まいと、古いのは
飲み平らげて再び仕込んでゐたのであつた。

かうした濁酒密造などの嗜好に陥された犯罪は、飯米を節約して
までも行はれる傾向があるが、前述のやうに肝心の材料たる米がな
い為に濁酒が出来ないとなると、これは弊害除去の喜びと困窮の悲
しみとが、紙一枚の裏表に隣合せてゐるわけである。

「お父さんは、もうたべるお米がすくなくなつたから、明日からは
おまんまをたくさんたべるなといひました」といふ悲しい児童の作
文が、図作各地の小学校教師に涙を以て読まれてゐる報道が度々あ
るやうに、お米はもうない——の悲痛な声は、今や東北農村至る所
に聞かれる言葉である。

昨年は米の暴落で困つた、小麦は比較的好かつた、といふので小
麦に力糧を入れて作つた今年は、逆に米が勝つた。その騰貴した米

が売るところか食ふのがないといふ凶作。一方小麦はよく穫れる筈
だつた。が、これは水害で水を被つてしまつた。冷害を気づかひ乍
らの田の仕事に追はれ、また長雨で乾燥せぬ為、脱穀する間もなく
芽が出てしまつた。腐つた。で、結局これは收穫皆無であつた。勿
論冷害の為には、詩けども、詩けども、次から次と種子が腐つて成
長せず、大根も粟も駄目なら、芋も腐つてしまつた。何の為に働
いた一年であつたか。その上今年は山のものも駄目だつた。一番腹
が肥る粟は、不昨年のに廻り合せに、花が瘦せて実らず、殆ど收穫皆
無であつた。

かうなると、一体何を食べて冬を越していゝか。全く見当がつか
なくなる。だから家から村から、一人でも多くの口数を少くしよ
うと、思ひ余つた上での出稼ぎ、身売りが続出してゐるのである。

(三四年十一月第一日曜号)

東北凶作地 娘救済の成績

愛国婦人会、婦人矯風会、真宗婦人会の子女救済資金、婦女就職
資金の現在迄の貸付成績をきくに岩手、宮城、青森、山形、福島、
秋田、東京を推算して申込み総数は六百二十七名、内適当なりと認
めて貸付けた数四百六十三名、金額二万五千六百七十六圓二十銭、
子女救済資金二百六十名、婦女就職資金二百三名となる。右両資金
貸付の府県別は岩手七十五名、宮城六十六名、青森百十五名、山形
百九名、福島四名、秋田九十名、東京四名。
尚申込者中不適当と認め拒絶した者三十六名、適否調査中の者
百二十八名で申込金額は八千二百三十五圓となつてゐるが尚三団体
では今後共救済運動を継続する由。(三四年十一月第一日曜号)

全国の間の女 東北六県がトップ

公娼廃止が全国的争論となつて論議されてゐる折柄、内務省では
昭和十年二月一日現在で全国各地方長官並に警視總監よりの報告に

基き全国の芸娼妓、酌婦、女給等の人員調を発表した、これによれば全国を通じて芸娼妓、酌婦、女給の総数は三三、七〇二人で、内訳は芸妓七三、四三〇人、娼妓五〇、四六一人、酌婦一二、七三六人、女給九五、〇七五人である。而して凶作地獄に喘いで身売りの痛ましさを敢てした東北六県についてこの統計を見ると、その六県に本籍を有する芸娼妓酌婦女給の数は三二、二八四人で全国総数の九・七パーセントに当り芸妓四、六一九人、娼妓一〇、六一一人、酌婦八、九二七人、女給八、一二七人である。東北六県に本籍を有する者の中県外稼業者は総数の七割を占め、特に娼妓は九割に達し、東京に於ける娼妓総数九、二五〇人中五・一パーセントは実に東北六県に本籍を有するものであると云ふ悲惨な状態で、東北地方が極度の疲弊を明らかに物語つてゐる。

(三五年五月第四日曜号)

死を追ふ母・妻

三児と心中を図る

豊島区雑司ヶ谷三ノ五一九聖勞院母子ホームに厄介になつてゐる岩壁のぶ(三六)は九日早朝長男十歳を頭に九つと六つの三児と母子心中を図るべく先づ六つの二男を手拭で絞殺したが怖くなり、聖勞院長に自首、目白署で調べ中である。のぶさんの夫は古物商であるが生活難から行方をくらまし、聖勞院の一室を借りてゐたのぶさんも数日来子供に一物を食はせることも出来なかつたため。

白痴の子を悲観して

豊島区長崎東町三ノ五六六陸軍省勤務案剤師吉田正市氏の妻けさ(三八)は末児を背負ひ井戸に投身自殺した。

大阪の母子心中二つ

大阪市港区千代見町一ノ一〇郵便局員久森勇の妻かつ(二六)は次男(二二)を抱いて投身自殺。

同じく大阪西区北堀江上通一ノ二六上村助三郎妻かやの(二八)は長女(四二)を抱き天保山海岸で投身。

酒乱の夫を絞殺

中野区上高田二ノ三一六便器掃除業長澤金三郎(三六)の妻はな(三二)は六日夜酒乱の夫を鎮めようとして紐で縛り上げ、戸外に逃げた子供を迎へに行つて帰ると夫は絶命してゐた。

不和から母子心中

駒込神明町車庫詰市電運転手稲次氏の妻みさ(三〇)は七つと五つの二児に毒最中をたばさせ自分もたべて母子心中した。

(三四年十一月第一日曜号)

「談話リレー」

日本よ此の叫びを聞け

——うらぶれの朝鮮を顧みて——

黄人社々長 李 東 華

李氏は、黄色人種の大同団結を目的とする黄人社を組織して、日鮮満洲の融和運動や朝鮮満洲などの施政の研究に努力してゐられ、且つ童話作家でもあります。

盟主は日本

あなたはどうか云ふつもりで僕の所へ来られたのですか？ 朝鮮の真相が知りたい、朝鮮人の真の叫びが聞きたいと言はれますか。

僕は日鮮融合論者です。日本を除外して朝鮮の救はれる道があるとは思はれない。日本は東洋の盟主です。白人は今や没落しつつある。今こそ東洋民族、黄色人種の起つべき秋です。而してその指導権を持つ者は日本人の他にはない。一九三五、六年の危機は目前に迫つてゐる。それは白人との戦ひだ。この時、日本を守つて東洋の覇権を確立するのだから、さうでだに西洋の圧迫を蒙つてゐる東洋の、更に弱少の民族たる朝鮮が、何時の日か救はれます。私は十数年前から叫んで来た、日鮮は一家だ、朝鮮同胞よ、日本

を守れ！と。日韓合併以来、日本は必ずしも朝鮮に善政を行はなかつた。口に善政は称へても、政治的経済的にあらゆる圧迫、苛斂誅求に至らざるはなかつた。日本人の末輩に至るまで我々に与へた侮辱も甚しいものがあつたのです。祖先伝来の田地を奪はれた同胞は群をなして内地に流れ、奴隸的な労働に従事してゐます。朝鮮には数次の血なまぐさい反乱が起つたが、それも虐政に堪へかねての事、實は日本にもあつたと思ひます。

然し日本と朝鮮は、そんなに仇敵のやうにいがみ合はねばならぬのでせうか。日鮮の歴史を究めるならば、日本と朝鮮が同種同根であることは明かです。言語、風俗習慣にそれを説明するものが少くない。日本の古いお伽噺、爺さんは山へ柴刈りに、婆さんは川へ洗濯に、は、そつくりそのまゝ朝鮮の風俗です。

汚れた過去

過去の韓国、そこには輝しい文化もあつたが、日清戦役に至るまでの近世の歴史は、貪官汚吏の跋扈、売官売爵の悪習、罪惡に満ちた一頁でした。曾ての文化は滅び、生産も減退し、国民の素質も低下した。そこへ日清兩國の内政干渉で、国民は文字通り塗炭の苦しみだつたのですが、朝鮮人には決然として立ち上る力があつたのです。朝鮮には著者不明の一種の予言書のやうなものがあつて、それに「五百年後に王者与るべし」と書かれてゐる。それが長年の間國民を支配して、五百年後には王者が与つて自分達を救つてくれるから、何もジタバタ騒ぐことはない。その英雄の出て来るのを待つてゐればいゝと、一種の迷信のやうに信仰してゐる。其五百年後と云ふのは明治末期頃に當るのですが、そんな訳で一般大衆は政治的行動にちつとも動かないのです。

打拉がれた朝鮮人

朝鮮の現状はどうか。日韓合邦以来、日本はひたすら韓人を去勢することに努力して来たやうに思はれます。政治上の自由なきは勿論、一切の武器は取り上げられ、出版言論も封鎖されました。朝鮮を統治する政府の官吏は殆んど全部日本人で占められてゐます。

それに最も悪いことには朝鮮人は教育がない。甚しく無知です。小学校に當る公立普通学校はあつても、そこに入学する者は全朝鮮人の二割に過ぎない。非常に窮乏の生活をしてゐる大衆は、六十銭の月謝も払ひ得ないからです。

貧乏で無教育で愚かな朝鮮人は一切の武器を奪はれ、兵役の權利と義務から除外され、些かの抵抗力も持てないやうにしつけられて完全に無氣力になつてゐます。彼等は泥棒に押し入れられて、それを捕へる氣力さへ持ち合せてはゐません。怨嗟の声は全道に満ちてゐます。だが、それは全く無力な愚痴にすぎない。

朝鮮人の一部の者は屢々独立運動を企てます。だがかうした朝鮮人にどうして独立など出来ませう。徒らなる犠牲を生むだけです。それよりも、真の日鮮融合に尽し、日本を守ることによつて朝鮮をも守り、生かすことが賢明の道であると信じます。

が、それには日本のもつと理解ある温い態度がほしい。従来のやうにすべての自由を奪ひ、去勢政策を取るのでは、この理想は実現出来ません。英國に於けるアイルランドの独立抗争を御覽なさい。曾ての激しい反乱もアイルランドの完全な自治を認めた今、両者は完全に一体の英帝國となつてゐるではありませんか。僕は此為に年来朝鮮の廢藩置縣と朝鮮人の兵役の義務を主張してゐるのですが、一向に顧みられないのは遺憾です。

青年は共產主義へ

新興青年の動向ですか。彼等は必ずしも今申したやうに無氣力ではありません。彼等の間にはたくましい精神も燃えてゐます。知識欲も盛んです。祖国回復のため身命を捧げんとする者もあります。又優良の青年は滔々として共產主義運動に投じます。或ひは過ぐる関東大震災の恨みに、口にくそ出さね、齒ざしりする者もあります。それ等の人々には僕の云ふことは理解されません。けれども彼等もやがて朝鮮の現実を認識するならば、僕の言葉を理解しませう。

貴女は僕を、生ぬるい事ばかり云ふと、思つてゐらつしやるやうですね。僕だつて十五六年前までは烈々たる独立運動の闘士だつた。

だが今まで歩いて来た荊の路は、そしていよと云ふ程見せつけられた朝鮮の現実、更に今日の国際情勢は、僕を日鮮一家論者にした。此頃では、童話で子供の心から教育しようと云ふ穩健ぶりです。老境にはいつたせいかも知れませんか。ハ、ハ、ハ。

みじめな婦人

朝鮮の婦人ですか。昔と一向変りないみじめなものです。男尊女卑と言つても、朝鮮程女の卑められる国は先づありませんまい。少し財力のある男は例外なしに三号四号五号と妾を持つ。品物を持つやうなものです。

朝鮮は御存知のやうに早婚です。男は十四五にもなると妻を貰ふ。それが大抵は二ツ三ツ年上の女です。何故かと云ふと、男の母親が年を取つて家事の面倒を見るのが嫌なものだから、早く嫁を貰つてそれに働かせようとする。だから少しは年取つてゐないと役に立たないからです。一方男は段々成年になつて金も儲けられるやうになると、年上の世帯くさい妻君では我慢出来なくなる。若い妾を持つと云ふことになるのです。

内地に来て高等教育を受けるインテリ女性も少しはあります。が彼女等が学校を出て故郷に帰る頃は、同年輩の男はとづくに結婚して子供、或は第二号になつたりします。知識的な活動をしてゐる者と言つたら学校の先生位でせう。

生くるに道無し

訳も分らぬ子供時代に結婚させられる朝鮮人は、青春の甘美なる恋を知らない。名譽名声を得るの道も全く閉ざされてゐる。残るは只一つ金の道ですが、之も日本資本の圧迫下に、漸くの思ひで血路を拓いてゐます。ユダヤ人は国を失ひ、金の道で世界に覇を制したが、朝鮮人は、なまじひ捨て得ぬ祖国がある故に、一層苦しまねばならぬのです。

(三四年七月第四日曜)

四、非常時

これほどの貧困ならなげ軍事費を抑制しなかつたかと思われるが、軍事費は増大する一方。それが不況を拡大再生産する中で、日本は一九三七年七月日中戦争に突入、三八年四月、国家総動員法が公布される。

先頃新聞を賑わした有事立法という言葉に耳にした時、私どもの世代がすぐ思い浮かべたのがこの「国家総動員法」なのだ、今の若い方にはピンと来ないと思われるので、それがどのようなものであつたか、それによつて国民の生活はどうなつていつたかを簡単に見てみよう。

「経済統制を組織化し、戦争経済体制を整備するため、いっさいの経済活動をいづれ個別の法律によらないで法一本化しよう」というのが「国家総動員法」であつた。すなわちこの法律は、労務・物資・資金・物価・施設などの経済部門をはじめ、国民生活の全部門を、一片の勅令で政府の統制下におくことを認める法律である。第一条にいわく、本法ニ於テ国家総動員トハ戦時ニ際シ国防目的達成ノ為國ノ全力ヲ最モ有効ニ發揮セシムル様人的及物的資源ヲ運用スルヲ謂フ

正に国民にとつて政府へ白紙委任状を渡してしまつたやうなものである。(中略)政府の統制下におかれた資産・物資は軍需産業にまわされた。膨大な軍事費が、前渡金・補助金な

どの名目で重工業・化学工業または輸出品生産をおこなう大工業に渡され、これら産業に重大な利益をもたらした。その陰で民間の物資不足はますます深刻となり、やがて食料品・衣料品など、すべての生活必需品が切符制や配給制にきりかえられていった。しかも国民に対する税金はどんどん重くなり、貯蓄が強制され、公債が割りあてられた」(2)

戦時体制は以上のような経済統制のみでなく、「国民精神総動員運動」なるものが政府の肝入りで始められる。挙国一致・尽忠報告・堅忍持久といったスローガンの下に国民の思考・行動を統制し、戦争遂行のための挙国体制がつくられていく。いわゆる「非常時」と呼ばれた時代である。

五、婦女新聞

ところで、この『婦女新聞』(正確には『週刊婦女新聞』)は、どのような目的で、いつ創刊されたのだろうか。女性史研究家村上信彦氏の論文「婦人問題と婦人解放運動」に次のような記述がある。

「女性を対象にした定期刊行物は、すでに一九〇二(明治三十五)年に一八種あった。だがその大半は特殊な機関誌でなければ子供むけの雑誌や女訓的なもので、婦人雑誌といえるのは『女学世界』『婦人界』『婦女新聞』の三種である。その後一九〇三年に八種、以後毎年創刊があるが、なかには半年

で姿を消すような短命なものもあって、純粹の婦人雑誌でよくつづいたものとしては『明治の家庭』(一九〇三年)、『婦人世界』『婦人界』『女子文壇』『婦人画報』(以上一九〇五年)、『婦人之友』(一九〇八年)くらいのものであった。しかしみかたを変えれば、明治末までに九種の婦人雑誌が存在していたことはすでに女の読者層が拡大しはじめたことをものごとがたっている。またその内容も、岸辺福雄主宰の『明治の家庭』は女の日常生活に則した具体的忠告や提言をのせ、羽仁もと子の『婦人之友』は実社会に必要な知識や実用記事を通して女の漸進的向上をめざしていた。とくに注目すべきは『婦女新聞』である。創始者の福島四郎は姉の不幸な結婚にふかい衝撃をうけ、二七歳のとき婦人問題に一生を捧げる決心をした。したがって一九〇〇年創刊のこの週刊雑誌は財政的困難とたたかいながら政治・経済・法律・教育・社会のあらゆる婦人問題をとりあげ、活発な評論活動をつづけて昭和にいたるまで永続した。一九三五(昭和一〇)年に社史が刊行されるとき、民法学者穂積重遠が「明治大正昭和にわたる我国婦人問題の記録」「婦人会三十五年の記念塔」(福島四郎『婦人界三十五年』婦女新聞三十五年記念会、一九三五年)と激賞したのもむりなかった。いまひとつの明治中期の『女学雑誌』とならんで、その評論の具体的、建設的なことは群を抜いており、今日でも歴史的価値を失っていない」(3)

村上氏の記述にあるように、『婦女新聞』創刊の主目的は評

論活動にあった。発刊当初はタブロイド判四ページの「新聞」であり、一面はすべて論説だった。のちにタブロイド判八ページとなり、さらに菊倍判二十ページの小雑誌となったが、これを「週刊」としたのは、折々の時事問題に男女平等の視点から間髪を入れず論評を加えることを目的としたためである。日露戦争に際し、出征兵士が妻を離別して戦場におもむくのが美談とされた時、その非人間性を糾弾したのも『婦女新聞』であつたし、らいてうの『圓窓より』の発売禁止に激しく抗議したのも『婦女新聞』であつた。また、「国民の半数を占むる婦人を除外して、普通選挙などと称することが出来るであろうか」と婦人参政の必要を訴え、婦人公民権案で男女五歳の差を設けたことには「親族法においては、婚姻年齢を男十七年、女十五年とし、又父母の同意を要する婚姻年齢を男三十年、女二十五年とし、女子を早熟としているに關はらず、ひとり公民権に於て、男子を二十年とし女を二十五年とするは、全く論理の顛倒である」と論破、さらに「名譽職に当選した妻は夫の同意を得なければ応諾するを得ず」と定めた案文は「妻の地位の隸屬を規定するもの」と糾弾した。その論説は、政治・教育・職業・經濟の各分野での機会均等、母性保護、男女差別の社会通念打破を目指し、婦人問題の全分野にわたっており、中でも公娼廃止は「キリスト教と『婦女新聞』の専売特許」とされたほどであつた。その舌鋒の鋭さは、知識層婦人の支持を得て、発行部数は最盛時には七千

部に達した。

記事は福島四郎の論説を中心に、社会時評から図書・演劇の紹介、女の中からだについての医学知識、洗たく・手芸等の実用記事に至るまで幅広く婦人の啓蒙を目的としており、執筆者も今手許にある何冊かを繰ってみるだけでも、平塚らいてう、山川菊栄、深尾須磨子、岡本かの子、宮本百合子、丸岡秀子、市川房枝、神近市子、高群逸枝、河崎なつ、奥むめお、山高しげり、赤松常子、久布白落実、山田わか、吉岡弥生、羽仁説子、藤田たき、松田解子、竹内茂代、山室民子、大浜英子、下田次郎等々、当時の錚々たる顔触れが見られる。また毎号の「婦人界・女教界」という欄は、その週のニュースの中から一般婦人や女子教育に關係のある記事を要約した、ちょうど『あごら』の「新聞切抜帖」のようなもので、当時の婦人の地位を如実に示している。前掲「東北凶作地娘救済の成績」「全国の闇の女東北六県がトップ」「死を追ふ母・妻」は、いずれも「婦人界・女教界」の抜粋である。

しかし、『婦女新聞』は社会主義に立つものでもなければ、自由主義・個人主義を基本としたわけでもない。その第一面の一隅に次のような「本紙の三綱領」なるものを掲げている。

一、本紙は、男女が人格的に対等である意義を明らかにし、女子の能力を自由に發揮せしむるため、教育職業及政治經濟上の機会均等を主張する。

二、本紙は、女子をして喜んで妻母の天職に奉仕せしむるに足るやう家庭の改善に努力する。

三、本紙は、男女の協力による愛と平和の社会を実現せんことを理想とす。(4)

この綱領に見られるように、創始者福島四郎は、皇室を深く尊崇する典型的な明治人であり、創刊第一号の発行日を當時の東宮(後の大正天皇)御成婚の日にしたほどであった。明治の人としての正義感と、実姉の不幸に対する痛恨から男女不平等を憂い、人間尊重と忠君愛国の志に立って、国をああやまらしめ婦女子を苦境に追いやる「君側の奸」軍部に、激しい抵抗を示したといえよう。

六、婦人団体の統合と『婦女新聞』

男女平等を願ひ、軍部の野心を恐れる福島が、この間、最も力をこめて追求したのは「大日本国防婦人会」と婦人団体の統合問題であった。

日中戦争開始以来、戦時色はいよいよ深まり、戦争をたたくえ、進んで戦争に協力するのが国民の務めとされる中で、平和運動は弾圧されていくが、同時に露骨に進められたのが国防の与論づくりと婦人の動員体制である。開戦に先立つ一九三三年、軍部の後援の下に設立された「大日本国防婦人会」は、物心両面の援助を受けて急成長していく。福島は当初か

らこれに激しく反対し、幾度か論陣を張った。次に掲げるのは一九三四(昭和九年)十一月第一日曜日社説の抜粋である。

問題の国防婦人会(再び)

(前略)元来国防は、戦争の場合を予想した語であるが、婦人は本来平和を愛し、平和の天地でなければ其の天賦の使命を果すことが出来ないやうに、運命づけられてゐるのであるから、戦争を未然に防ぐ仕事こそ、婦人の働くべき領域であつて、戦争の場合に御手伝をする準備として、平時に一種の団体を組織するが如きは、全く先走つた無用の拳といはねばならぬ。(中略)しかし、いかに防止しようとするにしても、又或る国の政府がいかに戦争を避けやうとしても、対手が正義を無視し、非理を押し通さうとする場合は、イヤ／＼ながらも剣を抜いて起たねばならない。勢の激する所、已むを得ずして対手の挑戦に應ずるやうな場合がしばしばある。我が国が若しさういふ場合に臨んで、一たび銃火を交へるに至つたならば、いかに平和の擁護を使命とする婦人でも平時の常道を口にして落ちついてはあられない。我が国を救ひ、我が民族を生かす為には、万事を抛棄して戦争を手伝ひ、以て戦局の必勝を期せねばならぬが、それは真に已むを得ざる最後の処置である。出来る事なら、国家をして其の最後の極地に立たしめないうやう、戦争を未然に防ぐのが、婦人の任務であり、責任でもある。

然るに国防婦人会は、戦争を不可避の事実と予想して、それに對する婦人の準備を為さしめやうとするのである。避けやうとしても避け得られない場合のしばしばある戦争を、初めから必然の事実の如く予想して、その場合の準備を婦人がするやうでは、避け得られる戦争をも、結局避け得られないものとしてしまふ恐れがありはしないか。

吾等も日本国民である。一旦緩急ある際、此の愛する祖国を守る為にはいかなる犠牲をも甘受するが、一步を誤れば戦争を煽るに至

る危険性を多分に蔵する国防婦人会の結成は、婦人が其の本来の使命を忘れた愚挙であるとして、健全なる日本婦人の名に於て反対する。

特に吾等が最も奇怪に感ずるのは国防婦人会なる者の正体が甚だ鮮明を欠いていることである。地方に於ては盛に支部が設置せられ区町村役場に事務所を置いてあるものあり、中には経費の一部を兵事費や奨兵会から支出してある所もあるといふ程であるに、其の本部が何処にあるのか、首脳者は誰であるか知ることが出来ない。(中略)全国的に支部を設置して愛国婦人会と対立する程重視されてゐる婦人団体の、本部所在地も首脳者の氏名もハッキリしないやうな状態は、之を奇怪といはずして何と言はう。

吾等は国防婦人会の成立が甚だ公明を欠き、その趣旨目的とする所が戦争の準備たる点に於て、婦人本来の使命と矛盾せるを思ひ、寒心に堪へない。

今や我が軍部は、国防第一主義を標榜して、思想問題や、農村問題や、課税問題にまでも、独自の見解を以て政府を鞭撻する概を示して居る。世人は之を以て、軍部独裁主義の前提であるかの如く解釈して、不安を感じてゐる様子であるが、此の際軍部が国防婦人会結成にあまり力を用ふる事は、一層疑惑を深めるであらう。

この訴えにもかかわらず国防婦人会が日に日に勢力を増す中で、福島は各婦人団体による平和運動の展開を要望する。

一九三五年六月第二日曜号社説がそれである。

婦人運動の行詰り

各種婦人運動は今や行詰つた。平和運動はさながら非愛国運動の如く誤解され、婦選運動は見向きもされず、本年春には実現する筈であつた公娼廃止の発令も、営業者の猛運動と内務当局の弱腰とでは

亦形勢の逆転を憂慮させるやうな状態である。この外、女子高等教育問題も、母性保護運動も、すべて「非常時」といふ大きな手で押しひしがれ、それどころの話でない、相手にされない。

行詰りは婦人運動のみに止まらない。第一に政党が行詰つてゐる。中に大政友会は、衆議院に過半数を制しながら、手も足も出ないばかりか、今に瓦解するのでないかと思はせるほど、内部の結束が乱れ、外部からの圧迫と擾乱とが加はつてゐる。裏面の事情はどうあるにもせよ、兎も角衆議院に過半数を占めてゐる政党が政権に近づきえず、三十年來大学の講座で講ぜられてゐた学説が不都合だとあつて、其の学説に関する著書が俄に発売禁止になり、その学者が起訴されるやうな非常時(5)——然りこそ非常時である——であるから、愛と平和に立脚する平時の婦人運動が行詰りの状態に陥るのはむしろ当然であらう。

政党の行詰りは、その原因の大部分が政党自身の腐敗にあるらしいが、婦人運動の行詰りは、原因の全部が外界の情勢に存するからには、不運又は災難である。丁度経済界の不況に禍されて、社会事業の経営が困難になつたのと同じである。然らば之をどうしたらよいか。

社会事業の必要は、経済界が不況で事業の経営が困難な時ほど大きいのである。婦人運動の中でも平和運動の如きは、今日のやうな時代にこそ最も盛に行はなければならない筈なので、非常時でもなく、軍備拡張の必要が感ぜられないやうな時代なら、実は平和運動の必要もないわけなのである。吾等はこの際、各種婦人運動当事者の奮起を希望し、特に平和運動関係者の大憤発を切望してやまぬ。無論近來の社会状勢から見て、いかに有力な平和団体の力を以てしても、軍備の拡張を阻止することは不可能であらう。況んや微力なる婦人団体の力で、明年度の軍事予算を一元でも削減せしむるやうなことは、到底望まれないこと明らかである。しかし、予算とは関係なしに、平和思想を鼓吹することなら、決してむづかしい筈はない。前号の本欄に書いた如く、高橋聯合監隊司令長官は、軍備の充

実は戦はずして人の兵を屈せんが為である、戦争が目的ではなく平和が目的であると高唱した。軍備の充実が実際その通り平和を維持することになるかどうか、甲国の一造艦が乙国の二造艦を誘ふやうになり、互に軍備を競争する結果戦争誘発の危険が一層加はりしはせぬかと案ぜられないでもないが、しかし軍備拡張が、今日最早阻止することの出来ない情勢にあるとすれば、せめてそれが平和維持の爲であるといふ目的の鼓吹に全力をあげ、実戦に導くことを阻止するやう努力しなければならぬ。そこに、婦人平和運動者の働くべき仕事が残されてゐる。

軍職にある軍人は、軍事上の職責を果す為に全力を尽して、他を顧みるに遑の無いのが当然である。婦人も亦、その天賦の職責上、平和の維持に全力をあげなければならぬ。腕力では男にかなはない女、生命を生み且育てる自然の仕事に服する女、そしてすべての性能がそれに適するやうに作られてゐる女は、生命を殺す戦争を、此の人類の世界から無くするやうに、よし出来ないまでも努力するのが、自然の使命に忠実なる所以であり、さうなつてこそ、平和の女神でいらせられる天照大神の御理想にもかなひ日本婦人の徳と光とを世界に布くことにもなるのである。

米國は口に平和を唱へながら、日本の軍備を、いつまでも自國の六七割に止めさせようとして、海軍大拡張の計画を進めてゐる。それを見ると、米國婦人も案外無力と思はれるが、生命を育てるといふ自然の大使命に於ては、日米婦人共通であるから、此の共通点に於て、兩國婦人が今後提携して全人類の爲に働くべき道の存することは、疑ふ余地もない。

斯う考へて来れば、婦人平和運動は決して行詰りでないのみか、むしろ此の際一層猛進しなければならぬ必要を思ふ。婦運運動の如きは、議會が常道に復するまで、いかに運動しても役に立たないから、当分手の下しようもあるまいが、吾等は此の際婦選の闘士が力を平和運動に協せ、平和協會の關係者が又、此の際全婦人団体の力を糾合して大活動を開始するに至らんことを切望してやまぬ。

婦女新聞社は、婦人運動のこの行詰り打開の一助として、「婦人団体業績検討会」を主催し、各種婦人団体の交流・連合をはかるうとした。一九三六年一月第二日曜日は、次のやうに呼びかけている。

婦人団体業績の検討

今や我國は、軍事と産業方面に於ては、世男のどの國に対してもヒケを取らないまでに発達して、英米國にも脅威を感じしめるに至つてゐるけれども、翻つて國民の實生活を顧みると、社會のいろいろな邪惡は除かれず、悲惨な母子心中などが依然として屢々発生し、家庭のにも個人的にも十年二十年の昔と比べて精神的向上の跡は見られない。概括的にいへば、今日の我國は、男性文化に於ては世界の一等國たる資格を立派に具へたけれども、女性文化に於ては未だ丁抹や西蘭の如き第三流の國々にも及ばないのが實際である。

男性文化のみが発達しても女性文化の之に伴はないのは、例へば名刀を鍛へて其の鞘を作らないのと同じく、危険でもあり、不体裁でもある。之を家に譬へたら、玄関や座敷の建築のみが堂々として、居間や台所がバラックの間に會はせであるのと同じく、不調和不適合はいふまでもなく、實際生活にも差支へる。夫婦の教育程度があまりに懸隔してゐては、相互の不幸であるやうに、國家社會も男女両性の文化が釣合のとれる程度に相並んで発達しなければ、國民の幸福は断じて期待し得られない。

この意味から吾等は、軍備の充実や産業の發展と同程度に、社會の平和的施設、教化的事業を必要とし、それ／＼の方面に於ける各婦人団体の活動を促すものであるが、その一助として、先づ昭和十年の一個年間に、各婦人団体がいかなる活動をなし、いかなる成績を示したかを検討したいと思ひ、本月二十七日二會を催す計画を立て

てた。詳細は次号誌上に発表するが、要点は、現在活動してゐる婦人団体中、有力と認めらるゝもの、対社会的に何等かの事業を営んでゐるもの、地域の比較的広いもの等の標準に依て、十数団体を選び、それ等を招請して一堂に会し、各代表者から昨年一年間に於ける活動状況を聴かうとするのである。

此の計画が幸に成功すれば、第一、各団体相互間に理解を深める。由來団員は、自分の關係してゐる会の集会以外は出席する機会がないから、他の会の内容や活動状況について知る所がない。例へば仏教女子青年会と、基督教女子青年会と、大日本聯合女子青年会の如き、全日本の女子青年に働きかける立場に於ては同一線上にありながら、恐らくは風馬牛相聞せずとして、全然無理解であらう。これ等が相互に趣旨を理解し、他の活動状況を正確に知ること、自会の運動上どれほど参考になるか知れない。他の団体に於ても同じである。

第二、各団体当事者の労と功とが認められる。自分ではいかに熱心に働いてゐるつもりでも、いかに成功してゐると自信してゐても、他と比較して見なければ、それが優等点を値するかどうか分らない。従つて、各団体一年間の業績を一堂に陳列する本社計画が幸に成功すれば、優良団体当事者の功と労とは十分認められ、不良団体には今後の奮起を促すことにならう。

第三、時代の傾向を察することが出来る。いかに当事者が熱心に活動しても、時代の大勢が転回しては、団体事業の成績をあげることは出来ない。最近兩三年の社会状況では、婦選運動や平和運動は奏効しないのが当然である。是等の事は、其の会の当事者には極めて明白に解つてゐるが、他の会に属するものは知られない。是等の事も、各団体一堂に会した席上で説明を聴けば、会の事業成績と對比して成程と背かれやう。

その他、尚団体相互に益することが極めて多に相違ないから、吾等は招請する各婦人団体が、欣然として参加せられるであらうと期待してゐるが、唯一つ不安なのは国防婦人会である。吾等は屢々

本誌上で、同会に対する忌憚なき評論を試み、愛国婦人会以外に同会を結成することは、婦人の力を半減するものであり、且女性の天分たる恒久平和事業に反するものであることを説いたが、しかし同会は、既に巨大なる団体として生長してゐるのであるから、之を無視することは出来ない。吾等は平生の主張は主張として別に之を諷し、今回の婦人団体業績検討会には、他の幾多の団体と共に国防婦人会をも平等に招請し、虚心坦懐その業績を聴くことにした。そして成程と背き得られたら、前論を取消して或は謝罪することも辞さない。又主義上賛成はしなくてもその発表せられた正確なる業績を社会的に紹介することは、他の団体に變らないことを、予めここに誓つておく。そして同会が又虚心坦懐、参加せられんことを希望してやまぬ。

かくして、愛国婦人会も国防婦人会も、三種の女子青年会も、文部省関係の大日本婦人聯合会も東京聯合婦人会も、其他全婦人団体が一堂に会して、共通の一点を見出される機縁が作られたら、吾等にとつては望外の喜びである。(一九三六年二月第二日曜号)

同年一月二十七日、神田区一つ橋通り教育会館で開かれた検討会の詳細を記録した号は手もとには残っていないが三十七年三月第一日曜号に見る第二回検討会の参加団体は次の三十一団体に及んでおり、今日のいわゆる四十八団体にも似た交流が行なわれたことがうかがわれる。

(政治法律及経済団体)

○婦選獲得同盟○婦人同志会○選挙肅正婦人聊合会○母性保護聯盟○婦人税制研究会○日本基督教婦人参政権協会○日本消費組合婦人協会

(青年団、聯合団体及国際関係)

○大日本聯合女子青年團○基督教女子青年会日本同盟○東京聯合婦人会○大日本聯合婦人会○婦人平和協会○全関西婦人聯合会○日本國際協會婦人部

・ 仏教女子青年会聯盟は事故の爲参加取消

(社会事業及社会教育団体)

○愛国婦人会○日本基督教婦人矯風会○桜楓会○大日本国防婦人会○大正婦人会○婦人共立育児会○日本全国母の会○大日本聯合母の会○警察官家庭婦人協会

(保健衛生及教育、教化団体)

○結核予防婦人会○日本女医会○至誠会○女子教育振興会○日本優生結婚普及会○全国中等学校女教員会○全国小学校聯合女教員会○少年保護婦人協会。(以上三十一団体)

しかし、この間にも国防婦人会はますます強大になる。三年一月第二日曜号はこれに対し「在郷軍人会の婦人部たらしめよ」と糾弾する。

国婦改組の一案——在郷軍人会の婦人部たらしめよ——

婦人団体改組の必要あることは、吾等が既に幾度か論じた所である。而してその主要の理由は、愛国婦人会と国防婦人会の対立が、挙国一致を妨げて、時局柄面白からざる弊を伴ふ点に存することもすでに直言した通りである。「提携してゆけばよいではないか」といふのは、某々地方の実状を知らない人のことである。現に全国町村長会議では、両会の合同要望を決議し学務部長会議でも、地方長官会議でも、合同希望の声高く殆んど決議の意志発表にまでならうと

したではないか。出征兵士の駅頭送迎に、別々の標をかけた婦人の集団が両側に並び立つてゐるのを見て、そこに摩擦相剋などの起る心配はないと、誰が言ひきるか。

両婦人団体の対立は、何としても挙国一致の精神にそむき、全婦人界の平和を破り、労力と費用とを重複させて、国家全体の被る不利益は甚大である。是は政府としても捨て置くべき問題でない。

しかし、両団体を現状のまゝ合一させることの困難なるは、本紙の十二月第三日曜号に、廣瀬厚生大臣(次官時代)が説いてゐられる通りである。そこで吾等は勧告する。国防婦人会をその本来の立場に返らせて、在郷軍人会の婦人部たらしめよ。

元来国防婦人会は、陸軍省恩賞課内に生れ、各連隊区司令官の手に養はれ、在郷軍人会に保護されて、今日の大団体に成長したものである。従つて本部と地方との書類の送受には所屬師団本部を経由するを要し、実際の指令は今尚陸軍省の恩賞課内から出るのである。

だから同会は、軍部の別働隊又は陸軍省直屬の女軍ともいふべきで、国民の側から軍部を後援する意味の団体ではない。某々地方に於て、応召兵士を一時民家に分宿させる際、国防婦人會員が先づ戸別訪問して「作共が○人御厄介になりますから、どうぞ宜しく願ひます」と挨拶し廻つたさうであるが、こんな風に、直接軍部側の主婦となつて、お手伝するものが、国防婦人会の本領なのである。

然るに会の宣言は、国民の軍部を後援する団体の如くなつてゐるので、或時は軍の別働隊として、師団本部經由の命令の下に動きながら、或時は愛国婦人会と同一の立場に立ち、極めて不徹底な存在となつてゐるのである。

若し吾等の意見通り、之を在郷軍人会の婦人部(現役軍人の家族も何等かの名儀で入会させる)たらしめたならば、陸軍大臣の監督下にあつて、師団や連隊の命令を受けてもをかくはなく、會員も亦、わが父や良人や息子の仕事を手伝ふやうな気持ちで、力の入れ方も一層強からう。(中略)吾等は国婦会の事実上の責任者が、軍と銃

後国民とを混同することの非に気づき、武士的大勇を揮つて速に改組を決心せんことを切望する。若し夫れ軍が、全婦人界を思想的にも指導しようといふのならば、それは行き過ぎだと断言して彈らぬ。
(一九三九年一月第二日曜号)

国防婦人会の縮小・撤退を直言したこの社説が掲載された同じ号の本文には、しかし、当の婦人の間から婦人団体の統制を望む声があがつていることが報道されており、積極的な体制協力の姿勢さえ見られる。

婦選獲得同盟 婦人団体の統制へ？

婦選獲得同盟総務理事市川房枝女史は、過日北九州方面を旅行した際、多くの家庭婦人から愛婦と国婦及び主婦会の三団体から指令が別々に来る煩はしさを訴へられ、各婦人団体の連絡統制を中央に於て図られたいとの強い要求を聞いて、真に強力な婦人の統後活動のためにも、この問題を取上げて何とか解決したいと希望してゐる。女史一個の意見としては、各町会に婦人会を作り、希望してゐる。他の婦人会を全部合流させて、婦人団体の単一化を計るのが最も適切ではないかとしてゐるが、政治的な問題もからんで、町会が婦人の参加を喜ばない傾きもあるので、前途に幾多の困難を予想される。

全国で合同懇談会——相容る愛婦と国婦——

愛国婦人会、国防婦人会は昨年七月合同で支那事変一周年記念講演会を開催したが、今度は傷兵保護院の主唱で更に全国的に軍人援護に関する合同講演会を開催することになった。傷兵保護院ではか

ねて傷痍軍人の花嫁問題その他一般援護について婦人団体の協力を求めることになつてゐるが、十四日愛婦、国婦、大日本連合の各婦人会、連合女子青年団の幹部と打合せの結果、これらの団体及び府県の有力団体が共同主催で各府県に委員を嘱託、各地において合同懇談会を開くことゝなつた。二月中には徳島、久留米、名古屋、仙台、札幌の各市で開催、傷痍軍人の結婚問題、生業援護、統後の家庭強化等につき協議することになった。

(以上いずれも一九三九年一月第二日曜号「婦人界・女教界」から)

婦人団体の統制を

市川房枝(談)

近衛内閣が平沼内閣に代らうと、日本がこの非常時局に進むべき道は既に定まつて居る。(中略)如何に事態が重大にならうと、飽くまで日本の既定方針を貫かうとするには、平沼内閣がもつと強力になつて、即ち軍と政治が一つになつて事に衝つてもらひたいものである。勿論国民の側にも、一時的な興奮でなく、底力を持つて政府に協力し時局を押切る覚悟が一さう要求されねばならぬが、それには政府自身が單なる呼びかけだけでなく、先頭に立つて国民に範を示すことと、同時に政治及び経済の実情を出来る限り国民に知らせ、理解の上にたつ協力を求めてこそ、力強い官民一致、軍民一致は実現されると思ふ。

次に婦人の側からとして要望したいのは、今国を挙げて力を注がねばならぬ物的資源及び人的資源確保の問題に関して政府の認識を新にして欲しいことである。中でも人的資源の問題は、直接、目前のものでないだけに等閑に附され易い傾きがあるが、将来の日本、否東洋を負ふ子供の教育、栄養、健康等の問題にもつと敏感に、そしてその施設に万全を期して欲しいものである。勿論子供に直接の關係と責任を持つ母親や主婦が、一家庭の子供といふ狭い考からでなく、国家将来を支配する原動力といふ認識の上にたつてその保

護、教育にあたらねばならぬ事は言ふまでもないが……。物的資源の確保に就ても、家庭の消費経済が国家経済の上に如何なる影響を持つものであるかの点を政府自身も検討して、新たな認識の上に立つて、主婦の反省を促すべく、その呼びかけが欲しいものである。

かくて、国家的に二重、三重の重い任務を持つことを自覚した主婦及び母親の協力を政府は要求し、この要求に基く婦人の街頭動員を、主として応召将兵の送迎や遺家族の慰問に限られて、真に必要な場所には要求されなかつた。然も以上の送迎慰問といふ様な直接統後援も無統制に行はれ、むだが大きかつた。

婦人は何をなすべきかを先づ明確に指示して婦人団体を統制するのこそ、婦人の側より政府が取上ぐべき具体的課題だと思ふ。然も対立抗争摩擦を事としてゐる婦人団体は、国防婦人会は陸軍、愛国婦人会は内務省、大日本連合婦人会は文部省といふ風に政府の動員令下にあるものばかりで、その上動員される婦人自身は、必要な方面の仕事も疎にせざるを得ない状態であるが、これこそ統制してむだを省くことは、政府に決心さへあれば決して不可能でないのに、今日まで放置した怠慢は充分に責めらるべく、平沼内閣は身自ら範を示す一証左としてこの問題の解決に乗出して欲しいものである。(一九三九年一月第二日曜号)

美しい風景で表紙を飾り続けていた『婦女新聞』は、この号では「タンクの市内行進」を表紙にしている。そして翌二月第二日曜号には「婦人時局研究会」(発起人・市川房枝・金子(山高)しげり・河崎なつ・丸岡秀子等十氏)の発足が報じられている。婦人指導者層の軍部への傾斜は目を覆うばかりだが、同じ号には戦死者の母の涙もまた公然と語られていることに注目したい。

『戦死者の母を訪ねて』

『泣けるだけ泣け!』

大井あみ子夫人

大井あみ子夫人は、故津田梅子女史の姪に当られる。事変が始まると間もなく神戸の三菱に勤めてゐた長男光雄君(陸軍少尉)に動員令が下つた。光雄君は勇躍征途についたが、十二年十月六日突撃路を開くため第一線に活動、勇猛果敢な突撃戦に遂に廿八歳で名譽の戦死を遂げられたのであつた。最愛の長男を喪つた母堂はその後どう暮してをられるか、一日世田ヶ谷区松原四丁目一四九番地の自宅を訪れる。

応接間に待つてゐると、足の不自由な母堂あみ子夫人がわざ／＼出て来られ、記者を暖い陽の当る居間に案内して下さる。

光雄は子供の時から何んにも云ふところのない、いゝ子供で御座いました。商大を出て三菱に勤めてをりましたが、こんなに早く死なれるのだつたら、苦勞をして教育したことも……みんな……水の泡……それでも、私は、一番いゝものを、一番完全なものを捧げたと思つて、喜んで……をります。

夫人は、涙に声がつまつて言葉もと切れ／＼である。

——同じやうにお子さんを亡くされた方々に、何か参考になるやうなことでありまして、一言でも……

——私ももう自分一人の悲しみに堪へて行くのが精一杯で御座います。とても人様の御参考になるやうなことは申し上げられません。——始めのあひだ私はみつともないから泣くまいと思ひました。けれども、昼のあひだはそれで堪へて行かれますが、夜になると自然に目がさめて泣けなくなります。お友達が我慢をするのはよくない、悲しい時には泣けるだけ泣く方がよいと云つてくれましたので、それから、もう悲しみを抑えることはやめました。私も、それでいゝのだ、それが一番いゝことだと思ひます。

夫人はそれから、光雄君が出征するとき、防弾チョッキを着て行くやうに云つたが、浮かぬ顔をして持つて行かなかつたと云ふ話をした。

——後から考へて見れば、部下はみんなそんなものをもたないのに自分

だけが着て行く気にはなれなかつた筈だと、その時に浮かぬ顔をしてゐた意味がわかりました。

いろ／＼お話を伺つてから辞去する記者を玄関まで送つて来られた夫人は何んにもお話が出来なくて失礼しましたが、自然に出来た歌をつきいて頂きませうと、悲しみの日を想ひ浮べるやうに暫く黙された後、口を開かれた。

あゝ光雄光雄光雄よあゝ光雄やさしさの姿恋しくもあるか

——三月十二日遺骨を迎へて
母の心すこしはやはらぐ時を待ちて歸り来ませる君にもあるかな

言葉がつまるので、何度も何度も云ひかへした後「君にもあるかな」と最後の句を云ひ終ると夫人はそのまゝ声を上げて泣いてしまはれたのである。

(一九四〇年二月第二日曜号)

続く三月第四日曜号には「戦時生活婦人団体協議会」開催の記事がある。婦選獲得同盟・矯風会・YWCAなど、本来、戦争に最も反対すべき立場の諸団体が戦争協力の方頭に立っている姿が見える。

戦時生活婦人団体協議会——二十二団体を動員して開催——

戦後の国民生活はますます多難な時代に入らうとして居る。増税、物価騰貴、物資節約の荒波を凌いで国と家とをつらぬく非常時台所の切盛にわれ等女性がつかりと任ずるには、今や余程の心構へがなくてはならない。

「戦時生活！」さうだ、それをここにわれらは提唱しよう。百億の貯蓄をなし、然も国民地位を低下せしめず、もののいくさ、金のいくさに天晴勝利の戦士たるべく、我等はここに一つの協議会を開いて衆智を聚め、先づ以て戦時生活の案を樹立し、これを実践し普及

し徹底せしめたいと希ふ」とは、戦時生活婦人団体協議会の案内がきの一部であるが、この会開催の趣旨を端的に言ひ現はし得てゐると思ふ。

時は、陽の光、風のいろに既に早い春を見る三月の十九日午後。所は神田駿河台佐藤新興生活館講堂。

日本基督教婦人矯風会、婦選獲得同盟、基督教女子青年会日本同盟、日本女医会、全国友の会、全国女子教育者同盟、婦人平和協会の七つを加盟団体とする日本婦人団体連盟の主催で、至誠会、東京聯合婦人会、母性保護連盟以下十五団体の協力を得、出席者百五十余名の盛況。吉岡弥生、赤松常子、久布白落実、金子しげり、市川房枝、ランドレット恒子、竹内茂代、河崎なつ等諸女史の顔も見え、日本婦人界の指導者を一堂に集めたかの感がある。

一、開会の辞。

二、国歌斉唱。

三、宮城遙拜

四、皇軍並英靈に黙禱

五、挨拶（日本婦人団体連盟会長ランドレット恒子）

と、プログラムは進んで、いよいよ、当日の華「協議」の幕は切つて落された。

題目は

○正しき戦時生活とは何か

○如何にして戦時生活を普及徹底せしむるか

の二つ。第一の正しき戦時生活とは何かの議長には、友の会の松岡久子女史が推されて、協議に移る。先づ婦人矯風会の千本木女史は、貯蓄こそ婦人の戦時生活に於て行はなければならぬ最大なるものとして、一戸一錢貯金の奨励、団体の強制力に依る貯蓄の徹底を強調すれば、全国女子教育者同盟の前田女史は婦人は貯蓄の必要を教へられた時感激はするが実行に移す者が少い。女学生のように純真な気持ちで実行に移して欲しい、と言へば吉岡女史「入學祝ひに学用品を贈るのが慣例であるが、これを一円位の貯蓄債券に代へては如何」

と提案。来賓として列席の大蔵省貯蓄奨励局木内次長は「面白い案だが小額の債券は非常に煩雑だから、他の方法を考究して見よう」と賛成。

次いで竹内女史は、使用人に月給の割を割いて記入した通帳を渡す時、以後月給から割の天引貯金をする決心があるかを確めて渡し、ズット継続させてゐると経験を語れば、前田女史も、種子を蒔くことの必要を説き、新日本婦人協会の高橋女史は、貯蓄したくも物価が高くて定収入の家庭では余剰のない苦衷を訴へれば、木内次長は、「品物が少なくて求める者が多ければ物価は上らざるを得ない。その物価を抑へるには物を買はぬことが徹底しなければ駄目な物価問題も消費節約も貯蓄問題も狙ひ所は一つである。日本は今、タンクの底に穴を明けてゐるやうなもので、物資はドンドン戦場へ送られる。そのタンクに果して水を間断なく送り得るか？世界の注視的で、日本は上下一体となつてどうしてもこの水を絶やしてはならぬ。その一つが貯蓄であることを思ひ、且つ戦地で同胞が命を投げ出してゐることを思へば、どんな我慢も出来る筈である」と貯蓄と物価問題の相関々係を明にする。

婦人矯風会の久布白女史は警視庁管下の警官全部が毎週月曜日を禁酒デーとして貯蓄してゐると実例を挙げ、日本全国で一週一日の禁酒デーと副食物節約デーを設ければ、百億円貯蓄何ぞとさげふ。

こゝらあたりから、議長は問題を消費節約に移行させて節約の尤なるものは被服に関するものであるとして、国民精神総動員中央聯盟の服裝委員の一人大妻女史に、服裝委員会の経過報告を求める。大妻女史「何回もの委員会開催の結果、男子の背広服に代るものを、袴を日本式に、色を国防色として懸賞募集することになった、統一して男女学生服、婦人作業服が協議される筈であるが、家庭服は、和服が捨てられぬとの意見が多い。然し改良はされなければならぬが、私案として上下別に、又裾は輪に、袖はなごなな形にと考へてゐる」と述べれば、前田女史は女学生の制服を全国共通にしたいと提唱す

る。川崎女史は「制服も学用品も新調しないと云ふ所まで進みたい」と火の様な言葉を吐けば、金子女史も「新調せぬことがこの際の急務であるからそれを原則として案を練りたい」と希望。友の会の千葉氏は物資節約は一に家持の上手下手にかかつてゐると、工場街で「家持ちを上手にする講習会」開催の経験を語る。

次いで消費節約と体位の問題に就いて竹内女史は「戦時生活中で食物は節約せず、骨身惜まず働いて筋力を強くしたい」と述べ、三上女史は白米食の害を統計と動物実験によつて発表、子供の砂糖過食の弊害を白米食の害を統計と動物実験によつて発表、子供の食事一日四回とし、一回は軽い食事にしてお八つ廃止を提言して拍手。

その他、婦人労働問題に就て社会大衆党婦人部の竹井女史は工場監督官に婦人の増員、授乳手当の新設、産前産後の休養期間も賃銀の全額支給、幼年工の最低年齢十六歳まで引上げ、保護職工を満十八歳までに引上げ、工場法適用以外の工場の取締方徹底を要望したが、金子女史の「婦人の生活にも消費と生産の両部門があるが、大部分の婦人が参加してゐる消費方面を今日は取り上げ、問題の所在は今までの意見で突きとめ得たから、具体的には如何にするかを協議して欲しい」との希望あつて労働問題は切り離される事となり、「申合せ」作成委員として吉岡、市川、赤松三女史が指名されて休憩。

再開——第二の協議題の議長には基督教女子青年会日本同盟の加藤タカ女史が選ばれる。

劈頭市川女史起つて「戦時生活とは何か？現在その生活は如何なる段階にあるか？を先づ検討し、次いでそれを如何に大衆へ徹底させるかが工夫されねばならぬ。それは抽象的にでなく、具体的な内容を示さなければ効果は薄いと思ふ。大蔵省では貯蓄奨励のために多数の婦人講師を嘱託したが、当局としては如何なることを大衆に徹底させて欲しいかの指示が必要で、又講演会も聞き方の研究が大切で、対象別に徹底させるやう工夫されねばならぬ」と政府の大衆への呼びかけの拙劣さを衝けば、愛国婦人会の蒲池女史は「知

識階級人は講演会へ出席の機会もあらうが、勤労階級の家庭婦人にはそれは望まれぬ。かうした婦人達が出席の会と言へば、小学校の『母姉会』が唯一のものであるから、これを利用して働きかけた」と述べれば、婦選獲得同盟の藤田女史は「母姉会を指導するのにも教師であり、子供に戦時生活の徹底を吹込むのも教師であるから、先づ戦時生活とは何かを教師に認識させるのが急務である」と説く。暮色は漸くあたりに濃く、時計は六時に近い。松岡女史の「今日この会に集つた者達が、真に戦時生活の重要性を自覚すればその周囲のものに徹底させることは容易だ」と友の会の経験を語り、川崎女史は「戦時生活は既に論議の時機を過ぎてゐる。今日の参会者各自は、その属してゐる各組織を動かして、強力な実行運動を起して欲しい」と言ふ様なことが自然に結論となり申合せを満場異議なく可決して、息づまるほどに愛国の熱に燃えた会を閉じた。

申合せ

私共は新らしき東亜建設達成のため家庭に於ても職場に於ても戦時生活を実現し以て国家総力戦の実を挙げませう。

昭和十四年三月十九日 戦時生活婦人団体協議会

(一九三九年三月第四日曜号)

六、自 爆

一九四一(昭和十六)年には、国防婦人会は軍部の後援で会員一千万人を越える全国組織に発展し、愛国婦人会との対立を一層深め、一方、この二団体のはかの多くの婦人団体は解散するか大日本聯合婦人会に統合されていく。国婦・愛婦・聯婦の相克の中で婦人団体統合は陸軍省の主導の下に進められようとする。

「統合後の婦人団体は如何にあるべきか」を特集した同年三

月第二週号の表紙は桜草の鉢で埋められ「花に言葉なく、真実はだまつている」のキャプションが一行入っている。

この年、警視庁検閲課は各種業界雑誌の統合整理を企て、七月、時局にふさわしくないものは廃刊、婦人雑誌五十社に十種内外に整理するよう命じる。この結果「婦人運動」(前身は「職業婦人」主宰・奥むめを)は八月十五日、「女性展望」(婦選獲得同盟機関誌)は八月号、「家庭婦人」(聯合婦人会機関誌)は九月号でそれぞれ廃刊を余儀なくされる。

四十年の歴史を持つ「婦女新聞」は命脈を保ち続けるが、一九四二(昭和十七)年二月第一週号でついに自爆を宣言する。菊倍判からB5判に縮小されたこの号巻頭の「本紙自爆の理由」は、一、経済力、二、人員の不足、三、用紙の不足、四、社屋の移転命令、を理由に掲げているが、福島の本心は、「廃刊雑感」という小文に、より明らかである。

大日本婦人会が、二月二日にいよ／＼発会式をあげるさうである。それを前にして、同会に忌憚なき評論を加へた婦女新聞が自爆の運命に陥つたのは、偶然ではあるが皮肉である。私は此期に臨んでもう何もないが、たゞ婦女新聞の遺言として「軍部は婦人団体から手を引くべきだ」といふ一語だけ叫んでおく。「鳥の將に死なんとするや其声哀し。人の將に死なんとするや其言善し」と曾子は言ったが、私はそれに追加して「雑誌の將に廃刊せんとするや、其論正し」と言いたい。

一九〇〇(明治三十三年)年、二十七歳の無名の青年によって創られた「婦女新聞」は、こうして二千二百二十号をもって

四十二年の歴史を閉じ、ついに復刊しなかった。廃刊に際し相当の補償金を提供して引き受けたいと希望する人もあったが、福島は続刊を選ばなかった。一九三五年記念祝賀会のうち、「本誌の使命未だ終らず」と呼びかけて七年、彼の使命感が変わったわけではないが、変わらなかったがゆえに、変節して生きのびる道を自爆して自ら閉じたものと信じる。彼が一生を賭けて祈り続けた男女同権・婦人参政権・高等教育の女子への門戸開放はその三年後に実現したが、その朗報を知らぬまま敗戦に先立つ半年前、七十二歳の生涯を疎開先で寂しく閉じた故人の冥福を祈って、創刊三十五周年直後の一文（一九三五年五月第四日曜号社説）を最後に掲げたい。

本誌の使命未だ終らず

先輩友人及び愛読者諸氏の御厚意によって、極めて盛大なる本紙創刊三十五年記念祝賀会が開かれ私は分外の名誉を表彰せられ、巨額の贈与を辱りし、且無上の光栄に浴した。そして「こよひ死ぬともうらみなしわれ」と感謝した。しかし、歓楽極まると哀情多し、絶頂に上りつめた時はやがて下り坂に向ふ時であると思ふ時、満悦の下から淋さが湧き、祝声の裡にどこからとなく吊鐘のひびきの伝はつて来る如く感じた。

自分と婦女新聞との使命はもう終つたのでなからうか。婦人問題のまだ我が国に発生してゐなかつた十九世紀最終の年に生れて、新しい世紀に登場した婦人の伴侶となり、公僕となり、時には教師又は指導者のやうな地位にも立つて、素より完全に役目を果すだけの實力は欠いてゐたにせよ、兎も角誠意を一貫して、幾分かの貢献はなし來つた。その微功に対して、今は過分に酬いられ、雑誌界に例

のない光栄に浴したのである。婦女新聞と福島との使命は、もうこゝに終つたのでなからうか。これが私の、三十五年祝賀会に當面した時の偽らない感想で、又いふにいはれない淋しさでもあつた。（中略）そこで私は十分冷静に考へて見た。考へぬいた上の結論は斯うであつた。個人としての福島は、すでに終つたと考へるのが至当らしいが、その生んだ婦女新聞の使命はまだ決して終らないのみか、今後更に陣營を建て直し、新しい勇気を以て奮闘しなければならぬ。そして婦女新聞が其の新陣營を整へるまで、福島は使命もまだ全く終つたとはいへないと私は斯う確信して、漸く幾分の望みを恢復した。

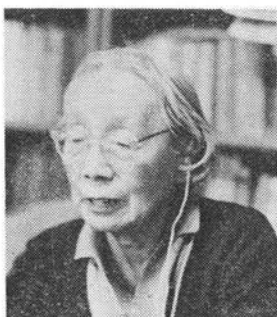
過去三十五年の婦女新聞は、男女の人格平等を主張することゝ於て終始した。女子を男子の附屬物視した封建時代の舊思想に反抗して、人格としては男女の平等たらざるべからざる所以を、明治時代から呼びつづけて來た。だから法律上の人權、政治上の選挙權、社会上の地位、教育上の施設、職業上の範圍等、男女に於て厚薄高下の差があつてはならぬ。女子の大多数は家庭の人として生活するから、政治上職業上の權利などは男子ほど痛切に必要を感じないものが多いけれども、それだからとして其の方面の女子の權利を無視してはならぬと、何十回何百回となく繰返して論じ來つた。而して昭和の今日は、最早男女の人格平等について疑ひを狭むやうなものはないとなつたが、實際の社会に於ては男女の人格平等は未だ實現して居らない。特に近年ファッショ思想の旺盛と共に、政府は軍部の勢力に引廻され、民間には暴力が横行して、平和の宣傳者たるべき婦人は、肩を窄めて屏息しなければならなくなつて來た。此の勢ひが更に進めば、社会の男女觀が或は封建時代の昔に逆轉するのではないかと案ぜられる程である。これは實に文化の退歩であり、人類の不幸であり、国家將來の爲の深憂事でないか。多年男女の人格平等を主張し來つた婦女新聞が、この情勢を目前にして、使命すでに終れりと樂觀することが出来ようか。況んや女子高等教育の道は未だ完全に通ぜず、政府の男女教育に対する施設は、富家の息子と貧家の

娘の如く甚しき差別待遇を取てしつある現状に於てをや。

此の際婦女新聞は、一個の福島が好むと好まないにかまはらず男女の協力に由る愛と平和の社会を実現すべく、一層猛進せねばならぬ。それが実現し得るまでは、婦女新聞の使命は断じて終らない。もし福島が疲れて陣頭に立ち得ないなら、第二の福島を求めてでも婦女新聞は其の使命を達成しなければならぬと。これが私の冷静に考へた上の結論である。そして個人としての私は最早役に立たない老年にはなつたけれども、安心して委任し得る後継者の得られるまでは、尚魯鈍に鞭うつて婦女新聞の為に働かねばならぬと確信するに至つた。

〔註〕

- (1) 吉見周子編著『日本ファシズムと女性』二六ページ
- (2) 前掲書一二四ページ
- (3) 岩波講座『日本歴史』18近代5二三〇ページ



一九八〇年十一月二日、満九十歳の誕生日前日、山川菊栄先生は永遠の旅につかれた。

香り立つ白い菊の花に包まれた御ひつぎを仰ぎながら、師であり同志であり戦友でもあった夫に恵まれ、よき子孫を残し、果敢にたたかい、鋭い論陣を張り、なすべきことをなしたご生涯は、栄える菊にも似て悔いのないものであったと思つた。七二年二月、『あごろ』を創刊したとき、それを誰よりも喜んでくださったのは山川先生だった。「ああ、もうこれで大丈夫、と思ひました」とおことばを頂いて、意外さに、何度も、先生独特の、あののびやかなお筆のあとを読み返したのを覚えていますが、今の年齢になってみると、先生が喜ん

(4) 今日の読者の中にはこの綱領に違和感を持つ人もあるが、これについては福島四郎の次の言葉が一つの回答になってはいしまいか。

吾等の理想は新旧思想の調和なり、吾等の主義は常識主義なり、中庸主義なり、更に露骨に言へば平凡主義なり。之を無主義なりと笑ふ人あらば無主義我にて甘んぜん。吾等は唯平凡なる多数者の伴侶となり案内者となりて、其の行路を安全ならしむるに努めんのみ。希わくは吾等をして其の志を遂げしめられん事を。之を七百号の辞とす(一九一三年一〇月一七日)

(5) 美濃部達吉博士の天皇機関説を指す。

追記

婦女新聞の創刊号からの全巻が、東大法学部の明治新聞雑誌文庫に完全な形で保管されていることを最近知つた。本稿には間に合わず、手許の資料のみによる不完全な記述となつたことをお詫びしたい。

でくださったことが、素直に胸にしみとおる。先生は、以来、八あごろVのただ一人の名誉会員になつてくださった。さまざまの困難とたたかいながら『あごろ』を説刊できたのは深いお導きのおかげと、心から感謝してゐる。

この一、二年の先生は、読書もご無理と伝えられていたが、20号で『婦女新聞』のことにおふれたのをお心にとめて、ご子息の振作先生を通じてコピーを『婦女新聞』ゆかりの福島さんにお送りくださった。福島さんのご寄稿を頂けた背後に、先生の深い愛を感じた。

反戦の思いをこの号に託して、先生の追悼としたい。(斎藤千代記)

シリーズ・いまを生きる

〈5〉女・母と娘

A5判 174頁
定価 950円

アンケートに見る「母と娘」：宮淑子／祖母・母たちの時代：永畑道子／インタヴュー：文化・母・子：原ひろ子／母と娘がかくメッセージ：平川和子／私の母性・母性愛考：安達倭雅子／結びあうもの：母と娘：竹内尚代／産まない女にとつての母性：藤波玖美子／まんがに見る「母と娘」：有川優／対談●新たに問い直す母娘関係：俵萌子×河野貴代美他



ユック舎

東京都文京区本郷2-16-9

電話／03-815-6549

振替／東京1-86349

発売／批評社

電話／03-813-6344

〈1〉女・31歳 ●850円

〈2〉女・うたう・かたる ●850円

〈3〉女・あらわれた性 ●850円

〈4〉女・再就職 ●950円

プロフェッショナルな仕事なら

—— BOC へ



〒160 東京都新宿区新宿1-9-6

TEL 東京(03)354-3941(代表)

- 印刷物の企画から印刷製本まで
- スライド・映画の製作
- 各国語ほん訳・通訳
- 講演・座談会等の速記・リライト
- 印刷物デザイン、コピー、撮影
- 取材記事作成
- その他各種専門職

年表 十五年戦争と女

戦前から敗戦まで

戦争をめぐる 内外の状況	国内の動き	主張的婦人団体の動き	体制協力的婦人団体の動き	言論・思想をめぐる状況
<p>1927年(昭和2年)</p> <p>2月婦人参政権法案、第52議会に提出(審議未了)</p> <p>3月金融恐慌、銀行商社休業、破産全国に波及</p> <p>3月内務省社会局内勤俸奨励婦人団体常任委員会内に愛国貯金会設置</p> <p>5月第一次山東出兵</p>	<p>2月最初の普通選挙(第16回総選挙)</p> <p>2月婦人参政権法案、第52議会に提出(審議未了)</p> <p>3月金融恐慌、銀行商社休業、破産全国に波及</p> <p>3月内務省社会局内勤俸奨励婦人団体常任委員会内に愛国貯金会設置</p> <p>5月内務省社会局内勤俸奨励婦人団体委員会、愛国婦人会各府県社会主事を招き勤俸の宣伝につき協議、愛国貯金のための全国的婦人団体組織の必要性を決議</p>	<p>1月婦選獲得同盟機関誌『婦選』創刊</p> <p>1月婦選団体連合、成立</p> <p>7月関東婦人同盟創立大会</p> <p>7月労働婦人連盟結成責任者 赤松常子</p> <p>10月全国婦人同盟創立大会</p> <p>11月社会婦人同盟結成 赤松明子ら</p> <p>12月全国婦人同盟主催婦人解放デー(婦人参政権獲得・婦人の深夜業禁止などピラ撒ぎ)</p> <p>1月婦人平和協会、米国の軍艦増設に対し、反対の請願書送付</p>	<p>4月大日本連合女子青年団創立宣言</p> <p>10月大日本連合女子青年団発団式</p>	<p>4月婦人同盟準備の会合に弾圧</p> <p>5月東洋モスリン亀戸工場争議</p> <p>7月女高師紛議</p> <p>11月ロシア革命十周年記念演説会で関東婦人同盟の十数名検挙</p> <p>2月平塚らいてう「婦選運動者へ」よびかける(東京日日新聞)</p>

<p>4月第二次山東出兵 5月濟南事件 6月張作霖爆炸死事件</p>	<p>3月内務省、第9回勸奨奨励週刊、婦人会などに愛国貯金をよびかける 6月治安維持法改正(死刑・無期刑を追加) 7月特高科を設置</p>	<p>1929年(昭和4年) 10月英国、日・米・仏・伊をロンドン軍縮會議に招請 10月米株式大暴落 世界恐慌開始 株価暴落、自殺者激增 11月朝鮮光州学生運動起こる 日本の学生非行に抗議して 12月ホノルル婦人会議戦争防止の研究</p>	<p>1930年(昭和5年) 1月ロンドン(海軍軍縮)會議</p>
<p>3月内務省、第9回勸奨奨励週刊、婦人会などに愛国貯金をよびかける 4月婦選獲得同盟第4回總會 5月婦人消費組合協會発会式 9月無産婦人連盟結成(堺真柄ら) 10月汎太平洋婦人会議報告会</p>	<p>2月婦人公民権案衆院に提出 6月全国高等女学長會議、公民科必修を可決 8月小橋文相「教化運動の策動」を訓示 8月勸奨奨励婦人団体委員會、教化総動員に参加し本年度実行計画発表表 12月文部省、女子中等教育改善調査会第一回委員會議催</p>	<p>1月無産婦人同盟結成 書記長 岩内とみゑ 1月婦選請願デモ 街頭署名四三二九名 5月ガス値下げ期成デモ 婦人団体街頭署名</p>	<p>1月無産婦人芸術連盟結成 高群逸枝提唱、平塚らいてう・八木秋子ら14人、強権主義否定、女性新生を綱領に</p>
<p>2月日本共産党機関誌『赤旗』創刊 3月3・15事件で共産黨員全国の大檢舉 5月『労働』『付録婦人版創刊7月』『女人芸術』再刊 7月婦人雜誌取締請願提出</p>	<p>3月山本宣治刺殺 4月4・16事件共産黨員全国の大檢舉(党組織破壊的打撃) 8月織本(常刀)貞代労働女塾開設 10月日本大学女子学生演説會</p>	<p>9月第1回全日本婦人經濟大会主催全関西婦人連合會 政府協力を要請 10月大日本連合女子青年團大會開催、文部省の教化総動員に参加し緊縮節約思想を普及宣伝のため</p>	<p>2月共産党全国の大檢舉 2月無産婦人芸術連盟結成(高群逸枝)</p>

戦争をめぐる 内外の状況	国内の動き	主張的婦人団体の動き	体制協力的婦人団体の動き	言論・思想をめぐる状況
<p>1930年(昭和5年) 2月世界平和婦人会議 海軍軍縮会議各国 代表に軍縮請願書 提出</p>	<p>5月婦人公民法案、衆議 院本会議で初めて可決 (貴族院で審議未了) 6月文部省、家庭教育振興 第一回協議会開催(婦 人団体の組織につい て) 10月恐慌深化、減給減俸し きり 11月浜口首相東京駅頭で狙 撃さる 12月田中文相「家庭教育振 興ニ関スル件」訓令</p>	<p>2月国際連絡婦人委員会 藤田たきら既婚婦人の 国籍選択につき男子と 同等の利権を与えるよ う外務省に陳情 4月第1回全日本婦選大会 開催、婦選獲得同盟主 催 参政権・公民権・ 結社権要求、決議 5月婦人同志会結成、吉岡 弥生・山脇房子・井上 秀子ら稲健な婦選運動 をめざす 7月完全公民権運動開始婦 選獲得同盟ほか2団体 10月徹底婦選共同闘争委員 会結成</p>	<p>4月大日本連合女子青年 団、女子青年公共生活 訓練運動懇談会開催 (国家觀念の確立など の指導を協議) 10月教育勅語発布40年記念 に、東京の私立高女三 万二千人(50校)行進 大会開催 11月第2回全日本婦人経済 大会開催 12月大日本連合女子青年 団、婦人参政権運動な ど政治運動せぬよう通 牒</p>	<p>3月「婦人戦線」創刊 4月鎖紡争議 6月松田解子「女子青年団 を取り返せ」(「婦人運 動」6月号) (女子青年団の官製化・ 反動化に反対し自主化 を説く) 9月東洋モスリン第二次争 議 10月婦人セツルメント創立 (奥むめを) 11月無産婦人同盟大阪支部 創立 12月東京の十五新聞社、政 府の疑獄事件関係の言 論圧迫に対して共同宣 言を発表 (12月18日安達内相、 陳謝声明)</p>
<p>1931年(昭和6年) 3月三月事件、陸軍ク ーデター未遂</p>	<p>2月政府、婦人公民法案 (制限法案)を議院に 提案可決</p>	<p>2月無産婦人大会開催 (徹底婦選獲得を決議) 第2回全日本婦選大会 開催(完全公民権・参 政権・結社権を要求)</p>	<p>3月大日本連合婦人会発会 式 地域婦人会・主婦 会を全国的に統合</p>	<p>3月日本セルロイド工場争 議</p>

<p>6月陸軍省参謀本部満蒙問題解決方策の大綱を決定</p> <p>9月柳条溝事件</p> <p>満州事変はじまる</p>	<p>10月東北北海道大飢饉</p>	<p>3月日本廢娼期成同盟会結成</p> <p>10月日本婦人平和協会、満州事変に関し平和を要望し声明発表</p>	<p>9月愛国婦人会、満州派遣軍への慰問運動を各支部へ通達</p> <p>12月愛国婦人会、出征軍人遺家族慰問開始</p>	<p>5月『婦人戦旗』刊</p> <p>12月平塚らいてう「満州事変と婦人の態度」を論ず(都新聞)</p>
<p>1932年(昭和7年)</p> <p>1月上海事変起る</p> <p>2月国際連盟のリットン調査団来日</p> <p>3月満州国建国宣言</p>	<p>2月井上準之助前蔵相暗殺</p> <p>5月大養首相暗殺(5・15事件)</p> <p>6月衆議院、満州国承認決議</p> <p>6月警視庁に特別高等警察部設置</p> <p>9月内務省、国民自力更生運動の開始を命ず</p> <p>この年、労働争議相次ぐ</p>	<p>1月婦選団体連合委員会結成(婦選獲得のための共同戦線)</p> <p>2月全国婦選デモ</p> <p>4月社会民衆婦人同盟分裂</p> <p>5月第3回全日本婦選大会(フアンズム反対を決議)</p> <p>7月赤旗に32年テーゼ掲載</p> <p>8月社会大衆婦人同盟結成大会</p> <p>委員長 赤松常子</p> <p>8月婦選後援団体連合会創立(10余団体参加)</p>	<p>10月愛国婦人会、政府の自力更生運動に呼应し府県支部と協議</p> <p>10月大日本国防婦人会創立</p> <p>12月大日本国防婦人会関西本部発会式</p>	<p>1月『働く婦人』創刊、編集長 中条百合子、2号発禁(反戦宣伝のため)</p> <p>3月『無産者新聞』婦人版創刊号七千部押収される</p> <p>4月中条百合子検挙</p> <p>9月京都共産党事件</p> <p>10月第3次共産党大検挙開始</p> <p>この年、婦人活動家の検挙相次ぐ</p>
<p>1933年(昭和8年)</p> <p>1月山海関事件</p> <p>(日・中両軍衝突)</p>	<p>2月閣議、国際連盟の日本軍満州撤退勧告案反対</p>	<p>1月社会大衆婦人同盟、無産婦人大会開催(軍事予算などに反対)</p>	<p>3月愛国婦人会、第1回地久節奉祝婦人報告祭舉行</p>	<p>2月帯刀貞代 治安維持法違反で起訴</p> <p>2月長野県小学校教員左翼運動事件の検挙開始</p>

戦争をめぐる 内外の状況	国内の動き	主張的婦人団体の動き	体制協力的婦人団体の動き	言論・思想をめぐる状況
1933年(昭和8年) 3月国際連盟脱退 5月塘沽停戦協定成立	6月大審院、暴力行為等処罰法は暴力団・不良青年団のみが対象ではなく、労働争議の場合にも適用ありと判決	2月第4回全日本婦選大会開催 (婦人参政権・公民権・結社権獲得、膨大な軍事予算反対) 4月婦人団体国際連絡委員会創立 11月新日本婦人協会創立(婦人の地位向上啓蒙運動)	8月日本国家社会婦人同盟 日本婦人同盟と改称 10月愛国婦人会、勤儉奨励(婦人団体委員会の愛国貯金運動を引き継ぐ) 11月愛国女子団結成(愛国婦人会未成年女子の結集)	6月共産党幹部、佐野・鍋山の転向声明
1934年(昭和9年) 3月満州国、帝政実施	2月外相広田弘毅、米國務長官ハルに日米関係の調整について非公式メッセージを送る 4月司法省、思想検事設置 6月文部省、思想局を設置 10月陸軍省、国防の本義と、その強化の提唱を頒布 11月東北地方冷害大凶作 11月予算復活をめぐり大蔵省と軍(陸・海)の攻防はげし	2月第5回全日本婦選大会 膨大な軍事費反対を決議(婦選即時実施・産児調節・廃娯・母子扶助法制定など要求) 9月母性保護法制定促進婦人連盟結成(婦選団体連合委が設立準備) 委員長 山田わか 12月母性保護法制定促進婦人連盟、衆・貴両院に凶作地母子救済に関する請願書提出、採択	3月愛国婦人会、全国的に婦人報国祭挙行 4月大日本国防婦人会総本部設立式(陸・海軍の監督、内務省の指導による) 9月大日本国防婦人会千葉本部結成式(ダンス絶対排撃決議)	5月出版法改正公布(皇室の尊厳冒瀆・安寧秩序の妨害などの取り締りを強化) 12月市川源三(東京府立第一高女校長)著『現代婦人読本』が東京府会で問題化
11月士官学校事件(青年将校らによるクレーター発覚)				

<p>1935年(昭和10年)</p>	<p>1月 田田弘毅、議会で日華親善論を発表 3月 衆議院、国体明徴決議案を満場一致で可決 4月 文部省、各学校に国体明徴を訓令</p>
<p>1936年(昭和11年)</p> <p>1月 ロンドン軍縮会議 わが国首席全権 (永野修身)会議を脱退</p>	<p>10月 政府、天皇機関説は我 国体に反すると第二次 国体明徴声明</p> <p>8月 政府、国体明徴を声明</p> <p>3月 内務省、モーデー禁止 を通過 4月 内務省、言論取締強化 方針を明示</p>
<p>5月 婦人団体協議会、6団体共催討議会運動につき協議 5月 第11回婦選獲得同盟総会(非常時局にあわせて運動目標を選挙肅正</p>	<p>2月 母性保護法制定促進婦人連盟第1回全国代表者会議開催 (母子扶助法および家事調停法の制定、母子ホーム建設助成を決議) 2月 第6回全日本婦選大会「非常時に果して婦選を要求せざるか」につき論議、婦選諸法・母子保護法・婦人労働立法制定要求決議 10月 第8回全国社会事業大会で母性保護連盟、母子心中防止策として母子扶助法制定・母子ホーム建設・家事調停裁判所設置を提案、可決</p>
<p>3月 大日本連合婦人会・女子青年団・愛育会、皇后誕生日(3・6)を中心に「母を讃える週間」設定</p>	<p>3月 大日本連合婦人会・女子青年団、第1回合同全国大会開催 (系統婦人団体の拡大強化に関する方針につき討議) 3月 日本婦人連盟結成 会長 徳富蘇峰 (日本婦人精神作興のため) 9月 選挙肅正婦人連合会(35団体10万人) 肅正運動の協力参加 (大日本連合婦人会・愛国婦人会など) 12月 愛国婦人会、「皇太子殿下御降誕記念日之皇子の祝い日」を催す。 (以後毎年行なう)</p>
<p>3月 奥村五百子劇上演停止</p>	<p>2月 4月 東京モスリン金町工場争議 3月 袴田里見検査され、日本共産党中央委員会壊滅 3月 福岡県学務課、高等女学校二学年以上の英語科廃止 4月 美濃部達吉、天皇機関説のため不敬罪で告発され三著書発禁 5月 中条百合子、窪川いね子ら検査 7月 奈良県女子師範学校「生徒思想調査」実施 9月 井上秀子「婦人問題の一考察」検閲により放送中止 9月 東交労働婦人部大会</p>

戦争をめぐる 内外の状況	国内の動き	主張的婦人団体の動き	体制協力的婦人団体の動き	言論・思想をめぐる状況
<p>1936年(昭和11年) 2月2・26事件 皇道 派青年将校率兵 5月軍部大臣現役武官 制復活 6月帝国国防方針、用 兵綱領の第三次改 訂 11月日独防共協定 (ヘルリンで調印)</p>	<p>5月内務省警保局、2・26 事件を口実に、特高 課、治安警察の強化拡 充を決定 5月婦人参政権案はか二法 案を無産派議員提出 (審議未了) 6月文部省、学校体操に弓 道・薙刀を採用 10月教学刷新評議会 答申 (皇国教学観に基づく 女子教育)</p>	<p>運動・母子保護運動の 推進に設定) 8月婦選獲得同盟・社会大 衆婦人同盟など5婦人 団体、女子労働者退職 金問題で内務省労働部 長に交渉 9月母性保護連盟、母子相 談所開設および機関誌 『母性保護』を刊行</p>	<p>6月愛国婦人会授産部、軍 人遺家族の職業補導開 始 3月女給ら六千人、国防婦 人会東京特連支部結成 4月北陸各県で女学生の軍 事訓練開始 7月愛国婦人会(以下愛婦 と略称)、大陸の陸海 軍司令官あて打電、銃 後における愛婦会員の 覚悟を披瀝</p>	<p>6月中条百合子、治安維持 法違反で懲役二年(執 行猶予四年)の判決 7月保養院看護婦争議 1月吉見紡績樽井工場争議 1月赤松常子、政府や経営 者側による戦時体制へ の呼びかけに警戒を促 す(『女性と家庭』新聞)</p>
<p>1937年(昭和12年)</p>	<p>3月文部省、中等学校など の教授要目改訂 (国体の本義明徴の方 針を示す) 3月母子保護法公布 5月各爭議弾圧</p>	<p>1月第7回全日本婦選大会 開催(物価高騰による 賃金引上げ要求の緊急 動議・労働婦人の保護 立法制定要求) 同大会 はこの年で最後となる 5月市川房枝・久布白落実 ら中心に離村子女問題 研究会開催、身売防止 対策など協議</p>		

<p>7月日中戦争勃発 蘆溝橋で日中両軍衝突 日本軍、華北で総攻撃開始 9月日本海軍、全中国沿岸封鎖宣言 10月国際連盟総会、日華紛争に関し、日本 の行動は九カ国条約・不戦条約違反との決議を採択</p>	<p>11月日独伊防共協定調印</p>
<p>7月政府、華北の治安維持のため派兵を声明 7月政府、北支事変に関し自衛行動をとると声明 (内地三個師団に華北派兵命令) 7月陸軍省、日本赤十字社に対し戦時救護班出動を指示 7月陸軍省、東京市下女学生を動員し、慰問袋の調整を依頼 8月政府、南京政府を断乎膺懲を声明 8月閣議、国民精神総動員実施要項を決定 9月国民精神総動員実施要綱発表</p>	<p>7月政府、華北の治安維持のため派兵を声明 7月政府、北支事変に関し自衛行動をとると声明 (内地三個師団に華北派兵命令) 7月陸軍省、日本赤十字社に対し戦時救護班出動を指示 7月陸軍省、東京市下女学生を動員し、慰問袋の調整を依頼 8月政府、南京政府を断乎膺懲を声明 8月閣議、国民精神総動員実施要項を決定 9月国民精神総動員実施要綱発表 11月広田外相、对中国和平工作を始める 11月宮中に大本營設置</p>
<p>5月母性保護連盟第三回全国委員会(母子保護法運営のため母子保護協会を設立すること、新運動として働く婦人の母性保護を推進することなどを決定) 6月母性保護連盟 山田わか・田中芳子・市川房枝・河崎なつら方面委員の増員に際し、婦人委員の増員を、府知事・社会局長に陳情</p>	<p>5月母性保護連盟第三回全国委員会(母子保護法運営のため母子保護協会を設立すること、新運動として働く婦人の母性保護を推進することなどを決定) 6月母性保護連盟 山田わか・田中芳子・市川房枝・河崎なつら方面委員の増員に際し、婦人委員の増員を、府知事・社会局長に陳情</p>
<p>7月大日本国防婦人会(以下国防婦と略称)会長名で、家庭国防の完璧を図り難関突破の徴をとばす 7月愛婦・国婦、軍事扶助中央委員会に参加 (援護活動強化) 7月篤志看護婦志願多数 7月銀座街頭に千人針女性群進出 8月愛婦・国婦の対立関係表面化 9月愛国婦人会サンフランシスコ支部設置 9月大日本連合婦人会・同女子青年団、女子義勇隊結成運動開始 9月日本婦人団体連盟結成 民間八団体(矯風会・婦人同志会・婦選獲得同盟・日本女医会など) 10月愛婦・国婦・大日本連合婦人会・同女子青年団、国民精神総動員中央連盟結成</p>	<p>7月大日本国防婦人会(以下国防婦と略称)会長名で、家庭国防の完璧を図り難関突破の徴をとばす 7月愛婦・国婦、軍事扶助中央委員会に参加 (援護活動強化) 7月篤志看護婦志願多数 7月銀座街頭に千人針女性群進出 8月愛婦・国婦の対立関係表面化 9月愛国婦人会サンフランシスコ支部設置 9月大日本連合婦人会・同女子青年団、女子義勇隊結成運動開始 9月日本婦人団体連盟結成 民間八団体(矯風会・婦人同志会・婦選獲得同盟・日本女医会など) 10月愛婦・国婦・大日本連合婦人会・同女子青年団、国民精神総動員中央連盟結成</p>
<p>10月安賀君子を中心に婦人グループ「かりがね会」結成 10月帝大セツルメント中心の読書会に参加した女性検査</p>	<p>10月安賀君子を中心に婦人グループ「かりがね会」結成 10月帝大セツルメント中心の読書会に参加した女性検査</p>

戦争をめぐる 内外の状況	国内の動き	主張的婦人団体の動き	体制協力的婦人団体の動き	言論・思想をめぐる状況
<p>1937年(昭和12年)</p> <p>12月日本軍南京を占領 (大虐殺事件をおこす、日本では提灯行列)</p>	<p>1月大本営・政府首脳による御前会議、支那事変処理方針決定 (国民政府が和を求めてこない場合は、以後これを相手とせず)</p>	<p>1月市川房枝 婦選運動を継承すると同時に非常時局への責任を果したいと所信発表</p>	<p>11月国民精神総動員婦人大講演会開催、東京府・市および愛国・国防・大日本連合各婦人会・日本婦人団体連盟・東京婦人愛市協会・大日本連合女子青年団共催</p>	<p>12月第一次人民戦線事件(山川均・加藤勘十ら労働派四百人余を検挙) 12月宮本百合子、内務省警保局から執筆禁止(中野重治・戸坂潤らも)</p>
<p>1938年(昭和13年)</p> <p>1月上海の日本軍特務部に軍の慰安婦として、日本人朝鮮人合わせて百名余の女性が集められた。この後も多数の従軍慰安婦が戦地に送られる(八一九割が朝鮮人)</p> <p>4月満蒙開拓青少年義勇軍五千名渡満</p> <p>5月ドイツ、満州国を正式承認 独満修好条約</p>	<p>2月国民精神総動員中央連盟の家庭実践に関する調査委員会、「家庭報国三綱領実践四要目」を発表、婦人団体に協力要請</p> <p>4月国家総動員法公布 燈火管制規則公布</p> <p>5月隣組の名称初めて使用(東京市町会規約準則)</p>	<p>3月愛国婦人会、家庭強化運動を展開(家庭の強化は婦人の手でをスロイガンに)</p> <p>6月愛国婦人会・国防婦人会の相剋に両会会長親和提携を通知</p>	<p>1月市川房枝「婦選運動を再認識せよ」 (『女性展望』1月号)</p> <p>6月高群逸枝『母系制の研究』</p> <p>7月赤松千子、政府の一汁一菜運動に反対声明(働く婦人に栄養の必要を強調) (やまと新聞紙上)</p>	

<p>5月日本軍徐州を占領</p> <p>7月張鼓峰で国境紛争</p> <p>10月日本軍、武漢三鎮占領</p>	<p>6月閣議、最高国策検討機関として五相会議(首・陸・海・外・蔵)の設置決定</p> <p>9月陸軍省、新聞班を情報部と改称</p> <p>11月近衛首相、東亜新秩序建設を声明</p>		<p>7月—8月全国各女学校、夏休み中の勤勞奉仕を行なう</p>	<p>9月林芙美子、吉屋信子ら、陸軍作家従軍部隊に参加、漢口へ</p> <p>11月内務省図書課、代表的婦人雑誌編集者を招き健全な母親教育・用紙節約についての協力を要請</p>
<p>1939年(昭和14年)</p> <p>2月満州国・ハンガリ1、日独伊防共協定参加に関する議定書調印</p> <p>7月日本軍、ノモンハン攻撃開始</p> <p>9月第二次世界大戦勃発</p>	<p>1月近衛内閣総辞職 平沼騏一郎内閣成立</p> <p>2月政府、国民精神總動員強化方策を決定</p> <p>3月人事調停法公布(家族間の紛争に関する調停規程)</p> <p>3月文部省、大学における軍事教練を必修とする</p> <p>5月青少年学徒ニ賜ヘリタル勅語</p> <p>7月国民徴用令公布</p> <p>8月女子の坑内作業禁止規定緩和(鉱山労働力不足を女子一万四千人で補充)</p> <p>10月厚生省「勞務動員計画実施に伴う女子勞務者の就職に関する件」について通牒</p>	<p>体制協力化への動き</p> <p>2月婦人時局研究会発会結成 会長市川房枝 理事谷野せつ子 しげりほか 婦選獲得同盟から派生、婦人関係の国策研究、当局への建議協力を行なう</p> <p>3月国民精神總動員中央連盟に吉岡・竹内・市川ら参加</p> <p>5月婦選獲得同盟第15回総会、「精神運動の徹底に努むること」などの運動方針可決、婦人参政權など法律改正運動は姿を消す</p> <p>12月婦選獲得同盟15周年記念事業として婦人問題研究所開所 所長市川房枝</p>	<p>6月京浜グループ関係者検査</p> <p>6月灯台社事件で女性を含む一三〇名余一斉検査</p> <p>12月エスベラント研究会などに関係した女性ら検査</p>	

戦争をめぐる 内外の状況	国内の動き	体制協力化への動き	言論・思想をめぐる状況
<p>1940年(昭和15年)</p> <p>8月松岡外相、仏大使に、日本軍隊の仏印通過および仏印内飛行場の使用を要求</p> <p>9月日・仏印軍事細目協定成立(日本軍北部仏印に進駐)</p> <p>9月日独伊三国同盟ベルリンで調印</p>	<p>1月阿部信行内閣、陸海軍の支持を失い、総辞職</p> <p>2月青少年雇入制限令(軍需産業への労働力集中化)</p> <p>2月民政党斎藤隆夫、衆議院で戦争批判(3月除名)</p> <p>3月衆議院、聖戦貫徹決議案可決</p> <p>7月国民精神総動員中央本部、奢侈品使用禁止運動を決定</p> <p>7月第二次近衛内閣成立</p> <p>7月閣議、基本国策要綱を決定(大東亜新秩序、国防国家の建設)</p> <p>10月大政翼賛会発会式(総裁 近衛文麿)</p> <p>11月大日本産業報国会設立</p> <p>11月生めよふやせよ、十人以上の子をもつ多子家庭一万三三六を表彰</p>	<p>2月愛国婦人会・国防婦人会・大日本連合婦人会および大日本連合女子青年団、戦時節米報国運動を通牒(七分搗米常用の徹底・混食・代用食の勵行)</p> <p>3月大日本連合婦人会、皇紀二千六百年記念全国大会開催(奈良・畝傍)(家庭教育・婦徳の涵養を通じて皇運を扶翼するとの宣言)</p> <p>7月大日本連合女子青年団各支部から二人ずつ選ばれ、九四名が満州建設勤労奉仕団女子青年隊として出発(五〇日間)</p> <p>9月婦選獲得同盟解散(国内新体制樹立を促進するため)</p>	<p>5月山代巴ほか、日本共産党再建グループとして検挙</p> <p>7月内務省、左翼的出版物に対する弾圧を一段と強化30余社の出版物を発禁</p> <p>12月大政翼賛会宣伝部と各方面雑誌編集者との懇談会</p>

<p>1941年(昭和16年)</p> <p>4月日ソ中立条約</p> <p>4月日米交渉、正式に開始</p> <p>6月南部仏印へ進駐</p> <p>7月米國、在米日本資産を凍結、英・蘭もつづいて凍結</p> <p>8月近衛・ルーズベルト会谈提議(野村駐米大使に訓令)</p> <p>10月米國、四原則の確認と仏印・中国からの撤兵要求</p> <p>覚書を手交</p> <p>11月大本營、連合艦隊に作戰準備を命令</p> <p>11月野村・米栖岡大使、ハル長官と会見</p> <p>12月真珠灣攻撃開始</p> <p>12月マレー沖海戦</p>			
	<p>1月文部省、女学校の制服統一を決定</p> <p>1月閣議、人口政策確立要綱を決定</p> <p>3月国防保安法公布</p> <p>3月改正治安維持法公布(予防拘禁制を追加)</p> <p>4月生活必需品物資統制令公布</p> <p>7月全国の隣組、一斉に常会をひらく</p> <p>7月御前會議、情勢の変化に伴う国策要綱</p> <p>7月第二次近衛内閣總辭職</p> <p>7月文部省、「臣民の道」發表</p> <p>8月文部省、各学校に、全校組織の學校報國隊の編成を訓令</p> <p>8月拓務・文部兩省、主要府県の国民學校内に興亜少年少女隊を組織することを通牒</p> <p>9月御前會議 帝國国策遂行要領を決定</p> <p>10月第三次近衛内閣總辭職</p> <p>東条内閣成立</p> <p>11月兵役法施行令改正公布(丙種も召集)</p> <p>11月國民勤勞報告協力令公布</p> <p>12月御前會議</p> <p>對・米・英・蘭に宣戰布告を決定</p>		
	<p>12月愛國婦人会、米英打倒決戦体制婦人大会開催</p> <p>12月大日本連合婦人会、大戦下婦人大会開催</p>	<p>1月大日本青少年団結成、大日本連合女子青年団を吸収</p> <p>(團長 橋田文部大臣)</p> <p>3月谷野、赤松ら、大日本産業報国会生活指導部に参加</p> <p>6月協力会(大政翼賛会) 婦人代表高良とみらを、婦人団体が激励会</p>	
<p>12月言論・出版・集会・結社等臨時取締法公布</p>	<p>10月ゾルゲ事件、國際スパイの嫌疑により尾崎秀実ら検挙</p> <p>12月對米開戦に伴う非常措置として一斉検挙(二千名余が予防拘禁)</p>	<p>7月家庭婦人雜誌約六十種の發行人、警視庁に招かれて整理統合を要請される</p> <p>(その結果八十誌から十七誌に整理される)</p> <p>10月ゾルゲ事件、國際スパイの嫌疑により尾崎秀実ら検挙</p>	<p>1月宮本百合子「主婦の政治的自覚」『教育』1月号)</p> <p>(一般婦人の隣組活動も名流婦人の精神運動参加も、婦人の政治的成長を示すものではないと批判)</p>

戦争をめぐる内外の状況	国内の動き	統合後の婦人団体の動き	言論・思想をめぐる状況
<p>1942年(昭和17年)</p> <p>1月日本軍マニラ占領</p> <p>2月シンガポール陥落</p> <p>3月ジャワ島へ上陸</p> <p>ラングーンを占領</p> <p>5月マンドレー占領</p> <p>珊瑚海海戦</p> <p>6月ミッドウェー海戦</p> <p>(戦局の転機となる)</p> <p>アッツ島に上陸</p> <p>10月ガダルカナル島の攻防</p>	<p>1月塩通帳制配給実施</p> <p>瓦斯使用料割当制実施</p> <p>1月大日本翼賛壮年団結成</p> <p>2月味噌・醬油切符制配給実施</p> <p>衣料に点数切符制実施</p> <p>2月厚生省、婦人標準服提案、制定普及を決定</p> <p>4月東京・名古屋・神戸など初空襲</p> <p>4月翼賛選挙(第21回総選挙)</p> <p>5月文部省教育局、戦時家庭教育指導要項制定(母の戦陣訓として発表)</p> <p>7月文部省、女学校の外国語科を随意科と決定</p> <p>8月中等学校高等学校等の修業年限短縮</p> <p>10月帝都防空訓練開始</p> <p>11月大政翼賛会、女子勤労動員促進要項発表</p> <p>11月妊産婦手帳届出受付開始(生めよふやせよ政策)</p>	<p>1月政府による婦人団体統一一元化。役員指名</p> <p>2月大日本婦人会発会式</p> <p>20歳未満の未婚者を除く女子二十万人を組織</p> <p>会長 山内禎子</p> <p>2月愛国・国防・大日本連合の三婦人団体は解散</p> <p>4月大日本婦人会・東京市共催「ハワイ海戦特別攻撃隊将士とその母を讀える会」開催</p> <p>4月翼賛選挙貫徹婦人同盟結成</p> <p>8月全国女教員興亜教育研究会北海道で開催</p> <p>11月大日本婦人会 第1回総会参加 八千人、綱領発表</p> <p>12月大日本婦人会、勤労報国隊の結成を全国支部に指令</p>	<p>3月日本出版文化協会、用紙割当て全面統制で全出版企画の発行承認制採用</p> <p>12月大日本言論報国会設立総会</p> <p>会長 徳富蘇峰</p> <p>会員約七百人</p> <p>理事の一人に市川房枝</p>

<p>1943年(昭和18年)</p> <p>2月日本軍、ガダルカナル島撤退</p> <p>3月ニューギニア増援のため の日本輸送船団八隻全滅</p> <p>4月連合艦隊司令長官山本五十六ソロモン群島上空で戦死</p> <p>5月アッツ島日本軍守備隊玉砕</p> <p>7月キスカ島の日本軍撤退</p> <p>9月イタリヤ無条件降伏</p> <p>11月マキン、タラワ(ギルバート諸島) 両島日本軍守備隊玉砕</p>	<p>1月閣議、生産増強勤労緊急対策要項決定(女子を以て代替しうる職種には男子の就業を制限する旨発表)</p> <p>3月高等女学校規程制定 修業年限四年に短縮</p> <p>4月東京市戦時託児所設立要綱実施</p> <p>5月木炭のはか薪も配給制となる</p> <p>6月工場法戦時特例公布(女子・年少者に関する就業時間・休日・深夜業・休憩の制限、厚生大臣の指定工場では適用されないこととなる)</p> <p>6月学徒勤労動員体制確立要綱決定</p> <p>9月女子勤労動員促進に関する件決定、発表</p> <p>10月学生・生徒の徴兵猶余全面停止</p> <p>10月教育に関する戦時非常措置方策決定</p> <p>10月厚生省・文部省、女子勤労動員促進に関する件通牒</p>	<p>2月大日本婦人会、竹槍訓練などの国防訓練を展開</p> <p>3月皇道婦人連合会、戦時下女性風俗維新大会開催</p> <p>7月大日本婦人会、婦人総決起中央大会開催</p> <p>(戦士をささげませう、決戦生産に参加しませうのスローガン)</p>	<p>3月大日本言論報国会発表会</p> <p>9月文化学院、強制閉鎖建物軍部に接収</p> <p>9月日本出版会、全出版書籍に原稿または校正刷での事前審査強制化</p>
<p>1944年(昭和19年)</p> <p>2月マーシャル群島のクエゼリン、ルオット両島の日本守備隊玉砕</p> <p>2月ラバウル地区の日本軍は孤立</p>	<p>1月文部省、女子専門学校刷新要目発表</p> <p>1月緊急国民勤労動員方策要綱決定</p> <p>1月東条首相「女性の勤労動員逃れは許せない」と発言</p> <p>1月内務省、東京・名古屋に初の疎開命令</p> <p>2月文部省、中等学校教育内容の戦時措置の要綱通牒</p> <p>2月国民職業能力申告令改正公布</p> <p>2月決戦非常措置要綱決定。学徒の通年動員方式決定</p>	<p>4月長野県下の高等女学校新卒業生をはじめとして東海・関東・北信越から六千名の女子が豊川海軍工廠に動員</p> <p>4月日本女子大生四年生全員勤労配置</p> <p>名古屋市立第一高女生徒、市電車掌として出勤</p>	

戦争をめぐる内外の状況	国内の動き	統合後の婦人団体の動き	言論・思想をめぐる状況
<p>1944年(昭和19年)</p> <p>6月サイパン島日本守備隊玉砕</p> <p>6月マリアナ沖海戦</p> <p>7月大本営、インパール作戦の失敗を認め作戦中止</p> <p>8月グアム島の日本軍守備隊玉砕</p> <p>10月米軍、沖繩を空襲</p> <p>10月レイテ沖海戦</p> <p>10月中国基地よりB29北九州を空襲</p> <p>11月マリアナ基地のB29東京を初空襲</p>	<p>3月女子挺身隊制度強化方策要綱決定</p> <p>4月文部省、学校工場化実施要綱発表。女子の学校の工場化を指示</p> <p>6月女子挺身隊に依る勤労協力に関する勅令案要綱(女子挺身隊の法的根拠)</p> <p>7月東条内閣総辞職</p> <p>7月文部省、学徒勤労の徹底強化に関する件通牒(深夜業を女学生にも課す)</p> <p>8月国民総武装閣議決定</p> <p>8月国民学校児童集団疎開 第一陣上野駅発、女教員多数引率</p> <p>8月業種別女子使用標準率決定(重工業に女子進出)</p> <p>8月学徒勤労動員令公布、即日施行</p> <p>8月女子挺身隊勤労令公布、施行</p> <p>9月女子勤労指導者養成実施要綱発表</p> <p>9月全国夕刊紙廃止、日金ダイヤモンド強制供出、建物強制破壊疎開</p> <p>10月陸軍特別志願兵として17歳未満の者の志願の許可</p> <p>11月政府、戦争完遂に関し声明</p> <p>11月厚生省、女子徴用実施並びに女子挺身隊の出動期間延長</p>	<p>5月各地女子校で学校工場化す</p> <p>7月各地女子校で学校工場化す</p> <p>7月東京山の手・総武・中央・京浜の省線にはじめて婦人車掌八九名登場</p> <p>10月日本女子大・東京女子大・大妻女専などの新卒業生、学校工場や出勤先の軍需工場にそのまま留まる者多し</p>	<p>12月婦人雑誌、『主婦之友』『婦人倶楽部』『女苑』の三誌となる</p>

<p>1945年（昭和20年）</p> <p>1月大本営 本土作戦大綱を決定</p> <p>2月米軍、硫黄島に上陸</p> <p>3月大阪空襲（13万戸焼失）</p> <p>3月東京大空襲（23万戸焼失）</p> <p>4月米軍沖繩本島に上陸</p> <p>5月ドイツ降伏</p> <p>5月東京大空襲（山の手の大半消失）</p> <p>6月沖繩島南端の前線で負傷兵看護に従軍中の女子師範生徒、女学生・看護婦集団戦死</p> <p>7月米機動部隊関東各地空襲</p> <p>8月広島に原爆投下</p> <p>8月ソ連、対日宣戦布告</p> <p>8月長崎に原爆投下</p>	<p>1月最高戦争指導会議、決戦非常措置要綱を決定</p> <p>3月国民動員令公布</p> <p>3月決戦教育措置要綱決定 国民学校初等科以外の授業を4月から一年間停止</p> <p>3月閣議、国民義勇隊組織を決定</p> <p>4月小磯内閣総辞職</p> <p>4月文部省、学徒軍事教育戦時特別措置要綱を通牒</p> <p>6月天皇臨席の最高戦争指導会議にて本土決戦方針を採択</p> <p>6月義勇兵役法公布（15歳以上60歳以下の男子、17歳以上40歳以下の女子は国民義勇隊編入に編成）</p> <p>7月主食配給二合一勺（一割減）となる。</p> <p>8月豊川市の海軍工廠襲撃され、女子挺身隊員二千四百名余即死。</p> <p>8月御前会議開催、ポツダム宣言受諾を決定</p> <p>8月天皇、戦争終結の詔書を録音放送</p>	<p>1月大日本婦人会創立3周年記念式で、海上要員3名以上を出した「海員の母」を表彰</p> <p>この月「若鷺の母」も各支部で表彰</p> <p>3月沖縄県立第二高女生徒、補助看護婦として入隊（白海部隊）以後高女、師範女生徒の部隊配属つく。第一高女（ひめゆり部隊）</p> <p>6月大日本婦人会解散 国民義勇戦闘隊に再編されることとなる</p>	<p>2月敗北的デマ増加</p> <p>1月以来、東京で検事局に送致40件余</p> <p>4月警視庁、流言について都民に警告</p> <p>5月津田塾専門学校内に東部第92部隊移転、校舎の大部分と西寮を貸与、この夜同校学生4名が部隊の門標をはずして、玉川上水に流す</p>
--	---	--	---

（注）1 収録 一九二七年（昭和二年）から一九四五年八月（昭和二十年）まで。

2 事項 「女と戦争」に関連ある事項。

3 特に全国的規模の動き、全国的規模の動きでなくても少なからぬ影響を波及的に与えた出来事。

たとえば個人であっても宮本百合子が治安維持法によって起訴された場合など。

4 矯風会、消費者組合等の団体については意識的にはずした。

5 途中で事項の五分類を四分類に表の構成を変えたのは言うまでもなく、婦人団体が体制協力の方角へ一元化されてゆく過程を示すもの。

6 岩波『近代日本総合年表』ドメス出版『婦人問題年表』三一書房『現代婦人運動史年表』の三冊を参考にした。

（まとめ 福田光子）

平和と女性解放

憲法と出会ったころ

三十五年前、学童疎開と空襲から解放された小学五年生の私は、平和憲法を手にした。『飢えと恐怖』という原始的な戦争体験を経て、ちやうどものごとを考えはじめた年ごろにさしかかった時期に憲法制定を迎えたことは、その後の私の生き方を決定づけている。

とくに中学生時代の三年間は、いわゆる「戦後民主主義」の教育が、つかの間の輝きをもって実践された時期である。一九四七年八月文部省が発行し、全国の中学一年生の教科書として使われた「あたらしい憲法のはなし」は、わずか二、三年しか使われなかったというが、その時期に私は中学一年生としてこの教科書で憲法を学んだ。空襲の焼跡のがれきをかたづけ、自分たちの手で運動場を作りながら学んだこの本の、戦争放棄のさし絵は今でも覚えている。「これからさき日本には、陸軍も海軍も空軍もないのです。これを戦力の放棄といえます。『放棄』とは『すててしまふ』ということなのです。」

しかしみなさんは、けっして心ぼそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行なったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません」という文章などとともに。

学校には、民主教育に情熱をもやす先生たちがいた。その中に、作文教育を通じて、自分のまわりを観察し、自分で考えることを何よりも大事にするT先生がいた。私が身のまわりを観察したとき、見えてきたのは『女』だった。たくさんやりたいことがあったのに女であるためできなかった母、家のため朝から晩まで黙々と働く嫁としての叔母、そして生まれたとき女であるためがっかりされた姪など、日本の女の現実を見つめ、このような状態から女が解放されるためには何が必要なのだろうと友達と語り合った。

このように、憲法と出会ったころ、平和と女性解放は、私にとって大事な二つの柱であり、これからは、女も男と平等になって、平和で民主的な社会を創るのだと、素朴に信じて人生を歩みはじめたのだった。

まもなく朝鮮戦争が始まり、米ソ対立が深まる中で、私は平和運動に参加した。しかしその後は、激動する時代の波にもまれ、平和や女性解放の影は薄くなる政治的季節が続く。

その私が、いま再び憲法の原点に立ちかえっている。女性解放運動との再会は十年前、それまでのさまざまな運動に対する批判の上に立ち、女性の解放こそ平和で人間的社會を実現する道だと考えて、この数年間それに重点をおいて行動してきた。ところが昨年六月の選挙以降、右傾化の動きはあまりにも急激である。戦争反対をも直接の課題にしなければ女性解放運動も戦争への道にまきこまれかねない。しかしこのことは、戦争反対が先で女性解放は後まわしということではない。それどころか、女性解放ぬきの反戦運動では戦争を阻止できない。やはり平和と女性解放、この二つの課題を相互に密接不可分のものとする新しい運動をつくっていかなければならない。私たちはいまの危機を乗り切れないだろう。

女性解放ぬき平和運動の限界

これまでの平和運動は、他の運動と同じく、男性が運動を担い、女性は家庭でそれを支えるという運動か、母親としてわが子の生命を守る母親運動のいずれかであった。そのいずれも性による役割分担、分業を前提にしている点で共通であり、女性解放ぬきの平和運動である。私はこれらの運動がい

ままで重要な役割を果たしてきたことを否定するつもりはない。とくに私自身、両院選挙以降の動きの中で、最も危機感をかりたてられたのは、わが家に間もなく「徴兵適齢期」を迎える二人の男の子がいるからなのである。私が産み育てたこの子どもたちを、戦争にとられて殺されたり、人殺しに行かせたりなんて、どんなことがあっても阻止しなければならぬという思いが、「戦争への道を許さない女たちの集会」実現のきっかけになっている。しかし母親として「わが子を奪われるのはいやだ」というだけで、現在の「戦争への道」を阻止できない。それは、現在の日本の産業構造によって方向づけられているものであり、これを支えているのが現在の家庭、その中で妻や母たちであるのだから。

一九五五年前後、最初の改憲論議が公然化したとき、「改正」の対象には、憲法九条とともに二十四条があげられた。そのため婦人団体から強い家族制度復活反対運動が起こった。家族生活に関する根本理念を定めたこの条項は次のような規定である。

① 婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。

② 配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなけ

ればならない。

これに対して出された改正案は次のようなものであった。

△旧自由党案▽

旧来の封建的家族制度の復活は否定するが、夫婦親子を中心とする血族的共同体を保護尊重し、親の子に対する扶養および教育の義務、子の親に対する孝養の義務を規定すること。農地の相続につき家産制度を取り入れる。

△旧改進黨案▽

家族生活に関する二十四条の規定は個人の尊厳と両性の本質的平等の二原理を掲げているのみである。旧家族制度への復元は敢に警戒せねばならぬが、苟も家庭なるものが存在する以上、家庭の平和、家族の幸福を目的とする第三の原理を表明すべきものではなからうか（家産制度に関する部分省略）。

△広瀨試案▽

家族問題については、われわれは固より復古的な考えをもつものではない。戸主権の復活、夫権の復活、長子相続制等、家族間の法律上の不平等などは絶対に考えない。

しかし、社会生活の自然の単位として、家族相互間、殊に親子間において、和親結合の実を挙げさせ、なお、財産についても、その持続発展の途を講ずるような政治方針を、憲法上に規定することは必要であり、もって家庭内の法的平等を堅持しつつ、家族の社会生活の自然の単位としての本質を発揮させるべきであろう。

△自由民主黨案▽

（個人の幸福、社会の安定のためには、協同体としての家族〔家庭〕の保護の必要が痛感されるにかかわらず、現行憲法では、これに関する規定を欠いている。よって）個人の尊厳と両性の本質的平等の原則のもとに社会生活の自然的単位としての家族（家庭）の尊重擁護について規定の補充が考慮される。

以上は我妻栄『家族制度と憲法改正論』（岩波新書『憲法を生かすもの』所収）から引用したもので、本稿の読者に一読をお勧めしたい本であるが、長い引用をしたのは、最近の自民党や政府による「家庭基盤充実政策」と対比していただきたいためである。「国家社会の中核的組織として家庭を位置づけ、ゆとりと風格と連帯感の豊かな家庭こそは、社会の繁栄の柱であることを認証する」「老親の扶養と子供の保育と躾けは、第一義的には家庭の責務であることの自覚が必要である」と強調する自民党「家庭基盤充実に関する対策要綱」は、前記の憲法二十四条改正案と同じものである。政府はこれを、総合安全保障戦略の一環として位置づけ、すでに着々と実施しつつある。憲法九条を改正することなく軍備増強を行なっているのと同様に、憲法二十四条を改正することなしに家族制度を強化しているのである。もちろんこれは戦前の家制度とは明らかに異なる。しかし機能は共通であり、あるいは戦前より強力になっているとさえいえる。そしてさ

らに問題なのは、そのことをかつて改憲に反対した男性知識人が正確に把握できなくなっていることである。

一九五七年に発足し、改憲阻止に最も重要な役割を果たしてきた憲法問題研究会のメンバーは、前記我妻榮氏をはじめとして、二十四条改正にも強く反対した。「単にその字句だけを見ると、それほど反対すべきいわれがないように見えるかもしれない（我妻前掲書）」改正案にも反したのである。ところが同研究会の最後の憲法記念講演会である一九七五年五月三日、都留重人氏は「国際婦人年によせて」と題し、「女性解放の立場に立つ人たちが、経済の問題となると打算社会の論理を前提として議論を進めるところに問題がある」と批判し、「家庭内における女性の家事労働が、つまり職業を選ぶよりもむしろ家庭内において子どもを産み、子どもを立派に育てることを自分の天職と考えたような女性が、その場合でも経済的に何ら不利な扱いを受けないような、そういう体制を経済学の分野で確立すること」が婦人解放の重要な課題であると講演した。

この講演会を最後に、一九七六年四月、十八年間の活動に終止符を打ったということは、あえていえば同研究会の限界を象徴しているように思える。都留氏は右の課題に対する具体案としては夫婦財産共有制しか提起していないので、家事育児に専念した女性が経済的に不利にならないとはどういうことなのか不明だったが、この点については同じメンバーで

あった松田道雄氏が『女と自由と愛』（一九七九年岩波新書）でさらに展開している。同氏は「女の自立をさげぶ人は、結婚の可能性がなくなつて独身で生きていかねばならぬと思つたハイミスか、夫としつくりいかなく離れたいと思う既婚の女だ」とか、「女は早く結婚しなければ生物としての魅力がなくなり結婚の機会を失う。結婚は、女が年をとつて魅力がなくなつても見すてられないことと、先に死ぬはずの年上の男が死の床についたとき介抱することとが交換条件になっている」などと主張しているのであるが、専業主婦によって守られる家庭を、現代の管理社会の解放区と規定し、その重要性を強調している。そして、会社という管理から解放されて家に帰ってきた父親や、受験体制という管理から帰ってきた子どもにいいこの場を与えたり、寝たきり老人を最後まで家庭でみとる専業主婦の役割を高く評価し、さらにそれらの余暇時間に主婦のとりくむ地域の運動を市民運動の原型としている。しかし同氏は、女が専業主婦としての生活をえらんだときから職業人としての資格を失いはじめることを認め、夫は妻のその「減価」にたいし、多額の生命保険によって補償すべきであり、政治家は夫に保険料を払えるだけの月給をだすべきだなどと主張しているのである。この主張が自民党の家庭基盤充実政策と一致していることはあらためて指摘するまでもないだろう。

管理社会の解放区といつても、外で夫が得てくる収入を家

族全員の唯一の糧として、どうやって外を撃つことができるのか。それだけでなく、外で管理されて帰ってきた夫の疲労を回復させ、再び外で十分に働けるようにして送り出してやるのでは、管理社会を強化し、その存続に貢献している以外の何ものでもない。

このことは平和運動について見ても、全く同様である。夫が武器工場で働き、妻は夫のその労働を家庭の中で支えながら、地域で平和運動に携わるといふ矛盾は、だれにでも見える。しかし武器工場という特別の場合だけでなく、いまの日本の産業全体が戦争への道と無関係ではない。日本はGNP第二位の経済大国として、アメリカをも圧迫しつつ、アジア、アフリカ等、第三世界の国々をはじめ世界中の国々に日本の商品をあふれさせ、失業や環境破壊、反感と脅威を生み出している。そしてこの経済大国を維持するためにいま、軍事大國化の道を歩みはじめているのである。

家庭基盤充実政策は、女性のパート化を促進する労基法改悪と一体となって、日本の経済大國化＝軍事大國化を支える重要な役割を女性に与えるものである。第一に、福祉予算の負担を軽くし、経済活動や軍備のための予算を確保するため、老人介護や子どもの保育を家庭内で担う役割、第二に、世界に進出する日本企業の猛烈社員を家庭内で支える主婦の役割、そして第三に、家庭責任（第一と第二の役割）を担いながらその余暇に低賃金、景気の調節弁として働き、日本の産

業の底辺を支える役割である。これらこそ日本経済の国際競争力の活力とされているものである。

このような女性の役割、性による分業のしくみを考えることなしに、戦争への道を平和への道に変えることはできない。生命をはぐくみ、生活を営む性である女性が、それを家庭の中だけ、あるいは夫の賃金に依存した「市民運動」の中だけで生かすのではなく、自立して職場や社会のあらゆるところに入り、決定権を握っていくことなしに、現在の戦争につながる社会を変えられない。女性解放なくして平和はないのである。

平和ぬき女性解放運動の危険

しかしいま、平和ぬきの女性解放運動も、戦争準備にまぎこまれる危険性をもっている。かつて日本の婦人参政権獲得運動が戦争に協力していったように、そしてアメリカのNOWが男女平等のために女も軍隊に入るべきだといっているように。

一九七八年十一月の労働基準法研究会報告は、雇用における男女平等法制定のためには労働基準法を改めて、女性に対する保護を基本的には解消しなければならないと、いわゆる保護ぬき平等論を打ち出した。これは労働組合等の強い反対にあり、まだ具体化してはいないが、差別撤廃条約批准に取

り組む過程で再燃せざるを得ない問題である。また先日の日産自動車男女差別定年制に対する最高裁判決に対しても、男女平等というからには女性も男性と同じように働かなくてはならない厳しさを覚悟せよ」というコメントがあった。しかし世界中に車を輸出し、貿易摩擦をまき起している日産自動車では、「極限に挑戦しよう」というスローガンのもとに、九六%の出勤率と恒常的な残業を組みこんだ交替制勤務で、深夜まで自動車の生産が行なわれている。九六%の出勤率とは、病気で休んだり法で定める年次有給休暇をとる人が四%以上出たら維持できない数字である。こうして年間労働時間は二千二百八十時間、西ドイツの千七百二十八時間より、実に五百五十二時間オーバーしている。まさに極限に挑戦する男性労働者によって自動車が作られ、経済戦争に勝ちぬいているのである。平等の名のもとに女性もこのような働き方を真似するならば、それは同じように働けない大多数の女性の差別を合理化すると同時に、自ら経済戦争の戦力となり、本ものの戦争をも推進していくことになるだろう。

そこでもいま問われなければならないのは、男女平等の意味である。現在の男並み平等を否定することが必要であるが、しかし女は保護されたいというのではない。男女とも保護による平等を、すなわち労働の基準を変えることによって平等を実現することである。これまでのように、専業主婦に支えられて企業のために一〇〇%の力を出し切る男性を

基準にすることをやめ、子どもを生み育て、生活の営みを夫とともに担いながら職場で働く女性を基準とすること、職場の秩序をそのように人間らしいものに変えていくことこそ必要なのである。これは家庭と社会における男女の分業を変えていくことでもある。

婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約は、基本的考え方をつらつた前文で、国際の平和及び安全の強化、国際間の緊張の緩和、全面的かつ完全な軍備縮小等が、男女間の完全な平等の達成に貢献し、平和の大義は、すべての分野において婦人が男子と同等の条件で最大限に参加することを必要としていると述べ、平和と男女平等が相互に目的であり手段でもあるという関係を強調している。このことはまだ日本国憲法の原理でもある。

私たちはもう一度この二つの原理を統一的にとらえなおし、現実を変え得る新しい運動を創り出していきたいと思う。

(弁護士)

あなたの本を出したい方

自費出版のご相談に応じます。

ご予算、原稿枚数などお知らせを。

女による女のための

BOC出版部

03-354-3941

アンケート 婦人団体の戦争認識と反戦運動

日に日に右傾化の色があらさまになっている今日、現状をどのように認識し、婦人団体はどのような運動を展開しようとしているか、「国連婦人の十年中間年日本大会」加盟四十八団体の実行委員と「女の集い」実行委員に、それぞれの個人的見解をたずねてみました（掲載は到着順。文字づかい原文のまま）。

戦争についてのアンケート

1、日本が再び戦争へ足を踏み入れないためには、どうすればいいとお考えですか。

2、いま、戦争への危惧を感じますか。

3、自衛のための軍備は必要でしょうか。

4、国家予算に占める防衛費の割合についての議論が注目を集めています。防衛予算について具体的なお考えを。

5、核保有、核エネルギー、核廃棄物につ

『あこら』編集部

いて、どう思いますか。

6、戦争と男女平等について、どうお考えですか。

7、NOW（全米婦女同盟）が兵役の登録に賛成したことについて、どう思いますか。

8、あなたのグループは、反戦にどのような取り組みをしていますか。具体的に教えてください。

日本女医会 柳瀬 路子

1 国の政策決定機関へ女性を入れることです。夫や子供を戦場に送らないために、女性があらゆる努力をあらゆる方面ですることです。

2 イラン・イラクの政情、ポーランドの労

働戦線、中共の政争、韓国の政争、これに加えるにアメリカの権力の失墜と、英・仏の権威の衰退、アフリカのハングリーと権利（失われた・過去の）の主張、いづれをみても、戦争の起り得る母地は揃いすぎています。

3 永世中立を義務しているスイスですら

も、国民皆民兵として訓練されています。

事を構えて一方的に攻略して来そうな隣国を持つ以上、必要かもしれません。

4 研究不足で、的確なお答えが書けません。

5 少しでも危険性のある事には賛成いたしかねます。太陽エネルギーの活用に向けるべきです。

6 戦争についても、男女平等に（という事は50%50%の）発言が許されれば、もっと違った結果も出てくると思います。外野の発言でなく、政策決定の立場に婦人がいての発言でなければ何にも実を結びません。聞かれおく程度の発言をさせられて街頭行進をしても何にもならない。もっと婦人関係は強力な支持組織を作って、代表を中央に送り、発言力のある人を政策決定の場を送り込まなければ、いつも犬の遠吠えに終わってしまうでしょう。

現在40歳30歳の実践活動家の女性に期待したい。是非グローバルな見地に立って、市川房枝さんの後を継いでいただきたいと思う。

7 男女平等というのをどう考えているのでしょうか？

8 私共のグループは、政治的活動は、定款で出来ないことになっております。

全日本労働総同盟青年婦人対策部

高島 順子
回答しません。したくありません。

日本キリスト教協議会 カーター愛子

1 小さいときから平和の大切さについて教育すること、それはすべての人が平等に生きることが許されており、いろいろ異なった人が、この世界・地球に共存していることを体験させることが大切だと思う。

TV及び子供の読みものよりできるだけ非人間的暴力をとり除き、人間の生命の大切なことを教える。

軍備費の増加より恐ろしいのは、人間が平気で他者を殺してしまうことを当然と思うようになることだと思われる。アメリカ及び世界の、日本軍備の圧力にも絶対にく

じけない強い意志をできるだけ多くの人々につくってゆく。

全世界を破壊さすほどの破壊力が人間の手にあることを認識すること。

2 感じてはならない。平和は作り出してゆくものであるから。

3 軍備の意味が不確定。

現在は防衛のための軍備というのが、それは当然に日本国土での戦いとなり、いくら軍備をしても、現在の技術ではその限界はない。実にそれはアメリカ、ソ連の軍備競争の実体となっている。

日本が、出来る範囲の軍備をしたとしても絶対に安全と感じるのは難しい。その安全観は軍備によって絶対に生れるものではない。

自衛のための軍備は今までの考える範囲のものではなく、自分だけければよい方法では、もはや世界は生存することができなくなっている。

4 軍備予算はいくらあってもたらないことはアメリカの社会がこれを示している。税金ばかり高くなり、インフレが進み、ますます食料を作り出す土地もなくなっている状態では、軍備を増して、食料輸入を増加

してゆくことになる。

防衛費とは、つまり食料政策をつよめることであり、第三世界との共存を目的とするものでなければならぬ。

5 他人のことも考えないで、自分だけよいとの思考で核廃棄物をすることほど無責任なことはないと思う。また核問題は孫の時代の時間をも現代人が勝手に使っているようなもの、人間のエゴイズムがむき出しになっている。

現在アメリカの新兵器の発達はソ連との競争で目ざましいものがあるが、これはすでに人類をも完全に地球上から「まっさつ」する力を持つものであるが、日本がいくら核保有国になっても、心理的に絶対に安全を持つ保証とはならないことは明確。

6 戦争は、あらゆる人権を否定する。核戦争の可能性を持つ現在の戦争では、集団的殺人を目的とするものであり、人類を破めつにいたらず、危険性を持つ。男女平等は真の立場を認め合う人権の上に立つものであり、共同責任をもって戦争にならないようなあらゆる努力がなされなければならない。

7 その理由はなになのですか。

平和教育のための登録であるべきではないでしょうか。

NOWのグループに問い合わせをする。また日本の平和の立場を大いに議論することは重要に思われます。

8 このグループはキリスト者のグループです。キリスト教的立場より現在の状況を分析する勉強会を持ち、これからも平和のための発言を続けてゆきたいと思えます。東京YWCAの青年の「広島の旅」を支援し、若い人々の世界的視野を広くし、人間としての責任を果たしてゆくための教育に力を入れています。また、日本の平和憲法を守り、世界に向けて平和への努力を国際的に広めてゆきたいと思えます。

働く婦人の会 武田 節子

1 ① 平和は自らが戦争にまきこまれなければ実現出来るというのではなく、戦争は何時の時代も、一部の権力者によって起こされるという認識をもつ。

② 私ども一人一人が、日本ということよりも、世界の中で生きる人間的存在と考えた場合、平和の中でしか生きられないことを自覚すること。

② その上で、日本の果たすべき役割を考える。人類最初の被爆国である日本は、どこまでも非核国に徹し、世界の非核国のリーダーとなり、国際世論を起し、核保有国にその廃絶を訴える運動をしつづけること。

2 昨年の衆参同時選挙に圧勝した自民党の数に物をいわせての数々の暴挙に、肌寒いものを感じる。靖国神社法案にはじまり、選挙法改正、更には平和憲法を改定しようとたくらんでいる。また防衛費の名にかくれた軍事費の増大、等々、不況・物価高・増税と、国民の生活を圧迫することに拍車がかかる。私たち庶民の心の中に不満と憤りが重なり、そして何時か来た道へと突入することの危機を感じる。民主主義に絶望した国民が大多数になったとき、ファシズムへと走る危険は今日までの歴史が証明していると思う。

3 軍備による自衛などはまずないといった。軍備は一切廃止すべきである。この大前提に立つた上で、世界の現状、米ソの対立のはざまに立つ日本の国民的感情としては、最小限度のものとし、決してエスカレートをしていないための強力な歯止めが必要と

思う。

とに角、国民の一人一人が、戦争を好む権力者の言葉にだまされないだけの、まなこを持ち、軍備による自衛よりも、より積極的に、平和創造のため、不信任をなくし信頼をもちあう平和外交こそ、真の自衛と

思う。

4 ① 国民世論ではGNP対比一%以内といわれ、55年度では〇・九%であった。これを云々する人が出ているが、この線は必ず守る。他国から何かいわれても、主体性をもって決断すべきである。

② より根本的には、防衛費、実は軍事費なのだから、こんなことに国民の税金を使うより、福祉・教育に大きく予算をとってゆくならば、更に日本も世界も繁栄することと思う。今世界中で使う軍事費は五千億ドルときく。発展途上国の援助費がわづか二百億ドルといわれているが、膨大な非生産的消費が、病める文明をつくることに貢献していることを知るべきと思う。

5 核エネルギーについて、すべて人命の危機に関わることなのか、繁栄につながるものなのか、科学者たちの総意を重ね、国民

にその実態を明らかにし、危きは使用せぬの考えに徹底すること。核保有については前にものべた通り、核廃絶を訴えたい。

6 昨年東欧諸国の視察旅行を終えてみて、世界は、戦争の歴史であることを痛感した。それは矢張り、子供を生み、育てる女性本来の平和的本質が生かされなかったところに、今日までの歴史的悲劇がくりかえされて来たように思う。

その意味で今回の国際婦人十年世界会議において署名された男女差別撤廃条約は大きな意味があり、あらゆる分野への同等の条件・同等の立場で婦人が参加することがすすめられなければならないと思う。

また、女性の直観知ともいうべき英知をもって再軍備とか憲法改定などを主張する死の商人の手代たちの言葉のうらにかくされた悪魔の爪を見破ってゆく行動の中に平和の確立があると思う。人間として安心して生きられる社会をきづくことにおいて男女平等の権利を有すると思う。

7 国情、国民感情が違うので、はつきりした意見はない。但しアメリカの婦人の考え方あるいはアメリカの国自体は男女の差別が日本ほどきびしくなく、あらゆるところに

に女性の進出がみられ、陸軍士官学校や、海軍兵学校にも女性の姿が目立ちはじめたといわれている。男女平等といっただけのことなら賛成は出来ないが、その立場が平和主義者としての女性の本質が生かされてゆくならばよいかと思う程度である。

8① 女性の地位向上のための学習と婦人学級生のグループをつくり、行っている。

② 職場・社会における身のまわりの差別をさぐり、平等への運動にとりくむ。差別は人間の差別であり、それは、最も尊厳な生命軽視となり、生命軽視のゆきつくところは暴力となるからである。

③ 平和憲法の学習。

④ 地域に友好の輪を拡げる運動。

日本女子社会教育会

↑ 戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認をうたっている憲法に則り、平和に對する与論を盛りあげる。

・ 国際的に婦人の声として戦争の被害体験の実態を訴える。

・ 時事問題につよくなり、政治への発言を高める。

・ 子どもたちに戦争の悲惨さを理解させる

努力をする。

平和を守るため婦人代表を、国及び地方レベルの政策決定の場へ送り込む。

2 漠然とした不安は感じる。

不安とは、むしろ対岸の火の粉を受けて戦争のまき添えを受けることへの不安である。

世界平和に貢献する日本の外交を確立する。

3 自衛のための限度で必要である。

軍備をもつ強国として誤解されないような外交が重要である。

4 戦争協力、戦力増大と考えられる傾向を排除し、妥当なレベルについては、国民の意志を尊重し決定する。

5 戦力としての核エネルギー保持は、絶対反対、平和利用の場合も万全を期し、結果をよく評価吟味し慎重にすること。

核廃棄物処理については、国際的な機関で協議し、共通な処理法を行うこと。

6 戦争放棄をした日本で、戦争と男女平等の問題提起は論外である。

7 意見なし。

8 婦人教育、家庭教育の学習の機会を提供して、平和の重要性がわかり、一人一人に

戦争否定の心が育つよう努力している。

婦人民主クラブ 近藤 悠子

① さしせまった今日、女たちをはじめ、

青年、市民、労組各団体、政党(戦争反対)が主体的に立ち上って、手を組み、戦争を押しすすめる勢力とたたかわなければ、かつての戦争時と同じようになるでしょう。

直接的な集会やデモ、ストなどのたたかいのほか、間接的な選挙のたたかいもあります。

反ファシズムの戦線をそれぞれにつくり、あらゆる弾圧にも抗してたたかわなければ、武装した権力にたちむかうことはむづかしいと思います。

② 国家としては、平和憲法にのっとり、安保など軍事同盟をやめて、非同盟諸国の一員となり、どの国とも平和友好条約を結ぶ——そのようにさせてゆく大衆運動も必要でしょう。

③ エネルギーや資源確保、兵器生産など、資本主義が内的にかかえている矛盾や競争原理に立つかぎり、戦争は不可避だと思います。社会主義国は当然それに拮抗するでし

よう。

ただ第三世界の拡充、非同盟諸国の増大によってバランスが崩されれば道も開けるかと思いますが。

日本はアメリカの立場に組みこまれていきますのでとても危険です。自衛隊の既成事実は、軍隊の一人歩きにもなります。対ソ戦のみならず、資源のとり、海外進出企業の防衛の名によって、侵略戦争の危険は大いにあります。

④ 何のため、誰のための自衛かを問い直す必要があるでしょう。自衛とは己れを守ること、己れの生命を危機にさらされたときは、それが自国であれ、他国であれ、自衛するのは当然です。他国を侵略したり民衆を抑圧したりする「自衛」の軍備は必要ありません。

かりに他国から侵略されても、己れの生命が生きていることがまず第一です。日本は敗北、占領された経験があるので、それからちゃんと今日生き残っているのだから、大丈夫です。

日本は世界にはこの憲法をもっていますので、世界の国々がそうなるよう働きかけるべきです。第三次世界大戦は核戦争にな

る危険に満ちていますので、そうなければ人類も地球も破滅します。

⑤ 防衛予算はやめて、民衆のくらしと発展につかうべきです。しかし、そうはいっても、現実には、既成事実はなかなかくつがえすことはむづかしい。

この設問は3の考えにつながるもので、具体的にといわれても困るのです。

⑥ 当然、核保有、原発に反対です。運動をつよめていくよりないと思います。廃棄物については、南方諸国など、太平洋など他国に損害を与えることに反対です。自分の国で使ったものの危険な尻ぬぐいは自分の国ですることです。

⑦ 平和あつての男女平等で、これは前提です。戦争中、男が戦場にひきづられて、女は「銃後」の守りで職場にひきづり出され、それ相応の地位にもついたりしますが男が帰れば、女がまっさきに首切りでした。利用されたにすぎません。

戦争になれば、私たちのぞむ男女平等など、ふつとんでしまいます。また男女平等がなければ戦争は阻止できません。

侵略と差別は一体であり、差別の頂点が戦争であるからです。だから男女平等も戦

争反対も、ともに今日すすめてゆかねばならぬ重要な課題です。

7 生命を産み育くむ女が、そのアンチとしての戦争や兵役を承認するなんて理解できません。

国家や民族主義のイデオロギイによって、目先だけの男女平等ということを目をくらまされてしまうのはとてもこわいですね。母性保護があつてはじめて平等という考え方に立ってほしいと思います。日本でも婦人自衛官などいますが、他人事ではありません。

8 婦人民主クラブは、戦争反対について、創立いらいすべての活動の前提として、柱として、取りくんできました。

もつとも近い活動としては、3月21日(主の「くいとめよう戦争への道」という集会です。なぜ戦争に協力してしまつたか、阻めなかった理由はなにか、などを話しあつて、今日の危機にたいし、主体をつよめ、方法を探りたいと思っています。

その他、共闘として「戦争への道を許さない女たちの集会」や、忍草、三里塚、日本原の反軍・反戦・反権力のたたかいをしている母たちとの連帯など、日常的な活動と

して据えています。反原発などもその質をもつています。

わいふ 林 慶子

1 滅私奉公、鬼畜米英撃ちてしまふと、十五歳の女学生だった私は、焼夷弾の降る時も学徒動員で軍需工場の中に明け暮れていました。一方、母たちは愛国婦人会のタスキに白い割烹着もカイガイしく、天皇の赤子たちを千人針と歓呼の声で送り出し続けていました。

物心がつく頃より神国日本の洗脳を受けた軍国の少女たち、そしてまた女に生れたその日より「女の道」を洗脳された健気な良妻賢母たち、男に従うより生きる術がなかった戦前の女たちは、みんな戦争協力者になりました。

知らないこと、自分自身で思考する力があるさないことの恐ろしさは限りありません。

戦後三十六年の今、確実に日本に対して二分の一の責任を負う現代の女たちが、「脅威論」がかなりの説得力を若い世代に及ぼし、右旋回の兆が増幅する今、もしマイホームの中で沈黙して暮らしていたとした

ら、その沈黙という行為こそが最大の戦争協力になります。

まず、あらゆる場で、反戦平和の心を声にして行くことだと思ひます。

2 戦争へ向けての無気味な地鳴りを、強く肌感じます。

とくに最近、ますますエスカレートする管理化教育の中で、落ちこぼれざるを得ない子どもたちのエネルギーを戦力に利用しようとする動きに危機を感じます。かつての洗脳教育が、形を替えて、戦争を知らない世代に向けられています。

3 必要でない。

ほんとうに民主主義社会を願うなら平和憲法を守り抜くことだと思ひます。

ソ連が軍備拡大を続け、世界平和が力の均衡と抑止力の上に保たれている中では、平和憲法は机上の空論、アメリカや西側同盟国に対し説得力なし、としたり顔で物言う男たちが多い。

ならば、平和憲法の真価と重みを、諸外国に受け入れてもらうべく、地球上で唯一の被爆国日本として、外交に誠意をもって総力をあげていると言えるだろうか。

5 エネルギー危機を解消する最高の力の、

安全無害原発——行政側の宣伝はすごい。

高レベル放射性をもつ廃棄物「死の灰」の解決策がないまま、なんで安全無害なのか。

大企業が政府の応援で、公害のひどい工場を第三世界に移転させているのと同じように、原発廃棄物を南太平洋に捨てようとしたのはつい昨年のこと。世界の人々のひんしゆくをかうのは当然のことです。

人間にとって何が最も大切な。便利で能率的な日常生活の問い直しと、私たち一人の生活の変革が大切だと思います。

6 真の男女平等は、反戦平和の中にしかありません。

NOWの行為は、完全な男女同権を急ぐあまり侵した過ちだと思う。私たちの願う真のフェミニズムに反するものと思う。

8 隔月刊、ともに歩く女たちの雑誌「わいふ」は、地域社会に根ざした暮らしの中で主体的に生きたいと思う女たちの連帯に役立ちたいと願う雑誌です。

女が主体的に生き得る社会、即ち、平和民主社会であり男女平等の社会です。

来る七月には、111号で「あなたは戦争を知らない」という特集を組みます。

戦争を全く知らない子どもたちが溢れます。その親たちが昭和二十年以降に生れているのです。子どもを持つ主婦に向けたアンケートを基礎にして、みんなで考えてみたいと思っています。

独婦連 鈴木 節子

1 日本が進んで戦争へ足を踏み入れるとは思えない。それは先づ戦争に必要な資源がない。そして食糧、肥料、飼料までも輸入に頼っているのに、戦争へ足を踏み入れるようなオロカ者はいないと思う。攻めると攻められると分けて考えた。

いまや地球が一つの国とならなければ成り立ってゆかないと思う。

資源のある国はそれを、技術や労力で先進国は後進国を援けて、日本もその一つを受持つてゆく事がよいと思う。

2 攻めこまれるという危機は少し感じる。国際的な信義もかまわず自国の主義を主張して、国境を越えて侵略している国がいるから。

3 攻められた時、自らを守るための軍備は最低は必要と思うが、最低とはどれ位か、むづかしくて全く解らない。

4 防衛費はエスカレートすれば際限がないように思う。

日進月歩で技術の進歩する武器をどれ位持ったらよいか、最低線でよいと思う。防衛問題を専門に研究している方達でも意見が分かれているように、とてもむづかしい。

5 自国のエゴで核を持ち、実験や廃棄物は他国の国民に危険をまきちらしている。これ以上ふやさず、核を保有している事が戦争へのブレイキになってほしい。

日本は原爆の後遺症の恐ろしさを、もっとと世界に知らせるべきだ。

6 少々漠然とした「問」ですので、戦争になっても、男女の平等が保持されてゆくとするかという設問としてお答えします。

「お国のため」のひと言で、すべて、国の都合になつてしまふのではないかと危惧します。

7 徹底的に戦争に敗け、軍事裁判があり、若者が大量に死に、沖縄での非戦闘員の死、外地の引揚げの時の混乱など思うと——賛成しかねる。

8 第二次世界大戦による戦争被害による世代として結成された団体である。

会のスローガンの一つに、戦争反対をうたっています。

一九六七年、戦中戦後の体験集「わたつみの声をわが胸に」を出版。

一九七九年、京都嵯峨野常寂光寺寺内に、会員の有志により、反戦の意味をこめて女の碑を建立。

草の実会員 島田 信子

1 ソ連脅威論のキャンペーンで軍備増強を煽っていますが、現実には、日米共同防衛計画の臨戦体制は、中東油田地帯へ睨みをきかすものといわれます。

脅威を受ける側よりも、相手に与える側になりはしないか。いずれにしても、武力で対応する無駄（国民生活を根こそぎ犠牲にしても不可能）よりも、脅威を除く努力こそが急がれます。

一、日米安保条約を廃棄して、すべての周辺諸国と平和友好条約を結ぶ。

二、軍事産業を平和産業に、自衛隊を災害工作隊に転換する。

三、憲法前文の「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して……」を掲げて、非武装・不服従を世界に宣言し、国連で軍

縮の先頭に立つ。

四、第三世界への経済侵略と、軍事政権へのテコ入れをやめる。

五、政府レベルを超えた民間交流で、相互の信頼を深め、友好をつよめる。

右のように政策の転換を迫るため、戦争反対の輪をひろげ、結束して大きな流れをつくっていくことです。

2 ダブル選挙の圧勝以来、露骨に打ちだされて来た一連の軍備増強への動きは、アメリカの世界戦略に組みこまれ加担を余儀なくされる日米安保軍事同盟の、来るべくして到った段階といえます。

一方、第三世界への経済的収奪を拡げつつある日本は、日本独自の経済権益を守るための、海外派兵・プランを必要とする段階といわれます。

すでに軍事産業は大手をふり、巧妙な手論操作が着々と進み、経済侵略の上に築かれたまやかしの繁栄の中に、どつぷりと浸っている現状では、「この豊かな自由社会を守るために」の合言葉によって、軍事行動をゆるすコンセンサスを、成立させかねない無気味さを孕んでいます。

急激な右傾化とともに、これを受け入れ

流されてゆく日常性そのものに、深い危機をいただきます。

3 名目がどうあれ、軍備とは殺し合いのお膳立てに他なりません。

東西の、力の均衡（平和（論））は、その実、互いに優位性をもとめるシーソーゲームで、狂気の核時代を招き、いまや国民生活を重圧する程の戦費負担にもかかわらず、△安全△の確保どころか△脅威△の増大を深めています。

資源が乏しく、狭い国土に人口が密集する日本においての武力行使は、国民全体を巻きこむ自殺行為であり、無駄で愚かな軍備の△非現実性△は、沖縄戦の教訓がなによりもよく物語っています。

しかも、核時代の近代戦は第二次大戦の比ではなく、ひとつ間違えば人類の滅亡にもつながる狂気の世界です。

自衛と呼び、防衛と呼ぶものの、武力に賭ける「幻想」より覚めて、軍縮こそが平和への道であることに徹してほしいものです。

4 日本の防衛費は、NATO方式の軍事費に含まれる遺族恩給・留守家族援護費、沿岸警備費などを含まず、これらを含めた計

算でいけば、G.N.P比は約一・六五%となり、さらに日本のG.N.Pは、N.A.T.O先進工業諸国の約二倍なので、三%以上ということになります。国際比較をする場合は、この点を明らかにする必要があります。

ただし、日本においてはG.N.P比率云々より前に、なによりもまず、戦争放棄の憲法にてらしてその可否を問題にすべきです。

自民党政府は、みずからの失政（国債依存）による財政危機のしわよせを、公共料金値上げ・増税・福祉削減など、すべて国民にかぶせ、軍事費だけは別格扱いの暴挙を、あえてしました。アメリカの圧力があるとはいえ、一体誰のため何のための軍備でしょうか。

ロッキード、グラマン疑獄で明るみに出たように、政・財・軍一体となった利権追求の体質は、あの十五年戦争当時そのままであることを、見逃せません。

5 かつて、大量の石炭労働者を切り捨てて、石油産業に転換（メジャーにより安く買いたたいた油で）し、石油大量消費型の高度経済成長策を進め、油づけ社会を生み出した体制が、今度は「石油危機だ！ 原

発でなければ電気が止る！」と脅しています。

一、安全運転の確保不能（世界的に、事故統計で放射線被害が広がっている）

二、廃棄物の安全な処理法なし（海洋投棄による汚染がすすみ、やがて地球規模の環境破壊をまねく）

三、コスト超過による経済的マイナス（電力料金として国民が負担）

四、軍事利用の危険性（原子炉一台から出るプルトニウムで、年間約40個の原爆を造れる）

五、機密管理のための統制（極度の情報管理社会となる）

六、原発技術の輸出（売りこみをすれば死の灰の拡散につながる）

右のような理由から、原発には絶対反対です。

日本のエネルギーの大半は産業用であり、もつとも油を必要とするのが軍事利用です。大量消費型の産業構造（必要以上の物の氾濫）の転換と、軍事利用を抑えるならば、原子力以外の代替エネルギーで賄えると思います。

軍事用の「核」保有は論外で、非核三原

則の厳守こそが強く望まれます。

6 かつて女は、戦争を始める時も終る時も、決定の圏外に置かれ、結果としての苛酷な現実だけは、余すところなく背負わされました。

天皇の赤子^{あかこ}男、男の従属物^{しよぶぶつ}女、という二重構造の下で、夫や息子たちを戦場に送り、銃後を守って、戦争の被害者であると同時に加害者ともなりました。

憲法上、男女平等を得ている現在、政策決定機関への道はなお狭く、自立を阻む壁は厚い。「趣味教養のための外出は自由、ただし反戦活動はまかりならん」とする家庭も珍しくはない現状です。

そして、性別役割分業の固定化により、いのちをはぐくむいとなみより遠ざかった男たちは、競争社会の歯車となつてひたすら企業人間と化し、労組さえも、武器生産・輸出への抵抗は鈍りつつあります。

かけがえのない、いのちの尊厳のために、いま、戦争につながるすべてのものにノーサインを突きつけるのは、少なくとも政治の主権者であり、自己の判断・選択で行動する自由をもつ、女たちの責任だと思えます。

7 男が徴兵されるなら女にも徴兵を、という平等論は理解に苦しみます。

私たち女が「同じ意志に対しては同一の機会を、同じ結果に対しては同一の評価を」と、平等の原則をもとめるのは、人間として等しく、人間らしく生きたいがための要求であって、無原則な人男並みへの志向ではないはずです。

経済優先の競争原理に支配される男社会は、その延長線に国際社会での軋轢や抑圧・収奪をくりひろげ、その矛盾を武力で突破しようとするための、戦争準備にあけくれています。

この、もつとも愚かで非人間的な戦争へのルールを、男に数く権利があるとすると、女に取り除く権利があつて、はじめて対等平等の立場といえます。

性別にかかわりなく、人間らしく生きようとする人間にとって、戦争は相容れないものです。

8 一、五月（憲法記念）八月（敗戦記念）に戦争反対の定例デモをつづけている。

二、平和問題に関する連続講座・読書会・座談会をひらき、パンフレットにまとめ、全国的に配布。

三、戦争と私V/AわかれV/Aあつい焦土の夜にVなどの出版物に戦争体験をつづり、語りつづ。

四、原水爆禁止国際会議をはじめ、平和のための会議・集会・デモへの参加。

五、非核三原則の決議をもとめる街頭署名をはじめ、平和に関する署名活動・政府への要請・抗議など。

六、機関誌を通して、常に平和への希いを訴えつづける。

日本婦人会議議長 山下 正子

1 急速にすすめられている戦争政策を一つ

ひとつチェックすること。君が代、日の丸、

元号法の制定、靖国神社公式拝拝、自主憲法制定のうごき、教科書への介入など、問題をばらばらにとらえるのではなく、総合的に認識し、それらがすべて憲法改悪・軍事化に連動していることを多くの国民が理解するための努力をすること。かつての戦争

の悲惨な事実を語り伝えること。財界や企業と密着している自民党議員などは各級議会から少くさせる。国民が主権者であること

との認識を強くもたせる政治教育。あきらめやすく、自己の意見をもたない者が多

い。長いものにまかれ無抵抗に戦争にまきこまれることを最もおそれます。無知と臆病が大敵ではないでしょうか。

2 衆議院予算委員会における五十六年度予算の単独採決は議会制民主主義をふみにじるものです。鈴木内閣登場以来の右傾化・軍事化は目に余るものがあります。武器輸出禁止法の制定も拒否し、賃金を抑制しながら、インフレ・物価高のために実質収入のめべりを防ぐ要求にも耳をかさず、財政再建・赤字解消を名目にして軍事費を増額しています。とりわけ教育への攻撃には大変な危惧を感じざるを得ません。かつての軍国への道を思わせます。国の政策転換のときは真つ先に教育に手をつけて来ました。いかに装備を充実しても、それを使う人間をつかまなければなりません。そのために愛国心、防衛の義務、生命をもかえりみない人間づくりをしようとしているのです。

3 太平洋戦争では、九〇〇〇キロ離れたアメリカと戦って全土は焼土となりました。米・ソが火をふけば、日米安保条約のもと日本列島はアメリカの最前戦基地とされることは当然です。ソ連とは僅か八〇〇キロ

の日本海をへだてるだけ。ウラジオストクから発射された弾道ミサイルは四分で東京に達するといわれます。日本は何れの軍事同盟にも入らず、独自の道即ち非武装中立政策が今考え得る最善の政策だと考えます。非武装中立は日本国憲法の理念であつて、理想主義とか現実にとぐわらないなどというものではありません。軍事力で守ろうとすれば、守るべき国民の生命・財産が却つて破壊されてしまいます。憲法の平和主義に徹し、確信をもつて非武装中立を訴えていきたいと思っています。

4 3項に記した方向にすすむことを最善と考えますので、防衛予算と名のつくものは最大限に削減することをのぞみます。

5 核戦争には絶対に勝者がないことを考えると、核の保有には反対です。平和利用といわれ、エネルギーとしての核開発が問題になっていますが、安全性についてはいまだ解明されていません。日本の原子力開発にも多くの欠陥が明らかにされています。核燃料再処理、放射性廃棄物処理の見通しもたっていない段階では、基本から再検討しなければならぬと思います。

6 戦争で被害をうけるのは婦人です。男女

の平等、人権が尊重されることは平和な社会といえましょう。戦争と平等はいひ反するものです。男女差別、障害者差別、部落差別、民族差別が頻発していることはファッション化がすすんでいることを裏づけています。

7 何故登録したのが、その真意がわかりません。

8 反差別、反戦、憲法の平和主義、人権主義、民主主義を生活のすみにとどかせること、差別撤廃条約制定の経緯、その理念を徹底的に認識する条約活動、第三世界諸国の新国際経済秩序の樹立をめざす諸闘争、非同盟運動の支持、学習、毎月八の日を平和行動の日として改定阻止を訴える街頭行動の実施、反徴兵をはじめ、母性保障、差別撤廃条約批准促進の署名運動実施中。各県において平和行進、平和条令を組織し、四月二五日には東京で「憲法改悪阻止、平和をまもる婦人の中央集会」を成功させるために努力中。五月を憲法月間とする原水爆禁止、来年開催予定の国連軍縮特別総会にむけてカンパ活動、代表派遣運動をすすめるなど、憲法の改悪を許さないために頑張ることを、組織として決定しています。

1 ひとりひとりが自分の人権を守りぬぐこと。自主的な判断の出来る人間として自己を確立し、戦争によって自分の上に何が起るかを見きわめること。そして、人権・民族・宗教・性などがちがっても、自分も他人も地球にただひとりのかけがえのない存在として尊重するのが基本ではないでしょうか。日常的な差別のある社会は、他人をおとしめることを平気にし、それは戦争への道につながるのではないかと思います。

2 強く感じます。

先進工業国の限らない経済競争、兵器生産、軍備拡張が続くかぎり、次の戦争は避け得ませんし、すでに始まっているともいえます。経済進出を続けている日本は、もうその中に組み込まれていると言っても過言ではないでしょう。よほどの努力、よほどの覚悟をしなければ、ぬけ出すことはむずかしいと思います。

ただ、ここで注意したいのは、「危険だノ」と、危険性だけを訴えることです。戦前、一九三五、六年の危機が伝

えられ、//非常時//体制が敷かれてしまったことを十分に反省しつつ、「何が危険で、ではどうすればいいのか」を、明確に打ち出して、//非常時意識//をあおる勢力に對抗していくことが必要だと思っています。

3 ほんとうの意味の自衛とは、「自分を守ること」であり、自分自身の人権を守ることではないでしょうか。城は個人の心にあるべきもので、戦略としての城は無用だと考えます。

4 3に関連して、ゼロでよいと考えています。その費用を、人間が人間をだいにすること、病人・障害者・老人・乳幼児などの保障に回していただきたいと切望します。

5 あらゆる核関連物に反対します。核の恐ろしさが繰り返し叫ばれながら、なおかつそれらを推進しようとする動きがあるのはなぜなのか、みんなで十分考えなければと思います。

6 男女平等とは、男も女も「共に生きる」ことだと考えます。戦争は、すべての人を「共に生きさせない」ことであり、平等の考え方の正反対にあると思います。

7 非常に残念です。男女平等を6のように解釈すれば、平等を考える人間は、戦争に

かわるものに、いっさい関与できないはずだと思えますが……。しかし、アメリカにはNOW以外のいろいろなフェミニストグループがあるようですし、より新しい動きに期待しています。

8 主要活動の一つですが、特に今年度は活動目標の第一に掲げています。この号も、そのためにつくりました。

国際婦人年をきつかけとして
行動を起こす女たちの会 山田 満枝

1 男女平等の実現。

性差別を撤廃し、教育、戸籍、労働等の問題を解決し、差別撤廃条約の早期完全批准を実現させる。今までの「母親として」戦争に反対するという視点からの運動は、母性の絶対化、神聖化によって戦争に組みこまれていった、戦前と同じ道を歩むことになる。「母親として」の視点をこえて、差別撤廃条約にあるように、平和なくして平等はありえないという、女性解放の視点から、平和問題自体に運動としてとりくむ。

2 危機を感じる。

(一) 女性施策

① 労働基準法改悪保護抜き平等法の動き

② 自民党「家庭基盤の充実に関する対策要綱」にみる、福祉を女に肩がわりさせようとする動き

③ 自民党「乳幼児の保育基本法案」にみる、働く女の自立を阻もうとする動き

(二) 自衛隊の動き①〜⑥

① 自衛隊徴募システム（高校卒業前の入隊案内・日赤と自衛隊との共同訓練による従軍看護婦復活）

② 防災体制の中の民間防衛の組織作り（地震や災害対策訓練を通して）

③ 基地周辺整備（騒音障害防止のための交付金発行。基地誘地の交付金発行）

④ 自衛隊広報活動（PRパンフ。際礼協力。駐屯地開放。子供への浸透）

⑤ 活発化する協力団体（協力会への入会誘会）

⑥ 海外派兵

その他、政治・経済・文化にみる、戦前への状況の逆もどり現象。

3 平和のためには軍備はいらない。

4 一九八〇年十月十七日大蔵省主計局は、

「軍備費より福祉を」と陳情した団体に「国あつての国民だ。いつ敵が攻めてくるかわからないのに予算はたった二兆八千万

円(注・予算案)だ。これでは国は守れない。国がなくなってしまうたら福祉もない。国を守るために国民は……」と発言。個を確立するための福祉は、諸施策を見れば当然判明するように、縮小制限されている。「防衛費」は不要である。

5 世界では22カ国が原発をもち、日本では21基の原発がある。この原発の再処理場でプルトニウムという原爆の材料が作られているが日本が保有する原発は世界第三位を占めることになる。

プルトニウムは冷やし続けなければ爆発するが、原子力をエネルギー化する発電所が試験中であるにもかかわらず、現在このような不必要なものをなぜ保有するのか疑問である。また、汚染を承知の核廃棄物をつくり出すことは、即刻やめるべきだ。特に、他国の海に捨てるなど、もってのほか。

原発に反対の立場から、核保有絶対反対。

6 男女平等は平和なくてはありえない。

女性解放運動の原理は、男の力の論理に対し、命の論理である。命を担っているものが差別されず、平等に社会の決定権を持つことである。これは日本の憲法のもとになっている国連憲章(一九四五)と、一九八〇年に日本が署名した差別撤廃条約の原理でもある。条約の中で、平和が強調されているのは、平和のためには男女平等が必要であり、男女平等のためには、平和が必要であるという、相互の目的と手段の関係にあるからであり、この原理をぬきにしたい男女平等はありえない。

7 戦前のような軍国化に組み込まれた権利獲得闘争ではない男女平等要求は、NOWのように軍隊への男女平等を要求するものではない。

わが国の防衛白書に「わが国の婦人自衛官の発展は勤労婦人に対しては新しい魅力ある職域を開くことになり……」とあるが、昨年の自衛官の募集採用の倍率、男一・九倍、女七・三倍にみられるような、女に開かれた労働の場があまりにも少いことよって起きた現象の、差別的仕組をこそ問題にしていくなさるべきである。

8 〇一九八〇年11月定例会

「かつて女は戦争に協力した。いま女が戦争に反対するために——女性解放運動と戦争——」

〇一九八一年1月定例会

「今、女は戦争に荷担しない! ——女性解放運動と戦争、その2——」

〇一九八〇年12月7日

「戦争への道を許さない女たちの集会」

会メンバー多数出席

○運動論分科会結成

あと23号

女たちはいま変わる

コペンハーゲン会議と性差別撤廃条約

世界婦人会議で語られた真実は何だったのか。民間独自の視点で、公式・民間、両会議の情報を網羅、問題点を分析。同時に、性差別撤廃条約の意義を解説、後半期の行動を考える。世界行動プログラム全訳つき。

- メキシコ会議からコペンハーゲン会議へ
- 公式会議と民間会議●コペンハーゲン会議を取材して(各ジャーナリスト)●決議資料ほか
- 性差別撤廃条約の意味と運動の方向●各省担当官に批准の見通しを聞く、その他。

お産の学校

私たちが創つた三森ラマーズ法

絶賛発売中！



B 6 判 450ページ 1,500円

BOC出版部

今、各界でブームを呼ぶ、ラマーズ法による自然分娩を進める助産婦と妊婦たちの「お産」に取り組む感動のドキュメント。お産の準備クラス「産婆の学校」の内容と、出産体験者六十四人の手記による、異色の出産準備書！

これこそ人間誕生！

だいたいな赤ちゃんを、病院まかせて出してもらう時代は終わった。夫婦が協力して産痛をのりこえ、安全かつ自然に、喜びをかみしめつつ産む素晴らしい出産法が登場した。『お産の学校』にその実際を見て、これこそ人間誕生のあるべきすがた！と私は感動した。

朝日新聞記者 藤田真一

(『お産革命』著者)

感動的な「いいお産」

産む側も助ける側も、あらゆる能力を発揮し、おのれの信念を貫くときはじめて「いいお産」が出現する。これは、その実践の書だ。日常的な活動をさまざまと伝えるやりとりは実に活き活きと我々に迫る。産む人だけでなく、その家族や介助者たちにとっても必読の書と思う。

三楽病院副院長 唐沢陽介

(付属助産婦学院院長)

戦争が終ると

高良 留美子

戦争が終ると

生きのこった男たちは帰ってきて

やがて このくにの町や村には

赤んぼうの泣き声が満ちあふれた

死者たちのあけた深い穴は

たちまち吹き上げてくる子どもらの泉によって

満たされていくかのようだった

しかし このくにには

けっして子を生まない女たちの一群いちぐんがいる

その夫となるはずだった男たちが

ついに帰らなかつた 女たち

その恋人となるはずだった男たちが

名も告げずに去っていった 女たち

そしてこのくにには

けっして子をのこさない

男たちの一群がいる

その白骨が いまもなお

南の海で朽ちている 男たち

その肉体が 妻の肉体のかたわらではなく

つめたい異国の泥のなかで終った 男たち……

死ねと命じた人は

子をのこし 孫を殖やし

一家の団欒にかこまれて 微笑んでいる

しかし それを見つめている

死者たちのまなざしがある

高層ビルディングの谷間にあらわれて

自分たちの死の意味について

自問している 意識がある

なんのために死んだのか

おれたちはなんのために殺し そして死んだのか……

その虚無の高みから

吹き降ろしてくる 風がある

終りのない 怒りがある

兄弟を殺しに

わたしたちは言わなければいけなかった

日の丸の波に送られて

たたかいく兵士たちに

兄弟を殺しに行つてはいけな

わたしたちは言つてはいけなかつた

お国のために立派にたかつて下さいなどは

国とは何なのか

国とは何だったというのか

わたしたちは日の丸の小旗など振つて

道に並んではいけなかつた

やがてその人の血に染まる

千人針などを作つてはいけなかつた

わたしたちは言わなければいけなかった
どんなに美しいことばで飾られようと
あなたたちが殺しにいくのは

兄弟姉妹^{きょうだいまい}なのだと

わたしたちは言っではいけなかった
お国のために死んで下さいなどとは
国とは何なのか

国とは何だったというのか
わたしたちは一度でも

そのことを考えたことがあったか
わたしたちは言わなければいけなかった
兄弟を殺しに行っではいけないと
日の丸の波に送られて 行き

二度と帰らなかった
男たちに

私にとっての戦争

女でなかった日々

——太平洋戦争の中で——

なかしましずえ

一九四四年十月、米軍はフィリピン、レイテ島に上陸。十一月にはマニラ在留の男子という男子に現地召集令の赤紙が届いた。夫にも来た。夫、四十二歳。牧師。在留十二年目、軍隊経験なし、軍事教練経験もなし。青天の霹靂であった。プロテスタントとカトリックの違いはあっても、フィリピンはキリスト教国である。そこでの牧師職のもつ意味と役目を、夫は自ら高く買い、よもや自分に赤紙が来るとは思わなかったと言った。夫は長く離れていた日本国というものの実態を知らぬお人好しであったといえ少しかわいそうでもあるが、事実そうであった。なんとかならぬかと慌てて騒いでも今さらどうにもならぬ逃げるほどの才覚もない。仕方なく出征の前夜おそく、やっと髪を切り口ひげをそり落とした。翌朝早く二人で家を出た。集合場所がどこなのか、私もただらうたえて知らず、だまって夫の後からついて行った。少し行くと、もうここで別れよう、後をふりむかないことだよ、と夫は言った。自分のことはどうしよう、こどもはどうしよう、生活のこ

とは？ と私は聞かなかった。街は霖雨に煙り、ビルは無情につたっていた。街路樹の下には乾いた落葉が重なっていた。

もはや、在留民というのは女とこどもだけになった。十二月、その女、こどもに強制引揚命令が出た。人々はある限りの荷物を大トランクに詰めて引揚船に乗った。しかし港を出るとすぐ空襲に遭い、船はあえなく傾き、人びとはすべてその時、身一つになつて、マニラに舞い戻つた。

それから数日後、今度はマニラ脱出令が出た。ちょうどクリスマス・イヴ。例年なら街に余分の灯さえあかあかとつくの、燈火管制でまっ暗。しかし空には天使の軍勢ならぬ日米の飛行機の軍勢が十字砲火を交え、時折、どちらかの飛行機が火を吹いて落ちていく。その中を千人をこえる女こどもが駅に集まり、列車に乗りこんだ。さきの引揚船中も生地獄であつたが、列車の中も同じであつた。暑くても窓が開けられない。しかもこどものうんこやおしっこはどうしようもなく、窓を少しあけてそこからこどものお尻を外へ出すのだった。そのあたりから人びとは人間の条件を失いはじめていた。

しばらくは北部ルソンの山でテント部落を作つて暮らした。

そのとっかかりに、私は夫の死を知つたのである。

ルソン平野のまん中で、敵機の機銃に頭を打ちぬかれ即死。そばにいた親切な人が、小指を切り取つて焼いて、パットの空箱に

詰めて、私のところまで持って来て下さった。私は人けのないところにとこどもをつれて行って、そのことを話してから、泣けるだけ泣いた。そして神様をお願いした。私は夫のし残した仕事をやりたいいから命を助けて下さい、と。

夫とのなまなまとした間がらはこの時点でぶつ切りと切れた。いや、男というもののなまなまいい関係は切れたのである。

五月になると敵に追われて山脈の中にはいりこみ、文字どおりの逃避行がはじまった。自分の食物は自分で探すのである。林の中ではバナナの芯を、田んぼでは田の中の巻貝と、畦のえぐ芋を、甘藷畑では現地人のとり残した藪を探し、あとは野草である。それも夜明けに、こどもを残し、ひと山もふた山も越えて行き帰るのである。時に大きな川を渡り、時に大きな岩をはって渡るのである。時に山蛭におそわれ、時に川蛭に吸いつがれた。血がだんだんなくなりそうというのに、頭にもからだにもしらみが食いついて離れない。

多くの女たちは飢えて、病んで、子どもは小さいものから順に死んでいった。白いごはんが食べたいと言いながら死んだ子どももある。岩場が通れないからと谷底に捨てられた子どももある。マ、ラリヤで狂ったからと洞穴に置いておかれた子どももある。

私も連れていた預り子を現地人の小舎で死なせ、自らもわが子どもマ、ラリヤにかかり、私はその上に赤痢にかかり腰がぬけてしまった。もし戦争終結がもっと遅かったら、もう生命はなかったであろう。

親に死なれた子どもたち、子どもに死なれた女たち、そしてほとんどの女たちは夫の生死もわからぬまま、骨と皮だけのからだ

で山を降り、米軍捕虜収容所にたどりついたのが九月中旬。金網一つ隔てた隣りに男子の収容所があって、一週に一度、金網越しに面会が許され、男と女が互いに相手を求めたが、愛する者を探し当てるものはまれであった。

山の中を逃避行するずっと前、たいていは前年十二月に家を出た時から、すべての女たちの生理は涸れてしまっていた。女は女でなくなっていたのである。

それどころか、人間の条件のろくに整わないところでは、人間はただの生きものでしかないことを、私は身をもって知ったのであった。

引き揚げて、マ、ラリヤもおさまり、働きはじめたある日、それは青空がひろびろと広がり、微風が快く頬をなでる街の大通りのことであつた。私はふと、むこうから歩いてくる一人の男を意識した。しっかりと男を見た。男は夫ではなかった。そして私は思ったのである。夫はもういないのだ。私は二度と再び夫の腕の中で甘い夢を見ることはないのだと。その時三十七歳であつた。

私にとっての戦争

郷 静子

私は一九二九年の生まれである。物ごろつたころには、十五年戦争が始まっていた。私の白紙の頭や心に注がれる思想も知識も、戦争肯定、聖戦讃美一色であつた。アカという言葉、社会主義・共産主義という言葉は、戦争に敗けてから初めて耳にし

た。あの時代に反戦の思想、厭戦の思想を持っている日本人がいたなどとは、想像することもできなかった。

そんなふうに、戦争の時代しか知らない子どもは、戦争のすべてを、当たり前のこととして、それどころか、むしろすばらしいこととして疑いもなく受け入れる人間に育っていく。元軍国少女の私は、戦争の時代を背景にしたテレビドラマなどで描かれている人物たちに複雑な思いを抱くことが多い。夫や父や兄弟や息子たちの出征に際して、妻や娘や姉妹や母たちが、生きて帰れと泣きながらいうシーンが必ずあるのだが、私の眼には、それが大変奇異なものに映る。

私の父は若いころ病身で、徴兵検査では兵役免除になっていた。そういう父を、娘の私は、何という不甲斐なさかと、この上なく不名誉なことに思っていた。だから、もし父が出征したら、涙をこぼすところか、どうか勇ましく戦って国に殉じてくださいと本心から言ったと思うのである。むろん、私自身も、イザというときには立派に戦って死ぬつもりだった。

空襲のときはこわかったでしょう、と若いひとにマジメな顔でいわれると、私は返事に困る。本当は全然こわくなかったのだが、そんなことを言っても、決して信じてくれないからである。普通、人間である以上、死に直面して恐怖を感じないはずはないと考えられているけれども、幼いときから人を殺して自分も死ぬことだけが正義とたたきこまればつづけると、死をおそれる感情は育たない。

ひとつには、思いこんだら生命がけ、といった、私のもって生まれた性格のせいもある。やさしさに恵まれることの少なかった

私の生い立ちも原因しているかもしれない。いずれにしても、私が本当に人間らしい気持ちで人の死に涙することができるようになったのは、戦争に敗けて後のことであった。

現在の私は、外からは見えない家庭の中では、家族たちはみなあのようであったのだらうと、一応は納得している。人間らしさを欠落させた欠陥人間に育ってしまった軍国少女の私の眼に、それが見えなかったただけなのだらうと、思ってもいる。そして、本当にそうなら、むしろ救われる思いがする。私のような人間はほんのひとにぎり、大部分の日本人はそうでなかったとしたら。しかし、同時に、本当にそうだったのだらうかと疑う部分、どうしてもそうは信じ切れない部分が残っていることも事実だ。あの時代には、熱狂的といってよいほどの軍国大人たちが巷にあふれていたのだったが、あの大人たちは、本当にタテマエとホンネを使いわけていたのだらうか。私にはわからない。

最後の勝利の日まで、何が何でも、るいてる屍を踏みこえても、生ある限りたたかい抜くのだ、というのが、当時の日本人の最高の生き方であった。戦況の不利なことは日常体験にわかっていた。だから、必ずその日は来ると信じていても、最後の勝利ははるかな未来のことに思っていた。その日まで自分が生き残っていようなどとは決して考えなかった。もうすでに、大勢の日本人が死んでいた。私が死ぬのは当たり前だった。今はまだ生きている日本人も、その時がきたら死ぬのが当然なのだ——と考えていた。

「れくいえむ」の中で、私は大量の死を書いた。平和な時代に生きている人々には、あるいは、死にすぎる、と感じられるかもしれ

れないが、私にとっては、戦争とはまさに、人が死ぬこと、なのである。戦争では、殺すにしろ殺されるにしろ、人の死は讀めたえられる。殺すも美德、殺されるも美德であった。

苛酷を苛酷と知らず、悲惨を悲惨と感じなかった軍国少女時代の自分をかえりみると慄然とするものがある。国家が戦争につながる愛国心を国民に要求するとき期待しているのは、表現はさまざまに飾りたててであろうが、本質的には、まず殺人者であることとを肯定させること、次いで、国家のために死ぬのは名誉なことであると思ひこませることである。そして、国家を代表する立場にいる人間たちは、自身では決して、国民と同じようには自らの生命を直接危険にさらしたり、殺人者になったりはしない。

幸か不幸か、現在の日本は、主権在民、言論の自由が保証された民主主義国家である。戦争を拒否する自由もあれば、選択する自由もある。しかし、これからの日本がどのようなようになっていくにしても、それを選んだのは日本国民自身であるという事実から逃げ出す自由だけはない。そして、一度戦争肯定の道を選べば、その後は、平和も自由も民主主義も、国民の手の届かないところにとび去ってしまうであろうことだけは確かである。

戦争の齒車

——十五歳の学徒動員——

宮田 和子

当時住んでいた東京で、私が女学校（今の中一）に入学したの

は、昭和十六年四月である。その年の十二月八日、日本は米英に對し、宣戦を布告し、向こう四年間にわたる太平洋戦争が始まった。日々戦時色が濃くなり、学校の授業の合間に、次第に勤勞奉仕の占める割合が多くなっていた。そんな中にも私たちの学校の生活は、結構明るく楽しいものだった。

昭和十九年春、四年生に進級して間もなく、通年動員先が、當時軍需工場の花形といわれた飛行機工場に決まった。通年動員とは、戦時下にあつて、学徒が學業を中断し、常時軍需工場に行つて生産に当たるといふものである。私たちの動員先は、東京都下、立川市の近郊にあつた「日立航空機立川製作所」と決定した。當時立川には、ほかに、立川飛行機、中島飛行機、昭和飛行機等の工場が集結し、朝夕の駅周辺は、これらの通勤者で、ごったがえしていた。駅からのおののバス乗場までの道筋には「撃ちて止まむ」「鬼畜米英」「前線へ飛行機を!!」などの大きな絵が極彩色で、両側にずらりと立ち並べてあつたのを思いだす。

研修期間をおえて、私たちが配属されたのは、飛行機の心臓部ともいえる発動機のピストン加工の、一連の流れ作業だった。鋳形から出たばかりの一塊のジュラルミンが、種々の工程を経て、最後には、美しい光沢をもつ、滑らかな円筒形のピストンに生まれ変わる。その機能の上からも、表面には、一点の傷も、寸分の狂いも許されない。こんな大事な工程が、當時十五、六歳の少女たちの手にゆだねられ、私たちはそれぞれの機械に配属された。表面の荒けずりから始まつて、最終の金剛石仕上げまでの各種旋盤は本体（ピストン）の振れとバイトの先端に全神経を集中させなければならぬ。中をえぐるシーリング盤、軍艦のような型のタ

ーレット旋盤、穴をうがつボール盤、高いハンドルは背のびして使った。「お国のためだ」という気持ちの張りはあるても、慣れぬ機械に当然おし、や、か（不合格品）が出た。そのたびに私たちは、職場の伍長や班長の鋭い眼光に射すくめられ、「天皇陛下の賜りものの資源をむだにした」と激しく叱責されて、身を固くした。さらに秋には、入寮の上、三交替制となった。昼勤八時―十六時、夜勤十六時―二十四時、深夜勤 零時―八時。三つの班で交替で就労する。戦争末期の需要にこたえて工場のモーターは、来る日も来る日も、昼夜、二十四時間うなり続けていた。

やがて寒さも加わってきた。夜勤の時は、真夜中に作業を終わる、夜食のあと、深夜の道を少女の一人が工場の寮に帰る。灯一つもない社宅街、冬枯れの木立の道は、満天の星明りがたよりだった。この地方特有の粘土のようなぬかるみが、昼の、人のふみあとや、手車（当時工場で運搬に多くの手車が使われていた）のわだちのあとそのままに凍りついて、ともすれば足をとられてころびそうになった。そんな時、誰ともなく合唱が始まった。

「君は鉄とれ 僕は隼 今こそ筆をなげうって、国の大事に殉ずるは 我等学徒の本分ぞ ああ くれなひの血は燃ゆる」

（学徒動員の歌）

支給されたカーキ色の作業服は、油にまみれて一般の作業員と変わらないが、腕に巻いた白い腕章に黒々と、「勤労動員学徒〇〇高女」と書かれているのが、唯一の誇りだった。この深夜の合唱は、靴音とともに、周囲のむさし野の闇に吸い込まれていき、私たちは悲憤感で一杯になった。

やっと機械にも慣れたころ、工場側の処置で、ピストン工程がそ

っくりそのまま近くの津田英学塾（現津田塾大学）へ移転することになった。当時、学校工場設置の国の方針であったのだから、ともかく使いなれた機械とともに、私たちも専用バスでこの学校へ通い出し、学生たちとベアでピストンを造ることとなった。むさし野の一面にあるこの学校は、広い校庭に松林が点在し、鉄筋の校舎や寄宿舎、そして三、四歳年長の学生たちは、時に英語を混じえて会話するので、私たちにはとてもスマートに思えた。殺風景な工場と違って、この学校工場では、久しく忘れていた学園の空気にふれ、私たちは久しぶりに少女らしい明るさを取りもどした。

そのころ、すでにB29の空襲が始まっていた。後の大々的な空襲の先づれともいえる、この招かざるお客さんは、よく一機でゆうゆうと私たちの頭上を、南から北へと飛んでいった。ある晴れた日、私たちは空襲警報に、いつものように待避壕のまわりにかがみ込んで、青空をわがもの顔に飛ぶB29をながめていた。と、その時、豆粒ほどの銀色の機影が、つぶてのように、B29の側面にぶつかっていった。瞬間、まるで銀紙をちぎってまいたような小さい破片が、青空に散った。キラキラ輝いているその中を、B29の巨体は、大きく分解し、それぞれ白煙をひきながら、ゆっくり落ち始めていた。まのあたりに見た日本の特攻機の体当たりだった。我に返った私たちは、思わず立ち上がって、手を取り合って号泣した。そしてそれは、戦争というものが、私の身邊に具体的に姿を現わした最初の出来事だった。

年が明けるころ、私たちはまた、元の工場に帰って働くことになった。食糧事情が次第に悪化し、給食の盛り切りの「こりゃん飯」も、誰一人として残すものはいなかった。それでも食べ盛

りの私たちは空腹だった。夜勤明けの昼間に、就寝時間であるにもかかわらず、そっと寮を抜け出して、近所の農家へ芋などの食糧をわけてもらいに走った。その結果は、慢性的な睡眠不足におちいった。操業中の機械の前で、気の遠くなるようなねむけにおそれることが多くなった。寮へもどっても、疲れだけが重なつて、私たちは以前のように、笑ったり、しゃべったりすることも少なくなった。敵寒の季節にガラス窓一枚の部屋に火の気はなかった。私たちは交替で天井から釣り下げられた裸電球に手をかざして暖をとった。戦局が次第に迫りつめられていることを、私たちはもうおぼろげながら感じ取っていた。南方では前年、凄惨な死闘の末、ガダルカナルがすでに敵の手に落ち、サイパンの非戦闘員までまきこんだという玉砕の悲惨な光景も、ある程度は知られていた。ちょうどそのころ、工場の南棟で、十五、六歳の少年工が機械に巻き込まれて惨死した。寮の南側の窓外の桜が、冬のさ中に狂い咲きをした。私たちは「南」という字に、ひどく不吉な影を感じ取って不気味に思った。そのうちに南から、敵が津波のように日本に押しよせてくるのではないだろうか。そしてこの不吉な予感、次第に現実のものとなって現われてきた。

昭和十九年暮から、二十年初頭にかけて、B29による本土空襲は、次第に激しくなっていた。夜勤からの帰途、しばしば東京方面の上空が紅くそまっているのがみえた。そのたびに級友たちの何人かが家を失った。

夜勤から昼勤へ、または昼勤から深夜勤へと替わる週末を交替日とよんで、就寝時間を含めて、一日半程度の休日がもうけられていた。自宅へ帰ることが許されていたので、二週間に一度のこ

の日を私たちはたのしみにしていた。昭和二十年二月十五日の夜勤を終えた私たちの班は、あすの交替日を楽しみに深夜の寮へ帰って床についた。翌十六日の朝、私たちはけたたましい空襲警報にまだ深いねむりから叩き起こされた。ラジオは南方洋上に接近した敵機動部隊からの艦載機による空襲を緊迫した声でつたえていた。帰宅時間が来ても、私たちは寮を出ることができなかった。いつもとは様子が違っていった。腹にひびくような爆弾の音、異様な炸裂音。ここからさほど遠くないところが攻撃されていることは確かだった。夕方になり敵機は去り、私たちは無事を喜びながら、ともかく自宅へ帰るために班でまとまって、工場の門を出た。その時、今日昼勤の別の班の友人たちとすれ違った。皆緊張した面ざしだったが、それでも生き返ったような笑顔を交わした。

たどりついた立川駅は、殺気立った人の群が、いつ出るともわからぬ電車を待つて、たいへんな混雑だった。このあたりの飛行機工場が、今日の空襲で被害をうけたらしい。作業服に血をにじませた男の人。放心したような動員学徒。真実を話せぬ時代だった。皆一様にだまりこくついていたが、恐怖のはりついたようなその顔が、今日の空襲の激しさをもの語っていた。あえぐような電車に乗って、やっとわが家にもどったのは、もう夜半に近かった。

翌十七日も、早朝からの空襲警報だった。きのうと同様、艦載機が立川方面を空襲しているとラジオの情報が流れていた。出勤はできなかった。電車も不通だった。夕方、同じ班の友人から電話がかかってきた。私たちの工場が集中攻撃を受けたこと、今日就労していた友人たちのうち五人が爆死したことのお知らせだった。

その友人たちの顔を一人一人思いうかべた。昨夕工場の門ですれ違ったなかにも、何人かが含まれていた。お互いに笑って手をふって別れた友人たちだった。その時、私は不思議と涙が出なかった。どうしてなのだろう。一羽の小鳥の死にも涙を流したあの少女の多感さは、どこへ行ってしまったのだろうと、私は今考える。戦争は、人間の、人間らしい感情も、すべて奪い去っていた。そして、もし交替日が一日おくれていたら、私はまちがいない、立川の工場で、あのグラマンの爆撃と、機銃掃射の下にいた。今日の友人たちの無惨な死は、明日の自分の姿かもしれない。私は、乾いた目をして、ぼんやりとそう思っていた。「戦争は、もういやだ、今すぐ止めて」と、いくら叫んでも、戦争という巨大な歯車は、私たちの手の届かぬところで、おそろしい音を立てながら回ることを止めなかった。

昭和二十年、二月十六、十七日、アメリカ機動部隊による艦載機の空襲で、立川軍需工場群は壊滅し、ついに再起できなかった。

偽りの日々の中で

椿 芳子

戦争中、私は丸の内のある船舶会社の総務部にいた。船舶会社とはいっても、戦争が苛烈さを加えるにつれ、軍に徴用され南方各地に輸送船として活躍するようになったところから、私の仕事も戦いというものが痛切に感じられるようになった。

私と二歳年下のKさんとは文書の係を受け持っていた。毎日、用

務員が白い麻袋の託送便をドカッとおいていくと、すぐ袋を開け、中の書類を分類する。その書類の中に、船舶動静表なるものがあった。最初のうちは徴用されない船舶も混じっていたが、昭和十九年ともなると、そのほとんどは軍務関係のものばかりになった。うすいその報告用紙をひろげて帳面に記帳していく。輸送船として戦場に軍用品・軍要員を運んでいく船舶の名前をみると、私は「戦争だ」と、心のひきしまる思いがしたものだ。

その船舶の名前が毎日のように消えていく。沈没していくのである。私は名前を消していきながらKさんと顔を見合わせ、「どうなるのかしら、日本は」と小さな声で語りあった。Kさんの従兄が召集されたのもそのころのことで、出征して間もなく、「従兄、死んでしまったの。戦地に行かないうちに船が沈んでしまったらしい」とKさんは目をうるませて言った。千島方面に行ったらしいとのことだったが、海上で沈められたその人たちはどんなに無念の思いで、と、私はあらためて戦争の苛烈さを身を感じたのだった。

受け付けのAさんは丸顔の愛くるしい人だったが、同僚と恋愛におちいり、皆の祝福を受けて婚約、彼は出征して行った。

その人もまた一年も経ないで南方で死んだ。男性が次つぎと出征し、次つぎと散っていった。

船舶の名前が消えていくのと呼応するかのようには、東京も空襲の洗礼をうけるようになった。空襲の合間を縫って船員の留守家族がたずねてくるのが多くなった。背に子を負い、幼児の手をひいて訪れる母子の姿は哀れで、私とKさんは切なくて顔が上げられなかった。

「便りがちつとも来なくなつたのですけれど、どうなっているのでしょうか」

社員が立つて応待している。そこには何の感情も混じえないように私たちには見えた。

「大丈夫です。ただ忙しくて手紙をかく間もないんですよ。こちらにはちゃんと報告が届いています。きつとそのうち便りがあると思いますよ。とにかく、心配しないで待つていてください」

顔色も変えず、そのようなことを言っている。

「そうですか」

わらにでもとりすがるように、ほつとしてゐる母子、こんな姿をどれほど見続けたらうか。力強く自信ありげに無事を強調する社員も、そのように偽りを言うことによつて家族を励ますことに一つの使命感を持っていたにちがいないのである。

肉親の死を知らないで待つ人が次第に多くなつていった。魂は家族たちのもとへかえりつくこともできなくなつていった。不安が言葉一つで解消されるものではないけれど、いま思うと私たちは偽りの中で戦つていたことになるのである。

船舶はますますその名前が消えていった。そして空襲は烈しさを加えていった。家族がおとずれ、無事ですすよと言われても、広い廊下を肩をおとして去っていく。家族たちはおそろくしまいに言葉は信じなくなつていったのではと私は思う。私の心はあせり、偽りの生活が堪えられなくなつていった。

事務とるも国の柱のひとつぞと

ころきめしも時にうたがう

思い切つて軍需工場に行こう。この手で直接に役立つてみたい。

そう思うようになった。偽りの日々から脱したい、——その思いが私を軍需工場へとかりたてたのである。

私は昭和十九年の末に船舶会社をやめた。しかし、軍需工場もまた私の思い描いていたものとはかけはなれていった。風紀も丸の内の生活より乱れていた。船舶会社では女子はお嬢さん扱いであつたが、軍需工場では女子は男子の対象として扱われていた。戦争が烈しさを加え、生命が保証されないということが、若い男女を利根的にさせたのかもしれない。

どこにも真実の生活はないように思え、むなししい気がした。敗戦までの日々は私の心を絶望的にしていった。

御無事ですよ——の偽りの言葉はすべてにおきかえられ、日本は偽りのままに敗戦へと突入していったのかもしれない。私が「もうだめなのだ、日本は」と危機感を抱いたあの日から一年も経ずして、日本は負けた。私はあのときの絶望感が実は真実であつたのかもしれない、いまにして思うのである。

人間の心から真実を失なわせるもの、それが戦争なのかもしれない。

おさな子と死線を越えて

舟木 百枝

昭和二十年に入つても、当時の新京駅には軍事物資を満載した貨車の列が発着し、民間の邦人には敗戦の気配などは感じることはできませんでした。当時満洲国官吏だった夫は、病氣療養を終

え職場に戻ったのですが、休養中に人事異動があり、新しい人間関係がうまくいかず、面白くない、と、いとも簡単に辞表を出したのが四月でした。そして五月十四日に現地召集の令状を受けました。収入が切れた時点で召集ということになったのです。誕生間近の娘を日中は主人の妹に預かってもらい、すぐ保険会社の事務員になり働きました。

隣組の方から、二十日の朝、召集兵が移動するらしいと聞きました。その朝、駅に向かう通りに兵隊の家族が集まり、瞳をこらして待つ間に、遠く石畳に靴音が響き、兵の列が目前を通ります。その隊列の中にひととき目立って青白い顔の夫を見つけた私は、娘を抱き上げ大声で呼びましたが、周囲の人の叫び声と靴音にかき消され、夫の耳には届かないようで無表情のまま過ぎて行きました。青白い顔が目に残り、ひょっとして病気で帰されはしないか、と考えましたが、それ以来帰ってはきませんでした。そして五月二十三日、娘の誕生日を迎えました。発育がよく、もう歩き出ししておりました娘に手作りの赤い洋服を着せ、新京神社に参拝に行きました。その時境内にいた写真屋が「旦那さんに送る写真を撮りませんか」と。まるで私が出征兵の妻と顔に書いていたように、思わず笑ってしまいました。

七月になり、当時満洲鉄道警護隊の奉天本部に勤務しておりました私の兄が、親子を引き取りに来てくれました。荷物をまとめ、当時の奉天市郊外の瀋陽という村にある兄の官舎に引っ越したのです。このとき兄の家に移ったことが、この後十一月に生まれた次女と三人の私とも親子が、無事に生きて日本に帰ることのできた一番の原因となりました。瀋陽に着いてから、水が合わないの

か、気候的なことがあるのか、娘は腸を痛め、下痢が続き、なかなか快くならず、私も具合が悪く、奉天に行き診察を受け、妊娠していることがわかりました。その医師は、数日後軍医として出征すると言い、なぜか、違法の中絶を勧めたのですが、私にはとても考えられなくて帰宅しましたが、その婦人科医師は何かを告げたかったのかと、後でわかったことでした。

八月十日ごろ、兄の友人の李夫妻が来て、どうも日本の戦況が不利だから、万一の時は私の家に逃げて来なさいと、奥さんは嫂や私の着る中国服を用意して来てくれました。数日後の十四日は、宿直で兄は不在で、何となく不安な夜でした。翌十五日未明のこと鋭い銃声が数回聞こえ、驚いて目が覚めました。その後は何事も無く静かになったので、爆竹の音だったかと考えました。朝になり、門の所へ行きますと、いつもの野菜売りが通るので呼び止めましたが、変な笑い顔で行ってしまいました。そして村は無気味なほど静かになり、どうもこれは只事でないと不安な感じにかられておりました。そのうち日本人会から、正午に重大放送があるからと電話連絡が入り、嫂とラジオの前に座り、ひどい雑音の混じった中から、何とか聞きとりました。放送が終わり、思わず、戦争が終わった、日本が負けたということだったと、手をとって合って泣きました。嫂はすぐ警護隊へ直通電話を入れましたが、ちょうど兄は席におらず、少したってまた電話した時には、電話線が切断されて不通になっていたのです。そうしているうちに、馬車を用意するから日本人は二、三日間奉天に避難することになったので、よけいな物は持たず、広場に集合せよと連絡がありました。少しの着替えと病気の娘のおむつと小さな寝具を持って行き

ますと、ほかの方は風呂敷包みのはかに行李などもかついで、いっぱい荷物でした。一台目の馬車に嫂が二人の子と先に乗り、私は娘を抱き上げてもらつて、自分も乗り込もうとすると、もう馬車は動き出してしまい、次の馬車にやつと乗りましたが、娘と離れたため気が気ではありません。それに病気の娘にかかりきりだったので、近所の誰も知らず、心細いことと言つたらありません。出発して奉天までの道中は地獄でした。中国人がトビロや鉄の熊手を振り上げ、馬車の上の荷物を引きずり落とし奪ひ合うのです。それでも中国人の馬夫は懸命に馬を走らせてくれたのです。市内に入るころは、子供を中心に大人たちは手をつないでひと固まりに座つており、暴徒は数を増し、不穏なざわめきに鳥肌が立つておりました。ようやく隊の門内に走り込みました時は、心労のため失神した人もいたくらいです。兄は、電話線は切られ連絡方法も無く心配していたところで、皆の手を取つて喜んでくれました。Mさん一家は、目当ての所まで行くことが不可能となり、隊内に収容されました。

警護隊は、本部を中心に隊舎と官舎が四角の形に建つていて、避難の人は、空襲で壊れていた五階部分の住めそうな所を探して入りました。何の荷物も無く、身体だけになった兄夫婦に姪二人と私の親子との六人が、ガラシとした中に向き合つた時、思わず泣いてしまいました。時間が経つにつれ、集団化した暴徒は日本人の会社、工場、住宅等を襲ひ始めました。隊では、窓も出入口も鉄扉を閉じ、警戒体制に入りましたが、夜になるとますます激しい暴れ方で、名状し難い人々の叫び声、怒声、ガラスの割られる音、建物を壊す音、爆竹が銃声か、その上、勢に乗つた集団の

あざ笑う声までが聞こえるのです。隊の扉の内側に枕木を幾重にも積み、支え木を当てても、外側から大勢の力で繰り返し押されて、あわやと思つた時もありましたが、何とかもちこたえて攻防の一夜が明け、隙間から見ますと、隊の向かいの味噌醬油醸造工場の練瓦作りの倉庫が遂に破られ、喚声を上げて暴徒がなだれこんだ時、隊の方の暴徒までこちらへ行つたため本場に生き返つた気持ちでした。明治の頃からというその工場の幾棟もの倉庫や工場の中のとあらゆる物をつぎ出すのですから、次の日も次の日も大変な騒ぎで、見ているよりはかかない日本人たちは、くやしさいでいっぱいでした。そのうちソ連軍が鎮圧を始め、落ち着いてきましたが、安心する間も無く、今度はソ連兵のもろもろの暴挙が始まり、民間人でも男の人はシベリヤに連行されたり、女子は犯され、殺されたり、悲惨なことの多い毎日でした。

その間にも娘の容体は悪くなる一方で、泣き声も出さなくなつてしまいました。どんなに氣をもんでも、危険で外へ出られないのですから、心の底から戦争の恐ろしさ哀しさをかみしめ味わいました。私は、娘が死ぬなら死ぬで寿命と思ひあきらめるけれど、せめて一度医者に診てもらいたいと、無理とわかりながら口に出しました。その夜、兄が、危険を承知なら明日医者へ連れて行くと言ふのです。私はお願いしますと言ひましたが、嫂はきつと反対だつたと思います。翌朝まだ暗いうちに、二人とも中国服を着て娘を抱き、外に出ました。ぬるい風が顔にあたりましたが、何とも言いようのない恐ろしさで足が震えました。もしものがあつた時、私は仕方が無いが、嫂には申し訳ないといふ瞬間、やめるなら今だと思ひましたが、兄は歩き出して、うっ

かり日本語で呼ぶわけにゆかず、急いで兄の後に続きました。人が来ると歩をゆるめ警戒し、複数の人影に会えば家の間に隠れたり、目当ての医院に着いてみると、略奪に遇い、窓枠もない廃屋となり、地面に壊れた薬瓶が散らばっていました。仕方なく、他の医院に行きますと、そこも同じで、大きな庭木までが抜き倒され、無惨でしたが、下積みにされ耐えていた人たちの怒りの爆発かと考えれば、ただただ哀しく、恨むこともできません。娘は顔がむくみ曲がってしまい、抱き方を変えようとまた、片寄せて下になった方にむくみが移り、いびつになるのです。兄が娘を抱いて、がんばれよとささやきました。だんだん明るくなり、人が多くなつてきて、そうなれば、あまり人目に付かないかと安心もしたり、またこの多勢に日本人とわかったら、逃げようがないなと思ひ、薄水を踏む思いで歩きました。三軒目の医院の前で、思わず声に出せない万歳を叫びました。日本人住宅は皆嚴重に防備していました、その医院は何もせず開院していたのです。驚きと喜びで涙があふれてきました。中は中国人と日本人らしき人でいっぱい、やっと診察を受けましたが、医師は一目で首を横に振り、あきらめるほか仕方ないですわと言うのです。「でもまだ生きています。薬を」と頼みましたら、「今のところ薬を補給する何の方法も無く、在庫が切れれば診療中止です。無情だと承知しながら後から来る病人のために、むだと思われる人には投薬できません」との宣告です。兄も必死に頼みまして、やっと一日分だけの薬を貰いました。

帰途はどこをどう歩いたものか、落ち付いて歩けと私に注意しながら、兄も急ぎ足でした。ようやく昼おそく過ぎて帰り着くこ

とができ、心配していた娘は大喜びで迎えてくれました。さっそく薬を飲ませて見守っていますと、すぐ吐く気配です。私はとっさに自分の口でそれを受けました。薬のザラザラした感触が舌の上でしたので、また口移しに少しづつ入れてやり、そうしているうちに落ち着いて眠り始めました。二回目も同じ状態で与えましたが、三服目の時は素直に落ち着き、本当に嬉しく思いました。そしてその薬を飲んでから、少しずつ快くなってきたのです。市内の治安も良くなり、兄が外出のとき、りんごを買って来てくれました。赤いりんごの色が宝石のように見えました。皮をていねいにむきおろして汁をやりますと、嬉しい目をして飲みました。皆が笑って見守っておりました。それから時々買ってもらいました。無一文の私ですし、引揚げまで、何もかも兄夫婦の世話になりました。

それにつけても、あの暴動のさ中に、一枚のガラスも割られずに開業なさっていた稲葉医師（と記憶しています）は、戦中から中国人にも診療していたということ。乗物にしても、戦中は日本人用の電車で中国人が乗るものなら、必ず降ろされてしまい、またそれを当然としていた日本人のおごりの時代だったのにと考えますと、感激と心に痛さを覚えます。

今にして、戦争に負けてよしと思うのです。戦争のむごさ、恐ろしさ、哀しさを体験した立場におかれて、近くには、アジアの中でまだ戦争に苦しんでいる弱い立場の人々へのいろいろなメッセージを考え実行している日本人の姿に期待し、心から戦争を否定し続けたいと思っております。

冷 雨

加藤 俊子

戦後成長した人たちから、「なぜいまの大人たちは太平洋戦争に身をもって反対しなかったのか——」という言葉を、ひところよく聞いたものである。けれど戦争というものは、ある日突然はじまるというものではない。徐々にひそかに戦争への階段は作られ、それを登りつめていくという過程がある。初めは気がつかないほどわずかに既成事実をつくっていく。国民は何も知らなかった——というが、何も知らずとはしなかったほどのどかだったのだろうか。一部の進歩的な知識層を別にして——。なんだかいまのご時世ととても似ているようである。しかし、昔のように国民は愚かではないという言葉もきく。果たしてそうなのか。

旧制県立高女時代満州事変が始まった。軍服を着た将校が講演に来て、満州に於ける特殊権益を侵された日本の立場——というような話をした。私は演壇の横に座ってその話を筆記させられ、校友会雑誌にのせられることになった。びかびかの長靴をはき、びったり身についたカーキ色の軍服を着て、弁舌さわやかにしゃべる、鼻下に美しい髭をたくわえた将校からその話をきいたとき、トクシケンエキとは何か具体的事実も知らず、なぜそんなものがあるのかという疑問をもつだけの知識もなかった。兄や姉の購った『改造』や『中央公論』や小林多喜二などを読みかじっていたのに、それと日本の満州侵略を結びつけて考えるだけの力

はなかったのだろう。そして、日本という国が限りもなく膨張肥大していくとうする怪物のように思われてくるのはずつとあとのことであった。

二二六事件のときは東京にいた。暗い夜の雪道を、独り住まいのアパートに帰りながら、ゆえ知らぬ不安を感じていた。それから一九四一年十二月八日に米英両国に宣戦詔書を発するまで、なぜ日本国民は手をこまぬいて見ていたのだろうか——。現在ほどマスメディアは発達してはいなかったが、治安維持法がつくられても、ひと握りの社会主義者や学生が投獄されていく実態は凶悪犯のような顔写真をのせた新聞でしか知らされなかった。当時の日本人は、ラッパの音に合わせて嬉々として、あるいは羊みたいに何も知らされずに、神風が吹いて勝つと考えていた。万一勝つことができて、どれほどの犠牲が自分たちに課せられるか想像の外にあった。東京初空襲は一九四二年四月であった。私はそのころ有楽町駅前のM新聞出版編集局で雑誌の仕事をしていた。

駒場の雑木林の中のアパートで、夜間立川基地が爆撃されたことを覚えていた。雑木林は墓地になっていて素掘りの浅い待避壕が墓の前に掘られていた。共同の待避壕がいっぱいの人で、入りそびれた私は、ひとりでその壕にうつぶせになっていた。一九四四年十一月だった。冷たい雨が降っていて壕の中の落葉を濡らし、地面を伝ってくるのだろうが、爆弾が落ちるたびに轟々という地鳴りがして、私は雨に濡れながら震えおののいていた。

有楽町駅に直撃弾が落ちたのは翌年の冬だったと思う。すさまじい爆音、私は三階の編集室にいたが八階建のビルが地震のように揺れ、窓ガラスの破片が真つすぐに矢のように走ってくるのを

見た。反射的に机の下にもぐりこんだ。「おそい、おそい、もう入ってもだめよ」と傍にいた同僚が言った。ガラスの散乱しているなかを駅側のベランダにとび出してみると、中央改札附近のガールド下は誘導避難していた群衆の真ん中に爆弾が落ちたために、惨憺たる有様になっていた。全身から血を滴らせてふらふら歩く人々、倒れたまま動かない女、男——、傍のY新聞社の別館、M新聞診療所に担架で運び込まれたのはずいぶん経ってからであった。その時、トラック三杯の死者がでたという。後にM新聞社も焼夷弾でやられ、私たちは地下の新聞巻取紙の間に体をちぢめて待避していた。

そして五月、私はついにアパートを焼け出された。戦火がおさまった朝、井の頭線の線路に私は倒れていた。煙と火で眼をやられ、とめどもなく出る涙と腹痛に悩まされた。

当時私は結婚していなかったし、帰るべき故郷もあったが、八月、戦争が終わったとき、放心と虚脱の中で考えたことは、「戦争は、どのような理由があるにせよ、絶対さけるべきである」ということであった。私の義弟は学徒出陣中に三月十日の空襲で両親と姉を喪い、戦地に兄を逝かせて天涯孤独になった。私の姉は戦地に夫を喪い、三人の残された子どもと苦闘の戦後を過ごさねばならなかった。私は戦後結婚したが、夫は戦傷病者であり、加えて私の病弱。戦争の被害者としての自分をあまり考えたことはなかったけれど、この原稿を書きはじめて、私における太平洋戦争とは何であったかを考えたとき、活動家でもない、組織の中の人でもない、ただの普通の人である私みたいな人間の置かれる位置を思うのである。

一昨年私は、長い間、思いだしたように書いてきた小説集『木にむかって話を』を刊行したが、意識的にしたのではないのに戦後三十何年が反戦の小説であったことに気がつき、あらためてその思いを新たにした。

面会

川 畑 雪 江

母家の兄様が鳥のエサを配達に行って来て、「負傷兵がようけ善通寺に戻って来て病院に入っておる。伊座いざの方の人で、もう面会して来た人もおる」という話を聞いた。その中に夫もいるというのである。夫は上海敵前上陸の時、肩に敵の弾丸が当たったのであった。

母家の姑がとんで来て、「さあ、ねえはん、行って見んか。ひょっとすると会わしてくれるかもしれん」という。私は「いや、今は隔離病院に二百人も人が収容されて、マラリヤがうつるから行っても面会はさしてくれんので、面会の通知が来たら行こうな、おばあさん」と言ったが、「ねえはんがそんな薄情な人間とは知らなんだ。すぐそこに武市がもどつとるのがわかっておるのに、お前は何行ってみようとは思わんのか」と涙を流して怒る姑を見て、私は面会に行く腹をきめた。昭和十三年の冬のことであった。

二百人の負傷兵の人に一切れずつでもあたるようにと、巻きずしを五十本巻いた。酒も二升、銘仙の着物を持って行って頼んで魔法びんに入れ、店の表戸は下したままになっている菓子屋に、

裏から、嫁入りの時の丸帯を持って行き、くず菓子をとくさん集めて来た。

この讃岐白島から善通寺歩兵駐屯地までは、汽車で高松へ一時間半、また乗りかえて二時間余りの道のりである。その朝の私のいではちとはという二、三歳の子どもを背中に結わえつけ、負いごを着て、酒の入った魔法びんをひもで結び合わせて、首から両方の乳の上にたらしめているのである。姑は、五十本の巻きずしの入った紙箱と菓子と大きな風呂敷で包んで背中に背負った。表通りは通らずに、まだ日の射さない田んぼの中の道を駅に急いだ。「まあ、あの時のねえさんの姿。胸の前に二つ魔法びんぶら下げて、今でも忘れん」と、その朝、畑仕事をしながら私の姿を見たという中原さんが今でも言う。その中原さんも主人が中支へ召集で留守家族である。

善通寺は生まれて初めて行く町であった。西も東もわからぬ。親子が善通寺の駅前でうどん屋に入って五銭のうどんを食べ、まずその店に荷物を置かせてもらった。そして、姑に「おばあさん、必ずどこへも行かずに待っていて下さい。面会できるかどうか聞いて来ますから」と言って、私一人で兵營の門に行った。門の周りには、面会に来た人がいっぱいいた。隔離病棟の人は面会できぬと言うことだった。しかし、私は、門のところに立っている兵隊さんに近づいて、「白島の川畑武市という者の家族です。武市の母も来ています。母は、『今行っても会わしてはもらえぬ』と、まわりの者が何度言っても、言うこと聞かないのです。どうぞ、一目でよいから会わせて下さい」と頼んだ。二人立っていた兵隊さんの一人は、幸いなことに近くの村相生から来た人だっ

た。一度はダメだと言ったあとで、私を手招きして言った。「今すぐ乃木神社へ行きまい。その板塀が一所、やぶれてすき間があいている。あんたの背なら、そこで顔も見られるはずや。行つて待つといったら、すぐ行くように言うから、今すぐ、すぐ行きまいよ」。

私は夢中でうどん屋へ走った。姑を夫に会わせねばならない。巻きずしや酒も渡さねばならない。今すぐに。街には雨が降り始めていた。横なぐりの雨である。私は大急ぎで番傘四十銭二本と高下駄四十五銭を二足買った。うどん屋へ飛び込むと、姑の姿が見えない。おばあさんの阿呆。どこへ行つたん、この大事な時に。街すじをさがして走った。向こうから番傘と高下駄を下げて姑がやって来る。「どこへ行つとったん。早よう、乃木神社の板塀のところへ行くんや、相生の人が会わしてくれん」せき立て、せき立て、姑の手を引いて、横なぐりの雨の中、荷物持つて傘もささず走った。乃木神社がどこにあるのか、私は全然知らない。どちらが北か南かも知らぬ。しかし私は、乃木神社の道を神様、教えて下さいと心の中で折りつつ走った。どこをどう走ったのかわからない。しかし板塀が見えた。柳が雨に叩かれていた。板塀のすき間をさがした。あった。目の高さに、指が入るぐらいのすき間がある。私はそこへ顔を押しつけて中を見た。白い病衣の上に外とうをひっかけた夫が立っていた。肩がびっしり、黒くなるほど雨にぬれていた。「長いこと待ったぞ」と夫は言った。「おかあさんも子どもも来とる」。私は姑の身体を持ち上げるようにしてすき間に押しつけた。あれほど会いたがっていた母は、言葉一つ出さず、心で泣いていたのか、それからすぐに巻きずしや菓子の包み、魔法

びんを、握ごしに両方から手を伸ばし合って渡した。「魔法びんは酒で、みんなで分けて食べまいよ」それだけ言っただけだった。もう、夫の姿は見えなかった。あつけない面会であった。それから、どうしたものか、もう覚えていない。

うどん屋に帰って、番傘四本と高下駄四足はたしかに持って、ぼおっとしている姑に、うどん屋のおばさんが「おばさん、娘さんナー」「いいや、息子の嫁デ」「まあ、娘さんかと思った」という言葉を、私は黙ったまま聞き流していた。夜になって家に着いた。私が姑の年になった今、姑の心が胸にいたいほどわかる。子思う親の心は何物もつらぬき通すと。

姑も夫も今は亡く、四十余年も過ぎ去った昔が昨日の出来事のように、戦争の悲しさが涙と共に思い出される。

マツピー山の夕日

浜口 貞江

「たった今、大本営から重大な発表がありました」。先生の声がうわづっている。

「日本は、今朝アメリカと戦争を始めました」

「きをつけ」先生は姿勢を正し一礼してから、

「おそれ多くも天皇陛下のおことばがありました。アメリカという国は悪い国です。アジアの人たちだけでなく、日本も、自分たちの都合のいいように利用しようとした。こんなアメリカに日本も堪忍袋の緒が切れて、鬼畜アメリカをやっつけるのです。」

そしてアジアの人たちと手をつなぎ、大東亜共栄圏という素晴らしい共同体を作り、神国日本の力を世界中に示すのです。日本の兵隊は、世界中で一番強いのです。今朝の真珠湾攻撃で大勝利をしました。今、この時間にも、日本軍は勝利の前進をしています」

先生は、黒板に忠君愛国の四字を書き、

「皆さんは日本国民に生まれたことを誇りに思わなければなりません。しっかりと勉強して、お国のために役立つ人間にならなければいけません」

この「大東亜戦争」「第二次世界大戦」が私の戦争とのつながりであり、二期も終わりを迎えようとしている小学校五年の時であった。「サイパン尋常高等小学校」がいつの間にか「サイパン国民学校」に書き替えられた。

真珠湾で戦勝した日本軍は勢を増し、またたく間にシンガポールを陥落させた。難攻不落と言われていたこともあって、この日は軒並に日の丸が翻り、夜は提灯に灯がとまり、人びとを興奮の坩堝の中に引きずり込んだ。小雨降るガラパノの町を、日の丸を振り、軍歌を唄いながら行進したあのころは、雨に打たれる辛さと何時間も歩かされ、足を引きずるようにして家路に向かった辛さが身にしみているため、いやな想い出の一つである。寒いとか疲れたという言葉は許されない時代であった。そんなことを言えばきまつて「お国のために日夜戦っている兵隊さんを思いなさい」と、先生に説教されるのが落ちである。

戦勝に明け戦勝に暮れて、一年余りが過ぎ、私もサイパン高等女学校の一年生になった。相変わらず戦勝の記事が紙面を飾って

いたけれど、戦火の雲行きが少しずつ日本に不利になってきていることを、「大きな声では言えないが」と、コソコソささやかれるようになっていた。三日に一度の割合で入港していた南洋航路の客船は、次々に太平洋の波の中に消えてゆく。海軍だけが駐屯していた島に陸軍が上陸し、美しい浜辺には、いたる所に壕が掘られ、立入り禁止となった。

女学校は軍隊に取り上げられ、校内には〇〇部隊と記された墓の跡がくっきり浮かんでいる。民間には引揚命令が出て、学友が一人また一人、クラスから消えてゆく。

パンの木の下の机を並べて学んでいる横の路を、兵隊のトラックが砂煙をあげて通りすぎる。南洋の東京と言われて繁栄した北ガラパンの町が次々に戦火の中にさらされてゆく姿に、何とも言えないものの悲しさを感じたものだ。魚屋がひしめく一丁目は、勢いのいいかけ声が消え、僅かな魚に客が殺到する。二丁目、三日目の商店街も、広い店内に僅かばかりの品が並ぶだけでわびしい限りだ。赤線（そのころは女郎屋と言っていた）と飲屋の多い南ガラパンだけは連日兵隊が集まり、女たちが黄色い声で下品な笑い声を立てていた。

十九年二月十一日、初めてサイパンを襲った米機は、その後も度々空襲のサイレンを響かせ、私たちを防空壕に追いこんだ。

住む人を失くし取りこわされる家、くちはてる間に放置される家の間を、敵めしい姿の憲兵が我がもの顔に闊歩する。民間人はその敵めしい姿に恐れをなし、最敬礼をして、足早に通り過ぎる。憲兵の前を通るときはおじぎをするように先生に言われたけれど、考えてみると、兵隊だって、憲兵だって、軍服に身をつつん

でいるから特別な人間に見えるのだけれど、自分の家に帰ると百姓であり、大工であり、商人であるはずだ。私たちとどれだけ違うというのか。最敬礼がなぜ必要なのか。疑問を抱きながら一日と運命の六月十一日に近づいてゆく。

その日は日曜日の昼下がりであった。

酒屋と喫茶を営んでいた両親は、刻々と変わりゆくサイパンに見切りをつけ、九州に引揚げる支度の最中だった。サイパンで生まれ育った私も、話に聞く九州に行けることで浮き浮きしていた。クラスの中がさびしくなっていることもあって、喜びは、いっそう大きかったけれど、運命の神はチャンスを用意してくれなかった。

空襲のサイレンとともに勢いよく飛んできた戦闘機は、時計が四時を告げるころまで島の上空を暴れ廻った。あとには、ドカン、ドカンと爆発する音だけが夕闇の中に響いている。

来る日も来る日も、朝もやをついて飛んでくる戦闘機は悠々と旋回して、一日中攻撃の手を緩めようとしない。神国日本の飛行機は何をしているのか？ 世界で一番強い兵隊は？ 防空壕の入口から垣間見る空に日の丸をつけた飛行機は姿を見せることなく、チャランカに米軍が上陸した。二、三日後には、完全に玉碎する。この知らせに人々は失望した。そして泣いた。泣きながら万感の想いをこめて別れの盃を交わした。これで、いつ死んでもいい。だが、生きられる限り生きのびよう。日本の生命線と言われたサイパンを、やすやすと敵の手中に渡すはずがない。必ず反撃があるはずだ。その日まで生命を大切にしよう。人びとは父の言葉に促され、住家をあとにした。

真つ暗な夜空に打ち上げられる照明弾。ヒューン。ドカン。艦砲射撃がゆく手をさえぎる。昼間はモグラのように穴の中に潜み、夕闇とともに、当てもない行列に加わり、逃げつつける。

港の重油タンクが真つ赤な火を吹き上げて、白い砂浜の海岸線とガラパンの町を照らし出す。久しぶりに見るリーフはいつもの姿を見せてくれるけれど、その横には、航空母艦・駆逐艦がひしめいている。軍艦にすえられた砲は真つ赤な口を開けて、山を谷を攻撃する。こんな中を日本軍は反撃できるだろうか。援軍が来ると言うけれど、少し遅すぎる。逃亡はいままで続くのだろうか。

もし敵に捕まったら大変だ。女は強姦され、耳や鼻を切られ惨殺される（これは兵隊が民間人に常に話していた言葉なのだ）。惨殺されるくらいなら、自分で死んだほうがましだ。

「皆さん出て来なさい、心配ありません。お水もあります。キャンプにもあります。早く出て来なさい」

二世の呼びかけに応じないで、自ら命を亡くした人は多い。

七月八日未明、近くの穴にいた兵隊は、米軍の気配を感じたのか、チョコレートを二枚私たちに残して、さっさと逃げてしまった。追いかけて来た米軍は、私たちの潜んでいる穴に手榴弾を二発投げ込んだ。父は傷つき、死の世界に至ってしまった。

初めて聞く英語（当時英語の先生以外は全員口を揃えて廃止論で、時間割は無に等しかった）、初めて見る青い目の異人、彼らが話す言葉はわからないけれど、大きなコップになみなみとついでくれた水、久しく遠のいていたキャンプデー。飛びつきたいけれど何となく手を出しかねている私たちに、ブリーズ、ブリーズと言って手渡してくれる彼らの姿には、話に聞いていた残忍さは見

られなかった。

久しぶりに見る太陽をまぶしく感じながらジープで連れていかれた丘の上には、すでに幾組もの家族が木陰に座り、茫然としていた。五、六台の戦車が目の前を横切り、マッピー山の方に進んでゆく。突然MPが銃をかまえて後の方にゆく。何事かと一瞬騒然となる。緊張した面持ちの通訳が「皆さん、これからススベの日本人収容所に連れて行きます。食事はもちろん生命も保障します。しかし一人でもMPに逆らう人がいると、あなたたちの生命は保障しません。わかりましたね」

どうもこの中の一人が、「どこに連れて行きやがる。殺すならさっさと殺せ」とMPに意気まいたらしい。彼はすぐ取り押さえられ、ジープに乗せられたけれど、周りの人たちは一斉に憎悪の目を向けた。死を免れた今、一人の謀叛人の巻き添えを食うのはまづびらなのである。私たちを乗せたトラックがススベに着いた時は、日もだいたい西に傾いていた。

この日から一年六か月の収容所生活に、今、別れを告げようとしている。LSTの船上から見るサイパンは、悪夢のような艦砲射撃で緑を失い、地肌を剥き出しにしていた。

頭の頂きを砕かれ、傷心の思いをじっと噛みしめてたはずんでいるタッポーチョ。父と永遠の別れを告げたマッピー山。これらはすべて絵空ごとのような気がしてならない。だが現実には、生活の基盤を失い、心細さをひしひしと感じながら母と二人だけで引揚げていくのだ。

何が神国日本なのか。世界中で一番強い兵隊だって、笑わせないでほしい。真珠湾で大勝利をしたって、それは抜き打ちとい

う卑怯な手段を使ったからではないか。アメリカ人は野蠻だから耳や鼻をそいだりするって、馬鹿を言うではない。自分たちだって、結構悪いことをしてきたではないか。やり場のない憤りが胸につきさす。港を離れたLSTは、静かにサイパンから遠のいて行く。戦争という忌わしい出来事を捨てるように、サイパンは水平線の彼方に消えていった。

和紙異聞

——学徒動員の師と友に贈る——

貞松瑩子

水に漬けた楮を引き上げ

小刀で皮を剥く

吹きぬけの三階から

黄ばんだ液汁が熱い蒸気をあげ

滝のように流れ落ちていた

煮つめた楮が濾過され

和紙に巻きとられてゆく眩しい白さ

兄の戦死を誰にも告げず ふるえる

少女の胸にしるされた初めての

頬を削ぐ永訣の悼みの色だ

学業半ばの女学生たちを拉致した

『勤労動員令』

『必勝』を染めぬいた白鉢巻で

仕上げ台の前に立つ

(わずかな傷も見逃せない)

見詰める寡黙な唇がひらく

「機械 停めて」

目の下の紙の流れへ

サッと一刷毛糊を引き補填する和紙

アイロンをあて 最後の仕上げ

秘密の裡に

どこへともなく運び出された和紙は

所もしらない女学生たちの手で

球体に縫い合わされ

また 運ばれて

しらない土地の海辺から

季節風に乗る

戦禍の跡もない大空へ 悠々

純白の巨体を浮上させながら飛んだという

爆弾を積まれ

自爆の思いをかけた無人の気球が

破れて落ちる先は 海中か 密林

わずかに海を越えられたいくつかが

空飛ぶ白鯨のように

米国土土へ漂い着くという

戦争とは 殺戮を夢みる

何と 途轍もない浪費

廣大無辺の恐ろしい幻想だろう

昭和二十年 春

卒業式もなく上級生を送り

戦局は加速度に急を告げ

どこからともなく

//風船爆弾米西海岸へ落下炎上//

のニュースが流れた

私たちは空腹とはびこる風に耐え

脚気に重い脚を引き

来る日も来る日も工場へ通った

八月十五日 未明

『空襲警報解除』のサイレンが鳴り止み

突如 明けやらぬ空から 無数に

音立てて降るきららのような固まりを見た

B 29 爆撃機が

引き返さず最後の焼夷弾を投下

私を生んだ小田原の町が焼ける

工場のラジオで

雑音にかすれる終戦の詔勅を聞いたのは

未だ焼け跡に油脂が燻り異臭を放つ中であつた

慟哭に応えるように

びたりと機械は作動を止めた

流れる和紙の汚れない白さ

疑いしらない少女の胸に

熱い祈りをこめ

凍傷に膨らむ指に一心こめた

純白の和紙 作られた球体の行く方を

秘密兵器という名で空を飛ぶ威容を

見たものがあつたらうか

一九八〇年 秋

戦争を知らない娘は

風船爆弾が漂い着いた土地とも知らず

アメリカ西部へ

天文学究の夫に従い旅立っていった

雲ひとつない秋晴れの朝であつた

わたしの戦後が鮮やかに揺れた

竹ちゃんの抵抗

石倉昌子

あれは、日本の敗戦色が濃くなったころのことであつた。軍当局は、撃沈された輸送船の不足を補うために、漁業地のカツオやマグロなどの漁船を所属の漁夫ごと徴用して、輸送の任務につか

せたのである。

そういうわけで、半農半漁の私の故郷は戦死者が非常に多く、特に、当時二十歳前後だった私の小学校同級生の名簿を見ても、男子六十五名のうち、実に半数の三十二名が戦死となっている。とき折帰省すると、私は、幼な馴染のこれら戦死者の墓にも参るのだが、大きな墓が所狭しと列をなしていて、若くして逝った無念を語りかけているようで、つらい思いをする。

ふるさとの寺に整列する墓に

机並べし幼な日想う

したがって数多くの出征兵士を見送っているが、伝えられるように彼らは、八お国のためだと心に誓って、歓呼の聲に送られて、勇ましく出征Vして行ったと言えるだろうか。いや、再び生きてふるさとの土は踏めまいと、心の中で泣きながら追いやられたと言っても言いすぎではあるまい。

そうした一人に、私が兄のように親しんでいた竹ちゃんがい。彼は頭もよく、体も大きく、逞ましい元気な漁夫であった。所属のカッオ船にもとうとう徴用が来て、竹ちゃんも仲間たちと共に召集されたのである。

ところがいよいよ出征というその朝、大勢の村人たちが旗を持って見送りに集まっているのに、本人がなかなか家から出て来ない。どうしたのかと待っていると、やがて父親に引きずられるようにして泣きながら出て来るなり、

「やだア、いやだよオ、征くのはやだ、死にたかないノ、死にたかないヨオノ」

と、絶叫したのである。

事ここに至ってこの振る舞いは、女々しいではすまされない。

当局に知れたら大変なことになるのだ。あまりのことに、見送り人たちは息を呑む思いで成り行きを見守り、両親や親しい者が懸命にだめ論した。けれど竹ちゃんは恐怖に怯え、テコでも動かないと柱にしがみついて離れない。出発の刻は迫る。

そのとき、思い余った竹ちゃんの父親は、庭に横んであった薪の束から一本を抜き取り、

「この卑怯者め、これでもか、これでもかノ」

とばかり、心も顔も鬼にして、頭を抱えてうすくまる竹ちゃんを、打って打って打ち据えたのであった。竹ちゃんの頭から手から血が流れ、白いたすきが赤く染まった。見かねて、私の父が薪を取りあげた。

今はこれまでと諦めた竹ちゃんは涙を拭き、包帯をしてもらい、血を洗い流したすきをかけた。そして自分の振る舞いを詫び、父母をよろしくと頼むと、富士山に見える田圃道をトボトボと出征して行った。

誰一人、万歳を叫ぶ者もなかった。

それからひと月もたたぬうちに、竹ちゃんも仲間の漁夫たちも、敵の直撃弾を受けた漁船と共に、海の藻屑となってしまった。

戦に征くは怖しと臆す息子を

父は薪もて打ち追いやりき

今でも、私の眼に、耳に、あのとときの様や絶叫が離れようとはしない。

戦争は死そのものである。唯一、原爆の被害をうけた日本は、先頭に立って、世界の平和を守る努力をすべきなのだ。

それなのに、テレビで、政府の有名な高官がにこにこしながら、さかんに軍備増強の要を説いていた。

再軍備笑顔して説く男あり

汝は忘れしやあの地獄絵を

またその後のテレビで、十人ばかりの高校生が、

「君たちは戦争が始まったらどうします」

と訊かれて、九人までが、

「銃を持って戦います」

事もなげにそう答えていて、啞然とした。

もし戦始まるときは銃持つと

恐れも知らずで若者の言う

人口の半分を占める女たちよ。しっかり世情を見つめ、万が一にもあなたの夫や兄弟が、あの高官のように軍備増強や戦いの道を歩むなど考えていたら、あくまでもその考えを変えるよう説得してほしい。

あなたの子供が、あの高校生のように、銃を持って戦うなどと口走らないように、語っても語り尽くせない戦争の悲劇を、こんなと聞かせてやってほしい。女も確たる定見を持つべきだと思ふ。

何しろ世界の人口の半分は女性なのだ。二十数億、心を一つにして、平和を護ろうではないか。



ひめゆりの遺品に

こみ上げる思い

伊是名 ヨン子

戦争はもう嫌です。宮崎県西郷村という所が私たち(老人、主婦、子供)の疎開地でした。村人はおじいさん、おばあさん、また主婦や子供たちまで、とてもよく働き、軍の食料品供出に毎日忙しそうでした。配給以外はお金では何も買えず、餅、紬、木綿類の着物は全部、米・麦・野菜などと交換して、その日その日を過ごしておりました。家族三人、毎日乾燥葉っぱだけ食べていました。三歳の娘が隣の娘のおにぎりをじいっと見ている姿は哀れで、かわいそうだと思っても、どうしようもありません。籠を背中に、流れの早い美々津川の引き水の時に流されないようにゆっくりゆっくりと渡り、あの部落、この部落、と足を棒にして毎日食糧探し。帰りは、冬の用意にと山へ薪を集めに行くのが日課でした。いま思い出すと、あの大根の葉っぱが、あんなにおいしかったとは思えません。村人たちは一升瓶に松油を貯めるのに一生懸命でした。飛行機に使用する油さえないのに、戦争に勝つでしょう。昭和十九年八月に私たちの疎開船と共に、那覇港を出航した学童疎開船「対馬丸」が奄美大島悪石島沖でアメリカの潜水艦に撃沈され、アツという間に千人余りのいたいけな少年少女たちの尊い命が悪魔の波に吸い込まれました。この悲しさ、この苦しみを、誰に訴えたらよいでしょう。年毎に八月には友達の前生や、その子供たちが思い出され、言いたいような悲しさと共に、安ら

かに眠って下さいとお祈りしております。でも、疎開地の皆様はとて親切で優しく、特に区長さんと隣のおじさんの気の配りようにはほんとうに頭の下がる思いでした。皆様に大変お世話になりましたことは一生忘れません。いついつまでも感謝しております。

戦争が激しくなり、延岡辺りに爆弾のおちるすさまじい音が恐ろしいほど聞こえました。警戒警報のサイレンが鳴ると、モンベに防空頭巾姿で、リュックを肩に下げ、三歳の娘をおんぶして、腰の曲がった母の手を固く握り、鎮守の森へ走り続けました。間もなくゴーゴーブンブンとB29が七、八機、空高く悠々と延岡方面へ飛んで行きます。密林の頂上で、くやしにくくやしくていらだたしく見送っていました。日本の飛行機は一機も見当たりませんでした。

八月十五日の天皇陛下のラジオ放送で終戦を知りました。負けると思っているにも、涙で声は出ず、悲しくて悲しくてぼろぼろと止まらぬ涙、どうしようもない心境でした。道行く村人の姿はなく、村中が通夜のような毎日でした。ところが、それから一週間後に変な噂が立ちました。沖繩人はスパイだ、沖繩人のために日本は負けたんだということです。私たちを見る村人たちの目が、すごく冷たく感じられました。勝つために、今まで皆様と共に心から通じ合い、田植え、麦踏み、草刈り、山焼き、いろいろ苦しい日々も楽しく語り過ごしてきましたのに。またお正月には囲炉裏をかこみ、故郷のことを語りいつつ、やきもちに銀めしが、とてもおいしかったのに。とてつもなく空しく、くやしく、残念でした。しかも、沖繩玉砕の報にすべての夢は遠く遠く消えていきます。

神様どうぞ、この悲しさ、苦しさ、淋しい心を整理させて下さいと、親子三人、沖繩の方向へ手を合わせました。

やがて私たちは引き揚げて、なつかしい故郷沖繩に着きました。変わりに変わった、どちらを向いても全然わからない赤茶けた地はだ、変わり果てた地形、はげ頭の丘、丘……。従弟を迎えに来てくれて、とても嬉しくなつたし、やせこけたその手を握り合い、共に泣くばかりでした。長い間の栄養失調と疲労のために間もなく亡くなりましたが、この従弟のおかげでやっとテントの家に入ることができました。灰じんと化した故郷には薪が無く、海辺に流れて来る木屑を拾ったり、山へ行くかしなければならぬのです。が、奥まで行くには勇気が要りました。白人兵や黒人兵の暴行の噂をよく聞いたからです。無邪気な子供たちはアメリカ兵を見れば、あちらこちらより集まり、蟻の行列の如く「ギブミー」の連発です。尊敬している人でさえ、生きるためには、食べるためには、いろいろな行動をしました。

今は亡き従妹の話ですが、四月何日かに、米機が暴風前に飛ぶとんぼのように、沖繩の空を覆い、海では米艦隊が島全体を取り巻いて、嘉手納方面から上陸。今までにない激烈な争いだった。毎日数発の爆弾が投下され、弾丸が雨あられと降る、このものすごさに生きた心地なく、地獄以上だったそうです。南風原の野戦病院では、何千人かの歩けない患者に胃酸カリ入りのミルクを配り、自決を強いたとか。南部の住民の防空壕に軍人が入って来て民間人を追い出し、弾丸の落ちる雨の中を逃げ迷いバタバタ倒れる様は、まこと生地獄。この従妹も母親と二人で丘まで逃げたがアメリカ兵に囲まれ、手榴弾で自決したのですが、自分だけは奇

蹟的に一命をとりとめたのだそうです。しかし、体のあちこちに破片が入って、ずっと病院通いしていましたが、三年前に亡くなりました。

「ひめゆりの乙女展」を見ると、心の底からジーンと胸いっぱい、涙、涙……。国のために、世界平和のために、純真な少女たちは勝つという信念で、軍を信じ従軍し、部隊解散命令まで、苦しみ悲しみに耐えて負傷兵の包帯を巻き、ウジとシラミのわく、兵隊たちを看護し、砲弾の飛び散る中で、水汲み、飯運び、糞尿の始末、食糧探し……と、兵隊と共に行動した。敵弾にたおれる者、荒れ狂う鉄火の山野をさまよい、どこでどうなったかも知らず、永遠に帰らぬ乙女たち。展示されたポロポロの遺書を見、「海行かば」の歌を最後に死んだ先生やうら若き学徒を思えば、いい知れぬ軍部への反ばつが心からこみ上げて来ます。国のために、天皇陛下のために死ぬことを美德と教えた戦時下の教育の恐ろしさは、戦争経験のない方には、何万何千語の説明でも、お分かりにならないでしょう。ひめゆり展の無言の訴えを私たちは心して考え、二度と戦場にならないよう、ひたすらに世界平和を願います。

戦争とは、人間が死ぬことです。人間の血が飛び散る中を、死んだ母親の乳房を赤ちゃんがしゃぶっているのです。そばを通り過ぎて行く人々も、とても、とても、つらかったでしょう。県内の男子師範生や中学生も学徒隊として、鉄血勤皇隊と、通信、食糧、弾薬運搬をし、また、武器を持って斬り込み攻撃等、あらゆる戦闘任務を兵隊同様に果たしたのです。従軍した大半が戦死し、伊江島の集団自決や、日本軍隊による住民虐殺でも非戦闘員の沖縄の人たちが鉄の暴風吹きすさむ中、阿鼻叫喚の修羅場にあった時、

お偉い方は、どこでどうしていったのでしょうか。国のために、との美名のもとに沖縄の人たちが失なったものは、空は広しといえども、あまりにもあまりにも大きいと思います。

戦争は終わり、沖縄は二十七年間、米軍という異民族の施政権下におかれ、米軍人・軍属による人身被害等いろいろの難問がありました。これから先も、けわしいいばらの道だらけだと思います。復帰は実現しても、現実には基地は存続して、住民は被害に悩まされている状態です。もし戦争が起これば、いかに残酷悲惨でみにくいことか、体験した「沖縄」そして「広島・長崎」を奥深く心にきざみ、特に女性は考えなければいけないと思います。夫や子供、そして親を失なうことになりました。最近の保守化傾向が防衛力増強に拍車をかけ、改憲再軍備への道を急いでいるような不安感があります。権力者は、大を生かし小を殺すことに精力をつかうと言います。かつて史上最大の戦場であった沖縄は、現在まで存続する米軍基地を抱え、さらに自衛隊の増強など、国防的先陣を強いられています。沖縄県民としての私たちは、どんなことがあっても戦争への道は許しません。第二次戦争が、正義の戦争だったのでしょか。軍事大国のイケニエになった沖縄。二度とくり返したくありません。ひめゆりの塔、健児の塔と幾つもの塔があります。また平和記念資料館もあります。毎年の慰霊祭は何のためのお祈りでしょう。十幾万の尊い生命を無駄にしないよう、戦争は二度としないというお祈りではないでしょうか。戦争の悲惨、惨劇、この事実が、今現在、水平線の彼方へ何の感情もなく忘れ去られようとしている！

精神的にも肉体的にも地獄の苦しみを与える戦争は、人類すべ

ての敵です。戦争阻止を強く強く世界へ訴えなければならぬと思います。自然に自生する緑、黄、赤……。とりどりの色の調和した、実に美しい風景を私たちは夢見ているのです。

炎に消えた肉親たち

船 渡 和 代

昭和十九年八月、私は国民学校六年生で、山形県に集団疎開した。あの年の八月から九月にかけて疎開した学童は二十万人を超えたという。学童たちにとって永い間親もとを遠く離れるのはもちろん初めてであり、国策といえども、我が子を未知の地へ送り出す親たちもひどく心にかかるものがあつたと思う。疎開先での状況はどこも同じように、飢えとシラミと、やがて寒さに耐え、友達同士のいさかいや差別、父母恋いしさの満たされぬ思いに泣き、それでも勝利の日まで頑張ろうと、いじらしいほどの小国民ぶりだった。七か月余の集団疎開の日々は、戦争が庶民に及ぼす具体的な悲劇として、私が初めて肌で感じた経験だった。

二十年三月六日、六年生は卒業と進学のため、疎開派としては一番短い期間で東京へ引き揚げた。あの年の山形地方の記録的な寒さと豪雪の中で泣きながら手をふる下級生たちの姿が哀れだった。どんなにか一緒に帰りたいと思ったことだろう。しかし羨望を受けて帰京した私たちを待ちかまえていたのは、一夜のうちに十万人以上の人びとが焼死した東京大空襲だった。

三月十日、浅草、本所、深川、城東の東京下町一帯を焼きつく

した猛火のすさまじさ、ゴーゴーと渦まき炎、逃げまどうかたわらの家々が火柱をあげて屋台崩しのように倒れ、無数の巨大な火の粉は視界のすべてを真っ赤にして、頭髮に衣服に降りそそいだ。あらゆるものが燃えてころがり、いたる所で上がる炎の渦は逃げる先々をふさぎ、幾十万人の人びとが家族の名を呼びながら、バラバラになり逃げまどった。わずか数時間で十万人以上の犠牲者を出したこの夜の空襲は、B29三百三十四機が約二千トンの焼夷弾を満載し、無差別にバラまいた恐ろしいものだった。

私たちも逃げる途中炎に追われてバラバラになってしまい、私と手をつないで道端の防空壕にころがり込んだのは二番目の兄だった。続いて長兄が六歳の妹と飛び込んで来た。妹は防空頭巾に火がつき、すでに頭、顔、両手にひどい火傷を負っていた。無蓋の防空壕に炎は容赦なく、火の粉もあられのように降り、腹這いになって私をかばってくれていた次兄の背中が燃え、ワーンと叫びながら壕をたび出して行った。助けるつもりで長兄が次兄の名を呼びながら後を追いつ、炎の中にころがり行つた。一瞬の出来事だった。私は妹と二人、火の粉と熱風と恐怖とたたかい、長い一夜を頑張りとおした。しかし妹は大火傷から破傷風菌に侵され、身体の硬直のため、欲しがる水も飲めなくなつて、苦しみながら九日後に亡くなった。

背中から炎を出して火中にころがって行った次兄も遂に帰らず、生後十か月の弟は、母の背に負われたまま亡くなった。髪も焼け、素裸の焦げた身体で焼跡にたどり着いた母は、ユレイのようだった。ショックと全身の大火傷で数か月寝たきりだった母、自分の身代わりのように背中で死んだ末の子を、母は今も語らない。

祖母と三歳の妹は、近くの祖母の家から逃げたまま、最後はここで、どんなであつたかもわからない。

炎に消えた私の五人の肉親が、あのころのままの姿で私の中を去来する。

国民学校一年入学検査のため、縁故疎開先から戻って来た妹は、家に帰った喜びを精一杯表して、可愛い愛敬をふりまいていたのに……。生まれ、育った日々のすべてが戦争の日々、苦しみばかり多かつた妹だった。あの防空壕の中で破傷風に侵されたと思うと、私はこの三十六年間、妹への済まないという気持ちで常にどこかにあつて、おぼろげな記憶の中の幼い顔に涙がこぼれる。

次兄はあの時二十歳、青春まっさかりの薬大生であつた。あの時代の青春は、命を国に捧げるものだったのか……。兄は学徒動員で、陸軍の寮から三月九日の夜遅く家に帰ったばかりだった。

疎開から戻った私や妹に久しぶりに会うために……。兄の寮と私の山形の寮の間を数十通の葉書が往来していた。わが家での再会を夢にまで見たのに、語り合うこともなく、あんな無惨な形で奪われてしまった。私を送った葉書が、兄の寮から再び私の手に戻った。数少ない遺品として懐しい。私の命が消えるまで、亡き人への思いは尽きない。

戦争にかかわった国の数知れぬ人々の運命の狂いは、どんなに語っても、書いても、尽きるものではない。けれど命の尊さと平和の尊さを知り、より人間的に生きるために、再び悲惨な歴史をくり返してはならないという願いをこめて、私は語り伝えてゆく。当時十二歳だった私にとって、権力に支配され教育される恐ろしさを体験した、激動の、狂った歴史の時代だった。

近頃ささやかれる右傾化のきざしに、あの時代をもう忘れたのかと情けなく思う。再びあの路線につながることはないよう、一人ひとりが目を光らせなくてはと思う。

あの頃のおい

須田春枝

東京音頭を御存じですか、

いまの民謡ブームのそれにも増して、賑やかに街々に流れ、憂さをいつとき忘れるように人々は唄いました。

その頃

東北の貧しい村では

娘が売られてゆきました

そして

戦争が始まったのです

侵略戦争が……

そんな世の中を、憂国を叫びながら

一気に戦争へ持っていった人たちのことを

そこで、一儲けを企む人たちのことを

あの頃 私は何にも知りませんでした

あの人たちは決して自ら戦わないことを

前線の矢弾となるのは常に力のない人たちであることをわれわれが飢えている時

あの人たちは優雅に充ちていたことをあの頃 私は何にも見えませんでした

そして

弱い者同士、お互いがお互いを監視し

僅かの配給品で傷つき合い

あの人たちの意の中で

私はねずみの群の一匹でした

あの頃の臭いがあります

御用学者がナシヨナリズムを呼び

平和を押し進めようとする人びとを

マスコミが歓迎しなくなりました

鬼畜米英という活字が

ソ連の脅威と変えられました

決して私の承認できない自衛隊なるものが膨大にふくれあがり

幕僚長は叫びます

「焦土と化しても国のために戦う」と

しかし、もう騙されません

あの戦争から三十余年

私は見えてきました。私は知ってきました。

戦争の悪を、世の中の仕組みを

そして

知らないことは罪なのだと

見えないことは怖いことなのだと

ねずみであってはいけないのだと

いま 核の時代に

東洋の片隅の島国を焦土と化さない思いを

地球全体にひろげて、

民族を越えて 人類を守ることこそが

人間であることの

証しなのだと――

私が聞いた話

手 島 ヒロ子

中国残留孤児の肉親捜しの報道に接している間に、私は人間の記憶が長い歳月の中で薄れていくことの恐ろしさをいやというほど自分の中で思い知りました。かつて自分が直接耳にした、終戦直後外地より引き揚げて来た女性のしてくれた体験談をすべて忘れ去っていたことに気づいたからです。

中学二年の時一緒になったクラスメートの一人は、その姉を満洲の地で亡くしていました。ある病院附属の看護学校生徒だったというその人の姉は、敗戦間近、急増する負傷兵の看護の激務で結核にかかり、一人だけ離れていた娘の身を案じて父上がたずね

られた時は、明日知れぬ病床にあったそうです。肉親の待つ場所に連れ帰ろうとする父上に、その人は日本の敗けるのを知り、重荷となる自分のことより、幼い弟妹を無事連れて帰国するよう望まれ、どうしてもと言われる父上に「病院の先生にお願いしていただいている」と青酸カリの包みを見せ、万一の場合の覚悟を示されたそうです。そして直後の死。遺骨を胸に帰宅された父上は、わずか数日で頭髮が白くなっていたとのことでした。

また、高校卒業後すぐ就職した地方官庁の同じ課に、その頃若い一人の看護婦さんがいました。その人が時間執務中に一人涙を流しています。不思議に気づき理由をたずねた時の話です。その人も従軍看護婦として満洲から中国へ移り、終戦を迎えた方でした。八路军に強制収容され、奥地に連行される途中で、学校時代からの親友であった同行の友に打ち明けることもなく、一人隊列から脱走、逃げ帰られた方でした。監視の目厳しい中では単独でしか成功の道はあり得なかったとのことですが、その人は今も消息不明の親友を思つては、自分の行為が友情への裏切りであったことを泣いているのです。また、その頃まだ存在していた赤線地域の女性に対し、私が若さにまかせて軽蔑の言葉を口に出した時、同じその人に強くたしなめられました。「人を職業でいやすめてはだめよ」と。その人は連行される隊列に看護婦といつわって同行していた慰安婦たちの話をしてくれました。治安も定かでない地を通過する折、その隊列の中から数人の主婦を混じえた若い看護婦たちが選び出され、連れて行かれようとした時、事の真相に気づいて恐怖におののく隊列の中から数人の慰安婦が飛び出し、その行手をはばんだのだそうです。そして自分たちの胸を

はだけ、お尻をたたきながら何事か叫んでいたかと思うと、今連れ去られかけた人たちを取り戻し、自分たちが同行したそうではなくていいよ。どうせ汚れた体、無事に帰国しても、よろこばれるはずもないからね、貴女たちきれいな体で帰りたいよ」と笑いながら叫んで立ち去ったとのことでした。

こうした数ある体験談を思い出して、胸の痛むこのごろです。

螢と花火

永 榮 佐代子

今もなお、鮮やかに私の心に刻まれている夏は昭和二十年八月の富山大空襲と父の死につながっています。

三十六年前、疎開先から久しぶりに帰った身重の母と姉第四人に囲まれての父は、商売（食料販売）もできず、ただ店を守るという名目で中心街に残っていましたから、不自由をしていたと思います。夕食の米を全部平らげると、もう明日は食べるものがないからと郊外の母の実家に行くことになりました。

その夜の一時の憩いという想い出を残して、一片の骨もないままに、父は私たちから姿を消しました。

異様な物音に目を覚ました時、真夜中の闇のあちこちに照明弾がまぶしく輝いていました。夏布団一枚をひっかぶされ、小学校裏の田んぼに行くよう促された私と弟は、転がっていた下駄をひっかけて、ひたすらに走っていました。火が追っかけ頭上から落

ち、周りは火の海でした。立ち止まろうとする私を、弟は、こつち、こつちと手を離そうともせず、ぐいぐいと右往左往しながらも、田の広がる所にいつのまにか佇んでいました。

爆撃の炎の明りの中で、布団を被ったままの私たちを、その柄で見つけてくれた母は、一人を背負い、一人の手をしっかりと握って、片手に手桶。母の後日談によれば、そこまでたどり着くまでに、何度か各家の防火用水に浸ろうとすると、危ないぞつ、田んぼへ行けつ、と怒鳴られたのだそうです。もし、その声に従っていなかったら到底助かってはいなかったはずだと。私たちは飛行機が飛び交い、爆弾の振動音に震えながら、田植えの済んだばかりの畦にしがみついて、飛び上がったたり、悲鳴を挙げ続けました。晩方までの長かったことが忘れられません。田んぼにつかたままの脚は水ぶくれになっていましたし、二つおいた田に落ちた爆弾のために、周囲には仰向けの死体が水に打たれていました。ただ一面の焼野が原に何本かの黒い木とデパートがくすぶっていただけでした。咄嗟に持つて出た手桶が八キロの疎開先までの喉を潤す役目を果たしてくれました。道具がら安否を気づかって来た疎開先の小母さんの暖かいおにぎりの塩味と真白な米の舌ざわりは懐かしい味となりました。

それ以後、私たちは何年間も芋ばかりとか麦飯とかおかゆばかり食べなければ生きられませんでしたから。

連日、父を探しに出た母は、夕方灼けて皮がむけた顔で疲れ果てて空しく帰ってくるだけでした。生きていたらどんなことをしてでも来るはずの父が、やっぱり駄目だったのだと悟った日、螢を何十四も蚊帳の中に放して泣き寝入ったことが忘れられないで

います。人伝に、父は商店街の人たちと一緒に逃げたものの、忘れ物があるといって引き返し、その後は誰も見ていないのだということでした。父の忘れ物とは何だったのでしょうか。多分、私たちに会うために方角を違えた時に、思いがけないことが起こったのかもしれない。

母の着る物が一枚ずつ消えていき、寒さが一段と厳しい季節に、四人目の弟が生まれました。小さ過ぎるような子でしたが、私には希望の灯のような気がしました。お腹が空いて空いてたまらなかった日々でした。切ないまでに、ぎりぎりのところで私を支えてくれたものは、学校の帰り路、よく餅とか煮物などを食べさせてくれた友人が一人いたこと、新聞紙のような教科書から習った「心に太陽を持って 唇に歌を持って……」という詩の一節でした。つぶやくだけで、どれほど励ましと勇気を与えられたか測り難いのです。

栄養の不足からくる湿疹に悩まされたり、発熱も度々、停電ばかりの怖しさの中で、姉弟で、螢ととろろ昆布を道具に買物ごっこをしたこと、小川でどじょうやふなをざるですくって味噌汁に入れたことなどが思い出されます。

富山市では毎年八月一日の夜を記念して花火が催されます。あの一瞬の輝きと残影の中に、母と私たちは父の無念さと悲しさを見だして、手を合わせます。ドーン、ドーンと富山じゅうに響く音は、私たちの心にも拡がり、みんな大きくなりましたよ、と語りかける父への鎮魂歌と思えるからです。

記録によると、八月一日、B 29 約七十機は富山市を空襲することおよそ三時間。戦災死者は二千二百七十五人に達したというこ

とです。あの夏十歳だった私は、高校生と大学生の男の子を持つ母になりました。軍靴の響きをまたもやという昨今の言論をいち早く嗅ぎとっています。

私たちを育てるために精魂を傾け尽くした母は、すっかり疲れ果てて病床にあります。父亡き後の母の年月は筆舌に尽くし難いのです。失ったものはあまりにも多く、もう悔んでも悔み切れないというのに、とみに弱ってきた母は、三十六年前のことをつづさに想起し、激しく悶えるようになってしまいました。

ようやく子供が離れて、自らの気持ちの平安を得ようとの余裕の時間に至った時はじめて、母は、戦争ということに突き当たったかのようです。「酷い」と一言に尽きると思えます。どうしたら今の母を慰め、心の安らぎを与えることができるのか、私の課題だと思います。

私に刻まれた地獄

城 たつ子

私にとつての戦争は、全く死刑の宣告であった。私は十六歳から十九歳まで大病を患い、死の床からようやくときはなされて元氣になった喜びもつかの間、今度は第二次大戦にぶつかってしまった……。姉兄弟はみんな、方々に散ってしまい、戦時中沖繩に残されたのは、病気の母と二人きりになっていた。ひゅうひゅう、するするする……と雨あられの如く飛び散る弾丸の中を、病の母の手を引いて、あっちうろ、こっちうろとよろけな

がら、南部の方へと逃げのびて行った。戦時中は神様もお怒りになったのか、沖繩は毎日しのつくような大雨にたたられ、どろ田のようなぬかるみを、恐怖と飢えにさらされながら、ただ黙々と、あてもなく歩き続けるばかりであった。夜になると米兵もやすむのか、しんと静まり、弾は飛んで来ない。しかし照明弾がパッとあがって、昼をあざむく明るさになるので、こわくて、思わずガバッと地面へうつぶせになるのでお腹はどるだらけ、それでもかまわず、前へ前へと進み、一時でも猶子にならず、ただ夢遊病者のように足を運ぶだけである。とうとう母は力尽きて歩けなくなり、道ばたへうずくまってしまった。ある小さな防空壕をみつくて、ひとまず母を避難させた。「戦がすんだらすぐ迎えに来るから、がまんしてどこにも動かずに待っていて下さいね、お母さん」と、願うように説きふせて、私は後髪をひかれるようなつらい思いをしながら、母と別れて前に進んだ。首と胴体を切りはなされてころがっている兵隊、後頭部をかちわられて脳みそがとび出ている者、艦砲射撃で出来た池の中でふわりふわりと、ふぐのように浮いている兵隊、地獄絵図を見るような錯覚になり、夢か現実か、頭はただ茫然として、足だけ動いているだけであった。ある夕方、歩き疲れてやっとたどりついた所にひとかたまりになって休んでいる避難民を見つけ、安堵の胸をなでおろし、つかの間の休止をすることになった。ところが、ドカンと、耳をつんざくような大音響と共にあたりは土けむりにおおわれて、目もあけられず、息苦しさをこらえてじっとしていた。ふと気が付いてみたら左のひじが切り落とされたような気がしたので、ひょいと見たら血だらけになっている。血はどんどんしたたり落ちてい

るが、どうするすべもなく、無意識に立ち上がった。二十人ぐらいのうち半分以上の人間が死んでしまっている。あわててそこからすぐに立ちのいた。しばらく行くと前方に馬小屋が見えてきたので、あわてふためいて中へ夢中になってはいりこんだ。赤十字の印のついた箱を持った衛生兵が私のひじをみて、「かわいそうだ。止血をしてあげよう」と言いつて、腕をかたくしばつてくれた。私は地獄で仏とは正にこんなときだろうと思ひ、ただ心の中で、友軍の兵隊さん、本当にありがとうと拝むようにつぶやいた。ガジュマル巨木の下で野宿をしていたら、急に横なぐりの大雨が降り出した。雨をしのぐ場所がみつからず、ほかにどうすることもできず、ぬれぬずみのまま夜を明かした。陰に浮かんで消えぬ母の姿、今ごろどうしているかしら、今すぐにも母の許にとんで行きたい苦しい気持ちで胸をかきむしられるような思いである。これから戻って行けば途中で弾にうたれてしまえば元もこもない。よし、このままあきらめるよりはかに致し方なしと観念する。母をさがして泣き叫ぶ子ども、子どもたちとはぐれて気が狂い、さまよっている母親、この世の者とも思われぬ人の姿、友軍の兵隊や、沖縄人民が入りみだれて右往左往する中を敵の弾丸はようしやなく雨あられのようにとんでくる。何時死ぬかと心はからつぽ、頭もからつぽ、死刑の宣告を待つ身と同じで、夕方になり、夜になると、ああ、今日も一日生きのびられたんだと、大きな溜息をつくのだった。やつと米兵にとらわれの身となつてからも、いつ殺されるか、時間の問題だとあきらめてはいたが、米兵自身が初めに食べてみせてから避難民にお菓子やパンなどを与えるのをみて、生かすつもりだなと、やつと安心するのだった。人伝てに聞

けば、母は百名の病院にはいつていたらしいけど、どこでどんな亡くなり方をしたのか、三十年余りになつて未だはつきりわからない。どんなにつらい思いをして亡くなったかと思えば、この怒りをどこにぶちまけてよいやら、くやしきてもどうにもならないのである。いまいましい第二次大戦のために、この世で一番大事な母をうばわれ、青春もうばわれ、また愛人もうばわれ、心も体も傷だらけにされた呪わしい戦争へのうらみつらみは、一生私の心からはなれないことでしょう。それでも、いまだに一人身でどうにか生きています。

九死に一生をえて

福井 浅子

警戒警報のサイレンは大きく一つ鳴るが、空襲警報は十回連続して鳴らされる。ウー、ウーと大きな音でサイレンが断続して鳴り出すと、電気を消し防空帽をかぶつて、重要な品物を入れたリュックサックを各自背負つて、一斉にもよりの防空壕に駆け込む。その日は七月盆の中日で蒸し暑い日だった。近所の四軒で裏庭にかなり深い防空壕が掘つてあった。中に入るとヒンヤリとする。B29のブーンという鈍い金属性の音が遠く聞こえたかと思うと、あたりが急にパッと明るくなる。ドキッ!! とする。私の家の前を大きな川が流れている。その向こう、市の東にあたるあたりに山があつて、急にパチパチと仕掛け花火のように明るくな

る。アッ!! と固唾をのみ、一時は茫然自失としてこの光景を眺めていた。ハッと我に帰り、一目散に駆け出した。河沿いのぼって橋が焼け落ちないうちに渡らなければならない。家々から逃れた人びとが、バラバラと馳けていく。バーン、ドドーン、と大きな音がして焼夷弾や爆弾が落ちて、市内は、あちらこちらに火の手が上がった。すさまじい勢いで燃え広がっていく。ふり返り見る我が家は、もう火の海にのみ込まれて見えなくなってしまった。怒りと悲しみの入りまじった複雑な気持ちを抱いて、まっしぐらに走る。突然目の前が明るくなった。照明弾だ! と思う間もなく、カタカタ、カタカタと低空飛行の敵機が機銃掃射を始めた。誰かが、伏せろ!! と怒鳴ったので、私は赤い円柱形のボストの前に頭をかかえて、かがみ込んだ……。と、すぐ二メートル後ろに弾が落ちて、道に穴があいた。それからどうして逃げたのかわからない。無我夢中で走りに走った。一緒に逃げた家族はバラバラになってしまった。とにかく山のふもとのお寺へ行かねばと必死だった。炎の中をくぐり、煙にむせながら、寺の前の小川に飛び込んで、はっと命拾いした思いでいっぱいだった。そのとき、チックタタックと置時計の音がする。これは我が家の時計だ! 嬉しくなって近づいてみると、やはり弟が持っていた。一家は奇蹟的に落ち合うことができた。いったい私たちはなぜ空襲されたのだろう、どうして私は逃げなければならないのか、人間が人間を殺し合わねばならないのだろうか。当時中学生になったばかりの私の小さな頭脳は疑問と憤りでいっぱいだった。私が小学校に入学した時はすでに第二次世界大戦の真最中だった。私が一番身近に見聞きしたことは、せんべい三枚一銭が一枚一銭に、さらに五銭と高

くなって、とうとう市場から菓子姿が消えて、兵隊さんのために、お国のために、欲しがりません勝つまでは、と、しんぼうさせられてから、米、砂糖、食糧や衣類等は統制され、配給制度が敷かれ、切符がなければ手に入らなくなったことだ。

昭和十六年には国家総動員令が敷かれ、非常事態宣言が発せられた。戦争はますます厳しくなると、食糧や学用品の配給が次第に少なくなった。戦局は敗色が濃く、南のガダルカナルから軍隊が引きあがるし、北はアリューシャン列島のアッツ島で全員玉碎。学徒動員令が出、二十歳前の若い人びとが神風特別攻撃隊として出撃するころには、ごはん粒が汁の中に浮いているようなおかゆがごちそうになった。青い野菜は少なく、押麦や乾燥芋の粉やさつま芋がわずかに配給されて、主食になった。沼津は、海軍工廠や中島飛行機の工場があり、山の向こうには航空隊の基地があったのでねらわれたのだということを知ったのは、ずっと後のことだ。私は子どもだったので、どうして戦争が起きたのか知らされなかったし、またわからなかった。後になって知ったことだが、当時の言論統制はすごいものだったらしい。体制側の集会以外、三人以上の集会は禁止された。もし違反しようものならすぐに警察にひっぱられた。共産主義者、進歩的な考えを持った学者、教師、指導者は、だれかれかまわず「赤」という名のもとに警察に連れていかれ、非人間的な扱いをされたという。そして拷問にかけられ獄死した人、転向者とか不穏分子として憲兵に目をつけられ戦場に送られた人も多かったと聞く。うっかり英語を使ったり、戦争はいやだ、死にたくない等々、国家の体制にさからうようなことを言おうものなら、特高(特別高等警察)や憲兵に連れ

て行かれる。密告され、非国民というレッテルをはられて戦場に送られた人もいるとか。国民が互いに監視し合っている暗黒の時代だったという。中学一年の時、英語を学び始めていた私は、嬉しくて英語の辞書をむきだしのまま小脇に抱えて学校から帰る途中、お巡りさんから、敵国語を勉強するのは非国民だと言われ、とても驚いた。当時の警察官は腰に拳銃をさげ、威圧的に人をするさんくさそうな目でみて注意したことを覚えている。

各学校ではまもなく英語を廃止し、農業や修身(道徳)に変えてしまった。私の学校では英語と農業とどちらかを選択することで残されたけれど、終戦の年にはついに廃止された。それまで大切にしていた辞書が防空壕で蒸し焼きになっていて、コンサイス英和辞典の形は残っていたけれど字が読めず、頁がひとひらずつはがれ落ちていったとき、涙がボトリと落ちた。なぜ敵国語を学んではいけないのか、むしろ戦争中であるならばよくいに相手を研究すべきではなかっただろうかと思えるようになったのは、それから十年もたってからだ。

小学校という名称は国民学校に変えられた。毎朝、朝礼のとき国旗掲揚・皇居遙拝の後、校長先生が天皇のかわりに教育勅語を読み終わるまで、頭を下げて聞かされていた。修身の時間にはその意味を解説され、暗唱させられ、国歌斉唱もよくやらされた。若い子どもにこのように徹底した軍国主義で、我が国は現人神(あらひと)がみゝ人の形をした神)をいただく神の国である。天皇のために命を捧げるのがお国に奉公する道である、とたたき込まれれば本当にその気になってしまう。いま思い出しても恐ろしいことだと思う。

男は二十歳になると徴兵検査を受けて、甲種、乙種、丙種と振り分けられた。甲種は即時入隊、乙種は予備軍として待機することになっていたが、戦争の激化につれて、かなりの高齢者や丙種の人にもまで召集令状が来るようになった。老人、幼少者、病弱者と女は銃後の守りに当たる。在郷軍人や、軍属(軍隊に準ずる民間産業に関係する人)日赤看護婦にも赤紙が出され、これ以外の人たちにも徴用といって、学業半ばでも学徒動員されたし、個人でも軍に関係のある仕事をさせられた。男はカーキ色の国民服にゲートルを巻き、女もモンペをはかないと叱られた。防空帽と貴重品と救急品を入れた袋を持ち歩いた。戦時体制の厳しさが増した十八年以後は、個人の自由は全くなかったように思う。

当時の情報伝達は、テレビはまだなかったもので、新聞・ラジオか隣組の回覧板だった。もちろんすべて国家統制の下に検閲されていてもはつきりと知らされなかったたので、戦局が後退してアを守る聖戦だという宣伝が行きとどいており、みんななんの疑いもなく信じていた。それほど言論統制はきびしく、挙動不審な態度をするとスパイとみなされて密告された。

八月十五日の「玉音放送」に、私は半信半疑であった。終戦後、価値観が百八十度急変し、事件やまさつが起こった。権力者やその傘下の者たちの立ち回りのあざやかさをこの目で見てしまった。たとえば中学の教師は「天皇のために私たちは死なねばならない。アメリカ兵が上陸してきたら、竹槍で身を守らなければならない。特に女はもてあそばれて殺されるかもしれない、坊主頭にして男装するように」などと言っていたのが、終戦後全く正反

対の民主主義教育を始め、アメリカを讚美し始めたのではない。清純で多感な若者にとって非常なショックだった。それから人は信じなくなり、すべてを疑い、自分なりに理解できたとき前進することを覚えた。このような体験を経た私が、何よりも恐れるのは、言論の統制である。すべての人の自由を保障する憲法を命がけで守らなければ、と思う。

いま私の周辺で

北 垣 由民子

十代後半の少女たちが戦争についてどんな考えを持っているか大きな関心を持っていました。ちょうど昨年末、朝日新聞に六回にわたって「女も戦争を担った? 四十年目の十二・八」が連載されたのを機会に、私が日本史を担当している高校三年生女子百二十名に、太平洋戦争の授業の導入として、これらの記事の感想を書いてもらいました。授業では明治時代以来の日本の植民地主義、帝国主義、また女性問題についてはかなり意識して扱ってきたつもりなので、その反応を知りたい気持ちも持っていました。彼女たちの読んだ記事の要点はつぎのようなものです。

(1) 一九四三年二十歳の三国連太郎氏は赤紙一枚で死なねばならぬことに納得がゆかず、徴兵忌避の逃亡をしたが、母親は憲兵隊にそれを知らせ、一家のため死の戦争にゆくことを強いたのだった。

(2) 口に出して戦争批判を言えぬ当時の女たちは、生きて帰って

ほしいという願いを千人針に託すことしかできなかった。しかし、その千人針にすら階級差があった。

(3) 太平洋戦争が始まると日本婦人の約半数は国防婦人会の会員となり、戦争に協力し活動した。そして現在も、戦争を避けるためには武器をとって国を守らなくてはいけないと考える女性たちもいる。

(4) 当時反戦思想を持ちながらも心ならずも生きるため国策に従った心の痛みを、今も持ちつづけている女性たちがいる。

(5) 戦争でひどい目にあった被害者意識より、むしろ旗をふって兵士を戦地へ送り出したのだから加害者なのだという反省が必要なのではないだろうか。そんな思いから反戦活動が続けている老婦人がいる。

(6) 自身の手で歴史や事実をほりおこそうとしている主婦たちは、「これが現実なのだから」と与えられた状況の中でしか生きようとしないう女性が多いこと、世の中の動きが見えない点など、「過去の戦争のころも今も同じだ」と訴えている。そうならないため、できるだけ家でも政治の話を活発に語り合っている、と結んでいる。

入試を目前にひかえ提出されたレポートは七十五(百二十の内)でしたし、宿題という性格もあつてやや類型的とも思われましたが、精一杯とり組んだものでした。

少女たちはこもこも述べています。——戦争というものは、勝っても負けても貴い命が失われ大きな犠牲がはらわれるから、二度と行なうべきではない。防衛力増加という前に、核兵器の実験をやめ、武器などみな捨てて世界中が仲よくしたいと思う——。

私が一番腹立たしく思うのは八月六日の原子爆弾投下だ。もちろん投下したアメリカにも腹が立つが、それよりも当時の「日本軍」に腹が立つ。——もし戦争になりそうになったら、これからは、女性がその強い生命力で絶対に戦争を破棄させなくてははいけないと思う。——広島や長崎の原爆の悲惨などをみんなが繰り返して学ぶのが、自分の経験からいって一番役立つと思う。——私たちは戦争という体験をしていないから、この平和のありがたさを当然と思い、慣れきっている。だからこそ戦争の悲惨さを語り伝えてもらい、口先で平和を唱えるのでなく、自分の生きて行く道をはっきり見据えてゆくことが、私やすべての若者に必要なことなのだ。——国家ってそんなに大切なもの？ 自分より、自分の子供より、大切なもの？ 私にはそうは思えない。等々。

総合すれば彼女たちは驚くほどの平衡感覚をもっていて、戦争の一方的犠牲者と思っていた彼女たちが戦争の大きな担い手になっていることに驚き、これからは女性こそ、戦争を繰り返さぬため大きな役割を果たすべきだし、絶対、再び戦争があつてはならないと思っています。しかし一方では、彼女たち自身気付かずに、「女の生き方や役割」にすっぱりはまりこんでいることを感じずにはいられませんでした。少女たちの三割以上が三国さんのお母さんの心情に同情し、自分も心ならずも周囲の状況に屈して同じ行動をするであらうと書いています。むしろ三国さんの行為を母親や家族の苦しみを考えないものだと思つた少女（二人）もありました。一割の少女は、平和維持のためには、強い防衛力を持つべきだ（はつきりソ連を敵として挙げた少女も二人あつた）、万一戦争になつてしまつたら、あきらめていさぎよく国に尽くし、

夫が戦争に行つたら女も協力せねばと書いています。また一割の少女が、現在の自分たちの幸せは、戦争で犠牲になつてくれたたくさんの方々の人々のおかげなのだ、当時の女性は辛い状況に耐え、実にえらかつたと感じています。自分たちについては、無力で何もできないから（それゆえ千人針への共感是非常に多い）、せめて秀れた指導者が出てまもつてほしい、また、無力な自分にできることは、暖かい家庭をつくつて外で苦労して帰る夫に「政治」の話などして安らぎを奪わない配慮をすることだと言ひ切る少女たちもあるのです。また数人の少女は書いています。「戦争はきらいでいやでたまらないから、この記事は読みたくなかつた」「もし戦争がおこつたら、私はたぶん家の中にもつて泣き暮らし、お祈りしているのがせいぜいでしょう」と。

すべての少女が戦争に反対しながら、実はその多くが、現在の政策の意図どおりに思考させられています。民衆が国家の動向に無関心であつてはいけなしいとはつきり述べた少女が十人いたことは大きな救いでしたけれど、戦争を防ぐのは、社会を動かすのは、自分たちの草の根運動的なものの積み重ねだという実感がないのです。

この少女たちに、戦争の原因と傷跡を美化することなくしっかり知らせ、また彼女たち一人ひとりの意志を主張することが市民運動（草の根運動）となり、社会をも動かせるのだと分かつてもらうことこそ、私たち女の使命だと思ひました。同時に、「自分たちは何もできない存在なのだ」という無力感を現在の学校教育が与えていることについての深い反省と、一人の教師が語りかける限界を感じた挫折感をもつて、この文を書いておられます。

おじいちゃんの骨

日 野 真 紀

昭和四十一年生まれの私にとって、戦争はずいぶん昔のことのように感じられます。でも、私の母は戦争時代に生まれた人で、その母のお父さんは戦争で亡くなりました。

私のおじいちゃんは戦死しました。

私が「戦争」という言葉を知ったのは、多分、「あなたのおじいちゃんは戦争で亡くなったんだよ」と教えられた時でしょう。その時私は、戦争がどういふもので、なぜおじいちゃんが死ななければならなかったのか、少しもわかりませんでした。私は今でも、戦争でどうして人が死ななければならぬのか、よくわからないのです。

母が四歳の時、おじいちゃんは戦争に行きました。私が母から聞いたおじいちゃんの思い出というのは、幼い子供なら、きっとそういう思い出が残るだろうと思われる、かたぐるまです。母は「お父さん」の肩のつて、きつと駅へお父さんとお別れしに行つたのでしょう。母はそのころのことは、「わからないよ」と言つて、あまり話してくれません。それは母が幼なかつたせいもあるけれど、泣きたくないせいかもしれません。

最近、おじいちゃんの骨について、母から聞きました。「おじいちゃんの骨はね、黒かつたよ」と母は言いました。

そのおじいちゃんの黒く焼かれた骨に、まだ髪や肉やつめやいろいろなものがついていていたころ、母はおじいちゃんのかたにのつていたのだし、おじいちゃんは何かを考えながら戦地へ向かつたのだし、家族を思い出して、遠い日本を見つめたのかもしれない。そして、おじいちゃんは死にました。骨だけが残っていました。骨だけが母たちのもとに帰ってきました。

今まで、おじいちゃんの戦死した戦争を最後に、一度も日本は戦争をしていないけれど、多くの人がとが亡くなってしまふ戦争を、どこかの国ではやっています。

戦争なんて、もう二度とないことを祈ります。戦争と天然痘をいっしょにしたらへんですか？ 私は、戦争が天然痘のように、地球上から消えることを祈っています。戦争なんて、病原菌みたいなもので、多くの人々を死なせてしまふだけのようないふがして、しかたがありません。

同じ人間なのに、どうして互いに殺しあつたりしなければいけないのですか？

戦争なんか大嫌いです。

にらみあつてばかりいても、なんの進歩もありません。自分の家族への、友人への思いは、すべての人びとの心に共通して宿っていると信じます。心の共通点を早くみつめて、その階段をかけあがり、早く握手できるとよいですね。自分の国のことばかりで頭がいっぱいにならない人が、たくさんいたらよいですね。

おじいちゃんの骨は、いつのまにか、土にかわつて、その土の上に、真っ白な花がおじいちゃんをかこんで、あたたかな風にふ

かれてゆれているのが、私には見えます。そして、戦争は永遠にありません。平和が世界中を包んで、世界中の人びとが笑っています。永遠に……。

おじいちゃんへ

戦争が

世界中の人びとの心から消え、

あたたかな風がきつと。

すべてを清らかにしますように。

基地の街に育つて

高 橋 ますみ

間もなく終戦を迎えることになる、一九四五年の初夏、名古屋市郊外の疎開先の田舎町のことです。私は、空襲警報のサイレンを聞きながら、村の分教場から、田んぼの中の一本道を走り続けていました。小学一年生で、南京袋製のランドセルを背負っていました。

上空から急に小型機が近づいてきて、機銃掃射によるすさまじい爆音が、私を本能的に地に伏せさせました。小型機の中に二人の黒い人影を私は本当に見たようにも、錯覚による記憶のようにも思います。私を殺そうとする強烈な意志が私の上空を通り過ぎていくのをただ息を止めて全身で受け止めていました。これが、私にとってはじめての、アメリカ人との出会いです。地を這うよ

うにしていたどりついたわが家では、母が、茫然とつつ立って、「生きて帰った!」と大声を出したかと思うと、ヘナヘナと土間へ座り込んでしまいました。

間もなく、町はずれで、押入れにかくれていた二人の幼い姉妹が、直撃で即死したとの知らせが伝わってきました。それは、私が標的にされた場所から五十メートルとは離れておらず、私が逃げ込もうとした長屋の隣でした。その家は、父親はすでに戦死、母親は、農家へ食料の買い出しに出かけていて留守だったとのこと。「防空壕の中に逃げ込むところを見られたのならいざ知らず、まさか押入れのふとんの中で直撃されるとは」と大人たちはその話で持ち切りでしたが、私が狙われ、はずれたことは、こわくて母にも口にできませんでした。幼い私にはどうしようもなかったこととはいえ、この申し訳なきは、生涯つぐないようありません。

終戦の日、分教場の二重橋の写真は教壇から取りはずされ、担当の女教師から、「敵が占領してきたら、天皇陛下のためにいさぎよく死ぬのですヨ」と言いさかされました。その口調が日ごとに変わってきて、ついに同じ先生から、民主主義を教えられるようになりました。教科書の戦争に関する箇所を墨で塗りつぶす宿題が出て、教科書はほとんど全ページ、まっ黒になってしまいました。このように私たちの世代は、教師も教科書も信用できないことを身にしみて知ることから、学校教育がはじまりました。

分教場の隣のお寺では、緑日に、子どもたちにおおげを施す行事がありました。部活の子どもにまじっていた私にだけ「疎開の子にはやれない」と、法衣をまとった住職さんに拒否されました。帰宅して母にその話をしたら、母が早がてんして「おい

しかったでしょう」と大喜びしてしまつたので、結果的に、ウソを言ったことになってしまいました。食糧難で、育ち盛りの私に何かおいしいものを食べさせたいとばかり思い続けている母の気持ち私はよく知っていました。食べ物うらみは恐ろしいと言つてしまえばそれまでですが、それ以来、甘い物好きの私も、あんこのおはぎだけは食べる気がしません。

その住職は、地域での慈善事業で表彰され、勲章ももつたとのこと。宗教家、慈善、勲章、そういう結構なことばもいつも疑問を持つて受け止めるようになりました。たかがおはぎ一つにおおげさな、と私の執念深さにあきれる方もありましようが、幼い魂への戦争の傷は、こんな形ででも残るものです。私程度の体験ですら、人格形成への戦争の影響は無視できません。もつと強烈できびしい試練を受けた方々はどんなだろうと思うのです。

近くに飛行場があつたので（現在の名古屋空港）、アメリカの占領軍が来てからは、私の住む小さな田舎町は、たちまち基地の街になりました。町の人々はパンパン、彼女ら自身は「オンリー」と呼ぶ若い女性たちが、他の土地からやつて来て、近所の離れや二階を借りて住むようになりました。アメリカ兵士相手の女たちです。肉親や家を失つた敗戦国の女たちが命をつなぐ方策の一つだったと判断できるようになつたのは、私がもう少し大きくなつてからのことです。

彼女たちは、チリチリパーマに原色の服やスカーフ、白いサンダルに、仁丹を連ねたような銀色のネックレスや腕輪をしていましたから、子どもの目にもそれとすぐ分かりました。売春禁止法成立の前でしたから、日本人相手の娼家も街にはありました。そ

この女たちよりも、オンリーは明るくあけつぷろげで、じめじめした感じはしませんでした。

午後三時には聞く銭湯へ一番乗りするのも彼女たちで、大声で自分の相手の「ヘイタイ」のことを自慢しあつていました。湯上がりには、申し合わせたように、強烈な香りの白いパウダーを全身にふりかけていました。その後、私は自分の赤ん坊に天花粉をつけるたびに、彼女たちの姿を思い出してしまつたものです。

私の家の一軒おいて隣の離れに住むオンリーは、とても知的な雰囲気のできれいな人でした。昼間は、簡素な服装で、素顔のまま洋裁学校へ通い、夕方からはびっくりするほど変身して、ヘイタイの相手をしていました。

中学生になつた私は、近所のよろず屋で店員のアルバイトをするようになり、毎朝ヘイタイに食べさせるパンを買いに来るオンリーたちをお客として迎えました。すじ向かいには黒人相手のオンリーが住んでいました。彼女は広島出身で、黒人兵に黒い紋付を着せ、その田舎町の習慣にのつとつて盛大な結婚式をあげました。やがて赤ちゃんも生まれ、普通の日本の新婚家庭と何ら変わらない印象を私は受けました。

大学生になつた私に、最初の家庭教師の口がかつたのは、その黒人との間に生まれたジュンという男の子の相手でした。ジュンは小学一年生、肌が黒く、ちぢれ毛、大きな瞳の、そう明な子どもでした。もうそのころ、ジュンの父親は朝鮮戦争で生死不明、ジュンには、父親の記憶がないようでした。ジュンの母親は、基地内の酒場で働いていました。字は苦手という彼女から、学校へ持たせる「調書」の記入を頼まれ、その時はじめて、あんなに盛

大な結婚式をしたのに法律的な裏付けは何もなく、ジュンが私生児であることを知りました。ジュンは心配げに、各行全部の説明を求め、「ボクの手だけどうして黒いのか書いてないネ」と言いました。後に私の息子たちが、小学校へその種の書類を出すのに、書かれてあることや自分の存在にまったく無頓着なのを見て、幼なかつたジュンの心の痛みを思いかえしています。私がその町を離れてしまったのち、中学生になったジュンが抜群の成績で、しかも大きな体の暴れ者で先生たちをわずらわせていると聞きました。

最近、私の運営している英語教室で、若い講師の一人が、留学先で知り合ったアメリカ青年と結婚したいと言ひ出し、親の大反対に私が調整役をつとめるハメになってしまいました。

「終戦後、米兵の腕にぶらさがっていた女たちのことが忘れられないから、娘はどうしてもやれませんか」とその母親は言いました。娘は、「たまたま彼がアメリカ人だということだけのこと、生まれる前の戦争のことなど持ち出されても納得がいかない」と、話はいつまでも平行線でした。

適齢期を迎えたはずのジュンも、自分自身の存在を戦争の一つの結果としてひきずりながら、この閉鎖社会日本のどこかで、差別と闘いながら生きています。中国を旅したときも、コペンハーゲンの婦人会議で東南アジアやヨーロッパの女たちに出会ったときも、言外に太平洋戦争のにがい思いをそれぞれ持ち合ったまま、女同士のつながりを求めあったのだと思います。

弾丸の撃ち合いで命を落とし捨てて戦争だけでなく、人の生涯や魂に入り込む戦争の罪の深さも、私は問題にしていきたいと思

います。

戦前を手放さない戦後

宮下喜代

昭和二十一年四月十日、戦後第一回の総選挙。私は三十歳になつてはじめて、自分の持つ一票を国政にかかわるもの、として投票しよう、としていました。思えばそのとき、なんと純粹に真剣にその思いをこめていたことか！と、いま、そのときの精神の緊張をおもひおこしますが、それはある意味ではごく自然な興奮でもありました。

私は戦前の昭和史のなかでいわゆる十五年戦争とよばれる長い戦争体制のつづいた時代（昭和六年の満洲事変から日中戦争、そして太平洋戦争）を、いささかの特権ももたないまったくの庶民の中の女として生きてきたのでした。戦争末期の頃の日常は、戦争遂行の権力とそこにつながるもの以外は、男といえども、人間としての能力やはたきでその存在を認められることはなかったようです。// 国のため……// という大義名分による命令の下で責任を果たすことだけが要求されていたのですから……。そして女は、男の欠けてゆく生産力の埋め草であればよかったのでした。非人間状況の極点にきて戦争は終わりました。

その年の十月十一日、占領軍司令官は日本の政府に対して五項目の指令を出しました。

その第一の項目が「婦人の解放」でした。つづけて「労働組

合の助長「教育の自由主義化」「専制政治からの解放」「経済の民主化」とかがげられています。

筆頭にうたわれた婦人の解放。その第一歩が選挙権の行使でした。資料によればこのとき、女性有権者は二千五百万人。その六七％が投票に参加。女性の立候補者は八十三名。その四五％、三十九名が当選しました。

私が一票を投じた候補者、山口シヅエ氏も当選しました。私はうれしかったのです。戦後を新しい希望のもてる民主主義の時代として、素直に平明にうけとっていました。かつては国民の半数でありながら国政にかかわることのできなかった時代の経験をふまえて、女性がその意志を反映させることのできる位置に立った。女と男がいて、子どもも老人もいて、家庭があり、街があり、職場がある。働く日、休みの日があつて、毎日の生活がある。その日常を通じて前後左右のひとたちとふれあい交りあひながら、全体のひとたちの幸福や進歩を考えあつてゆく。人間同士としてごく当たり前のはずのそのようなことを、考えることも、気付かせようとするこゝさえも許さなかつた戦前の不合理は消えさることだろう。国会議員となつたひとたちに、ことに女性議員への活動の期待は大きかつたのです。

すっかりやつてはしい、との期待、励ましの気持ちもあつて、私は一枚のハガキを書いて送りました。何日かが経つて一通の封書が届きました。山口重男、という名前でした。当選御礼の印刷物が一枚入っていました。型どりの文章の活字が並んでいました。その時の失望と怒りを、私はいまも思い出せます。

国会議員として国政にかかわる、ということとは、その議員を支

持した有権者に対して、自身の国政に対する指向を常に明らかにしてゆくという責任を負うことでしょう。そのきびしい自覚に立つはずのひとつが、その公の仕事への出発に当たつて支持者への挨拶を、父親が送ってくる。山口議員は、その行為について何もおもうところがなかつたのでしょう。だからこそ父親がそれをしたのでしょう。父親の名の一枚の紙きれは、女性解放、男女平等、民主主義などとキラキラすることばをふりまいて宙をとんでゆく女性議員を、私のごく低い目線からささげ落させてしまいました。

そのとき、私がひどくそれを氣にしたのは、おそらくあの敗戦直後のはげしい転換のなかで、私のように漠然とした認識しかもたなかつた者にさえ、否応なしに迫ってきた意識の変革が、かなり鮮明に動き始めてきたからだだった、とおもいます。新しい存在をもつた女性国会議員に、父親の挨拶ではない彼女自身の言葉求めた、からでした。

三十五年も経つた今、そのつまらないほど小さなことを思い出したのは、すでにそのときから、こんにちの社会の状況につながる何かの根が途切れずにあるのではないか、という氣がしているからです。

あの混乱とも空虚とも動揺ともしれない夢中のような状況のなかで目覚めを促した五項目の指令の具体化が、天皇の人間宣言、新憲法などの形をとつて、新しい時代を創り出す基本原則として私たちのものになつたはずでした。

ただ、極端な変動の一時期に、つまり、神であつた天皇がこれからは人間になるのだ、とおごそかな声で何かを読みあげても、それは私の身体が痛かつたり、かゆくなくなつたりすることではない

ので、ああ、そうか、と思うだけで過ぎてしまふ抽象的な価値の転換にすぎず、理性への鋭い刺激にはなり得なかったのだとした。

それは私自身、初めて、女も男もおなじ人間なのだ、と気づいたことが、やはり外側の観念であつて、さらに一步深く、人間としての自分自身を見る、という視点をもたなかつた。自立、あるいは自治の意識は欠けたままでいたからだ、とおもいます。

新憲法の理念は、いつの間にか、理想として額縁におさめられて高い空間にかかげられているだけのものになつてしまつてゐる。私は時々それを仰ぐ。そして手足は、生まれたときから培われて身体にしみこんでしまつた教えのとおりに動かしただけが動きよい。つまり、現実の生活の必要をなんとかしてでも求めなければならぬところにいる日常では、ものを考えるということとはなかなかできにくいことなので、そのとき、天皇制とか国家とか政治の上層権力とか、かつて民衆を支配した手は、そのような戦後の大状況を知りつくしていたのだらう、としか思えないのです。

もちろん戦後が否定的な要因ばかりだつたはずはありません。

むしろ本質的な意味での民主主義の自覚が一般のひとたちのなかに働いた力が、朝鮮戦争を通してアメリカとつながる日本の政治権力への批判の目を開かせました。砂川の基地反対闘争、文部省の勤務評定反対、警職法反対、さらに日米安保条約が国会内に警察力を導入しての強行採決という事態に対しては、全国民的など言つてもよいような反対運動が組まれたのでした。そして時の岸内閣を倒したのでした。アメリカのベトナム戦争に対しても、批判は強いものでありました。さまざまな目的をもつた運動のグループが、それぞれの場で自主的につくられたのもこの頃までが一

番多かったようにおぼえています。

昭和三十五年の夏、岸のあとを受けた池田内閣は経済の高度成長をうたつて発足し、それから二十年間を経た現在まで、ひたすら成長なのだ、という実感は、街角で小さな店の商いをしている私などにも、大メーカーのセールスマンが店先に姿を現わすと、会社で教育されるそのままでのせりふをしやべりまくる、そのことで察しがつくほどののです。それはまさしく、かつての、御国のため意識と同質の、会社のための粉骨碎身を思わせ、〃会社は永遠です〃という言葉ののこして自殺したあの大会社の役員は大義に死すことにある誇りをもつていたかもしれない、とさえ私に思わせます。そのことは骨の髄までたたきこまれた戦前の日本人のお上に従う意識をそのまま下敷にして成り立っている、と考えると、そんなに見当ちがいでないでしょう。

新しい時代はついに創り得なかつたようです。地球上の多くの国が、錯綜する諸条件のなかにあり、日本もおなじように無数の問題をかかえて存在している。体制権力の側は、何よりも前例をふまえ、秩序づけての運営をはかる。やりやすく面倒が少ない方法、その陰には、権力がかつた力の誇示も見えないわけではない。私はこの国の住民のひとりとして、そのことに無関心でははいられないのです。

私たちの国は、その目標に何をもっているのか！ それを問いつめる必要はないだらうか！ と私はおもっています。

(二十日たらずの公募期間、賞金なし、の条件にもかかわらず、寄せられた百十五篇は、選ぶことが不遜に思われるほど、どれも心打つものでした。紙面の都合で二十一篇しかご紹介できないのを残念に思います。編集部)

従軍看護婦と従軍慰安婦

大原 立

戦争は、あらゆる人間性を剝奪した

人間性の完全な剝奪なしには

戦争は遂行し得なかつた

赤紙一枚で軍隊に駆り出された男たちに

最初に課されたのは

徹底的な人間性の破壊だった

初年兵は、いもむしと化した

*

版画家浜田知明は軍隊五年を回顧して言う

敵重に張りめぐらされた

目に見えぬ鉄格子の中で

来る日も来る日も

太陽の昇らない毎日であった。

僕は自殺のこのみ考えて生きていた。

一日は実に一年の長さを感じられた。

傷めつけられ押しつぶされて

死にかかつていた生命は

夜になると目を開いた。

弦月が中天に懸り

はらわたに沁みるような驢馬の嘶声が

夜のしじまを引き裂き

曠野が谷底のような静寂に眠る時、

その時だけ僕は生きていた。

埃にまみれ汗にまみれ精強無比の皇軍が

ナポレオンの如く、ハンニバルの如く

砲を載せ弾薬を積んで嶺々を越えた。

疾風枯葉を捲くが如く

部隊の通過したあとには何物も残らない。

遺されたものは砲火の煙と牛の残骸だけだ。

竊盜、強盜、強姦、放火、殺人

ミケランジェロの彫刻のように

素晴らしいポーズで死んでいた男たち、

衣服を剥ぎ取られ恥部を天に晒け出して

転がされていた女たち。

黄土地帯の洞窟の深い蔭、

砲声、銃剣、軍馬、車輪、

目を閉じると軍靴を踏鳴らしながら

暗闇の中を大部隊が通過して行く。

何一つ明るい希望はなかった。

いつ果てるとも知れぬ戦争と

納得できぬ戦争目的と

抑圧された自由の屈辱から

自殺への誘惑が

間歇的に自分を襲った。

*

男たちの絶望的な殺戮を

銃後の女たちは知らなかつた

生きて還れの思いを千人針に托し

軍靴が踏みにつつた町々の地図に

小さな日の丸の旗を立てて

武運長久を祈った

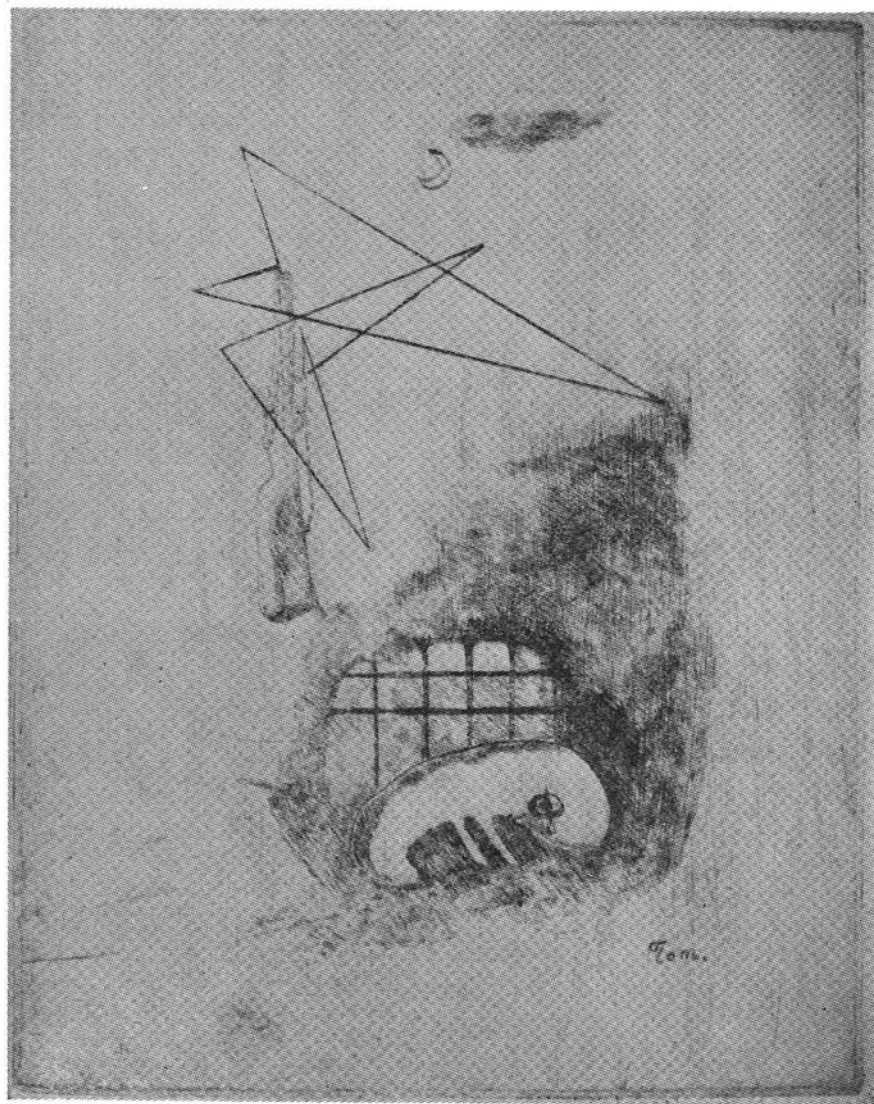
知っていたわずかな女たちがいる

軍隊に組み込まれ

軍の一部にさせられた女たち

からだも心も軍と一体にされた女たち

従軍看護婦と従軍慰安婦



初年兵哀歌（芋虫の兵隊）1950 浜田知明

人間性を剝奪しぬいた兵士たちに
軍は「娯楽所」「慰安所」を用意して
戦塵の勞をねぎらった

長い行列で待つ写真がある
残された「規定」がある

軍人倶楽部ニ関スル規定

一、防備地区内軍人倶楽部ハ地方官民ニハ一

切利用セシメザルモノトス、又軍人軍属

ハ地方慰安婦ノ利用ヲ嚴禁ス、

一、軍人倶楽部ノ使用料左ノ如シ

將校 下士官・軍属 兵

時間 四十分 四十分 四十分

料金 三円 二円五拾銭 二円

一、營業時ハ毎日十二時ヨリ二十四時迄トシ

泊込ハ一般ニ之ヲ禁ズ、但シ毎月八日ハ

休業日トス

一、將校以下ノ倶楽部使用時間左ノ如シ

兵 十二時ヨリ十七時迄

下士官 十七時ヨリ二十時迄

將校 二十時ヨリ二十四時迄

附則 軍紀風紀ノ維持取締ニ関スル件

(使用者)

一般ニ營業婦ノ共有觀念ヲ徹底シ占有觀念
ヲ嚴禁ス

(營業者)

一、業婦ハヨク使用者ノ立場ヲ理解シ何人ニ

モ公平ヲ第一トシ使用者ヲシテ最大ノ御奉

公ヲ為サシムルコトヲ念願シ如何ナル事情

ニ依ルモ身ヲ誤ラシメ御奉公ヲ欠カシムル

ガ如キコト絶体ナキ様万事細心ノ注意ヲ以

テ取扱フモノトス

一、營業婦ハ素リニ柵外ヲ散歩シ幕舎又ハ作

業場等ニ立入ルヲ禁ズ

長い行列の兵士たちに「尽くした」のは

はじめは北九州から求められた

「身体強健な売春経験者だった

前渡金千円 食費完全支給の好条件での

「報国」の機会を負しい女は素直に感謝した

十分か十五分で終わったとです

待ちきれんごとあつて

本番にならんうちに終わる人も多かいです

女たちは「天皇陛下の御下賜品」として

「物資」扱いで船に積まれたが

長い行列は容易に解消しなかった

「御下賜品」の補給先は朝鮮に向けられた
「女子挺身隊」未婚 十八歳以上

「若い娘むぎの楽な仕事」と

サーベルを鳴らす警官が村長たちと

貧しい村々の貧しい処女を求めた

その数万万といひ 七万と伝える

「御下賜品」は侵略地の女を

兵士から守るための御仁政ではなかった

強姦や放蕩は明日をも知れぬ戦いの常

そのゆえの性病の蔓延 兵力の低下を

恐れたからにすぎなかった

洗たくと掃除ではない屈辱の仕事で

四畳半の個室で一日数十人に尽くし

將校用には日本人 兵には朝鮮人と

出生のゆえに階級まで指定された

用済ノ上ハ直チニ退室スルコト

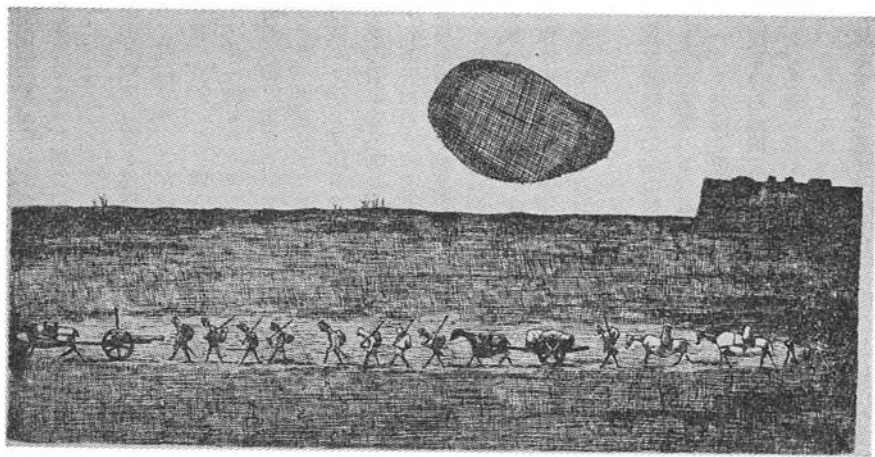
サツク使用セザル者ハ接婦ヲ禁ズ

史上に例のない軍隊による管理売春は

後に民間業者に委託されたが

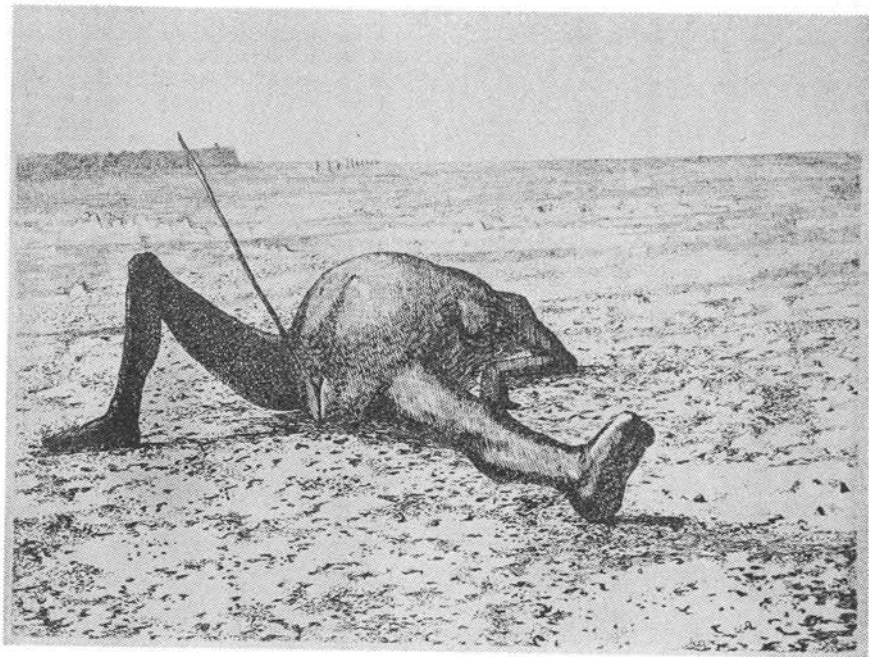
だまし連れ去られた女は

ついに帰郷できなかった



初年兵哀歌（ぐにゃぐにゃした太陽がのぼる）1952 浜田知明

初年兵哀歌（風景）1952 浜田知明



「報国」の機会に

勇躍出で立った別の女たちがいる

兵士ノ軍陣ニ臨ミ傷病ヲ受クルハ

各々其國ノタメニ尽セルニテ

彼我ノ別ナクソノ憐ムベキコト他ニ比類ナシ

ソノ最モ憐ムベキモノヲアマネク救イ助ケテ

慈愛ノ情ヲ表スモノナレバ

予イカデカ喜バザラン

諸員ヨクコレヲ勤メヨ

皇后令旨に自らを「皇后ノ股肱」と信じ

あこがれの白衣にきりりと身を包んで

敵味方あまねき慈悲をと 乗り込んだ病院船

たどりついた陸地の病院

屋根いっばいの赤い十字に

爆弾は雨と降り注いで

乙女たちは肉片となって空を舞った

白衣を仮装した兵の輸送船団

赤十字の屋根の下の軍司令部

ジュネーブ協定悪用の指導者たちを知らず

人民を守らぬ国とも知らず

国を守る熱い思いに

花のさかりを散った殉死者たちの

今残る写真は若くすがしい

一、博愛ニシテ懇篤親切ナルベキコト

二、誠実勤勉ニシテ和協ニカムベキコト

三、忍耐ニシテ寛裕ナルベキコト

四、志操堅実ニシテ克己自制ニカムベキコト

五、恭謙ニシテ自重ナルベキコト

六、謹慎ニシテ紀律ヲ重ンズベキコト

七、勇敢ニシテ沈着ナルベキコト

八、敏活ニシテ周密ナルベキコト

九、質素ニシテ廉潔ナルベキコト

十、温和ニシテ容儀ヲ整フベキコト

きつちりと髪を結び上げ目もと涼しく

名も知らぬ男たちのために

小さな肉片となった人びと

飛び散った人は幸せと

炎熱と飢餓とゲリラの野に

傷つき病んだ兵とともに遺棄された者は言う

巻く包帯 つける薬もなく

傷口のウジ真黒に群がるゴキブリを追うだけ

はだ身離さぬ手紙も日記も

ついにはちぎりちぎって落とし紙とし

生理の停止に感謝した日々だったと

南方派遣の三人に一人が戦死し餓死した

最年長明治十七年生まれ最年少昭和四年

弔慰金最高額は

婦長三千六百元 看護婦二千五百二十円

恩給 年金なし

子あり夫ある身も

「赤紙」に感涙し

召集忌避者は唯一人なしと日赤社史は誇るが

乳飲み子を置いて「出征」した人の

胸を裂く手紙も残されている

看護婦生徒ハ卒業後二年間病院ニ於テ看護婦

ノ業務ニ服シ、後二十年間ハ身上ニ何等ノ異

動ヲ生スルモ 国家有事ノ日ニ際セハ 速カ

ニ本社ノ召集ニ応シ 患者看護ニ尽力セシコ

トヲ誓フヘシ

生まれては父に 嫁しては夫に仕えて

あらがうすべを知らなかった大和なでしこは

結婚・妊娠・出産、あらゆる身上の異動に

母性の保障も求めず

兵役の義務は「男子のみ」とも知らず

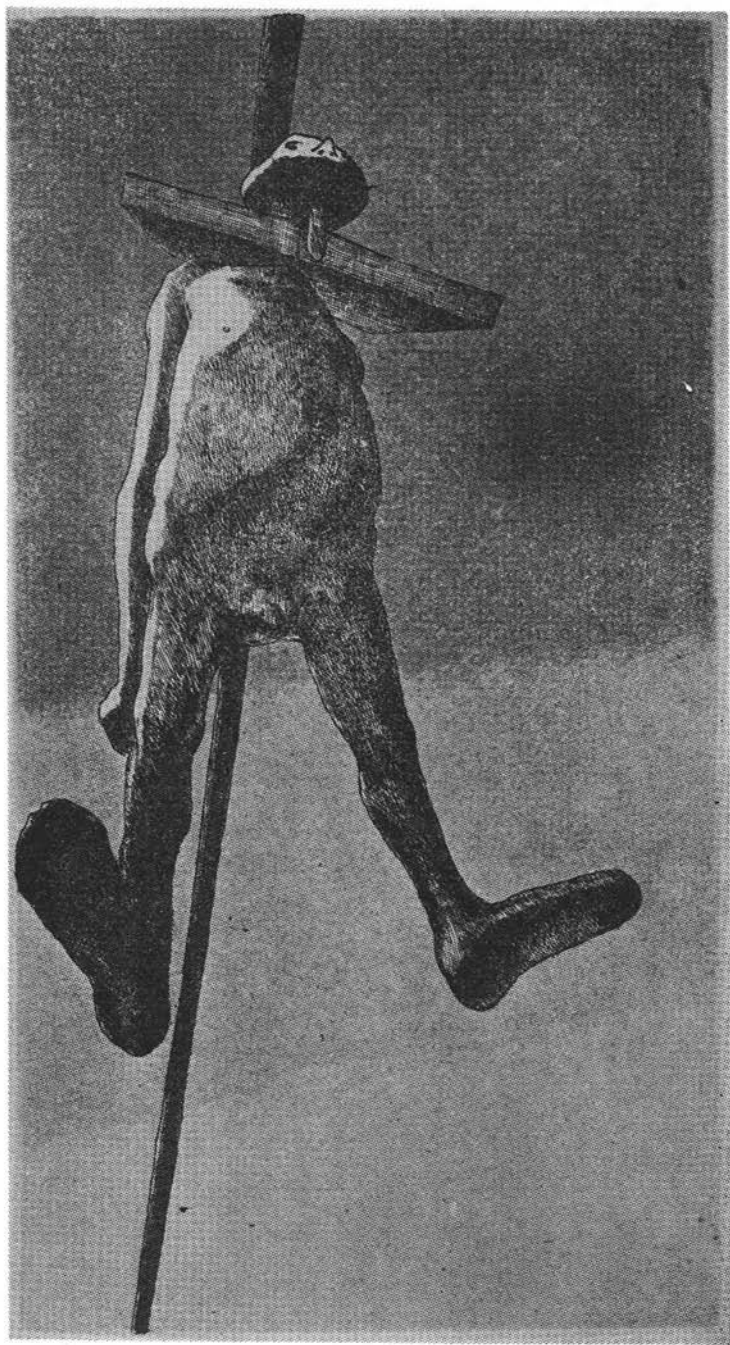
尽くすべき国と信じて疑わなかった

朝夕奉誦した教育勅語は尽忠報国を刻んだ

一旦緩急アレハ義勇公に奉シ

以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

国は彼女たちを靖国に祀ってわずかに報いた



絞首台
1954
浜田知明

九死に一生を得て還った祖国は「戦争協力者」に冷たく

働くに職なく 住むに家なく

嫁ぐべき男たちは戦場の露と消えていた

酷寒、炎熱、マラリヤ、ゲリラの野に

足弱く武器なき看護婦を遺棄した国は

恩給・年金、あらゆる保障から女を遺棄した

恩給法第一条はその対象者を

「公務員及びビソノ遺族」に限り

雇用者を含まない

病を破片を体内に宿した女も

傷病手当の対象にはならない

「抑留中ニツキ証明困難」

法は厚い壁を用意していた

運動三十余年 ようやく恩給権を得たとき

四万人中の受給資格者は千人にすぎなかった

戦時勤務一年は三年の加算

男の内地勤務は加算して通算されたが

病院船の船中の期間は計算からはずされ

寄港先の二、三日だけが対象とされた

最高二十年の抑留者の恩給年額三十万

軍人恩給の最低は年二十七万五千円

傷病手当は別に年二百四十一万七千円

看護婦恩給の大半は年額十万前後にすぎない
最年少者が五十の半ばを過ぎ いま彼女らに
社会保障は ない

請願運動者たちに世間は冷たかった

民衆は戦争加担者とあざけり

政治家は四万票を物の数とせず

かつての仲間は物乞いの必要なしと憤激した

死線を越えた一人は小さな声で言う

ほしいのはお金ではありません

純粹無垢の思いを利用しつくされた女たちに

ご苦労さまの一言がほしいだけです

二度とふたたび戦争をしないために

私たちの存在を知ってほしいだけです

生きて還った看護婦たちの

自費出版が相ついでいる

戦後三十六年胸の奥底深く耐えた思いを

残る余生のうちに書かずにはいられないと

生きて還った慰安婦たちには

証言も手記も出版も恩給もない

その数も不明なままに集められた

「御下賜品」たちは

どこへ散ったか 生きているのか

それすらも定かではない

ようやく見つけた一人の沖縄のハルモニは

さとうきび畑の雨もる小屋で

貧しすぎた朝鮮よりは楽しかったと

ぼつりと語るが

真実は誰も知らない

敗戦の原色の街 駐留軍の施設に

日本の良家の子女を

「鬼畜」の好色の目から守るために

送り込まれた女たちの多くは

かつての「御下賜品」との伝えもあるが

真実は誰も伝えず誰も語ろうとしない

語られない知られない大きな部分に

戦争の真実は最も深く秘められていた

風化する歲月は

深い土の下の真実を空洞化するが

語られない知られないもっと大きな部分を

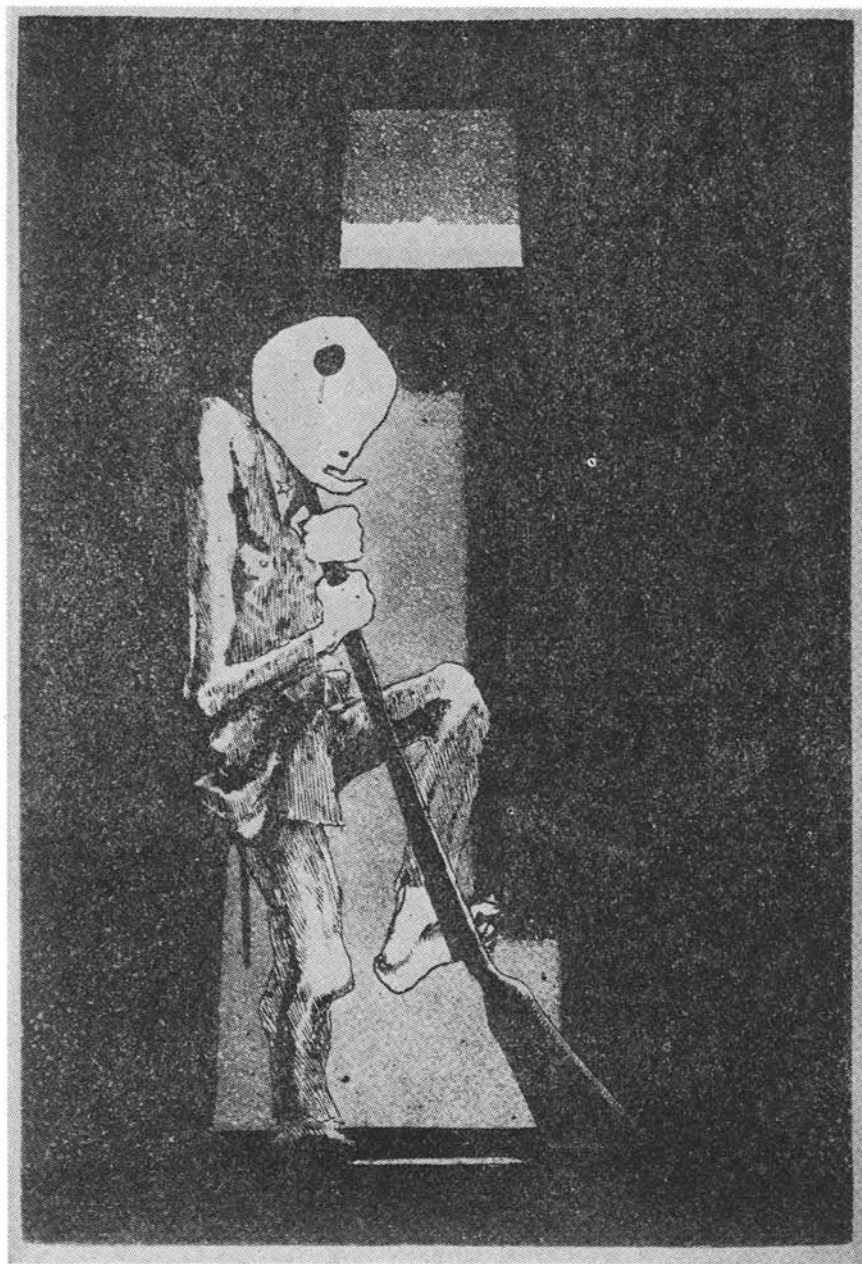
掘り起こしたずね探して

号泣する声を聞く

戦争はあらゆる人間性を剝奪した

人間性の剝奪なしには戦争は遂行し得ず

戦争準備は人間性の剝奪から始まった



初年兵哀歌（歩哨）1954 浜田知明

あらゆる女の力を結集

12・7

報告



「戦争への道を許さない 女たちの集会」

「どんなに戦争に反対したいと願っていても、具体的な行動として表わさない限りは、戦争を阻止する力とはなりえません。いまこそ女性たちは、高々と戦争反対の旗じるしをかかげ、あらゆる立場をこえ、心をひとつに力を合わせ、戦争への道にくみさぬことをはっきり意志表示すべきときではないでしょうか」

こんな呼びかけで、昨年十二月七日、「戦争への道を許さない女たちの集会」が渋谷の山手教会で行なわれた。戦争を女の視点で見直し、女の手による反戦をという、田中寿美子さんの呼びかけに、たちまち百数十人の女たちが呼びかけ人を名乗り出、「二百人も集まればいいところでしょうとデモを許した警察側の思惑(司会者の話)を超えて、会場は定員八百名を六百名も越す盛会となった。

若い女も、小さな子の手を引いた女も、そして老いた女も、「決して戦争を許さない」の気持ちをついに、会場を、道路を、埋めつくしていた。冒頭の講演は、本誌巻頭に収載したとおりだが、澤地久枝さんのあいさつのほか、会場からの発言も相次ぎ、会場はむせ返るような熱気に包まれた。当日の会場のアンケートに、その模様を偲びたい。

あいさつ

澤地久枝

こんにちは、澤地久枝です。今日はたくさんの方々がお集まりくださいます、お互いに胸から胸へ熱い感情が通いあってゆくような感じがいたします。呼びかけ人の一人としてお礼を申し上げます。

六月の総選挙後、自民党政府は「国民から一〇〇%の付託をされた」と言わんばかりに、きわめて露骨な反動攻勢をとりはじめています。それは露骨というより非常に巧妙で、たとえば一昨日でしたか、閣議決定として、「自衛隊は志願制にせよ。徴兵制を施行することは、憲法違反である」と麗々しく発表して、新聞もそのとおり報道しております。しかし今日、もうさわさん、土井さんのお話にもあったように、存在そのものが憲法によって認知されていない自衛隊が、なぜ「志願制にせよ」とか、「徴兵制にせよ」という議論の対象になるのでしょうか（拍手）。

私たちは、もちろんどんなことがあっても徴兵制を阻止しなければなりません。しかし、既成事実がつみあげられ状況が悪くなつてくると、「徴兵制は憲法違反である」という政

府には、もしかしたら脈があるのではないかというふうに、まことに巧妙な言葉のレトリックにひっかかりがちなところがあると思います。こういう徴兵論議そのものが自衛隊強化の土俵の上にあることを考えるべきなのですね。物事の本質、根本というものを引きわめながら、私たちは二度とだまされないようにしたいものだと思います。日本が軍事大国となり戦争への道を歩むことを阻止するという気持ちをしつかり固めてゆきたいと思います。

今日、これだけの女の人が集まったこと、それから勇気をもっておいでくださった男の方たちに私はお礼を申し上げます。女だけではとてもこの闘いには勝てません。私は、絶対不退転の気持ちで戦争への道に立ちふさがり、勇気をもっている一番強力な同志は女であると信じますけれども、同時に、志を同じくする男の方たちと連帯しなくては、どうして闘いぬくことができるでしょうか（拍手）。これからの闘いは、男、女ということで分けるのではなくて一緒にやっていきたいと思っています。

今ちょっと会場を見回しましたら、あの特高警察によって虐殺された小林多喜二の弟さん、三吾さんもみえていらっしゃいます。そ

れから、私の自宅に届きました今日の集会を支持する手紙の中には、護憲連合の代表の一人である元陸軍中将の遠藤三郎さんから「今日の会合の成功を心から祈ります」というのがあります。この方は現在八十七歳、まもなく八十八歳になりますが、「軍事亡国といわれるように、軍備をもつ国は必ず滅びる。日本は軍備をもつのに最も不適当な形の国である。軍備というものは全く無意味である」ということを生涯叫び続けて自分は死ぬのだ」と言っていられっしゃる。遠藤さんは、私の一番年長のボーイフレンド（笑声）だと思っていますが、そういう支持もきています。

一人一人の存在は本当にささやかであり、私のできることもささやかだと思っています。しかし、みんなが心の底に大事にもっている気持ちをこらやつてぶつけあつていけば、必ず大きな力となります。反動政府の露骨な意図を手厳しく告発して、その野心をねじ伏せれば、私たちの心から望んでいる人間らしい平和で幸福な生活と社会を、必ず守りぬいていけるという確信を、今日ここへ来てしみじみと己れ自身に確かめました。これから一緒に、ずっと今後の長い道を歩いてゆきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

アンケート を集計して

総括

(1)千人を越えたことに対する驚きと感動が
集会当日は八百人定員の会場に千四百人ほどの人が詰めかけ、中に入れぬほどの混雑ぶりだった。こうした盛況に参加者の多くから驚きと感動の声が寄せられた。二、三の人からは、「千人集まったとは言え、これっぽっちで喜んではいけない」という指摘があったものの、会場での多くの人びととの出会いには参加者のほとんどの人にとってはやはり感動的で力強いものであったようだ。

このことは、参加者の一人ひとりが、その生活の場で、周囲に右傾化の波をひしひしと感じており、それに抗して声を上げていこうとするとき、地域で、あるいは学校や職場で、さらには家庭の中ですら孤立無援の思いを抱いていたということを物語っているのではあるまいか。「こんなにも同じ思いの人がいる

ことを知り、勇気づけられました」という回答がそれを裏づけていると思われる。

(2)集会など初めてという普通の人が大半

党派や団体ではなく個人の資格で百八十八人の女たちが呼びかけ人となって女たちへ呼びかけたことが、共感を呼んだ。普通の人びとの平和行動というイメージが、集会やデモなど初めてという人びとに、安心感を与えたことも見のがせない。

集会に先だって、朝・毎・読の三新聞にこの集会のことが大きく取りあげられ、澤地久枝、高良留美子、吉武輝子の三氏のアピールがそれぞれに読者の心の琴線に触れたのである。『新聞で読んで、すぐる思いでかけつけました』に代表されるような思いを込めて参加した主婦たちが多かった。

(3)「女も戦争を担った」を受けとめる姿勢

戦後三十六年たった今日、戦争被害者としての女の立場だけではなく、国家に従順に組み込まれていったという意味で戦争の担い手としての女の立場が検証されようとしているが、そうした視点をも盛り込んだこの集会が、女たちの反感を招くどころか、それゆえに人びとの気持ちを惹きつけたようだ。これは注目しに価する。必ずしも女の集会といった種類

のものに参同しない層の人びとも、こうした問題意識から、女だけの集会に大いなる期待をかけて参加した様子が察しられる。

(4)年配者と若者が互いに相手を再評価

戦前戦中生まれの人と戦後生まれが、ほぼ同数集まったこの集会で、新旧兩世代が互いに相手を「思っていたより頼もしい」と評価している。戦争への危機感などみじんも持ち合わせていない若者、苦勞話ばかりで戦争の本質を見きわめられないダメな母の世代といった決め込みが氷解したかのような信頼の言葉が双方のアンケートにあふれている。

『世代の壁が取り払われた時』であった。

(5)六、七十代の人に戦争を見つめる確かな

目

同じ戦争体験者でも、七十代六十代の人と五十代四十代の人とでは、戦争中にあゝ戦争をどう思っていたかということにずいぶん差があることがあぶり出されていて興味深かった。

五十代四十代の多くが哀しいまでに純粋な「軍国の少女」だったと回想しているのに対して、七十代六十代は比較的冷静に戦争を見つめていた片鱗が受けとめられる。戦争を「仕方のないもの」として受け入れながらも、そ

ここには、理不尽な時代を生きさせられることへの怒りがあった。七十年代六十代の人には太平洋戦争突入の頃にはもう成人しており、一応の考え方を確立している年齢であった。日本の教育の歴史は明治以来国策教育が基調であったとはいえ、まがりなりにも大正デモクラシーに洗われた時代の教育と、治安維持法公布後の昭和初年から満州事変のころにかけて音をたてて急傾斜していった軍国教育とは比べべくもない。この戦前のファナティックな教育を幼い日々徹底的に頭に叩き込まれたいまの四十年代五十代とその上の世代では違いがちなのは当然と言えは当然であるが、昨今の学校教育に対する急激かつ執拗な容喙を思い合わせるとき、この点に改めてスポットを当てて人びとの注意を喚起したいと思う。

アンケートの回収方法

十二・七集会の当日、受付でプログラム、アピール文とともに入場者に配布し、退場の際に出口で回収した。予想をはるかに上まわる参加に、七百枚用意したアンケート用紙は開場数分後に底をつき、やむなく、司会者が壇上から、わびるとともに、せめて住所氏名

だけでも紙切れでよいから書いて、アンケート回収箱に入れてほしいと呼びかけた。

アンケート

- 1、この集会を何で知りになりましたか。 a、新聞 b、テレビ・ラジオ c、ビラ d、知人 e、その他
- 2、あなたが今いだいていらっしゃる平和への危機感とはどのようなものですか。
- 3、右傾化を象徴するような出来事、話題がもし身近にありましたら、教えて下さい。
- 4、今後もこのような運動を続けていくにあたって、あなたの御意見、御提案を、お聞かせ下さい。
- 5、今日の集会についての御感想を

※ 御協力ありがとうございました。もしよろしければ、下の欄にも御記入下さい。

住所 氏名	年齢
----------	----

アンケートの回収率

および名前記入の紙切れ

・回収されたアンケート(五一%) 三五八人

・アンケートの用紙の無かった人

(入場者一五〇〇人とするとアンケート用紙無しの人の五五%)

住所氏名記入の紙切れ

名刺

記帳してくれた人
他人のアンケート用紙に連記

計 八〇〇人

回収されたアンケート三五八通のうち、無記名のものは、わずかに二四通だけ。つまり回答者の九三%が住所・氏名を覚えてくれたわけだが、アンケートの回収率とともに記名者の率が高いのも、この種の集会としては異例のことである。『次の集会の案内や、ニュースのようなものを送って下さい』という添え書きが多いということ、アンケート用紙以外の方法で住所・氏名を知らせてくれた人が四四二人もいたということは、これからもこの運動に何らかのつながりを持っていきたいという意志の現れと受けとめるべきだと思われる。

参加者の職業など

アンケート用紙では、住所、氏名、年齢の

ほかはあえてきかなかったが、その内容から、学生、主婦、教師、公務員、民間企業勤務者など、幅の広い参加者像がうかがえる。

地域

参加者は、東京おとびその近県にとどまらず、香川県、名古屋市、金沢市（四二歳）、小諸市（七〇歳）など広範に及んでいる。なお、アンケート等には名は見られぬが、沖縄から仲間のカンパを携えて当日かけつけた五〇代の人や、新潟市からの参加者もあったという、受付や会場の人びとの証言もある。

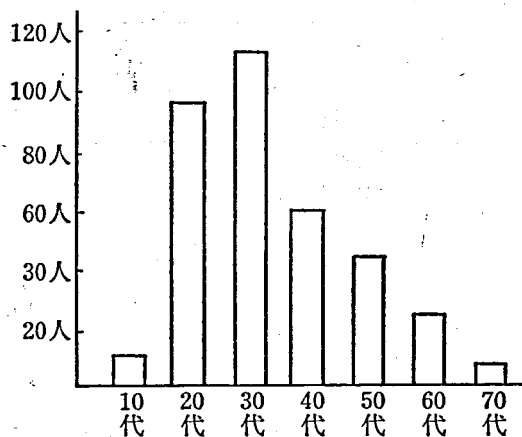
アンケート用紙への回答状況

自由記載欄の多い、いわゆる答えにくいアンケートであるにもかかわらず、また、非常に短い、しかも時間を凝縮したような集会のただ中で書かなければならないという困難さにもかかわらず、実に多くの人がきわめて積極的な記入をしている。自由記載欄に何らかの意見や//思いのほど//を綴ったものは、三〇五通にも達し、全回答者の八五%にも達した。書ききれずに欄外にはみ出して書いたもの

のも多く、熱心さに圧倒される例もしばしばであった。

自由記載欄に書き込んだ人	三〇五人
無記入だった人	一五%
五三人	八五%

アンケート回答者の年齢分布



三〇代を筆頭に、二〇代、四〇代と続き、三〇代をその山に、変形ピラミッド型を形成している。なお、終戦の年である昭和二〇年生まれの三五歳を境に、戦前および戦中世代と、戦後生まれとわけてみると、前者は一五八人（不明者を除いた全回答者の四七%）、後者は一七六人（同様に五三%）となり、あい半ばしているとみなせる。

回答の年代別特性について

(一)、記入の度合や、その訴えんとする熱意においては、年代間にその差は見られない。・「こうした集会に来るのは初めて」と言う人も、どの年代にも、同程度いる。

年代	人数
70代	5人
60代	23人
50代	33人
40代	58人
30代	(39) (42)* 111人
20代	95人
10代	9人
不明	24人
計	358人

(※) 三〇代のうち、三五歳以上の人は三五歳の四人を含めて計三九人

(口)、しいて、その特性をあげれば

△七〇代▽

・小諸市から駆け付けた七〇歳の人、駅頭で當日ビラを手にしてその足でやって来たという同じく七〇歳の人に代表されるように、きわめてその危機感が高い。

(例)・「再び戦争はさせまい。命をかけても平和を守らなければ、久し振りに言論の自由を見て、生きる喜びを感じました。」

(世田谷区 七三歳)

△六〇代▽

・戦前、戦中を通じて正しい情勢分析をしてきた確かな目がある。
・若い世代が多数参加していることに驚きの声。そして「力強い」と喜ぶ声が多かった。

・新聞やテレビにうつし出される世相に、暗たんたる気持ちを目々いだいているといった様子が回答に色濃く出ている。

(例)・「戦前の経験からいうと、戦争はある日突然やって来るのではなく、じわじわとその布石が権力によって打たれるのです。いまその布石が確実に置かれているのを感じ

ています。

(杉並区 六四歳)

・「キナ臭い! 経済危機、右寄りの意見の横行、昭和初年の頃を思い出します。」

(英城県 六六歳)

・「ダブル選挙庄勝後の自民党の動き、余りにも恐ろしい。一部野党の動きも恐ろしい。徴兵制発言などのあった場合は、ひとつひとつそのつど私たちが潰していかなければ戦争への道を進んで行く。それにしても、今日は若い女性が多くて素晴らしい。」

(保谷市 六七歳)

・「何の抵抗もなく夫を沖繩に送って、戦死させた私は、今日のこの会を三五年間待っていました。」

(大田区 六三歳)

△五〇代▽

・戦争体験者の持つ切実さが、回答に反映している。

(例)・夫は九死に一生を得て助かりましたが兄は戦死、平和な老後を親の無いお子さんの手助けでもしようかと思っていました。それともさることながら、このようにもって大事な戦争を許さないための運動を手伝いたいと思いました。(多摩市 五八歳)

・私は「軍国の母」にはなりたくない。

(水戸市 五五歳)

・六〇年安保以来の何十年か振りの参加です。これを機会にまた動き始めようと決意いたしました。

(目黒区 五六歳)

△四〇代▽

・地域での活動が一番活発な世代ということもあって、地域社会での一般の人びとの保守化を敏感に感じとっている。

・学校教育(小、中)への危機感が強い。

・第一子のおときには行なわれなかった国旗掲揚や君が代斉唱が、第二子のおときには義務づけられている、といった具体的指摘が多かった。

・集会の日の感動を、地域で、みずから広めるという積極的な姿勢がある。

・年代的にも、もろさわさんの話がもっともアピールした。

(例)・PTA活動ぐらいにしか出たことのない私ですが、思い切って参加して本当によかった。

(練馬区 四二歳)

・来年の同じ日にはこういう集会を持つのもっと抵抗が大きくなっているかも知れない。今ならまだ間に合うかも知れないとい

う思いで今日来しました。

(世田谷区 四八歳)

・家を出るとき武者ぶるいをして出て来ました。
(杉並区 四一歳)

・地域でだんだんものの言いくくなる雰囲気、毎日、いま何とかしなければと思ひ暮らしていた主婦です。新聞での呼びかけにとびつく思いで参加しました。
(渋谷区 四五歳)

△三〇代▽

・子育て中の家のなかで、不安をつのらせていた人たちが参加。「参加して本当によかった」という実感がこの層に一番強いようだ。

・参加者の多さに、ほとんどの人が驚き感動している。

・幼稚園教育に教育勸語がとり入れられ、集団管理の「右向け右」方式が強められることを心配している。

(例)・毎日、子育てに追われていますが、不安で仕方がありませんでした。これから私のようなものにもできる運動をお願いします。
(横浜市 三一歳)

・夫の「行くな」という言葉を振り払って参加した。
(田無市 三〇歳)

・子ども三人をかかえて身動きできませんが生活の場でできることから抵抗していこうと今日思いました。
(浦和市 三三歳)

・毎日不穏な世の中に不安を抱きながらその思いを表わす場所が無かったわけですが、この集会を知り夢中で群馬県から出て来ました。
(前橋市 三六歳)

・大変感激しました。自分の生き方を考え直さなければいけないと思いました。
(目黒区 三四歳)

△二〇代▽

・日常、同世代に対して感んじている//はがゆさ//の表明が多かった。

・多数の参加者に驚くとともに、同世代が少ないと憤っている。

・たいした危機感も持たずに参加したところ、講演者の話に打たれて考えをあらたにしたという人。

(例)・年配の方の多いのには、正直言って驚きました。
(杉並区 二二歳)

・もつと多くの友人と、この感動的な講演を聴きたかった。でも、帰ってから多くの人

に知らせたいと思います。

(練馬区 二七歳)

・もろさわさんの講演に深い印象。こうした話を伝えてくれるのは本当にありがたく、また私たちはこれを継承しなければならぬ義務を改めて強く感じました。
(板橋区 二四歳)

△一〇代▽

・キャンパス内で、「武装は当然」という仲間の意見が堂々と通ることにショックを受けたという大学生のようにそうした考えに反論するはつきりとした理論を学びたがっている人が多い。

・若い人たちの、悦楽主義、太平洋主義をなげく。

(例)・学生の中でこれらの問題に関心を持っている人は少ないのですが、私は戦争反対を言い続けたいと思っています。
(目黒区 一九歳)

・何もわからないままに集会に参りましたが、今日を機会にいろいろな事を知りたいと思います。来年から手にする選挙権に責任を持つために。
(新座市 一九歳)

・千人も人が集まるなんて、ビックリ。こん

なにも多くの人が平和を願っているのだと初めて知りました。(栃木県 一六歳)

・実にすばらしい。この輪を僕も広げたい。

(品川区 一五歳、一三歳)

設問ことのとまめ

(一)の集会を何で知ったかについて

何で	人数	
(a) 新聞	一八八人	四六%
(b) テレビ・ラジオ	二人	〇・五%
(c) ビラ	五五人	一三・五%
(d) 知人	九四人	二三%
(e) その他	六八人	一八%

△その他のうち▽

さまざまな組織を通じて 二五人
婦民新聞を読んで 一五人
クローワッサン 一四人
呼びかけ人から 一〇人
講演会で 五人
集会で 三人

朝日、毎日、読売の三大紙で大きく記事と

して取り上げられたことが大きい。ビラで知った人は一三・五%と比較的に少ないが、他との重複回答が少ないことから、やはりその効果は評価されるべきであろう。

(二)の危機感について

漠とした設問にもかかわらず、この欄に言葉を書き込んだ人は二三八人。自由回答欄への全記入者の、これは七八%。回収されたすべてのアンケートの六六%に及ぶ高率である。

内容は①先のダブル選挙による自民党の圧勝とそれに続く動き、奥野発言、靖国法案、改憲論の高まり、ソ連脅威論、軍備拡大などの国内の不穏な政治情勢、②教育の右傾化、③国際情勢(イラン・イラク戦争などやレーガン圧勝)④マスコミの論調の右旋回、⑤地域社会や身辺の人びとの保守化、⑥地域社会でのさまざまな非常時へのそなえ、⑦一部野党の動き、⑧体勢順応型の若者の増加など、多岐にわたり、「とても一言では書けません」という答えが代表するように、多くの人が欄外にまでビッシリ。

(三)身近な右傾化を象徴するような出来事

具体的なことがらをあげた人が一五六人、

これは自由欄への記載者の五一%、回収されたすべてのアンケートの四四%にも及んだ。予想以上に庶民生活の隅々までに、右傾化の波がひしひしと寄せていることがうかがわれる。特に教育現場での出来事が圧倒的に多いのは注目値する。子どもをもつ母親からの訴えと、学生自身からの証言の両方がある。

自衛隊の隊員募集その他の活動の活発化の実例や、市議会の動きなど、地域ごとにあがっている。また、地域での「学習会」などが地元で開きにくくなっている実態や、平和を口にする一般市民への右翼のいやがらせなどが多発している事実が明らかになった。

(地域でのこと)

・「靖国神社に首相が公式に参加してほしい」という署名が我が家にまわってきました。近所の小さなお子さんをもつ母親が大勢サインしているのを見てとてもびっくりしました。

(浦和市 主婦 三三歳)

・平和についてのセミナーを開催したところ、講師に右翼から講師をおるようにと脅迫状が届いた。

(横浜 市 四六歳)

・三年來続けて来た学習会で、最近、私の意見が「それは共産党と同じだ!」と言われて驚いています。同じことを言い続けている

のに、周囲の人びとの右傾化が日々感じられます。

(品川区 五四歳)

・近くの西久保コミュニティで「政治的集会には貸せない。だって社会党や共産党に使われたら困るでしょう」だって。

(武蔵野市 四三歳)

・近くの神社で、教育勸語そのもののような絵本を配り始めた。

(松戸市 三二歳)

・小学校や公民館で行なわれる町単位の夏恒例のラジオ体操、今年は自衛隊の演習場からの放送があり、びっくりしてしまいました。

(千葉県稲毛 三五歳)

・茨城県の私の町でも忠魂碑建立の運動が始まっています。また満州拓殖公社の犠牲者慰霊祭の折にも岸信介の弔辞があるなど、時代の逆行を実感しています。

(茨城県 六六歳)

(職場でのこと)

・テレビ関係の仕事をしているが、数年前から企画段階での制約が強まっている。

(目黒区 五六歳)

・マスコミの内部でもモノを言うことによって「レッテル」をはられる。

・会社内の男性で、会社の利益のためには米ソ戦争が起こればいいという馬鹿がいる。

(中野区 二三歳)

・図書館の本のリクエストにも、右傾化がクッキリ。

(静岡県 図書館司書)

・勤務先に近所の交番の警官が職員の住所提出を求めに来た。調査目的を尋ねたが、不明のまま職場の長の言いつけで仕方なく従った。

(千代田区会社員 四八歳)

(教育現場のこと)

・昨年、一昨年と教員採用試験を受けたが「君が代」「日の丸」に関する質問がまるで踏絵のようでした。

(杉並区 二八歳)

・次男の小学校の卒業式にビックリ、同じ学校を三年前に卒業した長男の時にはなかった国旗掲揚、君が代斉唱などが重々しく行なわれていた。

(埼玉県 毛呂山町)

・市川市でも公立小中学校で、国旗掲揚などが活発化。

(市川市 二二歳)

・川口市でも日の丸、君が代教育が強行されている。残った学校はわずか。

(川口市 教員)

・中、高校生たちに平和教育が行きとどいていない。彼らは「お国のために」など平気で口走っている。

(横浜市 二五歳)

・高校生の間に「皇国〇〇」というステッカーが流行、カッコ良さとしての戦争肯定の

風潮が浸透しつつある。

・児童の位位、健康状態をコンピューターにインプットすることによって行政側にデータ提供することになる。これに対して教組が徹底的に抗戦できずにいる現状。

(国分寺市 二九歳)

・大阪の一流高校で、朝鮮の映画を上映しようとした社研の生徒へ学校側が圧力、教師がビケを張って学生を阻止した。

(大阪市 二八歳)

(大学でのこと)

・この三年ぐらい、大学に入學してくる学生を見ると「自分で考える」学生が少なくなっていることを実感します。現状に不満があってもそれを表現もしないし、変えられとも思っていないようだ。いま戦争が始まっても彼らは、「こんなものさ」と受け入れてしまおうのではないか。

(三鷹市大学職員 二六歳)

・歴史研シンポジウムを持とうとすると、右翼が妨害しようとする。

・大学祭で軍備についての討論があったが、軍備増強を数人の学生が主張していたのは驚いた。

(目黒区 一九歳)

・東京外語大での管理強化、自由なビラの配

布が禁止された。(荒川区 二一歳)

・東洋大では今年、当局による学園祭つぶしが強行されようとした。

(自衛隊に関すること)

・朝霞市での自衛隊の観閲式が年ごとに盛況になる。(朝霞市 四四歳)

・府中の我が家の上空は最近とみにジェット

三機の爆音が多くなった。(府中市 三二歳)

・都営住宅に住む我が家の郵便受に自衛隊入隊を勧めるハガキが入っていました。各戸へ配られた様子。(足立区 三七歳)

・バス停などに自衛隊員募集のポスターがやたらに目に付くようになりました。

(茅ヶ崎市 三七歳)

・町内会の子供会が自衛隊賛助会の後援で夏休みに戦車見学キャンプを設定。小一ま度を対象に一泊三〇〇円(松戸市 年齢不詳)・ここ数年、地域の役員や野球部員になる自衛隊員が増加。積極的なかわり方に、不気味さを感じる。(相模原市 三四歳)

(四)今後の運動のすすめ方について

この日の集会へ参加した感動と新たな決意のもとに、もう一度集会を、何度でも繰り返し集会を、というリクエストが多い。と同時に

に、地方からの参加者からは、地方での運動の方法を、東京地区在住の人もその居住地域での草の根的運動の方法をさぐる積極的な姿勢とそのため要望が目立つ。

・毎年一回はこのような集会を

・何度も繰り返し返して集会やデモを

・地域で小さな集会もたくさん開いて

・危険な発言などがあるたびに、抗議集会を

・全国組織を作って地方でも連絡をとりた

・定期的なニュースがほしい

・憲法などをじっくり学ぶ機会がほしい

・講師を派遣してほしい

今回の集会の成功を認める立場から、今後

もこの会の基本姿勢の変わらぬことを要望する声が多かった。チラシの裏にビッシリ並んだ呼びかけ人の幅広い顔ぶれに信頼と親しさを覚えて参加した人びとの、これが最も強調したい点であろう。

・政党やセクト色を今後も出さないように

・一部のめざめた女性たちだけの運動に陥らぬように

・男性もまきこんで

・幅広く世間に訴え、国民的運動となるためのアイデアも

・お金を集めてTVコマーシャルなど流し、

どんな家庭に情報。マンガ家などに協力を要請して、反感を持たれぬもので出かけにくい主婦のために、ハガキなどでも意見をとかせられる運動を

・これからも日曜の昼間に

(五)集会の感想

(1) ほぼ全員が集会の内容に満足。

(2) 千人を越す人の集まりに大きな感動。

(3) 講師の二人と澤地さんの話が大好評。

(4) 多少の混乱も、用紙の不足も、大盛況のゆえとおおむね寛大だった。

(5) 託児室設置を望む声が多かった。

少数意見ではあるが、重要な指摘としては十二月八日の母親大会との別行動が気になる。何かひとつになれないものか。私は明日の集会にも参加して、何故ふたつにわかれてしなければならなかったかを、確かめたいと思います。(横浜市 作家)・十二月八日を開戦の日とする歴史観に疑問、日本がアジア侵略をはじめた時にさかのぼって考える視点が大切なのでは。

(アンケートまとめ 谷内真理子)

*集会実行委に提出した報告に一部加筆しました。

身近な右傾化を象徴する出来事

— 12・7集会アンケートの追跡取材ノートから —

谷内真理子

。私がこのルポを思いついたのは、具体的に12・7の八戦争への道を許さない女たちの集会Vで集めたアンケートに接した後である。集まった用紙に書き込まれてきた事例の多さと事の重大さに、私はしばし呆然とした。

数か月前に新聞で読んでギョッとした小学生たちの自衛隊基地内の戦車見学キャンプは、決して北海道だけで行なわれたわけではなく、私たちの住む東京の隣でも、行なわれていた。しかも地域ぐるみで大々的に。地方政治の場、学校、町内会、各地の自衛隊基地の動き、活発化してきた右翼団体、どれもが分かちがたく連動して軋みを立てている。調査をしよう、ともかく、ここに書かれている事を徹底的に洗ってみよう、と始めたが、作業はまだ緒についたばかりである。したがってこれはまだルポと呼ぶにはあまりに不完全な代物だが、少しでも多くの人に事実を知っ

てもらいたいという心を優先させ、取材ノートの一部をご紹介することにした。

●生涯教育セミナー講師 に届いた脅迫状

「平和」というまったく当然の最も大切な言葉を発することだけで、危険思想の持ち主であるかのように取沙汰されるという話が各地からちらほら届くようになった。そんな話を裏づけるような事例がここにある。

昨年十月のことである。横浜市の市民が運営する本郷地区生涯教育セミナーが「文学にみる平和」というテーマの講演会を開こうとしたところ、講師四人のうちの三人に、右翼から講師を降りるようという脅迫状が届いた。その講師とは作家の郷静子さん、児童文

学作家の松谷みよ子さん、関東学院大学教授の山田宗睦さん。同セミナーは地域の主婦を対象に百五十人はどの規模で開かれる、この地域にもあるようなしごく普通の講演会である。演題は郷さんが「わたしと『れくいえむ』」、松谷さんが「児童文学にみる平和—私のアンネフランク」、山田さんが「昭和万葉集巻六」を通して——太平洋戦争の記録」というものだった。「母たち、今、わたしたち」という一見おとなしげなテーマを掲げたジャーナリストの永畑道子さんだけが、タイトルの故か右翼の持つリストに載っていないかったためかは不明だが、ただ一人、脅迫状の被害から免れている。

三人に送り付けられた手紙の文面はほぼ同じなので、ここでは山田さん宛のものをだけを紹介する。差出し人は右翼五団体の連名、宛先は山田宗睦、敬称はない。

緊急特別勧告

貴殿は横浜市生涯教育セミナーの講師としての資格が全くないので即刻講師を辞退すべきである。

右勧告しておく

昭和五十五年十月二十九日

〔付記〕

①必ず講師を辞退されよ。横浜市教育委員会では貴下の正体におどろいている。貴下が講師になる事は皆が困るであらう。

②一度貴下宅を伺い度い、東海道線辻堂駅下車で。

一番初めに脅迫状が舞い込んだのは初日の講師である郷さんの家。当日の朝、郷さんから運営委員に「万一のために駅まで出迎えてほしい」と連絡が入る。運営委員とはいえ普通の主婦たちだ。思いも寄らぬ事態に仰天したに違いない。しかし「あのセミナーの役員さんたちは、実に毅然としていましたね」と山田さんが感心するほど、冷静に事に対処した。そのうちの一人が夫君をボディガードに仕立てて駅まで出迎えに行く。当日は無事

に終わったが、二週間後の松谷さんの講演の前日（十一月三日）にまた脅迫状が、さらに一週間後に講演の予定されている山田宗睦さんのところへも前出の文面の書状が届いていたことがわかったのである。両氏の講演は両日とも警察の私服警官に守ってもらって予定どおり行なわれた。

こうしてセミナーは終わり、それ以後、講師のところにも、運営委員たちのところにもそれ以上の脅しは届かなかった。運営委員たちの胸に、安堵と、自分たちのとった態度に対する満足があふれたことはいうまでもない。

ところが、年も改まり一月になって、同セミナーが、昨年十二月末に横浜市教育委員会に提出したところの五十五年度の活動報告書に書いた「右翼からの脅迫状」という言葉について、教育委員会の課長からクレームが出されたのである。「教育委員会は中立であるべきですから、それが右翼かなどということには言えない。脅迫状という表現も穏当でない。こちらで黙って字句を直すのはどうかと思いますから、もっと適切な言葉に変えて欲しい」と言われて、話し合いの末、「或る団体から講師を降りるという書状が来た」と書き直しました。でも、いくら命をもらうなんてこと

が書いてないからといっても、あの手紙を見て脅迫状じゃないなんて。警察でさえ心配して警備に当たってくれたんですよ」と、会の中心メンバーの植山文子さん（四五）と井上節子さん（四一）。

本郷地区にこのセミナーが開かれたのは四十九年、住民自らの「手づくり学校」を期待する教育委員会の委託を受けるという形でスタートした。年ごとに市から予算も下りる関係上、こうした報告も義務づけられている。後になってからわかったのだが、脅迫状を出した団体の一人と思われる男があの当時、教育委員会に直接押しかけていたのだった。

一地域二年間という同市生涯教育セミナー制度のもと、二年目を終えた本郷地区への予算は、一連の事件とは関係なくとも一応これで打ち切られることになるだろう。しかし、もしこれが一年目の地域での出来事ならどうだったか。さらに、こうした脅しの来る可能性のあるテーマや講師が規制されることになりはしないか。紙切れ一枚、一人の男の示威行動で公の機関がひるんでいるようでは、言論の自由など守れるはずはないのだから。報告書をめぐっての役所側の対応に私は暗い予感を覚える。ところが、私の予感を裏づける

ような事件が引き続いて起こっていた。

本郷地区生涯教育セミナー脅迫状騒ぎから一月ほどたつたころ、今度は横浜市西区の区役所で講演をすることになっていた郷静子さんのもとに、区役所から突然「講演を中止して下さい」という断わりが言つてよこされた。教育委員会に現れたと同じ人物らしい男が区役所に現れ意気まいたのが原因だ。怒つた郷さんが「公にする」と区長に直談判したことで、かろうじて予定どおり行なうという決着を見たものの、黙つて引き下がれば講演は区によつて中止されるところであつた。「お役所つてとは不思議な所で、誰が最初に中止の方針を打ち出したのか結局わからずじまいなんです。でも怖いことですね。右翼も怖いけれど、こんな簡単なことで一人の人間の発言の場が封じられそうになつたんですものね」と郷さん。「黙つていては駄目ですよ。こういうことは、陽の当たる場所にきちんと出さないと」とキツパリ言い切る。

山田宗睦さんも、「こういうものは、こつちが黙つていては相手をツケ上がらせるだけです。私のところだけでなく、いろんな人のところにも来てるんですよ。しかし問題なのは右翼の怖さより、郷さんの講演が実際に中

止になりそうになつたということです。いま、学者と弁護士が一緒になつて、言論抑圧監視委員会のようなものを作ろうとしているところなんです」と言論人の気概を見せる。

右翼の脅迫状は今に始まつたことではない。戦後民主主義の時代と言われたこの三十五年間でも右翼は暗躍していたし脅迫状も横行していた。浅沼稻次郎の暗殺（一九六〇年）や中央公論の『風流夢譚』や嶋中事件（一九六一年）はあまりに有名だ。しかし、地域のささやかな、一般市民の主婦たちが開いた学習会にもその手が伸びてこようとは。そして、よるべなき市民たちより先に、力あるはずの公機関のほうがそうした横槍に腰くだけになつてしまふとは。

●自衛隊はかっこいいという子どもたち

子どもたち

千葉県松戸市ではほとんど全地区の町内会の子ども会が自衛隊賛助会の後援で夏休みに戦車見学キャンプをしている、とアンケートにあつた。昨年夏の新聞に、北海道でのボーイスカウトのサマーキャンプで戦車に乗る子供

たちの様子がセンセーショナルに報じられたのは記憶に新しいが、あれは新聞種となるような特殊な例ではなかったのだろうか。市の全地域の子供会で行なわれているというのは本当なのだろうか。

地下鉄千代田線で東京大手町から四十分の松戸市馬橋。このあたりは東京のベッドタウンとして近年開発が目覚ましく、駅の片側の景観は見渡す限り新しいマンションと建売り住宅の群れた。馬橋のある子供会。入会のしおりに書き込まれている本年度の行事予定計画には、四月・動物園見学、五月・ソフトボール大会、（中略）八月・ラジオ体操、盆踊り、自衛隊キャンプ参加、（後略）とある。

年会費六百元を支払つて加入は随意の、どこかの町にもある普通の子供会と変わらない。夏の自衛隊での一泊キャンプを除いては。

「私が役員になる前からの恒例行事です。キャンプは人気があるし、男の子はみんな喜んで行きますよ。さあ、千葉県には自衛隊の駐屯地も多いし、キャンプも自衛隊側の住民サービスの一つなんじゃないかしら」と子供会役員のA子さん（三六）。小さいな現在のマンションに引越して来て八年目、小学校へ通う二人の子どもの母親だ。「この地区が町

内会や子供会活動に特別活発なこともないでしょうが。でも私がなぜ熱心に役員引き受けてやってるかって考えると、やはり自分の子供に早く地元の子と解け合ってほしいと思つたのが始まりね。ですからキャンプにも行かせますし……。別に悪いことだとは思つておりません」。

先ほどの「しおり」によれば、馬橋地区には三十団体の子供会があり四千四百人の子供（地域小学生の八五%以上）が参加している。このうちの何割がキャンプに参加するのかは不明だが、かなりの数にのぼることは確かだ。他の子供会はどうか。

同じ松戸市馬橋に住む会社員中浜早苗さん（三八）は、去年の夏、子供会の役員であるお母さんに個別訪問で「小学校一年生の息子さんをキャンプに参加させませんか」と誘われ驚いた。「三年前に越して来て、噂には聞いていたんですが、実際に我が家へ来られてびっくりしてしまいました」

中浜さんはもちろん断つたが、近所の子はほとんど参加した。一泊三百円という安さも好評だった。最初に聞いた子供会では小学校の高学年が参加したということだったが、この地区の子供会のキャンプはその対象が小学

一・二年生であつた。「カッコいい!! 優しいおじさんだったヨ」と、体験組の子供たちは興奮醒めやらぬ様子で不参加組の子供たちに語つたという。

子供たちは、その「やさしいおじさん」たちに、キャンプの中だけで会つていゝのではない。時に応じて開かれるソフトボール試合や相撲大会。そうしたとき出向いて来てくれるのが「やさしい自衛官」たちなのだ。

子供会育成会の育成とは、児童の体育文化補導を助ける目的で子供会とセットで組織される父兄を中心とした親睦会である。その中に自衛官や警察官がいる場合はもちろんのこと、それ以外にも会が適当と認めれば積極的に指導者として「やさしいおじさん」たちを招聘できることになつてゐる。自衛隊側は賛助会を作つて積極的だ。

確かに鍛え抜かれた体軀は少年たちの憧れとなるだろうし、個人的にはやさしい人もいるだろう。けれども、これにはやはり、自衛隊違憲などという疑念が入り込むすきがないように幼な心を染め上げていこうとする意図がはの見える、不気味である。

昨年の建国記念の日の前々日、松戸市内のある小学校では、全校集会で校長が「もし日

本が、よその国に攻められたらどうする。校長先生は戦うぞ。こんなに年をとつていても自分たちの国なんだから、あたりまえだろう……」（同小組合分会資料）と語つて物議をかもした。父母の抗議で今年はトーンダウンしたと伝えられる（二月十一日朝日新聞）が、学校で、地域で「国を守る気概」を叩き込んでいる小学生の姿が彷彿としてくる。

今年一月の日教組第三十次教研集会「平和と民族の教育」分科会で明らかにされた千葉県の高校生約二千五百人を対象とした「平和意識アンケート」によれば、自衛隊解散を求める高校生一八%に対して、「現状のまま存続」三六%、「もっと強化すべきだ」と答えた者が二五%にも達したという。「やさしいおじさん」たちに慣れ親しんだ小学生が高校に進むころ、「もっと強化すべきだ」という数字はどこまで伸びるのであろうか。

年ごとに盛況を増す自衛隊の観閲式が行なわれる基地の街、朝霞市では、機動隊のものしい警備の中で、まるで祭にでも出かけるように弁当を持って見物に繰り出す家族連れが目立ってきたと伝え聞く。こうしたことと暴走族たちの間にはやつてゐる戦闘服や日の九ツッペンなどが無縁のはずはない。

●標準服という名の 類型にはめられた小学生たち

冗談に笑いころげながら、色とりどりの服で学校に通う。この頃の小学生に対する私のイメージはつい最近までこうだった。

ところが、今、東京の台東区をはじめいくつかの区立小学校では急速に児童の服装が統一されようとしている。その急先鋒、東京の下町、台東区では、区内二十八の全小学校中、二十五校が制服同様の標準服を採用している。さすがに制服とは言わず、その名は標準服であるが、学校によっては上着、スカート、ズボン、シャツやブラウスは言うに及ばず、くつ下、ズック靴、帽子に至るまでこと細かに決め、指定した業者に売らせているところもあるほどで、ほとんどの親が学校の方針に従って買い求めている実情のもとでは、制服と呼ぶに似つかわしい実態である。

私立ではなく、しかも高校のように選んで入るわけでもない地元公立の小学校で、なぜ子どもたちが制服まがいの標準服でがんじがらめにされなければならないのか。素朴な疑問を感じる。

台東区のほぼ中央、国鉄上野駅と浅草雷門からちようちょうと等距離あたりにある台東区立松葉小学校は、台東区立の中では服装規定の比較的ゆるやかな学校だった。もう大分前から上着だけはダブルイートン型という上っぱりふうのものに決められて着用が義務づけられていたが、他のものは不統一で、音楽会など他校と席を同じくする時など、バラバラの服装でむしろ見劣りがするほどだった。ところが、五十四年十二月に突然校長の名で、「通学服についてお願い」というプリントが配られ、四月からズボン、スカート、Yシャツ、ブラウス、それに帽子も統一することにしたから協力を要請するむね発表された。年が改まった一月、父母会でこれに疑問を持った一人の母親が学校側に質したところ「強制ではなくこれはあくまでもお願い」という返事だった。その時の父母会で異を唱えたのは、たった二人、他の母親は「簡単に助かるわ」とむしろ学校の方針に大賛成というその場の雰囲気であったという。

二人の母親の一人、杉本節子さん（四〇）は、「学校が決めてくれれば、親子で、朝、服装について言い争わなくてすむなんて母親

がいて……。娘の手抜きですよこれは」とその時の模様を話してくれた。「でもまあ、強制ではないと言うし、他人は他人、私は三人の子どもに私の方針で臨もうと考えて、のんきに構えていたんです」

ところが、四月の新学期が始まったその日の朝、小学校の隣に住む杉本さんは、驚いてしまった。どの子もみんな指定どおりの服を着て登校して来る。従わなかったのは杉本さん宅の三人の子どもと、あの時やはり反対したもう一人の母親の娘二人だけだったのである。「号令一下、こんなにもみなさんが従順に素速く反応するとは正直言って考えてもいませんでした。それまでそれほど重要だとも考えていなかった標準服の問題を真剣に考えるようになったのはこの時からです」

台東区の標準服の歴史は古い。杉本さんが結婚と同時に郷里の福島から移り住んだ時にはもう、付近の小学校はほとんど揃いの上着を着ていた。戦後の物のない時代、母親のお古を再生して作ってもらった服で学校に通った覚えのある杉本さんにとっては揃いの服で通学する小学生たちの姿は「さすが東京。誰も母さんのお古なんか着ていない」というふうに映った。だから長男が入学する時には、

標準服をあまり迷いもせず買い求めたという。

商店の多い下町台東区では、子どもに競って華美なものを着せる傾きがあり、標準服はかつてそれなりの必要をもって登場したという背景はある。貧しい家庭の子どもが肩身の狭い思いをしないようにという配慮もあったであろう。しかし、標準服を定めてそれ以外のものを徹底的に排除しようというここ数年来の教育方針には、子どもの心が傷つかないようにという配慮はあまり感じられない。それどころか、違反を許さぬ形式主義、異端を許さぬ平準化が、管理に好都合ということで合理化されようとしているようで、気掛りだ。杉本さんも言う。

「親たちの話し合いで決められたのならまだしも、校長先生からの紙切れ一枚で議論もしないというのは、どう考えてもおかしいと思うのですけど。こういうことを言うと先生方からも他のお母さん方からも、以来色メガネで見られてしまつて。制服を着せられることより、教育を着せられるのが嫌なんです。そういうことに鈍感な親になりたくないし、子供にもそうなってはしくないからこそ言うんです。でも他のお母さん方にはなかなか分

かつてもらえませんか。いつだったかPTAの集まりで、少しでも議論のきつかけになればと、同じものばかり着せてるのは不潔だし、かといって幾枚も揃えるのは不経済だって、私言つたんですよ。でも、こうすればシミが取れる、速く乾くなどと洗濯のやり方を指南されちゃつて(笑)。これではとても私が説得するのは無理だと思つてしまいました。でも、教育の場で教育が語られない、どこか変ですよ」

杉本さんは我が子には相変わらずお仕着せのおかしさをきちんと説明して、私服を着せ続けている。

もう一人の母親の家の子は、担任からもクラスの仲間からも吊し上げられたらしく、今では親も折れて、決められたものを着せている。残るは杉本さんの家の子ども三人だけだ。杉本さんの毅然とした態度に担任は理解を示すが、子どもにとって辛いのは友達の間だ。末っ子の小学校二年生の息子は、自分でダンスの中から何とかみんなと似たような服を捜し出して着ていくという。

学校生活は細かい規則で縛られ、ゲス・フー・テストなどという密告調書のような形で素行や友人関係さえも調べ上げられる児童た

ちが、紺かグレーの標準服で頭のてっぺんから足元まで統一され、違反者は厳しくチェックされる。これを管理教育と呼ばずして何と言おう。君が代斉唱や国旗掲揚が急速な勢いで復活する中、国旗の揚げ下ろしの際に児童に深々と頭を下げさせる学校も出てきた。教師の指導熱心の現れからくる管理というにはあまりにすべてが符合しすぎてはいまいか。時計の針が逆に進んでいるような気がする。指導方針だけが恐ろしいのではない。管理されていることに圧迫感を感じぬ感情が培われ、やがて子どもたち自らが異端を許さぬ管理者となつていく。それが怖い。

やはり制服問題をかかえている世田谷区のある区立小学校のPTAで、制服導入に疑問を投げかけた母親に対して他の母親が危険人物呼ばわりする一幕があった。そう言われた母親が思わず「そんなに上からの命令に盲目的に従うのならば、あなたは息子に赤紙が来ても素直に子を征かせるんですか」と叫ぶと、相手は「お国のために息子を出すのは当たり前でしょ」。若い母親のその語気の強さにその人は返す言葉が失つてしまったと言う。とかく経済問題だけに議論が収められてしまいがちの制服問題だが、制服の持つ倫理、

つまり管理や精神動員のための必需品としての側面に、私たち母親はもっと思いを馳せなければならぬのではないだろうか。

●何のための町内会

「あれは確か一昨年の夏のことだったと思います。ご近所から『靖国神社への首相の公式参拝を要請します』という署名が回ってきたんです。私、政治のことはあまりよくわかりませんが、幼い子供三人を持つ母親として徴兵制につながるようなことになるかも知れないようなものには協力できないと思って、お断わりしたんです」。浦和市のはずれに住む加藤さん(二三)は、穏やかに話す。「その時、すでに署名でうめられている欄をちょっと見たんですが、いつも一緒に遊ばせている小さなお子さんたちのお母様方がズラァ、と名を連ねて書いてるんです。一人でも多くと言われたからでしょうか、旦那さんや子どもさんたちの名前まで並べて」署名簿を持ってやってきたのは自治会の役員夫人。その紙には遺族会その他の団体名が列記してあった。加

藤さんの断わり方も丁重だったし役員夫人もそこはこやかに帰っていった。隣り付き合っても別に気まずくはならなかった。「でもそれ以来、近所に署名らしきものが回ってうちだけは素通りして行くんですよ。ここへ越して来てからまだ五年、自治会ということが入ったんですが、実態は隣組ですね。まわりは私道ですから、下水や道路の管理で皆さんと協力しなければなりませんので加入は当然と思ってたんですけど……」。

この自治会は町内会の傘下にあつて、この地区の町内会長は、市議でもあり同時に地元小学校のPTA会長でもある。

「幼い子供三人かかえてどこへも出かけられない私でも、できることから抵抗しなければと思って、お断わりした」というささやかな一母親の行為が、行政や学校といったところに筒抜けにならぬとも限らぬ構造だ。

埼玉県の朝霞基地に隣接する和光市に住む山本和枝さん(二八)は、幼稚園児を持つ母親の一人として、防災訓練などに無関心ではいられない。だから、昨年九月一日の防災訓練の日には地元で行なわれた地震の避難訓練に子連れで出かけてみた。

「行ってみて驚きました。揃いのまっ白い割

烹着を着け、肩から斜めに婦人会の名を染め抜いた襷をかけた年配の主婦たちがズラァと並んでいるんですよ。」「バケツリレーをして張り切っているそのおばあさんたちが張り切れば張り切るほど、山本さんは訓練に身が入らなくなる。「何だか地震の名を仮りた別の非常時の訓練みたいに思えてきちゃって。家に帰って夫に言ったら、『考え過ぎだよ。バケツや消火器で国が守られるか? 馬鹿』って言われてしまいましたけど」。

戦時中の竹槍訓練だとて、指導部は本気で竹槍で国が守れるなどと考えてはいなかっただろう。ただ一億精神総動員には効果的だという勝算があつての強制だったのではなからうか。地域ぐるみの防災対策に異を唱えるつもりは毛頭ないが、防災に力を尽くす人びとの努力がいつの間にか違った思惑にからめとられないという保証はない。その割烹着のおばあさんたち、朝霞の自衛隊の観閲式の時、大勢で道端に陣どって旗振ってたんですよ」山本さんの心配はあながち笑えないのではないだろうか。防災訓練に集う母親たちの姿が、いつか見たセピア色の一枚の写真と重ならないことを祈るばかりである。

母から子に語り伝える民話集

不思議な釣鐘

お領内の寺々から集められた釣鐘が、城の片すみに、一時の間、野積みにされとったそうだが、夜になると、延命寺の鐘が、ひとりで、

かアன்றいたやのーン、オンオンオンて、鳴りだすそう。最初の鐘は、海に沈んでしもて、これは、そのあと、新しくこさえた鐘じゃのに、おんなしように、

かアன்றいたやのーン、オンオンオンて、夜になると、ひとりで鳴るんじやとい。



日本図書館協会

選定図書

美森成生・文

藤川秀之・絵

B5変型上製

1800円

菜の花と雷さま

日本図書館協会選定図書
全国学校図書館協議会選定図書



やがで春になって、南の方から菜の花が咲きだして、ほこ谷まで、黄色に連なったんや。娘が播きもて行ったんが、咲いたんよのう。

それが春の風に波うつとる。南から、黄色の道がでけたよう。その道をたどって、娘は戻って来たんよ。

美森成生・文
日暮修一・絵
B5変型上製
1800円

BOC 出版部

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6
電話 354-3941(代) 振替 東京3-39331

戦争阻止へ行動する女たち

12・7集会の裏方

小川ルミ子さん

警察側は、せいぜい二、三百人と読み、ふたをあげたら千四百人を越えた12・7集会。大組織の婦人団体に属する人も、草の根のグループも、個人も、党派や思想を越えて集まった。ひたすらな反戦の思いにあふれて。

この集会の準備は、会や党派を越えた世話人たちを中心に、何度も話し合いを重ねてすすめられたが、その実務を受け持ち、世話人のすべてから讃辞を集めたのが、小川ルミ子さん(三三)。いつ会ってもひかえめでもの静かな人だ。

「このところ、右傾化は目にあまるものがあり、ほうっておいたのでは憲法もあぶない。男たちは政党系列に分かれて統一平和運動が

できにくいけど、女は、いきがかりにとられず、思いあふれる人で集まりませんか、と第一回のよびかけ人会が開かれたのが十月一日。それから八回ほど世話人会を重ねたでしょうか。会場は、あぐら読書室や全水道会館などを転々としたが、たまたま私どもの事務所空いた電話が一本あったので、何となくお世話役を引き受けただけ。はじめから計画があったわけではないし、みんなが集まっているうちに、次第にふくらみひろがっていったので、ほんとに、すべて皆さんのお力です」

と、小川さんはあくまでも謙虚だが、それぞれ地域や組織で活動の中心となっている個性

的な人びとをまとめるむずかしさは、少しでも経験した人なら骨身に沁みて知るところ。「主張が全く対立しなかったというわけではありませんが、小さな相違を乗り越えて12・7を成功させようという熱意が、対立を止揚に変えていったのだと思います。皆さん、ゆずれるところはゆずりあって、私もとても勉強になりました」

全国に燃えひろがった火

その小川さんを何よりも喜ばせたのは、朝・毎・読各紙に集会の報道が出てから、ひっきりなしに電話がかかり、手紙が来たこと。「特に地方からは//出られないけれど、長い長いお手紙がたくさん来て、その内容が私と考えてることと全く同じ。戦争はもうイヤだという女の思いは、どこにもここにも熱く燃えているのだと、ほんとに心強く思いました」

連絡会事務所に寄せられたカンパは十数万

円、当日の会場カンパと合わせて四十余万が集まり、カンパはその後も続いている。

「それ以上に嬉しいのは、各地で同じような女の反戦集会が続々計画されたこと。沖縄・大分・長崎・松江・前橋などで集会が開かれ、またし、東京でも世田谷とか北区とか、さらに地域に細分化された集会も持たれました。大阪・名古屋・京都・仙台・浦和・藤沢などでも、天皇誕生日や憲法記念日前後に集会があるようです」

12・7の成功に勢いづいた東京では、憲法記念日の前夜、5・2集会をふたたび山手教会で持つ。澤地久枝さんの講演、ヨネヤママコさんのパントマイム、高良留美子さんの詩の朗読を中心に、できるかぎりの会場発言を集め、デモ行進の予定。今度のテーマは、「憲法改悪を許さない」。

あたりまえの女の運動を

小川さん自身は一九四六年生まれの戦後っ子だが、焼け跡の飢えの日々の中で、戦争のみじめさは幼心に刻印された。二十三のとき亡くなったお父さんは、戦争中は思想犯で検挙されたひと。

「全共闘世代ですが、私は高校を出てすぐか

ら働き続けてきましたし、学生運動にかかわったわけではありません。労働者の反戦青年委員会にはわりに早くから参加してましたけど」

反戦の思いが深まったのは、三里塚以降という。



「住まいが成田。東京からはよく支援の方が見えますが、地元はとても保守的。なぜ三里塚が問題なのか。一人にでも二人にでも、女の仲間話に話していきなと思うようになりました」

七五年から日本婦人会議に加わって学習、

見込まれて七八年には専従になる。

「婦人会議は社会党の支持者が多いのですけど、党からの司令や支配はありません。戦争阻止は一党一派だけではできないし、狭いわくにとじこもっていたのでは、戦争準備の大きな力に立ち向えませんか」

どんな時にもむずかしい左翼用語は決して使わず、「あたりまえの女」として淡々と語る小川さんは、今後とも「あたりまえの女」のできる運動を続けていきたいという。

「党派を問わず……と呼びかけた12・7集会が、△女Vはイヤ、△婦人Vならいいとか、△核廃絶Vはちょっと……とか、究極には政治路線が反映して、12・8と二つの集会になったのは残念でしたけど、今後は対等平等の関係で、何とか共闘していきたい。その方向はみんなで模索したいと思います」

12・7の総括の12・15には、予想を超えて七十人もが集まり、5・2の計画はそれの中から燃え上がった。小川さんに続く裏方は、ふえこそすれ、絶える心配はなさそうである。

平和行進でビラをまく

小沢明美さん

毎月第二日曜日の昼すぎ、浜松市の目ぬき通りを静かにデモ行進する一群の人びとがいる。デモといっても、シュプレヒコールが聞こえるわけでもなければ赤旗が乱立するものもない。小さな横断幕にはたった一言、「平和憲法を守ろう」とある。四つ角の信号にかえると、先頭の小さな宣伝カーが、時事問題を語り出す。竹田発言、防衛費増額、原発

……。と、隊列の中の若い女性と子どもたちが商店街のアーケードに駆け出してビラをまく。平和を守る憲法を守りましょう！

ビラまきのリーダー格が小沢明美さん（三十一）。そして、子ども部隊の中でもひときわ手ぎわよくまき続けるのが一人娘の明子ちゃん（八）だ。

十四年前に始まったこの行進は、雪の日も風の日も一回も休まず続けられている。明美さんは結婚前から参加して、休んだのは出産前後だけ。明子ちゃんがおぶえるようになる

と、背中にくくりつけて歩いた。よちよち歩きを始めてからは、その手を引いた。そしていつか見よう見まねで、小さな明子ちゃんもビラをまき始めた。

「チラシをさし出しても受け取らん人もおるけど、子どもが出せば受け取ってくれます」はつくりと深いえくぼをつくって明美さんはほえむ。

会社に殺された夫

底ぬけに明るく見える明美さんだが、八年前に最愛の夫を失っている。明子ちゃんの出産直後だった。この行進に誘った職場の同僚、そして明美さんに社会の仕組みを教えた先輩でもあったやさしい夫は、退社の途中、交通事故にあった。勤務先の自動車会社から月賦で買った車は、無残につぶれた。はなはなしに宣伝で売られた車は、はかなくもろかった。「夫は会社に殺されたのだと思いました。通

勤に車を使わなければならないところに工場を立てて、その工場で、簡単につぶれる車をつくったのです」

目の前が真つ暗になった明美さんに呼びかけてくれたのは、亡き夫の声だった。

「人間のいのちをたいせつにしよう。もうい車などつぶされてたまるものか」

仲間たちも明美さんを支えた。夫を殺したものに一緒に立ち向おう。人間のいのち



仲間と学習会も

明子ちゃんも見事な手つきで



ると明美さんは思っている。

歩き続けて

憲法を守ろう

明子ちゃんが小学校に入ると、明美さんは学童保育を始めた。

母子世帯だから働かなければやっていけない。といって、カギっ子にはしたくない。市に学童保育がないなら、私設でもつくろう、明子と一緒に、ほかの

とも多いし……」

子どもをカギっ子にできない気持ちだが、憲法を守る気持ちに通じると、明美さんは考えている。

午前中はタイプをたたき、午後は学童保育、さぞかししんどい毎日と思われるが、明美さんは平和デモを一度も欠かさない。「どうしてゴケンに行くの?」とふしぎがっていた明子ちゃんも、今ではゴケンを待ちかねている。「歩き続けてよかったと思ってます。でなかったら再婚して、今ごろは明子のほかに一人か二人、子どももいたかもしれない。そして学童保育なんかもやらなかったでしょう」

人生の道も、もしかしたら胸を張って歩き続けられなかったかもしれないというように明美さんは今、歩くことを位置づけている。「子どもが大きくなった日に、泣いても泣ききれんことになることだけはしたくない」

それにしても、一度や二度歩くのは簡単だが、欠かさず歩き続けるのは容易ではない。でも歩き続けてこそ、道行く人びとにもいつ

か声は届くだろうし、明子ちゃんの心にもゴケンの意味は刻まれるだろう。そして、いのちを守る憲法を変えようとする動きに抵抗する勇氣も生まれるにちがいない。

を守る平和憲法を守ろう! 明美さんは行進にまた参加し始めた。小さな明子ちゃんは、口がきけるようになると何度もたずねた。

「どうしてゴケン(護憲)に行くの?」

「戦争せんようにするんだよう。戦争が起きるといかに、がんばるんだよう」

戦争の中には交通戦争もある。生産戦争もある。そしてそれらはすべて、あのいまわしい大量殺人の戦争にまっすぐにつながっている。

カギっ子も守っている、と。賛同した友人と始めた保育クラブは、去年の十一月から庭のある三Kの一軒家に越した。暗くなるまで庭で遊ぶ子、備えつけの本に夢中な子、オルガンを楽しむ子。みんなのびのびと楽しそうに見える。

「保育料はできるだけ安くしたので、暮らしたしにはならんし、女一人で子どもを育てるのはしんどいけど、私自身、勉強になるこ

小学校一年生から平和教育

鈴木富代さん

神Vの天皇を信じてその命令に従った。戦争を天皇制から問い直そうとする、鈴木先生の平和教育だ。

惨禍の写真を見せて

続いて先生は大きな写真を示す。画面いっぱい白骨。

「キヤーツ」「こわーい」

「みんなのお父さんやお母さんが子どものころ戦争があったって話をしたわね。これがその戦争の写真。広島の写真」

二枚目の写真は、さらに大きなショックを与える。被爆者の写真だ。

「けがをしたり病気になった人もたくさんいます。髪の毛がぬけたり、やけどしたり……」

「この前、天皇陛下下って知ってるって聞いたから、三人だけ知ってたね。じゃ、天皇陛下下って神様なのって聞いたら、みんな、神様だって答えたね。ほんとにそうかな、ずーっと考えてねって宿題にしよう。さあ、わかった？」

おしろいけのない顔。無難作にたらしめた長い髪。問いかけるのは鈴木富代先生（三三）。聞き入るのは福岡市郊外、東志免小学校の一年生たち。

「さあ、考えて。神様はごはん食べる？ お水のむ？」

「のむよ」「のまないよ」——自信なげに顔を見合わせる子どもたち。

「じゃ、人間はごはん食べる」

「ハイ」——一斉に手があがる。

「神様は歩く？ 歩いてどこにでもいきませんか？」

「……」

「人間は歩く？」

「ハイ」

「じゃ、テレビで天皇陛下を見た人に聞くけど、天皇陛下は神様かしら？ 人間かしら？」

「にんげん。ひこうじょうでてをふってた」

「おとなのひとつとはなしてたから、にんげんだとおもいます」

「絶対、人間だと思う人」

——約半数の手があがる。

「神様じゃないと思う人」

——大多数が手をあげる。

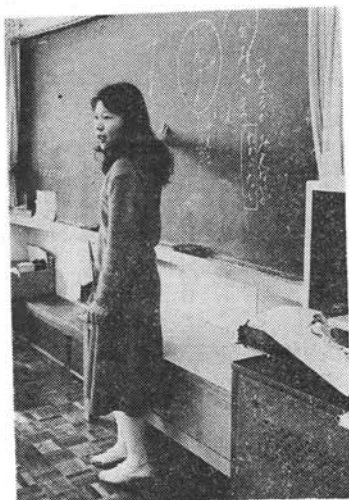
「もしかしたら神様かもしれないと思う人」

——五、六人が、左右を見ながら手をあげる。

「みんな、自分で確かめてね。人が言ったからそうだと思うちゃだめよ」

「うん」

この前の戦争では、みんなが人現人



落ちこぼれを出さない「考える」授業を

だから、先生も、みんなのお父さんやお母さんも、絶対に戦争はしたくないと思ってるの。だけど、とても心配なことがあります」

——ええっ、と不安そうな子どもたち。

「日本の国はもう決して戦争をしません、戦車も兵隊さんもいりません。いちばん大切にされるのはわたしたちみんなですって約束されたことはおぼえてるでしょう。だけど、その約束がすこしずつあやしくなってるの」

「日本の国に戦車があると思う？」

「ない」「ちょっとある」

「兵隊さんがいると思う？」



原爆の写真に嘆息する子どもたち

「うん、ひとりかふたりなら、いる」

「それが一人や二人じゃないんです。自衛隊って知ってる？」

「うん、しってる」

「熊本にも大きな自衛隊、久留米にも大きな自衛隊、たくさん自衛隊があります。おかしいね、戦争しないって約束なのにね」

そのとき、終業の鐘が鳴り、子どもたちは写真集にとびついた。

「せんせい、このひと、どうしたの」

「原爆で目の玉がとろけたの。こわいでしょ、戦争って」

——息をつめて見入る子どもたち。

自分で判断できる子どもをつくる

「小学校一年に平和教育は早すぎるという人もいます。でも早ければ早いほうがいいと思います。それに、いまは許されている平和教育も、いつ禁止されとも限りません」

戦争の恐ろしさを植えつけると同時に、しっかりと考える子、だまされないう子をつくるのが鈴木先生の考える「平和教育」だ。

「一年生の一学期までに、どの子も、かなが完全に書けるように、十までの数を量としてとらえられるように、徹底的に教育します。」

そのためには絶対にけなしません。わからない子にはわかるまで教えます。覚える喜びを知ると、次から次へと覚えていきます」

特に女の子の教育が大切、と鈴木先生は言う。男ならどう転んでも自分をいい場所に置ける。それを教育の現場でたくさん見てきた。

「女はあんまり長い間差別されてきたので、それに慣れすぎて女の甘えができています。文句だけ言ってればいいみたいな。いじわるされたと泣いてきても、私は取り上げません。先生は見えないもん、知らんって。けんかは子どもにまかせます。学級は小さな社会、その社会の基礎を自分たちでつければ、権力のある人に頼らないで自主解決できます。みんながはつきり言え、しっかりと書け、落ちこぼれがなくなれば戦争は防げるでしょう」

鈴木先生とのインタビューの間に、教室の大きな花びんを片づけようとした一人が花びんを取り落とした。子どもたちはワッと散って、手に手にバケツや雑巾を持ってきた。だまって片づけた。割った子を責める声は全く聞かれなかった。誰も訴えには来なかった。

＊鈴木先生は四月から久留米に転任。

「今度は自衛隊の真ん前です。でもがんばります」
——相変わらず明るい声だった。

原発反対のミニコミを出し続ける

坂田静子さん

「じっとしていられない気持ちから、手作りの小さな刷り物をお手許にお届けします。慣れで字も揃わず、お読みになりにくいでしょうが、どうぞ大目に見て下さいますように。

英仏海峡の小さな島で暮らしている娘からショッキングな便りが来ました。『対岸のラ・アーク（仏領）に原発の再処理工場があり、そこから洩れる放射能で牛乳や海産物が汚染されているのに近く大拡張される。しかもそこで日本の原発の廃棄物の大部分が処理される予定。万一大事故が起これば二十五マイル以内は吹き飛ばし、そうでなくても大気や海の汚染が恐ろしい。日本ではこういうことを知っているでしようか』というものです。

急いで資料を探し、夢中で読みました。すると、これは日本でも今すぐ皆で考えなくてはならない大変な問題だということがひしひしと身に迫って感じられました。電力会社や政府は安全性や必要性だけを訴え、事故はで

きるだけ隠そうとし（美浜では大事故が四年間隠されていた）、原発で働いていた人びとがガンや白血病になっても放射能のせいではないと言いつづけています。けれど京大の市川定夫博士の研究によると、浜岡原発の周辺に植えたムラサキツユクサのオシベの細胞が青からピンクに変わり、放射能の影響による突然変異を明らかに示しているということです。

その放射能は、植物だけでなく、人、特に細胞分裂の盛んな胎児や乳幼児への影響が心配されます。また、原発の排水中に含まれる放射性物質は、最初は微量でも海藻やプランクトンに吸収され濃縮され、さらに魚貝に濃縮されて何百、何万倍となつて私たちの体に入ってきます。特に恐ろしいのは再処理工場です。ただでさえ危険な原発の、さらに三百倍もの放射性毒物を作り出してしまふのに、それだけの排出をやむを得ないとして認められています。しかも再処理によって取り出され

るプルトニウムは原爆の材料となり、一グラムで百万人を肺ガンにするという猛毒物で、その放射能の半減期は何と二万四千年です！人がらを表わす几帳面な字で、ワラ半紙一枚にぎつしり書かれた手がきニュースは、そくそくと人に訴えかける。送り手は長野県須坂市の主婦、坂田静子さん（五九）。

知られざる情報を伝えて

英国人技師と結婚した長女の悠子さんは、長男フィデル君を産んだあと、第二子は死産。「無農薬野菜を栽培し、玄米食を続けていたのに、妊娠初期の投薬が原因かも……と、悲しい思いをしましたのに、三番目の子をみごもっているときに、あの風光明媚なガーンジー島にまで核の影響が及びそうだとはいって立ってもしられない気持ちでした」

平凡な薬局の主婦にすぎなかった坂田さんは、七七年から変わった。三月には反原発集會に出席、市民エネルギー研究所の松岡信夫さんの話を聞く。

「ラ・アークの処理場付近のストロンチウムやセシウムは正常値の四倍、新生児の白血病発生率も高く、従業員が八人も白血病になったと先生にうかがって、そこに日本の廃棄物

障害者の立場で戦争を考える

長嶋伊都子さん

……身動きできぬほど混み合う疎開列車の

中で慣れぬ旅におなかをこわした私をおぶって便所へつれて行こうとした従姉が、「そんな大きな子を負うて歩くな」とどなられ、「足が悪い子です」と弁解すると、「そんな子つれてうるうるするな」とのしられた。

警報が鳴るたびに、足の立たない十歳の私を、四十歳の母がへこ帯で背中にくくりつけ、裏山へ逃げた。子どもとはいえ、十歳になっていた私は、小柄な母の背には重かったらうと思う。母のしんどさ pensando、どうせそのうちに焼夷弾にあたって死ぬのなら、一日も早く死にたいと子ども心に思った。

——この号に応募してくださった今西みな子さんの手記の一節である。戦争遂行に不必要なもの一切を切り捨てていく戦争。障害者・老人・病人たちは、戦時中、どんなつらい思いをしたことか。軍の中には、精神障害者を抹殺する計画もあったと聞く。動物園のゾウ

やライオンを殺したように――。

「人間を人間とみなさない、人間扱いしない、差別こそが戦争の原点だと思います」

その憤りを秘めて、カンボジア難民救済運動を支援するのは長嶋伊都子さん。両下肢機能完全喪失、一種一級の障害者である。といっても、室内では這って、戸外へは車いすで、自分のことはすべて自分で用をたす。

座ったままできる友禅染色のトレーサーとして、月収十五、六万。経済的にも自立している人。

死んでしまいたいと思った戦時中

「私は北京生まれ。一歳のとき高熱が出て、それがポリオでした。北京には養護学校もなく、とうとう学校には行けずじまい。でも、わりになく暮らしてました。家からは一歩も出ず、姉や家庭教師に読み書きを教えていただ

いて、比較的苦勞知らずでした」

一九四三年に母に背負われて東京へ。

「中国の孤児の方たちのことをテレビなどで見ますと、もし二年帰国が遅れたら、私も同じようになったのではないかと身につきまします」

「四五年三月の空襲では父も病気でししたし、死ぬなら一緒にと、どこにも逃げず、家じゅうで防空壕に入っていました」

障害者と病人をかかえた一家は、このあと祖父母のいる京都に疎開する。

「食べるものがなくて、毎日泣く思いでした。祖母はとてもきちんとした人で、食べ物を平





友禅のトレースにはげむ長嶋さん

等にハカリにかけてわけてくれる。それがつらくてほんとにいやでした。私は役に立たない人間、私の分をみんなにあげたい、と」

少しでも役に立ちたく、軍服につける肩章縫いの内職をしたという。

「ただ歩行不能というだけで、すべての可能性の面において差がつけられ、社会からも隔

離される。まさしくそれは無実の罪におとされて獄舎にとじ込められ、拷問にかけられる囚人の苦しみに似ている。ハンディ面のおぎないと社会の受け入れさえあつたら、自分の望む能力を最大限伸ばし得たであろう！ ああ、悔し涙をのみほし、自らの命を絶とうと死の淵を幾度もさまよったりしなくてすんだであろう！」『われら何を掴むか』所収の文章にみられる苦悩は、一見したところ今の伊都子さんからは全く感じられないが、この深い傷があつたからこそ、カンボジアが、同じ地平に受けとめられたのだらう。きっかけは昨秋のアグネス・チャンのカンボジア難民支援キャンペーン・コンサート。すぐに入会。集会に出たり、難民センターに救援物資を送ったり、カンバしたり……。

「大切なのは心や思います。障害者を大事にしない国は、難民に対しても心がない。お金だけあげればいいというものではありません」

自分の立場で運動をする

伊都子さんが友禅のトレーサーになったのは二十年前から。十七年前、仕事仲間の英二さんと結婚する。八歳下の健常者だった。

十年ほど前、仙台で開かれた「車いす全国

集会」へ。以来、二年に一度のこの会に出席している。大阪の、重度障害者の集い「まごころ会」のメンバーでもある。古切手を集めバザーを開き、一昨年、みんなの資金でマンションの一室を購入、「まごころホーム」をつくった。

京都の車いす市民集会にも参加した。メーデーでは、「福祉工場建設、段差を削って」を要望、市役所まで行進して市長に陳情した。「ものごころつくまで家にいて、学校にも行けず、友達も先生もなかったのに、今では外に出すぎて困るくらい。おかげさんで仲間も友達もどつきできました」

「広島にも長崎にも行きました。去年の琵琶湖キャンプの原爆記念討論会では、核は絶対反対やと話してきました。若い人は戦争のことでわからへんけど、戦争でいちばん苦しむのは障害者と病人です。けがや病気で障害者もたくさんできるわけだし」

「自分の置かれている立場の運動しかできませんから」と言いつつ運動を続ける伊都子さんを、夫の英二さんはこう語る。

「結婚してほんとによかったと思います。障害者には健常者がない、内側からパッと輝くようなものがあり、毎日教えられています」

主婦の立場で反戦を貫く二十八年

斎藤鶴子さん

全国組織の婦人団体の中で、いま反戦に最もストリートに取り組んでいるのはハ草の実会Vだろう。その中でも意欲的な平和研（平和問題研究グループ）の中心人物が斎藤鶴子さん。どう見ても五十前後にしか見えない方だが、明治生まれの七十一歳。

「疎開先の買い出しぐらいいで、戦争体験がないのが肩身が狭い」という斎藤さんの出発点は、杉並の主婦の読書グループ（ハ杉の子会）。PTA仲間の安井郁氏夫人に誘われて始めた学習から、一歩一歩踏み込んでいったという。日本の原水禁運動はハ杉の子会Vに始まるといわれるが、入会の年の三月、ビキニ被災、六月に原水禁の署名が始まり、斎藤さんも街頭に立つ。四児の母、下の子は五歳だった。八月には原水禁大会。育児に追われて大会参加はできず、初参加したのは六年後の一九六〇年、安保の年。

モに行つたのもこの年。「杉の子」と大きく、「婦人読書会」と小さく記したブラカートの下の斎藤さんは、若々しく、ちょっとはかんでいる。日付は六月十一日。樺さんの死の直前だ。

ラッセルに出した手紙

安保が挫折して、平和運動の中にも動揺と分裂が始まった。やっと参加した原水禁は、その翌々年には分裂。

「ソ連の核、アメリカの核、どちらならいいとか悪いとか、これは大変なことになったと思います」

素朴なハ杉の子会Vから始まった庶民の原水禁運動は、イデオロギーで引き裂かれた。核は核、どこの国の核だって同じ、と思う斎藤さんに、進歩的な学者たちの回答は歯切れが悪かった。

「ほんとうに悩みました。あの騒動で私は変



杉の子の仲間たちと社会科学を学習



議事堂前へ60年安保デモ

わったと思いますよ」

と、斎藤さんは当時を振り返る。「日本にはもう相談相手がいない」と思った斎藤さんの頭にひらめいたのは、バートランド・ラッセルだった。長男の英語の教科書に出ていたラッセルの文章の、戦争阻止に向ける情熱に心うたれた斎藤さんは、思いきって英文の手紙を出した。

「あなたは、いかなる国の核保有・核実験にも反対ですか、基地反対運動は平和運動から切り離すべきとお考えですか。下手な英語で字引きひきひき……」

まさかと思っていた返事が来た。「あなたの考えは死の灰を受けた日本人として当然です。戦争準備に関係するものすべてに反対すべきです」と。飛び上がって喜んだ斎藤さん



とラッセルの文通は続く。六四年、ハバートランド・ラッセル平和財団V設立についての協力要請も受ける。斎藤さんはハラッセル平和財団支持者協議会Vに入り、「ラッセル・アインシュタイン宣言」のシールを売った。反戦の思いをひろめるために。売上金を財団に送るために。しかし、日本におけるラッセル運動も分裂した。最後まで支持者協議会にとどまった斎藤さんだが、七〇年のラッセルの死とともに、それも終わる。

憲法だけは絶対変えられない

△平和のために手をつなぐ会Vや△ベ平連Vにも参加して、斎藤さんの舞台は、さらにひと回り大きくなる。そこで見たこと考えたことをプラスして、創立以来のメンバーだった△草の実会Vに活動の主力を移す。平和問題研究グループを提案したのは斎藤さん。

「△草の実Vが何をしてきたか考えてみると、主な行動は結局、戦争をつぶすことだったんですね。みんな思いあふれているのに、月一回の連絡会や地域グループ例会では平和のことだけを話し合うわけにいけないので、平和専門の部会をつくりたいと思ったのです。△草の実Vには、老研（老人問題研究グルー

プ）、教育研など、いろいろな部会がある。それに見習って新しい部会を、と、まず磯野富士子さんを招いて講演会を開いた。「私たちがしてゆけること、してゆかねばならぬこと——いま国際情勢の下で——」。家永三郎さんの『太平洋戦争』なども読んだ。読み終わって家永さんを招いて徹底的に質問した。どうして戦争を阻止できなかったのか、第二次大戦の実相は何だったのか……。戦争への思いは一段と深くなった。

『日本民衆の歴史』『意識のなかの日本』

『近代民主主義の展望』——平和研の学習は進む。国際情勢、その中の日本、改憲の問題点、どれを聞いても、斎藤さんからは打てば響くような明快な答えが返ってくる。なまなかの評論家など遠く及ばない。その広い知識を知識だけに終わらせず、いつも行動と結びつける限らないエネルギー。それは、タフだからではない。「いま憲法を変えられたら一大事」という情熱に支えられている。

「憲法が変われば戦争が始まります。九条支持者が八割から六割に減ったと新聞に出ていましたね。五割になったら、どうなるのでしょうか」

目にも声にも強い光がやどった。

税金の軍事費分不払い運動を続ける

高島まり子さん

デモや集会は気が重いけど、反戦の思いは何かの形で示したいと思っている人は少なくないだろう。そんな人にびつたりの運動をしているのが高島まり子さん（三三）。七年以来、税金の中に含まれている軍事費分の不払い運動を続けている。私たちが支払う税金のうち軍事費は五・二％。それは憲法違反の人殺し準備機構＝自衛隊を増強させるものである。憲法を守るべきわれわれ国民が支払う筋合のものではない、という運動である。

かかわったきっかけは、七四年の十一月、朝日新聞でこの運動のことを知ったこと。さっそく呼びかけ人に連絡、次の会合の日時を聞いて参加したという。

「七四年はベトナム反戦が下火になった時期。ああいう大衆闘争がおしまいになったって感じがあって、軍事力はますます強化されていくという現実があった。自分たちにふさわしいやり方があればやりたいなって気持ち

があったので、あの記事が目にとまったんだと思います。普通の生活者だからデモとか集会には参加しにくいけど、これなら日常レベルでやっていけるし、長続きできるんじゃないかと」

七〇年安保世代。反安保の議論の中で、安保廃棄は当然と思っていたし、自衛隊は憲法に照らしておかしいと思っていたけど、行動にまでは踏み出せなかった、自称「おしゃべり派」。

「心情的に戦争はいやだみたいなものは家の中にあっただと思います。両親が引き揚げ者なんです。北京や天津の建設会社勤めで、兄も姉もみんな向こう生まれ。幼児を連れて戻って来たあと、ちゃんとした仕事につけず、貧乏をひっかぶって暮らしましたから」

小学生のころ、うたごえ運動が盛んで、ともしび歌集を兄がたくさん持ち帰って、遠足などではいつも「原爆許すまじ」や「死んだ

女の子」を、ふつうのこととして歌っていた。戦争や原爆が恐ろしいことだ、よくないことだ、ということとは、自然にわかっていたし、抽象的、観念的な意味での平和とか戦争とかというのはあったと思う、という。

安保問題を英語で論争

大学では、ちょうど紛争の季節。考え方のちがうグループ同士の対立、無期限封鎖のお祭りさわぎを、「見てただけで、直接は何もしなかった」ノンポリ派。

サークルはESS。安保、沖縄返還、家永裁判など政治的な話題を二派に分かれて議論するディベートという活動形態があったが、ジャッジは米軍関係。当然、たとえば安保なら賛成派が必ず勝つ慣例。

「それが安保破棄で一度だけ勝ったことがあるんです。内容とか英語力とか、論点のポイントとかで、誰が見ても勝ったんだって喜んだんです。ミニ国連やディスカッションなんかもあって、民主的な論争の勉強にはなりました。だけど、ESSに入る人たちは、今でも多分そうだと思うけど、商社マン志望が多く、政治問題に関心を持ちながらも、結局は自分たちの出世とのからみで体制の中に組み

込まれていったみたいですね」

高島さん自身は小さな印刷会社に勤めたあと、新聞広告で見た日本物理学会の事務局の試験に合格。英文の『JOURNAL』の出版事務を仕事に。エベレスト登山で知られる田部井淳子さんの後任だとは、入ってから知った。

「良心の自由」で提訴

七五年四月からかかり始めた「良心の軍事費拒否の会」の中心メンバーは、クリスチャン、それもクエーカーなどの平和主義者から成るFORの人たち。それと、何らかの意味で、戦争で深い傷を受けた人。

「戦時中、徴兵拒否した人とか、ご兄弟が軍隊に行つて廃疾者になった人とか、労組で反納税闘争をしている人とか、いろんな方にめぐりあって、それぞれの生き方に、とても啓発されました。会の発起人の主軸は、ほとんど自営業、確定申告をしている方たちなので、私たちのような源泉徴収のサラリーマンがただ拒否できるかという疑問を持ちつつもかかわったのですが、かかわってよかったと思います」

初期はPRカーを回し、ピラをまくなど、



比較的是でな活動をしていたが、メンバーはふえもしないし、一年一年、年をとって、それぞれ忙しくなる一方。不特定の人相手ではそれほど効果がないこともあった。八〇年十一月、裁判闘争にふみこむ。牧師、教師、医師、タクシー運転手など、さまざまな職業の二十二人が原告になって、「良心の軍事費拒否」の訴え。高島さんもその一人になる。

「訴えの中心は、『武装集団』『自衛隊に私たちの税金が使われるのは『良心の自由』の侵害というもの。軍事費不払いを続けた方が差し押さえ処分を受けた不当を訴えるとともに納める税金が軍事費に使われる精神的苦痛の代償として原告一人につき三十万円の損害賠

償金を請求しました。名古屋の弁護士伊藤静男さんは、仲間の弁護士計四人で、七二年にすでに同様の裁判を起こしており、第一審が昨年十一月に出された。その第一審は敗訴、私たちのほうも勝ち目は少ないけど、提訴することによって問題提起したいと思っています」

公判はまだ始まったばかり。将来の見とおしはまだ不明だが、「良心の自由」で何とかたたかっていたいという。靖国合祀で中谷康子さんが「良心の自由」で勝訴したのに勇気づけられている。

この提訴には「自衛隊は憲法九条違反」という問題まで持ち込んでいるのだけど、これは最近の情勢ではむずかしそう。でも最高裁までやりぬくつもり」

国民一人あたり二万円あまりの税金が毎年軍事費になっている。そのような殺人準備に金銭的に加担するのは良心に反することだから還付請求をする。方法は比較的簡単。確定申告はサラリーマンでもできるし、解説のパンフ『軍事費拒否の手引き』も用意されているという。もし納税者の三割が実施したとしても大変な力になるだろう。組合の強いところからでも、まず始めてほしい運動に思われる。

◆平和をねがう

ぐ

る

ー

ぷ

紹介◆

声なき声の会

●連絡先 田無市向台二一九一五 高島方

声なき声の会は、一九六〇年、国会周辺の安保反対デモの人びとのなから、誰デモ入れる/声なき声の会といった横幕のもとに、自発的に集まった人びとの集まりである。安保反対運動の波がひいたあと、とにかく集まりをつづけていき政治を監視し、集まりに出てこれない人のために「声なき声のたより」を出すことになった。

それから今年の六月十五日で二十一年目になるが、そのあいだ、安保反対の集まりをつづけた。最初の二年間ほどは集まりもよく、浅沼委員長刺殺事件のときの抗議デモ、政暴法反対デモなど活発な活動をつづけていたが、次第に集まる人も少なくなる。そんななかで六月十五日には必ず集まって国会南通用門に

花を捧げることをくりかえしていたが、六五年、ベトナムに北爆がおこなわれたときに、それまで「声なき声のたより」を通じて連絡のあった市民組織によびかけ、ベ平連運動のきつかけをつくった。その後、公開市民教室、例会などで集まりをつづけ、七〇年の安保反対運動ではそれなりに活動し、王子野戦病院反対デモとか、反安保のデモに参加してきた。

七〇年以後十年間は、公開市民教室で、朝鮮問題や現代とはいかなる時代か、というテーマで長くつづけてきたが、現在は、新しい公開市民教室をひらく準備中である。

メンバーは、六〇年安保当時の人たちはすでに年輩者になり、なかでも、八十をすぎた方が亡くなったたりするなかで、現在、中心は三十代の全共闘世代の方々が中心になっていたが、次第に二十代の人びとが中心になってきている。例会に集まる人たちは、七十代の方や、六十代、五十代、四十代、三十代、二十代とさまざまの老若男女で、話しあいをつづけている。

別に会則も会費もない自由な会であるが、戦争を二度とおこしてはいけないという、平和を愛する人の集まりである。近く、新しい旗をつくり、心をあらたにして活動をつづける予定である。
(小林トミ記)

反徴兵・反安保連絡センター

(J A M)

●連絡先 東京都新宿区四谷三一九

TEL (〇三) 三五五—三〇八四 慶和ビル七〇四号

一九八〇年六月、関西経団連会長日向方斉の「徴兵制発言」など状況の右傾化を背景に、若者を中心に反徴兵・反安保連絡センターを結成しました。イデオロギーにとらわれず、多種多様な考え方、生き方をもった人びとによって構成されています。具体的な活動としては、昨年の六月十五日「反徴兵・反安保・韓国民衆と連帯する集会・デモ」の中心をにない、その後月一回徴兵制を主なテーマとし、反徴兵の集いを行なってきました。反徴兵と

いうテーマは、ただ単に徴兵制に反対するばかりではなく、戦争へつながらざるすべての反動攻勢を阻止する闘いとしてあります。

現在、メンバーの約半数が女性で、三月の集い「女と徴兵制」を契機に女性問題への関心も高まり、内部学習会として「女を考える」(仮称)を計画中です。たえず広い視野を持ち、さまざまな観点から世の中をみていきたいというのが、私たちの運動です。

(渥美京子記)

ありの歩みの会

●連絡先 武蔵野市関前四一六―一四
TEL (〇四二二) 五二一〇二三

武蔵野市在中の母親七人のささやかな自主活動グループ「ありの歩みの会」は戦争体験を伝える映画を上映して足かけ二年になります。

五年ほど前、むさしの子どもの劇場の活動の一つ、高学年問題研究会で子どもたちの文化状況を語り合っていくうち、「現在の子どもの文化状況を考えるためには、三十数年前にこの国が行なった戦争の問題を抜きには考えられない。戦争を知らない世代が過半数を越し、戦

争体験の風化と言われるけれど、私たち母親はきちんと次の世代に戦争体験を伝えていさるうか」という反省から戦争体験を伝える映画会を始めました。月一回の映画会を一年半ほど続けたところから、六千名を越える会員をもつ子ども劇場の組織の中で、なぜ今、戦争映画を上映するのか? という声があちこちから出てきました。この問いかけについて会員全体の理解を得るのには、それだけで大変時間のかかることであり、話し合いを続けている中で活動のほうはストップという状態になりました。

劇場の母親たちの意識に失望と疑問を感じながらも、とにかく映画上映を続けたいという母親六人で、月額五百円の会費を出し合うことにして、自主上映グループ「ありの歩みの会」を発足させました。戦争体験を伝える映画の上映とともに、中島飛行機製作所跡などの戦跡めぐりや、丸木美術館の見学会、平和問題についての学習会参加者との話し合い等も行なってきましたが、最近の世界的な軍拡競争、軍備増強の日本政府の姿勢を見えますと、映画を上映するだけでよいのか? どうしたら無関心な人たちに戦争の問題へ目を向けてもらえるのだろうか? また関心あ

る人にどうすれば上映会場まで足を運び、話し合いの輪に加わってもらえるだろうか? などと悩みつづ歩んでいます。

(宇田川順子記)

良心的軍事費拒否の会

●連絡先 千葉市土気町一七八九―一四
TEL (〇四七五七) 四一六三六三
オノノ方

私たちの払っている税金のうち、五・二％が軍事費に使われています。所得税十萬円の場合、五、二〇〇円にもなります。この税金を福祉、教育、その他、今、最も必要としているものに、使ってほしいと思いませんか。私たち自身が人殺しに加担しないためにも、ひとりひとりの額は少なくとも「軍事費はいやだ」という意志表示のためにも、軍事費拒否(還付請求)をしましょう。

現在、会員は全国に約四百名おり、機関紙『すきのは』で結ばれています。沖繩と、関西にもグループがあります。

二十二名の会員は、国を相手に軍事費不払い確認訴訟を始め、第二回公判は五月七日にあります。

訴訟の支援もよろしくお願いします。

(伊藤めぐみ記)

朝霞基地をなくす市民の会

●連絡先 練馬区西大泉町二〇三五—一八

菅野方

当会は七三年以来朝霞で行なわれている自衛隊観閲式に反対するために七八年に結成された。

構成員は、六〇年、七〇年安保運動を経験した教師、会社員などで、代表は女性が担っている。そのほか、デモや集会の際には顔をみせる人も多い。

昨年十月二十六日の自衛隊観閲式反対闘争には、新座市議の太田博子さんから主婦のグループとともにデモ行進をした。朝霞基地パンフなどを作製したり、ひと味ちがう、手づくりの活動を心がけている。

最近強まった右傾化に歯止めをかけるために、自衛隊観閲式を行なわれる当地において市民たちと一緒に「自衛隊反対」の声を、高く、強くあげていきたいと思う。

(S記)

ニューウェイヴ80運動

●連絡先 浦和市東仲町一四—一三

TEL (〇四八八) 八五一—一三八

(〇四八八) 三二—九四二〇

八〇年六月十五日、「反徴兵・反安保・韓国民衆に連帯する集会」でニューウェイヴ80運動は旗上げした。埼玉県南部を中心とするこの運動の大きな特徴は、単なる政治運動だけの運動の大きな特徴は、文化や生活の全領域にわたって、人々の感性を解き放つという、新しい政治のスタイルを模索しているということにある。構成員は、労働者、市民団体だけでなく、リブ、学生、クリスチャン、ロックグループなど、団体あり、個人ありで実に多彩。また浦和市議の小沢遼子さんや、八日本はこれでもいいのか市民連合Vの角南弁護士も参加している。

昨年の大きな活動は、十三日間に及ぶハンストを闘った川金大中氏を殺すな／＼行動と、10・26朝霞自衛隊観閲式反対行動である。特に後者の場合は、ウラワロックンロールセンタ―の手によるロックを前面に押し出している子供づれのなごやかなデモンストレーション

であったが、そのロックバンドが当局にマークされ、音楽器材を搭載しているトラックごと運転手が逮捕されるという事態が起こったのである。反戦の意志表示をすること、平和への歌を歌うことすら、国家権力の目には邪魔者として映るのだろうか。市民運動が国家権力からマークされる世の中というものは、幸福な時代とはいえないだろう。だから今後とも、政治、文化、生活等多方面にわたる、層の厚い運動を構築していきたいと考えている。

また昨年行なわれた12・7戦争への道を許さない女たちの集会の埼玉集会在、ニューウェイヴ80運動に集った女たちと市民たちの手によりなされている。(大沢統子記)

核廃棄物の

海外投棄に反対する者たち

●連絡先 福岡市西区内野五五一

TEL (〇九二) 八〇四—一九六六

「核廃棄物の海洋投棄に反対していまアース。どうぞ署名にご協力くださいア—」

福岡市の目抜き通り、天神の角に立って、声をかす中年の女たち。福岡市公民館に集う自主グループ、《葦の会》や《くらしの学級》に

学ぶ主婦たちです。六〇年安保を見、七〇年安保に刺激されて、「学習」の結果が「行動」に結実した人びとなのです。

ことの起りは一九七一年、被爆の治療に「密入国」した「朝鮮人被爆者孫振平さん」に治療と在留を福岡市民の会」にかかわってから。社会への目を次第に開いて、社会教育法「改正」案の国会会上げ阻止、福岡市社会教育の中央集権化、合理化反対、さらに去年からは、九州電力の豊前市火力発電所設立に反対する「豊前環境権裁判」支援にも立ち上がりました。生協や、主婦卓球愛好会などの活動にかかわるうち、自分の生活を守るための生協の意義、自分の健康を確保するための権利としてのスポーツの意味などを意識として確立した人びともあります。「学習」と「行動」を切り離していこうとする動きに、「生存権を保障するための学習権」という強い認識に立って対応してきた主婦たち——。

したがって学習の講師も、たとえば環境権裁判の松下竜一、反原発の平井孝治、横浜寿町の野本三吉、中九州ニュータウン反対の小野三基雄といった実践活動家たちと、それらの運動になんらかの形でかかわっておられる九州大学の横田、垣田、京都精華大の穂田教

授などの面々です。

といって、この十年あまりの学習と運動は、ひとりひとりとって非常に困難な場面に遭遇することも多く、決して平坦な日々ではありませんでした。それは、いわゆる「活動家」との共闘であったり、学生さんとの共闘でもあるわけですが、いつの場合にもそれは自らの納得のいくものを創造し、主張していくという、ある時は非常に困難な、しかしある時はまたひとしおの歓びをも感じるいきいきとした動きともなるわけです。

私たちの大半が、戦前戦中戦後を生きてきた者たちで、過去の体験をとおして、今自分たちがどう生きるかと考えるとき、それは真実は何か、と問いつめることであるし、その真実に基づいて自らの生き方を自らで決定していくことだと思っています。ほそぼそではありますが、そうであればあるほど、私たちは声をかけ合っていこうとしているのです。十年余のそのような体験は、それぞれの人を柔軟に、そして鋭く変革していっています。

フリーピンバナナ労働者の訴えに呼応し、2・11集会にデモに、天皇制粉碎のシュプレヒコールを叫び、反原発の映画の会をもち、街角で道行く人に声を出し、呼びかけること

によって、自らの生き方への確信を深め合っているのです。

そしてどこへ行くにも、手作りのおにぎりを持ち寄ってのお昼のひとときは、たのしくたのしく過ごして、愉快な仲間であることを喜び合っているのです。

(伊藤ルイ記)

日本はこれでもいいのか市民連合

●連絡先 渋谷区千駄ヶ谷五―一二―二三

アドス御苑五〇二号

TEL (〇三) 三五二―二七八四

「おたがい、対等、平等に生きる。これは、ことばを変えて言えば、われわれは自ら抑圧者にも被抑圧者にもならぬということだ。(略)自由の基本は自決、自立。自分のことは自分で決め、自分の足で立つ。」——市民宣言(案)より——

昨年十二月に発足集会を開き、市民宣言を採択、この一月から本格的な活動に入り、賛同者はすでに千名を超えました。

最近の「右傾化」「保守化」の流れに對抗しようという集まりで、年齢、性、職業等を問わず、市民の自主的な個人参加をうたっています。具体的行動としては、二月に「憲法」

「安保」「市民宣言」についての集会、そして防衛庁へのデモを行いました。

賛同者および事務局メンバーに、まだ女性が少ないのは残念なことです。この団体では性による差別ももちろん絶やさなければならぬことだと考えています。性差別、階級差別、民族の差別など、あらゆる差別をなくし、それぞれが自立し、真に自由な生き方をするために行動していきます。集会の際には必ず保育室を設け、女性が参加しやすい形を心がけています。また、市民宣言の点訳や、手話の学習会も行なっています。(古賀節子記)

静岡市空襲を記録する会

●連絡先 静岡市上足洗二一五六一五

小長谷澄子方

TEL (〇五四二) 四五—六九八二

「静岡市空襲を記録する会」は、市民の空襲体験を記録する目的で、去る七一年夏発足しました。七四年、記録の完成によって一応初期の目的は達せられましたが、昨今の右傾化の状況と戦争体験の風化を見すこすことができず、昨年ごろから再び活動をはじめたものです。外への働きかけと会内部での学習をめ

ざしています。

これまでの活動は、八〇年六月十九、二十日(静岡市が空襲によって焼土と化した日)の両日に、ビラまきにより空襲の事実と平和を訴えたこと、また本年三月十三日、フィリピン、ビルマ戦線に従軍した元日赤看護婦の敗走体験を聞く会をもったことなどです。

今後は昨年同様、六月十九日、二十日にビラまきをするともに、六月末に講師を招いて市民集会を開きたいと思っています。そのほか七月以降に学習会も予定しています。構成員は、男女合わせて十二名です。

(小長谷澄子記)

草の実会

●連絡先 杉並区西荻北二一三六一二

TEL (〇三) 三九〇—〇八四七

朝日新聞婦人面の投稿欄「ひととき」の投稿者グループづくりが始まったのは昭和三十年。機関誌『草の実』への投稿を中心に続けられた草の実会の活動は、花火のように空に大輪の花を咲かせることはなかったが、小さな草の実は、いつも路傍にまき続けられている。

「もともと投稿者のグループなので、どちらかというと、集会とかデモは不馴れ、という人が多い」と、ある会員は仲間を評するが、「その分、学習会や読書会には熱心です」とも言う。月に一度の地域グループだけでは突っ込んだテーマの討論ができないと、教育研・平和研・憲法研・老人研など、いくつかの研究グループも生まれた。そうした研究グループの所属会員に会ってみると、問題についての知識の広さと深さ、切り口の鋭さに驚かされる。なみの評論家など顔まけの人も少なくない。たとえば老後問題を考え続けて、その道の権威者となった二瓶万代子さんのような人もいる。主婦の学習会だから程度が低いだろうなどと考えると、とんでもない。

密度の高い学習会と機関誌一例をあげよう。平和研で出しているいくつかのパンフレットは、学習会の講演録を集めたものだが、内容は、藤井治夫「防衛論争の危険な背景」、増田祐司「日本の防衛産業と路線の選択」、横堀洋一「最近のアジア情勢」、宮嶋信夫「エネルギー危機論と太平洋戦争の教訓」、日高六郎「日米安保条約をどう捉えるか」など、どれも核心をついた、レベルの高いものである。

月刊の機関誌『草の実』の内容も、密度の高いものだ。「平和」を特集した、一九八〇年十月号の内容は、●八・一五デモ●金大中氏救出署名●いま自衛とは●原水禁国際会議●第二十六回母親大会●首相、法相宛の抗議文、「平和と特集」のほか、「国連婦人の十年中間年特集」として●日本大会実行委員会●デンマークへ●福祉と平和と友好の旅●スウェーデンの女性、が中心記事。ほかに「さけて通れぬ道、老いて病むとき」に三十ページをさいている。二万部を発行する『わいふ』に比べるとずっと地味だが、一つ一つの発言には、ずしりと重い生活と行動が光っている。もともとと読まれてよい本である。

続ける反戦デモ

全国組織の婦人団体四十八団体による11・22「国連婦人の十年中間年日本大会」では、各団体が思い思いのスローガンを掲げたが、ハ草の実Vのプラカードは「反戦」の二字。草色の地に白ヌキの文字がひととき印象的だった。生活を見つめ、生活を記録する中で、この会の最大の関心は平和問題にある。8・15デモも続けて十年、当初は毎月15日デモだったが、さすがに毎月はきびしく、いまは一月、八月の年二回だけ。毎回五十人程度と小

つぶだが、毎回くふうしたビラをまく。「もう一戦争への道」軍国の母はもうごめん」など、横断幕を染めたり、プラカードづくりに夜なべしたり、手づくりの、思いあふれるデモである、ただ、問題は、年々会員が高齢化していくこと。デモの主流もほとんど五、六十代。先行きが心配、の声もある。この貴重な会に、若い人びともどしどし参加することを期待したい。先輩から得られるものも多いと思う。

会費は月額五百五十円（機関誌代三百五十円込み）だが、近く改訂の予定。

（取材・斎藤）

平和のために手をつなぐ会

●連絡先 大田区南千束一―一―六

青木紀久子方

TEL (〇三) 七二九―一三四六

ビキニ被災のころに主婦の反核運動としてスタートしたこの会は、最盛時の二百五十名近くの会員は七十人程度に減ったが、もう二十年あまりも根気よく地道な活動を続けている。

最初は乳歯のストロンチウム検出運動。子

どもたちの抜けた歯を集めて、核実験による「放射能の雨」の恐ろしさを実証した。原爆の未公開フィルムをTBSが取り寄せようとしたとき支援したのもこの会。あふれる思いを託した最初の文集は、『だまっていられなくて―七〇年安保前夜』。主婦でも声を出そうと、百ページ近いパンフにまとめた。

憲法についての勉強は、文部省が戦後まもなく出し、その後絶版にした「新しい憲法のはなし」が最高と聞いて手に入れ、その学習の感想文を加えてまとめた。教育問題については共同通信を通じて呼びかけ、約四十篇の手記を『明日のために』として刊行。反原発問題は『人類をおびやかすもの』に。どれも具体的でわかりやすい解説書になっている。

刑法改悪のころには、弁護士さんの話を聞き、『一億人の刑法』を読んで自民党の草案と、自分たちの案の対照表をつくり、批判点を明らかにして法務大臣に提出した。

創立以来、毎年七月に催している被爆者援護のバザーと署名運動は、例年三、四十万、昨年は六十万の寄付金を集め、原爆老人ホームなどに送って喜ばれている。

六本木のマンションに毎月一回集まって例会。会報『和音』（B5判8ページ）は年三回

程度発行。会費は月百円、年千二百円で機関誌代込み。会報は一部五十円、希望者には郵送する。

(取材・後藤)

北富士・忍草母の会

●連絡先 山梨県南都留郡忍野町

忍草二〇六

北富士・忍草母の会は、一九六〇年七月、六〇年安保闘争に参加して、樺美智子さんを先頭とする青年学生、とりわけ婦人の闘いに触発された忍草入会組合の婦人によって結成されました。

それ以来、北富士演習場の全面返還、平和

利用、入会権の確立、入会地の奪回をめざして、北富士闘争の先頭で闘ってまいりました。農民の生きる権利をふみにじり、入会地を無断使用して、侵略戦争のための人殺し訓練を強行する米軍、とりわけ沖縄第三海兵隊や、陸上自衛隊の実弾演習に対して、着弾地にゲリラとなって潜入し、体を張った演習阻止の闘いを、ねばり強く今日まで続けてきました。また、六七年七月より、演習場内に入会小屋を建て、会員が二十四時間交替で座り込む闘いを、十四年間続けております。政府、自衛隊、右翼などに建てては壊され、建てては壊されて、現在は第十五番目の小屋になります。今年から来年にかけて、富士演習場において、史上初めての陸上の日米共同演習が強行

されようとしています。この米第三海兵隊と陸上自衛隊の共同演習を認めることは、朝鮮・中東の民衆の自主的民族的立ち上がりや、戦争にうったえてでも押しつぶそうとするアメリカに手を貸すことになり、また、自衛隊が米軍と同様のアジア侵略軍に変わることを認めることになります。私たちの入会地が、そのような侵略のための訓練に使われることは、絶対にがまんがなりません。昨年四月以来、「富士を朝鮮・中東につぐな」を合言葉に、日米陸軍共同演習反対の闘いを、自衛隊、警察、山梨県当局、右翼暴力団一体となった攻撃に屈せず、闘い抜いております。なお会員は、約百五十名ほどです。

(佐藤記)

ドメス出版

松本員枝聞き書きの会編 自由と解放への あゆみ

松本員枝聞き書き

大阪婦人民主クラブを拠点に
今なお女性解放と生命を守る
たたかいの先頭に立つ『白髪
の童女』が、自らの人生と時
代を語る明日への証言。

もくじ 運動への問いなおし
／生いたちと青春時代／戦争
とファシズムの嵐をくぐりぬ
けて／自立と連帯を求めて／
未来への責任／松本員枝と大
阪の婦人運動年表 1300円

渡辺悦次・鈴木裕子編 たたかいに生きて

戦前婦人労働運動への証言
もくじ 赤濁会の人びと—近
藤真柄さんに聞く／川崎三菱
争議と中田小春—中田惣寿氏
に聞く／太陽のない街の闘争
—石倉千代子さんに聞く／製
糸工女から中間派無産婦人運
動の闘士へ—岩内とみゑさん
の手記と話／戦前の紡績女工
の闘い—岩内善作さんに聞く
ほか 1300円

渡辺悦次・鈴木裕子編 運動にかけた女たち

戦前婦人運動への証言
もくじ 左翼婦人労働運動の
先駆—小見山富恵さんに聞く
／4・16事件と東交大争議—神
山ハナさんに聞く／昭和恐慌
と総同盟系婦人運動—赤松明
子さんに聞く／恐慌下の埼玉
農民運動のなかで—岡綾さん
に聞く ほか 1300円

東京都豊島区駒込1-35-2 千170
振替東8-48766／電話03-944-5651

おんなふみ

グループおんなふみ編 A5判 980円 女たちは、自らの発語を持ち自らの感性を持って書き始めた……。女による女のための女の文芸誌、いま静かなブーム。

お産の学校

私たちが創った
三森ラマーズ法

お産の学校編集委員会編 B6判 1500円 女が主体的に産むとは主体的に生きるということ。女性解放の原点としての出産を問う。 日本図書館協会選定図書

主婦が歩きだすとき

高橋ますみ著 B6判 1000円 病身の姑と幼い二児をかかえた「主婦」が、厚い壁に立ち向かいつつ敢然と歩く。その道程の痛みが、感動の波となつて伝わる。

リブ・ラブ・ライフ

小室加代子著 B6判 980円 リブに愛と生命を、人間解放の本質に迫り、リブを希求する白熱の評論集。七〇年代婦人雑誌史の概要も兼ねた異色のスタイル。

自分を変える本

リン・ブルームほか著 B6判 1300円 なぜ生き難いのか。それを変える方法は……。女がつくられた過程を女流心理学者が鋭く分析、数百の事例を基に、生きる勇気を与える自己解放の書。 日本図書館協会選定図書

遊んで育てる

子どもの潜在能力を伸ばすために

B・テラー著 あごら翻訳グループ訳 1300円 子どもの成長に応じて、親も子も楽しみながら、からだと心と知能を発達させる、上手な遊び方を具体的に指導。両親はもとより、保育所・幼稚園の先生のテキストにも。

菜の花と雷さま

美森成生著・日晝修一絵 B5変形判 1800円 母から子に伝えられた愛媛方言による異色の民話童画集。 全国学校図書館協議会・日本図書館協会選定図書

あごら読書室

新マルサス主義を撃て！

——誰のための「人口抑制」か——

奥田孝晴著
風濤社

最近、『人口爆発から地球を救え』という新マルサス主義の言葉をよく耳にします。これは、ベトナム戦争に敗れてから、アメリカが本気になってとりくみだした問題です。本書は、『人口爆発』の思想が、アメリカの大財閥ロックフェラーを中心にして作りだされたものであることを立証し、『人口爆発』の真の意味を解明した力作です。

子供を何人生みたいかを決めるのは、女性自身、もしくは夫婦です。ところが、ロックフェラーや日本の笹川良一氏は、第三世界の女性たちに強制的に不妊手術を施すために、巨額の金を投じています。第三世界の人口が増加するとなぜまずいのか。それは、石油や食料などを安く輸入することで保たれているア

メリカ帝国の繁栄がおびやかされるからです。

武力で第三世界に君臨するより、不妊手術のほうが手軽で安上がりだ、という、これは女性を犠牲にした政策です。それでは、なぜ第三世界の人口が増加しているのかといえ、アメリカが第三世界の労働力を安く抑え込んでいるからです。稼ぎの少ない両親にとって、子供の収入は有難いものです。まさに「子は宝」です。安い労働力の結果として、子供が多くなるのは当たりまえでしょう。第三世界の人口問題は、第三世界が真に自立したときに、国民が自主的に解決することでしょう。

作者は、宇井純の「自主講座」でまとめ役を長くつとめた人です。本書には、本論のほかに、リンダ・ゴードンの「人口抑制の政治学」の日本語訳と、強制的に不妊手術をされた女性たちの声も収められています。

「石油危機」「食糧危機」といった作られた

危機感から戦争に突入する可能性が大いにある中で、戦争を避け、第三世界の女性たちと真に連帯するために、今一度、作りだされた人口問題をきちんとみすえておこうとするとき、本書がよき手助けとなると思います。

(谷 八重子)

(B 6判 二四二ページ 二〇〇〇円)

霧氷の花

——因われの女たち 第一部——

山代 巴著
こゝろ書房

広島県の北部、中国山脈に囲まれた三次。戦争が終わりに近づくころまで、ここに三次女囚刑務所があった。

古い時代の牢屋そのままの格子戸に、大きな錠前の刑務所は、冬になると気温が零下十二度までさがる。三次名物の霧氷が這い流れ、使ったてぬぐいがたちまちキンと凍りつく。そんな厳しい環境の獄舎に生きる女たち

は、放火犯、スリ、母親殺し、窃盗犯、と罪名はおどろおどろしいが、そうせずにはおられなかった深い哀しみを背負った者ばかりである。

天皇陛下にたてつき、戦争に反対している思想犯、とおそれられながら、主人公吉野光子が送監されてくる。しかし、正直そうな目をした小娘のような光子の懸命に生きる姿に、心をかたくよろづいていた看守も、女囚たちも、しだいに心を聞き、あたたかいいたわりさえ見せるようになる。

前科二十二犯。人さらいにサーカスへ売られ、芸人になった片目の女コソ泥は囚人番号二十九番。学校へいったこともない彼女が、「高等教育は何のために受けたか。まっ直ぐに生きるために受けたんだろうが。まがりなさんなよ。弱気を出して曲ったら思想犯の値打ちはないぞ」と光子を励ます。放火犯にしたてあげられた村娘、二番は、歯痛で発熱した光子のために、薬で「えんぼう」（保温のための籠）を編んでくれる。廊下を運んで来るうちに氷が張ってしまう粥の井をすこしでも温めようとして。

名作「荷車の歌」の作者、山代巴の自伝的大河小説「囚われの女たち」全十巻のうちの

第一部である。ファシズムの吹きすさぶ冬の時代に、地を這うように生きる女たちの強さと優しさに励まされ、自らもまた励ましさえして、成長してゆく吉野光子の姿。それは、誠実に生きるとはどういうことかを、ずしりと問いかけてくる。続篇が待たれてならぬ感動の書である。

（A5判 三四四ページ 一五〇〇円）

（智）

主婦の戦争体験記

——この声を子らに——

いずみの会編

風媒社

「考えてみると、私の苦労は大したことではありません。一番苦勞した人たちは、みんな死んでしまったのです。私は亡くなった人たちに代わって書かなければならないと思いました。」あとがきの座談会でこんなことをいっている。朝日新聞「ひととき」欄で結ばれた、中部地方の主婦三十五人の戦争体験記である。

引き揚げの体験の後に、「いま自分の頭の上に爆弾が落下されようとしていたらどうしますか、死ぬ以外に逃げ場のない戦場にさまよう自分を。苦しい世代を生きぬいてきた私た

ち、二度と若い人たちにあの苦しみを味あわせたくはない。私は叫ぶ、声を大にして、絶対に戦争はいやだ、敗けても勝つても」と言う。

すみぬりの教科書では、「くる日もくる日も筆を片手に落書きでもするようなつもりですみぬる。あのころぐらいい前言をひるがえすのにためらいのなかったことはない。それに対して責任さえ感じなかった。不可抗力だと思っていたからだ。子どもたちは、この無責任な自信をなくした教師から、何を学んでくれたのだろうか」

「教師を動評で金しばりにし、生徒はテストで追いまくって、ことの本質をつきつめて考えようとしないうちに利己主義的な人間を造りつつある。また教科書検定に際しては、従来の戦争否定、民主主義確立の線が薄くなり、期待される人間像」に示されるような、没個性的な権力に従順な人間を仕立てあげようとしています。民主的な考え方の子どもたちが育つてはやりにくくなるので、次々に組織的に手が打たれてきています。母親にとつて、自分の子を本当に人間らしく育てることのできない、そのことへの怒りと、戦争への憎しみは本来同一のものであるはずなのに、それが

うまく結びつかない……」戦後二十年目にこう感じ、「今、その延長線上にあると思う」と言う教師。

「戦争も徴兵検査も出征も慰問袋も知らない幸福な子どもたちが育っている。しかし、この子どもたちの幸福が、戦争への無知の上に築かれているとすれば、戦後を終わらせ、新しい戦争の準備をしている軍国主義者たちの好餌とならないとも限らない」読み終わって、戦争は絶対にいやだという原点在ちかえった思いだった。

(岡部)

(B6判 二三四ページ 三〇〇円)

核・天皇・被爆者

栗原貞子著

三一書房

著者は広島に生まれ、三十二歳のとき広島で被爆している。本書は、新聞雑誌等に発表したエッセイに「原爆文学論争史」ほかの書きおろしを加えたものである。

彼女が見すえているものは、表題が示すとおり、原子力発電といった平和利用も含む核と、終戦によっていったん消えさったはずの

天皇制と、その天皇制のもたらした、最大の災禍である被爆ということである。

広島文学の歩んできた道は、「広島文学論争史」に詳しい。被爆者がヒロシマを書くということは、必ずしも無条件に受け入れられることではなかった。被爆者が被差別者であったという、戦後の現実とともに、被爆体験を売り物にしているという非難もあったという。筆者は広島にこだわりのつづけ、広島を書きつづけ、その意味をみずから問いつづけ苦しんだ太田洋子を軸に、その論争をつづけている。

被爆という悲惨な戦争体験をした人たちは、戦争を引き起こした天皇制権力に対して怒りを持ち、こだわるかといえば、必ずしもそうではない。被爆直後で死傷者が横たわり足の踏み場もないところでも、御真影を避難させるために背負って、「御真影です」といつて通れば、動けそうもない者まで直立し最敬礼をして道を開けてくれたという。絶対性をうえつけられた人間の反応に慄然とする。

ただ原爆反対を叫ぶだけでは、戦争反対につながる、と筆者はいう。三十四年九月、広島県動員学徒犠牲者の会は、「動員学徒死没者靖国神社合祀に対する陳情書」を国・県

に提出している。被爆者で、原水爆禁止を悲願として書きつづけてきた正田篠枝さんですら戦後の平和天皇を信じ、天皇に原水爆禁止の先頭に立つてほしいと陳情している、という。

著者は、戦争を引き起こした、かつての天皇制権力・体制とともに、それをかえりみない現在の天皇にこだわりのつづける。そして、天皇自身の戦争責任を問い、八月六日と八月十五日を切り離して考えることなく、連続した反原爆・反戦として考え行動すべきだと述べている。

自国の戦争責任を放置したまま、「ヒロシマ」は叫べないと、詩人である彼女は、「ヒロシマ」というときに」という詩をこう結ぶ。

△ヒロシマVといえは

△ああ ヒロシマVと

やさしいこたえがかえって来るためには
わたしたちは

わたしたちの汚れた手を

きよめねばならない

(汎)

(四六版 二三〇頁 一二〇〇円)

日本の兵器工場

鎌田 慧著

潮出版社

本書は、日本の軍需産業の復活から筆を起し、二十社におよぶ武器製造企業の実体を詳細に述べている。これをみてみると、表むきは軍隊も持たず、最少限の専守防衛をしているだけだという日本に、なんと多くの兵器工場があるかと驚く。そこでは、小は弾丸からロケット、ミサイルにいたるまで作られて

いる。武器輸出についても、武器の形をしたものを輸出することは禁じられているが、軍事技術についての共同研究は、すでに始められている。そして、武器と名づけられないものは、ほとんど輸出されており、例えば仮想敵国であるはずのソ連へも、空母の受け皿となることが明白だという浮きドックが輸出されているということだ。著者は「軍拡競争は一方では増税と社会福祉の縮小による貧困を産みだし、一方は武器輸出となってロッキードグラマン、ダグラスなどの航空機売り込み競争にみられたように、政治を腐敗させ、輸入

各国の軍事化を強め、高官のふところを肥やして展開される」といいきる。

またこうした兵器工場の多くを、主婦のパートタイマーが支えている、という事実もある。そこでは、女が弾丸を作り、箱詰めをして、送り出しているのである。

巻末には、日本兵器廠と名づけられた三菱重工業・防衛秘密保全規則をはじめ、兵器工場一覽等の資料もめせられている。日本の防衛力の増大を支える軍需産業の底力の大きさを知らるによい一冊だ。

(四六版 二九八頁 一三〇〇円)

自由と解放へのあゆみ

——松本員枝聞き書き——

松本員枝聞き書きの会編

ドメス出版

本の扉を開くと、白髪と深い皺につつまれたなんとも可愛らしい笑顔の写真がある。戦前、二度の投獄にもめげず、人間解放のための運動を手ばなさずに来た人か、と深い感慨にとらえられる。

松本員枝さんは、和歌山県の農家の娘として生まれた。明治の男としては珍しく料理が趣味という父が、嫁のもらい手のなさそうな

娘に元入れ(投資)をしてくれたので、東京女子高等師範学校へ入学。自由であたたかい心を持つ娘は、しだいに、エスベラント運動や新劇に関わることで、社会への目を開かれてゆく。

共産党のシンパとして、資金カンパの一役を担ったり、女性グループを組織したり、と戦後の運動の基礎は、このもつとも困難な時代に、彼女の中で準備されたといえよう。戦後、大阪に根づいた多くの民主グループの事務局が、松本さん方に置かれた。婦人民主新聞の大阪支局長となり、婦人運動体の、政党からの自主・自立を守りぬく。

松本さんの半世紀をこえる運動史の中で、とくに哀切に読者の胸を打つのは、可愛がっていた甥の死により農業裁判に立ちあがるくだりである。

気どらぬ口調で語られる一人の女の個人史の中に、多くの感銘ふかい言葉がかくれている。

入党を勧めるある共産党幹部の「いま黨員になれば、五年後にあんたも偉くなれる」という言葉に、「偉い人になりたいなんて、きょうまで考えたこともなかったわ」と断わる。「わたしの信条は『人を侵さない』というこ

と」と解放運動ひとすじを支えた理念を語っている。

明治生まれの女性の芯の強さと優しさを、ふだん着のさりげなさに語りかけてくる書である。

(山)

(A5判 二四ページ 一三〇〇円)

あいち従軍看護婦の記録

日本赤十字社愛知県支部編

日中戦争、太平洋戦争に際して、病院船、野戦病院および、陸海軍病院で戦傷病者の救護活動に挺身した赤十字看護婦の記録集である。日赤愛知支部から日支事変を契機として編成された救護班は25班、六八二名であった。戦争を知らない若い世代の看護婦たちに、先輩が血と涙にまみれて「苦病」から、人間を救った崇高な赤十字精神を受けとってもらいたいと、すでに高齢に達している先輩看護婦たちがつづった手記である。

彼女らは、中国、フィリピン、ボルネオ、セレベス、ジャワ、ニューギニアなど南洋群島に派遣され、医療器具、薬品、衛生材料、飲料水など満足なものは何ひとつなく、地域

によつては、コレラ、腸チフス、赤痢、マラリア、デング熱などの伝染病が蔓延。負傷兵の包帯交換の折に、傷口から、ポロポロとうじ虫が、とつてもとつても出てくる。塩分不足から梅干しが貴重品になり、死期に近い人を優先して与えたりする。亡くなったあと、前日までに与えた梅干しがそのまま新聞紙に三つぶほど大切にくるんであるのを発見して、それを次の患者に回して喜ばれたりといった戦場での極限状態の日常生活が、実に詳細につづってある。

男が戦争をやり、女は平和を希望していたといった思い込みは、この手記を読むことによつてはつきり打ちくずされていく。戦時には、男も女も無批判に、積極的に戦争に参加していくように教育されたのであろう。ただ戦場でも、伝統的な男女の役割分担——男は戦闘、女は看護——があっただけのことで、戦争をやったことには変わりはない。

「昭和十二年八月十二日、待ちに待った赤紙の召集令状を勤務先の病院で手にしたときの感激は今も忘れることはできない」

「戦時勤務は若い女性のあこがれの的でした。日支が勃発し、歓呼の声と旗の波に送られる勇士の姿を目の当りにして、いつそんな

時がくるかと夢に描く毎日であり、待ちに待った一ヶ月、とうとう実現したのが、忘れもない九月二十二日、赤紙の召集令状を手にしました」

「女ながらもお国のために大任を帯びて、私共は、戦場で働く身だ。はやる心をしっかりと引き締めて勇躍征途についたのです」

「お国のために傷つきたおれた傷病兵の看護ができる我が身をしみじみとうれしく思いこの上とも精進自重に心がけました」

「召集された看護婦の中には、乳飲み子を抱えた人もあり、家族が広島まで赤ちゃんを連れて見送り、最後のお乳を飲ませた後は、乳がはつてくる痛みに堪えかねて、夜を日について乳をしぼったり、氷で冷やしたりして、乳上りの一日も早くくるように努力されたことは、まことに痛々しい光景でした」

人間の迷いや情感をすべて切り捨てて、無批判に戦時任務に追いやる恐しい教育が、可能であったという事実をあらためて手記を読みながら認識させられていく。

戦時に傷病兵を看護し、命を守った任務を崇高な赤十字精神とするならば、戦争を阻止し、平和を実現する運動は、赤十字精神の中でどう位置づけられているのだろうか。歴史の

線上にある戦争と平和をトータルに見つめる作業は、今の私たちに課せられていることであつて、彼女らは歴史の一点で、青春のすべてをかけて時代の要請に応じて必死に生きて尽くしたという事実を私たちに伝えている。

私たちにとつては、今、戦争しかない状況に在るのではなく、戦争か平和か、どちらでもを各個人が、選択しうる場にいる点で彼女たちの青春時代とは、はつきり異なる。私たちに選択の余地が、まだある。問ひ合わせ先は名古屋市中区道下三名古屋第一赤十字病院 立松暎子まで。

(A5判 四〇四ページ非売)

君は天皇を見たか

「テンノウ・ヘイカバンザイ」の現場検証

児玉隆也著

潮出版社

軍部に反対していた多くの知識人たちも、

「天皇の詔勅」が下ったとき、戦争に加担していった。明治憲法以来「神」となった「天皇」とは何だったのか。天皇の名で行なわれた数かずの非道の現場を、できるかぎり検証して歩いた衝撃の一書である。グアム島の日本軍敗残兵によってスロープにされた日本人父子、

四人の子を谷底に突き落としたサイパンの主婦、わが手で母と妹をなぐり殺した沖縄の少年。なまなましい証言は、思わず途中で本を伏せたくなるほど。戦争と天皇制の関係を痛烈に示している。

(S) (新書判 三七八ページ 五八〇円)

シリーズ・いまを生きる (5)

女・母と娘

ユック社

明治・大正・昭和をとおして、日本の近代国家形成に重大な意味を持った各時期の侵略戦争をはさんで、近代史の中で女性の抑圧の歴史を、母たちの生に見ることが出来ます。女にとつてみじめで、つらい時代をそれぞれ生きてきた母たちを同情するにしても、反発するにしても、乗り越えるにしても、娘から母、母から娘を語る時、ひとりの人間・他者として眺める視点が不可欠です。

「母性、母性愛を私有意識によつてしかとらえられない社会は乳離れ以前としか言いようがない。」

他を私有するⅡ支配するという上下の関係構造からは、家族が反権力のエネルギーにな

るといふ、朝鮮の母たちのような例は望むことはできず、自由を抑圧するものとして機能することに終わります。

「同じ性を分かち合う母と娘の関係について、照準を当てて書かれたり、語られたものはほとんど無い。」

この国にあつては特にそうでした。母性Ⅱ善という神話を作り、最大限利用して日本の近代化を図ってきた支配者にとつて、この神話が崩される形で、母・娘の関係が問われることは非常に都合の悪いことなのでしょう。母娘という関係が、さらに息子との、父との関係を、個の確立、自立という視点で問ひ返し、人間と人間の基本的関係に考察を深めていく本書の意義は大きいでしょう。ていねいなインタビューあり、漫画論、映画論あり、豊富な視野を求める熱意に好感が持てます。ぜひ一読を。

(敬)

(A5判 一七四ページ 九五〇円)

16歳の兵器工場

長野県野沢高女勤労働員の手記

山室 静編

太平出版社

造兵廠で働くことに興奮して白鉢巻りし

く名古屋に動員された女学生たち。そこは、ひとつ気をゆるめればシャフトに巻き込まれ、人間のだんごができる工場だった。その緊張

の中の合宿生活。学校側では県下と呼び戻そうとするが、旋盤やフライス盤の熟練工になった生徒たちを、工場側は手放そうともしない。ノミ・シラミの巢の中で聖戦を信じて働き続けた四十人の記録は、「戦争」を浮き彫りにする。(H)

(B6判 二七八ページ 一九七五年刊

一三〇〇円)

貝がらの町

——声なき人びととの出会い——

小林トミ著

思想の科学社

樺美智子さんが六〇年安保のさなか亡くなって以来、実に二十年の年月が経過したが、その間さまざまな反戦市民団体が生まれては、消えていった。安保反対運動は、日米間におけるその条約の効力とは別に、国民の間には風化現象さえ起こし、運動の困難性を強めた一時期もあった。そうした状況のなかで、小林さんが友人と共に始めた「誰デモ入れる」声なき声の会」を二十年間にわたって持続し

てこられたのは、並なみならぬことであったろうと想像がつく。

この「声なき声」は、六〇年安保闘争のさなかに岸首相が『院外の運動に屈すれば、日本の民主政治は守れない。私は国民の「声なき声」に耳を傾ける』との発言をきき、それでは安保強行採決に反対の意思表示をしよう、とのことで生まれたものであるが、現実には、岸首相は「声なき声」に耳を傾けるどころか、安保は強行され、自動延長にすらなった。

一時は七人に減ったことがあっても会報を出しつづけたという、その姿勢を次のように書いている。「……私はいつもいさましくないので。でも私はこれをいわなければならぬと思うときはいわなければならぬとも考え、運動にかかわるとき、ノンという姿勢が大切だと思えます。どんなに少数でもノンと言えらるること、これがないと戦争にまきこまれてしまおうと思うのです。」

彼女の「ノン」という姿勢を育くんだのは子ども時代の大半をすごした貧しい漁村の町浦安での体験が大きい。本書はその浦安の人びととのふれ合いが大部分を占めている。貧しいながらも明るく、ときにはきびしく生

きている人びと。その彼らをあたたく、キメ細かくみつめる著者の眼がある。

さまざまな市民運動が生まれている今日、市民運動の原点をくずそうとしない小林さんの考えにふれ、学ぶことはとても参考になるのではないかと思う。(統)

(B6判 二六六ページ 一五〇〇円)

日本ファシズムと女性

吉見周子編

合同出版

多くの日本人が、なぜ侵略戦争と、その布石になったファシズムを阻止できなかったのだろうか。

その疑問に答えて、昭和初年の恐慌、労働運動・風潮を一つ一つ洗い出しながら、そのなかで進む軍国主義、言論・思想統制の姿をまざまざと描き出している。

この意義ある本が、吉見さんを講師とする、川崎市の昭和史を学ぶ自主グループ、十二人の主婦たちの協力で作られたことを喜びとしたい。(K)

(B6判 二八一ページ 一五〇〇円)

本所区 花町 緑町

宮下喜代著

この本を読むと、戦前の下町のつつましい人びとが見えてくる。新しい着物、ちょっとはきにくい新しい足袋、きちんと座って「おめでとうございます」というお正月の子どもたち。おしゃかさまの小さな像に「あまちゃ」をかける四月八日の子どもたち。むだのない、くつきりと鮮やかな叙述が、子どもを、職人さんを、おじさんやおばさんたちを、生き生きとえがき出す。

その、いとしい人びとが、東京大空襲で焼きつくされ、筆者自身も両親や妹を失うくだりでは、筆は全く抑えられている。抑制しつくした筆が、戦争と人間の悲しみを深く静かに伝える。近頃、こんなに感動して読んだ本はない。文学としても第一級の作品だと信じる。

(千)

(A5判一〇〇ページ、自費出版。ご希望の方は「あごら事務局」へお申し込みを)

沖縄のハルモニ

——大日本売春史——

山谷哲夫編著
晩聲社

多数の写真が挿入されている。「大日本国防婦人会」のたすきをかけて野戦重砲運動会に参加した朝鮮人慰安婦たち、日本軍将校専用の「高級」朝鮮人慰安婦、慰安所に列をつくり順番を待つ日本兵たち、米軍へ海兵隊Vに「保護」された朝鮮人慰安婦たち、生まれ故郷朝鮮の一家離散を思い出し泣きくずれる朴ハルモニ等の姿が、戦争の傷あととオーバーラップした従軍慰安婦の実態を、百の言葉をつくすより、鮮やかに伝える。

著者の主宰する無明舎で、記録映画『沖縄のハルモニ——証言・従軍慰安婦』が上映され多くの反響を呼んだが、この本は、映画で割愛された多くの証言と、新たな証言を合わせて収録している。かつて強制連行された朝鮮人たちの記録は少しずつ公表されている中で、「女子挺身隊」の美名のもとに日本軍の売春婦に狩り出された慰安婦たちの記録は少ない。階級の二重構造よりも、性のそれは見極めがつきにくく、白日の下にさらしにくい。

性の二重構造が端的に現われやすい状況が「戦争」であり、それは戦争の暗部でもある。最大の被害者である従軍慰安婦たちが、沖縄や朝鮮の片隅でひっそり生きていたうちに老いて、生存者がいなくなることを恐れた著者は「いずれ現われてくる他の記録者たちにバトンタッチするつもりで、この記録映画作りをスタートさせた。」とその動機を書いている。

朴ハルモニ（ハルモニは朝鮮語でおばあさんの意）と著者との会話が主要な柱を成しているほかに、三十ページ近くにおよぶ巻末の資料篇も貴重であり、映画観賞とともに、ぜひ一読をお勧めしたい。

(B6判 二〇一ページ 一三〇〇円) (統)

銃後史ノート

——特集・「非常時」の女たち——

女たちの現在を問う会編

JCA出版

「非常時」ということばは、いったい、いつのことをさすのか。本誌によれば、一九三二年三月一日の満洲国建国宣言に始まり、一九三六年五月十八日の阿部定事件に終わる五年間となっている。証言「その頃わたしは」

「八自力更生V運動のなかの女たち」、「国防婦人会」と読み進んでいくうちに、「非常時」とはだれにとつての「非常時」であったのかという疑問とともに、それは権力に遠い人々にとつての「非常時」ではなかったという確信につき当たる。

「非常時」に組みこまれていく過程を、約半世紀後の今日、文字づらに追うとき、「非常時」に組みこまれ、ついには自ら先に立つて他者を「非常時」につきおとしていった人々のおろかさと同時に、巧妙な権力者の誘導が現実と重なりあつてみえてくる。あまりに同色に塗りこめられていった女の群れが圧倒的だった。それゆえ、複教で扱われている「非常時」の女たち¹⁾のなかに、尾崎翠や阿部定がとりあげられていることは、いかに個人色を持ちえた女、他に支配されない自我を確立した女が少なかったかを示している。

「非常時」に組みこまれることに抵抗した女たちとして「非常時共産党」の女たちがとりあげられている。しかし、皮肉なことに、階級闘争に参加した女たちの役割は、「ハウスキーパー」でしかなかった。²⁾闘う男を支える、自らを犠牲にした日常雑事の受け持ちであつた。革命運動にまで、普遍的・潜在的に

存在し続けている女性差別は、今日の男女役割分担の現実となんら変わることはない。

「なぜにそうでしかあり得なかったのか」この問いが「非常時」の女を考えるにあたってどのテーマにも流れている。「唱歌は世につれ、世は……」、「従軍看護婦」、「処女会のあゆみ」など豊富な資料を使った連載もあり、どれ一つとつてみても、気軽にページをめくれぬ重さをもっている。

一九七七年に創刊された「銃後史ノート」の4号に本誌はあたる。連絡先 044-1933-0203 (加納方) (枝)

(A5判 一七二ページ 八五〇円)

わだつみの声はわが胸に

どくしんふじんれんめい編

若樹書房

戦争はすべての女に深い傷あとを残したが戦争によって愛する人を失い、あるいは愛する異性を得る機会を得なかった人々の記録である。同年齢層の女が男の二百五十万も多い事実のゆえに独身を余儀なくされ、今も幼児を抱いた母を見るたびに胸うずく人、自由に精いっぱい自分を何ものかにつけて生き

ようと聞き直る人、六十八人の声は、地の底から噴き上がるように響く。(Y)

(B6判 三二ページ 四八〇円 一九六八年刊)

人民の沈黙

——わたしの中国記——

松井やより著
すずさわ書店

一九七五年八月から七六年八月までの一年間の中国滞在と、その後の数回の訪問の感想をまとめた著者の体験的中国論である。中国の女性解放についての著者の視点は鋭い。社会主義社会の中で女性があらゆる分野に進出し、経済的に自立していること、儒教的男尊女卑が打破され、家事の分担が行なわれていることを評価する一方、保護と平等の立ち遅れ、性の国家管理化などに問題があると指摘している。その他、教育の現場、人民公社、工場等の体験が、女性の眼で見ての記録として書かれているのがうれし。

ところで、この間、中国は文化大革命、毛沢東の死、四人組追放と揺れ動いている。昨日まで批判されていた人間がある日突然復活し、権力を握っていた者が失脚する。そのくり返しの中で、人々は何を考えているのだら

うか、とかねてから素朴な疑問をいだいてきた。この本を読んで、それが少しわかってきた。現在の中国の管理体制では、言論の自由も、報道の自由もないのである。大衆は権力を握った側の立場に立った報道しかされず、権力に対して従順にならざるを得ない。体制を批判し、民主と人権を要求した者は投獄される。人民は沈黙させられているのである。今この国で必要なのは「四つの近代化」だけでなく、第五の近代化「民主化」なのだ。近くて遠い国中国。その現実が具体的に現えてくる本である。

(四六判 三八二ページ 一八〇〇円)

いま家庭で・

——アメリカ女性の自立と

その子供たちの立場——

メリイ・J・ベイン著 青木久男訳

多賀出版

本書は、アメリカの評論家、メリイ・J・ベインの評判の家庭論の翻訳である。

第一部では、女性解放の立場から、男女平等と家庭責任のかかわり、家庭のプライバシー、子供の権利等についてのべている。ヨーロッパ社会との比較や、アメリカ各州での実態が、ひんばんに引用される。特徴的なのは、

こまかい資料を駆使した高度な視野による論述である。

現在、アメリカがかかえている女性の労働力参加の増大と、賃金の男女格差、家庭責任のアンバランス。そして、その結果ともいえる離婚率の増加など、深刻な問題が本書の背景にあることは、もちろんである。

著者は、家庭の自治への公権力の介入を拒みつつ、その上で、父子、母子家庭などに対する積極的な施策の計画を提唱している。とくに、幼児時代から老齢期までの「生涯保険」というユニークな発想は、注目していいだろう。巻末の資料は貴重である。ただし、これだけの時宜を得た本であるから、もうすこし読みやすい訳と、活字を大きくして、より多くの読者に語りかけてはしなかった。

(末)

(A5判 二四八ページ 一六〇〇円)

育児力

——子どもの成長、おとなの成長——

藤村美津・伊藤雅子著

筑摩書房

幼稚園に勤める藤村さんと、公民館に勤める伊藤さんの対話のかたちで語られるこの本は、読む人の心に、やさしく静かに、しかし

深く、しみとおってくる。たとえば「ハンカチを忘れさせないよう」毎朝心くばりする母は多いが、それは手を洗ったあととハンカチを使う子どもと、どうかかわりあっていたのか、いるのか……。

ある子の爪が伸びていて、ほかの子をひっかいたとき、保育者は「おかあさんに切ってもらいなさい」と言う。翌日、また切れてない。「どうして」だっておかあさん忙しいんだもん」と子どもは親をかばう。結局みんな得手紙を書く。「ツメがのびているとみんながめいわくです。切ってあげて」。おかあさんはびっくり。みんなにあやまった。そして子どもたちは「あやまらなくていいから、これからはT君のツメをちゃんとみてやってね」と言った。

こうした、実例をふんだんに盛り込みながら、人と人が信頼しあうとはどういうことなのかを、しみじみと伝える。そして著者たちは言う。「母親は、ただ母親であるというだけで子どもを育てることができるとはすと思いこまれ、子は母のもとにいるというだけで幸せに育つものと決めつけられている。そして、育児のなかでおきる問題現象は、すべてその母親の育て方のせい、心がけのせいにされる

か、あるいはひととめに女が断罪されるばかり。母親がわが子だけに目を凝らしている育児のあり方、家庭だけで、育児だけをしている女の暮らしのあり方が、ほんとうに子どもや女にとって人間らしい生活になっているのか、そこで子どもはどう育っているのかという疑問は、かつて一度もさしはさまれたことがない『育児の力は母性本能によって女ならだれでも持つものではない。人々とのかわりの中でVおとな自身が自らを育てていくときにはじめて獲得できると考える』と。

戦争を阻止する力は、このような育児の中からこそ生まれるだろう。子育て中の人にも、すでに子育てを終えた人にも、ぜひ読んでもらいたい本である。

(B6判 二四五ページ 九〇〇円) (斎)

山を走る女

津島佑子著

講談社

街を行く腹のつき出た女に出会った、そのこんもりしたふくらみに目を吸いつけられずにはいられない。妊娠願望というようなのがあるか知れないが、私はときどき自分の

妊娠した姿を夢想してうっとりとする。それは決して特定の男の影響下に子どもを産むことではなく、ただ、いつの間にか自分が産む事態になっているという想像なのである。主人公多喜子の、自分を妊娠させた相手がそれと気づかず去ったことを好運と喜ぶ気持ちに、さして違和感を抱かなかった。

作者は私生児を生んだ母という、二者の切り離せない状態についての視点で、小説を展開してゆく。妊娠した多喜子が一人で息子品を産むまで。そして『三沢ガーデン』なる温室経営の仕事の中で描写。緑の観賞用植物はたくましい生命力と性欲を思わせる。そこで神林という、蒙古症児の父との対話が始まる。やはり人間は異性の中に、自分の存在を肯定してもらおう受け皿のような相手を求めずにはいられないのだと思う。

この場面では、神林がいささか自嘲的な態度で、自分の息子のために何ものかを誦めよう、という気持ちを持つのに対し、神林に新しい異性としての姿——障害児を持つ父としての——を見出し、新鮮な喜びを発見している多喜子。無心に父のない子をいつくしみ、無心に守り働く多喜子に比べ、神林の自己の欲望を押し殺す姿に、『意識』とか『精神』とか

の言葉を思い浮かべずにはいられない。普通の時間の推移では、恋愛があり、そして子どもが産まれて、次第に恋愛当時の透明感が消失していくが、この作品では、それが逆行しているようで、かえって快かった。それは、人間と人間との距離の適切な遠さが保たれているためと、精神的な意味あいでの家族のつながりが創りあげられていく過程が描かれているからだろうと思う。主人公の感じ方の柔軟さと、精一杯に張り切った誠実さがよかった。

ただ、多喜子の現状である両親と弟との家族関係と、新しい関係——多喜子と品、多喜子と神林——との違いや絡みを、もっと深く追究することもできたのではないか。(ケイ)

(B6判 二九九ページ 一二〇〇円)

内なる外国

——『菊と刀』再考——

C・ダグラス・ラミス著

加地永都子訳

時事通信社

「巻おくあたわず」ということばがあるが、最近こんなにもしろい本を読んだことはない。それだけにおいそれと書評はできない。もし本気で評するとしたら、一冊の本を書かなければなるまい。著者が『菊と刀』の書評

を一冊の本にしたように。これは久しぶりに現れた本格的な文明論・文化論である。

太平洋戦争中、海の彼方の子どもたちは、戦争ごっこをしていた。グジャッは胸をかきむしり、アーアーと泣いてゆっくり地面に倒れる。アメリカ人はぜったい死なない。こうして成人した筆者は一九六〇年海兵隊員として沖縄に来る。そこで感じたことを原点に、外人へ平連として日本での生活を始める。しかし絶えず去来するのは彼自身の内なる外国——という以上に、内なる祖国である。アメリカを愛しぬいて、そのゆえにこそいま文明に病む祖国を思う。それはアメリカナイズの度を深めつつある日本への大いなる警告ともなる。その中で彼は、たとえベネディクトが見ぬけなかった、日本の男女差別の構造が戦争の構造でもあったことを見事に看破している。

(B 6判 二五九ページ 一三〇〇円)

女性学とその周辺

井上輝子著

勁草書房

六〇年代の終わりから「女論」を手がけて

いた筆者が折にふれ発表した論文を、恋愛結婚イデオロギー、現代女性の存在と意識、女性をめぐるメディア文化、女性の内省と主張の四章にまとめたものである。ほとんどが七五年までに書かれたという小論の再録だが、専攻の社会学、新聞学、思想史学、政治学を適用した分析は出色の鋭さであり、話題の「女性学」を先取りしていた筆者の確かな論理に感嘆する。単なる学者ではない、活動家としての視点——七〇年のリブ大会、七一年のリブ合宿に参加し、うずくような活動への欲求を出産によってしばし中断した人の思いが随所に光っているのがうれしい。

(B 6判 二三九ページ 二〇〇〇円)

妻たちの復讐

——離婚から結婚を考える——

駒尺喜美編

すずさわ書店

結婚を、男たちがつくり出した社会的「制度」であると編者は断言している。

妻たちの復讐とは、どんなものか、と読んでいくと、それは重い重い離婚に至る生活の記述であり、あるいは告白であり、結局、復讐は、その結婚生活を解消する離婚という形

になっているわけだが、そこまで読み進めて「離婚から結婚を考える」というサブタイトルの意味に改めて納得した。

登場する妻たちの状況を、読者によつては、特別な人たちと思う人もいるかもしれないが、しかし彼女たちをとりまく一つ一つの環境や状況は、みごとに今の、そしてこれまでの日本の女たちをとりまく社会状況であることに気づくはずである。

第一章の主婦論、第二章の手記のあと、編者のインタビュ構成によるものが続く。その解説は、何でもないうちに連綿と続いてきた結婚の形態に斬り込む編者の執念のようなものさえ感じられ、安穩と暮らしている心やさしい主婦たちには、ぜひ一読をすすめたいところである。

幸せな結婚生活を送る妻たちには無縁な本とも思われるかもしれないが、//女が人間らしく生きること//を考えるすべての人にとって、ハッキリとした編者の問題提起は、多くの示唆を与えるものだと思う。

インタビュのなかについている編者の解説は、流れを止めるような気もしたが、それも編者の、読者への熱い思いからとれた。

(B 6判 三三四ページ 二〇〇〇円) (T)

◆戦争を考える

本

覚めよ女たち——赤濁会の人びと

江刺昭子著 大月書店 一三〇〇円

運動にかけた女たち——戦前婦人運動への証言

渡辺悦次・鈴木裕子編 ドメス出版 一三〇〇円

聞書ひたむきの女たち

牧瀬菊枝著 朝日新聞社 六二〇円

田中ウタ——ある無名戦士の墓標

牧瀬菊枝編 未来社 一二〇〇円

丹野セツ——革命運動に生きる

山代 巴・牧瀬菊枝編 勁草書房 七〇〇円

横浜事件の人びと 中村智子著 田畑書店 一七〇〇円

朝を見ることなく——徐兄弟の母 呉己順さんの生涯

呉己順さん追悼文集刊行委員会 一二〇〇円

冬の雑草 郡山吉江著 現代書館 一六〇〇円

戦場は星空の彼方に 相馬翠著 毎日新聞社 一二〇〇円

婦人雑誌ジャーナリズム——女性解放の歴史とともに

岡 満男著 現代ジャーナリズム出版会 一六〇〇円

暮しの手帖96号特集——戦争中の暮しの記録

暮しの手帖社 二八〇円

詩集 満州に幼な子を残して

折居ミツ著 青磁社 一五〇〇円

つつみのおひなっこ——仙台空襲ものがたり

野本和子、高倉勝子共著 仙台文化出版社 一二〇〇円

主婦の戦争体験記——この声をさらに 風媒社 三〇〇円

女性解放の思想と行動(戦前編 戦後編)

田中寿美子編 時事通信社 各一五〇〇円

日本民衆の歴史(全十一巻) 三省堂

一巻一〇〇〇円 二巻一二〇〇円 三、四、五巻九八〇円

六巻一五〇〇円 七巻一三〇〇円 八、九巻一二〇〇円

十、十一巻一三〇〇円

太平洋戦争——日本歴史叢書

家永三郎著 岩波書店 一三〇〇円

第二次世界大戦下のヨーロッパ 笹本駿二著 岩波新書 三八〇円

意識のなかの日本 日高六郎編 朝日新聞社 五八〇円

近代民主主義の展望 福田欽一著 岩波新書 三八〇円

非武装中立論 石橋政嗣著 日本社会党機関紙局発行 五五〇円

戦後思想を考える 日高六郎著 岩波新書 三八〇円

市民社会の平和と安全 小野 修著 昭和堂 一八〇〇円

自衛隊はかならず敗ける 藤井治夫著 三一書房 一二〇〇円

核戦略批判 豊田利幸著 岩波新書 三三〇円

憲法を生かすもの 憲法問題研究会編 岩波新書 三三〇円

憲法読本上下 憲法問題研究会編 岩波新書 各三八〇円

憲法と私たち 憲法問題研究会編 岩波新書 三八〇円

徴兵制 大江志乃夫著 岩波新書 三八〇円

日本の防衛と憲法——総合特集シリーズ

加藤善雄編 日本評論社 一一〇〇円

核先制攻撃症候群——ミサイル設計技師の告発

オールドリッチ著 服部 学訳 岩波新書 三八〇円

核時代を超える

湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一共編 岩波新書 三二〇円

ドキュメント 太平洋戦争（一〜六巻） 汐文社 各八八〇円

皇后の股肱——民草としての決算書

千田夏光著 晩聲社 一三〇〇円

虐殺の島——皇軍と臣民の末路 石原昌家著 晩聲社 一三〇〇円

従軍慰安婦正統 千田夏光著 三一書房 各五八〇円

天皇の軍隊と朝鮮人慰安婦 金 一勉著 三一書房 一五〇〇円

軍隊慰安婦 金 一勉編 現代史出版会 一三〇〇円

朝鮮人慰安婦と日本人 吉田清治著 新人物往来社 一二〇〇円

証言・記録従軍慰安婦・看護婦

広田和子著 新人物往来社 一二〇〇円

敗者の贈物——国策慰安婦をめぐる占領下秘史

ドウス昌代著 講談社 一一〇〇円

一億人の昭和史——二・二六事件と日中戦争

毎日新聞社 一〇〇〇円

一億人の昭和史——不許可写真史 毎日新聞社 一〇〇〇円

庶民のアルバム——明治・大正・昭和わが家のこの一枚総集編

朝日新聞社 一二五〇円

一億人の昭和史・日本植民地史2——満州 毎日新聞社 一五〇〇円

武漢兵站——支那派遣軍慰安係長の手記

山田清吉著 図書出版社

沖縄県史10——沖縄戦記録二 沖縄県刊

沖縄市史 戦時記録 那覇市刊

第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査報告書

第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査団刊

海上挺進第三戦隊陣中日誌 谷本小次郎編集

講和条約発生前における進駐軍又はその構成員による身体、生命に対する不法行為による被害申請書 米軍被災者沖縄連盟編

日本最後の戦い——沖縄戦記録写真集1—2 月刊沖縄社

沖縄戦後写真史——アメリカ世の十年 月刊沖縄社

戦後沖縄写真集——0からの時代 那覇出版社

昭和五三年度渡嘉敷村勢要覧 沖縄県島尻郡渡嘉敷村役所刊

新しい憲法の話 日本平和委員会発行 二〇〇円

△あこら▽可能性教室へどうぞ

「すべての人は可能性を持つ」を合言葉に、△あこら▽では左記の可能性教室を開いています。会場は東京・新宿の「あこら読書室」。お問い合わせは事務局へ。電話03-3354-9014

●フェミニストと学ぶ英語 初・中・上級

●再就職準備教室（編集・電算機など）

あじろのあじろ

言いたいことは何でも言おう。感想、反論、情報、思ったことを率直に言う読者の広場です。

23号

23号は、待ちに待っていた情報でした。コペン会議については、テレビ、新聞などの報道もメキシコ会議のときより多いとはいえ、満足のいくものではありませんでしたし、総理府発行の『えがりて』も政府に都合の良いことばかりで、疑り深い私にはちょっと納得がいきませんでした。

その点23号は、よくもこれだけ集めたと思うほど、各方面の参加者、取材者の意見が出され読みごたえ十分。まるでコペン会議に出席したような読後感を

抱きました。

それにしても、国際会議がこんなに魅力的なものなら、五年後のケニヤ会議には、ぜひ行ってみたいものです。

また、撤廃条約批准についてのインタビュアーは、政府のホンネとタテマエが出て、大変興味深く読みました。

男女平等は憲法で唱えられており、当然のことと言いながら、その実、今のままで十分平等だから法の手直しは必要ないとの二枚舌政策。理解者然とした態度の裏にある根強い政府の差別意識を見た思いです。婦人問題をはだで感ずる女がもっと行政分野に進出しなければ、真の平

あじろのあじろのあじろのあじろのあじろ

等観にたった行政は望めそうもありません。

いま、雑多な情報が氾濫する中で、女の要求に応え得る確かな情報紙『あじろ』の活動に、信頼と期待を寄せています。

(新座・内田典子)

*

何よりも行間から湧き上がるように立ちのぼる熱気と心意気に打たれました。文章作法とか編集技術とかが問題にならないほどの迫力――。

女性差別に対する怒りが結集されました。私たちは、もっともっと怒らなければならぬということを、そこから行動が始まるのだということを、確認させられました。

(東京・貴島操子)

*

目の前が広がるような気がしています。すばらしい本との出

会いがうれしゅうございました。私の村は筑波研究学園都市の中心部。たくさん外国の人たちも移り住んで、インターナショナルな様相を呈しています。そんななかで、この本をどんなに力強く感じましたことか。(茨城県・吉田せき)

*

『あじろ23号』、暮れのあわただしさをそっちのけに、感慨深く読みました。

いつもそうですが、まず最初にティーチインに目を走らせるのです。

コペンでの模様が、ティーチインのメンバーの目を通じて、こちらの肌伝に伝わります。

新聞紙上では決して知ることのできなかつたさまざまな国の女たちが、およそ私などの想像も及ばない自国の状況の中から、必死に、それこそ、ほんと

に生命を投げうって、参加していることを知ると、胸がしめつけられるような強烈な想いを味わいました。

また、女性差別撤廃条約に不承不承、署名した日本政府に、それを批准させることがいかなるものか、各省のインタビュでよくわかります。これはなかなかエライことですよ、とため息などついたりして……。

女の連帯と力強い活動が、ますます必要とされる時代になってきているのを感じさせられた23号でした。

(千葉・谷村由美子)

*

多忙な妻はバラバラと頁をめくる程度ですが、女性運動の広がりを知るうえで重要とのこと。夫は横目でチラチラと見るとはなく見る程度ですが、今号は条約署名についての役人とのインタビュの記事を興味深く読ませて頂きました。あのデー

ンと人を威圧するような役所の中で日本の政治・行政を司っている役人の考えや行動など、そもそも初めから聞く気がしませんが、やはり鼻白む思いを禁じ得ませんでした。とくに最近には福祉切り捨てとからんで保育料を値上げして、婦人の働く権利を奪いとうとする策動が盛んです。コペンハーゲンに行つて

外人の話を聞くのも有意義ですが、今の日本の社会政策・保育行政の貧困をもっと根本的に考え、えぐり出す企画をぜひ実現させてほしいと思います。

(妻に代わりて 東京・村田啓一)

*

コペンでの会議の模様をくわしく報告していただけたこと、差別撤廃条約について、関係各省の意見をきかれての御報告等、また、座談会の内容等、どれも大変充実していて、何回も繰り返し読みました。

誠実で真摯な編集ぶりに、心

からの敬服と拍手をお送りいたします。どうぞ、今の姿勢を続けていってください。

(山梨・S・H)

*

『23号』を読むと、女性の歴史の流れが、大きく変わりつつあるのを感じる。

しかし、私のように農業にたずさわっているものにとつては、国際婦人の中間年世界会議も女性差別撤廃条約も、新聞やTVで知らされる範囲では、まったく縁遠い、無関係なもので、完全に外野である自分を感じていた。

新聞に載っていたのかどうか

はつきり覚えていないが、23号には女性差別撤廃条約のおもな内容があった。読んでみると、農村女性の項目も掲げてあり、女である自分が部外者なわけはないことに改めて気づかされた。

(山形・大川百合子)

*

世界会議のすべてが詳細にわかる報告書。公式会議、フォーラムの内容、パネリストの発言

要旨、日本女性が主催したワークショップの報告、参加者の感想文、座談会、取材記者へのアンケートなどが三百三十六頁を埋めている。緻密で周到な実在に女性らしい編集ぶりだ。また差別撤廃条約の解説と国内法改正にかかわる各省担当者のインタビュも目玉。行動プログラム

の全訳、本会議の諸決議、ワークショップのテーマに至るまで盛り込まれたすばらしい一冊で、学習会の資料にも好適。

あいら

(79・12・31毎日新聞)

あごらの皆様お元気ですか。私はお陰様で元気です。

アメリカに帰ってきて以来、仲々忙しかったのでご無沙汰しました。大学のこと、アメリカ

の生活にも大体慣れてきました。が、一日も早く日本にもどりたい気持ちです。なぜか自分でもよく分りません。

このプリンストン大にきてから一番びつくりしているのはこの大学の女学生のことです。三年間日本の大学で教えた経験の中には色々なことがありました。がこういうことは初めてです。

大学の女学生は何かをさがしているようです。女の教師に会うとその気持ちがわいてくるようです。例えば名前も知らない女学生がよく私の部屋にきて色々な話をします。その話の内容は色々ですがいつも自分が女であることはどういう意味を持つのかという話がでています。社会の中には女に対する搾取があるかどうかという話も必ずでてきます。そういうった搾取はないと言いたい人が過半数でしょう。

あるいは、女に対する搾取があるとしても自分に関係ないで

はないかという人もいます。しかし同時に自分が閉じた世界に住んでいるということ意識しているらしいです。もし自分が

この大学町から出て仕事をさがす場合平等な職場が得られるかどうか少し疑問を感じていると思います。黒人の女学生は特に迷っているようです。ある人は自分が大学にいるかぎりでは白人の男性だといっていました。

又教室に入って講義すると女学生の目をひしひし感じます。何かさがしている、何かがほしいという皆の気持ちが伝わってきます。自分があんまりいい話手ではないということとはよく分っていますので私の話はそれほど面白くないはずですが、何と考えると良いかよく分りません。というよりも、何をしたら良いか、どう反応したら良いかという問題です。皆様お忙しいと思いますが何かいいアイデアがあったら是非知らせて下さい。

来年お会い出来る日を楽しみにしています。元気で頑張ってください。

(原文のまま)
(米国 (レン・ハイデカ))

*

自分の好きなことをやっていて良いという条件で結婚し、産んでさえくれば、オレが育てるといふことばに、自分の身体のことと考えて出産。それまでに経済を理由に、私の意志で中絶三回。おかげで長い間セックスが嫌いになった。生まれてみると、夫は子どもを育てるのは母親の責任といつて逃げた。

経済上の必要から、産後四か月には夫婦でできるコーヒー店を始め、以来どうにか食べているという状態では、自由などないに等しい。最近やっと家で、茶わん洗いをやるようになったが、夫は生活技術が身についていない。意識と現実のずれに、結婚したことを後悔して涙を流すこともあり、改めて女にとつ

て結婚とは？ とつくづく考えさせられている。

最近、冠婚葬祭はますます盛大になり、無駄だと思います、できることならやめたいと思いつつ、

つきあいの何だのと他にあわせてやっている。日頃進歩的な人びとも、この中から抜け出すのはとてもむずかしい。せめて自分の死については、このような因習からのがれるべく、友人たちと具体的にはどうすれば良いかと話し合っている。

フェミニストの皆さんは、どのように考え、行動されているのでしょうか。(東京・J・U)

*

今や、「親子げんか」「ずるやすみ」といふことは消え、やれ「家庭内暴力」「学校内暴力」だとマスコミが騒ぎだてる時代に、子どもたちの問題は深刻化され、おとなたちはますます支配しやすいく子どもを作ろうとしている。

長い間親しんだ思考回路に舞いもどってしまい、また、やり直したいという作業の繰り返しから、やっと一歩踏み出す大きな手ごかりをつかめたと思います。

相手の土俵で相撲を取るとからめ取られてしまうと恐れるばかりで、己が目と耳をふさいでシャニムに直進していたようです。相手の土俵にどんどん挑んで、自分のペースに引きずり込

また、23号の世界婦人会議の報告では、世界の婦人のたくましい足取りと、同胞愛の渦の中に私もあるのだと、熱い想いがこみあげてきました。歴史をもう後もどりさせることはできません。なぜなら世界中の婦人たちが軽やかに立ち上がったから

です。

（東京・野原友子）

289

新聞 切抜帖

1980年9月1日から
1981年2月28日まで

法・制度

旅券発給拒否は違法

「日本赤軍とつながりがある」との理由で発給拒否した外務大臣に「処分取り消し」を求めていた主婦(三七)に対して、大阪地裁は七日勝訴判決。損害賠償請求については棄却。

(9・10朝・毎・京都)

国籍法改正に着手

法務省が十日決定。きつかけは婦人差別撤廃条約への署名。西欧諸国はすでに父系血統主義から父母両系主義に改正済み。

(9・11読売・西日本・毎日)

美顔器メーカー告発される

日本消費者連盟は十二日、発売元の旭硝子を詐欺容疑で東京

地検に告発。購入主婦らも損害賠償金を請求。(9・13読売)

子への親権、国際ルールは

来月開催予定のハーグ国際私法会議での焦点は「子供の奪取に関する条約」の作成。

(9・15日経)

国籍法改正実現へ

アジアの女子たちの会が「国籍法改正要求集会」を開催。今後の方向は他国との提携。

(9・23朝日)

子どもは元いた国へ

欧米諸国の強い要請で、採択。日本も批准に積極的。

(10・4朝日)

「化粧濃い」は理由にならず

一方的な解雇通告は不当として、病院と付属看護学校を相手に地位保全の仮処分申請をしていた看護学生(一一)に対

し、奈良地裁は六日勝訴判決。(10・7朝日)

年金改正、妻の座優遇

改正法案が十七日、衆院本会議で可決。配偶者加算、寡婦加算が大幅アップ。

(10・17、18読売、12・1日経、12・21読売)

刑確定、幻舟を収監

懲役八月の実刑判決、二三日東京拘置所に。

(10・24毎日・読売)

子捨て母、同情の余地なし

四人の子を置き去りにし蒸発した母(三三)に対し、横浜地裁は二七日懲役判決。

(10・27朝日)

職能給差別改めます

静岡地裁で二〇日、「職能給導入で賃金格差が生じた」と未払い分の賃金支払を求めている

静岡銀行の女子行員(四六)と同行の間に和解成立。原告側の実質的勝訴。(10・31朝日)

“産みの苦しみ”に配慮

母子心中を図り生後五〇日の男児を水死させた母親(二七)に対し、札幌地検は十七日、『産褥精神病』の可能性が強く、刑事責任問えず」と鑑定留置を申請、認可された。全国的にも異例。(11・18朝日)

交通賠償も平等に

交通事故死した女兒の損害賠償額について、東京高裁は二五日、家事労働の高額評価と慰謝料の上積みにより実質的に男性と同様の額を決定。画期的判決と評判。(11・26読売・道新)

極めて異例、有罪が無罪に

最高裁で有罪が確定した婦女暴行未遂事件の被害者が起こした慰謝料請求に対し、浦和地裁

は十日、被告を“無罪”として請求を棄却。原告は控訴の構え。(12・11朝日・毎日)

徳島ラジオ商殺し再審決定

二七年間無実を訴え続けて死亡した富士茂子さんに徳島地裁は再審開始の決定。(12・13朝日)

同意なき配転は契約違反

女性アナ(四三)の地位保全仮処分請求に、東京地裁は二五日勝訴判決。(12・25読売・日経・朝日)

新たに門戸開放します

刑務官、入国警備官、高卒税務職員(三種)を女子にも。(1・30朝日・日経)

政治

官製“親業講座”

文部省は五日、全国自治体の「明日の親のための学級」に経費の一部補助を決定。上意下達の一斉教授の効果いかん?と一部に疑問。(9・6朝日)

規正法の“アナ”鮮明に

「民主政治をたてなおす市民センター」(代表、市川房枝)は九日、昨年の政治資金収支報告書の分析結果を発表。献金ころがしなどの問題点指摘。(9・10朝日)

海を放射能で汚さないで!

放射性廃棄物を太平洋に投棄する科技厅の計画に、南太平洋の島々がこぞって猛反対。(9・21読売)

『女性市民きょうと』発刊

京都市が行政と女性市民の情報、意見交換の場として。七千

部、年間四回発刊予定。

(10・18京都)

『男女平等への道』製作

一般の主婦問題への理解を深めようと総理府婦人問題担当室が映画製作。各地の視聴覚ライブラリーに備えつける。(10・18日経)

買春ツアーに怒り噴出

土井たか子氏が衆院外務委員会で追求。業者に対する指導強化、現地女性への経済援助の検討などを要求。(10・22毎日・読売、10・29朝日)

運輸省が業者に。『関係業者は公表し、社会的制裁を加える』と通達。(10・24読売)

十日、フィリピンの人権擁護団体がマニラの日本大使館に抗議の声明書を。(12・11読売)

十六日、マニラで比代表と大使館が会談。「日本でも禁止の

買春をなぜ野放しに」と日本政府に対策を強く要求。

(12・18読売)

五日、マニラで比代表らが鈴木首相あての抗議の直訴状を発表。アジア人の人権を踏みつける買春観光の禁止と具体的制裁措置を要求。

(1・5読売)

二二日、運輸省は「日本エア・ツーリスト」に警告書を出し、公表。

(1・23各紙)

母代わり、派遣します

小学生以下の子どもがいる母子家庭で親が病気になる時、介護人を派遣する制度が京都市でスタート。母子家庭の負担はゼロ。(10・31、11・16朝日)

男女差別苦情委機能せず

職場における男女平等を求めて都が設定したが、五か月たって処理件数ゼロ。女性の意識の甘さと内部告発の難しさゆえ

か。(11・26日経)

五六年度の国家予算案

婦人関係予算は辛うじて現状維持。

(12・12朝日)

保育料アップします

十七日、都児童福祉審が中間答申を提出。無認可施設も認知の方向へ。

(12・17朝日)

母子家庭はここえそう

二二日内示の来年度予算案によると、所得制限のため多くの母子家庭が手当の対象外。

(12・23読売)

中野区教委準公選

女性では俵萌子さん、高田ユリさん、伊藤照子さんが立候補。

(1・27朝日)

開票の結果、俵さんがトップ当選、高田さんは十八票差で惜敗。

(2・27朝日)

北京へ婦人使節

都は婦人行動計画の諸事業の一つとして「一般公募の女性三〇人を北京に派遣することを決定。帰国後は地域コミュニケーション作りの推進者に。

(1・28読売)

「父親育児学級」新設

練馬区が予算案に「男性対策」として。父子家庭、共働き家庭の増加の状況の中で。

(2・12朝日)

学童保育料を有料化

品川区が十三日決定。二三区では初めて。七月実施予定。

(2・14朝日)

画期的意見書提出

「婦人問題企画推進会議」(座長、藤田たき)は、性別役割を全面的に否定し徹底した男女平等を提言、最重点項目は女性差

別撤廃条約の批准。「抽象的で控え目な提言」との批判も。

(2・18各紙)

生活扶助の男女差改正

二六日、衆院予算委で厚相が約束。

(2・27朝日)

婦人問題のアドバイザー養成

大阪府府民文化室婦人政策係では昨秋養成講座を開設、定員四〇人に八二〇人も応募、四か月で毎週二日計三六講座を終えた六〇人が巣立ち、今後も自主研修を深める。府では好評にこたえ、第二期講座も計画。

(2・27朝日)

労働

スーパーに初の女性店長

西友ストアに福島千鶴子さ

ん(四二)。現場サイドからナ
マの提案を期待と会社側。

(9・2朝日)

就職戦線スタート

大卒女子は八二・九%が採用
ゼロ。昨年の五割増求人といわ
れる男子に比べ今年も狭き門。

(9・10読売)

職場の男女平等なお遠く

女性雇用者は全体の三三・八
%を占め史上最高。しかし賃金
は男子の五四・九%と、前年よ
り一・三%格差拡大。労働省の
「婦人労働白書」。

(9・17各紙)

大卒女子、前年より狭き門

採用予定四・五%減。全体の
七二・七%が採用ゼロ。企業は
まだ女子を戦力とみなさず、労
働省の大手企業採用計画動向調
査。

(9・26読売)

中小企業も女子に狭き門

新卒採用に関する商工中金の
調査によれば、採用予定者は前
年に比べ男五二・四%増、女子
三・八%減。(9・30日経)

女性外商チーム誕生

高島屋に十月一日から。女性
社員の能力開発と士気高揚がね
らい。(9・30日経・西日本)

一緒に働き、給料は半分

国税庁の民間サラリー白書に
よると、男性の平均年収三三一
万円に対し女性一六九万円。男
性の前年比七・五%二三万円増
に対し、女性は六・一%九万円
増。男女差歴然。

(10・1日経)

遠い「女の時代」

大卒女子の九割が今後も男女
の待遇格差は残ると回答。イメ
ージの良い企業に人気集中だ

が、女子昇進の道を開く西武、
富士通にも人気。日本リクルー
トセンターの女子大生就職動機
調査で。

(10・4各紙)

夜勤できぬ女子は結構

「男性社会」国鉄で、女子採用
を進めようとするトップに現場
からノーの声。中間職をめざす
男性が締め出されると反発。

(10・6朝日)

家内労働旬間

十一―二〇日、家内労働法制
定十年を記念して。内職の労働
条件の向上、生活安定を目ざし
て相談機関等を設置。

(10・10毎日、10・11朝日)

婦人労働旬間

二―十一日、「職場におけ
る男女平等をすすめる」を目標
に。今年は特に重点施策として
「男女別定年制など差別的制度
の改善」。(10・17・24各紙)

企業へパートで人貸します

人材派遣会社が、正社員敬遠
の企業と有名企業志向、腰かけ
派の女子学生をドッキング。正
社員としての大卒女子の雇用拡
大を訴える労働省は、しぶい
顔。(10・28毎日)

女性管理職コース新設

三菱、住友に続いて伊藤忠商
事。九年目に本人が選択。転
勤なし。が、給与体系は男女
別。(10・31朝日)

日銀に初の女性幹部候補生

坂口智子さん(二三)。「アメ
リカなら女性の進出は当然で騒
がれることもなかるうに」と父
親。(11・13朝日)

昔の資格で採用します

三井銀行が五六年四月から、
正社員として。これまでに身に
つけた能力を十分發揮してもら

うのがねらい。今後他の銀行にも広がる可能性。

(12・31日経)

雇用、石油ショック前に戻る

就職者は前年比七%増だがうち一割強はパートで前年比二六・五%増。八割強が女性。パートを雇用調節の安全弁に利用の実態如実。(12・31読売)

コンピューターの影響

ILOはコンピューターの企業導入は、女性の事務・販売系進出を進める反面、管理職への道を限定すると指摘。

(1・16毎日)

社員の奥さんフル活用

新製品開発アドバイザー、工場のパートとして。無料奉仕で夫の会社の業績向上に期待するところも。(1・24日経)
富士通では三月から。プログラマー不足に悩む会社と、出産

退職後も仕事を望む女性の希望が一致して。自宅に端末機を置いて在宅勤務で嘱託制。

(2・3日経)

パート主婦にちよっぴり朗報

五六年の税制改正で、年収七九万円以下ならば配偶者控除が受けられる見通し。「パートの賃金が安く抑えられているのも、この収入ワクのせい」と大幅な限度ワク引き上げの要望が出されている。(2・12毎日)

八か月目にして、やっと調整申し立て一件。オーディオメーカー労組から定年男女十年格差に關して。働く女性の注目を浴びて調整作業へ。

(2・13朝日・読売)

活動

「仲間の家」に市の助成

町田市の身障者の母親たちが作った緊急時一時受け入れ施設に。母親たちの運動の実績が認められて。(9・4読売)

妻の財産守る法を解説

日本司法書士会連合会が、贈与・共有・相続等についてわかりやすく解説した小冊子を無料配布。(10・1日経)

恒久平和の確立をめざして

地婦連と日青協が四日、憲法擁護声明を発表。内外の右傾化、軍事化に中立系として黙ってはいられないと。

(10・5朝日)

『医療110番』再スタート

日本婦人会議が十三―十五日、東京・大阪で。富士見病院事件をきっかけに、今回は産婦人科中心に実施。

(10・23朝日・読売)
有権者同盟、三五歳に

二六日、婦選会館で記念会。「組織を強くし、政治の右旋回にストップをかけるトリデになろう」と紀平会長。

(10・28読売・朝日)

都立保育学院、絶やすな

「縮小・廃止反対連絡会議」は、都の財政見直しという名目の切り捨てに抵抗の構え。

(11・1朝日)

「母が語る」民話づくり

主婦が作った「杉並民話の会」では、うもれている民話を皆にと、民話をもとにした絵本を作成中。(11・8読売)

自衛隊へ足踏み入れて

「いずみの会」のメンバーが自分たちの目で防衛の実態をと。美しい田園風景の中にそびえる

ミサイル発射指令基地にショック。
(11・21朝日)

「全国友の会」五〇周年

『婦人之友』の読者が記念大会。活動の歩みを語り伝える。
(11・23読売)

女子学生に職を！

雇用平等法を作る会のメンバー四人が二日から四八時間ハンストに。「門前払いの屈辱感を怒りとして社会にぶつけたかった」と。
(11・23朝日)

国連カレンダー

「ねむの木学園」が謝礼よりも企画に協力した誇りをと無料で児童画提供。収益はカンボジア難民の救済等に。
(12・18読売)

わたぼうしコンサート

「同情より仲間になって」と身障者と仲間たちが二五日、学習

院記念館で。障害者年のキャンペーン組曲「みんな同じ空の下に生きている」を披露。
(12・26読売)

右傾化のニオイNON！

宮城県神社庁の一般家庭への教育勸語配布に対し、新日本婦人の会県本部が、「平和憲法への挑戦」として中止申し入れ。
(1・14朝日(宮城))

川上知事の即時辞任を

婦人有権者同盟が十七日、五千万円授受事件の川上千葉県知事に要求書を提出。
(1・17読売)

日井連、トルコ風呂にメス

管理売春による人権侵害・脱税・政治献金の実態を調査、全面禁止を政府に提言。
(1・23毎日)

改意阻止一千万署名運動

社会党が平和憲法の感覚風化の認識から、婦人、青年層対象に呼びかけていく方針。
(2・2読売)

「自立の家」活動開始

「愛にみちて歴史をひらき、心華やぐ自立を生きる」もろさわようこさんの提唱に応えオーブンした「自立の家」で、「わが自立」を考えるつどいが開かれ、熱心な話し合いが。
(2・3信毎)

「婦人センター」オープン

日野市の飯沼元子さん(四二)が自宅を開放。「自分の存在価値を確認しながら女性同士が手をつなぐ場」と。
(2・10朝日)

有職婦人クラブ三〇周年

「女性の自立を促進するには」をテーマに、七八日名古屋で発表会。解決への道として働く

女性の先輩との密な情報交換をとの声も。
(2・13朝日)

自衛隊の入隊勧誘の家庭訪問に抗議決議

民主教育をすすめる宮城県民連合が。高三男子の約六三％が訪問受けたと。
(2・19朝日(宮城))

集会

婦人行動計画に市民の直訴

十三日、京都市婦人問題企画推進協議会の主催で。市民の切実な声を盛り込んだ行動計画作りを進めようと。
(9・7朝日、9・14京都)

京都府の中間年記念集会

十八日、京都府連合婦人会主催で、地域・職場での地道な活

動に基づく会員の意見発表が共感を呼んだ。(9・19京都)

信毎「私の声」県大会

十九日、女性の地位の見直しと、これからの女性の生き方の展望をテーマに討論。講演では渥美雅子さんが女性をめぐる法律の問題を説明。

(9・21信毎)

八〇年女の集会パートⅡ

四日、男女差別をなくそうという思いの女性、約八五〇名が参加。「婦人差別撤廃条約」早期批准と実施を求める宣言を採択し、デモ行進。

(10・5毎日、10・7朝日)

「男と女の幸福の構造」

ベティ・フリーダンをまじえ、一―五日「八〇年国際価値会議」の分科会で討論。「女は家庭」に強い批判。

(10・8読売)

戦争を語りつくすとい

女も協力した歴史をふり返り、戦争体験の風化を防ぐと、二五日、福岡県評婦人協が「戦争を語りつく福岡県婦人のつどい」を開催。継続的な反戦平和の街頭宣伝等を提唱。

(10・26朝日)

婦人の十年中間年全国会議

コペンハーゲン会議の報告もかねて十月三十一日、総理府主催で。男女平等への積極的な取り組み姿勢を固めようというものの。会場からも多岐にわたる意見が出され、婦人問題の幅の広さが浮き彫りに。

(11・5―15各紙)

許すな、労基法改悪

札幌で「労基法の改悪を阻止し、男女の雇用平等を実現する全道集会」。全道から一二〇人あまりの女性が参加。「改悪の

ねらいは高賃金の中高年齢男子を低賃金の女子労働者に置きかえること」と講演者の塩沢美代子さん。

(11・11道新)

「女性解放運動と戦争」集会

十一日、〈行動を起こす会〉で、右傾化の中で再び犠牲者や加担者にならないための行動を模索。

(11・20毎日)

熱気の中間年日本大会

二二日、四八民間婦人団体主催で。差別撤廃条約の早期批准のためにあらゆる分野からエネルギッシュな行動を訴えた。男女平等、平和に関する決議を採択してデモ行進。

(11・25各紙)

買春観光に反対する集会

二九日〈アジアの女たちの会〉が開催。参加者約四〇〇人の熱気のなかで、スライドを映して実態糾弾。観光労連も買春

ツアー反対声明を出して参加。(11・29朝日、11・30読売)

ユネスコの婦人セミナー

十二月二六日、国立婦人教育会館で。婦人年中間年を記念して十二か国から婦人労働問題の専門家が集まり、婦人のための教育・訓練・雇用に関して討議。

(12・1毎日、12・9朝日)

十二・八武器はいらない！

平和を守る母親集会

「なぜ戦争に反対しなかったか」と子どもの問いに答えを探し、活動を続ける山家和孩子さん。「行動に戸惑う母とこそ結びつきたい」とアビール。

(12・2朝日)

戦争への道を許さない

女たちの集会

七日、渋谷の山手教会で。戦争に巻き込まれ加担した戦前の

私たちのテツを踏むまいと、市川房枝・澤地久枝さんほかの呼びかけで、千人以上の女性が全国から参加。熱気のこもった発言のなか、「女は戦争を許さない」のアピールを採択。

(12・8各紙)

母に仕事を、モチ代を

十五日、「交通遣児と母親の全国大会」で政府に要望。

(12・15読売)

山川菊栄さんをしのぶ会

十三日、東京・サンケイ会館で。披露されるエピソードは、そのまま婦人解放運動の証言。(12・18毎日、12・19朝日)

国連総会報告会

十六日婦選会館で。「行動プログラムの支持を採択し、加盟各国がその成果を定期的に報告することを要請している」と中村政府代表がレポート。

(1・27読売)

沖繩で初の女性反戦集会

「女が平和の先陣になろう」と約五百人が参加。深い戦争のいたみをかかえた発言が続き、この体験を語り継いで反戦の輪を広げようと訴え。(1・31朝日)

風潮・変化

急がれる医療救済

売春防止法で補導処分を受けた女性たちの更生施設、東京婦人補導院ができて今年で二〇年。入院累計は一七〇〇人。多くが入退院を繰り返し、重度の性病で、療養必要が四〇％。

(9・2朝日)

「試験紙」の発売断念

だ液から胎児の男女判定をす

る「試験紙」(発売元「ミドリ十字」)は強い批判と厚相の申し入れて断念。(9・4朝日)

「性と平等」創刊

女の問題を国境にとらわれずに考えようとオランダ在住の英人女性がエスペラント語で発行。東京在住の共働き主婦二人が翻訳して日本語版発行。

(9・10毎日)

声の奉仕活動で表彰

全国の目の不自由な人たちへ録音テープの吹き込みを続けるボランティア約六千人を鉄道弘済会等が表彰。女性が九〇％以上だが必要度からはまだ不足。

(9・14読売)

産院足場に育児の伝承

市川市の助産婦さんが作った「母と子の会」は核家族化で孤立する若い母親の仲間作りを推進。将来は女の生涯教育も意

欲。(9・22読売)

『ある結婚の風景』放映

イングマル・ベルイマン監督のテレビ連続ドラマが六夜連続でテレビ朝日系で。「完べき」な結婚生活のあいまいさ、もろさをあばく中で、結婚とは、人間とは何かを問いかける。

(9・25毎日)

初の女性「海のGメン」誕生

第一号の女子海上保安官九人。男子学生とほぼ同じ訓練を受け、十月一日から各管区海上保安部に配属。

(9・27読売・京都)

国際女性スポーツ会議開催

チャスラフスカ、ブレルなど一流のスポーツウーマン七名を招いて。「スポーツにおける男女差別」「スポーツで得たもの」などをテーマに。

(9・30、10・2読売)

夫婦で香港旅行のすすめ

大阪のプラスチックメーカー

の労組が高年者対策として採
取、義務化。五〇歳以上の組合
員が対象。三泊四日で十万円つ
き。出無精中高年者が内助の功
に報いる場をと。

(10・4読売)

男子学生“盛炊”の時代

生活防衛のため自炊派増大。
趣味的色合いが強く、栄養面は
心もとないが、主婦の苦勞がわ
かったという声も。

(10・7日経)

日芸展、女性初入賞

工芸作家の登竜門「日本花器
茶器美術工芸展」の読売新聞社
賞に、林多恵子さんが。

(10・11読売)

「ちふれ」初黒星

地婦連販売の二百円化粧品

「ちふれシャンプー」に腐敗品。
防腐剤抜きがあだか。

(10・14読売)

難関突破の女性たち

外交官試験に三人、司法試験
に四九人が合格。いずれも昨年
を上回る合格数。

(10・25各紙)

初の女性コーチ登場

和光大アメリカカンファットボー
ル部に湯本玲子さん(二五)。
データ分析に全力投球、お飾り
コーチではないと監督も強調。

(10・29朝日)

税金Gメンに初の女性

三二人が合格。「結婚後も統
ける」と意欲的。

(11・1朝日)

女性弁護士、着実に増加

全国で四四二人。婦人問題の
関心の高まりとともに、役割も

広がる。「戦わなければ何も変
わらない」と淡谷まり子弁護士
(三三)。

(11・4読売)

主婦のカルチャー・トレイン

子どもが手を離れた主婦対象
に、有名人の講演を聞きながら
列車の旅を、と国鉄が企画。

(11・6読売)

女のとらん会

ふだん目にするものの中に含
まれている女への差別を女の視
点から紹介しようと、さまざま
な職業の女性十三人が主催。新
宿で。

(11・11読売)

やむをえず女性に開放

東京東久留米市で、無形民俗
文化財指定の「南沢の獅子
舞」、後継者難のピンチを切り
抜けるため。

(11・12朝日)

女性の手で報道特集

日本テレビ系「TV・EY

E」に「女の眼シリーズ」。ス
タッフ九人中、技術畑を含め女
性八人。女性の視点をもった番
組作りをめざす。第一回は「産
婦人科二〇番」。

(11・13朝日)

第二回国際女子マラソン

ジョイス・スミス(四三)が
二連勝。日本勢も力走。女子マ
ラソン、オリンピック種目に入
れても不安なしとの声も。

(11・17各紙)

子どもはキャリア・ママ嫌い

九割以上が母親の家事労働を
「大変な仕事」と評価。一方、
共かせぎかどうかに関係なく八
割が母親の勤めに反対。

(11・20日経)

女の主張を女の手で

男性監督がつくる「自立する
女性」の映画を乗りこえ、女性
監督が、「歌う女歌わない女」、

『彼女と彼たち』など次つぎに
発表。
(11・21毎日)

ミニバイク事故急上昇

事故の六〇％が二、三〇代の
主婦。免許取得の容易さとメー
カー側の販売攻勢が問題。実技
試験法制化が望まれる。

(11・25読売)

初の消費者アドバイザー試験

三〇日、東京・大阪で。主婦
中心に養成をねらったが高度の
知識を要求しすぎて敬遠。企業
からの集団応募が目立ち、主婦
の開発は今後の問題に。

(12・1毎日・日経)

「福祉公社」スタート

武蔵野市に全国初の老後保障
制度事業主体として。中核に福
祉字者の女性。有資産者対象の
有料サービシステムに批判
も。

(12・2読売)

女だけのジョイント公演

劇団「青い鳥」とロックグル
ープ「水玉消防団」が四、五日
東京で。

(12・4毎日)

孤独な主婦のアル中急増

アルコール中毒症の女性が四
年間で倍増。夫婦関係の不安定
さが引き金に。

(清野博子記者)

(12・10読売)

童話を書くお母さん

「わが子におくる創作童話」の
作品募集に全国から四千点の応募、
九割が主婦。

(12・14日経)

結婚式用マタニティ

都内のデパートで店頭に。八
か月までの花嫁OK。買い手は
まだだが、反応は好意的。

(12・15朝日)

慰問袋、健在

戦時中の慰問袋と全く同じもの
が十数年前から滋賀県防衛協
会婦人部から同郷の自衛隊員
に。「兵隊さん」に喜んで
らってうれしい」と同婦人部。

(12・15朝日)

女性向け生命保険、続々。

主婦の入院時の保障に特別配
慮したものや、更年期障害等に
対する保障に重点のものなど相
次いで発売。有職女性の加入が
目立つ。

(12・18読売)

三五歳からの出発

子育て後の人生を自分のため
に生きようと職場へのＵターン
急増、カルチャーセンターは盛
況。働く女性の六七％が既婚女
性。ただし、意思決定の場への
進出はまだだ。

(12・21西日本)

「日本科学読物賞」制度

故吉村証子さんの業績を記念
して。子どものためのすぐれた
科学読み物作品、業績が対象。

(1・17毎日)

買春ツアーの実態TVに

日本テレビ系「TV・EYE」
で二三日放映。「東南アジ
アの実情を理解してもらうこと
に力点。理解が生まれればこ
んなバカげたことはなくなる
はず」とプロデューサー。

(1・20朝日)

売れてます、離婚の本

書店に二〇冊近くも。売れ行
きは二年前に比べ五倍近く。児
童書にも主要テーマとして登
場。

(1・22、27西日本)

寿命が伸びて生保引き下げ

平均寿命が男より長い女性の
保険料が四月から大幅引き下

げ。(1・23読売)

ブーツ禁止令

関西の女子大で「大学はファッションを追求するところではない」と職員が校門で一斉点検。(1・24読売)

お寒いベビーホテル

厚生省、TBSの調査では無資格保育母が半数、大半がビル等の二階以上でずさんな運営。厚生省は一斉立ち入り検査を指示。利用者の九割以上は「仕事のため」。取り締まりだけではなく女子の労働条件改善、公的保育制度の充実をとの声もしきり。(2・10、19、27朝日)

消防庁も実態調査

自治省消防庁は二八日からの春の火災予防運動の重要目標の一つにベビーホテルの実態調査と安全指導をあげ、全国に通達した。(2・23読売)

有事に備える(?)婦人消防隊

真昼の住宅街の初期消火は女たちの仕事と、各地で主婦が消火訓練。(2・24日経)

あなたはこれでいいの?

女子大生八人が作る新聞『Pony』、現実の中で自分自身の生き方を考えるべきではと呼びかけ。(2・25朝日)

サークル活動どころでは

女性のサークル活動が盛んな折、マンモス団地内の公民館は人氣低落。住民の七割が共働きのため。夜の部重点のプログラム検討中。(2・26西日本)

教育・保育

どうなる? 家庭科

学校教育でも男女同一の教育課程を求める「婦人差別撤廃条約」。条約が批准されれば、女子のみ必修の高等家庭科が検討の対象に。婦人団体の共修要望に対し、文部省は、平等よりも「特性に応じた教育」を強調、反応はいま一つの感。(9・4西日本)

ニシン場に開いた保育事業

昭和初期のニシン漁興盛期に、働く母親のため無料保育所を開いた古城ひさ志さん(八〇)の半生が映画化。(9・18道新)

難聴女教師に愛のスクラム

重度難聴の藤田千恵子先生(三〇)を支えて、教諭仲間と生徒たちの自発的な手話のスクラム。大阪府立寝屋川高で。米国では、高校・大学の聴覚障害者の教師はごく普通、重度の教師には手話通訳が制度化されて

いる。(9・19朝日)

津田にも自主運営の保育所

津田塾大キャンパスの一隅に。二人の大学院生の共同保育からスタート、教職員の間に後援会もでき、専任保育母を置いて恒常的な保育所に。(10・14朝日)

通信・定時制高校に保育室

北海道立有朋高校で、ママさん生徒が自主運営。(10・22道新)

都立高校白書

「東京都高校問題連絡協議会」が、『父母がしらべた都立高校白書』をまとめた。直接高校を訪れ、教師や生徒から取材した都立高ガイドブック。一冊二五〇円。(230) 3891へ。(10・27東京)

全寮制幼稚園、出現

「集団生活でできるたくましい子に」と静岡県浜岡町に。しかし「五歳児では早すぎる」と厳しい見方も。(11・8朝日)

地域住民に大学の門開く

鹿児島女子大がこの春から公開講座を開講。応募者は定員の四倍を越え、幅広い年代の主婦のほか地域社会で指導的立場の男性も二〇人申し込み。(11・17日経)

無認可保育所に助成費を

「父母の保育料負担を軽くし」と無認可の馬込共同保育所の職員と父母が大田区に交渉。区側は実状を認めながらも重い腰。(11・30朝日)

校内暴力に名案なし

校内暴力など青少年の非行問題への対策を探るため、文部省では異例の省議。しかし名案はなく、各地で起きた事件につい

て背景や原因、学校側の措置などを調べ、指導事例集をつくり配布することを決めたのみ。(12・10朝日)

海外からの帰国子女

日本余暇文化振興会の調査データの分析によると、「帰国子女のほうが自己評価が高く、人工的に加工されていない子どもらしさを残している」。(12・11毎日)

女子の電気技術実習

四月新年度からの中学技術・家庭科の「相互乗り入れ」。東京・在原一中では、五年前から女子に試み、よい結果。(1・8毎日)

「女子教育」討議、新段階へ

十二・十六日、教育研究全国集会で。女生徒に積極的に労働の意味を教えていこうという方向。「労働権」の考え方が女教

師に浸透しはじめた成果か。(1・17朝日・読売)

教科書会社へ質問状

「自民党や財界の教科書検定への介入が目につく」として、日教組は中学校の社会科公民分野を出版する七社に、記述書きかえ要求や、それへの対応の事実をただした公開質問状を出して文書による回答を求めた。教科書を対象にした右傾攻勢に対抗してゆく方針。(1・29朝日)

高校家庭科必修 悩み多し

女子のみ必修の高校家庭科。必修が活発なのは、東京・長野・京都だが、京都以外は職業高校が主体。実施校でも、教育内容や教科書の不備などで試行錯誤の現状。(2・10日経)

少女雑誌が性教育講座

『ポップティーン』に、本格的な講座登場。「性に無知である

ことの不幸を女の子こそ知ってほしい」と解説の根岸悦子産婦人科医。書店サイドからは「あからさま」と反発も。学校の性教育にも警告となりそう。(2・13朝日)

健康

カフェインは胎児に悪い？

「カフェイン入り飲料を多量に摂る妊婦は奇形児出産の恐れあり」とアメリカで警告。本格的な調査結果は二年後に出る見込み。(9・6朝日)

お産革命その後、二題

①胎児の性別判定法Ⅱ妊娠五か月以上の赤ちゃんの性別を超音波診断でビタリと知る画期的手法。世界に先駆けて画像の解説法をあみ出したのは、京都の

夏山医師。②男女産み分け法
一九六〇年代に米国で始まり、
日本でも医療的試みが広まりつ
つある。基礎体温表、生体鉄・
リン・カルシウム剤、腔ゼリー
が産み分けの三種の神器。成功
率八〇％。(10・7朝日)

「農夫症」の主婦を実態調査

農業を営む主婦におきる肩こ
りや腰痛などの職業病。農作業
中の無理な姿勢などが原因。調
査を行なった埼玉県深谷農業改
良普及所は対策に積極的。
(10・10毎日)

「ドオギノン」生産中止

第二のサリドマイド禍として
西ドイツで問題になっていた
が、メーカーと保健省の話し合
いの結果。
(10・11道新)

末期患者支える「ホスピス」

英・米で急増のホスピスが、
来年、聖霊福祉事業団の手で浜

松に。「人生の最後の時まで、
人間の尊厳をもって生きてもら
うために、苦痛を除く治療を
し、行き届いたあたたかい看護
で心を和らげ、患者を救済する
ねらい。」
(塚本哲也)
(10・14毎日)

女性喫煙者増加に注意信号

「喫煙女性は不妊・死産の率が
高く、胎児の先天性異常とも関
係。子孫のためにも若い女性は
禁煙を」と「最後の喫煙宣言」
著者の浅野牧茂博士が警告。
(10・14毎日)

夫の喫煙妻の命も縮めます

ヘビースモーカーの夫をもつ
妻は、タバコを吸わなくても、
ノンスモーカーの妻の約二倍、
肺がんで死にやすいとがん研の
平山部長が警告。
(10・31毎日)

乳がん、悪性化の兆し

がん研・坂元氏の調査による
と、乳がんは、発生年齢が高
くなり、ホルモン依存型が増える
など、欧米化の傾向。食生活と
深い関連あり、死亡率が胃がん
を抜く可能性も。自己検診法の
徹底を。
(11・6朝日)

人工ベビーは朗報か？

人工受精、試験管ベビー、代
理母に続き、人工胚移植実験。
進む人工ベビーの技術開発に対
し「放置すれば人間の非人間化
へ向かう坂道」との警鐘も。
(1・22毎日)

調査

主婦のライフサイクル

主婦の一日の自由時間は平均
二・一時間。六五％が習いごと
やサークル活動に。福岡市の消

費行動研究所の調査。

(9・5西日本)

共かせぎ家庭の夫の声

十人に七人が妻の就労に賛
成。しかし七七・九％が「家事
がおろそかにならないように」
と約束させたい。職業研究
所の調査より。(10・9日経)

女性の意識、世界と日本

国際価値会議の価値観調査に
よると、「男女の育て方は異な
る」とするのが日本はインドに
続いて多く三五・九％。しか
し、日本を含む先進国に女性の
家庭離れ現象が。
(10・13毎日)

集団保育へ切実な要望

子を預けられれば働きたいと
いう主婦が六四・五％、就労反
対の母親も集団保育は望んでお
り、全体の約四分の三が三歳ぐ
らいから希望。大阪府の児童問

題研究会の調査。

(10・19読売)

根強い「かわいい女」志向

男性から受けた評価のトップは「かわいい女」。「男は外・女は家」に賛成が既婚七割未婚六割。PHPの「現代女性意識調査」(10・30日経)

暮らし一段と不安定に

エネルギー供給の不安定性を反映して変化する社会環境のなかでの、新たな対応の必要性を強調。『国民生活白書』(10・31西日本)

女性アル中患者急増

藍陵病院の今道院長らの調査によると、五〇年からの増加率は男性一・二倍に比べ一・七八倍の一四八人。(11・2読売)

現代女子大生気質

結婚志望七七％、一生仕事五

五％、貯金してる人六〇％、素顔派六〇％。堅実な女子大生像が浮かぶ『お茶大白書』(11・8読売)

若者は売春に寛容？

「売春は仕方ない」が男性半分、女性四分の一。「赤線復活肯定」社会人男三五％、女性全体の平均でも一六％。創価大ゼミの調査。(11・17日経)

八〇年青少年像

総理府の意識調査によると六四％が「今の日本は努力のしがない社会」。趣味を生かしてのんびり生きたいというのが平均像。(11・24朝日)

上司でなければ女性歓迎

「女性の管理職進出」好ましい一六％。「女性の上司のもとで働きたい」ノ一六〇％。建前と本音の違いがくっきり、朝日新聞国民意識調査で。

(1・3朝日)

家裁の離婚調停に不満

「調停委員は古い感覚やモラルを押しつけ、女性に忍従強いている」の声が六〇％。〈行動を起こす会〉の「家裁調停実態調査」で。

(1・9毎日、1・14日経、1・11朝日・信毎)

親の九割近くが家庭教育評価

子のしつけや人間関係に不安四四％、子との接触ほとんどなしは二九％だが、全体的にうまくいっていると考えている、が八八％。矛盾した親の気持ちは家庭内暴力の深刻化と関連？総理府「家庭教育に関する調査」から。(10・20読売)

性教育、必要性は認めるが

必要八〇％、学校でという親約七〇％、家庭でという教師約六五％。子どもたちは「正しい

性知識を教えてほしい」約八四％。愛知県教育センターの調査で。(2・25中日)

本

『主婦ブルース

—女役割とは何か—

目黒依子著。筑摩書房。

(9・5日経)

『女の目が光るとき』

女性の側から見た企業人間としての男性論。宮部タキ著。サンケイ出版社。

(9・6毎日・日経)

『女性は消費者のみにあらず』

菅原真理子著。サイマル出版会。

(9・15毎日、9・28読売)

『安全な食品をもとめて—主婦たちの手づくり生活情報』

関西の消費者グループ「安全食品連絡会」の十年の活動の記録。三一書房。(9・25毎日)

『女教師 美しき惑いのあなただへ』

現役教師の組合活動、教師生活三〇年の歩み。高柳美知子著。あゆみ出版。(10・8毎日)

『三千世界に梅の花』

出口なおの生涯強烈に。富岡多恵子著。新潮社。(10・13京都)

『母たちの時代—聞き書きさがみ野の女』

主婦が書く主婦の歴史。企画から出版まで自力で。長田かな子著。昭和図書出版。(10・14朝日)

『働いて生きる』

婦人労働の現状と展望を具体例を盛り込んで。大脇雅子著。学陽書房。(10・16朝日、11・18毎日)

『ひたむきに生きて』

現場の婦人労働者の実態。塩沢美代子著。創元社。(10・16毎日)

『光ほのかなれども』

「二葉保育園と徳永恕」と副題。上笙一郎、山崎朋子著。朝日新聞社。(10・20朝日)

『女だからって あきらめていませんか』

大阪「女性差別一一〇番」の報告書。女性差別一一〇番実行委員会。(10・21朝日)

『ぬくもりのある旅』

三四編のエッセーからなる自

伝。澤地久枝著。文芸春秋。(10・23毎日)

『ウーマンズ・ボディ』

女の体のやさしい解説書。池上千寿子訳。鎌倉書房。(10・25朝日、11・12読売)

『国連からの視点』

「体制派」日本を浮き彫り。緒方貞子著。朝日EN社。(10・31朝日)

『人民の沈黙』

急変する中国を民衆の側から理解しようとする訪中記。松井やより著。すずさわ書店。(11・11朝日)

『女の論理』

松原純子著。サイマル出版会。(11・17朝日)

『覚めよ女たち』

埋もれた「赤瀬会」会員の評

伝。江刺昭子著。大月書店。(11・17読売、12・1西日本)

『貝がらの町』

戦後市民運動の原点「声なき声の会」をはじめた著者が語る原体験。小林トミ著。思想の科学校社。(12・1朝日)

『女人芸術の世界』

—長谷川時雨とその周辺—
尾形明子著。ドメス出版。(12・11毎日)

『水軍史の女性たち』

水軍の活躍を支えた妻の生きざまをリアルに。村谷正隆著。(12・24西日本)

『考える女たち』

女子大生亡国論に生きた反証をと、西南学院大卒業後二〇—三〇年の女性が著わす「自分史」。(1・5朝日)

『妻たちの復讐』

女性の視点から離婚女性の体験記や座談会を編集。駒尺喜美編。すずさわ書店。

(1・6毎日)

『わたしの「女工哀史」』

『女工哀史』の著者の妻がつづる回想記。高井としを著。草土文化。

(1・12毎日)

『日本の婦人労働者』

林弘子著。海外出版。

(2・17西日本)

相談

離婚調停書はただの紙？

夫の女性関係から二人の子を連れて調停離婚。前夫は五回ほど養育費を送ってきただけで連

絡を絶ち、相手の女性と逃げ回るばかり。家裁に相談しても頼りなく、どうすれば養育費を請求できるか。(福島・主婦)

〔答〕履行確保の規定はあるが有名無実。死別したものと思いい、送金をあてにせずに生活をたてる方途を探したほうがいいのでは。福祉事務所で相談を。(鍛冶千鶴子) (10・8読売)

夫から解放されたい

育児と家事に疲れた三二歳の主婦。協力を求めても「食わせてやってるんだ」という返事。家事の手抜きも許さず、何もかもいやになった。

〔答〕相手に変わることはかなり要求せずに、自分が自分のためにできることから工夫をしては？ 楽しい時間を多くする訓練を。(深沢道子)

私の望む結婚、母が反対

(10・16読売)

二六歳。母に結婚を反対され、毎日のように見合の話攻め。今まで育ててくれたことを思うと、私の望む結婚を強行もできず……。

〔答〕母親がそれほど干渉するのは、あなたに毅然とした態度がないのでは？ すべての結果に責任を負うべき年齢はとうに過ぎている。娘の心がしっかり定まったと見届けたら母親も変わるはず。あとはあなたの決心一つ。(澤地久枝)

(10・21読売)

得られない性の満足

結婚三年目、一度も性の満足を得られない。離婚さえ考えてしまいが、踏み切れない。父らしさを感じなかった養父に夫が似ていることが何か影響するの

か。

〔答〕一方的受け身の態度、そして女性雑誌の読みちがいが原因では。夫婦の性生活には妻の

側の協力も必要。夫に父を求めずに対等で迫る勇気を。(平井富雄)

(11・18読売)

人

スペインと詩の交流に燃ゆ

女流詩人の最長老、英美子さん(八七)。自詩集のスペイン語訳を実現、五月、マドリッドで朗読会。令息・中林淳真氏(クラシック・ギター第一人者)の伴奏で。

(9・5読売)

豊島区の戦犯記念碑訴訟

原告代表、山家和子さん(六五)。真の戦争責任を問うため最後まで争う構え。日本母親大会役員。

(9・8朝日)

『ふたりの部屋』編集長

深尾恭子さん。「生活に夢を」

と、やる気十分の五〇歳。カメラが趣味。
(9・8毎日)

ピロイドのような弓使い

エリザベート王妃コンクール、バイオリン部門二位入賞の堀米ゆず子さん(二二・桐朋大出身)。欧州の一流マナージャ―を得て国際舞台へ。
(9・13読売)

児童文学処女作が舞台に

岩瀬成(じょう) 子さんの『朝はだんだん見えてくる』が劇団民芸の手で舞台化。基地岩国を背景に受験戦争にあらがいつながら人間として目ざめていく少女は、青春の自画像。
(9・15毎日)

怒りの庶民史を書く

『本所区花町、緑町』を自費出版した宮下喜代さん(六四)。震災・空襲・ありし日の下町の記録を残そうと。

四五歳の大学卒業 (9・21読売)

服部翠さん・主婦。「戦ゆえ大死にした父への娘としての無念さから」歴史科に。卒論「藤間身加榮(とうま・みかえ)の生涯」(身加榮は産婦人科医・平和運動家)が『歴史評論』に。
(9・22毎日)

国際大学婦人連盟会長に

津田塾大教授、高野フミさん。日本人女性が伝統ある国際組織の会長になるのは初めて。女性の生涯教育計画にも熱心、中年女性への大学講座開放を叫ぶ。
(9・23、10・16読売)

買春観光問題を訴える

買春観光問題と取り組んできた「アジアの女たちの会」を代表して、マニラでの民間会議に参加した高里鈴代さん(四〇)。都婦人センターの電話相

談員。二児の母。

(9・27朝日)

音色豊かな横笛の名手

赤尾三千子さん。雅楽では脇役の笛を、独立した楽器として演奏するバイオリン。『人間としての苦勞を積むなかでしか音楽は美しくなれない』と思うと。
(9・29毎日)

ひとり芝居、十年

劇中人物の一人だけを演じて全体のテーマを表現する、意欲的な女優、五十田安希さん(四〇歳)。切符売りも広告とりも自分で。公演は赤字でも、ひとり芝居は生きる原点と。
(9・29毎日)

グライダーの女性教官誕生

日本で二五年ぶり、三人目の女性教官、坂田淳子さん(二三)。立教大航空部出身。
(10・4読売)

35年も続くアマチュア劇団

伊豆下田の「勉強座」代表、長田静子さん(五五)。定期公演は年一回、小学校講堂で。四年には、静岡県文化奨励賞受賞。
(10・6毎日)

おかっぱ三四郎

全日本女子柔道の軽量級で三連勝の山口香(かおり)ちゃん。花の十五歳、女子柔道界のホープ。
(10・9読売)

現代の語りべ国立劇場に登場

浜田寸躬(すみ) 子さん。語りによる文学作品の舞台化というジャンルを開拓、邦楽の演奏をバックに独り語りを演じる。
(10・13毎日)

上林暁支えて四〇年

病床で書き続けた兄の「手」になって、言語障害で言葉にならない言葉を通訳し続けた徳広

睦子さん(六〇)。

(10・12読売)

飛驒の語りへ

小鷹ふささん(六九)。義祖母の昔話を思い出しては書きつけたメモが、一冊の本に。『飛驒のかたりべ——ぬい女物語』。飛驒の昔の生活、風習、言葉、民話を書き残したいと。自身でも、訪れた人には昔語りを聞かせてくれる。

(10・19読売)

小倉遊亀さんに文化勲章

日本画家、八五歳。上村松園さん、野上弥生子さんに次ぐ、女性で三人目の受章。

(10・24読売)

古文書整理、二五年

佐賀県多久市立図書館の司書、細川章さん(五六)。館所蔵の古文書類をコッコツ整理。隠された女の生活の実態を求め

て。

(10・24読売)

「パート婦人懇談会」をつくる

パートタイマーの身分保障活動をする、星三穂子さん。

(10・25読売)

『女の民俗誌』を書く

文化果てる村々の暮らしに“心の伝承”訪ねて半世紀の瀬川清子さん。明治二八年生まれの民俗学研究者。

(10・27読売)

小人症に身障者手帳を

加藤サキエさん(四三)、福祉の光求め、仲間とともに国会請願へ。

(10・31道新)

主婦、司法試験突破

鈴木喜久子さん(四五)。母の交通事故を機に、二九歳で中大法学部へ。挑戦八度目の正夢。

(11・2読売)

大浜さんに勲二等宝冠章

半世紀にわたり女性の立場の擁護に努めた大浜英子さん(七八)。家裁調停委員、国民生活センター会長など多くの役職を。故大浜信泉氏の妻。

(11・3日経)

森万紀子さん泉鏡花賞受賞

長編『雪女』で。無への恐れを表現して、鏡花の神秘幽玄、あやしみの美と一脈通ずる作品を書く四五歳。

(11・4読売)

中国との“野鳥外交”官

日本野鳥の会など鳥類保護研究団体代表の訪中のきっかけをつくった桂千恵子さん(昭七生)。子育て後に野鳥の観察を始め、本格的に調査・保護活動。

(11・5西日本)

闘病二〇年の“自分史”出版

重度身障のハンディを背負い

ながら、大学入学資格検定にパスした橋本美紀さん(二〇)の『翼は群の中で』。どんなにひどい身障者でも、その人にふさわしい群の中になれば成長できると、遅れた対策へ警鐘。

(11・9西日本)

メキシコに弦楽器学校開く

黒沼ユリ子さん・バイオリニスト。まだ寺小屋のような学校だが、「日本とメキシコの文化的コア(核)に育てたい」と、あふれる抱負。

(11・15朝日)

複合汚染と闘う科学者

松原純子さん・東大医学部講師。最近、婦人問題をヒューマンステイックにとらえた『女の論理』を出版。「チャレンジ精神のかたまりでタイヘン面白いヒト」(夫君ーバキスタン人ーの評)。

(11・17毎日)

生命科学に取り組む

科学技術の暴走をチェックする方法を探す新分野、ライフ・サイエンスに「母性愛」を傾注する、中村桂子さん（四四）。

「人間らしく生きられる社会」の実現をめざす。三菱化成・生命科学研究所室長。東大卒の理博。（11・18読売）

都市計画プランナー

広沢真佐子さん（三二）。役所・住民双方の意見を聞き、討論や調査を通じて町づくりの方向を決める専門職。学生時代からの住民運動歴十年。大阪の歴史的建物の保存や、川を守る運動を。毎日が月曜日の活躍。独身。（11・23読売）

黒人街から女性外交官

タンザニアに滞在十年の、鈴木優梨子さん（四一）。現地雇いから、正規の外交官として日本外務省に異例の登用。スワヒリ語のほか各種部族語まで縦横

にこなし、現地の孤児を里子として育てている。（11・29朝日）

医療監視のパイオニア

患者オンブズマンの開拓者、スウェーデンのB・ビーストランドさん（四一）。医療への苦情や悩みを調査して、行政に生かすパイプ役。急進的婦人運動団体「フレデリカ・ブレームル」の会長でもある。三児の母。（11・30読売）

盲児教育に生きる

全国で唯一の私立盲学校横浜訓盲学院の副学院長、今村貞子さん（五五）。父・幾多さん（九二）は盲幼児教育の先駆者、兄も訓盲院施設長と、愛の盲教育一家。アメリカで十五年研鑽を積み、一人一人の能力を最大限に引き出すために愛と創意に満ちた教育に献身。重複障害児も受け入れている。（11・30読売）

社史のプロデューサー

田付茉莉子さん。日本経営史研究所で、外注の社史を製作。日本経済史の少壮研究者。故大内兵衛氏の孫娘。二女の母。「女らしくではなく、子どもらしく育てたい」。（12・1毎日）

学術会議に初の女性会員

地球化学の猿橋勝子さん（六〇）。ビキニ水爆実験の時、世界に先がけて人工放射性物質の測定をし、原水爆反対運動を側面から支えた人。（12・1各紙）

草の根の作家、山代巴さん

治安維持法はう助で服役の体験を基に『囚われの女たち』で女囚の生死の真実相を描き、人間の連帯意識を語りかける。民話語り口で。（12・1読売・毎日）

パリで女ひとり二〇年

抽象画を描き続けた島田しづさん。いま東京で「回想二〇年展」を。（12・2毎日）

精神障害者を守れ

社会復帰に支援をと、沢田照子さん（六七）がボランティア団体「札幌いちいの会」を結成。（12・8道新）

「女の碑」建立一周年

代表、谷嘉代子さん（五四）。戦争で独身を余儀なくされた女たちが「一緒に眠れるお墓」を嵯峨野の一隅に。碑文は「女ひとり生き ここに平和を希う」。（12・8毎日）

女陶工 炎の結実

高田（こうだ）焼十一代・酒井雅女さん（五七）。象嵌の手法を使うため女には無理という父の反対を押して苦節四〇年、

阿蘇高田を世に出し、三〇年の
試行錯誤を経て高田を完成。

(12・11西日本)

テレビドラマで芸術祭大賞

民放でただ一人の女性ディレク
ターせんぼんよしこさん(五
二)。「ああ!この愛なくば、頑
張ってよ邦ちゃん」で、「生
涯「ディレクター」の人生を貫
くつもり」。(12・13読売)

障害者の料理講習を始める

障害者の健康な食生活のため
に料理講習に熱を入れる望月美
喜子さん(六三)。手話を習い、
耳で聞く教科書を作るなど心を
尽くす。(12・14読売)

ビデオ大賞受賞

津野敬子さん(三六)。社会
派ビデオアーティストの第一人
者、ニューヨークで活躍。受賞
作「サード・アベニュー」は、
ニューヨーク三番街の、貧しい

が明るく、たくましい移民たち
の生活を描いたもの。

(12・14朝日、12・18読売)

七一歳ユースホステルのママ

「幸せロッジ」はホステラーと
ペアレントが力を合わせてつく
った珍しいホステル。若者に教
え、慕われ、幾星霜の森岡まさ
子さん。被爆者である夫の遺志
を胸に。(12・15毎日)

幕末からの庶民生活を記録

画家・真藤アヤさん(明四五
生)が『初手はの——刀自の語
る久留米民俗誌』を出版。母ミ
チヨさんの折々の昔語りを、そ
のまま生きた方言で復元したも
の。久留米地方の方言の研究に
も取り組む。(12・17西日本)

自閉症との闘いに打ち込む

宗盛恵美子さん・精神科医、
「ともえ学園」園長。「施設も足
りない。自閉症をめぐる問題点

がいっぱいありすぎて」と。独
身。三七歳。(12・22毎日)

建設省初の女性課長

半田真理子さん、昭和二二年
生まれ、独身。街の公園づくり
に、女のやさしさ、知恵を発
揮。昭和記念公園調査設計課長
に。(12・22読売)

交響曲『御誦』(オラショ) を作曲

キリシタン迫害と、原爆の長
崎に育った大島ミチルさん(一
九)。隠れキリシタンの口承す
る祈りの言葉「オラショ」を借
りて、被爆者たちへのレクイエ
ムを法王ミサの晴れ舞台で披
露。ピアノバートは自演で。
(12・24、1・28西日本、
2・16朝日)

女性の歴史発掘、光あてる

江刺昭子さん(三八)、『覚え
よ女たち 赤瀬会の人びと』を

出版。家事・育児・編集アルバ
イト・執筆活動の四つを潔癖に
こなして。(12・29毎日)

身障者用具の手づくり工房

「おひさま工房」スタート一年
半、身障者自具作りに青春を
かける高木典代(みちよ)さん
(二四)。(1・1読売)

ろう学校で奮戦

スリランカに耳の不自由な子
の就学前教育をと、半本操子先
生(四八)が献身的な努力。言
葉のちがいが教材不足の中で悪
戦苦闘しながら。(1・3日経)

野上弥生子さん朝日賞受賞

九五歳、年と共にうまみを増
し、なおみずみずしい現役作
家。執筆中の『森』は今大詰
め、そのあとには、「伊藤野枝、
平塚らいてう、それに宮本百合
子を書ければ」と。

(1・4朝日)

フランス児童文学を翻訳

恩師と共に訳で、マリー＝レーモン・フアレ原作『もしかしたら火星人』を処女出版した木全寿子さん。白百合女子大卒業生の仏児童文学研のメンバー。同グループから第二、第三の「主婦翻訳者」登場の予定。

(1・4 毎日)

スポーツを支えにガン克服

四七歳の高校教師中野喜美さんは乳がんと戦って五年。手術後心身を鍛え、念願の「歩くスキー」レースに挑戦する。

(1・6 朝日)

歌舞伎美術の紅一点

鳥居派九代目、鳥居せつ子さん。歌舞伎三百年の歴史の中で、初の女性の舞台美術家に。舞台装置・装飾から衣裳、家業の絵看板まで担当。

(1・9 読売)

『わいふ』を新発足させる

田中喜美子さん(昭五生)。専業主婦であることに疑問をもつ主婦たちの投稿誌をボランティア路線から脱皮、本格的な流通機構にのせる。「食える」雑誌にと。

(1・11 読売)

金権風土に挑む六六歳

保守の金城湯池、あい次ぐ金権汚職で悪名を馳せた千葉県で敢然立ち上がった土屋さくさん。県民会議をつくり県政浄化の運動に全力傾注。

(1・16 毎日)

障害児保育に燃える

障害児も入れる保育園を開いた土屋多喜栄さん。二三年間の勤めをやめ、自宅を開放。

(1・18 読売)

ベビーホテル向上に奔走

東京・西新宿で十五年、二四

時間託児施設を続けている浅田和美さん(昭二〇生)。行政の谷間のベビーホテルに、せめて自主規制をと、二〇人の有志と共に、日本ベビーホテル協会を設立。規制と補助を国に要望。

(2・8 読売)

タフな才女、アーナー監督

ゴーマン美智子さんの半生を描いた映画「リトル・チャンピオン」の、グエン・アーナー監督。女優、舞台・テレビ演出にも多彩な活躍。四八歳、円熟期、二男二女の母。

(2・9 読売)

十五年の記録を自費出版

障害児を育て「陽だまり」を出した野口あさ子さん(四七)。英語塾、読書、卓球も楽しみなが、夢はコロニー農場づくり。

(2・11 読売)

ベビーホテルを追う

TVディレクター堂本暁子さん。人間扱いされていない赤ちゃんを救うため法改正を各政党に説得中。ビデオ持参で。

(2・13 朝日)

オモニ、望郷のリサیتال

在日朝鮮人二世の李順子(イ・スンジャ)さん(四一)。統一の願いをこめて故国の歌をうたう。済州島から強制連行された両親と苦難を越えて働き、絵を描き、歌ってきた生きた息子を息子に残したいと。ブティック「リーマ」店主。

(1・19、2・17 朝日)

二またかけて相乗効果を

「コブ付き大学院生通訳講師主婦」の名刺をもち、「愛して学んで仕事して」を著した佐藤綾子さん(三四)。主婦のコマ切れ時間を数倍に活用して生きる「バイナリ・ライフ」。「女業と仕事や勉強の二つが互いに

相乗効果をあげるような生き方」を提案。(2・18 信毎)

ポーランド担当官は唯一人

外務省の白石和子さん(昭二六生)。殺到するポーランド情報进行分析、次官が総理に話す資料や大臣と外国要人の会談に必要なものなどすべてつくる。若き縁の下力持ち。一女の母。(2・18 朝日)

「反戦ばあさん」いまも健在

沖繩にひとり暮らしの神山かめさん。夫と二人の息子は戦死、戦禍で両親も兄弟も失った。戦争に「あだ討ち」すると、反戦行進には必ず小柄な、こう菜だらけの姿が。いまも糸をつむいでいると風の便りに。(2・25 朝日)

衆院委で閣僚ナデ切り

社会党の土井たか子さん、婦人問題集中審議で、各閣僚をこ

つてりしぼった。「婦人差別撤廃条約」の未批准や、国籍法や生活保護基準での女性差別、教科書にみる差別などを追求して。(2・27 埼玉)

【訃報】

森島千代子さん。四日、腹部しゅようのため。七三歳。国道四三号線道路裁判原告団長。全国的な道路公害反対運動のシンボルの存在。「おんなの公害闘争史」出版のため聞き書き作業が進められていた。(9・4 朝日)

阿部みどり女さん。十日、老衰で。九三歳。俳人。高浜虚子門下。昭和七年より俳誌「駒草」を主宰。(9・10 読売)

稲陰千代子さん。十九日、胆のうがんのため。七四歳。女性アナウンサーの草分けの一人。(10・20 朝日・読売)

中河幹子さん。二六日、肝硬

変のため。八五歳。大正十一年から短歌雑誌「ごきよう」(現在「をだまき」)を主宰。作家中河与一氏の妻。(10・27 各紙)

山川菊栄さん。二日、脳こうそくのため。八九歳。大正から戦後まで、社会運動、婦人解放運動の中心的存在。二二年には労働省の初代婦人少年局長も務めた。(11・3 各紙)

山川さんは性別を超えて、日本の最高の頭脳の持ち主。夫の均氏はいいい同志だったが菊栄さんの論理は彼女独自の展開。(村上信彦・女性史研究家)

(11・3 朝日)
日本の女性としては珍しくはつきりした理論の持ち主。(市川房枝・参議院議員)

骨の人。ひとつの時代の終わりを感ずる。

(田中寿美子・参議院議員)

(11・3 毎日)

「足が痛むとカタイ本を読むと痛みを忘れることができる」と私たちを笑わせていたが、その大変な苦しみの中で、大佛次郎賞を受賞されるなど、すばらしい仕事を残された。

(樋口恵子・評論家)

(11・3 毎日)

江角ヤスさん。三〇日、胃がんのため。八一歳。昭和九年、「純心聖母会」、翌十年純心女子学院を創立。女子教育に一生を。長崎で被爆。原爆孤老のための養護ホームを設立。「被爆者の母」とも。(12・1 朝日・毎日・西日本)

進藤梅子さん。十二日、肺がんのため。六四歳。ニューヨーク五番街長老教会専属歌手。故

ケネディ大統領の告別記念礼拝式では聖歌を独唱。

(12・13朝日)

紅露みつさん。二〇日、スイ

臓ガンのため。八七歳。二二年四月から民主党代議士、二二年から参院議員(福島地方区)を四期務めた。(12・20読売)

米山久さん。九日、老衰で。

八四歳。婦選獲得同盟の石川県支部長として女性解放運動に活躍。戦後第一回選挙での社会党代議士。(2・11朝日)

市川房枝さん。十一日、心筋

こうそくのため。八七歳。婦人の地位向上と政界浄化に生涯を捧げて。参院の永年在職議員の表彰を前に。(2・12各紙)

大正八年「新婦人協会」設立

以来、一貫して婦人の地位向上に尽くしてきた執念に敬服。「ストップ・ザ・汚職議員」は、

国民の思いそのままの実践。

(中村紀伊・主婦連副会長)

(2・12朝日)

あまりにも大きな存在で、市川さんの死によって、婦人の運動が停滞しないかと心配。

(藤田たき・元津田塾大学長)

(2・12朝日)

晩年になるにつれ、大きく輝きを増していった稀有の人。

(石垣綾子・評論家)

(2・12朝日)

思想的にきびしい反面、思いやりとあたたかさは人一倍。

(近藤真柄・元婦人有権者同盟会長)

(2・12毎日)

非常に誠実、ざつくばらんな方。頼めば必ず答えが返ってきた。

(瀬戸内晴美・作家)

(2・12朝日)

地上にまっすぐそびえ立つ杉のようなシンの強さが。運動のカリスマではなく心棒。

(篠原一・東大教授)

(2・12朝日)

私も一票を投じていた。

(三木睦子・元首相夫人)

(2・12朝日)

これほどその死を純な瞳で見守られ、涙で惜しまれた政治家はかつてあるまい。市川さんは、私たちの良心の灯、清冽な

川の流れであった。

(増田れい子・編集委員)

(2・12毎日)

市川さんが老いと共に美しさを増していったのは、偽善をきらい、不正を許さず、理想に向かつて生ききった、みごとな生きざまが、顔のしわに輝きでたからであろう。

(もろさわようこ)

(2・26毎日)

意見

政府がすすめる三世代同居は

女を老人の看護人として期待するもの。福祉は国がもう少し負担すべきだ。老後の問題解決に国が家庭主義を頼る甘さは、日本の男の甘さとも言える。

(鷲津美栄子・評論家)

(9・11日経)

企業の論理?深夜業の解禁

企業は女子労働者の使いづらさの一因に「深夜業の禁止」をあげ、その解除を望む。しかし働く女性からは「これこそ企業の論理。労働条件の悪化につながる」と抗議の声。雇用の平等を確保するためのガイドライン完成が待たれる。

(竹内義昭記者)

(9・14毎日)

性差別的な少女マンガ

女向けとして区別されたジャンル。結婚こそ人生と教え込み、ヒステリックな感情表現、

女に頼る老人福祉

白人崇拜が目立つ。日本社会の意識を映し出す思い。

(佐藤真知子・主婦)

(9・18毎日)

今、女の自立とは

「自分は何であるか」を常に問い続けることを解放の原点に、他者と連帯しながら、手かせ足かせを取り除きつつ歩むことこそが「わが自立」。

(もろさわようこ)

(9・22読売)

働く母親の時代へ

女性の責任分野は家庭だけではない。女が働けること、母親が働けるよう夫と社会が協力することは、人間の権利。専業主婦はその権利の留保と考えることが、主婦の生き方に新しい展望を開く。

(金森トシユ)

(9・22読売)

セカンド・ステージ

リブ運動の第二期は、従来の古い男女のイメージを打ち破り、協調しつつ仕事や家庭を新しい構造に変える時期。両性の変革のスローガンは、メイク・ラブ、ノット・ウォー。

(ベティ・フリダグ)

(9・26、10・4、11、朝日)

10・9毎日、10・17日経)

女性研究者に働く場を

研究の場は男性優位、科学研究は女性に不適という誤認も根深い。多くの女性が、遅れた受け入れ体制のために研究者を志してもやむなく退職している。女性科学者の未来のために基金設立も企画したい。

(猿橋勝子・研究者)

(10・18読売)

働きたい女がなぜ働けぬ

やる気と能力のある女性が疎外されている日本社会。行きどころのない女性の欲求不満は大

きな社会問題となっているのに、敏感な指導者も気がつかない。日本の女性問題は男性意識の問題に帰着。能力差を「男女の」でなく「個人の」ものとしてみるべき。

(10・21朝日(社説))

「主たる扶養者」夫」か

働く妻は、子どもの「主たる扶養者」夫」の原則は納得できない。「共働き女性にも扶養手当を」要求する公務員組合の取材を通じ、働いても家計補助と扱われる女の実態をリポート。

(越村佳代子記者)

(10・27朝日)

買春行為は日本経済の反映

富んだ国に男が、貧しい国に女がいる限り国際売春は決して絶えない。売春婦は敗戦後の日本に貢献したが日本経済が安定した今、男たちは世界の売春婦を求めにいく。

(大谷健朝日新聞編集委員)

(10・27朝日)

買春観光という名の性侵略

東南アジア買春観光の告発に男の反応は旧態依然。買う側の非人間性は無視して「経済力の反映」と(10・27朝日)。このコラムに女性の抗議殺到。性侵略を正当化することの論理を、日本の女性とアジアの弱者はともに糾弾しよう。(松井やより)

(11・10朝日)

買春ツアーは妻にも責任

優しい夫が海外ではセックスアニマルと化するのにはご存じか。セックス旅行を許す妻がいる限り買春ツアーは続き、日本女性もアジアの人々から蔑視される。(大野寿美・四〇)

(11・21朝日)

売春廃絶は経済的自立から

体を売る以外生活ができない

フィリピンの女たち。たとえ買春反対運動のおかげで観光客が来なくなっても状況は変わらない。経済的自立を実現しない限り、反対運動は富める国の人々の自己満足だ。(寺見元恵・主婦・マニラ在住)

(12・16毎日)

日本の国籍法は男女差別

父系を優先するため、国際結婚の結果母の日本国籍を継がない子や無国籍児を生み出している。これは「婦人差別撤廃条約」に反し、子どもの人権も犯すもの。父母両系主義の国籍法に改めよ。(土井たか子)

(11・7朝日)

女の方で戦争への道阻止を

戦争が始まってしまえば、もう反対の声を上げるとは許されない。右傾化の強まる今、戦争の起こらぬ前に、「戦争への道」に女たちは決してくみせぬ

ことをはつきりと意思表示しよう。(吉武輝子)

(12・3読売)

女たちよ反戦を示そう

第二次世界大戦中、女は若者を戦場へ追いたてた責任がある。だが今、反戦の気持ちはどんな女にも刻み込まれているはずだ。個々では無力な女たちだが、手を携えて戦争推進者を孤立させよう。(高良留美子・詩人)

(12・6毎日)

一人暮らしの立場に考慮を

同伴者は配偶者に限るとの永年勤続表彰の案内状。結婚するのが世の常識か。未婚女性には税金・年金の優遇措置もなく、不平等感が残る。(佐々木瑞子・教師・五五)

(12・12朝日)

離婚増加で財政負担ふえる

離婚急増で母子世帯への児童扶養手当が増えている。頭を痛めた大蔵省は所得制限額を引き下げる案。しかし所得制限をしても離婚は減らない。子どもが育つときくらい血の通った財政政策を進めよ。(塚本哲也・論説ノット)

(12・22毎日)

女の本質的な場は家庭

子どもを社会人として育てるのも立派な社会参加。外に出るのは四〇代になってからで十分ではないか。女にとって基盤は家庭。母の手作りで生活を生き生きと。(田中澄江)

(1・1河北)

ファシズムは性差別と同根

最近反ファシズム運動が女性運動の中で大きな位置をしめる。しかしこれは男女差別体制反対の女性解放運動を二次的にするものではない。反ファシズ

ムと女性解放は同じ土台に根ざし、同時に達成されるものだ。(水田珠枝)

(1・16朝日)

受胎革命に歯止めを

不妊夫婦の救済重視よりも子どもの幸せを第一にした歯止め策が必要。専門委員会を設け具体的な指針、方策を考えるべきだ。(横山裕道記者)

(2・11毎日)

八〇年代の子育て

育児は母子だけのことでなく、夫婦や社会問題。子どもの特性を伸ばすため、親は自分の道を自分で見つけ、その子なりに人生を楽しむようにすること。(池上千寿子・編集者)

(2・12毎日)

離婚の母にも扶養控除を

高齢化するほど男女格差のひろがる日本の賃金体系で、離婚

の母から税を徴収するのは酷。確定申告の課税額算出時に扶養家族があれば、扶養控除の適用を。(飯田啓子・フリーライター) (2・24朝日)

海外

受精卵にウィルス遺伝子

米エール大の三人の遺伝学者がマウスで組み込みに成功。この研究が進めば、不治とされる人間の遺伝病治療の可能性も。

(9・4朝日)

カフェイン、胎児に悪影響

米食品医薬品局が警告。明確な結論はまだだが控えるのが賢明と。

(9・5毎日)

名付けてグレイ・パンサー

米国に広がる老人解放運動の

リーダーはマギー・クーン夫人(七五)。余生を選ぶ権利を主張して「百歳までも頑張る」と意気盛ん。

(9・12朝日)

中国、新婚姻法成立

四大原則は、①婚姻の自由②一夫一婦制③男女平等④計画出産の実行。一月一日より施行。

(9・17毎日)

フランスでも着実に前進

あらゆる階層・職業・年齢の女性が参加する解放運動(M・L・F)が活発化。

(9・19日経)

開放的でも花嫁は...

ブラジルの女性議員、花嫁の純潔を法的に義務づけているのは女性差別と、民法改正案を国会に提出。

(9・23道新)

赤ちゃんは二人の産物

アメリカでは男性も分娩室に

入る動きが高まり、ラマーズ法も常識化。

(9・25日経)

同伴女性紹介します

タイに初登場の紹介会社が生業や役所に案内状を。大臣十人も会員登録。

(9・28毎日)

ポルノは破壊だ

英政府諮問機関の解禁勧告に、ホワイトハウス夫人(七〇)が激怒、反対運動中。

(10・5毎日)

バチカンにニューウェイブ?

司教会議の席上、米のフウイン大司教(五一)は、人工的な避妊を罪悪とするのは時代遅れと問題提起。

(10・9読売)

米の「算不仁科」医

全米保健協会の調査が安易な帝王切開手術の急増を報告。消費者グループは医者算術診療を非難。

(10・11読売)

日本男性に「妻」紹介

韓国の保健社会省は、十日国内の国際結婚相談所を摘発、処分を要請した。マスコミは「韓国女性を冒とくする屈辱的な商売」と報道。

(10・11毎日)

平和は女性にも責任?

アメリカ安全保障問題専門家ブリシラー・クラップさんが来日。「防衛面での男女の分担は当然」と女性の志願制度を支持。

(10・16読売)

アメリカで増える片親家庭

過去十年間に七九パーセント増加、片親のためのガイドブックも出現。

(10・18日経)

バスより速い女

第十一回ニューヨークシティマラソンで、ノルウェーのワイツ夫人(二七)が世界新記録で三年連続優勝。

(10・27朝日)

女性問題解決のために

ニューヨークにある「女性のための正義」委員会を組織する牧師ジョーン・マーチンさん(二九)は活力に満ちた黒人女性。E.R.A.の批准運動に積極的にかかわっている。

(10・30 信毎)

いまポーランドの女性は

来日の女性心理学者イダ・クルチさん(五〇)によると、ストを背後で支えるのが女性。志向は家庭と仕事に二分。

(11・4 朝日)

売春合法化

ネバダ州ナイ郡で。

(11・6 朝日)

二〇世紀フォックスの社長

シェリー・ランシング女史(三六)来日。男がつくつてきた映画界の常識にとられない

発想で、ヒット作を生む。

(11・7 朝日、11・12 読売)

競争原理の社会を批判

米国の精神分析医J・ブラザースさんが来日、「仕事優先の社会を見直し、これまでの男女の役割にとられない人生を」と講演。

(11・8 毎日)

レーガン政権と女性運動

レーガン政権誕生によってE.R.A.は発効が絶望的。

(11・11 読売)

『エル』の編集長は語る

フランス唯一の女性週刊誌の編集長ヴィクトールさん来日。「フランス女性はいろんなことにフランスよく関心をもち、自由に生きる。」

(11・12 毎日)

量産ママ近く四五人目

チリのレオンチナ・アルピナ夫人(五四)。現存者では最高。

(11・15 毎日)

法曹界に女性急増

アメリカでは数年前まで皆無だった女性裁判官が今では七百人も。

(11・21 読売)

E.C.外相理議長に女性

ルクセンブルクのコレット・フレッシュュ女史(四三)が就任。

(11・22 朝日)

英女性が単身飛行で新記録

ジュディ・チザムさん(二八)が英国からオーストラリアへセスナ機で約八〇時間。

(11・23 毎日)

米国の女性議員

新議会に二一人と史上最高。

(11・26 読売)

当世アメリカ母子事情

「今日、あなたは子どもを抱きしめてやりましたか?」。ソフ

ィア・ローレンがテレビから呼びかける。子育てよりも自分が飛びたい放任ママに効果は大きいらしいとか。

(女性かわらばん)

(12・6 日経)

レノン夫人鎮魂の祈りを訴え

ジョン・レノンを殺害されたオノ・ヨーコさんが悲しみの声明を発表。「ジョンは人間を愛し、そのためにいつも祈っていました。彼のために祈って下さい。」

(12・10 読売)

レーガン人事

女性政治学者のジーン・カークパトリックさんを国連大使に。

(12・23 朝日・読売)

「サッチャーリズム」強行

インフレ防止、民間の活力再生のためと緊縮財政を実施中。まわりの批判かえりみず。

(1・3 日経)

女だけの銀行

サウジアラビアに従業員も客も女性だけという世界でも珍しい女性専用銀行誕生。

(1・6 読売)

一夫多妻制、厳然と

イスラム教のエジプトでは四人まで。農村部で顕著。

(1・6 毎日)

「未婚の母」は不名誉

未婚のまま妊娠したアラブ女性たちは、海外逃亡、中絶殺人を余儀なくされている。

(1・10 読売)

女性の就労禁止新リスト

ソ連で女性に有害な八〇種の労働・職業の基本リストを作成。

(1・17 朝日)

「9時から5時まで」

上司に対する三人のOLたち

の反乱を描いたコメディタッチの映画がアメリカで評判。

(1・21、22朝日、2・21日経)

「四人組」裁判、判決

反革命が立証され、江青に死刑。ただし猶予二年。

(1・26 朝日)

米国で「離婚絵本」続々

子ども心に不安残したくない、と離婚児童(チルドレン・オブ・ディボーズ)を扱う現場の人たちから。

(1・31 日経)

ノルウェーに初の女性首相

グロ・ブランドランドさん(四一)が就任。外柔内剛、妊娠中絶の自由化推進論者。

(2・3、4、5、8 各紙)

ソ連の「子育て大学」

小・中学校の父母を対象にした「教育知識人民大学」は日本の市民講座よりもっとポピュラ

1。成果は大きく、ある町では落ちこぼれの子はなく、四人に一人が優等生。

(2・12 毎日)

ドミニカ連邦の女性首相

マリー・ユージニア・チャールズ首相(六九)。昨年七月野党党首から三代目首相に。目下の悩みは国家の借金経営。

(2・14 朝日)

アフリカの女性解放の波

セネガルのマリファマ・バーさん、「一夫多妻制」を告発。

(2・15 朝日)

米特殊部隊に女性

キャスリーン・ワイルター大尉。軍の方針で戦闘要員にはならず。

(2・23 朝日)

「女の園」を男性にも開放

女性客のみだったニューヨークのバルビゾン・ホテル。経営困難のため。

(2・28 毎日)

事件

夜間託児所、乳児届け忘れ

松山で送迎車に八時間置き忘れられた乳児が脱水症状で死亡、経営者を逮捕。

(9・3 各紙)

判事、女性被告と交際

小倉裁判所判事が担当被告を呼び出して交際。最高裁が調査に。

(9・6 朝日・西日本)

親に知られてはと死

池袋でホステスがサロン手入れにあり、任意同行を求められて飛び降り自殺。

(9・8 朝日・読売)

でたらめ診療

所沢の富士見産婦人科病院で

医師の免許もたぬ経営者が異常のない女性患者らに「子宮が腐っている」と診断、同病院内での卵巣摘出手術を強行。被害者からの訴え続出に、経営者を逮捕、厚生省も調査へ。

(9・12各紙)

被害を受けた元患者たち、「被害者同盟」を結成。

(9・20各紙)

病院理事長は警察の内偵開始直後、自治相に数百万、所沢市長に一五〇万献金。市の被害者からの苦情握りつぶしも表面化。

(9・20読売)

被害者同盟支援、医療是正運動の広がりのために、二六日、市川房枝さんら八人が、医師免許取り消し等を求めて。

(10・27読売)

被害者、千百人を超える。病状説明はほとんどなく、「がんになる」「命がない」と恐怖感をうえつけて手術へ。九割が後遺症。離婚・自殺の患者も。

(11・20朝日)

院長のみを保健婦助産婦看護婦法違反で起訴。他の医師や職員は起訴猶予。

(12・26朝日)

私の役目は終わった

板橋区で六九歳の女性が夫に先立たれ子ども全員独立、焼身自殺。

(10・11読売)

女子外交官研修生自殺

英国で語学研修期間中に「カレッジの生活に溶け込みにくい」と。

(12・3朝日・読売)

見せかけの善意

鎌倉のベトナム難民収容所の少女を、都職員が里子にすると連れ帰りいたずら。

(12・13読売)

第二の富士見病院

千葉の野村病院長を傷害・詐欺罪等で元患者らが告訴。産婦人科のでたらめ診療を訴えて。

(12・17朝日)

女子大生誘かい、殺害

名古屋で「家庭教師求む」と呼び出して。

(12・26、1・21朝日)

「酒飲んだ」と妻刺殺

京都で、遊んで帰った夫が、妻が無断で外出し飲酒していたと殺す。

(1・23朝日)

「やせたい」と栄養失調死

長崎の女子短大生が、過度の減食から神経性食欲不振症となり体まで食べ物を受けつけないで。

(2・7毎日)



切り抜き運動を

する方、ご連絡を

女が生き生きと活動する日、子殺しや心中がなくなる日を目指して、新聞切り抜きを続けています。しんどい仕事ですが女の情報収集活動の一つとして参加する方、また切り抜いた新聞を要約する仕事をする方、ぜひご連絡ください。実費程度ですが、薄謝が出ます。

【申し込み先】

〒160 東京都新宿区新宿1の9の6 あごら編集部・新聞切り抜き係
ハガキに住所・氏名・連絡先電話番号、購読新聞紙名、切り抜きやリライトの経験の有無を書いてお申し込みを。

資料1 日本国憲法(抜粋)

〔前文〕

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われ

〔解説〕

憲法の基本精神

どの国の憲法でも前文には、その憲法制定者の決意や、その憲法の根本精神が述べられている。日本国憲法の前文は、「日本国民は……再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し……この憲法を制定する」という文句ではじめられている。無謀にも第二次世界大戦に突入し、はかり知れない犠牲をまねいたことへの反省から、「平和主義」を宣言したのがこの前文である。

それと同時に、この憲法は「人類普遍の原理に基づくもの」として、戦前の偏狭な国家主義を排除している。そして、この「人類普遍の原理」の具体的内容としては、平和主義・国民主権・基本的人権の三つの原理が挙げられる。

一九四六年十一月三日公布

一九四七年五月三日施行

らは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狹を地上から永遠に除去しようとするのを、この国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名譽にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

〔戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認〕

第九条

① 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

戦争の放棄

前文の平和主義の原理を具体化した本文の規定が、本条の「戦争の放棄」と「戦力の不保持」である。本条は、この憲法の生命にあたる条文であるが、また本条が、この憲法三十五年の歩みのなかで、最も論議され、そして今や最大の試練と危機に直面している条文である。

本条は、いまなお改正されてはいないが、制定の際の平和主義の精神が、解釈をとおして、除々に歪められてきた。

すなわち、この「戦争の放棄」(第一項)の「戦争」には、「自衛のための戦争」を含むのかどうか問題とされてきた。政府は、「本条も国家の『自衛権』まで放棄したものではなく、したがって自衛のための戦争は放棄されてはいない」と解釈してきた。これに対して、この憲法の平和主義を守ろうとする立場からは、「本条は、たとえ『自衛』の目的のためにせよ、一切の戦争や武力の行使を放棄したものである」とする。それが学説の上でも多数の説である。

次に、第二項は「戦争の不保持」を規定したものであるが、この「戦力」の解釈についても、自衛隊が合憲か違憲かをめぐって論争が続けられてきた。政府は、「九条

〔個人の尊重と公共の福祉〕

第十三条 すべて国民は、個人として尊重される。

生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

〔奴隷的拘束及び苦役からの自由〕

第十八条 何人も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない。

は『自衛権』までも否定したものではないので、自衛権の行使のために必要な戦力は保持してもよい」とし、「自衛隊は違憲ではない」としてきた。これに対して、本条はすべての戦争を否定しているという立場からは、自衛隊は「戦力」にはかならないとし、違憲である、と主張されている。昨年（八〇年）からにわかに活発化した改憲議論において、改憲勢力はこれまでの政府の解釈を条文の上にもはっきりさせようとして、本条の改正を唱えている。さらに、たとえばベルシャ湾の石油輸送路を護るために自衛隊を派遣することも違憲ではないなどとも主張している。

また、本条をめぐって、「日米安全保障条約」が合憲か違憲かも争われてきた。政府は、もちろんこの条約は合憲であるとしている。それに対し、この条約は、日本が米国との間に、共同防衛・軍事同盟的な関係に立つことを内容とするものであるが、このように米国の軍事力に依存して日本を防衛しようとする条約は、一切の戦争を放棄し非戦・非武装・中立を国是とした、九条・前文の精神に反する、というのが平和を守ろうとする立場からの反論である。

「徴兵制違憲」の根拠

最近の政府統一見解は「徴兵制違憲」の根拠として、「十三条、十八条などの規定の趣旨からみて徴兵制は許容しない」と説明した。（昨年八月）。

それに対し、竹田前統幕議長が「『奴隷的拘束』・『苦役』の禁止を規定した十八条に根拠を置く政府見解は国を護る自衛隊の崇高な職務が苦役であるとの誤解を招き、自衛隊員にとって耐えられない解釈だ」と発言したことから、国会でも問題になったが、本年三月、政府は十八条を論拠からはずさないことを再確認した。その理由として、「徴兵制とは兵役を本人の意思に反して強制する制度であり、その意味で十八条の『その意に反する苦役』に当たる」としている。また、今日の自衛隊は義務制ではなく本人の意思に基づく「志願制」なのであるから、本来、十八条違反の問題は生ずる余地がないのだ、としている。

十三条は、要するに、国民の自由も「公共の福祉」に反する場合には制限されるこ

〔思想及び良心の自由〕

第十九条 思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。

〔宗教の自由、国の宗教活動の禁止〕

第二十条 ① 宗教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

② 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

③ 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

ともあるということを決めた規定であるが、「国を守ることこそ最大の『公共の福祉』ではないか」という立場がとられるならば、徴兵制は合憲だとされることにもなりかねない。その意味で、十三条のほかに十八条が重要な歯止めとなってくるのである。しかし、それはそれとして、戦前においては、国々天皇のために戦地におもむき戦うことこそ、国民の義務だ、とされ、兵役を拒否するものは「非国民」と呼ばれ、罰せられたという歴史を思い起こす必要がある。

十三条の「公共の福祉」はきわめて多義的に解釈されることばであるから、「徴兵制」も、戦争中の徴用制も、「公共の福祉」を理由として合憲であるとされる可能性がある。あることに警戒しなければならない。

「良心の自由」による兵役拒否

「良心の自由」というのは、個人の「良心」の問題は国家が立ち入ることのできない問題だ、ということである。宗教的な信念も「良心」である。そこで、信仰として戦争を拒否しようとする個人の場合、国家の政策としての「戦争」と「良心」が衝突することとなる。徴兵制が施行されている国々においては、憲法で、「良心に基づく兵役拒否」の自由を認めている場合が多い。

信教の自由

靖国神社を国が経営し、戦没者を国家の名において祀ることをしようとする「靖国神社法案」が、これまで、いく度も国会に提出されている。この法案に対して、それは靖国神社を特別扱いするとともに、国家のための戦争を美化するものであり、「信教の自由」に反する、という反対論が強い。

現在係争中の「自衛官合祀訴訟」は、殉教自衛官であった夫が山口県・護国神社に祀られたことを、クリスチャンであったその未亡人が、「それは妻の信教の自由に反する」と主張してその合祀の取り下げを求めた訴訟である。原告たる未亡人は、夫が合祀されたという事実のなかに、「殉職自衛官を英霊として扱い、愛国心の高揚を図る」風潮に軍国主義復活の影がみえている、として、「日本が再び戦争への道を歩ま

「集会・結社・表現の自由、通信の秘密」

第二十一条 ① 集会、結社及び言論、出版その他

一切の表現の自由は、これを保障する。

② 検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。

「財産権」

第二十九条 ① 財産権は、これを侵してはならない。

② 財産権の内容は、公共の福祉に適合するやうに、法律でこれを定める。

③ 私有財産は、正当な補償の下に、これを公共のために用ひることができる。

ないように」との悲願からこの訴訟を提起したのであった。

「表現の自由」を護る意義

いずれの国も、戦争への道を歩む過程として、戦争に反対し、戦争を批判する人々の声を抑圧するために、国民の自由な討論の場を奪い、国民の思想を国家の政策の方向に導くような言論・情報の統制を行なうのが常である。その防止のためにも、本条により保障される「表現の自由」をあくまで護ることが、特に重要な意味を持つ。

財産権の不可侵

本条は財産権の保障を定め、ただし、「公共の福祉」のためには財産権が制限されることがあることを規定している。そこで、たとえば自衛隊基地建設のために自己の土地を収用された人たちが、それは個人の財産権の侵害であるとして争うケースが多い。

本条第三項は、私有財産不可侵の例外として國家が「公共のために」その財産を用いる場合と定めているが、自衛隊基地の建設がこの「公共のため」に当たるかどうかの問題となる。

現在、訴訟で争われている事件としては、茨城県において自衛隊の基地に使用する目的のために行なわれた土地売買契約をめぐる、その土地売買は無効であるとして、その返還を求めた「百里基地訴訟」がある。ここでは、その土地売買の目的が自衛隊基地建設のためであったが、自衛隊は違憲であるから、その契約は無効だとすべきかどうか争点となっているのである。水戸地裁の第一審は、自衛隊の問題はいわゆる「統治行為」に属するという理由で、この問題については、裁判所は判断できないとしている。

(注) 「統治行為」 國家機關の行為のうち高度の政治性を有する行為(統治行為)については司法権の範囲外にあり、それについての判断は裁判所がすべきではなく裁判所は国会や内閣などの政治部門の判断を尊重し、最後は「国民の世論」によって決定すべきである、とする理論。

資料2 國際連合憲章(抜すい)

一九四五年六月二十六日 サンフランシスコ會議に於て成立同月十月二十四日發効
一九五六年十二月十九日 日本國條約二十六号

われら連合國の人民は、

われらの一生のうちに二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の慘害から將來の世代を救ひ、
基本的人權と人間の尊嚴及び価値と男女及び大小各國の同權とに關する信念をあらためて確認し、
正義と條約その他の國際法の源泉から生ずる義務の尊重とを維持することができる條件を確立し、
一層大きな自由の中で社会的進歩と生活水準の向上とを促進すること
並びに、このために、

寛容を實行し、且つ、善良な隣人として互いに平和に生活し、

國際の平和及び安全を維持するためにわれらの力を合わせ、

共同の利益の場合を除く外は武力を用いないことを原則の受諾と方法の設定によつて確保し、
すべての人民の經濟的及び社会的發達を促進するために國際機構を用いることを決意して、
これらの目的を達成するために、われらの努力を結集することに決定した。

よつて、われらの各自の政府は、サン・フランシスコ市に會合し、全權委任狀を示してそれが良好妥当であると認められた代表者を通じて、
この國際連合憲章に同意したので、ここに國際連合という國際機構を設ける。

第一章 目的及び原則

第一条

國際連合の目的は、次のとおりである。

1 國際の平和及び安全を維持すること。そのために、平和に対する脅威の防止及び除去と侵略行為その他の平和の破壊の鎮壓とのため有効な
集團的措置をとること並びに平和を破壊するに至る眞のある國際的の紛争又は事態の調整又は解決を平和的手段によつて且つ正義及び國際法

の原則に従つて實現すること。

2 人民の同権及び自決の原則の尊重に基礎をおく諸國間の友好關係を發展させること並びに世界平和を強化するために他の適當な措置をとること。

3 經濟的、社会的、文化的又は人道的性質を有する國際問題を解決することについて、並びに人種、性、言語又は宗教による差別なくすべての者のために人權及び基本的自由を尊重するように助長奨励することについて、國際協力を達成すること。

4 これらの共通の目的の達成に當つて諸國の行動を調和するための中心となること。

第二章 第二條

この機構及びその加盟國は、第一條に掲げる目的を達成するに當つては、次の原則に従つて行動しなければならない。

1 この機構は、そのすべての加盟國の主權平等の原則に基礎を置いている。

2 すべての加盟國は、加盟國の地位から生ずる權利及び利益を加盟國のすべてに保障するために、この憲章に従つて負つてゐる義務を誠実に履行しなければならない。

3 すべての加盟國は、その國際紛争を平和的手段によつて國際の平和及び安全並びに正義を危くしないように解決しなければならない。

4 すべての加盟國は、その國際關係において、武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる國の領土保全又は政治的獨立に対するものも、また、國際連合の目的と兩立しない他のいかなる方法によるものも慎まなければならない。

5 すべての加盟國は、國際連合がこの憲章に従つてとるいかなる行動についても國際連合にあらゆる援助を与え、且つ、國際連合の防止行動又は強制行動の対象となつてゐるいかなる國に対しても援助の供与を慎まなければならない。

6 この機構は、國際連合加盟國でない國が、國際の平和及び安全の維持に必要な限り、これらの原則に従つて行動することを確保しなければならない。

7 この憲章のいかなる規定も、本質上いずれかの國の國內管轄權内にある事項に干渉する權限を國際連合に与えるものではなく、また、その事項をこの憲章に基く解決に付託することを加盟國に要求するものでもない。但し、この原則は、第七章に基く強制措置の適用を妨げるものではない。

第二章 加盟國の地位

第三條

國際連合の原加盟國とは、サン・フランシスコにおける國際機構に関する連合国会議に参加した國又はさきに一九四二年一月一日の連合國宣

言に署名した国で、この憲章に署名し、且つ、第一百十条に従つてこれを批准するものをいう。

第四 条

1 国際連合における加盟国の地位は、この憲章に掲げる義務を受諾し、且つ、この機構によってこの義務を履行する能力及び意思があると認められる他のすべての平和愛好国に開放されている。

2 前記の国が国際連合加盟国となることの承認は、安全保障理事会の勧告に基いて、総会の決定によつて行われる。

第五 条

安全保障理事会の防止行動又は強制行動の対象となつた国際連合加盟国に対しては、総会が、安全保障理事会の勧告に基いて、加盟国としての権利及び特権の行使を停止することができる。これらの権利及び特権の行使は、安全保障理事会が回復することができる。

第六 条

この憲章に掲げる原則に執よう、に違反した国際連合加盟国は、総会が、安全保障理事会の勧告に基いて、この機構から除名することができる。

第三章 機関

第七 条

1 国際連合の主要機関として、総会、安全保障理事会、経済社会理事会、信託統治理事会、国際司法裁判所及び事務局を設ける。

2 必要と認められる補助機関は、この憲章に従つて設けることができる。

第八 条

国際連合は、その主要機関及び補助機関に男女がいかなる地位にも平等の条件で参加する資格があることについて、いかなる制限も設けてはならない。

資料3 国際人權規約

経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約（A規約）

一九六六年十二月十六日第九回国連総会で採択
一九七九年九月二十一日 日本国条約第六号

この規約の締約国は、

国際連合憲章において宣明された原則によれば、人類社会のすべての構成員の固有の尊厳及び平等のかつ奪い得ない権利を認めることが世界における自由、正義及び平和の基礎をなすものであることを考慮し、

これらの権利が人間の固有の尊厳に由来することを認め、

世界人權宣言によれば、自由な人間は恐怖及び欠乏からの自由を享受するものであるとの理想は、すべての者がその市民的及び政治的権利とともに経済的、社会的及び文化的権利を享有することのできる条件が作り出される場合に初めて達成されることになることを認め、

人權及び自由の普遍的な尊重及び遵守を助長すべき義務を国際連合憲章に基づき諸国が負っていることを考慮し、

個人が、他人に對し及びその属する社会に對して義務を負うこと並びにこの規約において認められる権利の増進及び擁護のために努力する責任を有することを認識して、

次のとおり協定する。

第一部

第一条

1 すべての人民は、自決の権利を有する。この権利に基づき、すべての人民は、その政治的地位を自由に決定し並びにその経済的、社会的及び文化的發展を自由に追求する。

2 すべての人民は、互恵の原則に基づく国際的經濟協力から生ずる義務及び國際法上の義務に違反しない限り、自己のためにその天然の富及び資源を自由に処分することができる。人民は、いかなる場合にも、その生存のための手段を奪われることはない。

3 この規約の締約国（非自治地域及び信託統治地域の施政の責任を有する国を含む。）は、国際連合憲章の規定に従い、自決の権利が実現されることを促進し及び自決の権利を尊重する。

第二部

第二条

1 この規約の各締約国は、立法措置その他のすべての適当な方法によりこの規約において認められる権利の完全な実現を漸進的に達成するため、自国における利用可能な手段を最大限に用いることにより、個々に又は国際的な援助及び協力、特に、経済上及び技術上の援助及び協力を通じて、行動をとることを約束する。

2 この規約の締約国は、この規約に規定する権利が人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、出生又は他の地位によるいかなる差別もなしに行使されることを保障することを約束する。

3 開発途上にある国は、人権及び自国の経済の双方に十分な考慮を払い、この規約において認められる経済的権利をどの程度まで外国人に保障するかを決定することができる。

第三条

この規約の締約国は、この規約に定めるすべての経済的、社会的及び文化的権利の享有について男女に同等の権利を確保することを約束する。

第四条

この規約の締約国は、この規約に合致するものとして国により確保される権利の享受に関し、その権利の性質と両立しており、かつ、民主的社会における一般的福祉を増進することを目的としている場合に限り、法律で定める制限のみをその権利に課することができることを認める。

第五条

1 この規約のいかなる規定も、国、集団又は個人が、この規約において認められる権利若しくは自由を破壊し若しくはこの規約に定める制限の範囲を超えて制限することを目的とする活動に従事し又はそのようなことを目的とする行為を行う権利を有することを意味するものと解することはできない。

2 いずれかの国において法律、条約、規則又は慣習によって認められ又は存する基本的人権については、この規約がそれらの権利を認めていないこと又はその認める範囲がより狭いことを理由として、それらの権利を制限し又は侵すことは許されない。

第三部

第六 条

- 1 この規約の締約国は、労働の権利を認めるものとし、この権利を保障するため適當な措置をとる。この権利には、すべての者が自由に選択し又は承諾する労働によって生計を立てる機会を得る権利を含む。
- 2 この規約の締約国が1の権利の完全な実現を達成するためとる措置には、個人に対して基本的な政治的及び経済的自由を保障する条件の下で着実な経済的、社会的及び文化的發展を実現し並びに完全かつ生産的な雇用を達成するための技術及び職業の指導及び訓練に関する計画、政策及び方法を含む。

第七 条

この規約の締約国は、すべての者が公正かつ良好な労働条件を享受する権利を有することを認める。この労働条件は、特に次のものを確保する労働条件とする。

- (a) すべての労働者に最小限度次のものを与える報酬
 - (i) 公正な賃金及びいかなる差別もない同一価値の労働についての同一報酬。特に、女子については、同一の労働についての同一報酬とともに男子が享受する労働条件に劣らない労働条件が保障されること。
 - (ii) 労働者及びその家族のこの規約に適合する相応な生活
- (b) 安全かつ健康的な作業条件
- (c) 先任及び能力以外のいかなる事由も考慮されることなく、すべての者がその雇用関係においてより高い過当な地位に昇進する均等な機会
- (d) 休息、余暇、労働時間の合理的な制限及び定期的な有給休暇並びに公の休日についての報酬

第八 条

- 1 この規約の締約国は、次の権利を確保することを約束する。

- (a) すべての者がその経済的及び社会的利益を増進し及び保護するため、労働組合を結成し及び当該労働組合の規則にのみ従うことを条件として自ら選択する労働組合に加入する権利。この権利の行使については、法律で定める制限であつて国の安全若しくは公の秩序のため又は他の者の権利及び自由の保護のため民主的社會において必要なもの以外のいかなる制限も課することができない。
- (b) 労働組合が国内の連合又は総連合を設立する権利及びこれらの連合又は総連合が国際的な労働組合団体を結成し又はこれに加入する権利
- (c) 労働組合が、法律で定める制限であつて国の安全若しくは公の秩序のため又は他の者の権利及び自由の保護のため民主的社會において必要なもの以外のいかなる制限も受けることなく、自由に活動する権利

(d) 同盟罷業をする権利。ただし、この権利は、各国の法律に従って行使されることを条件とする。

2 この条の規定は、軍隊若しくは警察の構成員又は公務員による1の権利の行使について合法的な制限を課することを妨げるものではない。

3 この条のいかなる規定も、結社の自由及び団結権の保護に関する一九四八年の国際労働機関の条約の締約国が、同条約に規定する保障を阻害するような立法措置を講ずること又は同条約に規定する保障を阻害するような方法により法律を適用することを許すものではない。

第九 条

この規約の締約国は、社会保険その他の社会保障についてのすべての者の権利を認める。

第十 条

この規約の締約国は、次のことを認める。

1 できる限り広範な保護及び援助が、社会の自然かつ基礎的な単位である家族に対し、特に、家族の形成のために並びに扶養児童の養育及び教育について責任を有する間に、与えられるべきである。婚姻は、両当事者の自由な合意に基づいて成立するものでなければならない。

2 産前産後の合理的な期間においては、特別な保護が母親に与えられるべきである。働いている母親には、その期間において、有給休暇又は相当な社会保障給付を伴う休暇が与えられるべきである。

3 保護及び援助のための特別な措置が、出生その他の事情を理由とするいかなる差別もなく、すべての児童及び年少者のためにとられるべきである。児童及び年少者は、経済的及び社会的な搾取から保護されるべきである。児童及び年少者を、その精神若しくは健康に有害であり、その生命に危険があり又はその正常な発育を妨げるおそれのある労働に使用することは、法律で処罰すべきである。また、国は年齢による制限を定め、その年齢に達しない児童を賃金を支払って使用することを法律で禁止しかつ処罰すべきである。

第十一 条

1 この規約の締約国は、自己及びその家族のための相当な食糧、衣類及び住居を内容とする相当な生活水準についての並びに生活条件の不断の改善についてのすべての者の権利を認める。締約国は、この権利の実現を確保するために適当な措置をとり、このためには、自由な合意に基づく国際協力が極めて重要であることを認める。

2 この規約の締約国は、すべての者が飢餓から免れる基本的な権利を有することを認め、個々に及び国際協力を通じて、次の目的のため、具体的計画その他の必要な措置をとる。

(a) 技術的及び科学的知識を十分に利用することにより、栄養に関する原則についての知識を普及させることにより並びに天然資源の最も効果的な開発及び利用を達成するように農地制度を発展させ又は改革することにより、食糧の生産、保存及び分配の方法を改善すること。

(b) 食糧の輸入国及び輸出国の双方の問題に考慮を払い、需要との関連において世界の食糧の供給の衡平な分配を確保すること。

第十二条

- 1 この規約の締約国は、すべての者が到達可能な最高水準の身体及び精神の健康を享受する権利を有することを認める。
- 2 この規約の締約国が1の権利の完全な実現を達成するためにとる措置には、次のことに必要な措置を含む。
 - (a) 死産率及び幼児の死亡率を低下させるための並びに児童の健全な発育のための対策
 - (b) 環境衛生及び産業衛生のあらゆる状態の改善
 - (c) 伝染病、風土病、職業病その他の疾病の予防、治療及び抑圧
 - (d) 病気の場合にすべての者に医療及び看護を確保するような条件の創出

第十三条

- 1 この規約の締約国は、教育についてのすべての者の権利を認める。締約国は、教育が人格の完成及び人格の尊厳についての意識の十分な発達を指向し並びに人権及び基本的自由の尊重を強化すべきことに同意する。更に、締約国は、教育が、すべての者に対し、自由な社会に効果的に参加すること、諸国民の間及び人種的、種族的又は宗教的集団の間の理解、寛容及び友好を促進すること並びに平和の維持のための国際連合の活動を助長することを可能にすべきことに同意する。
- 2 この規約の締約国は、1の権利の完全な実現を達成するため、次のことを認める。
 - (a) 初等教育は、義務的なものとし、すべての者に対して無償のものとすること
 - (b) 種々の形態の中等教育（技術的及び職業的中等教育を含む）は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、一般的に利用可能であり、かつすべての者に対して機会が与えられるものとする
 - (c) 高等教育は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、能力に応じ、すべての者に対して均等に機会が与えられるものとする
 - (d) 基礎教育は、初等教育を受けなかった者又はその全課程を修了しなかった者のため、できる限り奨励され又は強化されること
 - (e) すべての段階にわたる学校制度の発展を積極的に追求し、適当な奨学金制度を設立し及び教育職員の物質的条件を不断に改善すること
- 3 この規約の締約国は、父母及び場合により法定保護者が、公の機関によって設置される学校以外の学校であつて国によって定められ又は承認される最低限度の教育上の基準に適合するものを児童のために選択する自由並びに自己の信念に従つて児童の宗教的及び道徳的教育を確保する自由を有することを尊重することを約束する。
- 4 この条のいかなる規定も、個人及び団体が教育機関を設置し及び管理する自由を妨げるものと解してはならない。ただし、常に、1に定める原則が遵守されること及び当該教育機関において行われる教育が国によって定められる最低限度の基準に適合することを条件とする。

第十四条

この規約の締約国となる時にその本土地域又はその管轄の下にある他の地域において無償の初等義務教育を確保するに至っていない各締約国は、すべての者に対する無償の義務教育の原則をその計画中に定める合理的な期間内に漸進的に実施するための詳細な行動計画を二年以内に作成しかつ採用することを約束する。

第十五条

- 1 この規約の締約国は、すべての者の次の権利を認める。
 - (a) 文化的な生活に参加する権利
 - (b) 科学の進歩及びその利用による利益を享受する権利
 - (c) 自己の科学的、文学的又は芸術的作品により生ずる精神的及び物質的利益が保護されることを享受する権利
 - 2 この規約の締約国が1の権利の完全な実現を達成するためにとる措置には、科学及び文化の保存、発展及び普及に必要な措置を含む。
 - 3 この規約の締約国は、科学研究及び創作活動に不可欠な自由を尊重することを約束する。
 - 4 この規約の締約国は、科学及び文化の分野における国際的な連絡及び協力を奨励し及び発展させることによって得られる利益を認める。
- (以下第四部・第五部は省略)

市民的及び政治的権利に関する国際規約 (B規約)

一九六六年十二月十六日第九回国連総会で採択
一九七九年九月二十三日 日本国条約第七号

この規約の締約国は、

国際連合憲章において宣明された原則によれば、人類社会のすべての構成員の固有の尊厳及び平等のかつ奪い得ない権利を認めることが世界における自由、正義及び平和の基礎をなすものであることを考慮し、

これらの権利が人間の固有の尊厳に由来することを認め、

世界人権宣言によれば、自由な人間は市民的及び政治的自由並びに恐怖及び欠乏からの自由を享受するものであるとの理想は、すべての者がその経済的、社会的及び文化的権利とともに市民的及び政治的権利を享有することのできる条件が作り出される場合に初めて達成されることに

なることを認め、

人権及び自由の普遍的な尊重及び遵守を助長すべき義務を国際連合憲章に基づき諸国が負っていることを考慮し、

個人が、他人に対し及びその属する社会に対して義務を負うこと並びにこの規約において認められる権利の増進及び擁護のために努力する責任を有することを認識して、

次のとおり協定する。

第一部

第一条

1 すべての人民は、自決の権利を有する。この権利に基づき、すべての人民は、その政治的地位を自由に決定し並びにその経済的、社会的及び文化的発展を自由に追求する。

2 すべての人民は、互恵の原則に基づく国際的経済協力から生ずる義務及び国際法上の義務に違反しない限り、自己のためにその天然の富及び資源を自由に処分することができる。人民は、いかなる場合にも、その生存のための手段を奪われることはない。

3 この規約の締約国（非自治地域及び信託統治地域の施政の責任を有する国を含む）は、国際連合憲章の規定に従い、自決の権利が実現されることを促進し及び自決の権利を尊重する。

第二部

第二条

1 この規約の各締約国は、その領域内にあり、かつ、その管轄の下にあるすべての個人に対し、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、出生又は他の地位等によるいかなる差別もなしにこの規約において認められる権利を尊重し及び確保することを約束する。

2 この規約の各締約国は、立法措置その他の措置がまだとられていない場合には、この規約において認められる権利を実現するために必要な立法措置その他の措置をとるため、自国の憲法上の手続及びこの規約の規定に従って必要な行動をとることを約束する。

3 この規約の各締約国は、次のことを約束する。

(a) この規約において認められる権利又は自由を侵害された者が、公的資格で行動する者によりその侵害が行われた場合にも、効果的な救済措置を受けることを確保すること。

(b) 救済措置を求める者の権利が権限のある司法上、行政上若しくは立法上の機関又は国の法制で定める他の権限のある機関によって決定されることを確保すること及び司法上の救済措置の可能性を發展させること。

(c) 救済措置が与えられる場合に権限のある機関によって執行されることを確保すること。

第三 条

この規約の締約国は、この規約に定めるすべての市民的及び政治的権利の享有について男女に同等の権利を確保することを約束する。

第四 条

- 1 国民の生存を脅かす公の緊急事態の場合においてその緊急事態の存在が公式に宣言されているときは、この規約の締約国は、事態の緊急性が真に必要なとする限度において、この規約に基づく義務に違反する措置をとることができる。ただし、その措置は、当該締約国が国際法に基づき負う他の義務に抵触してはならず、また、人種、皮膚の色、性、言語、宗教又は社会的出身のみを理由とする差別を含んではならない。
- 2 1の規定は、第六条、第七条、第八条1及び2、第十一条、第十五条、第十六条並びに第十八条の規定に違反することを許すものではない。
- 3 義務に違反する措置をとる権利を行使することの規約の締約国は、違反した規定及び違反するに至った理由を国際連合事務総長を通じてこの規約の他の締約国に直ちに通知する。更に、違反が終了する日に、同事務総長を通じてその旨通知する。

第五 条

- 1 この規約のいかなる規定も、国、集団又は個人が、この規約において認められる権利及び自由を破壊し若しくはこの規約に定める制限の範囲を超えて制限することを目的とする活動に従事し又はそのようなことを目的とする行為を行う権利を有することを意味するものと解することはできない。
- 2 この規約のいずれかの締約国において法律、条約、規則又は慣習によって認められ又は存する基本的人権については、この規約がそれらの権利を認めていないこと又はその認める範囲がより狭いことを理由として、それらの権利を制限し又は侵してはならない。

第三 部

第六 条

- 1 すべての人間は、生命に対する固有の権利を有する。この権利は、法律によって保護される。何人も、恣意的にその生命を奪われない。
- 2 死刑を廃止していない国においては、死刑は、犯罪が行われた時に効力を有しており、かつ、この規約の規定及び集団殺害犯罪の防止及び処罰に関する条約の規定に抵触しない法律により、最も重大な犯罪についてのみ科することができる。この刑罰は、権限のある裁判所が言い渡した確定判決によってのみ執行することができる。

3 生命の剝奪が集団殺害犯罪を構成する場合には、この条のいかなる規定も、この規約の締約国が集団殺害犯罪の防止及び処罰に関する条約の規定に基づいて負う義務を方法のいかんを問わず免れることを許すものではないと了解する。

4 死刑を言い渡されたいかなる者も、特赦又は減刑を求める権利を有する。死刑に対する大赦、特赦又は減刑はすべての場合に与えることができる。

5 死刑は、十八歳未満の者が行った犯罪について科してはならず、また、妊娠中の女子に対して執行してはならない。

6 この条のいかなる規定も、この規約の締約国により死刑の廃止を遅らせ又は妨げるために援用されてはならない。

第七 条

何人も、拷問又は残虐な、非人道的な若しくは品位を傷つける取扱い若しくは刑罰を受けない。特に、何人も、その自由な同意なしに医学的又は科学的実験を受けない。

第八 条

1 何人も、奴隷の状態に置かれぬ。あらゆる形態の奴隷制度及び奴隷取引は、禁止する。

2 何人も、隷属状態に置かれぬ。

3 (a) 何人も、強制労働に服することを要求されない。

(b) (a)の規定は、犯罪に対する刑罰として強制労働を伴う拘禁刑を科することができる国において、権限のある裁判所による刑罰の言渡しにより強制労働をさせることを禁止するものと解してはならない。

(c) この3の規定の適用上、「強制労働」には、次のものを含まない。

(i) 作業又は役務であって、(b)の規定において言及されておらず、かつ、裁判所の合法的な命令によって抑留されている者又はその抑留を条件付きで免除されている者に通常要求されるもの

(ii) 軍事的性質の役務及び、良心的兵役拒否が認められている国においては、良心的兵役拒否者が法律によって要求される国民的役務

(iii) 社会の存立又は福祉を脅かす緊急事態又は災害の場合に要求される役務

(iv) 市民としての通常の義務とされる作業又は役務

第九 条

1 すべての者は、身体の自由及び安全についての権利を有する。何人も、恣意的に逮捕され又は抑留されない。何人も、法律で定める理由及び手続によらない限り、その自由を奪われない。

2 逮捕される者は、逮捕の時にその理由を告げられるものとし、自己に対する被疑事実を速やかに告げられる。

3 刑事上の罪に問われて逮捕され又は拘留された者は、裁判官又は司法権を行使することが法律によって認められている他の官憲の面前に速やかに連れて行かれるものとし、妥当な期間内に裁判を受ける権利又は釈放される権利を有する。裁判に付される者を拘留することが原則であつてはならず、釈放に当たつては、裁判その他の司法上の手続のすべての段階における出頭及び必要な場合における判決の執行のための出頭が保証されることを条件とすることができる。

4 逮捕又は拘留によつて自由を奪われた者は、裁判所がその拘留が合法的であるかどうかを遅滞なく決定すること及びその拘留が合法的でない場合にはその釈放を命ずることができるように、裁判所において手続をとる権利を有する。

5 違法に逮捕され又は拘留された者は、賠償を受ける権利を有する。

第十 条

1 自由を奪われたすべての者は、人道的にかつ人間の固有の尊厳を尊重して、取り扱われる。

2 (a) 被告人は、例外的な事情がある場合を除くほか有罪の判決を受けた者とは分離されるものとし、有罪の判決を受けていない者としての地位に相應する別個の取扱いを受ける。

(b) 少年の被告人は、成人とは分離されるものとし、できる限り速やかに裁判に付される。

3 行刑の制度は、被拘禁者の矯正及び社会復帰を基本的な目的とする処遇を含む。少年の犯罪者は、成人とは分離されるものとし、その年齢及び法的地位に相應する取扱いを受ける。

第十一 条

何人も、契約上の義務を履行することができないことを理由として拘禁されない。

第十二 条

1 合法的にいずれかの国の領域内にいるすべての者は、当該領域内において、移動の自由及び居住の自由についての権利を有する。

2 すべての者は、いずれの国(自国を含む。)からも自由に離れることができる。

3 1及び2の権利は、いかなる制限も受けない。ただし、その制限が、法律で定められ、国の安全、公の秩序、公衆の健康若しくは道徳又は他の者の権利及び自由を保護するために必要であり、かつ、この規約において認められる他の権利と両立するものである場合は、この限りでない。

4 何人も、自国に戻る権利を恣意的に奪われない。

第十三 条

合法的にこの規約の締約国の領域内にいる外国人は、法律に基づいて行われた決定によつてのみ当該領域から追放することができる。国の安

全のためのやむを得ない理由がある場合を除くほか、当該外国人は、自己の追放に反対する理由を提示すること及び権限のある機関又はその機関が特に指名する者によって自己の事案が審査されることが認められるものとし、この為にその機関又はその者に対する代理人の出頭が認められる。

第十四条

1 すべての者は、裁判所の前に平等とする。すべての者は、その刑事上の罪の決定又は民事上の権利及び義務の争いについての決定のため、法律で設置された、権限のある、独立の、かつ、公平な裁判所による公正な公開審理を受ける権利を有する。報道機関及び公衆に対しては、民主的社會における道徳、公の秩序若しくは国の安全を理由として、当事者の私生活の利益のため必要な場合において又はその公開が司法の利益を害することとなる特別な状況において裁判所が真に必要があると認める限度で、裁判の全部又は一部を公開しないことができる。もっとも、刑事訴訟又は他の訴訟において言い渡される判決は、少年の利益のために必要がある場合又は当該手続が夫婦間の争い若しくは児童の後見に関するものである場合を除くほか、公開する。

2 刑事上の罪に問われているすべての者は、法律に基づいて有罪とされるまでは、無罪と推定される権利を有する。

3 すべての者は、その刑事上の罪の決定について、十分平等に、少なくとも次の保障を受ける権利を有する。

- (a) その理解する言語で速やかにかつ詳細にその罪の性質及び理由を告げられること。
- (b) 防御の準備のために十分な時間及び便宜を与えられ並びに自ら選任する弁護人と連絡すること。
- (c) 不当に遅延することなく裁判を受けること。
- (d) 自ら出席して裁判を受け及び、直接に又は自ら選任する弁護人を通じて、防御すること。弁護人がいない場合には、弁護人を持つ権利を告げられること。司法の利益のために必要な場合には、十分な支払手段を有しないときは自らその費用を負担することなく、弁護人を付されること。

(e) 自己に不利な証人を尋問し又はこれに対し尋問させること並びに自己に不利な証人と同じ条件で自己のための証人の出席及びこれに対する尋問を求めること。

(f) 裁判所において使用される言語を理解すること又は話すことができない場合には、無料で通訳の援助を受けること。

(g) 自己に不利な供述又は、有罪の自白を強要されないこと。

4 少年の場合には、手続は、その年齢及びその更生の促進が望ましいことを考慮したものとする。

5 有罪の判決を受けたすべての者は、法律に基づきその判決及び刑罰を上級の裁判所によって再審理される権利を有する。

6 確定判決によって有罪と決定された場合において、その後、新たな事実又は新しく発見された事実により誤審のあったことが決定的に立

証されたことを理由としてその有罪の判決が破棄され又は赦免が行われたときは、その有罪の判決の結果刑罰に服した者は、法律に基づいて補償を受ける。ただし、その知られなかった事実が適当な時に明らかにされなかったことの全部又は一部がその者の責めに帰するものであることが証明される場合は、この限りでない。

7 何人も、それぞれの国の法律及び刑事手続に従って既に確定的に有罪又は無罪の判決を受けた行為について再び裁判され又は処罰されることはない。

第十五条

1 何人も、実行の時に国内法又は国際法により犯罪を構成しなかった作為又は不作為を理由として有罪とされることはない。何人も、犯罪が行われた時に適用されていた刑罰よりも重い刑罰を科されない。犯罪が行われた後により軽い刑罰を科する規定が法律に設けられる場合には、罪を犯した者は、その利益を受ける。

2 この条のいかなる規定も、国際社会の認める法の一般原則により実行の時に犯罪とされていた作為又は不作為を理由として裁判しかつ処罰することを妨げるものでない。

第十六条

すべての者は、すべての場所において、法律の前に人として認められる権利を有する。

第十七条

1 何人も、その私生活、家族、住居若しくは通信に対して恣意的に若しくは不法に干渉され又は名誉及び信用を不法に攻撃されない。

2 すべての者は、1の干渉又は攻撃に対する法律の保護を受ける権利を有する。

第十八条

1 すべての者は、思想、良心及び宗教の自由についての権利を有する。この権利には、自ら選択する宗教又は信念を受け入れ又は有する自由並びに、単独で又は他の者と共同して及び公に又は私的に、礼拝、儀式、行事及び教導によつてその宗教又は信念を表明する自由を含む。

2 何人も、自ら選択する宗教又は信念を受け入れ又は有する自由を侵害するおそれのある強制を受けない。

3 宗教又は信念を表明する自由については、法律で定める制限であつて公共の安全、公の秩序、公衆の健康若しくは道徳又は他の者の基本的な権利及び自由を保護するために必要なもののみを課することができる。

4 この規約の締約国は父母及び場合により法定保護者が、自己の信念に従つて児童の宗教的及び道徳的教育を確保する自由を有することを尊重することを約束する。

第十九条

1 すべての者は、干渉されることなく意見を持つ權利を有する。

2 すべての者は、表現の自由についての權利を有する。この權利には、口頭、手書き若しくは印刷、芸術の形態又は自ら選択する他の方法により、国境とのかかわりなく、あらゆる種類の情報及び考えを求め、受け及び伝える自由を含む。

3 2の權利の行使には、特別の義務及び責任を伴う。したがって、この權利の行使については、一定の制限を課することができる。ただし、その制限は、法律によって定められ、かつ、次の目的のために必要とされるものに限る。

(a) 他の者の權利又は信用の尊重

(b) 国の安全、公の秩序又は公衆の健康若しくは道徳の保護

第二十条

1 戦争のためのいかなる宣伝も、法律で禁止する。

2 差別、敵意又は暴力の扇動となる国民的、人種的又は宗教的憎惡の唱道は、法律で禁止する。

第二十一条

平和的な集会の權利は、認められる。この權利の行使については、法律で定める制限であつて国の安全若しくは公共の安全、公の秩序、公衆の健康若しくは道徳の保護又は他の者の權利及び自由の保護のため民主的社會において必要なもの以外のいかなる制限も課することができない。

第二十二条

1 すべての者は、結社の自由についての權利を有する。この權利には、自己の利益の保護のために労働組合を結成し及びこれに加入する權利を含む。

2 1の權利の行使については、法律で定める制限であつて国の安全若しくは公共の安全、公の秩序、公衆の健康若しくは道徳の保護又は他の者の權利及び自由の保護のため民主的社會において必要なもの以外のいかなる制限も課することができない。この条の規定は、1の權利の行使につき、軍隊及び警察の構成員に対して合法的な制限を課することを妨げるものではない。

3 この条のいかなる規定も、結社の自由及び団結權の保護に関する千九百四十八年の國際労働機關の條約の締約国が、同條約に規定する保障を阻害するような立法措置を講ずること又は同條約に規定する保障を阻害するような方法により法律を適用することを許すものではない。

第二十三条

1 家族は、社會の自然かつ基礎的な單位であり、社會及び國による保護を受ける權利を有する。

2 婚姻をすることができる年齢の男女が婚姻をしかつ家族を形成する權利は、認められる。

3 婚姻は、両当事者の自由かつ完全な合意なしには成立しない。

4 この規約の締約国は、婚姻中及び婚姻の解消の際に、婚姻に係る配偶者の権利及び責任の平等を確保するため、適当な措置をとる。その解消の場合には、児童に対する必要な保護のため、措置がとられる。

第二十四条

1 すべての児童は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、国民的若しくは社会的出身、財産又は出生によるいかなる差別もなしに、未成年者としての地位に必要とされる保護の措置であつて家族、社会及び国による措置についての権利を有する。

2 すべての児童は、出生の後直ちに登録され、かつ、氏名を有する。

3 すべての児童は、国籍を取得する権利を有する。

第二十五条

すべての市民は、第二条に規定するいかなる差別もなく、かつ、不合理な制限なしに、次のことを行う権利及び機会を有する。

(a) 直接に、又は自由を選んだ代表者を通じて、政治に参与すること。

(b) 普通かつ平等の選挙権に基づき秘密投票により行われ、選挙人の意思の自由な表明を保障する真正な定期的選挙において、投票し及び選挙されること。

(c) 一般的な平等条件の下で自国の公務に携わること。

第二十六条

すべての者は、法律の前に平等であり、いかなる差別もなしに法律による平等の保護を受ける権利を有する。このため、法律は、あらゆる差別を禁止し及び人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、出生又は他の地位等のいかなる理由による差別に対しても平等のかつ効果的な保護をすべての者に保障する。

第二十七条

種族的、宗教的又は言語的少数民族が存在する国において、当該少数民族に属する者は、その集団の他の構成員とともに自己の文化を享有し、自己の宗教を信仰しかつ実践し又は自己の言語を使用する権利を否定されない。

第四部

第二十八条

1 人権委員会（以下「委員会」という。）を設置する。委員会は、十八人の委員で構成するものとし、この部に定める任務を行う。

2 委員会は、高潔な人格を有し、かつ、人権の分野において能力を認められたこの規約の締約国の国民で構成する。この場合において、法律

関係の経験を有する者の参加が有益であることに考慮を払う。

3 委員会の委員は、個人の資格で、選挙され及び職務を遂行する。

第二十九条

1 委員会の委員は、前条に定める資格を有し、かつ、この規約の締約国により選挙のために指名された者の名簿の中から秘密投票により選出される。

2 この規約の各締約国は、一人又は二人を指名することができる。指名される者は、指名する国の国民とする。

3 いずれの者も、再指名される資格を有する。

第三十条

1 委員会の委員の最初の選挙は、この規約の効力発生の日の後六箇月以内に行う。

2 第三十四条の規定に従って空席（第三十三条の規定により宣言された空席をいう。）を補充するための選挙の場合を除くほか、国際連合事務総長は、委員会の委員の選挙の日の遅くとも四箇月前までに、この規約の締約国に対し、委員会の委員に指名された者の氏名を三箇月以内に提出するよう書面で要請する。

3 国際連合事務総長は、2にいう指名された者のアルファベット順による名簿（これらの者を指名した締約国名を表示した名簿とする。）を作成し、名簿を各選挙の日の遅くとも一箇月前までにこの規約の締約国に送付する。

4 委員会の委員の選挙は、国際連合事務総長により国際連合本部に招集されるこの規約の締約国の会合において行う。この会合は、この規約の締約国の三分の二をもって定足数とする。この会合においては、出席しかつ投票する締約国の代表によって投じられた票の最多数で、かつ、過半数の票を得た指名された者をもって委員会に選出された委員とする。

第三十一条

1 委員会は、一の国の国民を二人以上含むことができない。

2 委員会の選挙に当たっては、委員の配分が地理的に衡平に行われること並びに異なる文明形態及び主要な法体系が代表されることを考慮に入れる。

第三十二条

1 委員会の委員は、四年の任期で選出される。委員は、再指名された場合には、再選される資格を有する。ただし、最初の選挙において選出された委員のうち九人の委員の任期は、二年で終了するものとし、これら九人の委員は、最初の選挙の後直ちに、第三十条4に規定する会合において議長によりくじ引で選ばれる。

2 任期満了の際の選挙は、この部の前諸条の規定に従って行う。

第三十三条（中略）

第三十九条

1 委員会は、役員を二年の任期で選出する。役員は、再選されることができる。

2 委員会は、手続規則を定める。この手続規則には、特に次のことを定める。

(a) 十二人の委員をもって定足数とすること。

(b) 委員会の決定は、出席する委員が投ずる票の過半数によって行うこと。

第四十条

1 この規約の締約国は、(a)当該締約国についてこの規約が効力を生ずる時から一年以内に、(b)その後は委員会が要請するときに、この規約において認められる権利の実現のためにとつた措置及びこれらの権利の享受についてもたらされた進歩に関する報告を提出することを約束する。

2 すべての報告は、国際連合事務総長に提出するものとし、同事務総長は、検討のため、これらの報告を委員会に送付する。報告には、この規約の実施に影響を及ぼす要因及び障害が存在する場合には、これらの要因及び障害を記載する。

3 国際連合事務総長は、委員会との協議の後、報告に含まれるいずれかの専門機関の権限の範囲内にある事項に関する部分の写しを当該専門機関に送付することができる。

4 委員会は、この規約の締約国の提出する報告を検討する。委員会は、委員会の報告及び適当と認める一般的な性格を有する意見を締約国に送付しなければならず、また、この規約の締約国から受領した報告の写しとともに当該一般的な性格を有する意見を経済社会理事會に送付することができる。

5 この規約の締約国は、4の規定により送付される一般的な性格を有する意見に関する見解を委員会に提示することができる。

第四十一条

1 この規約の締約国は、この規約に基づく義務が他の締約国によって履行されていない旨を主張するいずれかの締約国からの通報を委員会が受理しかつ検討する権限を有することを認めることを、この条の規定に基づいていつでも宣言することができる。この条の規定に基づく通報は、委員会の当該権限を自国について認める宣言を行った締約国による通報である場合に限り、受理しかつ検討することができる。委員会は、宣言を行っていない締約国についての通報を受理してはならない。この条の規定により受理される通報は、次の手続に従って取り扱う。

(a) この規約の締約国は、他の締約国がこの規約を実施していないと認める場合には、書面による通知により、その事態につき当該他の締約国の注意を喚起することができる。通知を受領する国は、通知の受領の後三箇月以内に、当該事態について説明する文書その他の文書を、

通知を送付した国に提供する。これらの文書は、当該事態について既にとられ、現在とっており又は将来とることができるとする国内的な手続及び救済措置に、可能かつ適当な範囲において、言及しなければならない。

(b) 最初の通知の受領の後六箇月以内に当該事案が関係締約国の双方の満足するように調整されない場合には、いずれの一方の締約国も、委員会及び他方の締約国に通告することにより当該事案を委員会に付託する権利を有する。

(c) 委員会は、付託された事案について利用し得るすべての国内的な救済措置がとられかつ尽くされたことを確認した後に関し、一般的に認められた国際法の原則に従って、付託された事案を取り扱う。ただし、救済措置の実施が不当に遅延する場合は、この限りでない。

(d) 委員会は、この条の規定により通報を検討する場合には、非公開の会合を開催する。

(e) この規定に従うことを条件として、委員会は、この規約において認められる人権及び基本的自由の尊重を基礎として事案を友好的に解決するため、関係締約国に対してあつ旋を行う。

(f) 委員会は、付託されたいずれの事案についても、(b)にいう関係締約国に対し、あらゆる関連情報を提供するよう要請することができる。

(g) (b)にいう関係締約国は、委員会において事案が検討されている間において代表を出席させる権利を有するものとし、また、口頭又は書面により意見を提出する権利を有する。

(h) 委員会は、(b)の通告を受領した日の後十二箇月以内に、報告を提出する。報告は、各事案ごとに、関係締約国に送付する。

(i) (e)の規定により解決に到達した場合には、委員会は、事実及び到達した解決について簡潔に記述したものを報告する。

(ii) (e)の規定により解決に到達しない場合には、委員会は、事実について簡潔に記述したものを報告するものとし、当該報告に關係締約国の口頭による意見の記録及び書面による意見を添付する。

2 この条の規定は、この規約の十の締約国が1の規定に基づく宣言を行った時に効力を生ずる。宣言は、締約国が国際連合事務総長に寄託するものとし、事務総長は、その写しを他の締約国に送付する。宣言は、事務総長に対する通告によりいつでも撤回することができる。撤回は、この条の規定に従って既に送付された通報におけるいかなる事案の検討をも妨げるものではない。宣言を撤回した締約国による新たな通報は、事務総長がその宣言の撤回の通告を受領した後は、当該締約国が新たな宣言を行わない限り、受理しない。

第四十二条

1 (a) 前条の規定により委員会に付託された事案が関係締約国の満足するように解決されない場合には、委員会は、関係締約国の事前の同意を得て、特別調停委員会（以下「調停委員会」という。）を設置することができる。調停委員会は、この規約の尊重を基礎として当該事案を友好的に解決するため、関係締約国に対してあつ旋を行う。

(b) 調停委員会は、関係締約国が容認する五人の者で構成する。調停委員会の構成について三箇月以内に關係締約国が合意に達しない場合に

は、合意が得られない調停委員会の委員については、委員会の秘密投票により、三分の二以上の多数による議決で、委員会の委員の中から選出する。

2 調停委員会の委員は、個人の資格で、職務を遂行する。委員は、関係締約国、この規約の締約国でない国又は前条の規定に基づく宣言を行っていない締約国の国民であつてはならない。

3 調停委員会は、委員長を選出し及び手続規則を採択する。

4 調停委員会の会合は、通常、国際連合本部又はジュネーブにある国際連合事務所において開催する。もつとも、この会合は、調停委員会が国際連合事務総長及び関係締約国との協議の上決定する他の適当な場所において開催することができる。

5 第三十六条の規定により提供される事務局は、また、この条の規定に基づいて設置される調停委員会のために役務を提供する。

6 委員会が受領しかつ取りまとめる情報は、調停委員会の利用に供しなければならず、また、調停委員会は、関係締約国に対し、他のあらゆる関連情報を提供するよう要請することができる。

7 調停委員会は、事案を十分に検討した後に、かつ、検討のため事案を取り上げた後いかなる場合にも十二箇月以内に、関係締約国に通知するため、委員会の委員長に報告を提出する。

(a) 十二箇月以内に事案の検討を終了することができない場合には、調停委員会は、事案の検討状況について簡潔に記述したものを報告する。

(b) この規約において認められる人権の尊重を基礎として事案の友好的な解決に到達した場合には、調停委員会は、事実及び到達した解決について簡潔に記述したものを報告する。

(c) (b)に規定する解決に到達しない場合には、調停委員会の報告には、関係締約国間の係争問題に係るすべての事実関係についての調査結果及び当該事案の友好的な解決の可能性に関する意見を記載するとともに関係締約国の口頭による意見の記録及び書面による意見を添付する。

(d) (c)の規定により調停委員会の報告が提出される場合には、関係締約国は、その報告の受領の後三箇月以内に、委員会の委員長に対し、調停委員会の報告の内容を受諾するかどうかを通告する。

8 この条の規定は、前条の規定に基づく委員会の任務に影響を及ぼすものではない。

9 関係締約国は、国際連合事務総長が作成する見積りに従つて、調停委員会の委員に係るすべての経費を平等に分担する。

10 国際連合事務総長は、必要なときは、9の規定による関係締約国の経費の分担に先立って調停委員会の委員の経費を支払う権限を有する。

第四十三条

委員会の委員及び前条の規定に基づいて設置される調停委員会の委員は、国際連合の特権及び免除に関する条約の関連規定に規定する国際連合のための職務を行う専門家の便益、特権及び免除を享受する。

第四十四条

この規約の実施に関する規定は、国際連合及び専門機関の基本文書並びに国際連合及び専門機関において作成された諸条約により又はこれらの基本文書及び諸条約に基づき人權の分野に関し定められた手続を妨げることなく適用するものとし、この規約の締約国の間で効力を有する一般的な又は特別の国際取極による紛争の解決のため、この規約の締約国が他の手続を利用することを妨げるものではない。

第四十五条

委員会は、その活動に関する年次報告を経済社会理事会を通じて国際連合総会に提出する。

第五部

第四十六条

この規約のいかなる規定も、この規約に規定されている事項につき、国際連合の諸機関及び専門機関の任務をそれぞれ定めている国際連合憲章及び専門機関の基本文書の規定の適用を妨げるものと解してはならない。

第四十七条

この規約のいかなる規定も、すべての人民がその天然の富及び資源を十分かつ自由に享受し及び利用する固有の権利を害するものと解してはならない。

第六部（省略）

資料4 ポツダム宣言

一九四五年七月二十六日 ポツダムで署名

一 吾等合衆国大統領、中華民国政府主席及グレート・ブリテン国総理大臣は、吾等の数億の国民を代表し協議の上、日本国に対し、今次の戦争を終結するの機会を与ふることに意見一致せり。

二 合衆国、英帝国及中華民国の巨大なる陸、海、空軍は、西方より自国の陸軍及空軍に依る数倍の増強を受け、日本国に対し最後の打撃を加ふるの態勢を整へたり。右軍事力は、日本国が抵抗を終止するに至る迄、同国に対し戦争を遂行するの一切の聯合國の決意に依り支持せられ

且鼓舞せられ居るものなり。

三 蹴起せる世界の自由なる人民の力に対するドイツ国の無益且無意義なる抵抗の結果は、日本国民に対する先例を極めて明白に示すものなり。現在日本国に対し集結しつつある力は、抵抗するナチスに対し適用せられたる場合に於て全ドイツ国民の土地、産業及生活様式を必然的に荒廃に帰せしめたる力に比し測り知れざる程更に強大なるものなり。吾等の決意に支持せらるる吾等の軍事力の最高度の使用は、日本国軍隊の不可避且完全なる壊滅を意味すべく、又同様必然的に日本本土の完全なる破壊を意味すべし。

四 無分別なる打算に依り日本帝国を滅亡の淵に陥れたる我儘なる軍国主義的助言者に依り日本国が引続き統御せらるべきか又は理性の経路を日本国が履むべきかを日本国が決定すべき時期は、到来せり。

五 吾等の条件は、左の如し。

吾等は、右条件より離脱することなかるべし。右に代る条件存在せず。吾等は、遅延を認むるを得ず。

六 吾等は、無責任なる軍国主義が世界より駆逐せらるるに至る迄は、平和、安全及正義の新秩序が生じ得ざることを主張するものなるを以て、日本国民を欺瞞し之をして世界征服の挙に出づるの過誤を犯さしめたる者の権力及勢力は、永久に除去せられざるべからず。

七 右の如き新秩序が建設せられ且日本国の戦争遂行能力が破砕せられたることの確証あるに至る迄は、聯合國の指定すべき日本国領域内の諸地点は、吾等の玆に指示する基本的目的の達成を確保する為占領せらるべし。

八 カイロ宣言の条項は、履行せらるべく、又日本国の主権は、本州、北海道、九州及四国並に吾等の決定する諸小島に局限せらるべし。

九 日本国軍隊は、完全に武装を解除せられたる後各自の家庭に復歸し、平和的且生産的の生活を営むの機会を得しめらるべし。

十 吾等は、日本人を民族として奴隸化せんとし又は国民として滅亡せしめんとするの意図を有するものに非ざるも、吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては嚴重なる処罰を加へらるべし。日本国政府は、日本国民の間に於ける民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし。言論、宗教及思想の自由並に基本的人權の尊重は、確立せらるべし。

十一 日本国は、其の經濟を支持し、且公正なる実物賠償の取立を可能ならしむるが如き産業を維持することを許さるべし。但し、日本国をして戦争の為再軍備を為すことを得しむるが如き産業は、此の限に在らず。右目的の為、原料の入手（其の支配とは之を區別す）を許さるべし。日本国は、將來世界貿易關係への参加を許さるべし。

十二 前記諸目的が達成せられ且日本国民の自由に表明せる意思に従ひ平和的傾向を有し且責任ある政府が樹立せらるるに於ては、聯合國の占領軍は、直に日本国より撤収せらるべし。

十三 吾等は、日本国政府が直に全日本国軍隊の無条件降伏を宣言し、且右行動に於ける同政府の誠意に付適当且充分なる保障を提供せんことを同政府に対し要求す。右以外の日本国の選択は、迅速且完全なる壊滅あるのみとす。

資料5 日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約

昭和三十五年六月二十三日
条約 六 号

日本国及びアメリカ合衆国は、

両国の間に伝統的に存在する平和及び友好の関係を強化し、並びに民主主義の諸原則、個人の自由及び法の支配を擁護することを希望し、また、両国の間の一層緊密な経済的協力を促進し、並びにそれぞれの国における経済的安定及び福祉の条件を助長することを希望し、

国際連合憲章の目的及び原則に対する信念並びにすべての国民及びすべての政府とともに平和のうちに生きようとする願望を再確認し、

両国が極東における国際の平和及び安全の維持に共通の関心を有することを考慮し、

相互協力及び安全保障条約を締結することを決意し、

よつて、次のとおり協定する。

第一条

締約国は、国際連合憲章に定めるところに従い、それぞれが関係することのある国際紛争を平和的手段によつて国際の平和及び安全並びに正義を危うくしないように解決し、並びにそれぞれの国際関係において、武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる国の領土保全又は政治的独立に対するものも、また、国際連合の目的と両立しない他のいかなる方法によるものも慎むことを約束する。

締約国は、他の平和愛好国と協同して、国際の平和及び安全を維持する国際連合の任務が一層効果的に遂行されるように国際連合を強化することに努力する。

第二条

締約国は、その自由な諸制度を強化することにより、これらの制度の基礎をなす原則の理解を促進することにより、並びに安定及び福祉の条件を助長することによつて、平和的かつ友好的な国際関係の一層の発展に貢献する。締約国は、その国際経済政策におけるくい違いを除くことに努め、また、両国の間の経済的協力を促進する。

第三条

締約国は、個別的に及び相互に協力して、継続的かつ効果的な自助及び相互援助により、武力攻撃に抵抗するそれぞれの能力を憲法上の規定に従うことを条件として、維持し発展させる。

第四 条

締約国は、この条約の実施に関して随時協議し、また、日本国の安全又は極東における国際の平和及び安全に対する脅威が生じたときはいつでも、いずれか一方の締約国の要請により協議する。

第五 条

各締約国は、日本国の施政の下にある領域における、いずれか一方に対する武力攻撃が、自国の平和及び安全を危うくするものであることを認め、自国の憲法上の規定及び手続に従つて共通の危険に対処するように行動することを宣言する。

前記の武力攻撃及びその結果として執つたすべての措置は、国際連合憲章第五十一条の規定に従つて直ちに国際連合安全保障理事会に報告しなければならぬ。その措置は、安全保障理事会が国際の平和及び安全を回復し維持するために必要な措置を執つたときは、終止しなければならない。

第六 条

日本国の安全に寄与し、並びに極東における国際の平和及び安全の維持に寄与するため、アメリカ合衆国は、その陸軍、空軍及び海軍が日本国において施設及び区域を使用することを許される。

前記の施設及び区域の使用並びに日本国における合衆国軍隊の地位は、一九五二年二月二十八日に東京で署名された日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約第三条に基く行政協定（改正を含む）に代わる別個の協定及び合意される他の取きめにより規律される。

第七 条

この条約は、国際連合憲章に基づく締約国の権利及び義務又は国際の平和及び安全を維持する国際連合の責任に対しては、どのような影響も及ぼすものではなく、また、及ぼすものと解釈してはならない。

第八 条

この条約は、日本国及びアメリカ合衆国により各自の憲法上の手続に従つて批准されなければならない。この条約は、両国が東京で批准書を交換した日に効力を生ずる。

第九 条

一九五一年九月八日にサン・フランシスコ市で署名された日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約は、この条約の効力発生の際に効力を失う。

第十 条

この条約は、日本区域における国際の平和及び安全の維持のため十分な定めをする国際連合の措置が効力を生じたと日本国政府及びアメリカ合衆国政府が認める時まで効力を有する。

もつとも、この条約が十年間効力を存続した後は、いずれの締約国も、他方の締約国に対しこの条約を終了させる意思を通告することができ、その場合には、この条約は、そのような通告が行なわれた後一年で終了する。

以上の証拠として、下名の全権委員は、この条約に署名した。

一九六〇年一月十九日にワシントンで、ひとしく正文である日本語及び英語により本書二通を作成した。

〔両国全権委員氏名省略〕

資料6 国連婦人の十年中間年日本大会決議・諸要求

一九八〇年十一月二十二日
国連婦人の十年中間年日本大会

私どもは、政治、経済、社会、家庭、文化のあらゆる分野に男女が平等に参加し、平和で民主的な社会の実現をめざす役割と責任を果たしたいと願ってきました。しかし、婦人の願いは根深い性差別に基づく慣習や制度、法律により、しめだされてきました。

平和と人権尊重を目的とする国連は、男女差別を世界的な問題としてとらえ、この解決のため、世界行動計画を策定、平等、発展、平和をめざす国連婦人の十年を設定しました。

今年が中間期にあたり、七月のコペンハーゲンにおける世界会議で、前半五年間の男女平等達成の成果と見直しが討議され、後半期五年間のプログラムが決議されたのであります。

私どもは、これに呼応して四月会議を開き、続く本日の日本大会開催により国際婦人年以來引きつぐ婦人問題の提起と解決のための具体策を協議してきました。

この五年間、男女平等の風潮はいくぶん広がりをみせました。しかし、性による差別と固定化した男女の役割分担は根強く、それが婦人問題解決の厚い壁となっています。これを切りくずすには非常な決意と努力が必要です。

昨年、国連総会で「婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」が採択され、国連婦人の十年、一九八〇年世界会議の署名式に、日本政府も参加、署名したことは婦人たちに大きな勇気と励みを与えました。

私どもは広範な婦人の連帯で決定した男女平等、婦人の地位向上をめざす一九七五年の国際婦人年日本大会の決議及び一九八〇年四月会議の決議を今後につぎ、さらに積極的に活動することを確認し、この日本大会において後半期の重点目標として次の要求、要請をします。

一、国連婦人の十年後半期におけるとりくみの重点として

- 1 「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の批准と国内法の整備及びその実施措置を速やかに実現すること。
- 2 政治、経済、社会、文化などのあらゆる分野に、婦人が全面的に平等に参加できるよう、立法その他の措置を優先的に計画し、実施すること、とりわけ政策立案、方針決定とその推進への参加を重視すること。
- 3 母性を社会的機能として認め、社会全体の責任で保障すること。
- 4 家庭の福祉と育児に関する責任は、社会、及び男女が平等に責任を分担するものであることを徹底させ、かつ制度的にも保障すること。
また、特に恵まれない環境にある婦人の対策を重視し、施策をつよめること。
- 5 婦人に対する差別は、人間の尊厳に対する侵害であるとの考え方を確立するため、人権尊重の教育に力を入れること。また、平和への信念を育成し、平和維持のための活動に婦人の参加を促進すること。

二、重点にもとづく具体的施策、活動として

(一) 婦人の全面参加をすすめるために

- ① 政府はあらゆる分野の政策決定、企画推進の場に婦人を参加させるための具体的目標を年次毎に作成し、その結果を公表すること。
- ② 婦人に関する行政を担当する専門機関を強化すること。
 - (1) 総理府婦人問題企画推進本部に婦人を任用し、かつその施策の策定と推進にあたっては、民間婦人組織の意見を聞き協力をうること。
 - (2) 労働省婦人少年室が地域の婦人の立場に立った活動が十分果せるよう、人的、物的条件を整備すること。
 - (3) 各地方自治体は、婦人問題を専門に担当する機関を設置し、その長は婦人として。
- ③ 政府、地方自治体の審議会など諮問的機関には、それぞれの専門分野に適した婦人を半数いれること。とくに婦人に直接関係のある分野の委員の選任には、民間婦人組織の意見を聞き、婦人の意思が十分反映できるようにすること。
- ④ 国連及びその専門機関の国際公務員への婦人の登用と、各種の国際協力など国際的諸活動への婦人の参加を促進すること。
- ⑤ 参加に不可欠な国民の知る権利を確保するため、公的機関は情報を公開すること。
- ⑥ 政府、自治体は、婦人の全面参加を保障するための社会的施設と社会的サービスを充実すること。

⑦ 政党、企業、民間組織、労働組合は、その方針決定機関、執行機関に婦人の参加を促進すること。

(二) 教育の機会均等を確保するために

① 高校を含めて公教育を国が保障し、男女共学の完全実施をはかること。教科内容を男女同一にし、特に家庭科は女子のみ必修を改め、男女共修にするとともに、女子の科学技術教育への参加を積極的に奨励すること。

② 労働に関する教育を重視し、職業指導、職業教育、訓練における機会均等を確保すること。

③ 市民として必要な政治、経済等の知識のための教育を婦人に奨励すること。

④ 家庭及び子どもの養育を男女がともに分担し合うための教育を、家庭、学校、社会において行うこと。

⑤ 学校教育、社会教育にたすさわり、特にその指導的部署の担当者に対し、婦人問題についての研修を行うこと。

(三) 婦人の労働の権利を確保するために

① 労働基準法を次の点で改正すること。

(1) 第三条に性による差別待遇の禁止を明記すること。同時に第四条の男女同一賃金を完全実施すること。

(2) 妊娠、出産による解雇を禁止し、出産休暇中の所得を健康保険その他の方法で十分に保障すること。

(3) 男女労働者の労働時間を短縮し、週休二日制の確立、有給休暇をふやすこと。

② 前記の施策とあわせて雇用の機会と均等待遇を実現する平等法を制定すること。

③ パートタイマーに対する労働基準法の完全適用により差別待遇の解消と身分保障を確立し、組織化をすすめること。

④ 農林漁業、商業などの家業に従事する婦人の母性と健康を保護する制度施策を確立すること。

⑤ 家内労働者の労働条件を引き上げること。

⑥ ILO諸条約をすみやかに批准すること。(一〇二号、一〇三号、一一一号、八九号、一四九号)

⑦ 保育所の増設と保育内容の充実、学童保育の制度化を行うこと。

四 国籍法の改正と民法の整備について

① 国籍法の改正を行うこと。

(1) 現在の父系優先血統主義を父母平等血統主義に改めること。

(2) 外国人配偶者の帰化条件における男女差を解消するよう改めること。

② 民法の整備について

(1) 結婚に際し、夫婦が同姓、別姓を自由に選択できるようにすること。

(2) 夫婦の財産関係、離婚の際の財産分与等について実質的平等確保のための改善をはかること。

(四) 社会保障、社会福祉の整備充実のために

① 医療の荒廃を厳しく追求し、母性を医療の不当な利潤の対象としないために、政府は医療制度改善の具体的対策を急ぐこと。

② 分娩を健康保険法の疾病と同じ扱いにすること。国民健康保険も分娩を保険の対象とすること。

③ 婦人の固有の年金の加入権と受給権を確立すること。

④ 老人医療費公費負担の年齢引き下げ、在宅老人福祉の充実、特別養護老人ホームの増設など、老人福祉と老人保健対策の拡充をはかること。

(六) マスメディアに関して

① マスメディアはその社会的影響力をつうじて、婦人に対する差別、偏見をとりのぞき、男女平等を推進すること。

② 婦人はマスメディアへの意見の反映、よい番組や、出版などの奨励、不当なものへの抗議などをつよめること。

以上、諸要求の後半期における実現をめざし、婦人団体及び労組婦人、そしてひとりひとりの婦人はあらゆる分野へ全面的に参加し積極的な活動をつよめ、力をあわせて推進する。

右、決議します。

平和についての特別決議

国連婦人の十年・一九八〇年世界会議で採択された後半期行動プログラムは、その序文で、平和がなければ平等も発展もあり得ないことを指摘し、国連婦人の十年の目標である「平等・発展・平和」が不可分なものであることを明らかにしています。

この世界会議の冒頭、北欧の女性たちが「平和へのアピール」を読み上げ、その署名簿を国連事務総長に手渡しましたが、これは、平和が脅かされては平等も発展もあり得ないことを身を以て知る女性が、反戦・平和の担い手としての自負をもって、世界の女性たちに協力と連帯を呼びかけたものであります。

現在、世界各地において戦火が交えられ、いま、この時においても多くの生命と財産が失なわれつつあります。武力をもって国家目的を達成しようとする危険な動きは、国家間の相互不信を強め、それがさらに世界の危機感をあおり、核兵器を含む軍備増強へと悪循環をくり返しています。わが国における憲法改正の動きも、これに連なるものといわなければなりません。

世界で唯一の核被爆国である私たち日本国民が、悲慘な敗戦の中から立ち上がり、三十五年間、平和の中に生き続けることができたのは、わが日本国憲法が戦争放棄を宣言、軍備及び交戦権を否認し、これを守り続けてきたからだといえます。

このような世界に誇るべき平和憲法をもつ私たちは、世界の女性たちと協力・連帯して、平和を脅かす原因を取り除き、世界の恒久平和実現のため努力することを誓います。

一、平和憲法を擁護し、その改悪を阻止する。

二、世界の全面的な軍縮をすすめる。

三、一切の核兵器を廃絶する。

右決議します。

資料7 国連婦人の十年後半期に向けて

昭和五十六年二月十七日 婦人問題企画推進会議

I 基本的考え方

国際婦人年を契機に、政府・地方公共団体、また、全国各地の民間諸団体および国民一般の間でも、婦人問題への関心は高まり、基本的人権に基づく男女平等を実現するための努力が、この五年間において着実に強まってきた。

女性に、開発の成果を受益する権利だけでなく、政治的・経済的・社会的・文化のおよび市民的なあらゆる分野の開発・発展・進歩に、能動的な行為者として参加する権利と責任および機会を、男性と同等に持ち、それらに積極的に寄与することにより、社会の発展と世界の平和の維持・達成に貢献すべきものである。

しかしながら、国連婦人の十年前半期において、女性の置かれた状況は、決して抜本的な改善を見たとは言えず、依然として、多くの分野に様々の障害が根強く残存し、女性が男性と同等の条件で、社会のあらゆる分野に参加することを阻害している。このことは、ひとり女性にとつてのみならず、男性をも含む社会全体の不幸である。国連婦人の十年後半期を迎えて、国際婦人年の当初より掲げられた目標の達成に向けて、あらゆる努力が注がねばならない。

国連婦人の十年の中間年であった昨年、国際的に「後半期行動プログラム」が採択され、我が国も「婦人に対するあらゆる形態の撤廃に関する条約」に署名をした。それを受けて、本年に始まる後半期において、男女平等とあらゆる分野への女性の参加を実現するために、新たな視点・方策が必要となっている。すなわち、社会的慣習をも含む女性に対するあらゆる偏見・差別を防止し、禁止し、解消するための具体的戦略を明らかにし、その措置をとることが緊要となっている。

第一に、女性の参加を阻害している要因の多くは、人々の日常生活に深く根ざしている性による役割分担意識と、これに基づく社会的慣習に起因している。したがって、これらを、社会の底辺から変革するための強力な啓発活動を、あらゆる分野あらゆる機関において展開すべきである。また、民間における実践的な活動が、社会的慣習を打破し、あらゆる分野への女性の参加を促進するための最も着実な方法であるので、これらの諸活動を、一層推進すべきである。

第二に、母性は、社会的機能として重要な役割を持つものであり、差別の理由となってはならないことが確認されるとともに、十分尊重されるべきである。近年に見られる母性軽視の傾向は、女性の人権の尊厳を傷つけるばかりでなく、人類の健全な発展をも阻害するものである。このゆえに社会全体が母性の尊重を旨としなければならないが、女性みずからも母性の重要性について深く認識しなければならない。また、配偶関係や婚姻関係を差別の理由としてはならないこと、および家庭と子の養育に対する責任が男女双方にあることを認識し、この原則に基づいて、男女が共にその責任を果たすようにならなければならない。

第三に、地域による歴史的・社会的状況の違いや、急激な経済状況の変化による女性の生活態様の多様化、ならびに女性の人権を侵害するような社会的風潮の残存などが、婦人の地位のあり方に様々な影響を与えている。また、急速に高齢化の進む社会において、総じて長い老後を生きる女性にとって、温かい人間関係と信頼に基づいた社会の実現は切実な問題である。このような意味において、特に、高齢の女性および若い女性、並びに弱い立場にある女性への配慮に深く心をを用いるべきである。

最後に、なによりも、女性が男性と同等の条件であらゆる分野へ参加することが、社会の発展・世界の平和の達成に必要であり、同時にまた、女性が国際協力・世界の平和に寄与することが、我が国も含めて、世界のあらゆる国のあらゆるレベルの男女平等の促進に不可欠である。このことを、国民のすべてが深く認識するようにしなければならない。

以上の観点から本会議は、後半期において、下記の十課題を重点的に推進することが必要であると考える。

政策・方針決定への参加、教育・訓練、雇用・就労、母性の尊重、家庭と育児、女性の健康づくり、老後における生活の安定、

農村の女性、国際協力、婦人差別撤廃条約批准のための条件整備

特に、婦人差別撤廃条約批准のための条件を整備することが、国内行動計画を推進することになり、また、その批准によって、より一層男女

平等の実現が促進されることにもなるので、後半期における最重点課題として、同条約の早期批准に向けて条件整備を強力に推進すべきである。

なお、これらの課題の推進に当たっては、政府の施策とあいまって、女性のひとりひとりが、その能力と適性に応じて、主体的にみずからの生涯を選択できるよう、柔軟で多様な方策の推進に努めなければならない。

Ⅱ 政策・方針決定への参加

国民生活や地域社会に重要な影響を持つ政策・方針決定の過程に女性の積極的な参加が必要であるという当推進会議の指摘に対し、政府は、前半期において特別活動を設定し、国の審議会委員の女性の割合を一〇%にするという計画を打ち出した。しかしながら、国の審議会における女性委員の割合は、現在、なお、昭和五十二年二・四%が昭和五十五年四・一%になったにとどまり、いまだに当初計画にはるかに遠いものである。

また、都道府県・指定都市の審議会委員の女性の割合も微増と言うほかはない（昭和五十二年六・四%、昭和五十五年七・三%）。この間、国家公務員採用試験（一般職）の中で、女子に受験を制限している職種数も減少した（昭和五十二年十二種、昭和五十六年一種）。

一方、民間企業における方針決定の過程への女性の参加の状況もわずかに〇・三%（昭和五十四年総理府調査）という実態である。また民間諸機関・団体の方針決定の過程への女性の参加率も、極めて少ない現状である。

以上の状況の中で、国や社会の発展と平和における女性の役割、さらに最近の国際社会における我が国の役割をも考慮する場合、政策・方針決定への女性の参加の重要性は自明であり、女性の参加が飛躍的に高められるよう積極的に推進する努力が重ねられなければならない。

〔提 言〕

一 国の政策決定の過程への女性の参加を促進するため、国の審議会、各種委員会、各種懇談会等の諮問機関へ女性委員の参加を強力に促進し、特に、女性委員のいない諮問機関の解消を図る必要がある。また、女子の国家公務員の積極的な採用・登用を図るべきである。

二 地域の社会生活に深くかかわっている女性が、地方公共団体の審議会・各種委員会等諮問機関へ参加することを促進するとともに、企画・立案に従事する女子公務員の積極的な採用・登用と職域の拡大、および積極的な能力開発を図る必要がある。

三 国や地方公共団体のみならず、広く民間の諸機関や団体において、企画・管理または指導の地位に、女性が積極的に参加することが重要である。特に、国民の生活に影響を及ぼすような非政府機関・団体、たとえば労働組合、農業・漁業協同組合、商工会（商工会議所）等における方針決定の過程へ女性の参加を促進することが急務である。また、教育・研究機関、および民間企業等の方針決定の過程にも、女性が大幅に参加できるようになることを期待する。

四 国際会議への出席または国際機関の職員となることなどを通して、国際機関における政策・方針決定の過程への女性の参加を促進すべきである。

五 国および地方の議会活動の場への女性の参加について、女性も含めて広く国民が関心を持つべきである。

六 政策・方針決定の過程に参加するために、女性みずからも意欲を高め能力の涵養に努めるべきである。また、それを支える女性層の力強い支援と、男性の理解と協力も欠けてはならない。

Ⅲ 教育・訓練

女性がその個性と能力を十分に發揮して社会に貢献し、充実した人生を送ることができるよう、生涯を通じた教育・訓練の機会が、前半期において、ある程度整備・充実されてきた。特に、国立婦人教育会館の設置（昭和五十二年）や地方の婦人教育施設の整備は、多様化する女性の学習要求に応えうる生涯教育の場として効果的であった。

学校教育における教育課程の編成に関しては、中学校・高等学校の家庭科における男女による取扱いの差異が、学習指導要領の改訂（中学校、昭和五十二年、高等学校昭和五十三年告示）により若干改められた。しかし、この改定は不十分であり、今後一層、男女平等の観点からの改善が必要である。

専修学校の創設（昭和五十一年）は、職業に就く際に有効な技術・技能や資格等を取得できる実践的・専門的な教育の機会を拡げた。また、主婦や社会人に対し柔軟な入学制度を採用した高等教育機関の試みも、女性の社会参加を促進する上で望ましいことであった。

我が国においては、教育・訓練を受ける機会の平等は、制度的には一応達成されているとみられるが、根強く残っている性による役割分担意識に基づく社会的慣習を解消し、女性の社会参加を促進するためには、男女が共にあらゆる教育機会・教育活動を通じて男女平等や男女の相互協力を学ぶこと、および女性みずからが将来の展望を持って、あらゆる教育機会を活用することが肝要である。

そのためには、今後、教育・訓練を受ける機会のより一層の平等を推進するとともに、学校教育、家庭教育、社会教育、および職業訓練のあらゆる機会において、女性が将来あらゆる分野に進出することを可能にするような教育・指導のあり方が検討・充実されなければならない。

〔提言〕

一 社会や家庭に根強く残っている男女差別意識や固定的な性による役割分担意識を払拭するため、あらゆる教育機会を通じて男女平等や男女の相互協力を学ぶような教育活動を展開する。その際、社会教育の果たす役割の大きいことを重視する。また、学校教育、家庭教育、職業教育、職業訓練を通じて、女性が、これまで偏りがちであった人文科学などの分野だけでなく、社会科学や自然科学あるいは工業・建築等の技術的な分野など広い分野にも進出しようとする進路指導、職業指導、教育・訓練を実施する必要がある。

二 学校教育においては、男女同一の教育課程の趣旨に沿って行われることが肝要であり、特に、家庭に関する教育については、家庭や子の養育に対する責任が男女の共同責任であることを若い時から認識するためにも、男女が共に修履する必要がある。そのため、新しい男女の責任についての考え方に即した家庭科教育を目指し、教育内容の改善と教員の資質の向上について、教育行政関係者、教員、および家政学研究者等による具体的検討が必要である。中学校「技術・家庭」について、男子が家政系列の領域を、女子が技術系列の領域を一層修履することを促進するための具体的方法、および高等学校「家庭一般」について男子が履修することがより可能となるような具体的方法を検討し、その普及を図るべきである。(Ⅺ 婦人差別撤廃条約批准のための条件整備 参照)

三 長期間社会活動を離れていた女性が再び社会的な活動を希望する場合や、既に職業に就きながらより高度な技術や知識の習得を希望する女性の要求に応えるため、女性が職場や家庭で働きながら受けられるような大学教育のあり方の検討が急がねばならない。たとえば、放送大学の設置を急ぐとともに、社会人も受けられる大学開放講座をさらに普及すべきであり、ここでは、職業に就く際に有効な何らかの資格を得ることができたり、職業人の再教育の役割を持つようなコースを設けることが重要である。

四 長期間社会活動を離れていた女性が再就職を希望する場合に、職業に関する情報や専門的知識・技術を修得するための機会を提供したり、職業に就くための幅広い相談に応えるための機会等を一層強化充実する必要がある。職業訓練施設等を女性の多様な要求に応えることができるよう整備する必要がある。

五 社会全体における性による役割分担意識に基づく社会慣習の多くは、最も身近な家庭生活の中から、男性も含む家族全員の日常態度の中で無意識のうちに蓄積されることに起因するものが多い。それを打破するためには、固定的な性による役割分担意識に基づくしつけの現状を省み、男女ともに幼い時から、男女平等・相互協力を基本とするしつけを行うよう母親のみならず父親も認識することが重要であり、そのため、特に両親が家庭教育に関して学習する機会・活動を、成人教育の場において充実する必要がある。(Ⅳ 家庭と育児 参照)

Ⅳ 雇用・就労

労働の権利とその労働権における男女の平等は、日本国憲法において保障された基本的権利である。前半期においては、男女別定年制、結婚・妊娠・出産退職制等の差別的制度の解消が、計画的な行政指導により推進され、約五割の企業において改善がみられた(昭和五十四年労働省調べ)。また、差別に関する苦情相談の窓口としてのコンサルタントの設置など、十分とは言えないながら新しい試みもあった。また、男女平等を確保するために必要な法律・制度の整備、および女子に対する特別措置の扱いなど、雇用における男女平等のあり方について、労働基準法研究会報告(昭和五十三年)を契機として、広く論議が行われ、婦人労働問題への認識が喚起された。

一方、一部地方自治体において苦情相談室の開設があり、民間では、全国的組織の労働組合において、婦人雇用対策の強化や労組独自の婦人

の十年行動計画があいついで出された。

しかしながら、募集・採用における機会の平等、配置・昇進・昇格、教育・訓練等の機会と待遇の平等については、その改善ははなはだ立ち遅れ、統計によっても、採用の機会において男女平等の門戸が開かれていない企業や、男女の間に採用条件に差を設けている企業も依然みられる。さらに、採用後の教育・訓練の機会、昇進・昇格の機会も男女に等しく与えられているとは言えない。

近年の経済状況の変動に伴い、雇用における女性の機会や待遇の実態は一層多様化し、賃金・雇用機会等における男女格差や差別の実態の正確な把握は、極めて不十分である。

これらの状況を踏まえて、雇用における機会と待遇の男女平等を実現するためには、行政の強力な指導のみならず、労使の自主的な努力が何よりも肝要である。その際、配偶関係や婚姻関係および母性を理由とする差別を防止することが重要である。

パートタイム労働者や中小企業労働者および家内労働者など弱い立場にある女子労働者へ配慮することが肝要である。

また、労働時間の短縮が女性の家庭生活の維持や地域活動への参加を容易にすることへの配慮も重要である。

〔提言〕

一 雇用における男女平等を実現するためには、何人も奪い得ない権利としての女性の労働権を確立し、募集・採用における均等な機会、および、採用後における配置・昇進・昇格、教育・訓練並びに定年等の機会と待遇の平等を実現するため、性による差別を禁止し、男女平等を確保するためのあるべき法制についての検討・整備が必要である。

なお、女子労働者に対する特別措置については、科学的および技術的知識に照らして定期的に検討するものとし、必要に応じて修正し、廃止し、またはその適用を拡大する方向が望まれる。(Ⅺ 婦人差別撤廃条約批准のための条件整備 参照)

二 雇用における男女平等を強力かつ総合的に推進するために、行政の推進体制を拡大・整備する必要がある。

三 雇用における男女差別の実態を正確に把握するために、具体的・個別的にその内容を把握していく作業が重要であり、また、広く一般に、差別の実態についての情報を繰り返し提供することが必要である。

四 女性の労働を正当に評価するために、労働基準法第四条に明記されている男女の同一価値労働に対する同一賃金の原則の徹底が重要である。そのため、監督指導を行うとともに積極的な啓発を行うべきである。また、賃金・給与体系の運用上における女性に不利な実質的な差別を解消することが肝要である。(Ⅻ 婦人差別撤廃条約批准のための条件整備 参照)

五 募集・採用における機会と条件の均等を実現し、配置・昇進・昇格、教育・訓練等の機会の男女差別、および男女別定年制など、差別的慣行や制度の解消を図るため、これらを内容とする規則・協約および職場慣行や制度を速やかに撤廃すべきである。(Ⅻ 婦人差別撤廃条約批准のための条件整備 参照)

六 女性の労働権を確立するため、母性を理由とする女性に対する差別を防止し、妊娠中の勤労婦人の保護および産前産後休業期間の延長をはじめとする母性保護を充実するとともに、母性給付水準の向上を図るなど、母性保障のあり方の検討を急ぐべきである。その際、ILO条約一〇二号に明記された母性給付の水準まで高める必要がある。(V 母性の尊重 参照)

七 保育施設の整備や保育サービスの充実を通して、男女双方が家庭や子に対する責任と労働の責任および公的生活への参加との両立を可能とするような条件を整備すべきである。特に乳児期の保育施設の拡充が図られなければならない。また、最近の国際的動向を踏まえて、家庭における子の養育いわゆる育児や家族の世話を男女双方の責任で果たすことを可能ならしめる方向で、育児休業制度の普及および家族の病氣に際しての看護のための休暇について検討する必要がある。なお、学童保育について、そのあり方の検討を急ぐべきである。

八 短時間労働者いわゆるパートタイム労働者の労働条件の向上を図るには、労働関係諸法規および各種社会保険の適用について遵守することが基本的であるが、現状では、それを履行していない企業も少なくないので、その遵守についてより一層強力な行政指導を行う必要がある。なお、パートタイム就労については、法制上、実態に適合しにくい側面も生じているので、その問題点を明らかにし、適正な労働条件等の確保のための検討を急ぐべきである。

また、家内労働については、家内労働手帳の交付の徹底、適正な最低工資の決定など、労働条件の向上について推進すべきである。

九 男女全労働者の週休二日制・有給休暇を含む労働時間短縮について、計画的な行政指導を実施し、女性の職業の継続や家庭生活の維持ならびに地域活動への参加を容易にするような条件を整備すべきである。

十 企業における努力はもちろんのこと、労働組合においても、女子労働者の問題を積極的に取り上げ、その方策について検討・実施すべきである。また、女性みずからも職業意識を高め、差別の除去に積極的に行動する必要がある。

V 母性の尊重

母性を尊重し保護するための措置が、前半期において、いくつかとられてきた。たとえば、我が国の医療保険制度における母性給付については、女性が分べんの際に必要な一時的出費の保障を受ける分べん費、子の出産に伴う育児手当金、および勤労婦人が産前・産後の休職中に生活の保障を受ける出産手当金があるが、この五年間においては、健康保険や国民健康保険等の分べん費の水準の引上げが行われた。すなわち健康保険をはじめとする各種の被用者保険の適用を受ける女性については、本人分べん費の最低保障額および配偶者分べん費の額が、健康保険法の改正(昭和五十五年十一月)によって政令による弾力的な引上げができるようになり、昭和五十六年度より十五万円(昭和五十年六万円、昭和五十一年十万円)に引き上げられた。また、国民健康保険においても助産費の補助基準額が昭和五十五年に八万円(昭和五十年四万円)に引き上げられた。

言うまでもなく、母性は、次の世代を生み出すという社会的に重要な機能である。したがって、母性を理由として女性に対する差別がされてはならないことは当然であるが、さらに進んで、母性を尊重し、保護するための対策が充実されなければならない。

母性保障については、母性給付の中で、家庭婦人および勤労婦人の双方に支給される分べん費の水準が、必ずしも実態に即したものになっていない。また、母性給付の中で勤労婦人に支給される出産手当金の水準および産前産後休業期間も十分とは言いがたい。また、健康保険に未加入の勤労婦人や国民健康保険に加入の女性は、母性給付を十分に受けることができないなど、様々な問題も残存している。

また、妊娠中から産後に至る女性の健康・子の健康に関する母子保健については、我が国は国際的にも比較的高い水準にあると考えられるが、妊娠婦死亡率については減少の傾向にあるとは言え、まだ、改善する必要がある。近年の核家族化の進行に伴い、多くの女性が出産前後の家事の援助の手を有しておらず、出産前後の休養が十分ではない。家業の労働からの軽減が図りにくい農家や自営業の女性の場合は、特に不十分である。

〔提 言〕

一 母性の社会的機能としての重要性について認識を深め、母性の尊重・保護が男女差別の理由となつてはならないという理解をより一層深めるための啓発活動が必要である。

二 母性保障については、家庭婦人および勤労婦人を含めて、かつ、母性機能および妊娠中から産後に至る問題も含めて、また国際的視野に立つて、そのあり方について検討を急ぎ、具体的方策を実施すべきである。なお母性給付についてはILO条約一〇二号に示された水準まで高める必要がある。(Ⅳ 雇用・就労 参照)

三 女性の就労が中小・零細企業に多いことから、健康保険が任意適用となっている従業員五人未満の企業等では健康保険に未加入の女性も多く、それらの女性は十分な母性給付を受けていないので、これらの企業に健康保険を適用する方向で検討を急ぐべきである。なお、国民健康保険での母性給付の充実が望まれる。

四 母性保健の充実については、日常生活圏の中で、妊娠中から出産後まで一貫して指導・援助・検査・サービス等が受けられるような条件を整備することが必要である。特に妊娠婦の死亡を防ぎ、また生まれてくる子どもの心身障害の発生を防ぐために、母子医療機関や小児医療センター(特に新生児強化集中治療施設)、あるいは妊娠婦の緊急ハイリスク妊娠分娩を取り扱う施設の整備を一層推進する必要がある。また、核家族化に伴い援助の手を欠く女性や、自宅で休養の取りにくい農家や自営業等の女性のために、家事や家業の負担から離れて、十分な産後休養を取ったり育児の学習ができるような施設や制度を整備することが必要である。

Ⅵ 家庭と育児

女性が、事實上、家庭生活の維持に大きな貢献をしてきたことに對して、從來、十分な評価がなされていなかった。そのため、家庭生活の維持運営に對する女性の働きを正當に評價し、家庭生活における實質的な平等を確保するための措置がいくつが取られた。中でも、相続に關する民法の一部改正（昭和五十五年五月公布）により、子と共同相続する場合の配偶者の相続分が三分の一から二分の一に引き上げられたことは、家庭生活の維持運営が男女双方の等しい責任と協力で成り立っていることが、法制上も明確にされた点で、評価にあたゐる。また、この民法の一部改正において、寄与分制度が創設されたことは、農家や商店等の女性が家業へ寄与してきたことが、制度的にも正當に評價されることとなり、女性の地位向上の上からも妥當な措置であつた。

子の養育に關する育兒に關しては、たとえば育兒休業について、国公立学校・病院・保育所等の特定職種を對象とした育兒休業法の制定（昭和五十年）、および育兒休業制度を実施する民間の事業主に對する奨励金の支給（昭和五十年から）等、新たな制度が設置された。また、保育所は、昭和五十年一八、〇〇九所から昭和五十四年二一、二六四所へと整備された。

家庭は社会的・文化的發展の基盤としても重要な役割を果たしており、また、子の養育は、今後の社會を担う世代を育成するという社會的に重要な機能である。にもかかわらず、從來、家庭や子の養育に對する責任の大部分は、女性の手によつて担われてきた。家庭や子供に對する責任が男女双方にあることは、民法にもその原則が明らかにされているところである。しかし、實際生活においては、固定的な性による役割分担意識が極めて強く残っているところであり、今一度、家庭に對し男女双方に責任のあること、および、子の養育に對しては男女双方および社會全体に責任のあることを、國民全体が深く認識する必要がある。また、配偶關係や婚姻關係が差別の理由となつてはならないことも認識すべきである。

夫婦の財産關係における實質的な平等を確保するための諸法制・制度の見直しを行い、その具體的方策を明らかにする必要がある。また、育兒休業制度や保育施設等の充實を通して、男女双方の親が、家庭や子に對する責任と労働の責任および公的生活への参加との両立を可能とするような條件を整備する必要がある。

〔提言〕

一 社會全体に根強く残っている固定的な性による役割分担意識に基づく社會的慣習を解消するための第一歩として、家庭や子の養育に對し男女双方が責任を持つことについて、広く一般に認識させるための強力な啓発活動が必要である。それらの認識は、若い時から学び、身につけることが重要であるので、特に、これから家庭を持つとする若い男女や、親になる前の若い男女への学習機會の充實が必要である。たとえば、社會教育における家庭教育學級の充實や、妊産婦を對象とした母親學級を両親學級へ發展させることなどは、早急に實現すべきである。

（Ⅲ）教育・訓練 参照

二 家庭生活の維持運営に對する女性の働きを正當に評價するため、諸法制・制度の見直しを図る必要がある。特に、夫婦の財産關係における

実質的平等を確保することは肝要であり、たとえば、夫婦財産の離婚時の分与や婚姻継続中の財産関係について実質的な平等を確保するための制度の見直しが急がれる。

三 保育施設の整備や保育サービスの充実を通して、男女双方が家庭や子に対する責任と労働の責任および公的生活への参加とを両立させることを可能とするような条件を整備すべきである。保育施設の充実は、その需要に応じて一層の整備・充実を図るべきであり、特に、要求の高い乳児保育施設を充実することが急務である。また、保育は営利の対象となるべきではなく、いわゆるベビーホテルなど、近時、社会的な問題ともなっている民間の一時預かり施設については、その実情を把握し、法的措置も含む適切な指導が急がねばならない。

また、最近の国際的動向を踏まえて、家庭における子の養育いわゆる育児や家族の世話を男女双方の責任で果たすことを可能にする方向で、育児休業制度の普及および家族の病気に際しての看護のための休暇について検討する必要がある。(Ⅳ 雇用・就労 参照)

Ⅶ 女性の健康づくり

健康づくりは、地域の実情に密着したきめ細かな施策が必要であるという観点から、市町村健康づくり推進協議会の設置(昭和五十三年度から、全国市町村の六四%、二、〇七九市町村で設置)、市町村保健センターの整備(昭和五十三年度八八所)等が行われた。

我が国の国民の健康の水準は、全体的にみて高いと考えられるが、その水準を一層高めるための健康づくりは、みずから手で積極的に保持・増進していくことが基本である。しかし、女性の健康づくりは、国民生活・家庭生活の基盤をなすものとして特に重要であり、女性の健康を維持増進させるための各種の措置の充実が必要である。

女性の有病率・受療率は依然として男性よりも高く、貧血や肥満の傾向も同様に著しい。しかも、従来から、女性の多くは家庭にあり、健康診査や検診に恵まれにくい状況にあるだけに、今後より一層、病気の早期発見・早期治療のための健康診査や検診の充実、および診査や検診の機会への女性の積極的な参加が必要である。

また、健康づくりには、日常生活圏の中で利用できる機会や施設が充実されることが重要であるが、こうした地域保健施策の充実のためには、地域の健康づくり活動や、計画の立案・実施に、女性が積極的に参加することが何よりも肝要である。

〔提言〕

一 各種の健康診査・検診の機会が充実しつつあるが、特に健康に異常が生じやすい中高年の女性の健康診査・検診の機会を充実することが一層必要である。たとえば、胃がんや子宮がんの減少に比して乳がんは増加の傾向にあるので、乳がんの早期発見のための自己検診法の普及だけでなく科学的な検診の機会の充実が急務である。

二 女性の貧血は、若い年齢から高年齢に至るまで広く見られるが、特に思春期を中心とした若年層において急増する傾向にあるので、若い女

性を対象として、家庭生活・学校教育を通して、科学的な裏付けに立脚した適正な栄養・運動・休養を日常生活に取り入れる健康指導を充実する必要がある。

三 健康はみずからの手で積極的に保持・増進していくことが基本であるが、健康のチェックや相談の機会を、女性が、日常生活圏の中で気軽に活用するための具体的方策を充実することが必要である。たとえば、仲間ぐるみの人間ドックを受けるため、地域婦人会等の健康積立て金や誕生日検診の啓蒙等、具体的方策の普及が望まれる。なお、それらの計画の立案・実施には、地域の女性が積極的に参加するようにすべきである。

四 女性の健康づくりに当たっては、特に、農村婦人・自営業婦人・家庭婦人等、健康診査の機会に恵まれない女性への配慮を重視する必要がある。

VIII 老後における生活の安定

来たるべき高齢化社会における問題は、端的に女性の問題に集約されるといってよく、高齢の女性の独り暮らし、寡婦の増加、独身の高齢女性の問題等、老後における生活の安定のための対策は、急務を要している。

その一つとして、老後の所得保障としての年金制度の問題は、一般に男性より長い老後生活の予想される女性にとって一層切実な問題である。この五年間においても、いくつかの改善が見られ、厚生年金・国民年金における老齢年金の水準の引上げ、および厚生年金の遺族年金や国民年金の母子年金の水準の引上げなどが行われた。

しかしながら、現在、家庭婦人の中には独自の年金権を有していない者がおり、それらの女性が離婚した場合、年金による老後の保障が得られないなどの問題がある。年金制度については、将来は、家庭婦人も含め、国民のひとりひとりがいずれかの年金制度に加入し、自分自身の年金を受けるという方向に進むことは、年金制度基本構想懇談会報告（昭和五十四年）においても指摘され、すべての女性が独自の年金権を持つことの必要性については、ようやく理解され始めていると考えられる。しかし、その具体的方策の検討については緒に着的なところであり、今後その検討が急務である。かつては、夫が外で働き妻は家庭を守るのが通常の姿であったため、年金制度も、女性は、妻が寡婦として夫の年金の下で保護を受けるという体系で構成されていた。しかし、今や、女性の就労や自立が進み、これまでの体系の年金制度ではこの状態に対応できなくなっている面がある。従って、年金制度の中における女性の位置づけを、かつての男性に扶養される者という立場から独立した個人としての立場に改める方向で、年金制度全般の抜本的見直しを行う必要がある。

他方、老人福祉に関する措置としては、特別養護老人ホームの増設（昭和五十一年六二七所―昭和五十四年九〇三所）や、在宅虚弱老人が特別養護老人ホーム等に併設された施設において週一・二回入浴・食事等のサービスを受けられるデイ・サービス事業の創設（昭和五十四年か

ら)、および、寝たきり老人を介護している家族が家庭で介護することが困難になった場合に、老人が一時的に特別養護老人ホームで介護の受けられる寝たきり老人短期保護事業の創設(昭和五十三年度から)等が行われた。しかし、これらの措置もなお十分ではないし、急速に高齢化の進む社会を、温かい人間関係と信頼に基づいた社会として実現させるためには、地域福祉の充実に向けても格段の努力が要請される。

〔提言〕

一 すべての女性がいずれかの年金制度に加入し、自分自身の年金を受けられるように、女性の年金権の確立を図る方向での年金制度の見直しが急務である。そのためには、女性を含め国民のだれもが常にいずれか一つの年金制度に加入している「一人一年金」の体制をつくるべきである。すでに現在、勤労婦人はすべて厚生年金か共済年金または国民年金に加入しており、家庭の主婦の多くも国民年金に任意加入している。したがって、女性の年金権を確立し、「一人一年金」にする最も現実的な方法として、現在の国民年金の任意加入(被用者の妻に対する)を強制加入にする方向で検討すべきである。その際、年金制度全体における整合性を十分検討する必要があることは言うまでもない。

二 女性が心身ともに充実した老後を送るためには、女性みずからが生涯にわたって生きがいを持ち、社会に寄与することの喜びを知ることが基本である。しかし、社会的な責任を果たしてきた高齢者に対する介護は、社会全体の責任であり、老人福祉に関する対策がより一層充実されなければならない。たとえば、特別養護老人ホームは、寝たきり老人に占める高齢の女性の割合の高さを考え合わせると今後増設が必要である。また、在宅老人への福祉は、介護に当たる女性等の負担を軽減するという意義も併せ持つものであり、家庭奉仕員派遣制度の充実や、訪問看護制度の本格的実施が必要である。

なお、独身の高齢の女性に対するきめ細かな対策が必要である。

IX 農村の女性

我が国の農業就業人口に占める女性の割合は六割に至っている。前半期においては、農村婦人の福祉の向上、農家生活の改善を推進するための措置がいくつかなされた。たとえば、各都道府県で開設された婦人農業従事者セミナー(昭和五十二年度から)は、農家・農村生活の改善について指導・学習の機会を得る上で効果があった。農村婦人の家の設置(昭和五十二年度から)は、農村婦人の共同学習や相互交流等に活用され、農家高齢者創作活動施設の設置(昭和五十四年度まで)は、農村の婦人高齢者の知識や技術・能力を、地域活動に生かす上で有効であった。

しかしながら、現在、農村婦人は、実際に農業労働力の基幹になっているにもかかわらず、農用地の利用・転換に関する生産体制や農地の改良に関する生産組織の各種の整備計画の過程に、女性が直接的に参加する機会は極めて乏しい。また、これらの整備計画の企画・立案・実施に深くかかわっている農業委員会や農業協同組合・土地改良区などの運営に参加している女性の数も極めて少ない。しかも、従来、農村の女性の多くは、このような地域の農業に関する政策・方針決定の過程に参加する権利や、みずからの人権を主張するための権利を行使することについ

て、極めて消極的であった。

また、地域の共同作業等においては、女性の労働を過少評価する習慣が未だに根強く、同時に、女性みずからの農業労働が正当に評価される場合も少なかった。

これらの要因のほとんどは、農村社会全体に根強く残っている社会的習慣に起因するといっても過言ではない。農村婦人の労働が正当に評価され、農業に関する生産体制や生産組織の整備計画の立案に女性が参加することは、ひとり農村婦人の実質的な社会参加を促進するのみならず、男性をも含む地域の実情に即した農業生産性の向上を図る上で、その意義は極めて大きいものである。そのためには、地域農業の方向づけや実現に、女性が積極的に参加するための実地的・具体的方法の検討を急ぐとともに、農村婦人みずからも、社会的慣習を打破するための深い認識を持ち、既存の諸権利を実質的に行使し、農村社会のあらゆる分野へ参加していくことが肝要である。その際、男性の理解と協力、および幅広い女性の支持と連携が強く望まれる。

〔提言〕

一 農業経営の根幹となる農業生産体制や農業生産基盤等の整備計画の立案の過程に、女性の実質的な参加を促進するための実地的・具体的方法の検討を急ぐべきである。

たとえば、生産体制に関する農村総合整備計画や水田利用再編計画、および生産基盤に関する畑作基盤整備計画や農用地開発計画等は、重要な農村開発計画であるので、なおさら農業の担い手である女性の参加が望ましい。

二 地域の農業の整備計画の企画・立案・実施に深くかかわる機関である農業委員会や農業協同組合・土地改良区に、委員・組合員およびその役員として女性が積極的に参加すべきである。そのためには、これらの組織・機構に女性が参加できるような位置づけを明確にする必要がある。また、女性みずからもその姿勢を持つこと、およびそれを支える女性層の力強い支援が重要である。

三 農村婦人の実質的な社会参加を進めるためには、農村社会全体に残存する社会的慣習を解消していかなければならない。そのためには、何よりも、農村婦人が既存の社会的諸権利を行使することができるよう、農村婦人をはじめ関係団体等に対し、これらの諸権利について強力な啓発活動を行う必要がある。また、女性みずからも、それらの権利を、実際に一つ一つ行使し、社会参加の実績を着実に積み重ねていく努力が必要である。

たとえば、農業委員、農業協同組合・土地改良区の役員への選挙権・被選挙権の積極的な行使は、地域農業の方針決定へ参加する上で効果的である。また、農業生産法人への加入に際し、構成員として位置づけていくことや、所得税の青色申告の際に家族従事者等として明確に位置づけていくことなどは、農業労働における女性の働きを、正当に評価する上で有効である。

四 農家生活の改善、農業労働の適正化、および良好な農業労働環境の整備については、引き続きその充実が必要である。

五 漁業協同組合等については、農業協同組合におけると同様の方策の推進が必要である。また、商工会（商工会議所）については、家族従業員の出場にある女性も、成員として加入できるような方途の検討を急ぐべきである。

X 国際協力

国際協力については、国際婦人年を契機とした新しい活動も含め、いくつかの前進がみられる。政府は、国連が展開している婦人の十年に關する活動の基盤を充実するための各種基金、たとえば、国連婦人の十年基金、ESCAP婦人センター、国際婦人調査訓練研究所等に対し、継続的に拠出を行った。また、我が国において、国連婦人の十年中間年に、ユネスコ本部との共催による国際セミナーも開催された。一方、民間婦人団体等においても、アジア・太平洋地域の女性たちを招聘した婦人の十年に關する大規模なセミナーの開催や各種の交流会が開催されるとともに、アジア等の難民に助力するための各種の募金活動も、従前に比べると活発になった。また、青年海外協力隊員として、かなりの数の女子が開発途上国への協力活動を行った。

従来、我が国の女性の国際協力のあり方は、ともすれば、自国の婦人の地位の向上のために国際的な協力を得、先進諸国からその成果や実績を学ぶことに比重がかけられてきた傾きがあった。

しかし、国際協力は、世界のあらゆる国で、女性が、男性と平等の条件で、あらゆる分野に参加し、社会の発展に寄与し、世界の平和に貢献するために、世界の国々が相互に協力し合うことにある。それゆえ、諸外国、とりわけ開発途上にある国々の婦人の地位向上のために協力することは、ひとりその国の婦人の地位の向上のためのみならず世界の婦人の地位向上に資することであり、それは、世界の平和に大きく寄与することになる。今後、技術協力等を通して、開発途上国の女性への強力な国際協力の推進が急務である。

また、国際協力は、相互の深い理解と信頼に基づくものであり、そのためには、他国へ働きかけることのみならず、同時に日本への理解を促進し、また、在日している外国人に対して、日常生活の中で地道な国際協力関係が持たれることが基本である。

そのためには、政府間の協力のみならず、女性同志の交流や、女性の手による身近な国際協力活動が、幅広くかつ継続的に行われていくことが、何よりも肝要であり、そのような活動を促進するための公的機関等の奨励・援助も必要である。

〔提 言〕

一 国際機関の行う諸活動を通して国際協力を一層促進するため、国連婦人の十年関連事業、たとえば、国連婦人の十年基金、国際婦人調査訓練研究所等国連の諸活動に対し、資金的にも実践的にもより一層積極的に支持し、指導し、協力すべきである。

二 政府および民間団体等による開発途上国への技術協力の促進が急務である。開発途上国への技術協力においては、途上国において多くの女性がその責任を担っている農業等の分野への配慮、および、工業・教育・保健事業・家族計画等各種の分野における指導者養成事業にその国

の女性が参加できるような配慮など、協力が必要としている国の婦人の地位の向上に資するように、計画立案上のきめ細かな配慮をすべきである。

三 民間の女性の国際交流、および身近な国際協力活動が強力に推進されるべきであり、また、その奨励・援助も必要である。我が国女性の国際協力活動の歴史は浅く、女性が、諸外国の女性の状況や、みずからできる国際協力の内容や方法について知り、積極的に活動に参加できる機会は少ない。そのため、政府は、国連の諸活動や諸外国の状況について積極的に情報を提供し、青年海外協力隊への参加、留学生や技術研修生の世話、あるいは協力が必要としている国々への募金活動等についても、広く一般の人々に知らせ、活動の輪が広がるよう配慮すべきである。

Ⅺ 婦人差別撤廃条約批准のための条件整備

国連を中心に検討されている婦人の地位の向上のための各種の国際文書において、まず、政府が昭和五十四年に国際人権規約の批准を行ったことを、評価したい。この国際人権規約は、基本的人権に関して、市民的・政治的基本権のみでなく、経済的・文化的・社会的 basic 権について男女平等を規定したものであり、同条約の批准は、女性の人権の尊重の促進に効果をもつものである。

また、政府が、昭和五十五年にデンマークで開催された婦人の十年世界会議における婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約（婦人差別撤廃条約）の署名式において、同条約に署名を行ったことは、前半期における大きな成果の一つである。このことは、国際婦人年以降、国内で高まってきた婦人問題・婦人の地位の向上についての関心の高さと、この条約の効果に対する幅広い女性たちの期待の大きさの反映とも言うべきものであり、政府を署名に踏み切らせるに至った婦人団体・マスコミ関係者等の努力は大いに評価にあたいする。

しかしながら、署名後の政府の対応は、同条約批准に向けて、国内法制等の条件整備に積極的に取り組んでいるとはいえない状況にある。婦人差別撤廃条約は、国際人権規約をはじめとする女性の人権問題解決のための各種の国際文書の総合的・包括的な結果の一つである。その目的とするところは、女性が受益する権利だけでなく社会的に参加する権利を確立し、社会の開発と世界の平和に寄与することができるよう、女性に対するあらゆる差別を防止・禁止することにある。それは、本会議の意見を参酌して、政府が策定した国内行動計画（昭和五十二年）と趣旨を同じくするものである。婦人差別撤廃条約は、その批准に向けて条件を整備することが、国内行動計画を推進することにつながるとともに、批准それ自体が、より一層強力に、あらゆる分野における男女平等を促進することに効果を有するものである。

したがって、今後、婦人差別撤廃条約批准のための条件整備を、婦人の十年後半期における最重点課題として、早期批准に向けて推進すべきである。特に、提言に示した事項については、優先的に取り組まれない。

また、この条約の趣旨は、公的機関は無論のこと、個人、組織または企業等民間のあらゆる分野における社会的慣習を含むあらゆる形態の差

別の解消を図ることにあるので、この条約の批准にむけて、政府が最大の努力を払うことはもちろんのこと、関係団体をはじめ広く国民の努力が望まれる。

なお、婦人の地位の向上に関する国際文書のうち、ILO条約第一〇二号に関しては母性給付に関する水準の向上を図ること、およびその他未批准のILO条約等各種国際文書の批准等の促進が必要である。

〔提言〕

一 現在、我が国の国籍法は、父系優先血統主義を採用している。そのため、子の責任は男女双方にあるにもかかわらず、女性は、子に対して男性と同等の権利を有していない。女性が、子の国籍に関し男性と同等の権利を取得できるよう、父母両系主義の方向で国籍法を改正すべきである。

二 学校教育においては、男女同一の教育課程の趣旨に沿って行われることが肝要であり、特に、家庭に関する教育については、家庭や子の養育に対する責任が男女の共同責任であることを若い時から認識するためにも、男女が共に履修する必要がある。そのため、新しい男女の責任についての考え方に即した家庭科教育を目指し、教育内容の改善と教員の資質の向上について、教育行政関係者、教員、および家政学研究者等による具体的検討が必要である。中学校「技術・家庭」について、男子が家庭系列の領域を、女子が技術系列の領域を一層履修することを促進するための具体的方法、および高等学校「家庭一般」について男子が履修することがより可能となるような具体的方法を検討し、その普及を図るべきである。(Ⅲ 教育・訓練 参照)

三 雇用における男女平等を実現するためには、何人も奪い得ない権利としての女性の労働権を確立し、募集・採用における均等な機会、および、採用後における配置、昇進・昇格、教育・訓練並びに定年等の機会と待遇の平等を実現するため、性による差別を禁止し、男女平等を確保するためのあるべき法制についての検討・整備が必要である。

なお、女子労働者に対する特別措置については、科学的および技術的知識に照らして定期的に検討するものとし、必要に応じて修正し、廃止し、またはその適用を拡大する方向が望まれる。

また、本条約の趣旨を実現するため、同一価値労働・同一賃金の原則の徹底を図るための監督指導・啓発を推進するとともに、募集・採用、配置、昇進・昇格、教育・訓練、定年等における同一の機会と待遇に関する差別的慣行や制度を速やかに撤廃すべきである。(Ⅳ 雇用・就労 参照)

四 現在、農村婦人は実際に農業労働力の基幹となっているにもかかわらず、地域農業に関する開発計画に参加する機会が極めて乏しい。その要因のひとつは、農村社会全体に残存する社会的慣習に起因している。農村婦人の実質的な社会参加を実現するために、女性が既存の社会的諸権利を実際に行使し得るよう、農村婦人の各種の権利についての強力な啓発活動を、農村婦人、および広く関係団体等に対して強力に行

うべきである。(K 農村の女性 参照)

XII 目標達成への努力

国際婦人年に政府が設置した婦人問題企画推進本部が、当推進会議の意見を参酌して、国連婦人の十年の目指すところを我が国においても実現するための長期計画として国内行動計画(昭和五十二年)を策定し、前期重点実施目標を設定し、その推進に意を用いてきたことは多とするところである。地方公共団体においても、推進体制の整備に着手され、昭和五十三年には全都道府県・指定都市に婦人問題を総合的に取り扱う組織・いわゆる窓口課が設置され、そのうち一市十七県(昭和五十五年四月)で県内婦人問題に関する長期計画が作成されたことは、評価にあたいする。一方、民間においても、国際婦人年に、四十を超える全国組織の婦人団体が、戦後初めて連携し、全国規模の婦人会議を開催し、その後も連携を持った活動を継続させたことは画期的なことである。また、国際婦人年を契機に全国各地で生まれた大小の婦人グループ・団体が、婦人問題に取り組んできた労も多しといいたい。

しかしながら、多くの女性たちと関係者の努力にもかかわらず、婦人の十年前半の五年間において、その当初の目標を十分達したとはいえない状況にある。

社会の多くの分野では、固定的な性による役割分担意識に基づく社会的慣習が、依然として根強く残っており、法的・制度的に差別のない分野でさえも、女性が男性と同等の条件で実質的な社会参加を果たすには至っていない。それは、ひとり女性のみならず、男性をも含む社会全体の損失である。今後、国、地方公共団体、民間団体、企業、マス・メディア、および女性をはじめとする国民ひとりひとりが、それぞれの分野で、婦人の十年前半期の進捗状況を踏まえ、後半期において婦人の十年の目標が達成し得るよう最善の力を尽し、相互の理解と協力を深めなければならない。

〔提言〕

一 婦人問題企画推進本部は、婦人の十年前半期における進捗状況を冷徹にとらえ、残る五年間において、当初の目標が達成されるよう、後半期にとるべき施策の具体的計画を樹立する必要がある。なお、目標達成に向かって総合的な施策を強力に推進することができるよう婦人問題企画推進本部の組織を拡充するとともに、中央・地方を通して、その推進体制を充実する必要がある。

二 日常生活圏に根をおろした活動の推進を図るため、地方公共団体における婦人関係施策担当部署の組織の強化を図り、女性に関する諸施策を強力に推進する体制を整備することを切望する。

三 女性の社会参加を阻んでいる要因の多くは、社会全体に根強く残っている固定的な性による役割分担意識に基づく社会的慣習に起因している。そのため、あらゆる分野あらゆる機関において、日常生活に深く根ざしている社会的慣習打破のために、強力なキャンペーンを展開する

必要があり、政府は、こうしたキャンペーンを強力に推進すべきである。

四 固定的な性による役割分担意識に基づく社会通念を变革するに当たっては、ニュース媒体・広告等のマス・メディアの果たす役割は極めて大きい。マス・メディアが、婦人の十年および婦人の地位の向上に関する国際的・国内的諸活動を、一般の人々に周知させることを強く望むとともに、婦人問題・婦人の地位に関する問題の扱い方についても検討されるよう期待する。

五 婦人問題の多くは、女性の日常生活に深くかかわる問題であり、その課題解決に当たっては、女性みずからが組織する婦人団体等民間団体の果たす役割は極めて大きい。婦人団体等民間団体のより一層活発な活動の展開を望む。特に、「草の根」の活動が一層推進されるよう期待する。

六 国・地方自治体の活動の実施に当たっては、民間の諸活動との連携をより一層緊密にすべきである。また、それぞれの間の情報交流を一層緊密にすることが肝要である。

なお、そのためには、政府みずから各種の情報・資料を収集し、積極的にこれを公開し、提供するよう格段の配慮を望みたい。

女の問題を 共に考える

〈あごろ〉

△あごろVでは、女が真剣に生きようとするとき、その行く手に立ちはだかる問題を考え合っています。

△あごろVには規則はありませんが、運動の原則としては、次のようなことを掲げています。

- 1 自分も他人もかけがえのない存在として尊重し、人権を侵害するあらゆる差別・戦争・公害に反対する。
- 2 イデオロギーを先行させず、現実根ざし、地域に密着した運動を行なう。
- 3 個人の意識変革を中心に、着実に伝統的な運動を。
- 4 ゆるやかな連帯。ゆるやかな方向性。
- 5 「人はすべて可能性を持つ」を信条に、女性の可能性の開花に力をつくし、社会的活動と結びつける。
- 6 フェミニズム運動の中で、特に情報部門を専門的に受け持つ。

7 どの政党・どの企業・どの団体とも関係なく、自主独立を続ける。

8 会費・基金および事業収益を資金とする。

9 会員は、自分の状況と、さき得る時間や力に応じて運動する。絵を描く人は絵を、歌を歌う人は歌を、病床からでも参加できる運動が基本。

10 どの部門にも「長」は置かない。運営の最終責任は、運営会議とする。

現在、『あごろ』『あごろミニ』を発行するほか、読書室・可能性教室・創造力の銀行などを運営しています。産業社会への窓口としてはABCVCVを設け、女性の創造力の売り込みや出版活動などを行なっています。活動は、北海道から九州まで十三の拠点が軸です。

〔編集後記〕

いくらか良くなった体調と、今号のテーマには、どうしてもかわりたいたいと思ひで、久しぶりに編集に参加。異国で、異邦人としてかき見た八戦争、八反戦の現実。一たび始まってしまった、八反戦の思いも理論もいかに無力かを痛感した。いかなる戦争も八国家による合法的大量殺人だ。そして私が、人間が人間として、自然に生きることを否定するものだ。だから今、どうしても、戦争への道、を拒まねばと新たに決意している。(知)

☆

募集期間が短かったのに、「私と戦争」の手記は、百十五篇も応募された。記憶を薄れさせるのに充分な四十年近くもの月日が過ぎてゐるのに、恐怖や悲しみがいまだになまなく語られて、癒やされぬ傷の痛みが伝わり、書かずにはいらぬなかったのに違ひない。重く深い思いが一つ一つ胸に響いた。この平和への祈りを結集することが急務だ。

「竹ちゃん」の抵抗」の中の、息子を新で携つて応召させた父親は、それがもし自分たち家族の安全を守るためだったのなら、まだしも人間的かもしれない。あの戦争は、それすら許さない非人間的なものだった。戦後の世代には想像もつかないだろうが、自分も家族もすべてを国に捧げて疑わぬひたむきな信念からの行為のように私には思

えて、一層無限に悲しく恐ろしい。

私自身、この狂気じみた信念の完全なとりこだった。国のためなら命など惜しくないと思つてゐた。この狂気にまんまと駆り出されたところ、最も恐ろしいことだった。100%一方だった情報の方に身ぶるいがする。今度こそは、人間の名に恥じない道を選びとるために力を尽くすことを肝に銘じてゐる。それに付いても、婦人団体へのアンケートの回収率の低さが気にかつてならない。(見)

☆

50年、朝鮮戦争のときに生をうけた私は、60年安保のとき小学生だった。70年安保のときは学生、そして80年安保は日比谷野音のある集会に参加。以来、「リブ」と「反戦」の集会に二股をかける。リブ運動が反戦運動か、ではなく、相方の視点で融合して初めて、八平和や、新しい質の八文化が語れそう気がする。リブと反戦の集会に奔走しながら、24号も「五月二日」(憲法改悪を許さない女たちの集会)を合言葉に、駆け足で関わった。どれだけ、リブと反戦の視点を獲得できたか、なだらうつ右傾化に歯止めをかけられるか、は今後の課題。(統)

☆

編集会議でなるのさえためらわれるような、気の滅入る日が続いた。体験手記はどれも重く、採用、不採用を決めるのは不遜な気がしてくる。国の政策

の一つとして起こりうる戦争。物として殺されてゆく人間。押し殺される声。破壊し尽される自然。身近のどんな小さなことにでも、おかしなことにはNONと言ひ続けることからすべてが始まる。と思つてきたが、この頃は同時に何か別な方法もとつてゆかないといけないのでは、という気がしてくる。(ゆ)

☆

実は編集を手伝つたといつても、途中から入つて、足をひっぱつてはいけな思つて、とにかく一言一句聞きのがすまいとするだけで、精一杯だったようです。

それでも、小学生の工場見学ではなけれど、ものが創造されていく過程にひととおりタッチできるのは、とてもエキサイティングなことでした。つくづく感じたのは、テーマをしつかりつかんで消化するというのが基本なんだらうけれど、それを雑誌という形におきかえるって大変なんだな、ということです。(村)

☆

黙つてなりゆきに心を痛めてゐるだけでは、結果として消極的賛成になつてしまふ、戦争の非人間性を身をもつてなめた世代としては、どうしてもプロテストしなくてはの思ひから、非力も願みずこの号の編集に参加させて頂いた。年采の知己の如く、受け容れて下さつた、心やさしい編集部みな様、本当にありがとうございます。(ト)

△あごろVこのやさしい怪獣のような空間で、半世紀、一世紀かく真の男女共生を願ひ生き抜いてきた人たちに出会い、再確認した。逃げ場のない徹底した家事・育児の男女共同化によつてはか平和は得られないと、まずは、「あなたの恋人(情夫? 婦?)とベッドで楽しむ本」になつたらいいな。そこで口に泡とばす、聞いて、がまき起こつたらもっと楽しいだろう。(弘枝)

☆

見渡す限り灰と化した我が町に立つて、しみじみと思うのですが、過ぎ去つた青春の貴重な一コマを、戦争によつてすりへらされてしまつたと思うと残念でなりません。しかしあの時、弾丸にあたつて死んでいたら現在の自分の存在はありえないでしょう。何事も死んだつもりでぶつかれば道は開けると思うとバイタリティが湧いてくるのです。編集後記を書くに当たり、再びいかに戦争が無意味であるかを強く訴えたいと思うのです。(福井)

☆

ちよつとだけ顔を出して、ちよつとだけ手伝う。パートの参加で、役に立つたのかな……。一回だけ出た編集会議、とっても面白かつた。遠慮なく話す女の人たち。余計な気使ひがなくて、明快(ト)に見えた。まだ私はそれに互せるほど、主張的ではないけれども。(F・Y)

戦後生まれの私にとって、『戦争』は、もう一つ実感に欠けて、自分自身にはがゆさを感じながらも、重い重い号だった。身のまわりの小さなきざぎざから、政治レベルの闘争まで、争いことは枚挙にいとまがない。『戦争』は、『政治』よりも、『人間』そのものの原点があるような氣も……。

反戦とフェミニズムの思想は、根がいつしよはずだが、反戦の運動家の中にも、女性差別には無頓着な男がいたりして、女性解放運動は、先が長くな——いものなところ。そして、ここにも、女と男の間には恋や何やらあったりして問題は複雑怪奇。女がのびのびと恋ができる時代までは、頭くさらずに、生きていかねば。(朋)

☆
「ぎょうの編集会議でね……」としゃべり続ける私に、一応あいづちは打ちつつも新聞から目を離さない、私の夫殿。「ねえ、戦争がこわくないの？」と話を打ちかけると、「でもねえ、私たちがどうできるものでもないし」と首をかしげるだけの友人たち。こういう周囲に認識させることから始めなければ、と思いつつも、時々一人で騒ぐのがバカみたいにも思えたところでした。でも、少しずつでも話し続けたい、そう思っています。(のこ)

☆
12・7集会の呼びかけ人を『ガラスのうさぎ』の高木敏子さんをお願いし

たら、「へあら／＼みたいなりプとは一緒にやたくな」と言われたそうです。結局は呼びかけ人になられましたが、ハリブ／＼が赤と同じように定義されている社会通念に、戦争の火種を感じます。差別こそ戦争の基と、私たちは思い続けているのですが。(R)

☆
これは私にとってとても大切な本になります。(坂)

☆
核シェルターのモデルを写真で見ました。二十日生残れるというシェルターの壁にあられた小穴は、入れてもおおうと殺到する人々を内部から撃ち殺す銃口だそう。核廃絶や軍縮という手段を見限りひたすら現実を怖れ自己の延命を考えてシェルターという殻にこもろうとする現代の狂気。狂気の支配する世の中であればあるほど、生真面目に「平和」を信じ、愚直に非武装を唱えたい。この号は、私が心をこめて参加した号はない。(真)

☆
小さな声は、この広い大地いっばいに届くほどの力になり得るだろうか。でも、何もしなければ何も変わらない。何かしなければ、いまま……。

初めに編集会議に参加して、風邪熱のため頭がぐさりそうになりながら改めて沸き上がった私の『思い』です。私はまず、一つ一つの問題を自分の頭で考える、ことから始めてみよう。さ

て、あなたは明日からどうするでしようか。(たんば)

☆
「ねえ 見て!! 見て!! あたしの書いた文章が活字になったの。ほら、編集委員としてちゃんと名前も載ってるんだから!!」まずはこう言って、何人もの人に24号を読んでもらうきっかけを作ろうとします。そして頭が固まらないうちに、「真の平和とは何か」を考えてもらえればよいのですが……。

私にとって当面の課題は、無知の自覚にありそう。米子言8月の全日本学生水上スキー選手権大会の覇者は、我がが立教大学水上スキー部以外にありません。(恥過子)

☆
八回の編集会議のうち、七回出席したことになります。帰宅すると、十二時をすぎていることも幾度か。

それなのに、テーマが大きすぎて、とても私の手に負えそうもないと、半分身を引いた形で参加になったこと、今身になって悔ひとしきります。的はずれな意見を出して、後で恥しい思いをしたことも、今になって、いい勉強をさせていたのだと思っています。

☆
次号ではその点では、がんばるつもり。私のささやかな体験からも、本つくりにかかわることは、本の読み方の勉強にもなるようです。「皆様も、どうぞご参加下さい」とお勧めしたいと思えます。(N子)

「日曜美術館」でフット見た浜田知明氏の版画。数千数万語を費やすよりも戦争を物語る!と心を打たれました。ショッキングすぎるという意見もありましたが、あえて真実をみつめようと、掲載にふみきました。ご快諾くださった浜田先生に心から感謝します。(S)

☆
ファシズムとは、企業と国家権力が結んで民主主義を否定する政治形態、ある雑誌に載ったことばである。

現在の日本の「平和」と「繁栄」を問い直そう。「真実」を読みとる目を養い、行動しよう。いま、すぐに。(M)

☆
かつて戦争を体験した先輩たちの反戦への熱い思いを体全体に感じた今回の編集。何もしないことは現状肯定につながる。私たちは改めて自分たちをとりまく社会状況について真剣に考え、判断し、行動していかなければならない時だと思ふ。フェミニズムはヒューマニズムでもある。(洋)

☆
編集の間、毎晩毎晩戦争の夢を見ました三十六年余、私の中に巣食っている戦争の大きさを改めて知りました。忘れたかと思つてた部分を取り出し、それと格闘するのはつらいことでしたが、やっと△戦後△が見えかけた思いがしています。この△戦後△を決して△戦前△にしたくない。その必死な思いでこの号をつくりました。(千)

「あこら」は、ギリシャ語で「ひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあう「ひろば」。さくのない「ひろば」です。経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、と、一九七二年以来、雑誌「あこら」（年二回刊）を、また一九七七年からは「あこらミニ」（月刊）も発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにほしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地の「あこら」拠点にもお出かけください。

●「あこら」は、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いつさい無関係。会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②雑誌「あこら」および「あこらミニ」の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行（BOC）の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室（英語教室、再就職準備講座など）の運営、その他。

●会費は年額六千円（雑誌「あこら」「あこらミニ」誌代および送料を含む）。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あこら事務局（TEL 03-354-3941）へ

「あこら」24号 1981年5月20 初刷 6月10日2刷

●編集 安部千加子／石川光子／稲垣良代／大沢統子／奥村和子／川野慶子／京田初美／黒沢照代
古賀節子／古庄弘枝／小網愛子／小島サカエ／小島豊子／後藤多見／後藤宏子／斎藤千代
斎藤淳／坂井みつこ／嶋田ゆかり／白石洋子／杉山真由美／村主敬子／鈴木洋子／
高橋俊子／谷内真理子／塚崎美和子／中村麻人／中山紀代子／長谷川知子／東由美子／
福井浅子／福田光子／保科朋子／三船照子／宮原美津子／宮前澄子／宗久知恵子／
山下智恵子／山本フミノ／若山玲子

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-354-3941 ●振替 東京3-39331

●発行人 くあこら 運営会議 ●定価1,500円

へあごらへはひろば。さくのないひろば。
共に生き共に考える女のひろば。
1972年以来、資料誌『あごら』を発行、
女の問題を考え続けています。

- 1 女が働くこと
- 2 女性の進出のために
- 3 主婦の解放をめぐる
- 4 何かしたい主婦のために
- 5 運動を進めよう
- 6 子殺しを考える
- 7 働く女と主婦の接点を求めて
- 8 女と法
- 9 女と教育
- 10 国際婦人年世界会議
- 11 国際婦人年国内集会
- 12 女の記録
- 13 職場の中の女性差別
- 14 女と結婚
- 15 女と生涯教育・生涯学習
- 16 いま女性解放は
- 17 女にとって子どもとは
- 18 女性解放と雇用平等法
- 19 子と母の関係を問う
- 20 男女平等と母性保障
- 21 女たちは いま変わる

